續國譯漢文大成

文學部　八十一

309
65
帙入
始

續國譯漢文大成

文學部第八十一册（第二十一帙の二）

高靑詩集三の一

吉田祥郎氏寄贈本

309
65

高青邱集 第三卷 目次

卷十

七言古詩

題美人對鏡圖……一
送曹生歸新安山中……三
晩出城東門聞鸛聲……七
詠苑中秦吉了……九
夏珪風雪歸莊圖……一一
始歸江上夜聞吳生歌因憶前歲別時……一五
題董元臥沙龍圖……一八
松隱居爲戴叔能賦……二〇
蕭山尹明府與越兩山亭……二三
贈賣墨陶叟……二六
虎邱行次朱賞靜見寄韻……二九
鳳臺二逸圖……三三
送張員外從軍粤上……三八
題陳節婦……四〇
晩步西郊見鴐鵝羣飛……四四
次韻楊孟載早春見寄……四六
詠雪禁體次徐幼文韻……五二
思夫山……五七

送陶生兼寄周記室……五九
倒掛……六〇
苦寒書江上主人壁間……六三
桀蕊爲余唐卿賦……六四
送張貢士祥會試京師……六七
明月舟……七五
聽南康陳協律彈楚歌……七八
京師苦寒……八一
約諸君游范園看杏花……八五
南州野人爲吳邑曾令賦……八八
欲訪李孝廉至婁江遇風而回……九二
寒夜泛湖至東舍……九四
京師午日有懷彥正幼文……九六
鴟捕魚……九七
泉南兩義士歌……九九
姚烈婦……一〇六
立秋前三日過周南飲……一〇八
送張倅之雲間……一一三
送王孝廉游京歸錢塘……一一四
賦錢散人江村二題……一一七
釣雪灘……一一七
望月臺……一一八
愛竹軒爲陳惟寅賦……一一九
幻住精舍尋梅……一二三
北郭秋夜喜徐幼文遠來兼送南游……一二六
次韻答朱冠軍游城西之作……一三〇
贈步鍊師禱雨……一三三
題朱澤民荊南舊業圖……一三六
月支王頭飲器歌……一三九
海石爲張記室賦……一四三

張中丞廟……一四四
靈巖琴臺……一四八
送劉將軍……一四九
和杜彥正徐幼文過甫里……一五〇
送董軍咨赴邊……一五三
夜坐有感……一五四
雪海爲楊孟載題……一五五
送王邑長彥强……一五九
范魏公手書伯夷頌爲其裔孫天章題……一六〇
送劉冠軍……一六四
奉橘圖……一六五

卷十一

長短句體

青邱子歌……一六九
登陽山絕頂……一七九
張節婦詞……一八四
與客飲西園花下……一八六
吳中逢王才隨朝京使赴燕南歸……一八七
白雲泉……一八九
戎王追飈圖……一九二
茅山陳道士臥雲所……一九四
贈醉樵……一九五
雷雨護嬰圖爲包山徐庭蘭賦……一九九

南園……二〇〇
滄浪亭……二〇五
石射堋……二〇八
走狗塘……二一〇
清泠閣爲陳協律題……二一二
烏夜村……二一四
醉贈宋卿……二一六
潘隱君月樓歌……二一八
約諸君看范園杏花不果後偶獨游……二二〇
番人移帳圖……二二二
夜聞謝太史誦李杜詩……二二三
贈金華隱者……二二六
春初來……二三〇
題黄大癡天池石壁圖……二三一
晝夢中……二四二
嬀蜼子歌……二四三
贈劉生歌……二五三
登金陵雨花臺望大江……二五七
春日客園無花偶感……二六一
白下送錢判官岳……二六三
聽錢文則琴呈良夫……二六四
雪齋爲逃上人賦……二六九
燕覆巢……二七二
五禽言和張水部……二七四
約王孝廉看梅……二七八
題滕用衡所藏山水圖……二八〇
雪海道人以張仙畫像見贈……二八七
釣臺歌送嚴陵徐尊生太史……二九一

卷十二

五言律詩

草堂夜集……二九五
過胡博士郊居……二九六
送茅侯……二九七
孤雁……二九八
晩步園池……三〇〇
次韻過建平縣……三〇一
鶴軒……三〇二
寄杜二進士……三〇四
雨篷……三〇五
聽秋軒爲僧賦……三〇六
杏花飛燕圖……三〇七
扇……三〇八
新荷……三一〇
鷺……三一一
馬……三一二
梧桐……三一三
圍棊……三一四
池上晩酌……三一五
簾……三一六
射柳……三一七
流螢……三一八
水殿圖……三一九

新蟬……三二一
林間避暑……三二二
送劉省郎出佐邊郡……三二三
湓浦琵琶圖……三二四
金人馬圖……三二六
夜訪芑蟾二釋子因宿西澗聽琴……三二七
錢塘送馬使君之吳中……三二八
與劉將軍杜文學晚登西城……三三〇
和周山人見寄寒夜客懷之作……三三一
哭臨川公……三三二
一窓秋影……三三三
早春侍皇太子游東苑池上呈青坊諸公……三三四
題谿山小隱……三三五
城西客舍送周著作砥……三三六
兵後出郭……三三八
謝賜衣……三三九
西清對雨……三四〇
夜宿太廟齋宮……三四一
送秦主客還侍儀使……三四三
春日退直呈禁署諸公……三四四
送張司勳赴寶慶同知……三四五
寓天界寺……三四六
送前進士夏尚之歸宜春……三四七
早出鍾山門未開立候久之……三四九
雪夜宿翰林院呈危宋二院長……三五〇
自天界寺移寓鍾山里……三五一
夜逢故郡賀多至使胡浦二博士同宿……三五三
至日夜坐客館……三五四
送鮑翰林還官陝右……三五五
送姚架閣……三五六

送曾主簿之平樂……三五七
桓簡公廟……三五八
送陳則……三六〇
暮春送陳郎中出守檇李……三六一
送楊從事從軍……三六二
送王員外遷崇敎……三六三
吳中送顧生歸海陵……三六四
閨中……三六五
送前國子王助敎歸臨川……三六六
送潘巡檢之閩中……三六七
送思上人……三六八
宴王將軍第……三七〇
送朱從事之吳興……三七一
和友人過采石……三七二
詠柳……三七四
無題……三七五
京師寓廨三首……三七六
送舒徵士考禮畢歸四明……三七九
陪客登陶丘……三八〇
王公子宅五月菊……三八一
送周復秀才賦行李中一物得紈扇……三八二
送流人……三八四
贈張省郎……三八五
送瀚公住靈巖……三八七
送宿衛將出守鄧州……三八八
甘露寺……三八九
送張羽後夜坐西齋……三九〇
徐山人別墅……三九一
客館秋懷……三九三
秋夜宿周記室草堂送王才……三九四

江上雨……三九五
送賈二進士歸省……三九六
贈衍師……三九七
送錢氏兩甥度嶺……三九八
送客歸閩省覲……三九九
圓明佛舍訪呂山人……四〇〇
答宗人廉夜飲王氏池亭見懷……四〇二
賦得蟬送別……四〇三
何隱君小墅……四〇四
贈張明府……四〇五
送唐博士肅移家橋李……四〇六
贈妓……四〇七
送顧倅之錢塘……四〇九
答高廉同飲後見寄……四一〇
沈徵士鈘野亭……四一一
題醫師王隱君墓表後……四一二
贈朱山人……四一三
谿上……四一四
次韻楊儀曹雨中……四一五
寄錢塘諸故人……四一六
送烏程馮明府……四一七
喜了上人見過……四一九
病目……四二〇
病目不飲……四二一
賦得蟹送人之官……四二二
江上早發……四二三
客舍喜姪庸至……四二四
哭周記室……四二六
過永定廢寺……四二七
楓橋送丁鳳……四二八

盜發漢侍中許樣墓……四二九
過海昌贈李侯……四三一
送易從事祖飲南潛……四三二
題張靜居畫……四三三
夜懷王校書……四三四
答陳則見寄……四三五
煮藥……四三六
夜投西寺……四三七
送石明府之崑山……四三八
過城西廢塢……四四〇
送范架閣赴嘉禾兼簡李使君……四四一
喜呂山人見過江館……四四二
贈鄰友……四四三
雨中就陳卿飲酒醉歸賦此寄慰……四四四
送醫士宋君之江上……四四五
屏居……四四六
立秋日……四四七
效唐人贈邊將……四四八
送董湖州……四五〇
晚次西陵館……四五一
送顧別駕之邊郡……四五三
送僧恬歸靈隱……四五四
江上寄王校書行……四五五
送越將罷鎮……四五六
送王積赴大都……四五七
送孫主簿之德清……四五九
留別李侯……四六〇
寄熹公……四六一
送王才歸錢塘……四六二
送長洲周丞陞吳縣令……四六三

多至夜喜逢徐七……四六四
送史丞之海門……四六五
夜雨宿東齋……四六七
師山周君客濠上畫舊隱圖求予賦詩……四六八
黴恙江館夜作……四六九
逢李止氷道人……四七〇
多至夜雨感懷……四七一
過戴居士宅……四七二
歸　鴉……四七三
晚坐南齋寫懷二首……四七四
臘月廿四日雨中夜坐二首……四七六
書曹谷才世訓詩後爲其子季常作……四七八
題山居圖爲僧賦……四七九
題華氏埜芝檜圖……四八〇
賦得銅人贈醫士……四八二
夏景園廬……四八三
寄題崇明學宮天水面軒……四八四
送柔上人得船字……四八六
中秋琵琶洲宴集得紅字……四八七
悼　女……四八八
亂後經婁江舊館……四八九
悼故顧宜人……四九〇
過劉山人園……四九一
次韻楊禮曹移疾之作……四九二
送周履道入郭……四九四
雨齋獨坐寫寄友……四九五
次韻酬西園公……四九六
聞鄰家琵琶有感……四九七
書王生扇……四九八
送胡鉉游會稽……四九九

送陳少府赴嘉定……五〇一
報恩寺逢蔣主簿就送還如皐……五〇二
贈姚東曹……五〇三

卷十三

五言律詩

送吳縣令遷松陵……五〇九
寄沈校達卿理……五一〇
贈呂醫……五一一
次韻陳留公見貽湖上行屯之作……五一二
雨後飲西園偶然亭……五一四
鄰家桃花……五一五
和王止仲校理夜坐……五一六
答陳校書客懷……五一七
鍾山雪霽圖……五〇五
周輿裔墓……五〇六
酬余左司……五一八
宿道王蘭若……五一九
與詩客七人會飲余司馬園亭……五二〇
登西澗小閣……五二二
江上答徐卿見贈……五二三
除夕客中與家兄守歲……五二四
南溪晚歸……五二五
丁孝廉惠冠巾……五二六

西園閒興二首……五二七
送謝恭……五二八
步至東皐……五二九
郊墅雜賦十六首……五三〇
采香徑……五四五
響屧廊……五四六
臨頓里十首……五四七
春申君廟……五六〇
吳女墳……五六一
眞娘墓……五六四
鱸鄉亭……五六五
堯峰院……五六六
慧聚寺次張祜韻……五六八
石　屋……五六九
贈竹里子……五七〇
送金判官之吳江……五七一
漁……五七三
樵……五七四
耕……五七六
牧……五七八
夜起觀月……五八〇
贈劉醫師……五八一
舟中早行……五八三
春日懷諸親舊……五八四
江上見逃民家……五八五
晚晴東皐步眺……五八六
賦得戟門送陳博士……五八七
櫻　桃……五八八
金進士葵軒……五九〇
次倪雲林韻……五九一

登南樓看雨有懷……五九二
晚霽獨酌南樓……五九三
追挽恭孝先生二首……五九四
題宋廸晚煙歸舍圖……五九七
贈東菴道者……五九八
樂圃三首……五九九
送人戍梁谿……六〇二

五言排律

月夜游太湖……六〇三
詠夏氷……六〇五
題黃鶴山人畫……六〇七
賦得履送衍上人……六〇九
聞　蛙……六一一
聖壽節早朝……六一三
洪武二年十月廿露降後庭柏樹……六一五
冬至車駕南郊……六一七
禁中雪……六一九
封建親王賜百官宴……六二〇
送安南使者杜舜卿還國應制幷序……六二三
送高麗賀正旦使張子溫還國……六二六
送鮑修撰出官關中……六二八
送恩公還江心寺……六三〇
喜楊滎陽赴召至京過宿寓館……六三二
戲嬰圖……六三四
甑花池……六三八
送高麗貢使還國……六三九
韓蘄王墓……六四一
石井泉……六四八
焚　香……六四九

詠夢……六五五
答胡博士留別二十韻……六六〇

卷十四

聯句

舞劍聯句……六六九
與會稽張憲夜飲觀銅臺李壯士舞劍而作
劍池聯句……六八一
與張憲金起王隅同賦
病柏聯句……六八四
與青城杜寅鄭郡徐賁游白蓮寺見病柏而作
風雨聯句……六九一
與會稽張憲在報恩佛寺遇風雨而作
虎邱聯句……六九六
送高郎中……六六四
送周檢校使高麗……六六六
與潯陽張羽太原王行鄭郡徐賁游虎阜
蓮房聯句……七〇〇
與金華宋璲張孟兼作

六言律詩

瓊姬墓……七〇五
甫里卽事四首……七〇六

七言律詩

大駕親祀方邱還射齋宮奉次御製韻……七一一
奉迎車駕享太廟還宮……七一三
晚登南岡望都邑宮闕二首……七一五
奉天殿進元史……七一八
九日陪諸閣老食賜糕次謝授經韻……七二〇
送沈左司從汪參政分省陝西……七二三
與僧日章講師東歸送別二首……七二四
清明呈館中諸公……七二七
金陵喜逢董卿併送還武昌……七二九
送易左司分省廣西……七三〇
送王檢校鑄赴北平……七三二
京師秋興次謝太史韻……七三三
送祠江瀆使者……七三五
送葉判官赴高唐時使安南還……七三七
衍師見訪鍾山里第……七三八
寄題安慶城樓……七四〇
送鄭都司赴大將軍行營……七四二
送朱謝二博士還吳……七四三
送丕上人還四明育王寺……七四五
送吳生赴汴省其父指揮……七四七
客舍夜坐……七四九
送鄭山人聽宣諭後歸東陽……七五〇
春來……七五二
送賈文學以郡薦赴禮部試畢歸吳……七五三
休沐日期衍公游北山不果獨臥齋中……七五五
送內兄周誼還江上……七五六
夜聞吳女誦經……七五八
送趙使君致仕歸別業……七五九
游南峰寺有支遁放鶴亭……七六一
送鄰僧淡雲歸笠澤……七六三

次韻楊孟載署令雨中臥疾……七六四
送呂志學秀才入道……七六六
送胡簿之陽朔……七六八
謁甫里祠……七七〇
送恩禪師弟子勤歸開元寺……七七一
送何記室游湖州……七七四
江上寄丁校理晁季……七七五
送顧軍咨歸梁溪……七七六
白蓮寺次韻杜進士喜予見過話舊之作……七七八
期徐七游雲巖……七八〇
賦得寒山寺送別……七八一
聞朱將軍戰歿……七八四
送何明府之秦郵……七八六
過野寺次韻徐廉使琰舊題……七八七
送滎陽公行邊……七八九
登涵空閣……七九〇
婁江寓舍喜王七隅見過却送還郭……七九三
送葉卿還隴西公幕兼簡周軍咨……七九五
范文正公祠……七九六
丁令威宅……七九八
辭戶曹後東還出都門有作……八〇〇
寄余左司……八〇二
聞家兄謫壽州……八〇四
吳城感舊……八〇六
喜幼文北歸……八〇八
送宋孝廉南康葬親……八〇九
送王孝廉游京回錢塘……八一〇
感懷次蔡參軍韻……八一二
寄錢塘方員外……八一三
秋日江館詠懷……八一五
得亡友周履道記室在繫所詩次韻……八一六
答呂志學山人見寄……八一七
送殷孝章赴咸陽教諭……八一九
送基上人希載赴天界……八二一
寄永事丁明府兼簡逄君先生……八二三
江山晚眺圖……八二四
江上春日遣懷……八二五
別江上故居……八二六
永樂禪寺……八二八

高靑邱集 卷十

文學博士 久保天隨 譯解

七言古詩

題美人對鏡圖　美人鏡に對する圖に題す

曉院(一)鹿盧(二)鳴露井(三)。　曉院の鹿盧、露井に鳴り、
玉人夢斷梨雲(四)冷。　玉人、夢斷えて、梨雲冷かなり。
起開妝閣(五)笑窺奩(六)。　起つて妝閣を開いて、笑うて奩を窺ふ、
月裏分明見娥影(七)。　月裏、分明、娥影を見る。
自對(八)猶憐況主家。　自ら對するも猶ほ憐む、況んや主家をや、
春風一面斷腸花(九)。　春風一面、斷腸の花。
何由鑄入靑銅(一〇)內。　何に由つて、鑄つて入る靑銅の內、

【字解】【一】曉院　院は一構の建物。【二】鹿盧　車井戸。【三】露井　上に屋根の掩ひが無くて剝き出しになつて居る井戶。【四】梨雲　梨の花の白く咲き滿ちて、さながら雲の如きを云ふ、王建の夢梨花と題せる詩に、落落漠漠路不ㇾ分、夢中喚作梨花雲とある。【五】妝閣　化粧部屋。【六】窺奩　奩は鏡の箱【七】娥影　娥は嫦娥、卽ち月中の女仙。

不使秋霜換蛾翠。(一一)

秋霜をして蛾翠に換へしめざらむ。

〜【八】自對猶憐況主家　主家は主婦。自分で、おのが妻に向つてさへ、なほいとほしと思ふ位であるから、主婦に於ては、猶更の事であるといふ意。妒記に「晉の桓溫、李勢の女を以て妾となす。南郡主、刀を拔き、婢を率ゐて、李の所に往いて、これを斫らむと欲す。李の頭を梳くを見る。髮、垂れて地に委し、姿貌絕麗、乃ち徐に地に下り、髮を結び、手を斂め、主に向つて曰く、國破れ、家亡び、心なくして、以て今日に至る、若し能く殺さるれば、猶ほ生の年のごとくならむ、と。神色閑正、辭旨悽惋。主、乃ち刀を擲ち、これを抱いて曰く、我見て猶ほ憐む、何ぞ況んや老奴なや」とあつて、その語を轉用したのであらう。【九】斷腸花　秋海棠の別名、瑯環記に「むかし、婦人あり、所歡を思うて見えず、輒ち涕泣し、恆に涙を北牆の下に灑ぐ、後、灑ぐ處に草を生ず、その花、甚だ媚、色、婦面の如し、その葉、正綠反紅、秋開く、名づけて斷腸花といひ、又八月春と名づく、卽ち今の秋海棠なり」とある。【一〇】靑銅　鏡の地金をいふ。【一一】蛾翠　翠色の蛾眉。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】曉早く、小院の邊なる露井では、水を汲む轆轤の音がして、院中の美人も、それに驚かされて夢が醒め、白く立ちこめたる梨花の雲は、冷かに見える。美人は、すでに起き出でし後、先づ化粧部屋の戶を開いて、その中に入り、そして、鏡の箱を取り出し、蓋を明けて、笑ひつつ、鏡に映る其姿を眺めると、たとへば、圓かなる月の中に嫦娥の影がありありと見える樣な工合。その顏色のあでやかに媚かしき、自分で見てさへ、いとほしと思ふ位であるから、主婦に於ては、猶更の事で、妬みも何も忘れて仕舞ふであらう。たとへば、春風の吹き度る中に、一面には、愁を含みて、秋海棠の露を帶びて懶げなる其風情が、いかにも人の心を惱殺するのである。そこで、成るべくは、その姿を靑銅の此鏡の中に鑄り込んで、長しへに變せず、秋の霜をして、蛾眉の翠色を換へしめることの無い樣にしたいものである。

【餘論】前半四句は、美人の動作を寫し、後半四句は、その姿貌の艷にして風情に富めるを刻劃し、相俟つて、題意を全うしたのである。殊に、兩解、ともに後の二句が極めて面白い爲に、餘韻の盡きざるを覺えしめる。

送曹生歸新安山中

曹生の新安山中に歸るを送る

(一)黃山西來九華(二)連。　黃山、西より來つて九華に連る、

(三)巖洞翁忽通雲煙。　巖洞、翕忽として雲煙を通ず。

(四)白鷺嶺下煉丹處。　白鷺嶺下、丹を煉るの處、

(五)瑤草獨秀今千年。　瑤草獨秀、今、千年。

(六)三十二峰在靑天。　三十二峰、靑天に在り、

仰面歷數擧馬鞭。　面を仰いで、歷數、馬鞭を擧ぐ。

高林雜樹多未識。　高林雜樹、多くは未だ識らず、

【字解】【一】黃山　徽州府志に「府城の西北一百二十里に在り、峰三十二、水源三十六、溪二十八、洞十八、巖八あり。第四峰に泉あり、湧いて湯の如く、常に丹砂を湧かしむ、これに浴すれば、能く風疾を愈やす。世傳ふ、黃帝、かつて、容成子・浮邱公と丹を此に合す」とある。【二】九華　山の名、一統志に「九華山は、池州靑陽縣に在り、舊と九

風雨一過倶蔥芊。(七)　風雨一過、倶に蔥芊。
山深何物尤可憐。　山深く、何物か尤も憐むべき、
秋禽幽鳴巧如絃。　秋禽幽鳴、巧、絃の如し。
路廻澗阻似無地。　路は廻り、澗は阻つて、地なきに似たり、
中有蒔藥千家田。　中に藥を蒔く千家の田あり。
雲間雞犬隔流水。　雲間の雞犬、流水を隔て、
居人彷彿皆神仙。　居人、彷彿として皆神仙。
我欲窮游久無緣。　われ窮游せむと欲して、久しく緣なし、
羨君忽去尋歸船。　羨む、君が忽ち去つて歸船を尋ぬるを。
猿聲兩岸谿幾曲。　猿聲兩岸、谿幾曲、
白沙明月相洄沿。(八)　白沙明月、相洄沿。
到時西峰草堂前。　到る時、西峰草堂の前、
應有攜酒來華顚。(九)　應に酒を攜へて華顚を來すあるべし。

子山と名づく、唐の李白、その名の雅なきを陋とし、山の九峰蓮華の如きを以て、乃ち名を九華と更ふ」とあり、なほ李白の詩に、「妙有分二氣一、靈山開二九華一」とある。
【三】 翕忽　文選吳都賦に「神化翕忽」とあつて、その注に「翕忽は疾き貌」とある。
【四】 白鷺嶺　黃山志に「白鷺嶺は、唐の溫伯雪、ここに隱る、李青蓮、詩あり、これに贈る」とある。
【五】 瑤草　珍らしき草。
【六】 三十二峰　李白の詩に黃山四千仞、三十二蓮峰とある。
【七】 蔥芊　二字、ともに茂る。
【八】 洄沿　岸に沿うて流を泝る。
【九】 華顚　白髮頭の老人、東坡の詩に、「尊前多二書錄一、迴弄戒華顚」とある。

山人不喜說朝市。(一〇)　山人は、朝市を說くを喜ばず、
但話久別情依然。　但だ久別を話して、情、依然。
塵埃舊褐便可脫。(一一)　塵埃舊褐、便ち脫すべし、
濯費十斛山中泉。　濯ふに費す、十斛山中の泉。
爲予淨掃石上葉。　予の爲に淨く掃へ石上の葉、
早晚有意來高眠。　早晚、來つて高眠するに意あり。

【10】 朝市　朝廷と市場、名利の場。
【11】 舊褐　褐は短衣。

【題義】 說明に及ばぬ。曹生は、名字閱歷、ともに不詳。新安は、一統志に「徽州府、晉には新安といふ」とあつて、山中は卽ち黃山を指したのである。

【詩意】 黃山は、音に聞こえた名山、山勢西より來つて徽州府城の西北に聳え、その餘脈は、遠く九華山に連つて居る。兩山、ともに巖洞多く、雲煙が翕忽として相通じて居る。黃山の中なる白鷺嶺は、むかし、唐の溫伯雪が其下に隱れて丹を煉つたことがあるので、まことに、物外の仙境と稱すべく、千年後の今日、瑤草が獨り其地にのみ叢生して居る。黃山には、三十二峰があつて、高く青天の上に聳え、面を仰いで、一一これを數へむとすれば、馬鞭を擧げて、指點せねばならぬ。山谷の間なる高林の雜樹は、まだ見知らぬものが多く、風雨が一たび過ぐれば、こんもりとして、綠の色が一し

ほ鮮かに見える。深山の中で、何が第一にしをらしく愛すべきものかといへば、秋の小鳥が即ちそで、その靜に鳴き囀るを聞けば、自然の音律をなして、さながら、絃を彈ずるが如くである。行き行きて其山に分け入ると、路は屈曲し、澗谷は之を遮り、殆んど平地も無い樣に思はれるが、一境豁開して畑があり、そこには、多くの住民が藥草を培養して居る。眺めやれば、雞犬は、雲間に鳴き、そこには、村らしいものがあるが、遠く流水を隔てて、丸で桃源の樣な處。その居民は、彷彿として、皆神仙の樣に見える。われは、是非一度、ここを尋ねたいと思つて居るが、久しい間、緣なくて、未だ其志を遂せず、聞けば、君は、歸船を用意し、忽ち此地を去つて、其山中に向はれるさうで、まことに、羨ましい。おもへば、兩岸に猿の聲が聞こえ、谿水は幾たびとなく曲りくねり、明月高く天に冲して、白沙を照らす夜、その岸に沿うて流を泝つて行くことであらう。やがて、愈よ到著すると、西峰なる草堂の前には、村人が寄り集まつて歡迎し、中には、酒を攜へて來る白髮頭の老人も居ることであらう。元來、山中の人は、名利の巷と稱すべき朝市の事を說くを喜ばず、唯だ久しい間、別れて居た相思の情を話して、むかしながらの情誼は、極めて厚く、まことに、嬉しく感ずることであらう。ここに至れば、浮世の塵に染みたる古い褐衣などは、脫ぎ棄てて仕舞ふが善いので、これを洗濯するには、山中十斛の泉を費さねばならぬ。願はくは、君よ、予の爲に、石上の落葉を奇麗に掃除して置いて與れ、予も、亦た早晩、この山中に入つて、高眠したいと思つて居る。

【餘論】起首より居人彷彿皆神仙に至る十四句は、黃山の風景を敍し、我欲㆓窮游㆒の二句を以て、一轉して本題に入り、猿聲兩岸谿幾曲の八句は、曹生歸鄉の日の實況を想像し、結二句は、おのれも亦た他日、その地に棲隱したいといふ意を述べて、更に一步を拓開したのである。全篇を通じて、聊か平淺に失せむとする嫌もあるが、路廻澗阻似㆑無㆑地の四句は、流石に、淸新警絕を推すべきである。

曉出㆓城東門㆒聞㆓艣聲㆒

曉に城東の門を出でて艣聲を聞く

城門朝開路臨㆑水。　城門、朝に開いて、路、水に臨み、
人語煙中近㆓魚市㆒。(一)　人語、煙中、魚市に近し。
誰搖㆓飛艣㆒入㆓蒼茫㆒。(二)　誰か飛艣を搖かして、蒼茫に入る、
帶㆑夢驚鳧柳邊起。　夢を帶ぶるの驚鳧、柳邊に起つ。
過處寒波動拍㆑沙。　過ぐる處、寒波動いて沙を拍ち、
遠聞嘔軋復咿啞。(三)(四)　遠く聞く、嘔軋、復た咿啞。
征夫車轉山頭阪。(五)　征夫の車は轉す、山頭の阪、

【字解】【一】魚市　魚市場。
【二】飛艣　急いで漕ぐ艣。
【三】嘔軋　艣の聲、薛逢の詩に嘔軋中流渡とある。
【四】咿啞　又艣の聲、韓偓の詩に槳咿啞過㆓花塢㆒とある。
【五】征夫車　王荊の詩に煙深車聲澀とある。

（六）工女機鳴竹外家。　工女の機は鳴る、竹外の家。
我身本是江湖客。　わが身、本と是れ江湖の客、
偶堕黃塵曉行役。　偶ま黃塵に墮ちて曉に行役。
此聲空憶舊曾聽。　この聲、空しく憶ふ、舊と曾て聽く、
舟中酒醒東方白。　舟中、酒醒めて東方白きを。

【六】工女機　陸游の詩に織室踏機鳴軋軋とある。

【題義】說明に及ばぬ。城東門は、蓋し蘇州の東門であらう。

【詩意】蘇州城の東門は、朝に開き、一條の路は、水に臨んで通じて居る。まだ晴れやらぬ煙の中に、人の聲がして、魚市場に近い。その時、誰とも知らぬが、急いで艣を押して、蒼茫の間に漕ぎ入つたが、その聲に驚いて、鷗は夢を帶びたまま、柳邊より飛び上つた。その舟の過ぐる處、寒波湧き出で、それが岸に打ち寄せて、沙を淘つて居るが、やがて、嘔軋咿啞たる其聲は、次第に遠く聞こえ、たとへば、旅客の車が山頭の阪に登つて響くが如く、工女の機が竹外の小家に鳴るやうである。われは、元と江湖の客、處定めず流浪して居るものであるが、料らずも、浮世の黃塵の中に落ちた故に、曉早く、公事の爲に、出かけねばならぬ。おもへば、むかし、舟中に橫臥し、夜來の酒醒めて、東方初めて白みかかりし時、この聲を聞いたこともあつたが、まことに、低徊して銷魂するばかりである。

【餘論】靑邱が蘇州に居た時は、純然たる無官の布衣であつたので、勿論、どこにも行役したことは無い。然るに、ここに偶墮黃塵曉行役とある處を見ると、南京に召し出された時であらう。この詩は、先づ穩當には出來て居るが、中間の一解が、たるみ勝ちで、殊に艣聲を以て車聲機聲に聞きまがふといつた處で、前後の關係が薄弱である樣に思はれる。

詠苑中秦吉了　苑中の秦吉了を詠ず

不獨能言異凡鳥。　ひとり能言の凡鳥に異なるのみならず、
最愛佳名呼吉了。　最も愛す、佳名、吉了と呼ぶを。
（三）雕籠幾度學雞鳴。　雕籠、幾たびか雞鳴を學び、
驚起煙花六宮曉。　驚起す、煙花六宮の曉。
（六）駕來別院未知迎。　駕、別院に來つて、未だ迎ふるを知らず、
先聽遙呼萬歲聲。　先づ聽く、遙に萬歲を呼ぶの聲。
（九）願把春風一杯酒。　願はくは、春風一杯の酒を把り、
從今莫聽上林鶯。　今より上林の鶯を聽くなからむ。

【字解】【一】能言　能く人語を爲す。【二】吉了　秦吉了の略。【三】雕籠　見事に雕飾したる鳥籠。【四】煙花　煙とまがふ花。【五】六宮　宮中の奥向、周禮の內宰に「陰禮を以て六宮に敎ふるなり」とあつて、その鄭注に「皇后正寢一、燕寢五、これを六宮と爲す、夫人以下分居す」とあり、なほ白居易の長恨歌にも六宮粉黛無顏色とある。【六】駕來　駕は車駕、即ち天子の御車。【七】別院　六宮以外、別に造られたる一構。

【八】萬歲 天子を頌賀する辭。【九】願把春風一杯酒 高陽外傳に「載願、春日、雙柑斗酒を攜へ、往いて黃鶯の聲を聽く」とある。【一〇】上林鶯 上林は禁苑、子立の詩に風光多屬上林鶯とある。

【題義】苑中の苑は御苑、この詩は、御苑に飼養してある秦吉了を詠じたのである。秦吉了は、唐會要に「林邑國に結遼鳥あり、能く言ふこと、鸚鵡に勝れり。黑色にして兩眉、獨り黃なり、一に云ふ、形、鸚鵡に似て色白し、頂微黃、頂毛に縷あり、人の髮を分つが如し、耳聰、心慧、舌巧、人言通せざるなし、又これを了哥といふ、杜綰州に出づ」とある。白居易の新樂府に、「秦吉了、出二南中一、彩毛青黑花頸紅、耳聰心慧舌端巧、鳥語人言無レ不レ通」とあるを見れば、黑色といふ方が正しい樣であるが、時に白色の者もあるといふことで、本草綱目に「秦吉了は、大さ鸜鵒の如く、紺黑色、腦を夾んで黃肉冠あり、人の耳の如し、丹味黃距、人舌人目、目下連頸に深黃文あり、頂尾に分縷あり、能く人言に效ひ、音頗る雄重、熟雞子を用ひ、飯に和して之を飼ふ、亦た白色の者あり」と記してある。なほ和漢三才圖會に「按ずるに、了哥は中華より來る、長崎の士人、これを九官と稱し、又佐留加と稱す」とある。

【詩意】この鳥は、唯だ人言を眞似ることが、凡鳥に異なつて居るばかりでなく、秦吉了といふ佳名を負はせられたのが、頗る氣に入つた。この鳥は、見事なる鳥籠の中に飼はれ、雞の鳴聲を眞似て、煙とまがふばかりに花咲き匂へる六宮の曉に驚起して、聲高に啼き叫んで居る。かくて、天子の御車が別院を音づれ給ふとき、これを迎ふることを知らざれども、遙に萬歲を呼んで、君を壽ぐ聲が、第一に聞こえる。古しへの人は、斗酒を攜へて、鶯の聲を聽いたといふが、君王が此鳥の聲を聞かれた時、春風の中に、一杯の酒を薦めたいと思ふので、今後、上林の鶯は聞かずもがなと思はれる。

【餘論】起首二句は、唯だ秦吉了を詠じたのであるが、以下六句は、苑中の二字に重きを置き、形容刻劃を極めたもので、無論、作者が在京中の作である。

夏珪風雪歸莊圖

夏珪、風雪歸莊の圖

江雲黏(一)波晩模糊。 江雲、波に黏して晩に模糊たり、
青山忽失如二亡逋(二)一。 青山、忽ち失うて、亡逋の如し。
乾坤瑩淨氷(三)作レ壺。 乾坤瑩淨、氷を壺となし、
(四)春意散入千林枯。 春意、散じて入る千林の枯れたるに。
野橋古渡行人無。 野橋古渡、行人なし、
清響瑟索(五)鳴二殘蘆一。 清響瑟索、殘蘆を鳴らす。
江天萬里一老夫。 江天萬里、一老夫、

【字解】【一】黏波 黏は粘著、ねばりつく。【二】亡逋 逃亡の人。【三】氷作壺 姚崇の氷壺賦序に「氷壺は清潔の至なり、君子、之に對す、清を忘れざるを示すなり」とある。【四】春意 春の氣分。【五】瑟索 ざわざわする。【六】短蓑如蝟舟如鳧 杜甫の前苦寒行に漢時長安雪一丈、牛馬毛寒縮如レ蝟とあり、劉子に「海濱の居者、島を望む舟の如く、舟

（六）短蓑如蝟舟如鳧。短蓑は蝟の如く、舟は鳧の如し。

魚寒入泥（七）不上罛。魚は寒く、泥に入つて、罛に上らず、

歸來遠識漁村孤。歸り來つて遠く識る、漁村の孤なるを。

柴門夜叩聞犬呼。柴門、夜、叩いて、犬の呼ぶを聞き、

徑竹（八）壓折誰相扶。徑竹壓折、誰か相扶けむ。

（九）山妻自炊（一〇）稚子沽。山妻、自ら炊いで、稚子は沽ふ、

不羨（一一）炙肉圍紅爐。羨まず、肉を炙つて紅爐を圍むを。

嗟予客游（一二）歲屢徂。嗟す、予が客游歲屢ば徂き、

（一三）詩囊隨驢走髯奴。詩囊、驢に隨つて髯奴を走らすを。

（一四）長安何處覓（一五）酒徒。長安何の處か、酒徒を覓めむ、

飛花撲頭（一六）帽不烏。飛花、頭を撲つて、帽、烏ならず。

旅舍無夢還（一七）江湖。旅舍、夢の江湖に還るなく、

慙對風雪歸莊圖。慙づらくは對す、風雪歸莊の圖。

を望む魚の如し」とある。【七】不上罛　罛は魚罟、即ち網。【八】壓折　おされて折れる。【九】山妻　おのが妻の謙稱、杜甫の詩に「理レ生那免レ俗、方法報ニ山妻一」とある。【一〇】稚子沽　沽は買ふ、ここでは酒を買ふ。【一一】炙肉圍紅爐　卷四、映雪圖の條にも引いて置いたが、事文類聚に「陶穀、党家の姬を得たり、冬日、雪水を取つて茶を煮、姬に謂つて曰く、党家、この風味を識るや否や。姬曰く、彼の粗人、安んぞ此を得む、但だ能く銷金帳底、淺斟低唱、羊羔の美酒を飲むのみ」とある。【一二】歲屢徂　屢ば歲暮に値ふ、數年を經過せしこと。【一三】詩囊隨驢走髯奴　唐書李賀傳に「旦日ごとに、出でて弱馬に騎し、小奚奴を從へ、古錦囊を背にし、得るところに遇へば、書して囊中に

投じ、暮に歸るに及びて、足して之を成す」とあり、陳師道の詩に「願求ニ佳句一過ニ髯奴一」とある。【一四】長安　帝都の義に用ふ、ここでは南京を指す。【一五】酒徒　酒飲み仲間。【一六】帽不烏　被つて居るものは烏帽でない。烏帽は、普通、儀式めいた時に用ふるのである。【一七】江湖　廟堂と對して云ふ。

【題義】圖繪寶鑑に「夏珪、字は禹玉、錢塘の人、寧宗の朝、待詔たり、金帶を賜はる。善く人物を畫き、雪景は全く范寬を學ぶ。院人中、山水を畫く、李唐より以下、その右に出づるものなし」とある。風雪歸莊の莊は、田舍の亭舍。卽ち風雪の日に田舍の我が家に歸るといふので、雪景は、夏珪の得意とするところである。

【詩意】江上の晦雲は、波に粘著して、日暮には模糊して居るし、靑山は、忽ち見えなくなつて、逃亡した人の樣である。やがて雪が頻りに降つた爲に、乾坤は瑩然淨徹、さながら、氷壺の如くなり、春の氣分は散じて、冬がれの千林に入り、枯木は、看る間に花を綴つた。野橋古渡には、行人の過ぐるものなく、雪片は、殘れる蘆を打つて、ざわざわと淸響を發して居る。この時、萬里の江天に一人の老漁夫があつて、短蓑は風に吹かれて、蝟毛の逆立つが如く、舟は小にして鳧の如く、折角、獵に出たものの、魚は寒氣を恐れ、いづれも泥に潛ぐり込んで、網に上らぬ處から、愈よ思ひ諦めて、家に歸らむとし、流石に、平生慣れたこととて、この吹雪の間にも、おのが住む漁村の孤なるを遠くから識別して、あやまたず遣つて來た。やがて、たどり著いて、夜、柴の戶ぼそをほとほとと叩くと、

第一に犬が嬉しげに吠えて返辭をする。門内の小徑には、竹が雪の爲に壓し折られて居て、誰も扶け起しもしない。それから、家に這入ると、妻は爲に飯を炊き、稚子は酒を沽つて來て、それで、やつと溫まり、富貴の家に於て、肉を炙りつつ、紅爐を圍むといふ贅澤沙汰を羨ましいとも思はぬ。顧みれば、予は客游して數年を經、平生、驢に跨つて外出し、詩嚢を髯の長い老僕に負はせて、後から走つて隨はせて居るが、この廣き帝都の中に於てだに、酒飲仲間とてはなく、落花片片として頭を撲つも、戴くものは烏帽に非ずして、形ばかりの頭巾、相變らず、心の儘に放浪して居る。されば、旅寢の宿に於て、江湖に歸る夢だに見ず、依然、微官に羈束せられ、ここに、風雪歸莊の圖に對し、畫中の漁夫にも若かざるを慙づるばかりである。

【餘論】起首、江雲黏レ波晩模糊以下十四句は、取りも直さず、圖中に見るところを詠出したのであるが、靜的にせずして動的、空間的にせずして時間的にしたのは、畫との重複を避けむが爲にしたので、流石に、詩畫の別を認知したものらしい。以下六句は、圖を見た時の感慨で、專ら之を自己の身上に繫けた爲に、痛切緊健、愈よ加はるを覺えた。なほ雪景を敍しつつ、雪といふ字を一つも用ひぬ處は、特に細心の工夫を凝らしたものである。

始歸二江上一夜聞二吳生歌一因憶二前歲別時一

始めて江上に歸り、夜、吳生の歌を聞き、因つて、前歲の別時を憶ふ

前年月夜聞二君唱一　前年、月夜、君の唱ふるを聞く、
秋滿二蘆花一此江上　秋は蘆花に滿つ、この江上。
一聲離(一)思水茫然　一聲の離思、水茫然、
雲逐二孤帆一共搖颺　雲は孤帆を逐うて共に搖颺。
驚(二)魚噴レ浪棲鶻飛　驚魚、浪を噴いて、棲鶻飛び、
木葉散落風吹レ衣　木葉散落して、風、衣を吹く。
蓮(三)歌盡歇松陵(四)浦　蓮歌、盡く歇む松陵の浦、
漁笛還沈笠澤(五)磯　漁笛、還た沈む笠澤の磯。
停レ杯數到臨終(六)拍　杯を停め、數へて到る臨終の拍、
露下無レ聲斜漢(七)白　露下つて聲なく、斜漢白し。
滿船相送盡悽然　滿船相送つて盡く悽然、

【字解】(一) 離思　別離の愁。
(二) 驚魚噴浪棲鶻飛　卷五、松江亭の詩注に引いた博異志の文に君山老父の笛の音の悲壯なるを形容して「湖上風動き、波濤沆瀁、魚鼈跳噴」とあるのを暗用したものと思はれる。
(三) 蓮歌　采蓮の曲。
(四) 松陵浦　姑蘇志に「松陵驛は、舊と吳江縣前に在り」と見ゆ。
(五) 笠澤磯　笠澤は太湖の別名、磯は斷岸。
(六) 臨終拍　拍は調子、愈よ終りに成りかかつた調子、蔡琰の胡笳十八拍に十八拍兮曲雖レ終、響有レ餘兮思未レ窮とある。
(七) 斜漢　西に斜になつた銀河。

況我當爲遠行客。　況んや、我當に遠行の客と爲るべきをや。
解紱今年別紫宸。　紱を解いて、今年、紫宸に別れ、
歸舟江上又逢君。　歸舟江上、又君に逢ふ。
一尊重聽當年曲。　一尊重ねて聽く當年の曲、
相對渾疑夢裏聞。　相對して、渾て疑ふ夢裏に聞くかと。
東方欲曙餘聲絕。　東方曙ならむと欲して、餘聲絕え、
悲喜盈襟竟誰說。　悲喜、襟に盈ちて竟に誰か說かむ。
願長把酒聽君歌。　願はくは、長く酒を把つて君の歌を聽き、
從此天涯少離別。　これより、天涯、離別少からむ。

【八】解紱　紱は綬、印綬を解きすてる。
【九】紫宸　帝居の正殿。

【題義】この詩は、作者が官を辭して、南京より歸鄉し、はじめて江上の宅に到著した夜、吳生の歌を聞き、前年離別の時の事を憶ひ出して作つたのである。吳生は、いづれ、名高き歌者と見えるが、その名字等は、一切分からぬ。

【詩意】去年、月夜に君が歌を唱へる聲を聞いたが、頃しも秋、蘆の花は、この江邊に、白く咲き滿ちて居た。その歌は、一聲ごとに、別離の愁を帶びて極めて物悲しく、江水は渺茫として、はてもなく、一片の雲は孤帆を逐うて、共にゆらゆらと搖いて居た。歌の聲の哀れ極まるにつけて、驚く魚は浪を噴き、塒に宿る鵲も堪へられずして飛び立つばかり、やがて、木の葉は散り落ち、風は颯颯として、衣を吹いた。松陵の浦上に於ては、采蓮の歌も、いつしか止み、笠澤の磯頭に於ては、漁夫の笛も、沈み勝ちとなり、つまり、吳生の歌の絕妙なのに壓倒されて仕舞つたのである。それから、杯を停めて、愈よ終に近き調子に數へ到りし時、銀河は西に斜にして、白くほの見え、露は聲なくして降り注いだ。滿船の人は、われを送る爲に來て居たので、これを聞いて、悽然たらざるはなく、まして、われは、送られる當人、遠行の客となるべきものであるから、猶更の事であつた。それから、今年は、印綬を解いて、紫宸に拜辭し、歸舟、はじめて江上に著した時、よくよく、つきぬ緣があつたものと見えて、又ぞろ君に逢ひ、一尊を傾けつつ、重ねて前年の歌曲を聽いたが、君に對して、すべて夢ではないかと思ふばかり。やがて、東方曙ならむとして、白みわたり、歌の餘韻が全く絕えると、悲喜の思、更る生じて胸襟の間に滿ち、そして、容易に說き出づることも出來ない。ただ願はくは、長しへに、酒を把つて君の歌を聞き、今後、天涯相隔るといふ樣な別離の無い樣にしたいものである。

【餘論】前段十二句は、前年の追憶に係り、起筆、すでに超妙、停杯數到臨終拍の四句も極めて面白

い。解紋以下の八句、即ち眼前の興會を述べたのであるが、稍や振はぬ處から、どうも均衡を缺いて居る樣な氣がする。要するに、この詩の妙は、俯仰低徊、往を思ひ舊を感ずる一邊に在るので、作者の根觸も、亦た實際であつたに相違ないと思はれる。

題董元臥沙龍圖

董元、臥沙龍の圖に題す

人間滴罷天瓢水。　人間、滴れ罷む天瓢の水、
歸護玄珠臥沙裏。　歸つて玄珠を護して沙裏に臥す。
空潭白日不聞雷。　空潭の白日、雷を聞かず、
雲霧俄隨轉身起。　雲霧、俄に隨ひ、身を轉じて起つ。
誰言北苑筆意精。　誰か言ふ、北苑、筆意精しと、
頭角破屋將飛騰。　頭角屋を破つて、將に飛騰せむとす。
細看圖畫何須恐。　細に看れば、圖畫何ぞ恐るるを須ひむ、
曾謁眞龍游太淸。　かつて、眞龍に謁して太淸に游ぶ。

【字解】【一】天瓢水　續玄怪錄に「李靖、山中に射獵し、一朱門の家に宿す。夜半、門を叩くこと急、一婦人、靖に謂つて曰く、これ龍宮なり、天符、命じて雨を行らしむ、二子皆在らず、頃刻を煩はし奉ること如何と。遂に靑頭に勅し、靑驄馬を牽して來り、又命じて雨器を取らしむ、乃ち一小瓶子、鞍前に繫ぐ。戒めて曰く、郞、馬に乘ぜよ、銜轡を漏らすなく、その行くに信せよ、馬、地を跑みて嘶鳴すれば、即ち瓶中の水一滴を取り、馬鬣の上に滴らせよ、愼んで多くすること勿れ」とあり、東坡の詩に馬上傾倒天瓢翻とある。【二】玄珠　莊子に「黃帝、赤水に游び、崑崙に登り、南に還つて、その玄珠を遺る」とある。【三】北苑　董源の號、畫史會要に「海嶽云ふ、平淡天眞多し、唐に此品なし、畢宏の上に在り、近世神品格高きも、ともに比するなきなり」とある。【四】頭角破屋　名畫記に「金陵安樂寺、僧繇、四龍を畫き、眼睛を點ぜず。毎に云ふ、これを點ずれば、即ち飛び去らむと。人以て妄誕と爲し、因つて、固く請うて之を點ず。須臾にして、雷電、壁を破り、二龍、雲に乘じ、騰つて天に上る、未だ睛を點ぜざるもの、見に在り」とある。【五】眞龍　天子を云ふ、明の太祖。【六】太淸　三淸の一、天を云ふ、ここでは宮城を指す。

【題義】董元の元は、一に源に作る。圖繪寶鑑に　鍾陵の人、字は叔達、又字は北苑、李煜に事へて後苑副使となる。善く秋風遠景を畫き、多く奇峭の筆を以て、江南の諸山を寫す。水墨は王維に類し、著色は李思訓の如し。荊關の後、源を最も著はると爲す。釋巨然と竝に稱せられて、董巨と謂ふ」とある。この詩は、董源の畫いた沙上に臥して居る龍の圖に題したのである。

【詩意】天瓢の水を傾けると、それが雨となつて、人間に降り注ぐのであるが、今しも、その天瓢の水を滴れ盡し。雨も、やつと收まつた。龍は、雨を降らす手傳をして居たが、その住處に歸つて來て、貴い玄珠を守護しつつ、沙の中に橫臥して居る。これまで居た深潭には、別に住む者もなく、從つて、白日に雷を聞くといふ神變不思議な事も絕えはてて仕舞つたが、雲霧俄に隨へば、スワ何事か起つたぞといふので、龍は忽ち身を轉じて、はね起きるであらう。畫中に見る龍の姿態は、丁度、こんなもので、流石に、北苑の手に成つただけに、筆意ともに精妙を極めたといはれて居るが、それどころか、

むかし僧繇の畫いたのと同じく、打見たる處、生氣凛凛、頭角は屋根を衝き破つて、天上に飛騰せむばかりの勢がある。しかし、いくら精細に看ても、もと圖畫に過ぎざるが故に、格別恐れるには及ばないので、われは、かつて、眞龍と稱すべき聖天子に拜謁し、太淸に比すべき宮城に朝參したことさへあつたので、それに較べれば、もとより、物の數でもない。

【餘論】前半は畫、後半は畫に對する感想、その布置は、毎毎見るところで、格別目新らしくもない。唯だ結末に眞龍を擔ぎ出して、おのが身分を明かにしたのは、極めて、儁妙なる落想である。

松隱居爲戴叔能賦
松隱居、戴叔能の爲に賦す

江(一)邊柳樹溪(二)邊花。　江邊の柳樹、溪邊の花、
晉處(三)士宅秦(四)人家。　晉の處士の宅、秦人の家。
秋風忽來春雨過。　秋風忽ち來り、春雨過ぎ、
坐看衰落倶堪嗟。　坐に衰落を看て、倶に嗟するに堪へたり。
山中相依歲年久。　山中相依つて、歲年久し、
羨君獨結蒼髥叟(五)。　羨む、君が獨り結ぶ蒼髥叟。
短褐長鑱(六)不解耕。　短褐長鑱、耕すを解せず、
茯(七)苓作食花爲(八)酒。　茯苓を食と作し、花を酒と爲す。
我今身似浮雲閑。　われ、今、身、浮雲に似て閑なり、
正合著在長林間。　正に合に長林の間に著在すべし。
明朝倘許同棲泊(九)。　明朝、もし同じく棲泊するを許さば、
便擬飛隨白鶴還。　便ち擬す、飛んで白鶴に隨つて還るを。

【字解】【一】江邊　江は潯陽江。【二】溪邊　溪は武陵溪。【三】處士宅　晉書に「陶潛、門に五柳を植ゑ、五柳先生傳を作り、以て自ら況す」とある。【四】秦人家　桃源の住民を指す、前に卷四、贈惠山證僧の詩中に詳述して置いた。【五】蒼髥叟　松の異名、前に卷六、月林清影の詩中に詳述して置いた。【六】長鑱　長鑱は廣韻に「吳人云ふ、犂鐵」とあつて、杜甫の詩にも、「長鑱長鑱白木柄、我生託子以爲命」とある。長い鋤。【七】茯苓　前にも見ゆ、松根に生ずる菌の一種で、補内の藥料に成る。【八】花爲酒　松の花を交ぜて酒を釀造する、岑參の詩に、「五粒松花酒」とある。【九】同棲泊　一處に棲息する。

【題義】松隱居は、戴叔能の隱宅の名。叔能の事は、列朝詩傳に「戴良、字は叔能、浦江の人、少にして文を柳待制貫。黃侍講溍に學び、詩を余忠宣闕に學び、皆その師承を得たり。至正辛丑、薦を以て淮南江北等處儒學提擧を授けらる。しかも、浙東、すでに職方に入る、乃ち姓名を變じて、四明山海の間に隱る。洪武十五年、召されて京師に至り、これを官せむと欲す、老病を以て固辭す。世、金華の九靈山下に居る。九靈山人集あり」と見ゆ。この詩は、元末、叔能が姓名を變じて四明に隱居して居た時、作者が其依賴に因り、賦して、その居に題したのである。

【詩意】江邊の五柳は、以て晉の處士陶潛の宅たるを知るべく、溪上の桃花は、以て始皇の暴虐を避けた秦民の家たるを察することが出來る。しかし、柳樹は秋風に遇ひ、桃花は春雨を經ると、いづれ

も衰落して、見る影も無い樣になり、ともに、人をして思はず嗟歎せしめる。然るに、君は、獨り蒼髯叟の綽名ある松に對して清緣を訂し、相依つて、ともに山中に住み、すでに、多くの歳月を經過したのは、まことに羨むべきことである。君は、短褐を著け、長鑱を手にし、野田に耕すことは知らないが、松根の茯苓を掘り取つて食餌となし、又松の花を交せて酒を醸し、全く仙人の樣な生活をして居る。今や、わが身も、浮雲と同じく、極めて清閒であつて、長林の間に住むべき筈である。もし、明日にも、君が一處に棲息することを許されたならば、空中を飛行し、白鶴に随つて、直に君の處に往きたいと思つて居る。

【餘論】　江邊の柳、溪邊の花を以て陪襯となし、徐に本題に引き入れた處は、稍や面白い。戴叔能に贈る本旨は、中間四句に盡きて居るので、結一解は、同じく棲泊したいといふ自己の希望を述べたのである。

蕭山尹明府吳越兩山亭

蕭山尹明府の吳越兩山亭

憶昔看山(一)吳越游。　憶ふ昔、山を看むとして吳越に遊び、
酒酣鼓棹(二)江中流。　酒酣に、棹を鼓す江の中流。
左招(三)舞鳳來百里。　左に招く舞鳳の百里より來るを、
右顧(四)臥龍橫半州。　右に顧る臥龍の半州に橫ふを。
崢嶸兩勢不相下。　崢嶸、兩勢、相下らず、
(五)氛翳淨掃當高秋。　氛翳、淨く掃うて高秋に當る。
(六)文身(七)烏喙昔分處。　文身烏喙、むかし分處す、
有國本是名(八)諸侯。　國を有す、本と是れ名諸侯。
區區仁暴固無異。　區區たる仁暴、もとより異なく、
朝呑暮并山應羞。　朝呑暮并、山、應に羞づべし。
不知千載竟誰主。　知らず、千載、竟に誰か主たるを、
(九)伯氣倏與飛煙收。　伯氣、倏ち飛煙と收まる。
邇來此(一〇)地有兵甲。　邇來、この地、兵甲あり、
風景頗似當年愁。　風景、頗る當年を愁ふるに似たり。
(一一)黃雲蔽天道路遠。　黃雲天を蔽うて、道路遠く、
我欲再尋應莫由。　われ再び尋ねむと欲するも應に由なかるべし。

【字解】　(一)吳越游　青邱少壯の時に係り、吳越紀游の五古等は、その旅中に出來たのである。(二)江中流　江は錢塘江。(三)舞鳳　鳳凰山をいふ、巻三に此山を題とした詩があつて、その處に詳述して置いた。なほ貝瓊の吳越兩山亭記に「天目よりして來り、その支別は岸江の山たり。凡そ吳に屬するものは、欄楯の外に飛舞す」とある。(四)臥龍　山名、一統志に「臥龍山は、紹興府城の內に在り、盤繞迴抱、臥龍の形の如し」とあり、東坡の詩に臥龍蟠屈半東州とあり、貝瓊の吳越兩山亭記に「秦望よりして來り、その支別は岸海の山たり。凡そ越に屬するものは、窗戶の間に環繞す」とある。(五)氛翳　煙霧を云ふ。(六)文身　吳の先祖の太伯仲雍は、弟季歷に國を讓らむが爲に、遂に荊蠻の地に逃れ來り、文身斷髮、以て用ふべからざるを示したといふことで、なほ巻二、之荊操の詩中に詳述して置いた。

聞君作亭壓此境。聞く、君が亭を作つて此境を壓するを、

坐獲衆勝非窮搜。(一二)坐して衆勝を獲て、窮搜に非ず。

江長不隔飛鳥度。江は長くして、飛鳥の度るを隔てず、

峰多欲障斜陽留。峰は多くして、斜陽の留まるを「障らむ」と欲す。

廢興自古屬造化。廢興、古しへより造化に屬す、

登臨未須生百憂。登臨、未だ須らく百憂を生ずべからず。

但當矯首望東海。但だ當に、矯首して、東海を望み、

一杯笑擧邀浮邱。(一三)一杯笑うて擧げて、浮邱を邀ふべし。

【七】烏喙　越王勾踐を云ふ、吳越春秋に「越王は長頸烏喙、ともに患難を共にすべし、ともに宴樂を共にすべからず」とある。【八】名諸侯　知名の諸侯。【九】伯氣　霸氣に同じ。【一〇】此地有兵甲　元末長槍兵の騷亂を云つたので、卷三、聞長槍兵至の詩中に詳述して置いた。【一一】黃雲　煙塵を交へて、黃色に見ゆる雲。【一二】窮搜　骨を折つて探し出す。【一三】浮邱　詳しくは浮邱公、仙人の名、なほ卷四、孤鶴篇の詩中に詳述して置いた。

【題義】この詩は、蕭山なる尹太守の吳越兩山亭に寄題したのである。明府は、太守の尊稱。亭は、吳越兩地の山が盡く見える處から、命名したものと思はれる。

【詩意】前年、山を眺めむが爲めに、吳越に游んだことがあつて、錢塘江の中流に舟を放ち、酒酣なる時、棹を鼓して打興じた。左には、鳳凰山、さながら飛舞するが如く、その山脈の百里も續けるを招くべく、右には、臥龍山、その名の如く、蜿蜒として州の半を橫絕するを顧るべく、この兩山は、ともに崢嶸として、そそり立ち、相持して下らざる底の勢を爲し、折しも、煙靄名殘なく掃ひ盡され、澄んで高き秋の空に當つて見えた。吳は、文身の太伯が開創した國であるし、越は、烏喙と稱せられた勾踐が一時その雄威を誇つた處であつて、むかしから、南北に分れて居たが、その土を奄有せるものは、いづれにせよ、知名の大諸侯であつた。その政を爲す、或は仁を以てし、或は暴を以てしたが、今日から見れば、格別の相違もなく、その國は、朝に他を呑み、暮に他に幷されて、ともに長くは續かず、常住不變を性とせる山は、これに對して、羞ぢ入るばかり。千歳の久しきに亙つて、ここに主となりしものとてはなく、霸氣は、倏忽の間に飛ぶ煙と共に收まり、今は、全く荒涼たる有樣。加ふるに、近年は、長槍兵の暴行を經て、隨處の城郭井邑、盡く殘破し、今見る景色は、なほ當年の慘禍を愁ふるが如くである。かくて、黃雲天を蔽うて、煙塵滿目、道路梗塞せし爲め、予は、再び往つて見たいと思つても、全く緣由ない位。聞けば、君は、亭を造つて、この境地を踏まへ、坐ながら羣山の景色を收めて、格別、骨を折つて探す必要もなく、江天長くして飛鳥の度るを隔てず、翠峰亂立、入日の留まるを遮り、その間、氣象萬千、朝夕の眺は、さこそと思はれる。元來、家國の興廢は、古しへより天意これを爲し、もとより仕方がないから、この亭に登つて臨眺する時、百憂を生じて、浮世の事を考へた處で何にもならぬ。それよりも、首を擧げて、はるかに東海を望み、笑つて一杯を擧げて、仙人の浮邱公を迎へ、世事を一切忘れることが至當である。

【餘論】起首より我欲再尋應莫由に至る十六句は、昔游を追懷して、その地の數ば戰亂を經たるを言ひ、聞君作亭壓此境に至りて、はじめて、本題に入り、結局は、人事を遺却して、神を虛無縹緲の間に馳すべしといつたので、疑もなく、元末多難の時の作に係るものである。

贈賣墨陶叟

賣墨の陶叟に贈る

龍(一)井老人稱墨仙。　龍井の老人、墨仙と稱す、
有家近在荊(二)溪邊。　家あり、近く荊溪の邊に在り。
鐵臼秋鳴竹屋雨。　鐵臼、秋は鳴る竹屋の雨、
瓦(三)篝春掃桐窓煙。　瓦篝、春は掃ふ桐窓の煙。
玄(四)玉初成敢輕用。　玄玉、初めて成つて敢て輕しく用ひむや、
萬里豹(五)囊曾入貢。　萬里、豹囊、かつて入貢。
日長小殿試烏(六)絲。　日は長く、小殿、烏絲を試む、
光迸驪(七)珠欲浮動。　光は驪珠を迸つて、浮動せむと欲す。

【字解】【一】龍井　地名、徽州府志に「婺源縣治の西に在り」と見ゆ。【二】荊溪　一統志に「宜興縣荊南山の北に在り」と見ゆ。【三】瓦篝　素燒の器で松材を燃やして油煙を取る。前に卷八、謝盧山宋隱君寄惠所製墨の詩中にも見えて居た。【四】玄玉　墨の異名。【五】豹囊　佩韋齋の詩に「牛圭黑玉收龍劑、一箔烏金貯豹囊」とあり、文房寶飾に「墨を養ふに豹皮囊を以てす、濕に遠ざかるを貴ぶ」とある。【六】

世間潘(八)李今已無。　世間の潘李、今、すでに無し、
黃金滿篋爭來沽。　黃金滿篋、爭つて來り沽ふ。
詞臣供寫上(九)林賦。　詞臣は、上林の賦を寫すに供し、
畫史藉作瀛(一〇)洲圖。　畫史は、藉つて瀛洲の圖を作る。
文物年來頗凋弊。　文物、年來頗る凋弊、
喪亂誰言少知貴。　喪亂、誰か言ふ、貴きを知る少しと。
便須從子乞雙(一一)螺。　便ち須らく子に從つて、雙螺を乞ひ、
醉草檄書磨(一二)楯鼻。　醉うて、檄書を草して、楯鼻を磨すべし。

【題義】この詩は、墨工の陶某に贈つたので、賣墨とあるけれども、矢張、自分で造つて賣るものと見える。叟の名字等は、もとより不詳。

【詩意】陶叟は、元と龍井の產、大分、年を取つて居るが、世に墨仙と稱せられ、近ごろは、荊溪の邊に居住して、一心に其業を務め、秋、竹の屋根に雨降り注ぐ時は、鐵の臼で墨の原料を搗き碎いて

烏絲　罫紙をいふ、李肇の國史補に「宋亳の間、界道の素絹を織成するあり、これを烏絲闌といふ」とあり、黃庭堅の詩に正閑紅袖寫烏絲とある。【七】驪珠　黑色の珠。【八】潘李　古しへ著名なりし墨工、潘谷と李廷珪父子。なほ卷七、贈墨翁沈蒙泉の詩中に詳述してある。【九】上林賦　司馬相如の作に係る。【一〇】瀛洲圖　登瀛洲圖の略、唐の太宗が閻立本に命じて、十八學士の像を畫かしめたことで、卷四、感舊酬宋軍咨見寄の詩中に詳述してある。【一一】雙螺　螺の形に造つた墨二挺、北戸錄に「墨は螺となし、量となし、丸となし、枚となす」とある。【一二】磨楯鼻　楯に靠いた鼻の上で墨を磨る、なほ卷八、謝盧山宋隱君寄惠所製墨の詩中にも見えて居る。

居るし、春、桐の葉の蔽ふ窓に煙の棚引く頃は、瓦篝で油煙を集めて居る。そこで、玄玉と稱する墨が、やつと出來ると、なかなか、輕しくは使用せず、豹の皮の嚢に容れ、萬里の遠きを經て、朝廷に獻上する。小殿に日長き折しも、その墨を磨つて、野紙に書いて見ると、黒い珠かと見ゆる光が迸つて、浮き出づるばかり。潘李と稱せられた一時の名工も、今は世間に居らず、全く陶叟の獨占である處から、黄金を篋に滿たし、高價を厭はずして、買ひに來る。この墨を得て後、詞臣は、乙夜の覽に入れる上林の賦を淨寫し、畫史は、登瀛洲の圖を畫くといふ次第。今しも、文物は、年來餘程衰微し、全く喪亂の世であるが、それでも、陶叟の墨の貴いことを知つて居るものは決して少くなく、從つて、矢張珍重されて居る。されば、予も、亦た叟の處に往つて、螺形の墨二挺を貰ひ受け、醉中、檄文を草する爲めに楯に畫いた鼻の上で、その墨を磨る樣にしたいものである。

【餘論】前に宋隱君より墨を惠まれしを謝し、又墨工の沈蒙泉に贈つた詩があつて、墨の詩は、これで三度目、しかも、皆七古である。そこで、これを併看すると、用語といひ、構想といひ、自然、複出するものが多いので、青邱の才を以てしても、かくの如き題目は、材料が乏しいから、何とも仕方が無かつたものと見える。この篇中では、鐵臼瓦篝の一聯が、聊か精彩を添へたる外、取り出でて云ふべきものはない。

虎邱行、次朱賞靜見寄韻

虎邱行、朱賞靜の寄せらるる韻に次す

我謀我隱西郭西。(一)　われ謀り、われ隱る、西郭の西、
讀書坐覺長身低。(二)　讀書、坐に覺ゆ、長身の低きを。
出門到寺纔數里。　門を出でて寺に到る、わづかに數里、
野水沙竹生秋輝。(三)　野水沙竹、秋輝を生ず。
恨無酒舫漾落日。(四)　恨むらくは、酒舫の落日を漾はすなく、
百錢行自懸青藜。(五)　百錢、行く〻自ら青藜に懸く。
時危未卜久安宅。(六)　時危うして、未だ久安の宅を卜せず、
幸遇勝地須攀躋。　幸に勝地に遇へば、須らく攀躋すべし。
山中況逢暑雨過。(七)　山中、況んや、暑雨の過ぐるに逢ひ、
枇杷樹高陰滿池。(八)　枇杷の樹は高くして、陰、池に滿つ。
興來卽游興盡返。　興來れば卽ち游び、興盡くれば返る、
迎送豈要山僧知。　迎送、豈に山僧の知るを要せむや。

【字解】【一】西郭西　蘇州城の西邊。
【二】長身低　坐つて居るから、丈高い身體も低く見える。
【三】秋輝　秋の光輝。
【四】酒舫　游山船。
【五】懸青藜　青藜は藜の杖、百錢を杖の先にぶら下げる、晉書阮修傳に「修、かつて步行、百錢を以て杖頭に掛け、酒店に至れば、便ち獨り酣暢す、家に儋石なきも晏如たり」とある。
【六】久安宅　永久に落ち付く住居。
【七】暑雨　夏の驟雨。
【八】枇杷　本草綱目に「木の高さ丈餘、陰は密に、婆娑として愛すべし」とあり、杜甫の詩に枇杷樹樹香とある。

兩崖石根下挿水。 兩崖の石根、下、水に挿み、
綠藤倒拂風生漪。 綠藤、倒に拂うて、風、漪を生ず。
空堂朝鼓起龍蟄。 空堂の朝鼓、龍の蟄せるを起し、
高塔夜鈴驚鶻棲。 高塔の夜鈴、鶻の棲むを驚かす。
人生在世本爲客。 人生、世に在つて、本と客たり、
隨意且留何必歸。 隨意に且く留まる、何ぞ必ずしも歸らむ。
邱陵莫歎今日異。 邱陵、歎ずる莫れ、今日異なり、
城郭更恐他年非。 城郭更に恐る、他年非なるを。
蒼茫萬事孰可問。 蒼茫萬事、孰れか問ふべけむ、
孤鳥已沒空煙霏。 孤鳥、すでに沒して煙霏空し。
念君不游何所爲。 念ふ君が游ばずして、何の爲すところ、
作字寄我如張芝。(九) 字を作つて我に寄せて、張芝の如し。
(一〇)眞娘有靈應大笑。 眞娘、靈あらば、應に大笑すべし、

【九】張芝 王の文情志に「芝、草書を好み、崔杜の法を學ぶ、章仲將、これを草聖といふ」とある。

把酒豈不延題詩。 酒を把つて、豈に延いて詩を題せざらむ。
秋風今朝動江浦。 秋風、今朝、江浦に動く、
(一一)掛席正是當年期。 席を掛く、正に是れ當年の期。
與君一弔興廢跡。 君と一たび弔はむ興廢の跡、
荒臺古樹聞鳥啼。 荒臺古樹、鳥の啼くを聞く。

【題義】 説明に及ばぬ、但し、朱賞靜の本名閲歷等は分からぬ。

【詩意】 われは、色色考へた揚句に、愈よ蘇州城西に歸隱することになり、終日讀書しつつ、坐つてばかり居た處から、丈高い身體も、どうやら低くなつた樣な氣がした。門を出でて、虎邱の寺に至るまで、わづかに數里、その間、野水潺湲として流れ、叢竹沙に生じ、相映じて、秋の光彩を放つて居る。酒を載せた游山船を夕日影の中に漾はすといふ豪興の無いのは、殘念であるが、手にせる青藜杖の先端には、飲代として、百錢を挂けてあるから、どこに行つても、先づ氣やすい。今しも、騷亂甚しく、時の方に危きに際し、永久に安居する住宅を卜することは出來ないが、幸に風景に富める勝地に逢つたならば、躋攀するが宜しく、まして、山中、驟雨一しきり過ぎて、枇杷の木は丈高く、その葉かげは池に滿つる位。わが平生の主義として、興來れば游び、興盡くれば、いつでも引き返すと

【一〇】眞娘 古しへの名妓で、その墓は虎邱に在る。なほ卷六、賦得眞娘墓送鑑上人之虎邱の題下に詳述して置いた。
【一一】掛席 帆を擧げる。

いふので、何も、山僧が之を知つて送迎することを要せぬ。路の盡くる處、左右兩邊、ともに斷崖屹立し、その脚部は、水中に挿み、そして、崖上には、綠色の藤の蔓が垂れて、山風一たび至れば、倒に披拂せられ、そして、下なる水には、漣波を生ずる。山上には、寺があつて、空堂の中で敲く朝の鼓は、潭底に蟄せる龍を起たしむべく、高塔の上に鳴る夜の鈴は、樹上に棲む鵂を驚かせる。抑も人の此世に在るや、もと羇旅の客の如く、心に協へば、暫く留まるも差支なく、何も必ずしも、急いで立ち歸るにも及ばない。邱陵の有樣も、今日は、昔と大分異なつて居るが、格別、歎息する必要はなく、城郭の中でさへ、他年來て見れば、似ても付かぬ樣に成ることであらう。世間の萬事は、蒼茫として、一一問ひ質すことも出來ず、逝くものは、孤鳥が飛び去つて、あとに煙靠を殘す樣なものである。おもへば、君が、この虎邱に遊ばざるは、如何なる故か、そして、詩を作つて、われに寄せられたが、その草書の見事なことは、丁度、むかしの張芝の樣である。しかし、眞娘にして靈あらば、必ず君の無性なるを大笑すべく、やがて、酒を把つて勸むれば、どうして、君を招延して詩を題せしめずに置かうか。今しも、秋風は、江浦に吹き起り、その昔、約束した通り、帆を擧げた歸舟を寄せて善い頃になつた。君にして、この地に來られたならば、ともに打連れて、一たび興廢の跡を弔ひ、荒臺古樹の間、亂鳥の啼くのを聞くことであらうが、實境の淒涼は、君に取つて、豫想以上の事であらう。

【餘論】朱氏の寄せた虎邱行の原作は、まだ其地を經過せず、純ら想像を馳せたものと見える。そこで、靑邱は、虎邱なら日夕游行する處で、自分こそ詳しく知つて居るといつて、虎邱の現況を敍し、今丁度善い時であるから、君も夙約を踏んで來游しては如何といつて、これに答へたのである。邱陵莫歎今日異の四句は、人事の定著せざるを道破し、隨分言ひ古されて居るが、なほ且つ讀者の心を根觸する。

鳳臺二逸圖　鳳臺二逸の圖

元集賢院待制馮海粟公。自號瀛洲客。嘗被斥。游金陵鳳凰臺。作詩弔李謫仙。好事者。爲作鳳凰臺游圖。近有詩示求題。賦此塞之。

【訓讀】元の集賢院待制馮海粟公、自ら瀛洲客と號す。かつて、斥けられて、金陵の鳳凰臺に游び、詩を作つて李謫仙を弔ふ。好事者、爲に鳳凰臺游圖を作る。近ごろ、詩あり、示して題を求む、これを賦して之を塞ぐ。

(一)謫仙昔作(二)供奉臣。謫仙、むかし供奉の臣となり、

(三)詩語不合(四)妃子嗔。詩語合はずして、妃子嗔る。

【字解】【一】謫仙　唐書李白の本傳に、賀知章が初めて相見た時、子は謫仙人だといつたと書いてある。

（五）鑾坡無地容（六）侍直　鑾坡、地の侍直を容るるなく、
（七）錦袍來醉金陵春　錦袍、來り醉ふ金陵の春。
金陵臺高鳳凰去　金陵、臺高くして鳳凰去る、
（八）西望長安竟何處　西、長安を望めば、竟に何の處ぞ。
江聲空打（九）石城潮　江聲、空しく打つ石城の潮、
山色猶橫（一〇）歷陽樹　山色、猶ほ橫ふ歷陽の樹。
（一一）騎鯨一去五百秋　騎鯨一去、五百秋、
（一二）花草滿徑埋春愁　花草滿徑、春愁を埋む。
（一三）瀛洲老客（一四）綠玉杖　瀛洲の老客、綠玉杖、
笑（一五）領賓客還來游　笑うて、賓客を領して、還た來り游ぶ。
才氣風流頗（一六）同調　才氣風流、頗る同調、
曾入金（一七）門（一八）待明詔　かつて、金門に入つて明詔を待つ。
當年流落不自悲　當年流落、自ら悲しまず、

つまり、この塵界の人ではなく、天上の神仙の下界に降謫されたものだといふ意。【二】供奉臣　唐書百官志に「明皇、初めて翰林待詔を置く、すでにして又、四方の文學を選びて、翰林供奉と號し、集賢院學士と制誥書勅を分掌す」とあり、李白の本傳に「詔あり、翰林に供奉す」とある。【三】詩語不合　詩中の言葉が氣に入らぬ。【四】妃子嗔　楊貴妃が怒つた。李翰林別集の序に「高力士、脫靴を以て深恥となす、異日、太眞、重ねて清平調の詞を吟ず。力士曰く、飛燕を以て妃子を指す、これを賤むこと甚しと。太眞、頗る深く之を然りとす。上、かつて三たび李白に官を命ぜむと欲す、宮中の捍ぐところとなりて止む」とある。【五】鑾坡　金鑾殿を云ふ、李白の本傳に「天寶中、賀知章、これを言ふ、金鑾殿に召見し、當世の事を論じて、頌一篇を奏す」とある。【六】侍直　近侍宿直の臣。【七】錦袍來醉　李白の本傳に「かつて、舟に乘じ、崔宗之と采石より金陵に至る、宮錦袍を著けて舟中に坐し、旁に人なきが若し」とある。【八】西望長安　李白の鳳凰臺の詩に、總爲浮雲能蔽日、長安不見使人愁とある。【九】石城潮　石城は石頭城、劉禹錫の石頭城の詩に潮打空城寂寞回とある。【一〇】歷陽　一統志に「和州は、晉に歷陽と名づく」とある。【一一】騎鯨　杜甫の送孔巢父の詩に南尋禹穴見李白、道甫問訊今何如とあるが、一本には、南尋の七字を若逢李白騎鯨魚に作つてある。俗說に、李白は江上に舟游を試み、水中の月を掬せむとし、誤つて、水に落ちて死んだと稱する處から、騎鯨といつたのである。【一二】花草滿徑埋春愁　李白の鳳凰臺の詩に、吳宮花草埋幽徑とある。【一三】瀛洲老客　馮海粟を指す、なほ、その評は、題義の條を見よ。【一四】綠玉杖　綠玉の飾りを施した杖、陸游の詩に翠袌綠玉杖とある。【一五】領賓客　領は引き具す。【一六】同調　同じ樣な調子。【一七】金門　金馬門の略、漢宮の門名。東方朔は、自ら世を金馬門に避くと稱した。【一八】待明詔　待詔といふに同じ。元來、待詔とは、詔を待つて初めて任官する、それまで假りに置くといふので、つまり候補の義である。

卻問前人欲相弔　卻つて、前人を問うて相弔はむと欲す。
可憐（一九）二子遭清時　憐むべし、二子、清時に遭ひ、
放逐江海空題詩　江海に放逐せられて、空しく詩を題す。
賴有高名足難朽　賴に高名の朽ち難きに足るあり、
何用（二〇）粉墨他年垂　何ぞ用ひむ、粉墨、他年に垂る。
夕陽欄檻登臨後　夕陽欄檻、登臨の後、
誰復來游酹杯酒　誰か復た來り游んで、杯酒を酹せむ。
（二一）屐痕寂寞冷蒼苔　屐痕、寂寞として、蒼苔冷かに、
棲烏啼滿臺前柳　棲烏、啼き滿つ臺前の柳。

【一九】二子　李白と馮海粟とを指す。【二〇】粉飾　壁上の題詩を塗り飾ること。【二一】屐痕　屐は足駄。

【題義】鳳臺二逸とは、唐の李白と元の馮海粟との二人を合稱したのである。鳳凰臺は、江寧府志に「府治の西南杏花村中に在り、宋の元嘉の時、鳳凰、この山に集まる、臺を山椒に築いて、以て瑞を表す」とある。その臺は、後世まで殘つて居たので、唐の李白は、長安より放逐されし後、この臺に登つて、左の七律を作つた。

鳳凰臺上鳳凰游。鳳去臺空水自流。吳宮花草埋幽徑。晉代衣冠作古丘。三山半落青天外。二水中分白鷺洲。總爲浮雲能蔽日。長安不見使人愁。

馮海粟の事は、元史陳孚傳に「攸州の馮子振、經史に博洽、その文を爲るや、酒酣に耳熱するに當り、侍者二三人に命じ、筆を潤して以て俟たしめ、子振、案に據つて疾書し、紙の多少に隨つて、頃刻輒ち盡く。仕へて、承仕郞集賢待制となり、海粟と號す」とある。それから、圖の由來は、この詩序に見えて居て、大略、下の如くである。――元の集賢院待制たりし馮海粟公は、自ら瀛洲客と號して居た。かつて、朝廷から斥けられ、金陵に遊んだ序に、鳳凰臺に登り、詩を作つて李白を弔つた。すると、好事者が、その爲に、鳳凰臺游圖を作つた。近ごろ、公より詩を寄せて示され、圖に題せむことを求められたるに因り、この詩を賦して、聊か責を塞ぐことにした。

【詩意】謫仙と稱せられた李白は、その昔、玄宗に事へて翰林供奉と成つたが、沈香亭で作つた淸平調の詩が氣に入らぬといふので、楊貴妃は腹を立てて、その仕進を妨げた。金鑾殿は廣しと雖も、その近侍宿直を許さず、やがて、都から逐ひ出されたから、錦袍を著けた儘、南游して金陵の春に醉倒した。金陵には、鳳凰臺が高く聳えて居るが、名にしおふ鳳凰は、すでに去り、その跡、漸く荒廢し、臺頂に登つて、西、長安を望めども、何處とも分からず、大江の潮聲は、石頭城を打つて鳴り響き、對岸には、歷陽の樹色蒼茫、山色遠く連亙して見える。その李白は、鯨に騎し、一たび、この世を去つて天上に向ひし後、五百年を經、臺下の花草は、徑に滿ちて、春愁を埋めるばかりである。ここに、瀛洲老客と號する馮海粟公は、綠玉の杖を引き、賓客を引き具して、笑ひながら、ここに來游されたが、その才氣風流、兩つながら、李白と同調で、現に、これまでは、金馬門に入つて待詔となつて居られたのである。馮公は、おのが流落などは少しも悲まず、却つて、古人の遺跡を尋ねて、懇に其跡を弔はれた。李白といひ、馮海粟といひ、氣の毒にも、二人とも、聖明の御世に遭ひながら、兎角、數奇であつて、十分に重用せられず、江海の間に放逐されて、むなしく詩を題せられた。唯だ高名の容易に朽ち難きは、なほ以て幸とすべく、後世に傳へる爲に、その題詩を粉墨で塗澤するにも及ばない。馮公が此に登臨し、入日うつらふ欄干に倚つて吟嘯せられし後、何人が復た此に來て、杯酒を供へて、その當時をしのぶであらうか。末俗の世に、かういふ畸人は到底又と出て來さうにもない。かくて、馮公の屐痕は、寂寞として、蒼苔の上に殘り、臺前の柳には、塒を求める烏が啼き續

つて居ることであらう。

【餘論】初の二解は純ら李白、次の二解は馮海粟の事を敍し、可憐の四句は、二人を合せて、その運命の屯蹇を憐み、兼ねて題詩の不朽なるべきを云ひ、結一解は、馮公の後、更に其人なく、臺邊の風光、愈よ寂寞たるべきを述べ、餘情盡きず、讀者をして、自ら感愴に堪へざらしめる。

送張員外從軍粤上　張員外の粤上に從軍するを送る

(一)鶗雞啼霜海城(二)白。　鶗雞、霜に啼いて、海城白く、
誰掃行車(三)出南陌(四)。　誰か、行車を掃うて、南陌を出づ。
刀頭裝得願酬恩。　刀頭裝ひ得て、恩に酬いむことを願ふ、
知是狂游廣州客。　知る是れ、狂游廣州の客。
擊筑悲歌斗酒(五)前。　擊筑悲歌、斗酒の前、
又從飛將(六)去臨邊。　また飛將に從つて、去つて邊に臨む。
幕中草檄風生筆。　幕中、檄を草して、風、筆に生じ、
馬上吟詩月在鞴(七)。　馬上、詩を吟ずれば、月、鞴に在り。

【字解】【一】鶗雞　俗にたうまるといふ、雞の種類で、形が一番大きい、楚辭の九辯に鶗雞啁哳而悲鳴とある。【二】海城　海邊の孤城。【三】行車　旅行の車。【四】南陌　南陌は大路。【五】斗酒　一斗の酒、但し支那の一斗は日本の一升位。【六】飛將　匈奴が李廣を稱して漢の飛將軍といつた。【七】鞴　說文に「馬の鞍具」とある。した鞍、鞍下の韉。【八】南北長江竟誰限　隋志に「文帝、南征して江に臨み、波濤の洶湧を見、歎じて曰く、長江は天塹、天の南北を限る所以なり」とある。【九】越王臺　廣東志に「廣州城內、越秀山上に越王臺あり」と見ゆ。【一〇】中原陸沈嘆　陸沈は、水なくして沈む義、國の滅ぶるを云ふ。晉書桓溫傳に「ここに於て、淮泗を過ぎ、北境を踐み、諸寮屬と平乘樓に登り、中原を眺矚し、慨然として曰く、遂に神州をして陸沈し、百年丘墟たらしむ、王夷甫諸人、その責に任ぜざるを得ず」とある。

秋聲萬里隨征雁。　秋聲萬里、征雁に隨ひ、
(八)南北長江竟誰限。　南北長江、竟に誰か限る。
明朝若上越王臺(九)。　明朝、若し越王臺に上らば、
應有中原陸沈嘆(一〇)。　應に有るべし、中原陸沈の嘆。

【題義】張員外の名字閲歷は不詳、粤上は、古しへの越國、卽ち今の福州附近と思はれる。この詩は、張員外が從軍して其地に赴くを送つたのである。

【詩意】鶗雞が晨の霜に叫べば、寒氣甚しく、海城一帶ほの白く見える。この時、君は、旅行用の車を掃除して、南方の大路より出で、愈よ越地に赴かれる。君は、新に佩刀の先端を裝飾し、その刀で、賊虜を斬り、以て君國の恩に酬いむことを期して居られるので、流石に、むかし狂游以て命となせる廣州の客たるに負かず、その意氣込みは、素晴らしいものである。君は、平生斗酒なほ辭せず、醉ふと、筑を擊つて悲歌慷慨して居たが、此度は、飛將軍に比すべき大將に從ひ、去つて、邊境に臨まれるとのことで、その得意、まことに想ふべしである。かくて、幕中に在つて檄を草すれば、筆端に風を生ずべく、馬上に在つて詩を吟ずれば、月は下鞍を照らし、朝夕心ゆくばかりの事が出來、隨分愉

快なことであらう。今しも、秋聲、萬里を度つて、征雁に隨ひ、長江は天塹、天が自然南北を限つて居て、四海統一は、何時の事とも分からぬ。明朝、もし越王臺に上つて顧望したならば、誰か中原をして陸沈せしむといつて、騷亂の世、時事愈よ非なるを歎息せられるであらう。

【餘論】この詩は、篇幅長からざる丈に、よく纏つて居る。幕中草檄の一聯は、全篇の精彩であるし、結二句は、感愴盡きず、掉尾力あるを覺えしめる。

題陳節婦 有序

陳節婦に題す、序あり

節婦。姓孫。郡人陳已久之妻也。已久客死。節婦守志。其孫彥遜求題。賦此。

【訓讀】節婦、姓は孫、郡人陳已久の妻なり。已久、客死し、節婦志を守る。その孫彥遜、題を求む。これを賦す。

(一)嬌兒笑語羅幃暮。　嬌兒、笑語して羅幃は暮れ、
銀燭搖光夜香度。　銀燭光を搖かして、夜香度る。
狂風忽起海東頭。　狂風、忽ち起る海東頭、
吹斷(二)蘭舟去時路。　吹き斷つ、蘭舟去時の路。
去時豈惜千金軀。　去時、豈に惜まむや、千金の軀、
煙濤竟沒(三)珊瑚樹。　煙濤、竟に沒す珊瑚の樹。
(四)精衞寃深水更深。　精衞、寃深くして、水、更に深し、
身小天高向誰訴。　身は小に天は高く、誰に向つてか訴へむ。
寂寞(五)塵奩掩鏡光。　寂寞として、塵奩、鏡光を掩ひ、
可憐不復照晨妝。　憐むべし、復た晨妝を照らさず。
階前莫剪青青草。　階前、剪る莫れ青青の草、
生死終身不下堂。　生死、終身、堂を下らず。
堂中(六)素幔空(七)時祭。　堂中の素幔、空しく時祭、
賴有孤兒拜(八)虛位。　賴に孤兒の虛位を拜するあり。
白日哀思眼不乾。　白日哀思、眼、乾かず、
夜枕還流夢中淚。　夜枕、還た流す夢中の淚。

【字解】【一】嬌兒　愛らしき幼兒。【二】蘭舟　木蘭の材で造つた舟、張籍の詩に蘭舟桂檝常渡江とある。【三】珊瑚樹　白居易の澗底松行に、君不見沈沈水底生珊瑚とある。【四】精衞　山海經に「發鳩の山に鳥あり、その狀、鳥の如く、文首白喙赤足、名を精衞といふ。その鳴くこと、自ら詨たり。これ炎帝の少女、名を女娃といふ。東海に游び、溺れて返らず、故に精衞となり、常に西山の木石を銜み、以て東海を埋む」とある。【五】塵奩　塵にまみれた鏡箱。【六】素幔　白い幔幕。【七】時祭　時折りの祭儀。【八】虛位　木主、即ち位牌。【九】一絃音　李商隱の錦瑟の詩に一絃一柱感華年とある。【一〇】孤凰曲　雌雄の子飛するを歌うた曲。【一一】別鶴離鸞　古今注に「高陵の牧子、妻を娶り、五年にして子なし、父母改めて娶らむと欲す、乃ち琴を援つて別鶴操を爲す」とあり、西京雜記に「慶安世、

妾本孤桐斷作琴。(九)一絃只作一絃音。(一〇)逢人不奏鳳凰曲。(一一)別鶴離鸞夜夜心。

妾は本と孤桐、斷つて琴と作す、一絃、只だ一絃の音を作す。人に逢ふも奏せず鳳凰の曲、別鶴離鸞、夜夜の心。

【題義】陳節婦は、陳家の節婦、その事は、簡略ながら、序に見えて、大體、下の如くである。――節婦、本姓は孫氏、呉郡の人、陳已久の妻である。已久は客死して歸らなかつたが、節婦は、志を守つて、家事を經營した。その孫の彥遜といふものが、題詩を求めたから、この詩を賦した。

【詩意】愛らしき幼兒が笑語しつつある間に、羅幃の間、いつしか暮れ、やがて銀燭を點ずれば、その光の搖ぐ中に、物とはなしに、夜の匂ひが吹き度つて居る。家室の樂、かくの如く、この儘に過ごせば、まことに幸福の至であるが、思ひきや、狂風忽ち海東に吹き起り、わが夫の蘭舟を乘り出した其時の路を吹き斷つて、再び返ることが出來なく成らうとは。わが夫が千金の貴き身を惜まずして出かけたのは、まことに無謀であつて、その死は、萬重の煙濤が珊瑚を海底に沒し去つた樣なものである。われは、精衞と同じ恨を抱き、西山の木石を銜んで、東海を塡めむとあせつても、東海の水は、わが恨の深きよりも深く、到底、塡め盡すことは出來ず、身は小に、天は高く、誰に向つて訴へやう

年十五、成帝の侍郎たり、善く琴を鼓し、能く雙鳳離鸞の曲を爲す」とある。

か。鏡の箱は、塵に塗れて、明鏡の光を掩ひ、再び朝化粧を照らし見ることなきいぢらしさ。階前には、草が青青と伸びても、決して剪るに及ばぬ、なせかといへば、この身は生くるも、死ぬるも、終身堂を下らないからである。堂中には、白い幔幕が垂れて、そこで、伏臘の祭をするが、夫の魂魄、返り來らず、まことに、便りないことではある。ただ幸にも孤兒が位牌を拜し、れツきとした相續人があるから、いささか心を慰めることが出來る。節婦は、哀思長しへに盡きず、晝は泣き通しで、兩眼ともに乾かず、夜は、眠つても、夢中に涙を流して、枕の浮くを疑ふばかり。妾の一身、たとへば、孤桐を斷つて造つた琴の如く、一絃ごとに、只だ一絃の音をなし、決して他と相和することは出來ない。されば、人に逢うたとても、鳳凰于飛の曲を奏するに堪へず、夜な夜な、わびしき思に堪へぬ別鶴離鸞の哀調を彈ずるのみである。

【餘論】節婦といへば、まことに結構であるが、その事實は、普通世間に有りふれた儘で、格別目ざましく珍らしいこともないから、著筆が頗る六つかしい。そこで、主として、節婦その人の心中に立ち入り、これに代つて言を述べるといふ樣な仕組にしたのである。この篇は、文字も洗錬してあつて、一應無難に出來て居るが、いささか、わざとらしい處があつて、割合に人を感動させぬのは、まことに遺憾である。

晩步西郊見鴐鵝羣飛

晩に西郊を歩し、鴐鵝の羣飛するを見る

平煙漠漠天蒼蒼。　平煙漠漠として天蒼蒼、
牛羊不牧野草黃。　牛羊牧せず野草黃なり。
(一)鴐鵝東來高作行。　鴐鵝東より來つて、高く行を作し、
晴空忽墮數點霜。　晴空、忽ち墮つ數點の霜。
(二)紫塞碧海遙相望。　紫塞碧海、遙に相望む。
下視鳧鴨愁(三)陂塘。　下に視る鳧鴨の陂塘を愁ふるを。
書生見此心欲狂。　書生これを見て心狂せむと欲す、
便思呼(四)鶻上馬馳。　便ち鶻を呼び、馬に上つて馳せむことを思ふ。
(五)鷫鸘之裘自倒披。　鷫鸘の裘、自ら倒披、
箭聲脫弦鳴(六)餓鴟。　箭聲、弦を脫して、餓鴟を鳴らす。
(七)遠翮正落雙(八)參差。　遠翮正に落ち、雙びて參差、
仰空拍手誇絕奇。　空を仰ぎ、手を拍つて絕奇を誇る。
豪氣服殺幷州兒(九)。　豪氣、服殺す幷州兒、
也勝閉門坐詠詩。　また勝る、門を閉ぢ坐して詩を詠ずるに。

【字解】【一】鴐鵝　題義の條を見よ。【二】紫塞　古今注に「秦、長城を築く、土色紫、漢塞亦た然り。一に云ふ、雁門草色紫、故に名づく」とある。【三】愁陂塘　陂塘、二字ともに隄、隄の間の狹い處に居る。【四】呼鶻　鶻はくまだか、ここでは鷹と同義に用ひて居る。【五】鷫鸘之裘　鷫鸘は鳥の名、その鳥の羽を綴り合せて造つた裘で、餘程貴いものと見える。西京雜記に「司馬相如、はじめ、卓文君と成都に還り、貧に居て愁懣し、著くるところの鷫鸘裘を以て、市人陽昌に就いて酒を貰ふ」とある。【六】鳴餓鴟　鴟は鳶、矢の鳴り響く音をいふ。南史曹景宗傳に「弓は霹靂の鳴を作し、箭は餓鴟の叫ぶが如し」とある。【七】遠翮　遠くを飛ぶ鳥。【八】雙參差　二羽の鳥が不揃に成つて落ちる。【九】幷州兒　幷州は北邊の地、その地の人民は、游俠騎徒を以て風として居る。

【題義】鴐鵝の鴐は、文選上林賦の注に「野鵝なり」とある。この詩は、日暮、蘇州城外の西郊を散歩し、白鵝の羣を爲して飛べるを見て作つたのである。

【詩意】平かに地上に鋪ける夕煙は、漠漠として際涯なく、そして天は蒼蒼として見え、牛羊を牧養せぬ爲に、野草は一面に茂り、折から黄ばんで居る。この時しも、鴐鵝の一羣、東より飛び來り、高き處を度つて行列をなし、晴れた寒空から數點の霜が落ち來らむばかりに見えた。北は長城より、南は大海に至るまで、遙に相望んで、寥廓無邊の間を自由に翺翔して居る處から、鴐鵝は、彼の鳧の類が隄の狹い處に窮屈さうに居るのを、傲然として眺め下して居る。われ偶ま之を見て、心、將に狂せむとした。そこで、鷹を呼んで臂に据ゑ、そして、馬に乘つて馳せ出したいと思つた。すると、身に著けて居る鷫鸘裘は、裏がへしになつて翻り、やがて、弓に箭を番へて放つと、弦を脫する箭の聲は、餓ゑた鳶の叫ぶ樣に聞こえ、あやまたず、遠空を飛んで居たのに命中すると、二羽の白鵝は、前後して地上に落ちて來る。その時、空を仰ぎつつ、手を拍つて、絕奇の豪興に誇るであらう。かくすれば、堂堂たる豪氣は、音に聞く幷州の俠兒輩をして敬服せしむるに足るべく、門を閉ぢて、詩を作つてゐ

るよりも、はるかにましである。

【餘論】全篇十四句、前半七句は、鴛鴦の羣飛するを寫し、後半七句は、これを射て豪興を縱にしたいといふ希望を述べ、もし、うまく射中てたならば、かうであらうといつて、すべて想像より之を出したのである。

次韻楊孟載早春見寄　楊孟載の早春寄せらるるに次韻す

雪後西園韭初剪。　雪後、西園、韭初めて剪る、
（一）流澌晩動春塘淺。　流澌、晩に動いて春塘淺し。
閉門有客抱深愁。　門を閉づる、客あり、深愁を抱き、
久不題詩硯生蘚。　久しく詩を題せず、硯に蘚を生ず。
風塵健兒誇得意。　風塵健兒、得意を誇る、
獨坐寂寥誰所遣。　獨り寂寥に坐し、誰か遣しむるところ。
應緣（二）少學與時違。　應に緣るべし、少學時と違ふに、
不習弓刀誦（三）墳典。　弓刀を習はずして墳典を誦す。

【字解】【一】流澌　流れる氷、後漢書王霸傳に「光武、滹沱河に至る。候吏、還つて白す、河水流澌、船なし、濟るべからず」とあり、風俗通に「氷流るるを澌といひ、氷解くるを泮といふ」とある。【二】少學　少時の學問。【三】墳典　左傳に楚の左史倚相が三墳五典を讀んだとある。三墳は三皇、五典は五帝の書。上古の書籍といふ義。【四】杯鐺　酒食・酒肉に同じ、晉書陸納傳に「納、吳興の太守となり、先づ姑孰に至り

城中物貴市門靜。　城中、物貴くして、市門は靜かなり、
好事猶能具（四）杯鐺。　好事、猶ほ能く杯鐺を具ふ。
（五）琴堂朝夕共清歡。　琴堂、朝夕、清歡を共にす、
（六）擧白頻浮不容免。　白を擧げて頻りに浮べ、免るるを容さず。
（七）鈴驄已游賓客醉。　鈴驄、すでに游んで、賓客は醉ふ、
深夜垣扉罷（八）扃鍵。　深夜、垣扉、扃鍵を罷む。
一燈留照對（九）牀談。　一燈、留めて照らす對牀の談、
沸鼎（一〇）松聲烹（一一）綠荈。　鼎に沸くの松聲、綠荈を烹る。
五更上馬子先去。　五更、馬に上り、子先づ去る、
擁被獨眠（一二）窓日晛。　被を擁して獨り眠り、窓日晛たり。
起聞啼鳥忽興發。　起つて啼鳥を聞いて忽ち興發す、
欲往江邊雲隔巘。　江邊に往かむと欲すれば、雲、巘を隔つ。
人家（一三）舊燕盡巢林。　人家の舊燕、盡く林に巢ひ、

て、桓溫に辭し、問うて曰く、公、酣を致す、幾酒を飲み、肉多少を食ふべき。溫曰く、年來、三斗を飲めば便ち醉ふ、白肉は十臠に過ぎず」とある。【五】琴堂　說苑に「宓子賤、單父を理め、琴を彈じ、身、堂を下らずして、單父理まる」とあるに因りて云ひ、主として牧民の職に在るものの閑室を稱したが、後世は、必ずしも之に限らぬ樣である。高適の詩に、「斂酒登琴堂」とある。【六】擧白　禮記に「酒清白」とあつて、その注に「白は清酒なり、祭祀の酒、事酒、昔酒、ともに白し、故に白を以て之に名づく」とあり、漢書の敍傳に「成帝、大將軍の薨後より宴飲の會を設け、趙李諸侍中に及ぶまで、皆滿を引いて白を擧げ、談笑して大噱す」とあつて、注に「滿を擧ぐと

草滿(一四)長洲絶(一五)游輦。草は長洲に滿ちて、游輦を絶つ。
春耕咫尺阻歸計。春耕、咫尺、歸計を阻て、
野水自流閒(一六)澮畎。野水自ら流れて澮畎閒たり。
吾鄕繁華天下稀。吾が鄕の繁華、天下に稀に、
花柳村村隨步轉。花柳村村、步に隨つて轉す。
久聞離亂今始見。久しく離亂を聞いて、今、はじめて見る、
煙火高低變(一七)烽燹。煙火高低、烽燹に變す。
登臨(一八)吹笛散羣羌。登臨笛を吹けば羣羌を散じ、
此事空嗟千古鮮。この事、空しく嗟す、千古に鮮きを。
朝來風雨況淒黯。朝來風雨、況んや淒黯なるをや。
雨溼城頭旗不展。雨は城頭を溼して旗展びず。
鄰里銜泥(一九)備役夫。鄰里、泥を銜いて役夫を備へ、
縣官不肯憐(二〇)疲喘。縣官、肯て疲喘を憐まず。
安居且復俟時寧。安居、且つ復た時の寧きを俟つ、
出豈無能非(二一)退卷。出づるに豈に無能、退いて卷くに非ず。
(二二)范莊紅杏幾株在。范莊の紅杏、幾株か在る、
好待開時同折撚。好し、開く時を待つて、同じく折撚。
對花憂患不須言。花に對して、憂患、言ふを須ひず、「せむ。
剩喚一杯供(二三)脚軟。剩して一杯を喚んで脚の軟かなるに供」

き、栢に餘白灑ぐものあらば之を罰するなり。一說に、白とは罰爵の名なり、飲んで盡さざるものあらば、この爵を以て之を罰す。魏の文侯、大夫と酒を飲む、令して曰く、爵せざるものは、浮するに太白を以てせむ、と。ここに于て、公乘不仁、白を擧げて君に浮す、是れなり」とある。【七】鈴騎 元史の兵制に「凡そ鋪卒は、皆革帶を腰にし、鈴を懸け、槍を持す」とあり、范成大の詩に「徵閒鈴下騎」とある。即ち鈴を帶びた番卒を乘せた小馬。【八】局鑰 閉ぢて錠を卸す、姚寬の官門譏不下鍵制に「局鑰空しく施し、隄防寄る靡し」とある。【九】劉牀 牀を向け合せて話をする。【一〇】松聲 茶の煮える音を形容して云ふ。【一一】綠荈 綠茶に同じ、韻會に「荈は、茶の葉の老いたるもの」とある。【一二】窓日晛 詩經に見晛曰消とあり、有二晛出日一とある。晛は、日色のぼんやり薄き貌。【一三】舊燕壺巢林 宋書に「文帝の元嘉中、魏人過ぐるところの郡縣、赤地餘すなく、春燕歸り來つて、林木に巢ふ」とある。【一四】長洲 苑の名、前に數ば見ゆ。【一五】游輦 輦は手ぐるま。

【一六】澮畎 澮は田間の用水、畎はうね。【一七】烽燹 玉篇に「燹は野火なり」とある。【一八】吹笛散羣羌 羌は西夷の名、洛陽伽藍記に「河間王琛、婢朝雲あり、善く篪を吹く。琛、秦州刺史となる。諸羌、外に叛き、屢ば討てども降らず、琛、朝雲をして假りに貧嫗たらしめ、篪を吹いて泣く。諸羌、これを聞いて流涕し、相率ゐて歸降す。秦民語つて曰く、快馬の健兒は、老嫗の篪を吹くに如かず」とあつて、青邱は、この故事を轉用したものと思はれる。【一九】備役夫 夫役に應じて仕事をする。【二〇】疲喘 疲れて呼吸の迫ること。【二一】退卷 論語に「君子なるかな蘧伯玉、邦に道あれば仕へ、邦に道なければ、卷いて之を懷にすべし」とある。【二二】范莊 范氏の義莊。樓鑰の記略に「吳門の范氏、桂國麗水府君より靈芝坊に居る、今は雍熙寺の後に在り。五世の孫文正公、少にして此地に長ず。皇祐中、杭に守たり、再び姑蘇に至つて宗族を訪求し、田千頃を買ひ、義莊を作り、以て之を贍はす。宅に二松あり、堂に名づくるに歲寒を以てし、閣を松風といふ。因つて、その居を廣めて以て義宅となし、族を其中に聚む。義莊の後、亦た在り」と見え、金檀の按に「姑蘇縣志、范文正公祠の原注、義莊は天平山下に在り」としてある。【二三】脚軟 唐書楊國忠傳に「郭子儀、同州より回る、帝、大臣に詔し、宅に就いて軟脚局を置き、人ごとに準れ三百緡、出でて賜ふあるを餞路といひ、入つて

勞するあるな秋脚といふ」とあつて、來著の歡迎である。なほ、東坡の詩に、還須更置秋脚酒、爲君擊鼓行金樽とある。

【題義】楊孟載は卽ち楊基、青邱の詩友。この詩は、楊基が早春に詩を寄せて來たから、その韻に次して之に答へたのである。

【詩意】雪後、氣候は稍や暖かに成つて、西園の韭も初めて摘める樣になり、流れる氷は、晩に動き出して、川を下つて行くが、春塘の水は、まだ淺い。この時しも、われは、門を閉ぢて深き愁を抱き、疎懶の極、久しく詩も作らぬ處から、硯には黴が生える位。刻下戰亂の世、健兒輩は、風塵の間に馳驅し、一かどの功名を立て、各〻その得意を誇つて居るのに、われのみ獨り寂寥に坐して、何も爲さず、つくねんとして居るのは、一體誰がさうさせたのであるか。それは、少壯の時の學問が、時勢と大分異なつて居たからであつて、われは、弓刀を稽古せずして、三墳五典などいふ古書を專ら誦習した。そこで、世に容れられずして、獨り閒居するといふ始末。しかし、城中は物價高くして、住まふことが出來ず、市門は、町はづれで、聊か靜かなる處であるから、居を其邊にトして、引ッ込んで居るが、それでも、好事者の時時酒肉を用意して、訪ふものがあるので、君の如きは、卽ち其一人である。そこで、琴堂の上に於て、君と對坐し、朝より夕に亙つて、清歡を共にし、頻りに酒を呼るが、君は、まことに勸め上手で、決して赦さない。やがて、君の御伴であつた騎馬の番卒どもは、どこぞへ遊びに出かけ、座上の賓客は醉ひつぶれて、大抵歸つて仕舞つたが、夜ふくるも、垣や扉を閉して錠を卸さぬ呑氣さ。一燈の下に、君と牀を對して、更に淸談をして居ると、茶が煮えて來て、さながら、松風の鳴る樣な音がした。五更の頃、君は馬に上つて歸り去り、予は、其儘夜具を擁して、ひとり眠つたが、うとうととして居る內に、窓前の朝日は、ぼんやりとして見えて來た。そこで、愈よ起き出でて、のどかなる鳥の鳴く音を聞くと、遊興忽ち勃發したが、ここから江邊へは、なかなか遠く、山は雲に隔てられて見える位。城中は、曩に戰亂を經たこととて、むかし馴染の燕は、折角再び來ても、もとの人家が無くなつた爲に、止むを得ず、林樹に巢ふといふ始末。長洲苑には、亂草叢生して、游人の車は全く杜絕して居る。予も、城外の田園に往つて、躬耕を爲せば善いのであるが、咫尺の處でも、歸住の計畫が思ふ樣に運ばず、野水は淙淙として、澮畎の間を流れて居るが、まだ田を動き起す樣にもならぬ。元來、吾が鄕たる蘇州の繁華は、天下稀に見る處で、城外の村村は、花柳を雜植し、好景、步に隨つて轉ずる位。むかし離亂の慘澹たる話は、久しい前から聞いて居たが、その實際は、今日はじめて之を目にし、城中に賑かなりし人煙は、その高低に從つて、烽となり、野火となり、到る處、すべて燒き拂はれて仕舞つた。古しへ、高い處に上つて、夜、笛を吹きすさび、その聲の悲愴なりし爲に、羣光を散じて歸降せしめたといふ話があるが、かういふ事は、千古に其例少く、なかなか眞似の出來ることでもない。殊に今日は、朝から風雨で、天色淒黯、城頭に押し立てた旗も、雨に濡れて展び廣がらずに居る。鄕里の老少は、夫役を命せられ、泥のぬかるみを衝いて、相

攪らす出かけたが、縣官は、まことに冷酷で、その疲勞を憐まぬから、散散こき使はれて、まことに氣の毒である。われは、ここに安居して、しばらく時の安寧になるのを待つ外なく、苟くも、一たび世に出た上は、決して無能に非ず、又退いて其才略を卷いて隱す譯でもないが、何分、時の廻り合せで、今更仕方がない。范氏の義莊の前には、赤い杏花が幾株もあつて、優に游賞を値するから、花さく時を待ち、君と一處に出かけて、折り取つて來やう。しかし、花に對して、平生の憂患を搔き口說くは、野暮の骨頂で、それよりも、一杯の酒を呼んで、足の疲を勞はる方が、はるかに氣が利いて居る。

【餘論】起首より好事猶能具杯樽に至る十句は、城中の閒居を狀し、琴堂朝夕共淸歡より擁被獨眠窓日晛に至る八句は、楊基の來訪を受けて、愉快に游び暮らしたといふ逸興遄飛の趣を敍し、起聞啼鳥忽興發より此事空嗟千古鮮に至る十二句は、田園に歸臥するに由なく、且つ劫後城中の極めて慘澹たるを描き出し、朝來風雨況淒黯より結末に至る十句は、眼前見るところを寫し、且つ他日更に聯游を試みやうといつて佳約を締したのである。段落の分明なるは、極めて宜しいが、通篇稍や平板に失し、敷張に過ぐる嫌があり、從つて格力の未だ高からざるは、作者に於て、動もすれば見るところの弊處である。

詠雪禁體次徐幼文韻　　雪を詠ず、禁體、徐幼文の韻に次す

(一)邊城雪埋深沒轍。(二)
邊城雪埋めて、深さ轍を沒す、
(三)風旋餘花吹酒盤。(四)
風は餘花を旋らして酒盤を吹く。
幾人遮(五)虜渡氷河。
幾人、虜を遮つて氷河を渡る、
(六)直指彎弓不能滿。
直指、弓を彎かむとして滿つる能はず。
我方高枕聽蕭瑟。(七)
われ方に枕を高うして蕭瑟を聽く、
却喜今年瘴(八)全浣。
却つて喜ぶ、今年瘴全く浣ふを。
寒添柳院(九)覺春遲。
寒は柳院に添へて春の遲きを覺え、
明透竹窓驚夜短。
明は竹窓に透つて夜の短きに驚く。
未成豪飲圍(一〇)翠袖。
未だ豪飲を成して翠袖を圍まず、
且辨(一一)清吟呵象管。(一二)
且つ淸吟を辨じて象管を呵す。
鋪庭擁路掃難開。
庭に鋪き、路を擁して掃へども開き難く、
三日不消知待伴。(一三)
三日消えず伴を待つを知る。
翻疑塞北雲正冷。
翻つて疑ふ、塞北、雲、方に冷かなるを、

【字解】【一】邊城　國境に在る要塞。【二】沒轍　弧衡の南都賦に其竹則篠簜敍㛠とあつて、注に「簜は小竹なり」とある。小笹、しのの類。【三】風旋　旋は吹きめぐらす。【四】酒盤　杯をいふ。【五】遮虜　蘇頌の辞納等に命ぜし詔令に「嫖姚、漢に仕へて遮虜の勳あり」と見ゆ、胡人の南下を防ぎ留める。【六】直指　寒氣の爲に指が凍つて曲らぬこと。【七】蕭瑟　雪の降り注ぐ聲。【八】瘴　蒸熱の氣。【九】柳院　柳が繞つて居る一構。【一〇】圍翠袖　事文類聚に「党家の姬曰く、彼、粗人、安んぞ此を得む、但だ能く銷金帳底、淺斟低唱、羊羔の美酒を飮むのみ」とあるを暗用したものらしく、その全文は、前に卷四、映雪圖の詩中に引いて置いた。なほ黃庭堅の句に、醉圍ニ

可信江南地先暖。　信ずべし、江南、地、先づ暖かなるを。
愁封小窟僵蟄蟲。　小窟を封じて蟄蟲を僵さむことを愁へ、
驚折(一四)危柯殞集卵。　危柯を折つて集卵を殞すに驚く。
林中(一五)樵絕暮無煙。　林中樵絕えて暮に煙なく、
野外獵來晨有(一六)疃。　野外獵來つて晨に疃あり。
(一七)趙女依稀(一八)舞態斜。　趙女依稀として舞態斜に、
(一九)郢人寂寞歌聲斷。　郢人寂寞として歌聲斷ゆ。
此時自歎少清歡。　この時、自ら歎ず清歡少きを、
月下閒門誰(二〇)解款。　月下の閒門、誰か款くを解す。
山居老客雖苦病。　山居の老客、病に苦むと雖も、
(二一)放曠猶能(二二)類中散。　放曠猶ほ能く中散に類す。
(二三)長鬚踏(二四)凍送(二五)詩筒。　長鬚、凍を踏んで詩筒を送り、
(二六)白戰令嚴烏敢緩。　白戰令嚴にして、烏んぞ敢て緩うせむや。
開簾尙恨不同賞。　簾を開いて、尙ほ恨む同じく賞せざるを、
醉看(二七)帽敧仍褐袒。　醉うて看る、帽の敧つと褐袒するとを、
祇期明日有(二八)晴暾。　祇だ期す明日、晴暾あるを、
遠訪梅花須勿懶。　遠く梅花を訪うて、須らく懶きことなかるべし。

紅袖ニ寫ニ烏絲一とあつて、その文字を用ひたのであらう。【一一】 辨清吟 佳詩を早速作り擧る。【一二】 呵象管 象牙で軸を作つた筆を振り廻はす、王右軍の筆經に「昔人、瑠璃・象牙を用ひて管となす」とあり、李輪林外集の序に「李白、便殿に召對して詔諭を撰す、時に十月、大寒、筆凍る。帝、宮嬪十人に勅し、白の左右に侍し、各〻牙筆を執つて之を呵せしむ」とある。【一三】 待伴 西清詩話に「王君玉曰く、雪、未だ消えざるもの、俗に待伴といふ、詩に曰く、待伴不レ禁鴛瓦冷、羞レ明常怯玉鉤斜」とある。【一四】 危柯 雪に壓されて危げなる枝幹。【一五】 樵絕 樵は伐木。【一六】 有疃 詩經に町疃鹿場とあつて、その傳に「町疃は鹿跡たり」とある。【一七】 趙女依稀 依稀は、それかあらぬかといふ意。楊惲の孫會宗に報ずる書に「婦は趙女なり、雅に善く瑟を鼓す」とある。【一八】 舞態 劉楨の舞賦に手如ニ翻雪一、身如ニ輕波一とある。【一九】 郢人 宋玉の對楚王問に「客、郢中に歌ふものあり、その陽春白雪を爲す、國中屬して和するものは數人に過ぎざるのみ」とある。【二〇】 解款 款は敲く。【二一】 放曠 閒放にして曠逸なること。【二二】 類中散 晉書嵆康傳に「康、遠邁不羣、魏の宗室と婚す、中散大夫に拜せられしが就かず、常に琴を彈じ、詩を詠じ、以て自ら足れりとす」とある。【二三】 長鬚 家僕の義に用ふ、韓愈の詩に、一奴長鬚不レ裹レ頭とある。【二四】 踏レ凍 凍れる路を踏む。【二五】 送詩筒 唐語林に「白居易、杭州刺史たり、時に吳興守錢徽・吳郡守李穰、悉く平生の舊交、日に詩を以て相寄贈す。後、元稹、會稽を領し、その酬唱に參し、多く竹筒を以て詩を盛つて往來す」とある。【二六】 白戰 雪に就いて詩を應酬すること、東坡の詩に當時號令君記取、白戰不レ許レ持ニ寸鐵一とある。【二七】 帽敧仍褐袒 仍は與と同じに見るべく、帽子の傾けると襦袢を肌ぬぎにすると、ともに、だらしない醉態の形容。【二八】 晴暾 暾は朝日。

【題義】 徐幼文は卽ち徐賁、禁體に就いては、陳傅良の詩に我嘗欲レ擬ニ禁字體一、無レ奈雪月氷瓊瑰とあり、東坡の聚星堂雪詩の序に「歐陽文忠公、守と作りし時、雪中、客と約して詩を賦し、體物の語を禁じ、艱難中に于て、特に奇麗を出す」とあつて、雪が花に似て居るとか、柳絮の飛ぶが如しといふ樣な常套の形容を禁じて用ひぬ樣にすること。この詩は徐賁の韻に次して、雪を詠じ、そして、禁體を用

ひたのである。

【詩意】邊境の城塞は、雪に埋もれ、その深さは、小笹を沒する位、風は花と見まがふ雪片を吹き繞らして、盃の中に落す。その時、城中では、幾人の者が、氷河を渡つて、胡人の南下を防ぎ留めるか、その人人は、指の先が凍つて曲がらず、それで弓を挽かうとしても、なかなか十分に引きしぼることが出來ず、邊城戍卒の苦は、この時が一番劇しいのである。しかし、予は、今しも、枕を高くして、雪のざわざわと降り注ぐ聲を聞き、今年殊に甚しかりし毒熱の氣の全く洗ひ去られたことを喜んで居る。柳の種ゑてある一構には、寒氣愈よ加はり、打見る限り、うらさびしくして、春の回ること遲く、竹の翳せる窓には、明りが透つて、夜の短くて明け易きに驚くばかり。もとより、翠袖の佳人どもに圍まれ、美酒佳肴を備へて豪飮する樣なことは出來ないが、逸早く、詩を作つたから、象牙の筆管を振り立てて、これを疾書した。雪は、大分積つて、庭に鋪き、路を塞ぎ、なかなか掃いた位では開かず、おまけに、三日も消えずして、後から降り來るのを待つて居る樣である。仰ぎ見れば、彤雲なほ立ちこめて、丁度、塞北の樣に寒冷であるが、流石、江南だけに、地上は、どうやら第一に暖かい感じがする。雪が餘り多いと、小さい穴を塞いで仕舞つて、その中に籠つて居る蟲の死ぬのが氣の毒であるし、危げな枝幹を折つて、巣の中に産んだ鳥の卵を碎いたのに驚いた。林中の伐木も當分休みで、從つて、夕になつても、その邊から立ち上る煙も見えず、野外では、獵を催さむとし、曉早く鹿の足跡を見つけたといふので、大騷ぎである。富貴の家では、それらしく思はれる趙女の舞の手ぶりは、廻雪の如しとさへ稱せられ、郢人の唱へた名にしおふ白雪の曲は斷えて、今樣の無下に賤しげなるが、にぎやかに歌はれて居る。予は、この時、獨り兀坐して、清歡少きを喞ち、月下の閑門を誰も來て敲かうとしない。身は、宛然たる山ごもりの老人も同樣に、病に苦んで居るが、閒放曠逸の本性は、古しへの嵇康に類して居る。そこへ、君は長鬚の家僕を遣し、凍れる路を踏んで、わざわざ詩筒を寄せられ、例の白戰とやら、雪の詩で唱和を致さうといひ、命令は嚴重で、一刻も猶豫されぬ處から、取り敢へず、この詩をひねり出した始末。唯だ君と共に會飮し、簾を開いて、同じく雪景を賞し、そして、醉つた揚句に、帽を傾け、襦袢を肌ぬぎにする狂態を見るに及ばぬのは、いかにも殘念である。ただ期するところは、明日は定めて天氣も晴れるだらうから、一處に梅花を尋ぬべく、その時は、決して、平生の如く疎懶でなく、一番奮發して、是非お出かけを願ひたい。

【餘論】前首と同一の風格で、決して作者を重からしめるものではない。篇中、寒添二柳院一の十四字は、巧警新婉、七律に入れても、翩翩として朗誦を値することと思ふ。

思夫山

思夫山

江上曾看望夫石。江上、かつて看る望夫石、

【字解】【一】望夫石　前に卷八、

湖中望見憶夫山。　湖中、望み見る憶夫山。
夫君好采山中藥。　夫君、好し采る山中の藥、
獨得長生竟不還。　ひとり長生を得て、竟に還らず。
不似蕭郞與秦女。　似ず蕭郞と秦女と、
乘鸞同去彩雲間。　鸞に乘じて同じく去る彩雲の間。

溫陵節婦行の詩中にも引いて置いたが、幽明錄に「武昌北山の上、望夫石あり、狀、人の立つが若し。相傳ふ、むかし、貞婦あり、その夫、役に從ひ、この山に餞送す。立つて、夫を望み、化して石となる。因つて名づく」とある。【二】憶夫山　卽ち思夫山、その由來は、題義の條に述べて置く。【三】蕭郞與秦女　蕭郞は卽ち蕭史。秦女は秦の穆公の女、名は弄玉。二人、夫婦となり、やがて、鳳凰に乘じて仙去したといふので、その事は、數ば前に見えて居た。

【題義】原注に「山は太湖の中に在り、舊說、秦に逸人あり、ここに居り、藥を採つて回らず、妻、これを念うて死す。後人、これを哀み、以て名づく」とある。

【詩意】武昌の江上には、望夫石といふのがあるが、ここ太湖の中には、思夫山があつて、かなり遠くから見える。夫は、山中に藥を采り、ひとり、長生を得たものと見えて、とうとう歸つて來ぬ爲に、妻たりし人は、これを戀うて、遂に焦れ死にをして仕舞つた。同じく、秦の人であるが、かの蕭史弄玉の夫婦が鸞に跨り、彩雲の間に向つて仙去したのとは、似ても付かず、妻は、定めて、夫の無情を怨んで居たであらう。

【餘論】蕭郞秦女は、同じく秦人であるから、陪襯として、最も適切といふべく、流石に作者の慧敏を推すべけれども、その他は、全然取るに足らぬものと思はれる。

送陶生兼寄周記室
陶生を送り、兼ねて周記室に寄す

馬頭交語臨長陌。　馬頭、語を交へて長陌に臨み、
我手持杯君揖策。　われは手に杯を持し、君は策を揖す。
官槐風起咽秋蟬。　官槐、風起つて秋蟬咽び、
日暮偏傷遠行客。　日暮、偏に遠行の客を傷ましむ。
故鄕故人離別多。　故鄕故人、離別多し、
過江相見問如何。　江を過ぎて相見て、問ふ如何。
軍中莫笑書生怯。　軍中笑ふなかれ、書生の怯、
還有能當曳落河。　還た能く曳落河に當るあり。

【字解】【一】馬頭　馬の前頭。【二】長陌　長い大路。【三】揖策　鞭を振つて挨拶をする。【四】官槐　並木の槐樹、もと官植に係るが故に、官槐といつたのである。【五】書生怯　怯は怯懦、卽ち膽病。【六】能當曳落河　唐書房琯傳に「琯、自ら將として、賊を平げむとす。每に曰く、かの曳落河、多しと雖も、能く我が劉秩に當らむや」とあり、又回鶻傳に「曳落河は、猶ほ健兒と言ふがごときなり」とある。

【題義】陶生は、名字閱歷、ともに不明。周記室は、前に卷九に獨游山中、憶周記室と題せる七古

があつて、その名を砥といふことだけは分かつて居る。この詩は、陶生が江南の幕中に往くを送り、そして、兼ねてより其處に居る記室の周砥に、併せて寄せたのである。

【詩意】　君が今次の行を送る爲に、長い大路に臨み、馬前に於て立ち話をなし、我は手に杯を持して君に勸め、君は手にせる鞭を打振りつつ、挨拶をなし、やがて、愈よ出發して仕舞つた。頃しも秋、並木の槐には蟬の聲咽び、日暮には、殊に遠行の人の心を傷ましめる。故鄕に於ては、故人と別離を爲すことが多いが、君が江を渡つて、周記室に逢つたならば、近況は如何と問うて吳れろ。書生は、口でこそ偉いことを言ふが、元來臆病で、軍中に居ることが相應しくない位、ただ周記室は之と異にして、優に健兒輩に當るに足るべく、まことに、一かどの人物であるから、その積りで、君も今後交際するが善からう。

【餘論】　篇幅短くして、その瑕疵も、あまり目に立たぬが、もとより佳作ではない。曳落河を擔ぎ出した處は、一寸面白い樣であるが、これとても、こけ脅しに過ぎぬものである。

倒掛

(一)綠衣(二)小鳳啼愁罷。　綠衣の小鳳、愁に啼いて罷み、

(三)痩影翻懸桂枝下。　痩影、翻つて懸る桂枝の下。

(四)芙蓉帳裏(五)篆消時。　芙蓉の帳裏、篆消ゆる時、

解斂餘香散中夜。　餘香を斂めて、中夜に散ずるを解す。

鐘鼓迢迢鎖(六)禁門。　鐘鼓迢迢、禁門を鎖し、

(七)宵衣未得奉(八)明恩。　宵衣、未だ明恩を奉ずるを得ず。

五更香冷(九)羅浮月。　五更香は冷かに、羅浮の月、

相憶梅花應斷魂。　梅花を相憶うて、應に斷魂するなるべし。

【字解】【一】綠衣　羽毛の綠色なるをいふ。【二】小鳳　即ち倒掛。【三】翻懸　この鳥は、名を倒掛といふ位で、身を倒にして棲止するものと見える。【四】芙蓉帳　蓮花を繡出したる帳幕。【五】篆消　篆は香爐の煙。この鳥は一名を收香倒掛といふ位で、香氣を好むものと見える。【六】禁門　宮中の門。【七】宵衣　夜、衣を著かへる。【八】明恩　主恩に同じ。【九】羅浮　南方廣州に在る梅の名所。

【題義】　倒掛は鳥の名、東坡の詩に蓬萊宮中花鳥使、綠衣倒掛扶桑暾とあつて、その注に「嶺南の珍禽に倒挂あり、綠毛紅喙、鸚鵡に似て小」とあり、劉績の霏雪錄に「李德裕賦するところの桐花鳳は、即ち東坡の謂はゆる綠毛幺鳳、是れなり」とあり、又李之儀倒掛詞の自注に「この鳥、十二月を以て來る。一名は收香倒掛、一名探花使、性極めて馴れ、好んで美人の釵上に集まる」とある。この詩は、即ち倒掛鳥を詠じたのである。

【詩意】　綠衣の小鳳ともいふべき倒掛鳥は、終日、愁に啼き、やがて、痩せ細りたる體を倒にして、

桂枝にぶら下つて睡つて居る。芙蓉帳中に燒きこめたる香の煙の消えた時は、一たび餘香を自分で聚め、そして、夜中に之を吐き散らすことが出來る。かくの如き靈鳥ではあるが、鐘鼓の聲遠くして、宮門、盡く鎖された時分、夜、衣を著かへて主恩を奉ずることも出來ず、鳥にして人に非ざる身の、今更致方もないことである。そこで、五更の月が、生まれ故鄕の羅浮の山を照らし、香氣冷かに地を罩むるに當つては、はるかに、その地の梅花を思うて、ひとり、心魂を惱ますことであらう。

【餘論】措辭は、洗鍊を經て、綺麗に出來て居るが、倒掛といふ鳥が、元來、あまり人に知られて居らぬ處から、折角、形容刻劃しても、讀者には、少しも痛切でない。

苦寒、書江上主人壁間　苦寒、江上主人の壁間に書す

慘節欲盡郊原空。　(一)慘節、盡きむと欲して、(二)郊原空しく、
北風五日吹沙蓬。　北風五日、(三)沙蓬を吹く。
客子東游骨肉遠。　客子、東游して骨肉遠く、
主人賴有江邊翁。　主人、賴に江邊の翁あり。
青燈白酒同傾瀉。　青燈(四)白酒、同じく傾瀉、
醉擁布衾茅屋下。　醉うて、布衾を擁す茅屋の下、
中宵不敢愁苦寒。　中宵、敢て苦寒を愁へず、
猶有窮年遠行者。　猶ほ(五)窮年遠行の者あり。

【字解】(一)慘節　風光慘澹たる季節、卽ち冬を云ふ。(二)郊原空　野原に一物もなきをいふ。(三)沙蓬　沙や蓬の類。(四)白酒　濁り酒。(五)窮年　押し詰まつた年。

【題義】江上主人は、江邊なる旅館の主人。この詩は、冬の旅中、寒に苦んだことを敍して、旅館の壁に題したのである。

【詩意】冬も盡きかかつて、寒氣殊に劇しく、郊野は掃蕩せられて、一物の存するなく、折から、北風は、五日も吹き續いて、河原の沙や、わづかに殘れる蓬の穗を吹き飛ばした。予は、獨り東に游んで、骨肉の相迎ふるなく、隨分閉口したが、幸にも、江邊の旅館の主人が請じ入れて、懇に待遇して與れたから、大に心を安んじた。青燈の下に於て、同じく濁酒を傾け、やがて、醉後、茅屋の下に、布衾を擁して眠に就き、夜中になつても、寒氣に苦む心配もなく、まことに安安と過ごしたが、おもへば、この年の暮に、遠地に旅する人もあるべく、その艱苦は、如何ばかりかと、人ごとならず案じられる。

【餘論】結二句は藹然たる仁人の言、措辭の上から見ても、頗る面白い。

菜薖爲余唐卿賦

菜薖、余唐卿の爲に賦す

桂桐里中君始歸。　桂桐里中、君、はじめて歸る、
菜花滿園黃蝶飛。　菜花園に滿ちて、黃蝶飛ぶ。
桔槹倚樹長不用。　桔槹、樹に倚つて長く用ひず、
江南雨多山土肥。　江南、雨多くして山土肥えたり。
方畦獨繞看新綠。　方畦、ひとり繞つて新綠を看る、
晚食何須尙思肉。　晚食、何ぞ尙は肉を思ふを須ひむ。
翠縷登盤春薤香。　翠縷、盤に登つて、春薤は香しく、
金釵出盎冬葅熟。　金釵、盎を出でて、冬葅は熟す。
我家亦在蓴菰鄉。　わが家、亦た蓴菰の鄉に在り、
秋風便應歸共嘗。　秋風、便ち歸つて共に嘗むべし。
潮州司馬成何事。　潮州の司馬、何事をか成す、
回首空愁足萬羊。　首を回らして、空しく萬羊に足るを愁ふ。

【字解】【一】桂桐里　越に在つて、余堯臣の居た處、なほ、その詳は、題義の條に述べる。【二】桔槹　はれ釣瓶、圓會に「水を汲む機」とあり、王維の詩に林幽學桔槹とある。【三】方畦　四角形に區劃した畑、鄭鐶の詩に破屋渾生甑、方畦執插秧とある。【四】晚食　戰國策に「晚食以て肉に當つ」とある。【五】翠縷　翠色の細き葉。【六】春薤　薤はにら、耶律楚材の詩に春薤旋澆濃鹿尾、臘糟微浸軟駝蹄とある。【七】金釵　歲時記に「鹽葅、その和を得れば、竝に金釵色を爲す、俗、これを金釵葅といふ」とある。つまり、漬菜の鹽加減が善いと、金釵の如く黃色となるといふ義。【八】出盎　盎は鉢、或は瓶。【九】冬葅　葅は漬菜、杜甫の詩に長安冬葅酸且綠とある。【一〇】蓴菰　蓴菜と眞菰。【一一】秋風便應歸共嘗　前に卷四、感舊の詩中にも引いたが、晉書張翰傳に「齊王冏、辟して大司馬東曹掾となす、冏、時に權を執る。翰、秋風の起るを見て、吳中の菰菜蓴羹鱸魚の膾を思うて曰く、人生、適志を貴ぶ、何ぞ能く羈官數千里、名爵を要せむやと。遂に駕を命じて歸る」とあるを暗用す。【一二】潮州司馬　李德裕を指す、通鑑に「大中元年冬十二月、李德裕を貶して潮州司馬となし、明年、崖州司戶參軍事に貶す」とある。【一三】足萬羊　補錄記傳に「李德裕、太子少傅となり、東都に分司たり、時に一僧善く人の禍福を知るを聞き、因つて、之を召す。僧曰く、公、當に南行萬里すべし、と。明日復た之を召して、南行還るかを問ふ。曰く、公、羊萬口を食ふ、五百の未だ滿たざるあり、必ず當に還るべしと。德裕歎じて曰く、師は實に至人、われ嘗て夢に行いて晉山に至る、盡目盡く羊、牧者數十あり、われに謂つて曰く、これ侍御の羊なり、と。かつて、この夢を祕して人に語らさず、今、冥數、もとより誣ひざるを知ると。後旬餘、靈武の帥、米を遺り、竝び羊五百を餽る。大に驚き、僧を召して、その事を告げ、且つ之を還さむと欲す。僧曰く、羊、ここに到らば、すでに相國の有たり、これを還すも益なし、南行、それ返らざるか」とある。

【題義】菜薖は、余唐卿が其居に署した名である。唐卿、字は堯臣、前に卷三、春日懷十友詩を始めとし、その新鄭丞に任ぜられた時に贈つた詩もあつて、靑邱の熟友である。列朝詩集に「堯臣、字は唐卿、永嘉の人、早く文學を以て著はる。會稽に客居す。越の鎭帥院判邁善卿・參政呂珍、羅して幕下に致し、ともに保越の功あり、薦剡交も上る。仕進に意なく、越の桂桐里に於て、圃を治め、茅を結び、署して菜薖といふ。すでにして、吳に入つて、北郭に居り、高啓、張羽諸人と北郭の十友たり」とある。菜薖の薖は、詩經に考槃在澗、碩人之薖とあつて、もと優游自適といつた樣な意味の字であるが、ここでは、隱宅の義に用ひた。そこで、菜薖といへば、菜を植ゑてある隱宅といふこと。

この詩は、青邱が余堯臣の依囑に因つて、賦して贈つたので、これで見ると、堯臣が未だ呉に來らざりし時、互に名を聞き知つて、音信を通じて居たものと思はれる。

【詩意】　君は、越の桂桐里に歸臥されたさうで、菜薳の名に負かず、菜の花は園中に咲き滿ち、そして、黄い胡蝶が飛んで居る。はね釣瓶は、木にもたせかけた儘、長く用ひず、元來、江南は、雨多くして、山土肥沃、格別水を灌ぐ必要もないからである。君は四角形に區劃された畑の周圍を歩き繞つて、綠色の新鮮なるを見、晩食に肉が欲しいとも思はぬ位。一口に菜といつても、種種あるが、春の薹の香ばしきを盤に登せると、翠の絲すぢの如く、冬の漬菜の能く漬かつたのを瓶から取り出すと、金釵の如き色をして、とりどりに棄て難き味がある。わが家は、蓴菜や眞菰を産する江鄕に在るので、秋風の吹き起る頃、君と一處に往つて、十分に之を喫したいと思ふ。むかし、潮州の司馬たりし李德裕は、生涯食つた羊の數が萬に滿つるから、一たび貶謫されると、その地に歿して、都には還れないといつて心配したと云ふが、彼にして、菜のみを食つて居たらば、何事も無かつたであらうに、さてさて、氣の毒の事である。

【餘論】　初の四句は、菜を種ゑた田園の光景、次の四句は菜の味の尋常ならざるを云ひ、春薹、冬菹を以て、すべて一概したのである。結四句は餘意、おのが鄕里の蓴菰の恰も之と對敵すべきを云ひ、そして、肉食の宜しくないことを斷言する爲に、李德裕の故事を運用したのは、極めて新らしい。

送張貢士祥會試京師　　張貢士祥の京師に會試するを送る

國家文治今百年（一）。　國家文治、今百年、
多士執贄皆知天（二）。　多士、孰れか贄ふ、皆天なるを知る。
南宮坐試二三策（三）。　南宮、坐に試む二三策、
能使海内無遺賢。　能く海内をして遺賢なからしむ。
院門晨開官燭爛。　院門、晨に開いて、官燭爛たり、
白袍鵠立人三千（四）。　白袍鵠立、人三千。
上談禮樂祖姫孔（五）。　上は禮樂を談じて姫孔を祖とし、
下議制度輕鑷玄（六）。　下は制度を議して鑷玄を輕んず。
臨軒曾看宰相賀（七）。　軒に臨んで、かつて看る宰相の賀するを、
雲端盡見當臚傳（八）。　雲端盡く見る、臚傳に當るを。
看花或騎太僕馬（九）。　花を看て、或は騎す太僕の馬、
錫宴每給司農錢（一〇）（一一）。　宴を錫うて、每に給す司農の錢。

【字解】【一】今百年　原注に、至正戊戌作とあつて、即ち元の順帝の十八年。四海を統一した元の世祖（即ち忽必烈）の即位、至元元年よりここに至るまで、九十五年、大數を取つて百年と云つたのであらう。【二】多士執贄　濟濟たる多士は、誰より賜はつたものか、皆、天の爲すことであるといふ義。【三】南宮　漢書に「尙書百官府を建てて南宮といふ」とある。ここでは尙書省を指す。【四】白袍鵠立　尙書省に試驗を受ける人の群集するをいふ。東坡の「催試官考較詩」に、「願君聞此添蠟燭、門外白袍立如鵠」とある。【五】祖姫孔　姫は周公、孔は孔子。王禹偁の詩に「篇章取李杜、講貫本姫孔」とある。【六】輕鑷玄　鑷は漢の揚雄、

(一二)登朝(一三)出牧知幾輩。　登朝出牧、知る幾輩、
(一四)冠佩劍舃紛相聯。　冠佩劍舃、紛として相聯る。
邇來國運屬(一五)中圯。　邇來、國運、中圯に屬し、
爭慕死節羞生全。　爭うて死節を慕うて、生全を羞づ。
(一六)潯陽老守血灑地。　潯陽の老守、血、地に灑ぎ、
(一七)甬東大將魂沈淵。　甬東の大將、魂、淵に沈む。
廼知儒術王政本。　廼ち知る、儒術は王政の本、
至此尙賴扶傾顚。　ここに至うて、尙ほ賴つて傾顚を扶く。
諸生區區抱遺籍。　諸生區區として、遺籍を抱き、
草萊竄亡亦可憐。　草萊竄亡、亦た憐むべし。
(一八)南方上公境獨治。　南方の上公、境、ひとり治まり、
(一九)鹿鳴更欲興(二〇)賓筵。　鹿鳴、更に賓筵を興さむと欲す。
張君幾年客夜雨。　張君幾年か客夜の雨、

易を善くして五經の同異を論じた。玄は鄭玄、諸經に箋した。この二人をも輕んずるといふ意。【七】宰相賀　宋史の韓琦傳に「方に第を唱ふ、太史奏す、日下五色の見はるるありと。左右皆賀す」とある。【八】臚傳　前に卷八、宋賜進士綠襴歌の中に詳述して置いたが、文獻通考に「進士殿試、榜を拆して名を唱ふるを臚傳といふ」とあつて、卽ち殿試の及第を宰相より相傳へて發表すること。【九】太僕馬　齊職儀に「太僕の長を太僕といひ、輿馬を掌る」とあつて、太僕は、今でいへば主馬頭、從つて、太僕馬は、主馬寮の馬。進士は、その馬を拜借して、都を乘り廻はすので、孟郊の詩に、春風得意馬蹄疾、一日看遍長安花とある。【一〇】錫宴　朝廷より宴を賜はる、王光庭の詩に

古槃空案親(二一)韋編。　古槃空案、韋編に親む。
逢時頗欲見行事。　時に逢うて、頗る行事を見むと欲す、
豈但持作求(二二)魚筌。　豈に但だ持して魚を求むるの筌と作さむや。
(二三)入場(二四)叉手萬言就。　入場、手を叉して萬言就り、
衆目(二五)一葉驚先穿。　衆目、一葉先づ穿つを驚く。
(二六)嚴裝(二七)又隨計吏發。　嚴裝、又計吏に隨つて發し、
京城遙瞻北斗連。　京城、遙に瞻る北斗に連るを。
秋風吹衣別酒冷。　秋風、衣を吹いて、別酒冷かに、
枯楊淺水(二八)闉門邊。　枯楊淺水、闉門の邊。
君行匆亟我有語。　君が行、亟かなる勿れ、われに語あり、
落日尙在(二九)車衡懸。　落日、なほ車衡に在つて懸る。
竊聞(三〇)天子正側席。　竊に聞く、天子、正に席を側つるを、
此去爲拜(三一)彤庭前。　ここを去つて、爲に拜せよ彤庭の前。

瓊章九霄發、錫宴雲需通とある。【一一】司農　文獻通考に「司農は官名、秦には治粟内史といふ。漢の景帝、名を大司農と改む」とある、卽ち農商務大臣。【一二】登朝　中央政府に出仕する。【一三】出牧　外に出でて地方官となる、周禮に「天官太宰九兩、一に曰く牧、地を以て民を得たり」とあつて、その注に「牧は州長なり」とあり、漢書成帝紀に「部の刺史官を罷め、更めて州牧を置く」とある。【一四】冠佩劍舃　冠・腰下の佩玉・劍・足袋、合せて禮裝をいふ。【一五】中圯　圯はやぶれる。【一六】潯陽老守　一統志に「九江府、晉に潯陽といふ」とある。これは總管李黼の事で、元史紀事に「至正十二年二月、徐壽輝、九江を攻む、右丞孛羅帖木兒、方に兵を

揮毫休奏醴(三二)泉頌。　毫を揮ふも、奏するを休めよ醴泉の頌。
給(三三)札莫賦凌(三四)雲篇。　札を給せらるるも賦する莫れ、凌雲の篇。
但當開口論世事。　但だ當に口を開いて、世事を論ずべし、
號令次第宜何先。　號令次第、宜しく何をか先にすべき。
坐令王(三五)綱復(三六)大正。　坐に王綱をして、大正に復せしむ、
乾(三七)樞共仰天(三八)中旋。　乾樞、ともに仰ぐ天中に旋るを。
我今有志未能往。　われ、今、志あるも、未だ往くこと能はず、
矯首萬里空茫然。　首を矯げて、萬里空しく茫然。

江に駐む、風を聞いて宵に遁る。總管李黼、郷落に徴し、木石を險處に聚めて、その歸路を遏む。黄梅の主簿也孫帖木兒、出でて賊を撃たむことを願ふ。黼、これと出でて戰ひ、大に賊兵を敗り、二萬餘人を殺獲す。又長木數千を以て鐵椎を杪に冒らしめ、暗に沿岸の水中に置く。賊舟數千艘、流に順ひ、鼓譟して至りしが、木樁に遇うて動くを得ず。黼、火箭を發して之を射り、焚溺算なし。時に東は淮甸に際し、西は荊湖より、守臣往往、城を棄てて遁る。ひとり、黼、孤城を守り、中外援絶え、しかも、賊勢益す熾に、兵を進めて、城に薄る。分省平章禿堅不花、北門より出でて走る。黼、兵を引いて陴に登る。賊、すでに西門を焚く。弩を張つて之を射れば、轉じて、東門を攻む。黼、急に往いて救ふ。城、すでに破れ、賊、すでに入る。なほ之と巷戰し、力、敵する能はず。乃ち劍を揮ひ、これを叱して曰く、我を殺せ、百姓を殺す無かれ、と。賊、これを刺し、馬より墜つ。兄、冕の子、秉昭と倶に死す。州民、これを聞いて、哭聲地を震ふ。棺を具へて之を葬る。時に、冕、潁に居り、亦た賊に死す。事聞こゆ。黼に隴西公を贈り、文忠と諡す」とある。【一七】甬東大將　一統志に「寧波府、越には甬東といふ」とある。これは、寧波の守將泰不華を指したので、元史紀事に「至正十二年三月、方國珍、復た其黨を劫して、海に入る。台州路の達魯花赤泰不華、義士王大用を遣し、往いて國珍を諭さしむ。拘留して還らず。しかも、その黨陳仲達をして、往來降を議せしむ。泰不華、舟を具へ、受降の旗を張り、潮に乘じて澄江を下る。沙に膠れて行かず、遙に國珍と遇ふ。仲達を呼んで前議を申れしむ。仲達、目動き、氣索す。泰不華、その心の異なるを覺り、手づから之を斬り、即ち前んで、賊船を搏ち、奮つて之を擊つ。賊衆至し、抱持して其船に入らむとす。泰不華、目を瞋らして之を叱し、刀を奮つて賊を殺す。賊、槊を攢めて之を刺す、頸に中つて死す、なほ植立して仆れず、その屍を海中に投ず。事聞こゆ、魏國公を追贈し、忠介と諡す」とあり、又同書に「十三年、張士誠、泰州を陷る。淮南行省、知府李齊を遣して、招降せしむ。士誠、齊を呼んで跪かしむ。齊、叱して曰く、吾が膝は鐵の如し、豈に賊の爲に屈せむや、と。士誠、怒つて曳き倒さしめ、その膝を椎碎して、之を咼す。時論、大科三魁、李黼・泰不華、及び齊の若き、皆科名に負かずと云ふ」とある。【一八】南方上公　岑參の詩に上公周太保、副相漢司空とある。ここでは、張士誠を指す。金檀の按に「元史、丁酉、至正十七年、明祖、徐達を遣して、常州に克ち、張士誠の弟士德を擒にす。士誠、使を遣して元に降る。詔して、士誠を以て太尉となす。この詩、戊戌に作る、實に至元十八年なり」とある。【一九】鹿鳴　詩經の篇名、その小序に「羣臣嘉賓を燕するなり」とあり、羅隱の詩に弱冠負文翰、此中聽鹿鳴とある。【二〇】賓鐙　温庭筠の詩に賓鐙得嘉客、侯印有光輝とある。【二一】韋編　史記孔子世家に「晩にして易を讀み、韋編三たび絕つ」とあつて、竹簡を編んだ革の紐、ここでは古書の義に用ひて居る。【二二】求魚筌　筌は魚を捕ふる竹器。莊子に「筌は魚に在る所以、魚を得て筌を忘る。蹄は兎に在る所以、兎を得て蹄を忘る」とある。【二三】入場　試驗の席に入る。【二四】叉手　手を組む、北夢瑣言に「温庭筠、才思艷麗、工に小賦を爲る、入試ごとに、官韻を押して賦を作り、凡そ八叉手にして八韻成る。時人號して温八叉と爲す」とある。【二五】一葉驚先穿　戰國策に「養由基、善く射る。楊柳の葉を去ること百步にして射り、百發百中」とある。【二六】嚴裝　かひがひしく支度する。【二七】又隨計吏發　史記の儒林傳に「二千石、謹んで可なるものを察し、常に計と偕にすべし」とあつて、その注に「計は計吏なり、偕は倶なり、計吏と倶に太常に詣らしむるをいふなり」とある。太常は宮中の儀式などを掌る官省、今でいへば宮内省式部寮。謂はゆる郷貢進士は、地方の會計官吏に從つて上京し、宮内省に至り、そして、天子が親ら臨んで、謂はゆる殿試を行ふといふのが、古しへの規定である。【二八】閶門　蘇州の西門。【二九】車衡　衡は車の横木、即ち軾。【三〇】天子正側席　後漢書章帝紀の注に「側席とは、正坐せざるを謂ふ、賢良を待つ所以なり」とある。【三一】彤庭　宮中正殿の前、赤色の

數瓦を舖き連れたるが故に云ふ。【三二】醴泉頌　留雅に「甘雨時に降り、萬物以て嘉し、これを醴泉といふ」とあり、漢書王褒傳に「太子、褒の爲るところの甘泉及び洞簫の頌を喜び、後宮をして皆これを誦せしむ」とある。【三三】給札　紙を與へる。史記の司馬相如傳に「上、尙書をして筆札を給せしむ」とある。【三四】淩雲篇　同傳に「すでに、大人の賦を奏す、天子、大に悅び、飄飄として淩雲の氣あり」と見ゆ。【三五】王綱　王室の綱紀。【三六】復大正　至大中正の道に復歸する。【三七】乾樞　乾は天子の德、樞は樞機、鼎圖といふに同じ、梁の周翰の五鳳樓賦に「結坤之絡、握乾之樞」とある。【三八】天中旋　中天に在つて運旋する。

【題義】　この詩は、張祥といふ人が鄕貢進士となり、更に殿試に應ずる爲に、上京するのを送つて作つたのである。祥の字並に閱歷等は分からぬが、格別、出世をしなかつた人と思はれる。

【詩意】　わが大元に於ては、文治を布くこと、今で丁度百年になり、濟濟たる多士は、誰が貢ふかといへば、皇天意あつて、特に下し給へるものである。その多士を尙書省に於て試驗し、時務二三策を作らせれば、その才能は、大抵分かるので、海內をして遺賢なからしめることが出來る。試場の光景はといへば、宮中の一構が巍然として峙ち、門は早晚より開かれ、中には官燭が爛爛として照り輝いて居て、受驗の爲に集ひ來る人は、三千の多きに及び、いづれも白袍を著て、鵠の如く立ち竝んで居る。これ等の人人は、もとより相當に學問があつて、上、禮樂を談ずれば、周公孔子を祖述し、下、國家の制度を討議すれば、施讎・鄭玄も物の數とも思はぬ位。やがて、試驗が濟むと、宰相は、軒に臨んで、昭代人材の盛なることを賀し、次いで殿上、卽ち雲の上から傳呼して、及第者の姓名が發表される。及第者は、寮の御馬を拜借して、花見に出かけ、又每每司農から費用を支出して、宴を賜はることになつて居る。それから、愈よ任用されることになり、或者は朝廷に出仕し、或者は地方官を拜命し、冠佩劍舃、各いかめしき禮裝を爲し、紛紛として引きも切らぬ位。しかも、近ごろ、國運が聊か衰頹しかかつた處から、これ等の進士輩は、爭うて節義に死することを慕ひ、無爲にして、生きながらふるを恥として居る。中にも、九江の老總管李黼の如きは、鮮血を地に灑いで大節に殉し、寧波の守將泰不華の如きは、屍を海中に投ぜられ、英魂、深淵に沈みて、少しも悔やまず、天晴な美名を千載に留めた。して見ると、儒術は、王政の根本であつて、衰世に際しても、これに依つて、道義の傾頹を扶けることが出來る。刻下、諸生輩が、區區として聖賢の遺籍を抱き、騷亂を避けて、草萊の間に逃げ匿れて居るのは、まことに氣の毒な事である。ここに、太尉張士誠は、南方の吳地を領し、その境內は、ひとり安寧である處から、進士の試驗をなし、その及第者を招いて宴を張り、鹿鳴の古詩を歌ふ樣にしたいといふので、それぞれ計畫をして、やがて實現された。わが張君は、久しい間、客舍の夜雨を聞きつつ、燈下、几案に對して古書に親み、隨分、勉强を爲し、時に逢へば、これを實地に施して、一かどの事業を仕出來さうと考へて居たので、硏學は、立身の準備、魚を求める筌に過ぎぬといふ樣な淺薄な了見は、決して無かつた。そこで、曩に試場に入つた時など、一たび手を組み合はす間に、萬言立どころに成り、又百步を隔てて、見事第一に柳の葉を射拔くといふ樣な百發百中の腕利きに至りては、衆目を驚かしめた。その試驗は、無論通過したから、今度は、計吏に隨つて、出發す

るとのことで、目ざす帝都は、北斗に連つて、遠くの方に見える。今しも、秋風衣を吹いて、別筵の酒も冷かに、閶門の邊、柳枯れて水淺く、風光蕭條たる時しも、君よ、さう急がずに、一寸待つて呉れろ、われに一言申し述べたいこともあるし、夕日は、なほ車前の横木に懸つて居る。ひそかに承はれば、天子は、賢良の士を優待し、これを引見する時には、その席を避けられるといふことで、君にして、ここを去らば、彤庭の前に至りて拜を爲し、聖恩の辱きを第一に感謝するが善からう。それから、筆を揮ふにしても、役にも立たぬ醴泉の頌などは捧呈せず、紙を賜はつたとて、天子をして徒に淩雲の氣を生せしめた彼の大人賦などは作らぬが宜しい。それよりも、口を開けば、眼前の急務として、專ら時事を論じ、諸侯に號令する次第は、どれを第一とすべきかといふことに就いて、第一に討議するが善い。かくて、王室の綱紀を再び振肅して、大中至正の道に復歸せしめ、四海の羣生をして、聖主親ら洪圖を天中に於て運用されるといふ事實を仰ぎ知らす樣にして貰ひたい。われは、現に濟世の志あれども、色色の都合で、鄕里を離れることが出來ず、ここに、君の行を送るにつけ、首を擧げて、萬里の遠きを望み、唯だ茫然として自失するばかりである。

【餘論】この詩の前半、卽ち起首より鹿鳴更欲レ與二賓筵一に至る二十四句は、元代に於ける科擧の大槪を述べ、殊に、李黼・泰不華の諸士が、科名に負かず、節義を全うし、後世に彪炳することを擧げて、儒術の效果を標章した處は、かの李泰伯の袁州州學記と表裏するところある樣な氣がする。それから、張士誠が有爲の人材を貢進することに及んだので、敍述井然、層層遞下。後半は、純ら張祥の事に係り、揮レ毫休レ奏醴泉頌以下は、特に之に忠告したので、謂はゆる君子は相贈るに言を以てするといふ本旨にも協つて居るし、この四句は、全篇精神の注ぐところで、措辭緊健、音節亦た昂るを覺える。最後に、我今有レ志未レ能レ往の二句は、到底、蛇足たるを免れず、むしろ、勇割に從つた方が善ささうに思はれる。

明月舟　幷引

明月舟　幷に引

秦郵呂彥行、題二所レ寓室一曰二明月舟一、蓋取下甓社湖中有二明月一之句上也。

【訓讀】秦郵の呂彥行、寓するところの室に題して明月舟といふ、蓋し、甓社湖中有二明月一の句に取るなり。

明月非レ月舟非レ舟。　明月、月に非ず、舟、舟に非ず、
問レ君乘レ之何所レ游。　君に問ふ、これに乘じて何の游ぶところ。
風多浪高偏處有。　風は多く、浪は高くして、偏處に有り、
日暮欲レ渡令二人愁一。　日暮渡らむと欲して、人をして愁へしむ。

【字解】【一】偏處有　偏はあまねし。遍處に有りといふに同じ。【二】偶似淮南住　甓社湖中有二明月一の次句、淮南草木借二光輝一とあるに本づく。【三】白苧　卽ち白紵詞、前に卷一に此題があつて、その處に

此鄕偶(二)似淮南住。　この鄕、偶ま淮南に住するに似たり、
醉客每來歌白苧。(三)　醉客每に來つて白苧を歌ふ。
夜深天黑夢神光。(四)　夜は深く、天黑くして、神光を夢む、
幾箇驚烏落高樹。　幾箇の驚烏か、高樹より落つ。
君才照(五)國不照車。　君の才、國を照らして車を照らさず、
何用高隱江湖居。　何ぞ高隱江湖に居るを用ひむ。
嗟予未識靑藜杖。(六)　嗟す、予が未だ識らず靑藜杖、
願借舟中臥讀書。　願はくは、舟中を借つて、臥して書を讀まむ。

詳述して置いた。【四】神光　題畫の項を見よ。【五】照國不照車　前に卷七、贈楊滎陽の詩中に引いて置いたが、史記田敬仲世家に「魏王、齊の威王と郊に會田す。魏王問うて曰く、王も亦た寶ありや。威王曰く、有るなし。魏王曰く、寡人の國小なるも、尙ほ徑寸の珠、車の前後各十二乘を照らすもの、十枚あり、と。威王曰く、寡人の寶と爲す所以は、王と異なれり。吾が臣に檀子・盼子・黔夫種首といふものあり、將に以て千里を照らさむとす、豈に特だ十二乘のみならむや」とある。【六】靑藜杖　劉向別傳に「向、書を天祿閣に校す、夜暗く獨坐して書を誦す。老人あり、黃衣、靑藜杖を植て、閣を叩いて入り、杖端を吹けば煙然ゆ。向と開闢以前を說く。向、因つて五行洪範の文を受け、曙に至つて去る。曰く、われは太乙の精、天帝、卯金の子に博學の者あるを聞き、下つて觀せしむ、と。乃ち竹牒天文地の書を出し、悉く以て之を授く」とある。

【通義】秦郵は、一統志に「高郵州、吳の邗溝の地、秦の秦郵、漢の高郵」とある。次に、甓社湖は、同じく一統志に「甓社湖は高郵に在り、宋の孫莘老、湖陰に家す。夜、坐して、窓明かに晝の如きを覺え、湖に循つて之を求むれば、一大珠を見る。その光、天を燭す。この年、莘老登第。黃庭堅の上外舅孫莘老の詩、甓社湖中有明月、淮南草木借光輝とある。それから、引の意味は——秦郵の人、呂彥行は、この蘇州に於ける寓室を明月舟と號して居るが、それは黃山谷の甓社湖中有明月の句に取つたのであるといふので、仍つて、この詩を作つて寄題するといふことは、言はずとも分かつて居るから、わざと省略したのである。

【詩意】君の寓齋を明月舟といふが、明月といつても月あるに非ず、舟といつても實は舟でもない。君は、その明月舟に乘じて、何處へ游びに出かける積りであるか。刻下の世は、到る處、風浪險惡、日暮、これを渡らうと思つても、心を愁へしむるばかり。君の寓せらるる處は、さながら、その故鄕たる淮南の高郵に似て居て、城中でも格別賑はしく、每每、醉客が集ひ來つて、白紵の新曲を歌つて居る。しかるに、君は、夜深く天黑き時に當りて、夢に神光天を燭らし、幾羽の烏が驚いて、宿つて居る高樹の上から落ちたのを見たとのことで、丁度、その鄕賢たる孫莘老が登第の前兆として、一大明珠を感得したと同じである。して見れば、寓居を明月舟と號したのも、まんざら來歷の無いことではない。元來、君の才は、優に一國を照らすに足るべく、決して、車、十二乘を照らす位のものではないから、天晴、廟堂の上に翱翔すべく、決して、高隱と稱して、江湖に引ッ込んで居るにも及ばない。予の如きは、もとより淺學で、まだ靑藜に杖つく太乙の精に出遇つたこともないから、願はくは、

明月舟の片隅でも拜借し、夜、臥して書を讀む間に、どうか右の仙人に遇つて、一かどの知識を授かりたいと念じて居る。

【餘論】寓齋に名づけた意味が、いやに、ひねくれて居るが、それが、却つて、構想の端緒を得ることになつたので、淮南といひ、神光といひ、極めて切實で、呂彥行その人を祭り上げて、さながら、孫莘老の後身の如くして仕舞つた。それから、結末二句は、彥行を以て暗に劉向に比し、その博聞を讚歎する意を併せて影寫したのである。

聽南康陳協律彈楚歌　南康の陳協律が楚歌を彈ずるを聽く

我聞楚客彈楚聲。　われ聞く、楚客の楚聲を彈ずるを、
(一)初絃一揮邊馬驚。　初絃一揮して、邊馬驚く。
嗚咽哀音動寒月。　嗚咽、哀音、寒月を動かし、
正如歌發漢軍營。　正に歌の漢軍の營に發するが如し。
營中一曲還漸理。　營中の一曲、還た漸く理め、
想見(二)彷徨帳中起。　想ひ見る、彷徨、帳中に起つを。
(三)美人掩泣(四)壯士悲。　美人、泣を掩うて、壯士悲み、
寶劍無光(五)黯秋水。　寶劍光なく、秋水黯し。
淒涼(六)疊弄悄欲終。　淒涼疊弄、悄として終らむと欲す、
應憐歸騎(七)阻江東。　應に憐むべし、歸騎の江東に阻まるるを。
(八)蓋世英雄竟如此。　蓋世の英雄、竟に此の如し。
遺調空留感人耳。　遺調空しく留まつて、人耳を感ず、
四座相逢今夜聽。　四座相逢うて今夜聽く。
霜風忽來庭樹零。　霜風忽ち來つて、庭樹零つ、
無言有愁倶酒醒。　言なく、愁あり、ともに酒醒む。

【字解】【一】初絃一揮　はじめて琵琶の絃を掻き拂ふ。
【二】彷徨　うろつく、さまよふ。
【三】美人　即ち虞美人。
【四】壯士　項羽を指す。
【五】黯秋水　白居易の古劍の詩に滿鋏玉匣中、秋水澄不ㇾ流とある。
【六】疊弄　長曲もつづけて彈ずる。
【七】阻江東　江東に落ち行くことを妨げられる。
【八】蓋世英雄　項羽を云ふ、その作つた垓下歌に力拔ㇾ山兮氣蓋ㇾ世とある。

【題義】一統志に「南康府は、戰國、楚に屬す」とある。協律は官名、詳しくは協律郎といひ、宮廷に召し抱へられたる伶人。その人、姓は陳、名字は不詳。この詩は、南康の生まれなる協律郎陳某が楚歌に合せて琵琶を彈ずるのを聞いて作つたのである。

【詩意】陳協律が項王垓下の一曲を彈じたが、もと楚客が楚聲に合すのであるから、まことに、お手

の物で、他に比類なく、その初めて絃を掻き拂つた時は、邊塞の馬の驚いて嘶く樣であつた。やがて、咽び入る哀音は、寒月を動かし、さながら、垓下を圍んだ漢軍の營中に於て、楚歌の聲が起つた樣であつた。その營中で唱ふる一曲が次第に調子づいて來ると、彷徨として、項王が夜起つて帳中に飲んだことを想像させる。その時、虞美人は涙を掩ひ、項羽は悲歌慷慨し、寶劍は其精を失ひ、秋水の光も黯然たるばかりであつた。淒涼たる幾曲をつづけて奏し、悄然として將に終らむとすれば、項羽の殘騎、折角、江東に落ち延びむとしたのが、路を斷れて、愈よ討死といふことに成つて、特に聽者の同情を惹いたことである。おもへば、蓋世の英雄たる項羽も、末路は此の如く、その遺調は、空しく千歳の後に存して、人耳を感せしめる。四座の人人、今夜ここに集うて、陳協律の妙曲を拜聽したが、霜を帶びたる夜の風は、颯として吹き度り、庭上には落葉繁く、誰も、彼も、愁餘あつて言葉なく、ともに、酒の自然に醒むるを嘆き侘ぶるばかりである。

【餘論】ひとしく琵琶を聽いたのであるが、前に卷八、夜飲丁侃宅聽琵琶の一首に比すれば、夐然として相及ばない。項王垓下の事實は、千歳の下、なほ人の耳目に新にして、必ずしも陳套ではないから、今少し工夫したらば善かつたらうと思はれる。要するに、作者は、興會屬せざるに、强ひて作り上げたのでもあらう、篇中生氣に乏しく、到底、讀者の視聽を動盪することが出來ずに終つたのは、まことに遺憾である。

京師苦寒

京師寒に苦む

北風怒發浮雲昏。　北風怒り發して浮雲昏く、
積陰慘慘愁乾坤。　積陰慘慘として乾坤を愁へしむ。
龍蛇蟄泥獸入穴。　龍蛇は泥に蟄し、獸は穴に入り、
怪石凍裂生皴痕。　怪石凍裂して皴痕を生ず。
臨滄觀下飛雪滿。　臨滄觀下、飛雪滿ち、
橫江渡口驚濤奔。　橫江渡口、驚濤奔る。
空山萬木盡立死。　空山の萬木、盡く立ちながら死し、
未覺陽氣回深根。　未だ覺えず、陽氣の深根に回るを。
茅檐老父坐無褐。　茅檐の老父、坐して褐なく、
舉首但望開朝暾。　首を擧げて、但だ朝暾を開くを望む。
苦寒如此豈宜客。　苦寒かくの如く、豈に客に宜しからむや、
嗟我歲晚飄羇魂。　嗟す、我が歲晚羇魂を飄すを。

【字解】【一】積陰　陰寒の氣が積る。【二】皴痕　普通、畫學上の用語であるが、梁書武帝紀に「筆を執つて寒に觸るれば、手、爲に皴裂す」とあつて、割り裂けた痕を云ふ。【三】臨滄觀　一統志に「勞勞亭は、應天府治の西南に在り、吳の時建つ、一名臨滄觀」とある。【四】橫江渡　南京の近傍に在る揚子江の渡し場、李白の橫江詞に、橫江館前津吏迎、向余東指海雲生とある。【五】回深根　木の深い根元に陽氣が入つて、生氣の勃發すること。【六】無褐　褐は短い衣。【七】開朝暾　朝日が出て時候の暖くなること。【八】飄羇魂　旅中の心魂が飄飄として落ちつかぬこと。【九】尋常　普通、人なみに。【一〇】松醪　裴研の傳奇

(九)尋常在舍信可樂。　尋常舍に在る、信に樂むべし、
牀頭每有松(一〇)醪存。　牀頭每に松醪の存するあり。
山中炭賤地(一一)爐暖。　山中炭は賤しく地爐暖く、
兒女環坐忘卑尊。　兒女環坐して、卑尊を忘る。
鳥飛亦斷況來友。　鳥の飛ぶも亦た斷ゆ、況んや來友をや、
十日不敢開衡(一二)門。　十日敢て衡門を開かず。
(一三)朅來京師每晨出。　朅來、京師、每晨出で、
强逐車馬朝天(一四)閽。　强ひて車馬を逐うて天閽に朝す。
歸時顏色黯如土。　歸る時、顏色黯きこと土の如く、
(一五)破屋暝作飢鳶蹲。　破屋暝に作す飢鳶の蹲するを。
(一六)陌頭酒價雖苦貴。　陌頭の酒價、貴きに苦むと雖も、
(一七)一斗三百誰能論。　一斗三百、誰か能く論せむ。
(一八)急呼取醉徑高臥。　急に呼んで醉を取り、徑に高臥す、

に「酒は松醪春と名づく」とある、松の花を入れて醸した濁酒であらう。【一一】地爐　地に掘り入つて造つた圍爐裏。【一二】衡門　かやぶきの門。【一三】朅來　種種の解釋もあるが、これなどは、極めて輕い意味で、ここにといふ程のこと。【一四】天閽　宮門。【一五】破屋暝作飢鳶蹲　こはれた屋根の尖端が、日暮に、鳶の蹲まつて居る樣に見えた。【一六】陌頭　市中に同じ。【一七】一斗三百　一升が三百文、杜甫の詩に、「速宜相就飲一斗酒、恰有三百靑銅錢」とある。【一八】急呼　急に買ひ取る。【一九】布被　布製の夜具。【二〇】絮薄　中に入れた綿が薄い。【二一】健兒　兵士をいふ。【二二】羌渾　舊唐書郭子儀傳に「吐蕃羌斥、勢强きこと十倍、河隴の地を蠶ね、

(一九)布被絮(二〇)薄終難溫。　布被絮薄くして、終に溫かなり難し。
却思健(二一)兒戍西北。　却つて思ふ、健兒の西北に戍するを、
千里積雪連崑崙。　千里の積雪、崑崙に連る。
河氷踏碎馬蹄熱。　河氷踏碎して、馬蹄熱し、
夜斫堅壘收羌(二二)渾。　夜、堅壘を斫つて羌渾を收む。
書生只解弄(二三)口頰。　書生、只だ口頰を弄するを解し、
無力可報朝廷恩。　力の朝廷の恩に報ゆべきなし。
不如早上乞(二四)身疏。　如かず、早く身を乞ふの疏を上り、
一蓑歸釣江南村。　一蓑、歸つて江南の村に釣らむには。

羌渾の衆を擄ふ」とあつて、羌人と吐谷渾の民とを合稱す、ともに西戎の種類。【二三】弄口頰　口の先ばかり働かす、金史王庭筠傳に「上、宰執に謂つて曰く、聞く、文士、庭筠を妒むもの多く、その文を論ぜず、顧みるに行止を以て訾となす。大抵、讀書の人は口頰多く、或は相黨すと。遂に庭筠を還して翰林修撰となす」とある。【二四】乞身疏　身の暇を乞ふ上書。

【題義】説明に及ばぬ。但し、題下の原注に洪武己酉とあるから、その二年、卽ち靑邱が都に入つた年で、その冬に作つたものであらう。
【詩意】北風怒つて吹きすさび、浮雲天を蔽うて昏く、陰寒の氣は、慘慘として積り、乾坤爲に愁ふるばかり、もとより、冬であるから、龍蛇は皆泥中に蟄し、野獸は穴に潛み、怪石も凍つて裂けた爲

に、皴痕を生ずる位。金陵で客を送る臨滄觀の邊には、飛雪地に滿ち、横江渡口には、驚濤奔るが如く、頃ろは、旅客も全く絶えて仕舞つた。空山の萬木は、皆立ち枯れとなり、陽氣が深根に入つて、生意を發生する氣色は、なかなか見えない。茅檐の貧居に爈つて居る老父は、坐するに短褐だになく、朝日が上つて天氣の暖かならむことを希望して止まない。寒氣の甚しいこと此の如くで、到底、羇客に宜しくなく、歳晩に際して、心魂の飄動するを禁じ得ぬは、まことに歎かはしいことである。これが、人並に、わが家に居たならば、まことに樂むべく、牀頭には、いつでも松の花を交ぜて釀した濁酒がある。山中では、もとより炭が廉價であつて、惜し氣も無くくべるから、圍爐裏も、極めて暖かであつて、兒女輩は、その周圍に坐つて、尊卑の別をも忘れ、至極のんきに打興じて居る。鳥の飛ぶことだに、斷えて居る位だから、友人の來訪などは、極めて稀であつて、十日の間も、かや葺の門を開くことはなかつた。然るに、今、自分は、京都に居て、毎日朝早く出かけ、强ひて車馬を逐ひかけて、宮城に入朝し、終日仕事をしてから、家に歸ると、顔色黯然として土の如く、夕ぐれ、壞れかかつた屋根の先端は、飢ゑた鳶の蹲まつて居る樣に見える。市中の酒價は、隨分高いが、一升三百錢であつた處で、誰しも、文句をいふものはなく、自分は大急ぎで買ひ取らせ、一飮して醉を成し、直に高臥するが、何分にも、布の夜具は、中に入れた綿が薄くして、どうしても暖かにならない。おもへば、兵士どもは、遙に西北の邊境を戍つて居るが、積雪は、千里の廣きに亙つて、崑崙山に連る位、鐵馬を躙らして、河氷を踏み碎けば、蹄が自然あつくなり、夜に乘じて、堅壘に斬り込んで、羌渾の蠻族どもを取り押へるに至りては、一通りの苦勞ではない。予の如きは、一介の書生、唯だ口先を弄することが出來るだけで、朝廷の洪恩に報ゆる力もなく、まことに慙愧に堪へず、早く身の暇を乞ふ上書を差出し、やがて、江南の村に歸り、一簑を著けて釣を垂れ、のどかに、餘生を送るのが至當であらう。

【餘論】起首十二句は、歳晩の苦寒を狀し、尋常在舍信可樂の六句は、故山の冬の氣分の暢氣なるを寫して、波瀾横生の妙がある。次に、塌來京師毎晨出の八句は、都の侘住居の足らぬ勝で、この折しも、愈よ堪へ難きを言ひ、却思健兒戍西北の四句は、遠征の戍客を思ひ、用筆精警、そして、一轉して、自己の身分の上に繳到し、早く歸隱したいといふことを以て收束したのである。

約諸君游范園看杏花

諸君に約して、范園に游び、杏花を看る

(一)去年春色近清明。　去年、春色清明に近し、
(二)萬匝煙花夾曉城。　萬匝の煙花、曉城を夾む。
(三)西苑相逢車馬問。　西苑相逢うて、車馬問ふ、
何人不是踏春行。　何人か是れ春を踏んで行かざらむ。

【字解】【一】清明　陰暦三月の節、陽暦では、大抵、四月の初五初六に當る。
【二】萬匝　幾重にも繞る。
【三】西苑　城西の庭園。

今年人迷去年道。　今年、人は迷ふ去年の道、

風雨不來花自掃。　風雨來らずして、花自ら掃ふ。

僧寺庭空半紫苔。　僧寺庭空しく、半ば紫苔、

侯家宅廢皆青草。　侯家の宅廢して、皆青草。

（四）縱然無主一株存。　たとひ主なくして、一株存するも、

憔悴塵沙不可論。　塵沙に憔悴して論ずべからず。

野外日斜啼鳥散。　野外、日、斜にして、啼鳥散じ、

消愁無處却消魂。　愁を消すに處なくして、却つて消魂。

（五）魏公園林芳塢下。　魏公の園林、芳塢の下、

聞有柔枝正堪把。　聞く柔枝の正に把るに堪へたるありと。

休言亂後少花看。　言ふを休めよ、亂後花を看る少し、

得到花前人亦寡。　花前に到るを得る、人亦た寡し。

明日尋君君莫違。　明日君を尋ぬ、君、違ふ莫れ、

【四】縱然　たとひと訓すべし。

【五】魏公　前に卷九、偃松行の詩中にも見えたが、宋史范仲淹傳に「紹興の初、詔して魏國公に追封す」とある。

共隨游蝶弄晴暉。（六）　共に、游蝶に隨つて、晴暉を弄せむ。

閉門夢斷江南晚。　門を閉ぢて、夢は斷ゆ江南の晚、

忍見迢迢春自歸。　見るに忍びむや迢迢として春自ら歸る。

【六】晴暉　晴れた日。

【題義】約諸君は、一に約王止仲に作つてある。范園は、蘇州府志に「雍熙寺の後に在り」と記し、前に次韻楊孟載早春見寄の詩中に引いた樓鑰の記略に「吳門の范氏、柱國麗水府君より、靈芝坊に居る、今、雍熙寺の後に在り、五世の孫文正公、この地に生長す」とあるから、范仲淹が立身せし後、その舊居を記念する爲に、花園をしつらへたものと見える。この詩は、范園に杏花を見むことを友人に約するが爲に作つたのである。

【詩意】去年、清明の節に近き頃、春色正に闌にして、幾重にも繞る煙花は、曉に城を夾むが如く、西苑の路で逢つた車馬を問へば、いづれも、春を踏んで、韶光を尋ねるといふので、まことに、賑はしいことであつた。しかし、今年は、戰亂の後の事とて、去年春を尋ねた道も、何處とも分からず、人を迷はしめ、風雨來らざるに、花は自ら掃ひ去つて、殘つて居るものもなく、僧寺の庭には、何物も存せずして、半ば紫苔に埋もれ、侯家の宅は、荒れはてて、青草のみが生ひ茂つて居る。たま たま主なきに咲き出でた一株があつても、滿目沙塵の中に憔悴して、お話にも成らぬ位。野外、日斜

なる時、啼鳥早く散じ、到る處、蕭寂の極、愁を消さうとしても、その處なく、却つて、消魂する位。ここに范文正公のしつらへた園林は、隄の下に在つて、相變らず、紅杏が見ごろであつて、その花の枝を把つて眺めるに堪へたるばかりだといふ話。されば、亂後花を看るべき處が少いとも云へないが、今日花前に至つて、春を賞するを得る人が少いのである。そこで、明日は君を尋ねて、一處に花見に往かうと思ふが、願はくは、君よ、約束を違へぬ樣にして呉れろ、さうすれば、ともに游蝶の跡を追うて、熙熙たる晴日を弄することも出來やう。門を閉ぢて蟄居し、江南の日暮、おもひ寢の夢の醒めた時、迢迢としてしづ心なく春の歸り去るは、まことに見るに忍びず、それよりも、折角かういふ處があるのだから、是非出かけたいと思ふのである。

【餘論】起首、去年と今年とを兩解に分說し、戰後の慘澹たるを云うて、徐に范園を引き出し、悠悠迫らざる筆致は、極めて面白く、野外日斜の二句、休言亂後の二句は、ともに、讀者の心魂を動盪せしめる。

南州野人爲吳邑曾令賦

南州野人、吳邑曾令の爲に賦す

(一)南州(二)沃壤惟(三)泥塗。　南州の沃壤、惟れ泥塗、

清泉(四)流渠歲不枯。　清泉は渠に流れて歲ごとに枯れず。

(五)若人抱(六)耒(七)蘄水上。　若人耒を抱く蘄水の上、

始志自比躬耕徒。　はじめ志して、自ら比す躬耕の徒。

幸逢(八)堯舜(九)可在野。　幸に堯舜に逢うて、野に在るべけむや、

起(一〇)縮(一一)墨綬來東吳。　起つて墨綬を縮して、東吳に來る。

一鞭不驅雨後犢。　一鞭、驅らず雨後の犢、

(一二)兩舃已化(一三)空中鳧。　兩舃、すでに化す空中の鳧。

郭西春朝(一四)布穀語。　郭西の春朝、布穀語り、

(一五)柔桑綠雲連太湖。　柔桑綠雲、太湖に連る。

下車殷勤告父老。　車を下つて、殷勤、父老に告ぐ、

勸耕爲汝(一六)犂先扶。　耕を勸めて、汝の爲に、犂、先づ扶く。

我本野人偶叨祿。　われ本と野人、偶ま祿を叨りにす、

向汝未忍施(一七)蒲鞭。　汝に向つて、未だ蒲鞭を施すに忍びず。

(一八)五風十雨和氣應。　五風十雨、和氣應ず、

【字解】【一】南州 吳地、即ち蘇州を指す。【二】沃壤 肥沃なる土壤。【三】泥塗 書經の禹貢に「荊州、厥土惟れ塗泥」とある。【四】流渠 溝渠の中を流れる。【五】若人 かくの如き人、即ち斯人の義。【六】抱耒 耒は鋤。【七】蘄水 一統志に「蘄州の北に在り、源を大浮山に發し、西流して赤東湖に入る」とある。【八】逢堯舜 明天子の御世に遇ふ。【九】可在野 野に在るべけむやと反語に讀むべし。【一〇】縮 つかれる。【一一】墨綬 邑宰の印綬は黑色なるが故に云ふ、漢官儀に「邑宰は銅章墨綬、秩六百石」とあり、方干の詩に「腰懸二黑綬一三年外」とある。【一二】兩舃 雙方の靴足袋。【一三】空中鳧 前に卷九、洞庭山の詩中にも引いたが、後漢書王喬傳に「喬、葉の令となる、神術あり、毎月朔望、臺朝に至る。帝、その來る數ばなるを疑ひ、密に太史を

勿遣寸土生蒿萊（一九）。　寸土をして蒿萊を生ぜしむる勿れ。

太平村落雞犬靜。　太平の村落、雞犬靜に、

（二〇）社飲自足歡妻孥。　社飲、自ら妻孥を歡ばすに足れり。

但當相率了官務。　但だ當に相率ゐて、官務を了すべく、

莫勞縣吏來催（二一）租。　縣吏を勞して、來つて租を催さしむる

民言此令善敎我。　民は言ふ、この令、善く我に敎ふと、

斗酒相壽歌嗚嗚。　斗酒相壽して、歌嗚嗚たり。　莫れ。

共問野人竟誰是。　ともに問ふ、野人竟に誰か是れなる、

（二二）堂中鳴琴賢大夫。　堂中琴を鳴らす賢大夫。

して之を伺はしむ。雙鳥あり、東南より飛び來る、網を擧げて、これを張り、鳥を得れば、乃ち賜ふところの尙書官屬の履なり」とある。【一四】布穀　鳥の名。春、この鳥が鳴けば、初めて穀の種を下すといふ處から名づけた。鳲鳩、和名ふふどり。【一五】柔桑　新に芽を出した桑の樹。【一六】犂先扶　第一に、犂を手にする。【一七】施蒲鞭　後漢書劉寬傳に「三郡に典歷す、溫仁多恕、吏人過あるも、但だ蒲鞭を用ひて、辱を示すのみ」とある。蒲の穗を聚めて造つた鞭で、敲かれても痛くない。

【一八】五風十雨　王充の論衡に「太平の世、五日に一風、十日に一雨」とある。【一九】蒿萊　雜草をいふ。【二〇】社飲　社は土地の神で、村の鎭守に成つて居る。春秋に祭を爲し、その時、老少相集まつて會飮する。【二一】催租　租稅の催促をする。【二二】堂中鳴琴　前に次二韻楊孟載早春見ㇾ寄の詩中、琴堂の項に引いたが、孔子の弟子の宓子賤が單父の宰となり、琴を鳴らして堂を下らず、それで、單父が善く治まつたといふことを用ひたのである。

【題意】　姑蘇志に「曾翿は、蘄州の人、洪武五年任ず」とある。曾翿は南州野人と號せしに因り、靑邱は、その依賴に應じて、この詩を作つたのである。

【詩意】　南州たる我が東吳は、『地味肥沃、もと泥塗で出來て居て、溝渠の中を流れる淸泉は、年を經ても、枯れざるに因り、灌漑が善く行き屆いて、何を作つても善く出來る。ここに曾君は、蘄水の邊に居り、鋤を抱いて、躬から耕して衣食する積りであつたが、幸にも、堯舜に比すべき聖天子の御世に逢ひ、引ッ込んで野に居るのは、本意でないといふので、起つて、邑宰に任せられ、墨綬を束ねて、この東吳に著任された。そこで、鞭を振つて、雨後に小牛を驅り立てることもなく、兩方の履が鳧に化して、空中を飛行したといふ古しへの王喬と同じ身分になられた。郭西の春の朝、布穀は、頻りに囀り、桑の若芽は、綠雲の如く、遠く太湖に連つて居る。この時しも、車を下り、丁寧に古老輩に挨拶して、農耕を獎勵し、汝等の爲には、犂を手にするをも厭はぬ、われは、元と野人、偶然にも、俸祿を頂戴したものであつて、汝に向つては、蒲鞭をだに施すに忍びない、どうか、その積りで、いづれも業務を怠らぬ樣にして呉れろといはれた。刻下太平の世に際し、五日に一風、十日に一雨といふ樣に、陰陽相調ひ、和氣これに應じて居るから、寸土にも雜草を生じさせてはならぬ。隨處の村落は、長閑にして、雞犬の聲、靜に聞こえ、社日の會飮は、殊に賑はしく、妻子眷屬まで、歡んで居る。期するところは、相率ゐて官に對する義務を完うすることで、縣吏をして、態態來つて、租稅の催促をさせてはならぬ。管內の人民は、曾君の德を稱讚し、この縣令は、まことに善く自分達に敎へて呉れた

といひ、斗酒を傾けて、その多幸ならむことを祝し、はては、嗚嗚として、濁聲に歌を唱へて居る。して見れば、野人と名乘るは誰か、堂中に琴を鳴らして、かの宓子賤の如く、その領內を善く治めた賢大夫で、卽ち我が曾君である。

【餘論】曾令の出身より、東吳に邑宰となり、殊に農を勸めた事蹟を敍し、措辭は平正ではあるが、遺憾なく、その裏情に立ち入つて、詳しく敍述して居る。郭西春朝の二句は、村舍の光景、視るが如く、太平村落雞犬靜の四句は、宛然たる模範村の實況で、一誦、その快を覺えしめる。

欲訪李孝廉至斐江遇風而回

李孝廉を訪はむと欲して斐江に至り、風に遇ひて回る

船頭曉日浮江面。　船頭の曉日、江面に浮び、
東望靑山是斐縣。　東、靑山を望む、是れ斐縣。
尋君此去愛潮平。　君を尋ねむとし、此を去つて潮の平かなるを愛す。
出浦那知風色變。　浦を出でて、那ぞ知らむ風色の變ずるを。
煙雲翕忽波浪湧。　煙雲翕忽として波浪湧き、

【字解】【一】風色　風模樣。
【二】翕忽　急なる貌。

咫尺漁村已難見。　咫尺漁村、すでに見難し。
高樹巢傾鸛鶻愁。　高樹巢傾いて鸛鶻愁へ、
深潭窟陟鼉龍戰。　深潭窟陟つて、鼉龍戰ふ。
舟師振柁苦無力。　舟師柁を振つて力なきに苦む、
帆勢如蓬幾飄轉。　帆勢蓬の如く、幾たびか飄轉。
中流不進却歸來。　中流進まず、却つて歸り來る、
握手何由遂初願。　手を握つて、何に由つて初願を遂げむ。
人生會合應有時。　人生の會合、應に時あるべし、
天意茫茫吾敢怨。　天意茫茫、吾、敢て怨まむや。

【三】鸛鶻　鸛は鸛の鳥、鶻は隼だか。
【四】窟陟　穴から這ひ出す。
【五】鼉龍　鼉は大鼈。
【六】振柁　舵をひねつて、舟の方向をかへる、杜甫の詩に長年三老遙憐汝、振柁開頭捷有神とある。
【七】如蓬　蓬の穗の如く輕い。
【八】遂初願　最初の希望を遂げる。

【題義】說明を要せぬ。但し李孝廉の名字閱歷は不詳。

【詩意】船頭にさし上つた朝日の影は、江面に浮び、東望すれば、斐縣の靑山が見える。この時、予は、君を尋ねむが爲に、潮の平かなるに乘り出し、先づ善い安排だと思つて居た處が、入江を離れると、風模樣の變じたのは、全く豫想外であつた。かくて、雲煙は急に飛び移り、波浪は水心に湧き、咫

尺の處に在る漁村だに最早見え難くなり、高い木の頂なる巢は傾いて、落ちさうなので、鸛鶴頻りに愁へ叫び、深潭の底なる穴から這ひ出して、大黿と龍とは、戰を爲すを疑ふばかり。そこで、舟人は、あわてて、舵をひねつて方向を轉ぜむとしたが、何分、力が足らないので、思ふ樣に成らず、帆は蓬の穗の如く輕く、幾たびも飄轉した。止むなく、中流にも達せずして、空しく引きかへし、君と手を握るといふ初志を遂げなかつたのは、まことに殘念至極。但し、人生の會合は、自然その時があらうから、天意茫茫、料り知り難しとも、吾は、決して怨むことはない。

【餘論】實際の出來事を詠出したのであるが、平淺凡近に失して、あんまり面白いとも思はれない。

寒夜泛湖至東舍

寒夜、湖に泛んで東舍に至る

漁村港頭初月上。　漁村港頭、初月上り、
鵞鴨不收菰荻響。　鵞鴨收めずして、菰荻響く。
隔湖煙寺遠鐘來。　湖を隔つるの煙寺、遠鐘來り、
居人盡歸吾獨往。　居人盡く歸つて、吾、ひとり往く。
寒風蕭蕭寒浪生。　寒風蕭蕭として寒浪生じ、
舟中欠載酒壺行。　舟中、酒壺を載せて行くことを欠く。
東家未宿如相待。　東家未だ宿せず、相待つが如し、
黃葉青燈機杼鳴。　黃葉青燈、機杼鳴る。

【字解】【一】港頭　港は入江。【二】初月　三日月の如き細き月。【三】未宿　まだ睡に就かない。

【題義】說明を要せぬ。但し、東舍は湖東に在る別宅であらう。

【詩意】漁村の入江には、細い三日月が上り、家鴨などは、その儘、取り收めず、眞菰や荻の葉は、颯颯として、響いて居る。湖水の對岸には、煙の中に寺があつて、鐘聲は遙遙として聞こえ、居人は、盡く其家に歸つて仕舞つたが、われのみは、この時しも、獨りで出かけたのである。湖上には、寒風蕭蕭として寒浪を生じ、船中に酒壺を載せて來なかつたのは、まことに手ぬかりで、後悔しても追ツ付かない。わが東家の者どもは、この時、まだ睡らず、さながら、われを待つて居ると見えて、黃葉深き處、燈火一穗青く、機織る杼の音が、ありありと聞こえる。

【餘論】この詩は、敍景の小品として、聊か面白いが、未宿の二字は穩妥を缺いて居るし、夜だのに黃葉といふ樣な色部の字を點出したのは、どうも、ふさはしくない。

京師午日、有懷彥正幼文

京師午日、彥正・幼文を懷ふあり

去年歸鄉過重午。（一）　去年、鄉に歸つて重午を過ぐ、
柳雨莎風滿南浦。（二）　柳雨莎風、南浦に滿つ。
白蓮閣上與君吟。（三）　白蓮閣上、君と吟じ、
遙憶徐君隔淮楚。（四）　遙に憶ふ、徐君の淮楚を隔つるを。
今年風雨又端陽。（五）　今年風雨、又端陽、
却在秦淮憶故鄉。（六）　却つて、秦淮に在つて、故鄉を憶ふ。
徐君已歸若相見。　徐君、すでに歸つて、もし相見なば、
應言前事一凄涼。　應に前事を言うて、一に凄涼たるべし。
客愁欲斷翻長笑。　客愁、斷えむと欲して、翻つて長笑、
人事推遷古難料。　人事の推遷、古しへ料り難し。
明年未省又何之。（七）　明年、未だ省みず、又何にか之く、
一杯且聽江南調。　一杯且らく聽かむ、江南の調。

【字解】【一】重午　午は五と音通。重五と同じく、卽ち五月五日。【二】莎風　莎は溼地に生ずる草。【三】白蓮閣　金檀注には之を缺いて居るが、白蓮寺の高閣で、蘇州に在り、前にも見えて居た。【四】淮楚　淮は淮水附近の地。【五】端陽　卽ち端午。【六】秦淮　晉陽秋に「秦の始皇、東游す。望氣の者云ふ、五百年後、金陵に天子の氣あらむ、と。ここに於て、始皇、方山に於て流を掘り、西江に入る、俗、號して秦淮といふ」とある。この時、靑邱は、南京に居た故に云ふ。【七】未省　未だ知らずといふ義。

【題義】この詩は、洪武二年五月五日、南京に居て、彥正・幼文の二友を寄懷したのである。彥正は、姓は杜、名は分からぬ。そして、幼文は、徐賁の字である。

【詩意】去年は、鄉里に歸つて居て、端午に遇ひ、南浦の風雨、柳を吹き、莎草を溼す時しも、彥正君と共に、白蓮閣に上つて高吟し、はるかに、徐君が淮楚を隔てて遠地に客たるを憶うて、情に勝へられなかつた。今年の端午も、又ぞろ風雨、われは、南京の片ほとりなる秦淮に居て、故鄉を憶つて居る。もし、徐君が旅から歸つて來て、彥正君に遇つたらば、彥正君は、去年の今日の事を言ひ出して、凄涼の想に堪へぬことであらう。われは、わづかに客愁を拂ひのけて、翻つて長笑するので、人事の推遷は、古しへより料り知られぬものとしてある。明年の今日は、又しても何處に往つて居るか、もとより豫察することが出來ず、何は兎もあれ、一杯を傾けて、しばらく、江南の調子の歌でも聞くほかはない。

【餘論】今昔を低徊して、聊か情緖の纏綿たるを覺えるが、落想も陳套であるし、措辭も淺近であつて、これでは、小家數の作に過ぎぬといはれても仕方がない。

鴫捕魚

鴫、魚を捕る

秋江水冷無人渡。　秋江、水冷かにして人の渡るなく、〳〵

【字解】【一】銜得　口にくはへ

羣鷗忍飢愁日暮。　羣鷗、飢を忍んで日暮を愁ふ。

白頭來往似漁翁。　白頭來往して、漁翁に似たり、

心思捕魚江水中。　心に思ふ、魚を江水の中に捕へむことを。

眼明見魚深出水。　眼明かに、魚の深く水を出づるを見、

復恐魚驚隱蘆葦。　復た恐る、魚の驚いて蘆葦に隱るるを。

須臾銜得上平沙。　須臾にして銜み得て、平沙に上り、

鱗鬣半呑猶見尾。　鱗鬣半ば呑んで、猶ほ尾を見る。

江魚食盡身不肥。　江魚食ひ盡すも、身肥えず、

平生求飽苦多饑。　平生飽くことを求めて、饑多きに苦む。

却猜人少忘機者。　却つて、人に忘機の者少きを猜み、

海上相逢不飛下。　海上相逢うて飛び下らざるを。

【語義】　説明に及ばぬ。

【詩意】　秋江の水冷かに滿ち湛へて、人の渡るものなく、羣る鷗どもは、飢を忍んで、日暮になりかかり、白頭にして往來する樣は、漁翁の如く、心の中では、どうかして、魚を江水の中に捕へたいと思つて居る。魚が深い水底から出て來ると、鷗は、目敏くも、直に之を認めるが、魚が驚いて、蘆間に隱れることを氣遣つて、あくまで、落ち附いて、覗つて居る。しばらくして、愈よ魚を口にくはへると、岸邊の平沙に上り、鱗や鰭のある胴體を半ば呑み込んだが、尾だけは、まだ口の外にはみ出して居る。鷗にして、江中の魚を食ひ盡すとも、決して、その身は、肥えないので、その性、あくまで貪慾、飽くことを求めて、その爲に飢ゑ通しである。その癖、人に忘機の者少きを忌み嫌うて、海上で逢つても、故らに高く飛んで、なかなか下りて來ないのは、如何したものか。

【餘論】　結二句は、全篇趣旨の在るところで、畫龍點睛の妙があるが、その前の十句は、相變らず平凡である。

ろ。【三】相逢不飛下　前に卷八、至吳松江の詩中に引いて置いたが、列子に「海上の人、鷗を好むもの、毎旦、海上に之き、鷗鳥に從つて游ぶ。鷗鳥の至るもの、百數。その父曰く、吾聞く、鷗鳥、皆汝に從つて游ぶと。取り來れ、吾、これを玩ばむと。明日、海上に之く、鷗鳥舞うて下らず」とある。

泉南兩義士歌

泉南兩義士の歌

泉南兩士陳與孫。　泉南の兩士、陳と孫と、

少小相約爲弟昆。　少小相約して弟昆となる。

合疏成戚契誼重。　疏を合して戚と成し、契誼重く、

【字解】【一】泉南　泉州の南。【二】陳與孫　陳寶生と孫天富、その詳は題義の條を見よ。【三】弟昆　弟兄に同じ。【四】合疏成戚　疏遠

異木纏結如同根。　異木纏結して、同根の如し。
升堂握手出肺腑。　堂に升り、手を握つて、肺腑を出し、
交拜二母（六）開罍樽（七）。　交も二母を拜して、罍樽を開く。
具舟期賈（八）海外域。　舟を具へ、賈を期す、海外の域、
欲度夷貊（九）窮崑崙。　夷貊を度つて崑崙を窮めむと欲す。
滄溟東望浸天爛。　滄溟、東に望めば、天を浸して爛たり、
颶風怒攪波濤渾。　颶風、怒つて波濤を攪して渾る。
天吳（一〇）恍惚出怖客。　天吳恍惚、出でて客を怖れしめ、
掀舞鮫鰐飛鵬鵾（一一）。　鮫鰐を掀舞して、鵬鵾を飛ばす。
孫言陳宗（一二）惟子在。　孫は言ふ、陳宗、惟だ子のみあり、
遠涉巨險吾宜奔。　遠く巨險を涉るは、吾、宜しく奔るべし。
汝親頭白倚門（一三）切。　汝の親、頭白く、門に倚ること切、
愼勿輕去違晨昏（一四）。　愼んで輕しく去つて晨昏に違ふ勿れと。

なりしを合せて、姻戚同樣の者にする。【五】契誼　心契交誼。【六】二母　兩家の老母。【七】罍樽　罍も酒を容るる器。【八】期賈　賈は取引。【九】夷貊　夷は東夷、貊は南方の蠻地。說文に「貊鞮を蠻夷と爲すなり」とある。【一〇】天吳　水神、山海經に「朝陽の谷、神あり、天吳といふ、これを水伯となす、その獸たるや、人面八首八足、皆青黃」とある。【一一】鵬鵾　鵾は雞の一種、とうまるといふ。これを鵬と合稱するのは不倫で、矢張、鯤の方が來歷もあつて宜しからうと思ふ。【一二】陳宗　陳氏の宗族。【一三】倚門　相待つをいふ。【一四】晨昏　朝夕親を見舞ふ。【一五】更往　かはるがはる、即ち更番に出かける。【一六】挂席　帆をかける。【一七】扶桑暾

相讓不得乃更往（一五）。　相讓つて得ず、乃ち更る往く、
挂席（一六）遙指扶桑暾（一七）。　席を挂けて、遙に指す扶桑の暾。
望山行覓島中國。　山を望んで行く、覓む、島中の國、
卉服（一八）通譯侏離（一九）言。　卉服通譯す侏離の言。
尋煙暮投薜荔屋（二〇）。　煙を尋ねて暮に投ず薜荔の屋、
趁墟（二一）晝集桄榔村（二二）。　墟を趁うて晝は集まる桄榔の村。
踰年還家喜得寶。　年を踰えて家に還り、寶を得たるを喜ぶ、
木難（二三）火齊（二四）幷瑤琨（二五）。　木難火齊、幷せて瑤琨。
探囊用取兩不較（二六）。　囊を探つて用取し、兩つながら較べず、
屑屑彼我誰復論。　屑屑として、彼我、誰か復た論せむ。
急難相援誓終始。　急難相援けて終始を誓ひ、
歲時燕慶（二七）烹羔豚（二八）。　歲時、燕慶、羔豚を烹る。
義風久已動殊俗（二九）。　義風久しく、すでに、殊俗を動かす、

暾は朝日、日は扶桑より出でて咸池に浴する。【一八】卉服　書經に、「島夷卉服」とあり、拾遺記に「盧扶國、草を結んで衣と爲す、これを卉服といふ」とある。【一九】侏離　後漢書南蠻傳に「衣裳斑闌、語言侏離」とある。【二〇】薜荔屋　屈原の離騷に「貫薜荔之落蘂」とあつて、その注に「香草なり」とあるが、ここでは、薜は藟、荔は荔枝、柳宗元の詩に密雨斜侵薜荔牆とあるに同じ。【二一】趁墟　南部新書に「端州以南、三日一市、これを趁墟といふ」とある。【二二】桄榔　くろつげ、皮に毛があつて棕櫚に似たる一種の木。材質甚だ剛、皮中に麪の如き屑末があつて食べられる。後漢書夜郎傳に「句町に桄榔木あり、麪と爲すべし、百姓

(三〇)椎髻相見知㆓欽尊㆒。　椎髻相見て欽尊を知る。
我聞同氣(三一)有㆑爭㆑利。　われ聞く、同氣も利を爭ふあり、
鬩(三二)㆑牆往往躙(三三)㆓家門㆒。　牆に鬩いで、往往、家門を躙ると。
又看結交許(三四)㆓歲晚㆒。　又看る、結交、歲晚を許し、
盟(三五)盤未㆑撤渝㆓情恩㆒。　盟盤未だ撤せずして、情恩を渝ふ。
管(三六)鮑居㆑貧乃共濟。　管鮑、貧に居て、乃ち共に濟ひ、
餘(三七)耳得㆑勢終相吞。　餘耳、勢を得て、終に相吞む。
若㆓茲二子㆒古亦少。　この二子の若きは、古しへ亦た少く、
簡(三八)牘可㆑使㆓他年存㆒。　簡牘、他年に存せしむべし。
作㆑歌爲繼王子傳(三九)。　歌を作つて爲に繼ぐ王子の傳、
薄(四〇)俗視㆑此應㆑堪㆑敎。　薄俗、これを視て、應に敎くするに堪ふるなるべし。

これに貴す」とある。【二三】木難　碧玉の一種、南越志に「木難は、金翅鳥の沫の成すところ、碧色の珠なり、大秦國、これを珍とす」とあり、曹植の詩に「珊瑚間㆓木難㆒」とある。【二四】火齊　雲母の類、衰字記に、「天竺に火齊あり、雲母の如くして色紫、これを裂けば、薄きこと蟬翼の如く、これを積めば、紗縠の重きが如し」とあり、班固の西都賦に、「翡翠火齊、流耀含英」とある。【二五】琘琨　書經の禹貢の傳に「琘琨は皆美玉」とある。【二六】兩不較　兩人ともに碌碌勘定をしない。【二七】燕談　燕は宴に同じ。時時、高宴を張つて互に親する。【二八】羔豚　羔は小羊。【二九】殊俗　遠地の異なりたる風俗。【三〇】椎髻　椎は鐵椎の椎、即ちさい槌。髻を束ねて椎の形にする、さいづちまげ。王充論衡に「趙王趙佗、南夷の俗に化し、椎髻箕坐、これを好むこと、性の若し、陸賈の說を聞くに及びて、椎髻箕坐、これを惡むこと、性の若し、亦た敎に在

るなり」とある。【三一】同氣　兄弟をいふ。【三二】鬩牆　兄弟牆に鬩ぐ、內輪喧譁をする。【三三】躙家門　躙はやぶる。【三四】許歲晚　しまひまでも變らぬ。【三五】盟盤未撤　盟を爲す時に獻る血を盛つた盤を取り退けざる間、周禮天官玉府に「もし、諸侯を合すれば、珠槃玉敦を共にす」とある。【三六】管鮑　史記管晏列傳に「管仲曰く、吾、はじめ困む時、かつて鮑叔と賈し、財利を分ち、多く自ら與ふ、鮑叔、我を以て貪れりと爲さず、我が貧を知ればなり」とある。【三七】餘耳　陳餘と張耳。史記張耳陳餘列傳に「餘、年少にして耳に父事し、兩人相與に刎頸の交を爲す。後相怨む。陳餘及び齊王田榮、楚に畔いて常山を襲ふ、張耳、敗れて漢に走る。漢の二年、東、楚を擊たむとし、使をして趙に告げしめ、與に俱にせむと欲す。陳餘曰く、張耳を殺さば、乃ち從はむ、と。ここに于て、漢王、人の張耳に類するものを求めて之を斬り、その頭を持して陳餘に遺る。餘、乃ち兵を遣して漢を助く。漢の彭城の西に敗るるや、陳餘、亦張耳の死せざるを覺り、即ち漢に背く。漢の三年、張耳を遣し、韓信と趙の井陘を擊破し、陳餘を泜水の上に斬る」とある。【三八】簡牘　文書の義。【三九】王子傳　王彝の作つた泉州兩義士傳、その全文は、題義の項に引抄する。【四〇】薄俗　情誼に薄き末世の風俗。

【題義】王彝の泉南兩義士傳に「孫天富・陳寶生は、皆泉州の人なり、外沈毅にして內含弘、寶生、性更に明秀。然れども、皆義を爲すに勇。はじめ、寶生、幼にして孤なり。天富、これと約して兄弟となり、乃ち共に貨泉を出して海賈を外國に爲すを謀る。天富曰く、爾の母は一子、唯だ爾のみ、吾、爾が爾の母に遠ざかるに忍びず。海を涉つて異域に往くは、吾、其れ子に代つて行かむ哉、と。寶生曰く、吾が母は即ち若の母なり。吾、もし吾が母に遠ざからば、惟だ君以て母と爲せ、吾が行、又何ぞ憂へむ、と。ここに于て、兩人相讓り、久しうして乃ち更る相去留し、或は稍く相輔けて以て往く。十年に至つて、百貨すでに集まり、猶ほ其子本を稽せず、兩人亦た彼此一錢を私せず。その涉るところ

の異國、高句麗より外、闍婆・羅斛と夫の東南諸夷の若き、中國を去る、無慮數十萬里。この兩人は皆異姓なり、長は兄たり、少は弟たり、同氣の如く然り。異國人、皆見て之を信じて曰く、かの兄もしくは弟、同胞の者に非ず、吾が同胞、宜しく如何にすべき、と。異國、因つて、この兩人を號するものあり、これを譯せば泉州兩義士といふなり。中國の賢士大夫、これを聞くもの、亦た皆以て然りと爲すと云ふ。天富、字は惟義。寶生、字は彥謙。今吳の太倉に居り、方に窮を周ねくし難を援くるを以て務となす」とあつて、その本末は詳にされて居るので、青邱の詩は、純ら材を此文に取つたのである。なほ闍婆は、卽ち今の瓜哇であることは、言ふまでもない。

【詩意】泉州の南に陳寶生・孫天富といふ二人があつて、少小の時より、相約して兄弟となつた。もと疏遠なるものを合せて姻戚同樣にしたので、その心契交誼の重きことは、言ふにも及ばず、異木も互に纏ひ付いて結合すれば、さながら、同根より生じた樣である。そこで、堂に上り、親しげに手を握り合ひ、肺肝をさらけ出して、堅く誓ひ、かはるがはる、兩家の母を拜し、その前に酒樽を開いて宴を爲した。やがて、相談した結果、舟を用意し、海外に往つて貿易を爲し、東夷南僰を度つて、崑崙と稱する南洋を窮めたいと思つて居た。ここに、東、滄溟を望めば、積水天を浸して、爛然と見え、颶風は不時に至り、波濤を攪き亂して濁らしめ、海神の天吳は、彷彿出現して客を怖れしめ、鮫鰐も卷き上げられ、鵾鵬も吹き飛ばされる。すると、孫天富が云ふには、陳家の一族では、唯だ汝が居るだけで、まことに大事な人である。遠く海中の險難を涉ることは、吾こそ走り行くべきである。汝の母親は、髮も白く、門に倚つて、切に汝の歸るを待つことに成らうから、注意して、輕しく去つて、晨夕定省の禮に違はぬ樣にするが善からうといひ、互に讓り合つて、はてしが付かず、止むを得ず、かはるがはる出かけることになり、帆を擧げて、朝日の出るといふ扶桑の方を遙に指して拔錨した。行き行きて、海上に山を望み、とある島に往つて見ると、草を纏うて居る卉服の民ばかり、言葉は侏離で分からず、通譯を借りて、やつと用を辨ずる位。立ちこむる煙中に尋ね入つて、暮には、蘿や荔枝の絡み付いて居る小屋に投宿し、市場が開けるといふので、晝は黑木楊の生ひ茂れる村に打集ひ、その見るところ、一として珍らしからぬものはない。航海年餘にして家に歸れば、その間に得たる珍寶は、碧珠・雲母、幷に美玉の類、なかなか數へ切れない。それを兩人が囊を探つて取り出し、勝手に使用して、碌碌勘定もせず、これは彼の物、我が物といつて、一一こせこせと所有權を爭ふ樣なことはしなかつた。急難の場合には相援けて、終始渝らず、然るべき折折には、高宴を催し、小羊や豚を烹て、大振舞をする。二人の義風は、すでに久しく殊俗の蠻夷を感動せしめ、さいづち髻の者でさへも、これに遇へば、欽仰尊敬することを知つて居る。元來、兄弟でさへ、區區の利を爭ひ、牆に鬩いで、內輪喧譁をなし、往往にして、家門を敗るものもあるし、又交を結んで、しまひまでも變せぬといひつつ、盟の歃血を取り退けない內から、早くも交誼恩情を渝へて、仲違ひをするものも見

受けられる。むかし、管仲・鮑叔が貧賤の中に居つて、互に助け合つたのは、まことに頼母しいが、張耳・陳餘は、一朝勢を得ると、互に併呑せむとして敵視する樣に成つて仕舞つた。それから見ると、孫陳二子の如きは、むかしでも、その例、極めて少く、宜しく、文書に載せて、後年に傳ふべきものである。そこで、予は、歌を作つて、王彝の作つた本傳に繼いだので、剡下澆季の世の人が之を視たならば、少しは薄俗を敦くすることも出來やうと思つたからである。

【餘論】この詩は、專ら王彝の本傳を沿襲し、その兩兩相俟つべきは、長恨歌の歌傳に於けると一般、靑邱は成るべく、事實を詩化せむと企てたが、唯だ局部に止まり、全然、新なる結構を試むるに及ばなかつた。我聞以下の十句は、論贊的に加へたものであるが、これとても、平正穩健といふだけで、到底、道學者流の口吻を免れぬ樣である。

姚烈婦

姚烈婦

城頭黑雲如壞屋。 城頭の黑雲、壞屋の如く、
車走爭門折千軸。 車走つて、門を爭ひ、千軸を折る。
姚家新婦亦東逃。 姚家の新婦、亦た東に逃れ、
舅姑驚惶兒女嗥。 舅姑は驚惶して兒女は嗥ぶ。
自知數口難俱免。 自ら知る、數口、ともに免れ難きを、
欲渡前溪舟尚遠。 前溪を渡らむと欲するも、舟尚は遠し。
囑夫棄妾當奉親。 夫に囑す、妾を棄てて當に親を奉ずべしと、
獨赴淸流不愛身。 獨り淸流に赴いて身を愛ます。
此日誰能問南史。 この日、誰か能く南史に問はむ、
如婦曾書幾人死。 婦の如き、かつて書して幾人か死す。

【字解】【一】黑雲如壞屋 文獻通考の象緯に「雲氣或は雲、闕垣の如く、壞屋の如きは、皆敗軍の氣たり」とある。【二】折千軸 史記田單列傳に「燕、長驅して齊を平らげしむ。而して、田單、安平に走る。その宗人をして、盡く車軸の末を斷つて鐵籠を傅けしむ。すでにして、燕軍、安平を攻め、城壞る。齊人、走つて塗を爭ひ、轊折れ車敗るるを以て、燕軍に虜にせらる。唯だ田單の宗人、鐵籠の故を以て脱するを得たり」とある。【三】兒女嗥 嗥は嗥き叫ぶ。【四】數口 數人の家族。【五】問南史 左傳に「太史書して曰く、崔杼その君を弑す、と。崔子、これを殺す。その弟、嗣いで書す、而して、死するもの二人。その弟又書す、乃ち之を舍す、南史氏、太史の盡く死せしを聞き、簡を執つて往く。すでに書したり、乃ち還る」とある。

【語義】姚烈婦、一に節婦吟に作り、元末騷亂の際の一事實を詠出したのである。

【詩意】城頭の黑雲は、壞れた家屋の樣な形をして、まさしく敗軍の兆である。果然、城陷り、城中の人民は、先を爭つて逃げ出したが、羣る車は城門につかへ、軸を折つて、進退ここに谷まり、やがて、虜に成つたものは、何千人といふ位。姚家の新婦も、亦た東の方に逃げ出したが、舅姑は驚き惶て、兒女は泣き叫び、それが足手まといに成つて、思ふ樣に逃げられない。新婦は、數人の家族が打

揃つて難を免れることは、到底六つかしいと思ひ、殊に溪水の邊に行くと、舟は遠く前岸に在つて、なかなか此方に寄つて來ない。そこで、夫に依囑し、妾を棄てて、無事に舅姑の御伴をしなさいといつて、ひとり清流に投じて死し、決して、その身を惜まなかつた。かうなると、丁度、賊が節婦を殺したのも同然、史官は、屹度さう書いたであらうが、その爲に、賊に殺された史官は、幾人あつたらう。誰か、その事を跡からかけつけた南史に問ふであらうか。何にせよ、賊は、随分ひどい事をしたものである。

【餘論】敍事は簡明精到、流石に練熟したものである。結末、南史を引いたのは、一寸面白いが、迂濶にして事情に遠いといふ譏を免れぬことと思ふ。

立秋前三日過周南飲雷雨大作醉後走筆書壁間

立秋前三日、周南を過ぎて飲む、雷雨大に作る、醉後、筆を走らせて壁間に書す

(一)周郎乃是同鄉友。　周郎、乃ち是れ同鄉の友、
亂後相逢驚老醜(二)。　亂後相逢うて老醜に驚く。
日斜邀我話舊游。　日斜に、我を邀へて、舊游を話し、
爲喚金陵白門(三)酒。　爲に喚ぶ金陵白門の酒。
一杯乍解羇旅顏。　一杯、乍ち解く羇旅の顏、
兩杯漸沃黏(四)吟口。　兩杯、漸く沃いで吟口に黏す。
三杯不覺已陶然。　三杯覺えず、すでに陶然たるを、
此身竟到無何有(五)。　この身、竟に到る無何有。
青天俄忽震霹靂(六)。　青天俄忽、霹靂を震ひ、
白浪翻江怒蛟吼。　白浪、江を翻して怒蛟吼ゆ。
急雨爭鳴池上荷。　急雨、爭つて鳴る池上の荷、
狂風已折門前柳。　狂風、すでに折る門前の柳。
醉中相對正坐忘(七)。　醉中相對して正に坐忘、
(八)匕箸何須驚落手。　匕箸、何ぞ須ひむ、驚いて手より落すを。
家人喧呼水入戶。　家人喧呼す、水、戶に入ると、
(九)顚倒屋茅隨地走。　顚倒屋茅、地に隨つて走る。

【字解】【一】周郎　即ち周南。【二】老醜　ふけて醜くなつた。杜甫の詩に、豈惟長兒童、自覺成老醜とある。【三】白門　即ち白下、前に卷九、送王季廉の詩中、白門酒香還可踰の條に解して置いた。【四】黏吟口　詩を吟ずる口に粘ばり付く。【五】無何有　莊子に「今、子、大樹あり、何ぞ、之を無何有の鄕、廣莫の野に樹てざる」とある。【六】霹靂　雷が鳴り出す。【七】坐忘　莊子に「顏回曰く、回、坐忘せり。仲尼曰く、何をか坐忘と爲す。回曰く、支體を墮し、聰明を黜け、形を離れ、知を去り、大通に同ず、これを坐忘といふ」とある。【八】匕箸　蜀志先主傳に「曹公、從容として先主に謂つて曰く、今、天下の英雄、惟だ使君と操とのみと。先主、方に食して匕箸を失ふ」とあり、華陽國志に「時に正に雷の震ふに當る、備、因つて操に謂つて曰く、聖人云ふ、迅雷風烈必ず變ず、と。良に以ある

(一〇)牀牀避漏且莫歎。　牀牀漏を避けて、且つ歎ずる莫れ。
(一一)旱氣方除賀田叟。　旱氣、方に除いて田叟を賀す。
(一二)蓐收預到三日前。　蓐收、預め到る三日の前、
淨掃炎氛去如帚。　炎氛を淨掃し去つて帚の如し。
黃昏泥(一三)潦歸未得。　黃昏泥潦、歸ること未だ得ず、
呼燭相留臥東(一四)牖。　燭を呼んで、相留まつて東牖に臥す。
夜深酒醒起獨行。　夜は深く、酒醒め、起つて獨り行く、
雲散城頭見星斗。　雲は散じて城頭に星斗を見る。
乃知天變只須臾。　乃ち知る、天變只だ須臾、
人在艱難豈云久。　人は艱難に在るも、豈に久しと云はむや。

【題義】說明に及ばぬ。周南は、列朝詩集に「字は正道、吳郡の人」とある。青邱が在京中に作つたのである。

【詩意】周南は、我が同鄉の友であるが、亂後、偶然この地に逢ふと、その老けて容貌の醜くなつたのに驚くばかり、隨分、苦勞をしたことと思はれる。周南は、ある時、日斜なる頃、われを招いて、往年の游跡を話せむとし、名だたる金陵白門の酒を振舞はれた。その酒は、一杯飲むと、忽ち羈旅の苦を忘れて笑顏を爲し、二杯飲むと、次第に廻つて來て、詩を吟ずる口に粘ばりつき、三杯飲むと、いつしか陶然として、この身は、遂に無何有の鄕に入つて仕舞ふ。兎角する內に、今まで晴れて居た天には、俄に雷が鳴り出し、白浪は江を翻し、怒れる蛟龍は、高く叫び、急雨は、爭つて池上の蓬萊を打ち鳴らし、狂風は、既に門前なる柳をへし折つて仕舞つた。しかし、われは、醉中、坐忘の域に入つて居たから、この景に對しても、何とも思はず、又、驚いて匕や箸を取り落すことも無かつた。すると、周氏の家人どもは、喧しく呼ばはつて、街上に水が溢れて、戶口に押し寄せたといひ、ころげ落ちた屋の茅は、地に隨つて走つて居た。牀の上に雨もりがするから、それを避けねばならぬといつて、歎息するに及ばぬ。この風雨の御蔭で、旱の氣分は、どうやら除き去られて、百姓どもは、大に喜んで居る。雨後は、極めて涼しく、立秋の前三日といふのに、蓐收の神は、逸早く、御出になり、炎熱の氣を掃つて、さながら帚で塵埃を拂ひ去る樣である。やがて、黃昏になつても、汚水が街路に滿ち、とても歸れぬ處から、燈火を呼んで、東の窓の下に泊めて貰ふことにした。夜深き頃、酒が醒めた儘、身を起して、ひとりで出かけて見ると、城頭雲散じ、星斗の光は爛然として見える。すると、さしもの天變も、全く須臾の間で、人は艱難に出遇つても、決して長くはないといふことが分

なり、一驚の歳、乃ち此に至る」とある。【九】顚倒屋茅　ころげ落ちて來た屋根の茅。杜甫の茅屋爲秋風所破歌に、八月秋高風怒號、卷我屋上三重茅」とある。【一〇】牀牀避漏　漏は屋漏、即ち雨もり、前に引いた杜甫の歌の中に牀牀屋漏無乾處、雨脚如麻未斷絕」とある。【一一】旱氣　ひでりの氣分。【一二】蓐收　秋の神、禮記月令に「孟秋の月、その神は蓐收」とある。【一三】泥潦　潦は雨後の出水。【一四】東牖　牖は窗。

かつた。

【餘論】例の筆法で、かなり細かに敍述してある。篇中、脉脉避漏且莫歎の四句は、稍や新警で面白い。

送張倅之雲間　張倅の雲間に之くを送る

(一)鱸鄉亭前楓葉稀。　鱸鄉亭前、楓葉稀に、
(二)讀書堆下征雁飛。　讀書堆下、征雁飛ぶ。
孤城迢遞秋色裏。　孤城迢遞、秋色の裏、
作官自好休思歸。　官と作るは自ら好し、歸るを思ふを休めよ。
扁舟晚待潮東去。　扁舟、晚に潮の東に去るを待つ。
(三)琴鶴由來是家具。　琴鶴、由來これ家具。
別意方留江上杯。　別意、方に留む江上の杯、
離心已挂雲間樹。　離心、すでに挂る雲間の樹。
(四)如此風流一使君。　かくの如きの風流、一使君、
文章政事更何云。　文章政事、更に何をか云はむ。
絕憐(五)退食兼(六)榮養。　絕えて憐む、退食の榮養を兼ぬるを、
不向山頭望(七)白雲。　山頭に向つて白雲を望まず。

【字解】【一】鱸鄉亭　姑蘇志に「亭は吳江に在り、宋の熙寧中、林肇建つ。蓋し、陳瑾、秋風斜日鱸魚鄉の句に取る」とある。【二】讀書堆　松江府志に「亭林寶雲寺の後に在り、卽ち顧野王の輿地志を修する處」とある。【三】琴鶴　宋史趙抃傳に、「抃彈劾して、權幸を避けず、京師、鐵面御史と號す。蜀に帥たり、一琴一鶴を以て自ら隨ふ。その再任するや、琴鶴を屛去し、止だ一蒼頭執事のみ」とあり、東坡の詩に淸獻先生無一錢、故應琴鶴是家傳」とある。【四】使君　官職ある人の尊稱。【五】退食　役所より退出する。【六】榮養　親を養ふに心を用ひて不足なきこと。【七】望白雲　唐書狄仁傑傳に「幷州法曹參軍を授けらる。親、河陽に在り。仁傑、太行山に登り、反顧して白雲の孤飛するを見、左右に謂つて曰く、わが親、その下に舍すと。瞻悵、これに久しうす。雲移り、乃ち去るを得たり」とある。

【題義】張倅の倅は、說文に「副なり。今、郡倅、半刺と稱するは、猶ほ半刺史の職のごときなり」とあつて、太守の副、今でいへば、縣の事務官の樣なものであらう。雲間は華亭附近。この詩は、張某が州倅として、松江に赴任するのを送つたのである。

【詩意】君の往かれる松江には、鱸鄉亭があつて、頃しも秋の末、亭前の紅葉も、殘り少なになり、讀書堆の邊には、征雁が北から飛んで來る。孤城は、遙に秋色の中に見え、その景色、得もいはれずして、むかし、張翰が忘れ兼ねた故鄉たるに負かず。君にして、この地方に赴任するのは、まことに結構な事で、ここを去つて、歸りたいと思ふこともあるまい。君は、扁舟を用意し、晚の潮の東に向ふを待つて、漕ぎ出さうとして居られるが、そこに積み載せたのは、唯だ琴と鶴とだけで、これが卽ち

君の家具である。別れの愁は、江上の杯に殘れども、ここを離れ行く旅の心は、名にしおふ雲間の樹に挂つて、早く其地に往きたいと思つて居られる。君は、かくの如き風流漢であつて、文章政事の向向は、今更いふまでもない。それから、親御達も同行せられて、退食家居、十分に孝養を盡すことの出來るのは、まことに結構なことで、かの狄仁傑の如く、山頭に立つて、白雲を望まなくても宜しいであらう。

【餘論】この詩は、大體素直に出來て居て、名作では無いが、先づ穩當といふべく、狄仁傑の故事を飜用した處も、流石に、巧慧の手段である。

送王孝廉游京歸錢塘

王孝廉の京に游びて錢塘に歸るを送る

江南草長蝴蝶飛。　江南、草長じて蝴蝶飛び、
玉缸(一)碧酒流春輝。　玉缸の碧酒、春輝を流す。
相逢上客(二)同買醉。　相逢うて、上客、同じく醉を買ひ、
白馬新自燕山(三)歸。　白馬、新に燕山より歸る。
燕山歸來不堪說。　燕山、歸り來つて、說くに堪へず、
易水寒風薊門(四)雪。　易水の寒風、薊門の雪。
朝邸(五)空隨使者車。　朝邸、空しく使者の車に隨ひ、
帝閽(六)不受書生謁。　帝閽、受けず書生の謁。
笳聲杳眇歌苦辛。　笳聲杳眇、歌苦辛、
短衣笑拂京華塵。　短衣、笑うて拂ふ京華の塵。
不(七)留東閣觀奇士。　東閣に留まつて奇士を觀ず、
還覓(八)西湖別故人(九)。　還た西湖を覓めて故人に別る。
此行莫嘆知音寡。　この行、嘆ずる莫れ、知音の寡きを、
曾到黃金(一〇)臺下。　かつて到る黃金臺の下。
荒臺遺址今已平。　荒臺の遺址、今、すでに平かに、
更有何人致賢者。　更に何人の賢者を致すある。

【題義】王孝廉の姓字閱歷は不詳、この人は、元末に上京したが、意を得ず、南に旋つて、蘇州に滯留し、これから、西湖を經て錢塘に歸るといふに就いて、青邱が賦して、その行を送つたのである。

【字解】【一】玉缸　立派な酒瓶。【二】上客　貴戚名門に賓客たる人、王孝廉を指す。【三】燕山　一統志に「順天府、宋に燕山といふ」とある、今の北平。【四】薊門　薊州の入口。【五】朝邸　官宅。【六】帝閽　宮門。【七】不留東閣觀奇士　漢書朱雲傳に「薛宣、丞相となる、雲、往いて之を見、因って留宿す。宣雲に謂つて曰く、田野無事、しばらく我が東閣に留まつて、以て四方の奇士を觀るべし。雲曰く、小生、迺ち相吏を欲するか、と。宣、復た敢て言はず」とある。【八】覓西湖　西湖を尋ねる。【九】故人　青邱が自ら稱したのであらう。【一〇】黃金臺　燕の昭王が、郭隗に聽き、千金を置いて賢者を招延した臺。

【詩意】江南は、芳草長じて蝴蝶亂れ飛ぶ二月の頃、玉缸に滿へたる碧酒は、さながら、春光を流すが如くである。この時、諸侯の上客たる王孝廉に逢ひ、ともに醉を買つたが、聞けば、君は白馬に乘じ、つい近頃、燕山の都から歸つたといふことである。折角燕山から歸つて來たが、今度の旅行は、全く御話にも成らぬ事ばかりだといふので、易水の寒風、薊門の積雪、第一時候も惡かつたが、むなしく、使者の車に隨つて上京せし後、官邸に投宿し、天子は、直直に書生の拜謁を受けられぬ故に、志はありながら、これを陳べることが出來ない。胡笳の聲の杳眇たるに和して、おのが歌も、あくまで苦辛し、とても慰め難き程であつたが、愈よ思ひ諦め、短衣に黠じたる都の塵を拂つて、歸途に就かれた。されば、東閣に留まつて、四方の奇士を觀るに及ばず、これから、西湖の好景を尋ねむが爲に、予に別れて杭州に赴かれる。この行、知音の者に碌碌遇はなかつたといつて嘆息せずもあれ、むかしの黃金臺に往つて見たのは、せめてもの心遣りである。しかし、その黃金臺の遺址は、荒れはてて、すつかり平になつて仕舞ひ、昭王一たび去りし後、更に誰が賢者を招致するか。末俗の今日、才藝の士の容れられぬのは、必然の事で、どうにも仕方がない。

【餘論】通篇、骯髒不平の氣を以て滿たされ、王孝廉の爲に憤慨するのは、取りも直さず、我が不遇を嘆嗟したので、謂はゆる他人の酒杯を借りて、自己の磊塊に澆いだのである。

賦錢散人江村二題　錢散人の江村二題を賦す

釣雪灘　釣雪灘

江流欲(一)澌魚不起。　江流澌せむと欲して、魚起たず、

一蓑猶釣寒蘆裏。　一蓑猶ほ釣る寒蘆の裏。

漁村茫茫煙火微。　漁村茫茫として煙火微なり、

雪滿(二)晚篷人獨歸。　雪は晚篷に滿ちて、人、ひとり歸る。

【字解】【一】欲澌　澌は氷の流れること。

【二】晚篷　篷は苫、舟の上を覆ふもの。

【題義】錢散人の名字等は不詳。この人は、江村に住まつて居たので、青邱に依囑して、この二題を賦して貰つたのであらう。姑蘇志に「吳江縣の甌菴は、淞江の濱に在り、宋の王份、これを營んで、以て居り、江湖を環らして以て圃に入れ、柳塘花嶼、景物秀野、中に釣雪灘あり。份、字は文儒、特恩を以て官に補せられて、大冶の令となり、歸老す」とある。もし、この釣雪灘が、錢氏江村園中に在るとすれば、或は、錢氏が甌菴の跡を修めて、そこに隱棲して居たのであらう。

【詩意】大江は、氷を流さむとし、水も極めて冷たい處から、魚は皆水底に匿れて、少しも出て來ず、もとより、獲物はないけれども、一蓑を披いて、寒蘆の中に釣を垂れて居るのは、何人であるか。兎角する内に、漁村茫茫として暮れかかり、夕げの煙、かすかに立ちのぼり、雪が舟の蓬に滿ちたから、

はじめて、釣を收めて歸つて仕舞つた。

望月臺

臺前夜半烏啼時。
起望明月彈商絲。(一)
月來照見臺上影。
松桂滿山風露冷。

望月臺

臺前、夜半、烏啼くの時、
起つて明月を望んで商絲を彈ず。
月明照らし見る臺上の影、
松桂滿山、風露冷かなり。

【題義】 望月臺の由來は、不明であるが、もとより、錢氏江村園中の一名勝であらう。

【詩意】 夜半、あまり明るい爲に、烏が浮かれ出して、臺前に啼いた。その時しも、君は起つて明月を望みつつ、琴を搔き拂うて、哀しき調べを奏せられた。さやけき月は、隈もなくて、臺上の影、ありありと見え、松だの、桂樹だのが四山に滿ちて、風露の氣、冷かに身に浸むを覺えた。

【餘論】 二首、ともに二句で換韻し、六朝時代に行はれた短曲の形式を取つたのである。いづれも落想淸澈、讀者をして魂を氷壺に濯ふを覺えしめるが、就中、前首の後半は殊に秀絕である。

【字解】【一】商絲 琴を云ふ。商は淸商、卽ち哀しい音調。哀絃といふに同じ。

愛竹軒爲陳惟寅賦

愛竹軒、陳惟寅の爲に賦す

(一)匡山老客何淸眞。(二)
自繞園屋栽蒼筠。(三)
年來無肉雖苦瘦。(四)
家有萬玉誰言貧。(五)
一竿護惜不忍剪。
何以持釣橫江鱗。(六)
(七)僮來掃葉自可喜。
客至踏箏長遭嗔。(八)
(九)鉤輈啼罷結遠夢。
碧雲忽墮湘南春。(一〇)
涼陰脩脩潤琴硯。(一一)
(一二)落翠冉冉沾衣巾。(一三)

匡山の老客、何ぞ淸眞、
自ら園屋を繞つて蒼筠を栽う。
年來肉なく、瘦に苦むと雖も、
家に萬玉あり、誰か貧と言はむ。
一竿護惜して剪るに忍びず、
何を以て持して釣らむ、橫江の鱗。
僮來つて葉を掃ふは、自ら喜ぶべきも、
客至つて箏を踏まば、長しへに嗔に遭ふ。
鉤輈、啼き罷んで遠夢を結び、
碧雲、忽ち墮つ湘南の春。
涼陰脩脩として琴硯を潤し、
落翠冉冉として衣巾を沾す。

【字解】【一】匡山 一統志に、「匡廬山は、南康府城の西北。周時、匡裕兄弟七人、廬を結んで、ここに隱る、故に名づく。疊嶂九重、崇巖萬仞、周五百餘里、江右の巨鎭、道書第八洞天」とある。陳惟寅は、本と廬山の人であつた。【二】淸眞 天性淸澹にして眞摯なること。【三】蒼筠 綠竹に同じ。【四】無肉雖苦瘦 東坡の綠筠軒の詩に、可レ使二食無一レ肉、不レ可レ居無レ竹、無レ肉令二人瘦一、無レ竹令二人俗一、人瘦尙可レ肥、士俗不レ可レ醫とある。【五】萬玉 竹萬竿をいふ、陸龜蒙の詩に萬條寒玉一溪煙とある。【六】橫江鱗 江水に橫はる樣な大魚。【七】僮來 僮は家僮。【八】踏箏 箏を踏み碎く。【九】鉤輈 鷓鴣の啼くこと、唐本

詩成時向節(一四)下寫。　詩成つて時に節下に向つて寫せば、

醉墨點破煙痕新。　醉墨點破して煙痕新なり。

風來清嘯與相答。　風來つて清嘯、與に相答ふ、

若聽金(一五)奏怡我神。　金奏を聽くが若く、我が神を怡ばしむ。

知無顏色媚兒女。　知る顏色の兒女に媚ぶるなきを、

自古相愛惟幽人。　古しへより、相愛するは惟だ幽人。

洛陽陌上花易過。　洛陽陌上、花過ぎ易く、

歌(一六)鐘競賞勞車輪。　歌鐘競ひ賞して、車輪を勞す。

何如此(一七)君最耐久。　何ぞ如かむ、此君の最も久しきに耐ふ〔るに〕、

歲(一八)晚結託同情親。　歲晚結託、同情親む。

亂(一九)聲朝送簾外雨。　亂聲、朝に送る簾外の雨、

疏影夜拂窓前塵。　疏影、夜は拂ふ窓前の塵。

我嘗種此欲免俗。　われ嘗て此を種ゑて、俗を免れむと欲す。

亂後伐盡惟荊榛。　亂後伐り盡して、惟だ荊榛。

故園咫尺未能去。　故園咫尺、未だ去る能はず、

移家幸得爲子鄰。　家を移して幸に子の鄰を爲すを得む。

往來倘許如二(二〇)仲。　往來、もし二仲の如きを許さば、

敲門借看莫嫌頻。　門を敲いて借看するも、頻を嫌ふ莫れ。

草に「鷓鴣は江南に生ず、形、母雞に似たり、鳴くとき、鉤輈格磔といふ」とある。【一〇】湘南春　湘水の南、博物志に「舜、南巡して返らず、二女、これを追へども及ばず、洞庭の山に至り、涙を以て竹を揮へば竹盡く斑、故に湘妃竹といふ」とある。【一一】脩脩　塵俗を離れたる貌。【一二】落翠　地に低く簇合せる翠葉。【一三】冉冉　吹き亂る貌。【一四】節下　竹の節の下。【一五】金奏　周禮に「鐘師は金奏を掌る」とあって、その注に「金を擊ち、以て奏樂の節と爲す」とある。【一六】歌鐘競賞　樂を奏して興を添へ、競うて花を賞する。【一七】此君　王徽之は竹を愛して「一日も此君なかるべからず」といひ、そこで、此君は竹の異名となつて居る。【一八】歲晚結託　終始渝らぬ交情を結ぶ。【一九】亂聲　竹の幹が互に摺れ合ふ音。【二〇】二仲　前に卷四、秋林高士圖の詩中にも見えたが、三輔決錄に「蔣詡、字は元卿、舍中の三徑、惟だ羊仲求仲、これに從つて游ぶ、二仲は皆潔廉逃名の士」とある。

【題義】愛竹軒は、陳惟寅の齋號であつて、靑邱は、その依賴に依つて、この詩を作つたのである。陳惟寅の略傳は、前に卷八、謝陳山人惟寅贈其故弟長司惟允所畫山水の題下に、列朝詩集を引いて置いたから、重ねて、ここに贅するにも及ぶまい。

【詩意】廬山の老客たる陳君は、その天性、清遠にして眞摯、園庭を繞つて、綠竹を滿栽された。陳君は、年來、肉をも食はず、その體の瘦せたのに苦んで居るが、家に萬條の碧玉たる此竹があれば、どうして貧窮といはうか。君は、その竹を愛惜すること甚しく、ただの一本でも剪るに忍びず、江中に横はる樣な大魚を釣るには、何を釣竿とするか。家僮が時時來て、その葉をすかすは、自然喜ぶべきも、客が來て筍を踏み碎くと、いつまでも、怒つて居る位。鉤輈の聲を爲す鷓鴣が啼き罷んだ時、春の日永の夢は、遠く馳せて、名だたる竹の碧雲と見まがふ湘江の邊に落ちるであらう。庭上なる竹の

涼しい影は、脩脩として琴硯を潤し、濃翠冉冉として衣巾を沾し、瀟洒の致を添ふるは、まことに嬉しく、やがて詩が出來ると、竹の節の間に書きつけむとし、醉墨を潑すれば、煙痕を點破して、その跡が、鮮かに見える。風が來れば、萬葉自ら響を爲して、君の清嘯と相和するが如く、君は竹聲を鐘聲に聞きまがふ樣だといつて、ひどく喜んで居られる。元來、竹には、兒女輩に媚ぶる樣な嬌冶の姿態は、絕無であつて、古しへより、幽人が相愛するのみである。洛陽の市中では、花時が短いといふので、歌鐘興を添へ、競うて春を賞せむとし、わざわざ車に乘つて出かけるが、一時の盛りに過ぎぬ仇めかしき花よりも、この竹の能く久しきに耐へる方が、はるかに宜しく、そこで、終始渝らざる交を結び、互に同じ情思を以て親んで居られる。朝に竹が摺れ合ふ音は、簾外の雨を送るかと怪まれ、夕に疏らなる葉の影は、心ありげに窓前の塵を拂ひ、絕えず愛すべき風情がある。予も、嘗て竹を植ゑて、塵俗を免れやうと思つたが、亂後には、殘りなく伐り去られて、その跡は、荊榛滿地、故園は咫尺の處に在れども、いろいろの都合で、往くことも出來ず、近ごろ、家を移して、君の鄰近に住まふことの出來たのは、まことに、思ひがけぬ幸であつた。もし、わが往來して、丁度、かの二仲の蔣詡に於けるが如きを許されたならば、日夕、門を敲いて、君の家の竹を拜見したいと思ふが、その頻繁を嫌はれざらむことを切望する次第である。

【餘論】この詩は、大分面白く出來て居るが、鈎輈喈罷の二句は、さばかり緊密なる關係もなく、むしろ、刪り去つた方が宜しくはあるまいか。涼陰脩脩の二句、風來清嘯の四句、亂聲朝送の二句等は、極めて新婉巧警であるし、結末も相當に振つて居る。

幻住精舍尋梅

幻住精舍に梅を尋ぬ

(一)郭西雪後尋僧院。
郭西、雪後に僧院を尋ぬ、

(二)短竹穿沙水如練。
短竹、沙を穿つて、水、練の如し。

梅花有待我來催。(三)
梅花、わが來り催すを待つあり、

十日春寒未開遍。
十日春寒、未だ開き遍ねからず。

忽思前日(四)渡江水。
忽ち思ふ、前日、江水を渡り、

夜(五)解征帆宿山縣。
夜、征帆を解いて、山縣に宿す。

偶逢一樹在官廨。(六)
偶ま逢ふ、一樹の官廨に在るに、

爲寫新詩氷滿硯。
爲に新詩を寫せば、氷、硯に滿つ。

關山夢(七)別今五年。
關山夢に別る今五年、

【字解】【一】郭西　幻住精舍は闕門の外に在るが故に云ふ。【二】短竹穿沙　笹が岸沙の上に出て居る。【三】來催　來て催促する。【四】前日渡江水　これは、吳越紀遊の事らしく、至正十八年より二十年に至る間であらう。【五】解征帆　舟の帆を卸す。【六】官廨　村役場の如きものを云ふ。【七】夢別　夢中で別れる。

縞（八）袂誰家月中見。　縞袂、誰が家か月中に見る。
自慚喪亂尙飄泊。　自ら慚づ、喪亂、尙ほ飄泊、
涙眼如看故人面。　涙眼、看るが如し故人の面。
黄昏酒醒逐寒影。　黄昏、酒醒めて寒影を逐ひ、
繞樹千迴意無倦。　樹を繞つて千迴、意、倦むなし。
南枝北枝亂如雪。　南枝北枝、亂れて雪の如し、
未許東風吹（九）一片。　未だ許さず、東風の一片を吹くを。
名園桃李盡荊榛。　名園の桃李、盡く荊榛、
空谷獨開君莫怨。　空谷、ひとり開く、君、怨む莫れ。
重來省（一〇）視兩何如。　重來省視、兩つながら何如、
惆悵歸時有餘戀。　惆悵として歸る時、餘戀あり。

【題義】幻住精舍は、前に卷六、宿幻住棲雲堂とあつたその幻住であつて、閶門の外なる雁蕩村に在ることも、その題下に注して置いた。

【八】縞袂　白衣の袂、梅花を形容して云ふ。東坡の梅花の詩に、月黑林間逢縞袂とある。
【九】吹一片　花びらを一つ吹き落す。
【一〇】省視　尋ねて來て熟視する。

【詩意】雪後、閶門より出でて、蘇州城西の僧院を尋ねむとして、ぼつぼつ歩いて往つた。その路すがら、小笹は、岸沙を抜いて生じ、水色は澄みて練の如くである。唯だ梅花は、予が特に來つて催促するを待つものの如く、加ふるに、餘寒が十日も續いて甚しかつた爲に、碌碌咲き揃はない。おもへば、かつて、江水を渡つて、南方に旅を爲し、夜、舟の帆を卸し、上陸して山縣に投宿したことがあつたが、ゆくりなくも、村役場の前に一株の梅花を認め、吟興勃發、忽ち新詩を作り、それを寫さうとした處が、寒氣殊に甚しく、硯の水が凍つて、おもふ樣に筆が動かなかつた。夢中の思で、その地の關山に別れてより、今に至つて、五年になるが、縞袂の女に比すべき梅花は、月中、誰が家に於て逢はうか、久しく邂逅の縁なきを嘆き侘びて居た。何は兎もあれ、喪亂に遭うて、一身飄泊、まことに慚づべきの至。ここに梅花に對すれば、涙にうるむ目で舊知の顔を見た樣な感じがする。黄昏酒醒めて後、梅花の寒影を逐ひまはし、千廻樹を繞つても、まだ倦むことを知らない。ここの梅のみは、南枝北枝、ともに咲き亂れて、さながら雪の如く、そして、東風をして其一片を吹き落さしむるを許さず、今しも、丁度、眞盛りの見ごろである。顧みれば、名園の桃李は、盡く荊榛と化して仕舞つたのに、君のみは、空谷の中に獨り開いて居るから、決して、その所を得ざるを怨んではならぬ。他年、重ねて來り、君を省して篤と視たならば、君と我と、果して如何であらう。とても、今日の樣ではなくて、ともに、衰老を免れぬに相違ない。そこで、歸らむとしても、名殘が惜まれて、惆悵の想を禁

することが出來なかつた。

【餘論】青邱の梅花の詩は、多く七律を以て出したが、この一首は、七言短古で、一寸珍らしい。篇中、江水を渡つて、山縣に梅花を見たことを追憶した一段は、波瀾を添へて、平板を避け、極めて巧慧なる妙手段である。次に南枝北枝亂如雪の四句は、精警超妙、まさしく佳句である。

北郭秋夜喜徐幼文遠來兼送南游

北郭の秋夜、徐幼文の遠くより來るを喜び、兼ねて南游を送る

東海徐君我同里。（一）東海の徐君は、我が同里、
日共周旋接冠履。（二）（三）日、共に周旋して冠履を接す。
斯人自是眞可人。（四）斯人、自ら是れ眞に可人、
不見心憂見之喜。見ざれば心に憂へ、これを見れば喜ぶ。
豈容遠別間山嶽。（五）豈に容さむや、遠別、山嶽を間つを、
兩歲僅收書一紙。兩歲、わづかに收む書一紙。
頗聞微祿不自養。頗る聞く、微祿、自ら養はず、

【字解】【一】東海徐君　陳史に「徐陵、字は孝穆、東海剡の人」とあつて、ここでは、借りて徐幼文に擬したのである。【二】周旋　取り持つ、世話をする。【三】接冠履　冠や履に接する、ともに追隨する。【四】可人　司空圖の二十四詩品に可人如玉とある、よき人といふ義。【五】間山嶽　山嶽を隔つ。【六】瓊枝　玉の枝、徐幼文の風姿に比す。

霧雨南方疫時起。霧雨南方、疫、時に起ると。
誰能忽送千里來。誰か能く忽ち千里に送つて來る、
應有飛鴻度江水。應に有るべし、飛鴻の江水を度る。
蟲聲今夜空館涼。蟲聲、今夜、空館涼しく、
秉燭相看疑夢裏。燭を秉つて相看て、夢裏を疑ふ。
瓊枝何以失舊色。（六）瓊枝、何を以てか舊色を失ふ、
客路風塵亦勞矣。客路風塵、亦た勞せり。
我今不解出門行。われ、今、門を出でて行くことを解せず、
病眼流眵肉生髀。（七）（八）病眼、眵を流して、肉、髀に生ず。
與奪得喪未足較。與奪得喪、未だ較ぶるに足らず、
惟有一貧聊復爾。惟だ一貧あり、聊か復た爾り。
暫來卽去何使然。暫く來つて卽ち去る、何か然らしむ、
撫琴東西覓知己。琴を撫して、東西に知己を覓む。

【七】流眵　廣韻に「眵は、目汁凝るなり」とあつて、卽ち目やに、韓愈の短燈檠歌に兩目眵昏頭雪白とある。【八】肉生髀　蜀志劉備傳に「荊州に住すること數年、かつて、表の坐に于て、起つて厠に至り、髀裏肉生ぜしを見、慨然流涕、坐に還るや、表、怪んで備に問ふ。備曰く、吾、かつて、身、鞍を離れず、髀肉皆消ゆ、今復た騎せず、髀裏肉生ず、日月馳するが若く、老、將に至らむとす、しかも功業建たず、これを以て悲むのみ」とある。【九】下車相揖　風土記に「越俗性率朴、はじめ人と交はるに禮あり、土壇を封じ、祭るに雞犬を以てし、祝して曰く、君は車に乘じ、我は笠を戴く、他日相逢はば車を下つて揖せよ。君は簦を擔ひ、我は馬に跨る、他日相逢はば君

當時結レ交豈不レ多。當時、交を結ぶ、豈に多からざらむや、
（九）下レ車相揖今無レ幾。車を下つて相揖す、今幾ばくもなし。
願君窮達存二此心一。願はくは、君、窮達、この心を存し、
勿レ使三千年笑二（一〇）餘耳一。千年、餘耳を笑はしむる勿れ。

【題義】說明に及ばぬ。北郭は蘇州城北。徐幼文は卽ち徐賁で、前にも數ば見え、北郭十才子の一として青邱の熟友である。

【詩意】東海の徐陵に比すべき君は、わが同里の舊友であつて、毎日、ともに周旋し、冠履相接して、頻りに追隨して居た。君は、眞に善き人で、逢はねば心に憂へ、逢へば嬉しく思ふ位。されば、遠く相別れて、山嶽に隔てられるを許すべきか、相思の情は、日夕相慕るばかりだが、何分戰亂の世であるに因り、二年の間、唯だ手紙を一本受取つただけであつた。聞けば、君は、俸祿なほ少く、到底、自ら給養するに足らず、おまけに、南方は霧雨深く、惡疫が時時流行するといふ話で、早く歸つて來れば善いがと思つて居た。然るに、誰が君を千里の彼方から送り歸したか、雁が江水を度つて、前以て音づれの有るべき筈であつた。今夜、蟲聲繁くして、空館方に涼しきに當り、先觸れも何もなくて、君は突然來訪せられ、燭を秉つて相見れば、さながら、夢中の見參では無いかと疑ふばかり。瓊枝に比すべき君の姿容は、どうして、昔日の艶かさを失つたのか、それにつけても、客路の風塵を渉つて、定めて御苦勞の事であつたらう。予は、今日、門を出て行くことが出來ないので、病める眼からは目やにが流れ、股の邊には贅肉を生じ、まことに、意氣地なき有樣。世上の與奪得失などは、御話にも成り兼ねる位、唯だ一貧のみは、現在見る通り。友人にしても、一寸來て、すぐに立ち去つて、落ち付いて長く居て吳れぬのは、如何にせしものか、琴を撫しつつ、東西に知己を求める心の苦しさ。むかし、交を結んだ人は、決して少くはなかつたが、立身しても、車を下つて挨拶するといふ樣な人は、幾ばくもなく、それにつけても、君の來訪されたのは、まことに喜ばしい。願はくは、君よ、窮達の如何に拘はらず、常に此心を存して、予を見棄てられず、千年後の人をして、陳餘・張耳は仲違をした、始あつて終なきものだ、丁度、それに似て居るといつて、笑はしめることの無い樣に致したいものである。

【餘論】徐賁に向つて、貧交の長しへに渝らざることを囑望したので、通篇、悲哽の音に滿ちて居る。我今不レ解レ出二門行一の二句を見ると、青邱、中年窮苦の實況は、まさしく、それと知られる。要するに、かういふ詩は、語眞にして情摯、以て足れりと爲すべく、區區として、文字の巧拙を論ずるにも及ぶまいと思ふ。

が爲に下らむ」とある。【一〇】餘耳　陳餘・張耳。はじめ刎頸の交を結んだが、後には全く仲違ひをして仕舞つた。その詳は、前に泉南兩義士歌の中に注して置いた。

次韻答朱冠軍游城西之作

次韻、朱冠軍の城西に游ぶの作に答ふ

前年城西作冶游。（一）　前年、城西、冶游を爲す、
柳條拂蓋花迷舟。（二）　柳條、蓋を拂ひ、花、舟を迷はしむ。
笑看明月問狂客。　笑うて明月を看て、狂客を問ふ、
我擧大白君當浮。（三）（四）　われ大白を擧ぐ、君、當に浮ぶべし。
去年城西復偶住。　去年、城西、復た偶ま住まる、
酒伴家家邀即去。　酒伴、家家、邀へて即ち去る。
東鄰寺裏花正開。　東鄰寺裏、花、正に開き、
半醉半醒游幾度。　半醉半醒、游ぶこと幾度。
今年有花愁獨尋。　今年、花あるも、獨り尋ぬるを愁ふ、
閉門三日臥春陰。　門を閉づること三日、春陰に臥す。
將軍小隊游何處。（五）　將軍小隊、何の處に游ぶ。
日暮空聽車馬音。　日暮、空しく聽く車馬の音。

【字解】【一】冶游　晉の子夜春歌に、「冶游步二春露一」とある、ここでは風流なる游。【二】拂蓋　蓋は車蓋、車の上に翳つて居る天蓋。【三】擧大白　前に次二韻楊孟載早春見レ寄の詩中に注して置いた、酒の滿ちた杯を擧げて飲む。【四】當浮　浮は杯を差しつけて飲ませること。【五】將軍小隊　將軍は朱冠軍、小隊は其部下。杜甫の詩に元戎小隊出二郊坰一、問レ柳尋レ花到二野亭一とある。【六】皐橋泰娘　前に卷八、憶昨行に皐橋泰娘雙翠蛾、喚來尊前爲レ我歌とあつて、その處に、詳しく注して置いたが、皐橋は、閶門内に在る橋の名。泰娘は、劉禹錫に泰娘歌といふのがあつて、唐時の美人であるのに比擬したのである。青邱の相識れる妓流中に、かういふ佳麗があつたものと思はれる。【七】水調　前に數ば見えたが、商調の曲、音節の悲哀を以て知られて居る。【八】秋露　庶物異名の疏に「舜林秋露は、向伯恭の酒名」とある。【九】共射草中石　李廣が、夜、南山を過ぎて、草中に虎を見て之を射、矢の羽を沒したが、明日これを見ると、石であつたといふことが、漢書の本傳に出て居る。【一〇】霹靂鳴　弓の弦を引いて放つ音が雷の樣だといふので、

皐橋泰娘殊窈窕。（六）　皐橋の泰娘、殊に窈窕、
爲我喚來歌水調。（七）　わが爲に喚び來つて水調を歌はしむ。
客愁草草不易除。　客愁草草、除き易からず、
世事茫茫本難料。　世事茫茫、本と料り難し。
玉壺一雙秋露傾。（八）　玉壺一雙、秋露傾く、
唯此可以忘吾情。　唯だ、此、以て吾が情を忘るべし。
醉歸共射草中石。（九）　醉歸、共に射る草中の石、
笑擘弓弦霹靂鳴。（一〇）　笑つて、弓弦を擘けば霹靂鳴る。

前に卷八、憶昨行の霹靂應レ手鳴二雕弓一、及び此卷、曉步二西郊一見二驚鷺翠飛一の箭聲脫レ弦鳴二餓鴟一の句下に注して置いた。

【題義】　說明に及ばぬ。但し、朱冠軍の名字閱歷等は分からぬ。

【詩意】　前年、城西に於て風流の春游を爲したことがあつて、柳の枝は車蓋を拂ひ、花の雲は行舟を迷はしむるばかり、笑うて明月を仰ぎつつ、相手たるべき狂客を呼ばはり、われは、杯を滿引し、君も强ひられたのを飲み乾された。去年、再び城西に出かけて、偶ま少憩して居ると、飲み仲間が家家に居て相迎へたるに因り、辭退も成らずして、その處に立ち寄つた。時しも、東鄰なる寺の中に

は、花が丁度咲き滿ちて、見ごろであつた處から、半醉半醒の有樣で、幾度も、そこに游んだ。次に、今年は、相變らず花は咲いたが、ひとりで尋ねる氣にも成らず、門を閉ぢて、三日、春陰の中に臥して居た。將軍は、小隊を引き具して、どこへ御出かけに成つたか、予は、日暮に、車馬の群り過ぐる聲を聞いて居た。皐橋の泰娘は、窈窕たる佳人であるが、わが爲に喚んで來て、水調を歌つて聞かせて呉れぬか。客愁は、草草として容易に除くことが出來ず、世事は、茫茫として、本と豫測し難いもので、一雙の玉壺に盛れる秋露の美酒を傾くれば、はじめて、吾が情を忘れ、陶然として、愉快になるであらう。どうか、君と共に會して、おもふ存分、痛飲したいものである。醉うて踊る途すがら、草中の石を見れば、ともに之を射るも面白かるべく、笑つて、弓の弦を放つと、さながら、霹靂の樣な響を發するであらう。

【餘論】前年・去年・今年と次第に分說し、刻下窮苦の境に居ることを訴へ、泰娘の歌を聞かせて呉れ、秋露の酒を飲ませて呉れといつて、朱冠軍に依囑したのである。

贈歩鍊師禱雨　　歩鍊師に贈りて、雨を禱る

白頭道士騎一鶴。　白頭の道士、一鶴に騎し、

手把(一)青蓮下寥廓。　手に青蓮を把つて、寥廓より下る。

人間又見海田枯。　人間又見る、海田の枯るるを、

十丈黃塵沒城郭。　十丈の黃塵、城郭を沒す。

昔年服事(二)茅長君。　昔年服事す茅長君、

能役鬼神呼風雲。　能く鬼神を役して風雲を呼ぶ。

下爲羣生掃(三)旱沴。　下、羣生の爲に旱沴を掃ひ、

(四)雨工驅起如羊羣。　雨工驅起して、羊羣の如し。

(五)陰雷塡塡天欲怒。　陰雷塡塡、天、怒らむと欲し、

靈颸吹旗紫壇暮。　靈颸、旗を吹いて、紫壇暮る。

書入重關(六)虎豹開。　書は重關に入つて虎豹開き、

璧沈古井(七)蛟龍護。　璧は古井に沈んで蛟龍護す。

須臾甘(八)澍何滂沱。　須臾にして、甘澍何ぞ滂沱、

(九)十日不雨應無禾。　十日雨ふらず、應に禾なかるべし。

【字解】【一】青蓮　寶劍を云ふ、李白の詩に「起舞蓮花劍」とあり、漢書晉灼注に「劍首、玉を以て井鹿盧形を作り、上に木を刻して山形を作し、蓮花、初めて生じて、未だ敷かざる時の如し」とある。【二】茅長君　即ち茅君、仙人の名、前に卷七、登句容僧伽塔望茅山の詩中に注して置いた。【三】旱沴　沴は邪氣。【四】雨工　異聞錄に「柳毅下第、將に湘濱に還らむとして、涇陽に往いて告別す。至ること六七里、鳥飛び、馬驚く。又六七里にして止まる。婦人の羊を道傍に牧するを見て之を詰る。女曰く、妾は洞庭龍君の小女なりと。問ふ、羊を牧するは何の用ぞ。女曰く、羊に非ざるなり、雨工なり、と。問ふ、何をか雨工と爲す。曰く、雷霆の類なり、と。數ば之を顧視すれば、皆矯顧怒歩して、飲齕甚だ異、

祠官空爲大（一〇）雩舞。　祠官、空しく大雩の舞を爲し、
（一一）覡女羞作迎神歌。　覡女、迎神の歌を作すを羞づ。
明朝師歸定何許。　明朝、師歸る、定めて何許、
雲裏懸珠赤如黍。　雲裏、珠を懸けて、赤きこと黍の如し。
更煩夜起把（一二）天瓢。　更に煩はす、夜、起つて天瓢を把り、
翻作東南洗（一三）兵雨。　翻つて作す、東南兵を洗ふの雨。

而して、大小毛角、羊に別つなし」とある。【五】陰雷塡塡　楚辭に雷塡塡兮雨冥冥とある。【六】虎豹鬪　楚辭に虎豹九關啄害下人とある。【七】蛟龍護　水經注に「澹臺子羽、千金の璧を齎らして、河を渡る。陽侯波起り、兩蛟舟を挾む。子羽、劍を操り、蛟を斬つて曰く、吾、義を以て求むべし、威を以て劫かすべからず」とあり、太平廣記に「唐の明皇、東都に在り、一女子を夢む、高髻廣裳、拜して言うて曰く、妾は清波池中の龍なり、久しく寶花を護す、陛下、音を知る、乞ふ、一曲を賜へ、と。帝覺めて、爲に凌波の曲を爲つて池上に奏すれば、神、波間に出づ」とある。【八】甘澍　澍は雨の注ぐこと、甘雨に同じ。東坡の詩に、沛然倒賜三尺雨、甘澍不爲龍所隔とある。【九】十日不雨　東坡の喜雨亭記に「十日雨ふらざれば、禾なし」とある。【一〇】大雩舞　雩は雨乞ひ、玉篇に「雩は雨を請ふ祭なり」とあり、爾雅釋訓の注に「雩の祭、舞者吁嗟して雨を求む」とある。【一一】覡女　巫女に同じ。覡も巫と同義で、唯だ男女を分つたのである。【一二】天瓢　中から雨を落す瓢たんで、前に、題董元臥沙龍圖の詩中に見えて居た。【一三】洗兵雨　說苑に「武王、紂を伐つ。風霽れて乘するに大雨を以てす。散宜生、諫めて曰く、これ妖に非ざるか。王曰く、非なり、天、兵を洗ふなり」とあり、梁の簡文帝の詩に洗兵逢驟雨とある。

【題義】　鍊師は、丹を鍊る人、卽ち道士の稱。その人、姓は歩、名字は不詳。この詩は、歩鍊師に贈つて、雨を禱ることを勸めたのである。

【詩意】　鍊師は、白髮頭の老道士で、一鶴に跨り、手に蓮花の寶劍を攜へて、天上から、しづしづと降りて來た。この世では、旱天が打續いて、滄海も、桑田も、乾枯して仕舞ひ、十丈の黃塵は、城郭を埋沒せむばかり。鍊師は、むかし、茅君といふ仙人に師事せられたので、通力異常、鬼神を使役して風雲を呼ぶことが出來る。そこで、今、下界の羣生の爲に、旱厲の邪氣を掃ひ去らうといふので、その形、羊に似たる雨工を驅り立てて、ここまで遣つて來た。やがて、陰雷塡塡として響き度り、さながら天の怒れるが如く、紫壇の上、日、將に暮れむとして、靈風陣陣、旗を吹き翻して居る。さきに、天帝に差出した上書は、九重の天門を通過し、そこに見張りをして居る虎豹も避けて路を開き、同時に、璧は古井に沈められて、蛟龍が之を守護して居る。しばらくすると、果然、甘雨は滂沱として降つて來たが、この雨が十日降らなければ、穀物は、すべて枯死して仕舞ふ處であつた。鍊師の通力は、大抵、これ程のものなるべく、祠官は、精を出して雨乞ひの舞を遣つたが、何の役にも立たず、巫女は、迎神の歌を唱へたが、何にも成らなかつたといつて羞ぢ入るであらう。その翌日、鍊師は、何處に歸られるか知らぬが、その衣に懸けた珠は、雲間にきらめいて、丁度、黍の實の樣に、粒粒が赤く見える。この上、願はくは、夜、起きて、かの雨を滴らすといふ天瓢を手にし、これを東南の地方に翻して、兵を洗ふの雨となし、殺氣を奇麗に一掃して戴きたいものである。

【餘論】　起八句は、鍊師が雨を禱ること、次の八句は、その效驗空しからず、果然雨が降つたといふ

ことで、すべて、未來を想像し、かくの如くあつて欲しいといつて、鍊師に望んだのである。結四句は餘意、更に東南に洗兵の雨を降らして貰ひたいといふに至つては、ひとり、天來の奇想たるのみならず、亦た實に穩健確當を以て稱すべきものである。

題朱澤民荊南舊業圖　朱澤民荊南舊業の圖に題す

(一)睢陽(二)醉磨一斗墨。　睢陽、醉うて磨す一斗の墨、
夢落荊南寫秋色。　夢は荊南に落ちて、秋色を寫す。
(三)太陰垂雨尙淋漓。　太陰、雨を垂れて尙ほ淋漓、
(四)哀壑回風更蕭瑟。　哀壑、風を回して更に蕭瑟。
楓林思入煙霧淸。　楓林、思は煙霧に入つて淸く、
湖水愁翻浪波白。　湖水、愁は浪波を翻して白し。
谿上初逢野老航。　谿上、はじめて逢ふ野老の航、
山中遠見先生宅。　山中、遠く見る先生の宅。
(五)秫田半頃連芋區(六)。　秫田半頃、芋區に連り、
茅屋三間倚蘿薜。　茅屋三間、蘿薜に倚る。
僧來看竹乘(七)小輿。　僧來つて、竹を看て小輿に乘じ、
客去尋(八)苓借高屐(九)。　客去つて、苓を尋ねて高屐を借る。
(一〇)任公臺下石可坐。　任公臺下、石、坐すべく、
(一一)周侯廟前路曾識。　周侯廟前、路、かつて識る。
(一二)虎跡時留暮苔紫。　虎跡、時に暮苔を留めて紫に、
蛟氣或化秋雲黑。　蛟氣、或は秋雲に化して黑し。
城郭當年別已久。　城郭、當年、別るる、すでに久しく、
風塵此日歸不得。　風塵、この日、歸り得ず。
落日書齋半壁明。　落日、書齋、半壁明かに、
畫圖臥對空相憶。　畫圖臥して對し、空しく相憶ふ。

【字解】【一】睢陽　卽ち荊南の地、朱澤民を指す。元詩傳に「澤民九世の祖貫、睢陽五老の一たり、その後世、江を渡つて吳人となる」とある。なほ杜衍の睢陽五老圖詩注に「杜衍八十歲、王渙九十歲、畢世長九十四、馮平八十七、朱貫八十八」とある。【二】醉磨一斗墨　韋斷に「王洽、酒酣なるの後、先づ墨を以て絹に潑し、脚蹅み、手抹し、その形に隨つて山水石を爲り、墨汁の處を見ず」とある。【三】太陰　秋の空。【四】哀壑　深い谷。【五】秫田　秫はもち粟。晉書陶潛傳に「彭澤の令となつて、縣に在り、公田には悉く秫穀を種ゑしめて曰く、われをして、常に酒に醉はしむれば足れりと。妻子、固く秔を種ゑむことを請ふ、乃ち一頃五十畝に秫を種ゑ、五十畝に秔を種ゑしむ」とある。【六】芋區　芋畑、蜀都賦に其圃有蒟蒻茱萸瓜疇芋區」と見ゆ。【七】乘小輿　唐書襄邑王神符傳に「足良からざるを以て、第に歸る、太宗、第に就いて厭問し、又小輿に乘じて、紫薇殿に入り、三衞、輿を扶けて以て行かしむ」とある。【八】尋苓　茯苓をさがす。【九】高屐　高い足駄、顏氏家訓に「梁朝全盛の時、貴游の子弟、長簷車に駕し、高齒屐を響けざるはなし」とある。【10】任公臺　名勝志に「臺は、宜興縣荊溪の上に在り、任昉、郡に守たる時、かつて此に釣る」とあ

る。【二】周侯廟　一統志に「宜興縣治の南に在り、晉の平西將軍周處を祀り、廟を英烈と號す」とある。【三】虎跡　虎の足跡。

【題義】 姓譜に「朱德潤、字は澤民、崑山の人、幼にして誦讀一過、能く記す。壯にして、詩文を攻む。間ま許道寧の畫を得たり、試に塗抹を加へ、遂に其妙に臻る。延祐の末、京師に游ぶ。趙孟頫、これを薦め、召し見て、命せられて編修となる」とあり、一統志に「荆南山は、宜興縣の西南三里、荆溪の南に在り」と見えて居る。舊業は元の屋敷。この詩は、朱澤民の畫いた荆南山下なる其故宅の圖に題したのである。

【詩意】 睢陽の朱澤民は、醉うて一斗の墨を磨り、荆南の故里を夢みたるに因つて、その地の秋色を寫し出した。秋の空は、雨を降らし、その跡、淋漓として溼ひ、深い谷には、風が吹き廻つて、愈よ蕭瑟たる氣配がある。楓林をたどり行けば、思は遙に煙霧に入つて淸く、湖水に臨めば、愁は波浪の白きを翻す時に生ずる。谿上に於ては、初めて野老の小舟を見るべく、山中に於ては、遠くから先生の故宅が望まれる。半頃の田には、もち粟を種ゑて、それが芋畑に連り、三間の茅葺は、薜蘿に依り添うて、趣ありげである。僧が來ると、竹を看むが爲に、小さな輿に乘じ、客は去らむとして、茯苓を探す爲に、高足駄を借りて行く。その近傍には、任公臺があつて、任昉の釣をした石は、坐するに宜しく、周處廟があつて、その路は、かつて見覺えがある樣な氣がする。虎の足跡には、苔が生えて紫になり、蛟龍の氣は、動もすれば、秋雲に化して黑く見える。予は、往年蘇州の城郭に別れてより、歲月すでに久しく、風塵滿目、今日になつても、まだ歸ることが出來ない。そこで、書齋の半壁に夕日の明かなる時、臥して、その圖に對し、おのが故鄕を憶うて、まことに情に堪へられない。

【餘論】 起二句は畫圖の由來、結四句は斯圖に對する感慨。その中間十四句は、畫中の景色を逐條的に列記したので、つまり、畫の說明である。尤も、かういふ畫題は、特殊的で、汎くは世人に知られざる性質の者であるから、かくの如くしたのも善からう。但し、毎毎の事ながら、通篇、舊句の極めて少きを遺憾とする。

月支王頭飮器歌

月支王頭飮器の歌

磧中萬騎驕嘶雪。　磧中の萬騎、驕つて雪に嘶き、
頭挂金鞍敵初滅。　頭は金鞍を挂けて、敵、はじめて滅ぶ。
歸來漆作大白杯。　歸り來つて、漆して作る大白の杯、
胡酒寒凝色如血。　胡酒、寒凝つて、色、血の如し。
故國無塋歸夢迷。　故國塋なく、歸夢迷ふ、
朽骨飮恨空如泥。　朽骨恨を飮んで、空しく泥の如し。

【字解】【一】磧中　磧は沙漠。【二】頭　月支王の首。【三】大白杯　前に*頭楊孟載の詩中にも見えたが、大酒杯の義。【四】無塋　塋は塡墓。【五】如泥　たわいもないことが泥の樣だといふ義。又、泥は海鼠の如き動物で、大醉すると、心もとないことが、丁度、海鼠の樣に成るといふ說もある。【六】酥燈　酥

琵琶聲中鬼語雜。　琵琶聲中、鬼語雜はり、

（六）酥燈照夜風淒淒。　酥燈、夜を照らして風淒淒。

（七）崑崙倒瀉黃河入。　崑崙倒に黃河を瀉いで入り、

（八）袍汗淋漓疑淚溼。　袍汗淋漓、淚の溼すを疑ふ。

部落誰酬國士恩。（九）　部落誰か酬いむ國士の恩、

尊前一夜無聲泣。　尊前一夜、聲なくして泣く。

（一〇）烏孫降王猶疾首。　烏孫の降王、猶は首を疾ましむ、

起奉單于（一一）千萬壽（一二）。　起つて、單于に奉ず千萬壽。

は牛酪、牛酪を解かして燈油とする。法苑珠林に「咒を誦する時、八枝の酥燈を燃やす」とある。【七】崑崙倒瀉黃河入　山海經に「崑崙山は、河水、その東北隅に出づ」とある。この句は、痛飮する有樣を形容したので、酒を絕えず呷るは、崑崙山より落つる黃河を逆に卷いて注ぐ樣だといふ意。李賀の詩に、卷二起黃河一向二身瀉一といふと同じ。金樓の注には酉陽雜俎に「魏の賈鏘、黃河の中流に於て、匏瓠を以て河源の水を接く、日に七八升に過ぎず、宿を經れば、色く餅の如し、以て酒を釀す。崑崙觴と名づく、芳味絕世」とあるのを引いてあるが、誰も知らぬ僻典であるから、恐らくは、作者の本意ではあるまいと思ふ。【八】袍汗　戰袍に浸む汗。【九】國士恩　史記刺客列傳に「趙襄子、最も智伯を怨み、その頭に漆して飮器となす。豫讓、山中に遁逃し、智伯の爲に仇を報ぜむと欲す。曰く、智伯は國士もて我を遇す、われ故に國士もて之に報ず」とある。【一〇】烏孫降王　史記大宛列傳に「烏孫は、大宛の東北二千里に在り、匈奴と同俗、控弦の者數萬にして敢戰す。もと匈奴に服す。盛なるに及びて、その羈屬を取り、肯て往いて朝會せず」とある。【一一】單于　匈奴の君主の稱。【一二】千萬壽　千年萬年の壽を祝す。

【題義】　月支、一に月氏に作る。漢初に於ける中央亞細亞の一大強國であつて、丁度、印度と支那との間に介在して居たが、未だ幾ならずして、匈奴の爲に滅ぼされた。史記大宛列傳に「匈奴、月氏王を破り、その頭を以て飮器となす」とあつて、卽ち髑髏杯である。この詩は、青邱が題目を古史中に見つけて詠出したので、もとより、その髑髏杯を見た譯ではない。

【詩意】　沙漠中を橫行する萬馬は、勢よく、積雪に嘶き、やがて匈奴は、長驅して西征し、見事に月支を滅ぼし、その王の首を金鞍に挂けて凱旋した。それから、愈よ穹廬に歸ると、その頭に漆を施して、大酒盃としたが、胡酒を其中に注ぐと、冷かに凝つて、おもひ成しにや、その色は、血の樣に見える。憐むべし、月支の王は、その故國に於て墳墓だに無い位だから、髑髏にして靈あるも、歸夢向ふ處なく、次第に古りて朽つる骨は、恨に和して、自然、酒を飮んだ爲か、泥の如くたわいもない有樣をして居る。帳中、宴酣にして、琵琶の聲の起る時、髑髏の鬼語も、その中に雜るが如く、夜もすがら、酥燈照り輝き、風は淒淒として吹きすさんで居る。その盃で痛飮するものは、丸で崑崙山の絕頂から、黃河を逆にして地に注ぎ込むが如く、醉つた揚句には、熱汗がしとどに戰袍を溼し、宛として、淚の溼へるを疑ふばかり。月支の王は、死後まで、かくの如き凌辱を受けたが、その部落中には、國士として、其恩に酬い、爲に復仇を謀る樣な氣の利いた者も居らぬ處から、髑髏は、夜もすがら、尊前に在つて、聲も立てずに泣いて居ることと思ふ。何は兎もあれ、匈奴の暴威には敵し兼ねたものと見え、烏孫王の如き、降參しても、なほ頭を惱まし、いやいやながら起つて、單于の爲に、

萬歲の壽を祝し、その御機嫌を取つて居た位である。

【餘論】かういふ樣な史的題目を好んで詠出したのは、同時の楊鐵崖が第一で、青邱も、或は之にかぶれたのでは無からうかと思はれる。大體に於て、用筆周匝ではあるが、稍や煩碎に類し、その爲に、凄味の足らぬのは大缺點と稱すべく、今少し簡切奇警であつて欲しい處である。

海石爲張記室賦　海石、張記室の爲に賦す

(一)大星墮水聲若吼。　大星、水に墮ちて、聲、吼ゆるが若し、

(二)祖龍下(三)叱神羊走。　祖龍、下、神羊を叱して走らしむ。

誰將(四)五色補天餘。　誰か、五色、天を補ふの餘を將て、

屹障狂瀾歲時久。　屹として、狂瀾を障つて、歲時久し。

空憐山頭(五)精衞鳥。　空しく憐む山頭精衞の鳥、

身墮風波(六)銜不了。　身、風波に墮ちて、銜んで了らず。

(七)媧皇去後幾桑田。　媧皇去る後、幾たびか桑田、

(八)鼇背靈峰一拳小。　鼇背の靈峰、一拳小なり。

【字解】【一】大星墮水　史記に「秦の始皇三十六年、熒惑、心を守る、墜星あり、東郡に下り、地に至つて石となる」とある。【二】祖龍　秦の始皇。史記始皇本紀に「使者、關東より、夜、華陰平舒の道を過ぐ。人あり、璧を持し、使者を遮つて曰く、吾が爲に滈池君に遺れ、因つて言うて曰く、今年祖龍死せむ、と。使者、その故を問ふ、忽ち見えず、その璧を置いて去る」とある。【三】叱神羊　神羊は石を云ふ。黃初平が羊を牧して、自分が仙となり、その羊が石に化して居たといふことがあつて、前に卷八、煮石山房の詩中に詳說して置いた。それから、三齊略記に「始皇、石橋を作り、海を渡つて日出の處を觀むと欲す。時に神人あり、能く石を驅つて海に下す。石去ること速ならざれば、神、輒ち之を鞭つ。皆血を流し、今に至つて悉く赤し。陽城山の石、皆起立し、嶷嶷東向、狀、相隨つて行くが若し」とある。【四】五色補天餘　列子に「天も亦た物あり、物足らざるあり、故に、昔者、女媧氏、五色の石を鍊つて以て闕を補ふ」とある。【五】精衞鳥　もと炎帝の女で、東海に溺死した處から、その魂が化して精衞といふ鳥となり、西山の木石を銜んで東海を塡めむとし、常に怠らないといふことがあつて、前に卷八、溫陵節婦行の詩中に詳說して置いた。【六】銜不了　銜は口にくはへる。木石を十分に銜み切れない。【七】媧皇　卽ち女媧、上に見ゆ。【八】鼇背靈峰　蓬萊を云ふ、列仙傳に「巨鼇、蓬萊山を負うて滄海の中に抃る」とある。

【題義】この詩は、海中の石を詠じたのである。張記室は、如何なる人か能くは分からぬ。

【詩意】大星が天上から海水の中に墮ち、その聲、吼ゆるが如く物すごく、これが卽ち海石である。秦の始皇は、海中に橋を造つて、日出の處を觀むと欲し、その海中の石を叱したので、石は血を流して走つたが、遂に成功しなかつた。むかし、女媧は、五色の石を以て天を補つたといふが、誰が、その時使ひ殘した石を海中に竝べて、屹然劖立、狂瀾を遮つて、年の久しきを經たのであるか。山頭なる精衞の鳥は、西山の石を口にくはへて、東海を塡めむことを企てたが、やがて、その身は、風波の中に墮ちて死んで仕舞つたので、その石は、十分に銜み得ず、盡きぬ恨を遺して居る。おもへば、女

媧、一たび去りし後、世事轉移、海水も幾たびか桑田と變じたけれども、鼇背の靈峰たる蓬萊のみは、遠く望めば、小なること拳の如く、今日でも、むかしながらの形をして居る。

【餘論】一寸見ると、石に關する故事を竝べ立てたばかりで、主意も不明の樣であるが、大體は、祖龍石を叱すれども海中の橋を造り得ず、今海中に在つて狂瀾を障るものは、女媧補天の餘の者である。精衞は東海を塡めむとしたが、風波に墮ちて死んで仕舞つたので、矢張功を成さず、そして、東海は幾たびか滄桑の變を經、蓬萊のみは依然として殘つて居るといふので、騷亂の世に際し、さまざまの事を企てた人もあつたが、いづれも功を成さず、唯だ君だけ、依然として生存して居るのは、大に心強いといふ積りらしく、つまり、張記室その人を推稱する爲に作つたものと思はれる。

張中丞廟

(一)延秋門上(二)烏啼霜。
(三)羯兒曉登(四)天子牀。
(五)江頭老臣淚暗滴。
(六)萬乘西去關山長。

張中丞の廟

延秋門上、烏、霜に啼き、
羯兒、曉に登る天子の牀。
江頭の老臣、淚、暗に滴れ、
萬乘、西に去つて關山長し。

公卿相率作降虜。
草間拜泣如羣羊。
當時(七)不識顏平原。
豈復知有張睢陽。
孤城落日百戰後。
(八)瘦馬食盡人(九)裹瘡。
男兒竟爲忠義死。
(一〇)碧血滿地嗟誰藏。
(一一)賀蘭不斬(一二)上方劍。
英雄有恨何時忘。
千年海上見祠廟。
古苦叢木秋風荒。
(一三)摩挲畫壁(一四)塵網裏。

公卿、相率ゐて降虜と作り、
草間拜泣して羣羊の如し。
當時識らず顏平原、
豈に復た張睢陽あるを知らむや。
孤城落日、百戰の後、
瘦馬食ひ盡して、人、瘡を裹む。
男兒、竟に忠義の爲に死す、
碧血滿地、嗟、誰か藏せむ。
賀蘭斬らず上方の劍、
英雄恨あり、何の時か忘れむ。
千年、海上、祠廟を見る、
古苦叢木、秋風荒る。
畫壁を摩挲す塵網の裏、

【字解】【一】延秋門　前に雙廟の詩中にも引いて置いたが、通鑑に「天寶十五年六月、哥舒翰、祿山と靈寶の西原に戰つて敗績す。上、はじめて懼れ、宰相を召して之を謀る。楊國忠、首として蜀に幸するの策を倡ふ。上、之れを然りとす。黎明、上、ひとり貴妃姉妹皇子妃主皇孫、及び親近の宦官宮人と延秋門を出で、妃主皇孫の外に在るものは、皆これを委して去る」とある。【二】烏啼霜　杜甫の哀王孫に長安城頭頭白烏、夜飛延秋門上呼とある。【三】羯兒　安祿山、胡羯の種族なるが故に云ふ。【四】天子牀　通鑑に「天寶十五載春正月、安祿山、僭號して自ら大燕皇帝と稱し、聖武と改元す」とある。【五】江頭老臣　杜甫の哀江頭に少陵野老呑聲哭、春日潛行曲江曲、江頭宮殿鎖千門、細柳新蒲爲誰綠とある。【六】萬乘西去　玄宗の蜀地に蒙塵せしを云ふ。【七】不識顏平原　通鑑に「天寶十四載冬、平原太守顏眞卿、兵を起して賊を討ち、平原司兵李平を遣し、間道より之を奏

す。上、はじめ、祿山反し、河北の郡縣、皆風靡すと聞き、歎じて曰く、二十四郡、かつて一人の義士なきかと。巡の至るに及びて、大に喜んで

勇氣燁燁虬鬚張。(一五)　勇氣燁燁、虬鬚張る。
巫(一六)歌大招(一七)客酹酒。　巫は大招を歌ひ、客は酒を酹す、
忠魂或能來故鄕。　忠魂或は能く故鄕に來らむ。

曰く、朕、顏眞卿の何の狀を作すかを識らず、乃ち能く此の如し」とある。【八】瘦馬食盡　通鑑に「尹子奇、久しく睢陽を圍む、城中食盡き、士卒と食を同じうす。茶紙すでに盡き、遂に馬を食ふ。馬盡く。雀を羅し、鼠を掘る。雀鼠、すでに盡く。巡、愛妾を出し、殺して以て士に食はしむ。遠、亦た其僕を殺す。然る後、城中の婦人を括して之を食ふ。すでに盡く。繼ぐに男女老弱を以てす。人、必死を知つて、叛く者あるなし。餘すところ、わづかに四百人、病んで戰ふ能はず」とある。【九】人奕旂　後漢書吳漢傳に「漢、蘇茂を廣樂に圍む。劉永の將周建、廣樂を救ふ。漢、馬より墮ち、膝を傷いて營に還る。諸將曰く、大敵前に在り、公傷いて臥す、衆心懼る、と。漢、乃ち勃然、創を裹んで起ち、牛を椎し、士を饗し、旦日、齊しく鼓して進む、建の軍、大に潰ゆ」とある。【一〇】碧血　莊子に「萇弘、蜀に死し、その血を藏する三年、化して碧となる」とある。【一一】賀蘭不斬　前に卷三、謁雙廟の詩中に詳述して置いた。唐書張巡傳に「御史大夫賀蘭進明、臨淮に屯し、擁兵して肯て救ふなし。巡、南霽雲をして救を乞はしむ。進明可かず。霽雲、去るに臨み、矢を抽いて佛寺の浮圖を回射し、甎に著けて曰く、吾、賊を破つて還らば、必ず賀蘭を滅ぼさむ。この矢、志るす所以なり」とある。【一二】上方劍　漢書朱雲傳に「雲曰く、願はくは、尚方斬馬劍を賜はつて、佞臣一人の頭を斷ち、以て其餘を厲まさむと。上、誰かと問ふ。對へて曰く、張禹と。上怒る。御史、雲を將て下る。雲、殿檻を攀づ、檻折る。呼んで曰く、龍逢比干に從つて地下に游ぶを得ば足れり」とある。上方は、宮中の御齋所。斬馬劍は、馬を屠る時に用ふる刀。【一三】摩挲　撫でる。【一四】塵網　塵のかかれる蜘蛛の巢。【一五】燁燁　光明の貌。【一六】巫　巫女。【一七】大招　楚辭の篇名、王逸章句に「大招は、屈原の作るところなり」とある。

【題義】張中丞は張巡、唐書の本傳に「巡は、南陽の人、博く羣書に通じ、戰陣の法を曉り、志氣高邁、開元の末、進士の第に擢んでられ、淸河の令となる。治績あり、後、眞源令に調せらる。祿山反す、巡、兵を起して賊を討ち、許遠と同じく睢陽を守る。大小四百戰、糧盡き、城陷る、賊を罵つて死す。揚州大都督を贈り、郡人廟祀す」とある。前に卷三、謁二雙廟一の詩があつたが、雙廟は許遠の故里、海寧に在るが故に、遠を主とし、そして、張巡を合祀したのであるが、この張中丞廟は、睢陽に在つて、巡を主とし、そして、許遠を合祀したのである。しかし、靑邱は、睢陽に往つたことは無いから、この詩は、唯だ題詠的に作つたのであらう。

【詩意】延秋門の上には、霜夜の寒きに烏が啼き叫び、滿目淒涼、安祿山は、曉に天子の牀に登り、僭して帝と稱した。杜甫の如き老臣は、江頭にうろつき、人知れず涙を垂れて、世の騷亂を傷み、玄宗は、萬乘の天子を以て、西、蜀に向ひ、萬里の遠き關山を越えて落ち行かれた。滿廷の公卿輩は、相率ゐて降人となり、泣きながら、草間に拜伏し、さながら羣る羊と一般である。當時、玄宗は、顏眞卿を知らず、平原に居て何をして居たかと謂はれたので、その眞卿よりも卑い職に居た睢陽の張巡といふものが、世に有らうとも思はなかつた位。張巡は、睢陽を守り、孤城落日、大小百餘戰を經て屈せず、城中糧盡き、瘦せ馬だに食ひ盡した程であつたが、人人は、創を裹んで起ち、その意氣は、決して衰へなかつた。かくて、全く力盡きて救援至らず、あはれ、堂堂たる男兒は、遂に忠義の爲に死し、血痕地を染めて碧色をなし、誰も之を埋藏する人もなかつた。ここに、賀蘭進明は、大兵

を擁しながら、その急を坐視して居たので、上方の劍を乞うて、此奴の首を刎ねなかつたのは、如何にも殘念、張巡は、死んでも、なほ之を忘れなかつたことと思はれる。千年後の今日、海邊には、張巡の祠廟が現存して居るが、滿地苔古く、あたりには、喬木叢をなし、折から秋風が吹き荒んで居る。ここに來て、塵を帶びた蜘蛛の巣に包まれた壁を撫でて、壁上の畫像を見ると、勇氣は其面に光り輝き、虬の樣な鬚は張るが如く、その氣慨も、彷彿として想像される。やがて、巫女は大招を歌ひ、客は酒を地に注いで、心ばかりの御祭をしたが、忠魂長しへに死せず、ひよつとすると、天上から、故鄉なる此地に歸つて來ることもあらうかと思はれるばかりである。

【餘論】この一首は、青邱七古中の佳作で、完璧を以て稱すべきものである。起首八句は、祿山、亂を爲せし後の形勢を述べ、徐徐として、題に入る處は、綽綽として餘裕がある。孤城落日百戰後の六句は、睢陽城守の苦を敍し、ごたごたと事實を臚列せず、あつさりと簡潔に片付けた處は、殊に手際である。千年海上見二祠廟一の六句は、その祠に詣でた時の感慨、結末二句は、殊に振つて居る。なほ、この詩は、平韻の到底格であるから、後世、王漁洋がやかましく云つて居る平仄法で押し通し、すこしも出入なく、その爲に、聲調響亮を覺ゆるは、特に注意すべきことである。

靈巖琴臺　　靈巖の琴臺

美人玉琴何處游。　美人、玉琴、何の處にか游ぶ、
(一)遺譜寫入風泉秋。　遺譜、寫して入る風泉の秋。
落葉無人登二舊樹一。(二)　落葉、人の舊榭に登るなし、
滿山明月烏啼夜。　滿山の明月、烏啼の夜。

【字解】〔一〕遺譜　殘されて居る音譜。
〔二〕舊榭　榭は屋根ある臺。又、土で高く築き上げたる臺といひ、木を用ひたる榭と稱するといふ說もある。

【題義】姑蘇志に「靈巖山巓に琴臺あり、刻字猶ほ存す」とあるだけで、これに關する傳說などは、すこしも分からない。

【詩意】ここを琴臺と稱すからには、いづれ、美人が玉琴を彈じたことなどがあつたのであらう。その美人は、何處に往つたか分からず、その殘した音譜は、秋に響く風泉の聲の中に寫し入れたであらう。今しも、木がらしの風吹きすさびて、落葉雨の如きの候、この臺に登つて古しへを弔ふ人だになく、滿山月明かにして、烏啼く夜半は、愈よさびしい。

【餘論】例の六朝短歌の遺法で、二句づつで韻を換へて居る。全體に於て、神韻綿緲、殊に後半二句は、人をして、意、自ら遠からしめる。

送二劉將軍一　　劉將軍を送る

(一)朔風吹沙復吹雪。　朔風、沙を吹き、復た雪を吹く、

笑解(二)呉鉤初欲別。　笑うて、呉鉤を解いて、初めて別れむと欲す。

酒酣擊筑和悲歌。　酒酣に、筑を擊つて悲歌に和す、

將軍出關車騎多。　將軍、關を出づれば、車騎多し。

【題義】説明に及ばぬ。但し、劉將軍の名字閲歴等は分からぬ。

【詩意】北風颯颯、沙を吹き上げ、又雪を吹き下し、塞外の荒寒は、さこそと思はれる。この時、笑つて呉鉤を解いて相贈り、愈よ御別になつた。やがて、酒酣なる時、悲歌に和して筑を擊ち、その聲中、將軍は、多くの車騎を引き具し、堂堂と關を出でて行かれるが、願はくは、克く艱苦に耐へて、一かどの功名を立てられたいと、竊に希望する次第である。

【餘論】例の詞意平淺で、格別取り立てて論ずべきものでもない。

【字解】【一】朔風　北風。【二】呉鉤　卷一、呉鉤行の條に詳述して置いた、呉地より出づる銳利なる短劍。

和杜彥正徐幼文過甫里　杜彥正・徐幼文の甫里を過ぐるに和す

(一)桃花紅雨春江狹。　桃花の紅雨、春江狹く、

舟逐飛鷗(二)艣雙夾。　舟は飛鷗を逐ひ、艣は雙夾。

(三)甫里祠前有客過。　甫里の祠前、客の過ぐるあり、

竹弓莫射(四)能言鴨。　竹弓射る莫れ、能言の鴨。

我今塵夢何時歸。　われ今、塵夢、何の時か歸らむ、

水漲夜沒祠前磯。　水漲つて、夜沒す祠前の磯。

長歌(五)滄浪拍(六)銅斗。　長く滄浪を歌つて銅斗を拍つ、

誰酹(七)先生一卮酒。　誰か先生に酹せむ、一卮の酒。

【字解】【一】桃花紅雨　桃の花が落ちて赤い雨の樣だといふ意。李賀の詩に桃花亂落如紅雨とある。【二】艣雙夾　艣が二挺、舟の兩側につけてある。【三】甫里祠　甫里に在つて、陸龜蒙・張翰・范蠡を祀り、これを三高と稱して居る。【四】能言鴨　南部新書に「陸龜蒙、鬪鴨一欄、驛使あり、彈を挾んで、その尤なるものを斃す。龜蒙曰く、この鴨、能く人語を作す、蘇州に附して上進するを待つ。使者これを斃すは奈何と。使者恐る、龜蒙曰く、吾戲るるのみ」とある。【五】滄浪　滄浪の歌、孟子・楚辭等に見えて居る、滄浪之水清兮、可以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可以濯吾足。【六】銅斗　銅製の酒器、三尺も長い柄があるといふから、丁子の類。【七】先生　陸龜蒙を指す。

【題義】甫里は、蘇州の郭外で、白蓮寺の附近。杜彥正・徐幼文の二人は、前にも見えた。二人が甫里を過ぎた詩を見せたから、これに和して作つたのである。

【詩意】桃花亂れ落ちて、さながら紅雨の如く、花片水に浮んで、さしもの春江、その狹きを覺える位。そして、舟は二挺の櫓で、飛ぶ鷗を逐うて、その進行が早い。二君は、甫里の祠前を過ぎたといふが、そこは、むかし陸龜蒙の居た處で、能く物いふ鴨も居るだらうが、それを竹の小弓で射ると、

文句の種に成るから、忘れても、竹弓を放つてはならぬ。われは、今、風塵中の夢さめやらず、何時故郷に歸るとも分からない。今しも、春の水は、次第に漲つて、夜、祠前の斷磯を沒する位、この時、銅斗を拍きつつ、滄浪の古曲を歌ひ、そして、陸先生に向つて、一杯を酹するのは、何人であらうか。予が歸らなければ、さういふ人も、外にあるまいと思ふ。

【餘論】彥正・幼文、二人の作を誦し、甫里は、おのが故郷である處から、どうか早く其地に歸りたいといふ意を述べたのである。

送董軍咨赴邊　董軍咨の邊に赴くを送る

官亭(一)風高酒旗折。　官亭、風高くして酒旗折れ、
獨騎山行滿鞍雪。　獨騎山行、滿鞍の雪。
此時我友去邊城。　この時、わが友、邊城に去る、
不是尋常送人別。　これ、尋常、人の別を送るならず。
誰憐磊(二)落萬夫奇。　誰か憐む、磊落萬夫の奇、
豪氣都成篋內詩。　豪氣、すべて篋內の詩と成る。
乍見難留十(三)日飲。　乍ち見て、留め難し十日の飲、
重來定隔幾年期。　重來、定めて隔つ幾年の期。
隨身一劍寒江上。　隨身の一劍、寒江の上、
遠事(四)西平莫惆悵。　遠く西平に事へて、惆悵する莫れ。
汝(五)祖曾遭布被兒(六)。　汝の祖、かつて遭ふ布被の兒、
白頭只作江都(七)相。　白頭、只だ江都の相となる。

【字解】【一】官亭　官設の驛亭。【二】磊落　小事に拘泥せずして、胸襟の廣きを云ふ。【三】十日飲　史記范雎列傳に「秦王、平原君に書を遺つて曰く、願はくは、君と十日の飲を爲さむ」とある。【四】西平　唐の李晟、軍功を以て西平王に封ぜらる。唐書の本傳に「帝、乃ち晟を鳳翔隴右涇原節度使行營副元帥に拜し、徙して西平郡に王たらしむ」とある。【五】汝祖　董仲舒を指す。【六】布被兒　史記平準書に「公孫弘、漢相を以て、布被、食、味を重ねず、天下の先となる」とある。【七】江都相　漢書の董仲舒傳に「董仲舒、江都の相となる」とある。

【題義】軍咨は、前に數ば見えたが、今で云へば、參謀といつた樣な幕僚である。この詩は、軍咨の職に在る董某が邊境に于役するを送つたので、董の名字閱歷等は、不詳である。

【詩意】北風、勢すさまじく、驛亭の酒旗は、その竿を吹き折られる位、ひとり、馬に跨つて山路をたどり行けば、雪が鞍に滿ちる。この時しも、わが友は、遠く邊城に向つて于役するとのことで、普通の送別とは、自然違つた譯である。君は資性磊落、萬人中の奇傑であつて、豪氣堂堂、時に雅懷を文字に寄せて、その作つた詩は、篋中に一ぱいである。ここに、君と偶然逢うたが、君を引き止めて、十日留飲することも出來ず、再び此處に來るのは、幾年を隔つることか、もとより豫測することが出來ない。君は、一劍を身に隨へ、寒江の上を過ぎ、それから、李西平の如き名將の幕賓となるので、

功名手に唾して待つべく、決して惆悵するには及ばない。君の先祖の董仲舒は、かつて布被を著て、緊縮を唱道した公孫弘に遭ひ、その手引で、江都王の相になつたが、君の榮達は、決して此に止まらざるべく、仍つて、其職務に精勵せられむことを希望する次第である。

【餘論】起四句は別時の光景、次の四句は別離の愁思、そして、終の四句は其人の榮達を囑望したので、董仲舒を引合に出したのも、決して虛泛ではない。

夜坐有感　　夜坐感あり

一鴉不驚(一)城鼓低。　一鴉驚かず、城鼓低し、
窓雨入竹暗淒淒。　窓雨竹に入つて、暗くして淒淒。
東鄰夜宴(二)歌倘齊。　東鄰は夜宴、歌倘は齊しく、
西鄰戰歿正悲啼。　西鄰は戰歿、正に悲啼。
此時掩卷誰能問。　この時、卷を掩うて誰か能く問はむ、
默坐燈前對(三)瘦妻。　默坐燈前、瘦妻に對す。

【字解】【一】城鼓低　城中には鼓樓があつて、その上、鼓を鳴らして時刻を報ずる。その聲が低いといふ意。【二】歌倘齊　歌の調子が前と變はらぬをいふ。【三】瘦妻　杜甫の北征に瘦妻面復光とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】城上の鼓聲は、陰にこもつて低く、宿れる鴉だに驚かず、窓前の雨は、叢竹に吹き入り、夜は淒淒として暗い。東鄰では、夜宴を催し、歌の調子も、前と異ならず、夜もすがら、打興じて居るが、西鄰では、主人が戰死したといふので、妻子眷屬が寄り集まつて、悲しげに泣いて居る。咫尺の地に在つて、悲歡全く異なれるは、まことに感慨に堪へられぬ。予は、書卷を掩うて、さまざまの思に沈んで居るが、誰も來て問ふ人もなく、貧苦の爲に瘦せた山妻に對し、燈前に默坐して居る。

【餘論】短幅の中、無限の感慨を藏し、そして、平易の文字を以て之を出した處は、頗る白居易に類似して居る。

雪海爲楊孟載題　　雪海、楊孟載の爲に題す

(一)江國(二)黃雲閉(三)寒節。　江國の黃雲、寒節を閉ぢ、
一鳥橫歸暮將絕。　一鳥、橫に歸つて、暮、將に絕えむとす。
問君何能海上游。　問ふ、君、何ぞ能く海上に遊ぶ、
萬頃茫茫看飛雪。　萬頃茫茫として、飛雪を看る。

【字解】【一】江國　江邊の地。【二】黃雲　雪げの雲。【三】寒節　冬の季節。【四】熱惱　熱せる煩惱。【五】鯨波　鯨の吹き上げる波。【六】山陰船　王子猷が山陰に在りし時、雪夜、興動きしに因り、舟に棹して

人間熱惱相煩煎。　人間の熱惱、相煩煎、

清夢遠欲追羣仙。　清夢遠く、羣仙を追はむと欲す。

鯨波無窮只飛渡。　鯨波無窮、只だ飛渡す、

此夜不要山陰船。　この夜、要せず山陰の船。

蓬萊玉妃下相見。　蓬萊の玉妃、下に相見る、

白鳳疏翎吹落遍。　白鳳の疏翎、吹き落して遍ねし。

月薄煙空看不分。　月は薄く、煙は空しく、看て分かず、

拂袖時驚有餘片。　袖を拂つて、時に驚く餘片あるを。

濤頭忽湧千崔嵬。　濤頭、忽ち湧く千崔嵬、

恍疑積處高城堆。　恍として疑ふ、積處、高城堆するかと。

齊州遙望皆一色。　齊州、遙に望めば皆一色、

却笑此水眞銀杯。　却つて笑ふ、この水、眞に銀杯。

瓊臺苦冷誰能宿。　瓊臺、苦だ冷かに、誰か能く宿せむ、

載安道を訪ひしこと、前に卷四、次ニ徐山人韻一の詩中に評述して置いた。【七】蓬萊玉妃　韓愈の雪の詩に從以二萬玉妃一とあり、陳鴻の長恨歌傳に「道士あり、蜀より來る、上皇の心に楊妃を念ふを知り、自ら言ふ、李少君の術あり、と。旁ねく四虛上下を求め、東、天涯を極め、蓬萊に跨り、最高山を見る。山上に樓閣多く、西廂の下に洞戸あり、東向して其門を闔ぢ、署して玉妃太眞院といふ」とある。ここでは、必ずしも、楊貴妃を指したのではあるまいが、これと同じ樣な仙女を云つたのであらう。【八】千崔嵬　崔嵬たる無數の山。【九】高城堆　高城の如く堆くなつて居る。【一〇】齊州　中原の地、李賀の詩に遙望齊州九點煙、一泓海水杯中瀉とある。【一一】銀杯　韓愈

覺後應愁體生粟。　覺後、應に愁ふべし、體に粟を生ずるを、

路斷那堪問碧桃。　路斷えて、那ぞ堪へむ、碧桃を問ふに、

歌殘猶記聽黃竹。　歌は殘して、猶ほ記す黃竹を聽くを。

回頭弱水淺復空。　頭を回らせば、弱水淺く復た空しく、

飄花倏滅隨春風。　飄花、倏ち滅して春風に隨ふ。

迺知何者非夢幻。　迺ち知る、何者か夢幻に非ざらむ、

雞鳴旭日初生東。　雞鳴いて、旭日、初めて東より生ず。

の雪の詩に、隨レ車翻ニ縞帶一、逐レ馬散ニ銀杯一とある。【一二】體生粟　さむけ立つて、皮膚が粟粒の如くなる。東坡の雪の詩に、凍合ニ玉樓一寒起レ粟、光搖ニ銀海一眩生レ花とある。【一三】碧桃　尹喜内傳に「老子、西游して太眞王母を省し、ともに碧桃紫梨を食ふ」とある。【一四】黃竹　穆天子傳に「日中大寒、北風雪を雨ふらす、天子、詩三章を作り、以て民を哀む、乃ち黃竹に宿す」とある。【一五】弱水　鴻毛も浮ばず、越ゆべからざる西方の仙境に在る川、十洲記に「鳳麟洲は、西海の中央に在り、洲の四面に弱水あつて、之を繞る、鴻毛も浮ばず、越ゆべからざるなり」とある。

【題義】楊孟載は卽ち楊基、題下の原注に「楊、かつて夢に海を過ぎ、因つて、以て自ら號す」とある。この詩は、楊基の依賴に應じ、雪海てふ雅號に就いて、その由來等を敍述したのである。

【詩意】江國に低れこめたる雪げの黃雲は、冬の季節を閉ぢ、一鳥空を横ぎつて歸り、暮には、その跡を絕つて見えなくなりさうである。如何にして、君は、海上に游び、萬頃の茫茫たる水面に降り注ぐ飛雪を看られたか。人間には熱せる煩惱があつて、その爲に、君も心中煩煎し、反對に夢中遠く羣

仙を追はむとし、やがて海上に來て見ると、鯨の吹き出す波は涯際なけれども、そこを一氣に飛び渡つて、格別、山陰の王子猷の如く夜船を棹すにも及ばなかつた。かくて、海を橫絕して蓬萊に到著すると、玉妃が院から下りて來て遇つたが、雪は、白鳳凰の疏翮が吹き落される樣である。その時、月色薄く、煙は晴れかかり、見ても、はつきりとはせず、袖を拂ふと、その餘片がひらひらと落ちる。見わたせば、濤頭には、崔嵬たる千峰を湧き起し、それが積つた處は、高城の堆くなつて居るかと疑ふばかり。はるかに、中原の地を望めば白一色、海水は唯だ銀杯の如く小さく見える。瓊臺は、雪中殊に冷かで、到底留宿することが出來ず、夢が覺めても、なほ皮膚に粟を生じた樣な氣がしたであらう。ここに至つて、仙凡路すでに斷え、碧桃が如何なつたかと問ふことも出來ず、歌聲すでに罷めども、それが黃竹の曲であつたことだけは覺えて居る。頭を回らせば、西方の弱水と雖も、淺くなつた揭句には、無くなつて仕舞ふし、花の飄る樣な雪も、春風に隨つて、見る間に消えるので、如何なる物でも、夢幻に非ざるはなく、その夢幻境の忽然として消えた時分、雞の聲花やかに、曈曨たる旭日は、東に上り、この世界は復活し、君は再び塵底の人となつた。

【餘論】雪中の海を飛渡して、仙界に至つたといふは、夢とはいへ、極めて幻妙不可思議である。そこで、この首は、虛無恍惚、務めて游仙の體を爲し、文字の怪詭も、亦た之に稱うて居る。

送王邑長彥强　　王邑長彥强を送る

雨昏沙澈(一)蒹葭溼。　雨は昏くして、沙澈、蒹葭溼ひ、

離人暮逐江鴻(二)集。　離人、暮に江鴻の集まるを逐ふ。

田家回首隔村遙。　田家、首を回らせば、村を隔てて遙に、

煙路逶迤(三)一帆入。　煙路逶迤として一帆入る。

縣齋(四)明日寫秋吟。　縣齋、明日、秋吟を寫す、

古城高樹淸砧急。　古城高樹、淸砧急なり。

【字解】(一) 沙澈　澈は入江。(二) 江鴻　江天を飛ぶ雁。(三) 逶迤　めぐる。(四) 縣齋　縣令の官舍。

【題義】邑長は邑宰、卽ち縣令。この詩は、王彥强といふ人が縣令となつて、某地に赴任するを送つたのである。

【詩意】雨は昏く降りそそぎ、入江の沙地に生ふる蒹葭は、盡く溼ひ、風景、慘澹たる折しも、君は、離人となつて、江天を飛ぶ雁の止まれるを逐うて、旅路に登られる。首を回らせば、田家は村を隔てて遙に、煙立ちこむる水路をめぐつて、一帆は過ぎ行くのである。明日、縣令の官舍に落ちつけば、古城の高樹、風を帶びて、砧うつ聲、急に聞こえ、君は兀坐して、秋を詠じた詩を寫されるであらう。

【餘論】送られるのも、格別知名の人ではなく、その任地も特記する價値もない位。折角ながら、面白い構想を試むるに由なく、唯だ尋常口頭の挨拶に代へた位の者で、その平淺庸近なるは、もとより免れぬ處である。

范魏公手書伯夷頌爲其裔孫天章題

范魏公の手書、伯夷頌、その裔孫天章の爲に題す

有宋名臣誰第一。　有宋の名臣、誰か第一、
公爲國家眞輔翼。　公は國家の爲に眞に輔翼。
豐(一)功茂(二)烈何煌(三)煌。　豐功茂烈、何ぞ煌煌たる、
信與日月爭輝(四)赫。　信に日月と輝赫を爭ふ。
力扶風(五)化成唐(六)虞。　力めて風化を扶けて唐虞と成し、
苦(七)進忠(八)謨同契(九)稷。　苦に忠謨を進めて契稷に同じ。
平生文詞耀金石。　平生の文詞、金石に耀き、
乘暇亦嘗躬翰墨。　暇に乘じて、亦た嘗て翰墨を躬らす。

丰(一〇)姿勁(一一)直儼端(一二)人。　丰姿勁直、端人儼たり、
氣韻剛(一三)方著心(一四)畫。　氣韻剛方、心畫に著はる。
伯(一五)夷況是聖之淸。　伯夷は、況んや是れ聖の淸、
貪(一六)夫可廉懦可立。　貪夫も廉なるべく、懦も立つべし。
當時書寫豈無(一七)謂。　當時書寫、豈に謂なからむや、
要示後人爲鑑(一八)格。　後人に示して鑑格と爲すを要す。
三百年來筆尚新。　三百年來、筆、尚ほ新なり、
敬翫如親覩顏色。　敬翫、親しく顏色を覩るが如し。
世間至寶誠難得。　世間の至寶、誠に得難し、
貽爾子孫宜什(一九)襲。　爾の子孫に貽して、宜しく什襲すべし。

【字解】【一】豐功　大功。【二】茂烈　茂は其多きを云ひ、烈は其高きをいふ。【三】煌煌　光り輝く貌。【四】輝赫　光明。【五】風化　德を以て敎化すること。【六】唐虞　堯舜。【七】苦　ねんごろに。【八】忠謨　君國の爲を思つてする謀畫。【九】契稷　ともに堯舜時代の名臣。契は士師に官して殷の祖。稷の本名は棄、稷に后として民に稼穡を敎へたので、周の祖。【一〇】丰姿　姿貌に同じ。【一一】勁直　力づよくして曲らざること。【一二】端人　正しい人、書畫譜に「唐の柳玭の書、筆筆端人正士」とある。【一三】剛方　骨力あつて方正なること。【一四】心畫　書をいふ。書は、その人の精神を畫き出すからである。揚子法言に「言は心聲なり、書は心畫なり、聲畫形して、君子小人見はる」とあり、魏了翁が三家の書を論じたる語に「石才翁は才氣豪贍、范德孺は器業端重、文與可は操韻淸逸、世の人物を品藻するもの、もとより、この論あり。今その心畫を觀るに、各〻その人と爲りの如し」とある。【一五】伯夷況是聖之淸　孟子に「伯夷は聖の淸なる者なり、伊尹は聖の任なる者なり、柳下惠は聖の和なる者なり、孔子は聖の時なる者なり」とある。【一六】貪夫可廉懦可立　同じく孟子に「伯夷は、目に惡色を視ず、耳に惡聲を聽かず、その君に非ざれば事へず、その民に非ざれば使はず、治まれば進み、亂るれば退く。横政の出づるところ、横民の止まるところ、鄕人と處り、朝衣朝冠を以て塗炭に坐するが如きを思ふなり。紂の時に當りて、北海の濱に居るは、以て天下の淸を待つなり。故に伯夷の風を聞くものは、頑夫も廉、懦夫も志を立つるあり」と見ゆ。【一七】無謂

謂は、いはれ、理由。【一八】餞格　格は正す。【一九】什襲　關子に「宋人、燕石を得て、以て寶と爲すや、革匱十重、緹巾十襲して之を藏す」とある、幾重にも包む。

【題義】范仲淹を魏公と稱するは、前に卷九、偃松行の詩中に注して置いた通り、紹興の初に追封されたからである。仲淹の閲歴は、宋史の本傳に「吳縣の人、字は希文、生まれて二歳にして孤、母、更めて長山の朱氏に適く。その姓に從ひ、説と名づく。すでに長じ、感泣、母に辭して去り、戚同文に依つて學ぶ。祥符の進士に擧げられ、はじめて、姓に歸り、名を更ふ。晏殊、薦めて祕閣校理となす。感激して、天下の事を論ずる毎に、奮つて身を顧みず。一時の士大夫、矯厲して氣節を尙ぶは、仲淹より之を倡ふ。仁宗の朝、吏部員外郎に遷り、開封府に權たり、呂夷簡に忤ひ、罷められて饒州に知たり。元昊反す、龍圖閣直學を以て、夏竦に副として陝西を經略し、邊を守ること數年、號令簡明、士卒を愛撫す。羌人、呼んで龍圖老子といひ、夏人亦た相戒めて、敢て其境を犯さず、曰く、小范老子、胸中自ら數萬の甲兵あり、と。旋つて、樞密副使に拜せられ、參知政事に進む、中外、その功業を想望す。仲淹、倖濫を裁削し、官吏を考覈し、僥倖する者に悅ばれず、出でて河東陝西宣撫使となり、戶部侍郎に遷り、靑州に遷る。會ま病んで潁州を請ひ、未だ至らずして卒す、兵部尙書を贈り、文正と諡す。丹陽集及び奏議尺牘あり。仲淹、內剛にして外和、秀才たりし時、天下を以て己の任となす。かつて言ふ、天下の憂に先つて憂へ、天下の樂に後れて樂む、と。尤も善を樂み、施予を好み、義田を置き、以て族人を贍はす、卒するの日、聞くもの歎息せざるなし」とある。伯夷頌は、范仲淹の自ら作つたもので、丹陽集には載せてあることと思ふ。天章の名字閲歴等は不詳。この詩は、范仲淹の手づから寫したる伯夷頌が其家に保存されてある處から、その末孫の天章といふものに賴まれて作つたのである。

【詩意】宋代の名臣中、誰が第一かといふと、卽ち范仲淹であつて、公は、國家の爲に、眞正の輔佐羽翼となり、その大功は、多くして且つ盛に、煌煌として耀きわたり、天上の日月と光輝を爭つて居る。公は、力の限りを盡して風敎を扶け、君をして、堯舜たらしめむとし、懇に忠良なる謀畫を進めて、全く契や后稷と同じである。その平生作つた文詞は、金石に刻せられて、後世を照耀して居るが、閒暇なる折ふしは、親ら翰墨に攜はれた。その書は、姿が勁直にして、端人の儼然たるが如く、氣韻は、淸剛方正にして、心畫の名に負かず、ありありと見えわたつて居る。まして、この文章は、伯夷の頌といひ、伯夷は孟子から、聖の淸なるもの、その風を聞かば、貪夫も化して廉潔となるべく、儒夫も志を立てるとさへ云はれた位。當時、公が手づから自作の此頌を寫されたのは、決して無意味ではなく、後人に示して、鏡となし、格式と爲さしめむとしたのであらう。公の死後、今日に至るまで、三百年になるが、敬んで、その筆蹟を展玩すると、親しく、顏色を見て、御目にかかつた樣な氣がする。かういふ至寶は、世間に於て、まことに得がたいものであるから、君は、子孫に傳へ、幾

重にも包んで大切に保存せねばならぬ。

【餘論】起六句は、仲淹の功業を敍し、次の四句は、文詞より其書に及び、次の四句は、伯夷頌に就いて述べ、結四句は、その至寶たるべきことを言うて、珍藏せむことを囑したのである。

送劉冠軍

劉冠軍を送る

朔風吹雪復吹沙。　朔風、雪を吹き、復た沙を吹く、

壯士此日行辭家。　壯士、この日、行く〻家を辭す。

酒酣悲歌和擊筑。　酒酣にして、悲歌、擊筑に和す、

四座離人涙相續。　四座の離人、涙相續ぐ。

黃鵠一擧其奈何。　黃鵠一擧、其れ奈何、

同心遠別今無多。　同心の遠別、今多きなし。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】北風は雪を吹き下したり、沙を吹き上げたりして、寒景蕭條。この時しも、君は家を辭して、遠征の途に上られる。やがて、別筵酒酣に、擊筑の聲に和して、悲歌を唱へ出せば、滿座の人は、もと客子たる身の涙が止め度なく流れる。君は黃鵠の擧がるが如く、千里の遠くに往かれるのは、どうも仕方が無いことで、それに就けても、同心の友の遠別は、他に其例なく、まことに斷腸の思に堪へられぬ。

【餘論】この詩は、前に見えた送劉將軍の詩と極めて相類し、朔風吹雪復吹沙は、彼に酒酣擊筑和悲歌に作つてある。しかし、措辭上から見ると、此は稍や冗長、彼は簡勁、もしかすると、此は初稿で、後に彼の如く改訂したのではあるまいか。

【字解】【一】壯士　劉冠軍を指す。【二】離人　故郷を離れて他に寄寓して居る人。【三】黃鵠一擧　顏師古の急就篇注に「黃鵠は一擧千里、その鳴聲鵠鵠」とあるし、合璧事類に「鵠は禽の大なるもの、色白し、又黃なるものあり、善く高く翔る、湖海江漢、間ま之あり」と記してある。

奉橘圖

橘を奉る圖

堂前紅橘吹香早。　堂前の紅橘、香を吹いて早く、

堂上白頭人欲老。　堂上白頭、人、老いむと欲す。

韓家公子勝陸郎。　韓家の公子、陸郎に勝る、

摘來長帶秋林霜。　摘み來つて、長く帶ぶ秋林の霜。

【字解】【一】紅橘　本草綱目に「朱橘は、小にして、色赤きこと火の如し」とある、わが邦でも、べに蜜柑と稱する一種があつて、大方それだらうと思はれる。【二】韓家公子　名字等は不詳。【三】陸郎　吳志陸

婁江別後親應健。　婁江別後、親、應に健なるべし、
毎見畫圖如見面。　畫圖を見る毎に、面を見るが如し。
願君榮顯親平安。　願ふ、君は榮顯、親は平安、
年年薦橘堆金盤。　年年、橘を薦めて金盤に堆きを。
君有阿婆[四]我無母。　君に阿婆あり、我に母なし、
題詩對此欷歔[五]久。　詩を題せむとし、此に對して、欷歔久し。

績傳に「績、年六歲、九江に於て袁術に見ゆ。術、橘を出す。績、三枚を懷にして去り、拜辭して地に墮す。術、謂つて曰く、陸郎、賓客となつて、橘を懷にするか。績、跪いて答へて曰く、歸つて母に遺らむと欲す、と。術、大に之を奇とす」とある。【四】阿婆　老母。【五】欷歔　すすり泣き。

【題義】 奉橘圖は、韓某が親ら橘を其母に進める處を畫かせたので、母は婁江に居り、おのれは南京に居たらしく、作者は舊知の間柄である處から、その孝思を愛でて、この詩を題したものと見える。橘は、普通、たちばなと訓すれども、實際は、かかる木なく、矢張、蜜柑であることは、本草綱目に明かである。

【詩意】 堂前の紅蜜柑は、香を吹いて熟すること早けれども、堂上の母は、白髮頭で、大分老いかかつて居る。韓家の公子の孝心深きことは、古しへの陸績にも勝り、秋林の霜を帶びた儘なる其實を摘んで、母に進めたことがあつて、それが現に此に畫にかかれて居る。公子は、婁江なる其母と別れて、ひとり此地に寄寓して居るが、母も相變らず壯健なるべく、そして、その畫を見ると、いつでも母の顏を見る樣な想がするとのことである。願はくは、君は次第に出世をなし、母は何時でも無事であり、そして、年年、金盤に堆きばかりの蜜柑を進める樣にして欲しいと思ふ。君には、母があつて、まことに結構であるが、われは、幼時母を喪ひ、孤獨の身は、まことに寂しい。そこで、詩を題せむとして、この畫に對すれば、感慨窮まらず、やや久しく、啜り泣をして居た位である。

【餘論】 一應無難に、且つ遺憾なく言ひ終せて居る。結末二句は平淺なれども、當意卽妙、作者の心情が窺はれて、覺えず、讀者をして黯然たらしめる。

309
65

終

續國譯漢文大成

文學部　八十二

309
65

始

續國譯漢文大成

文學部第八十二册（第二十一帙の二）

高靑邱詩集　三の二

吉田梓郎氏　寄贈本

309
65

高青邱集　巻十一

長短句體

青邱子歌

青邱子の歌

江上有青邱、予徙家其南、因自號青邱子、閒居無事、終日苦吟、間作青邱子歌、言其意、以解詩淫之嘲。

【訓讀】江上に青邱あり、予、家を其南に徙し、因つて、自ら青邱子と號す。閒居無事、終日苦吟、このごろ、青邱子の歌を作り、其意を言ひ、以て詩淫の嘲を解く。

青邱子。
臞(一)而清。
本是五(二)雲閣下之
仙(三)卿。

青邱子、
臞にして清、
本と是れ五雲閣下の仙卿。

【字解】【一】臞而清　瘦せては居るが風骨極めて清い。【二】五雲閣　五色の彩雲の棚引く樓閣、無論、天上に在る。【三】仙卿　仙人仲間。葛洪の枕中書に「僞羿は太極の仙卿たり」とある。【四】降謫　罪を得

何年降(四)謫在世間。 何の年か降謫して世間に在る、
向人不道姓與名。 人に向つて道はず姓と名とを。
(五)躡屩厭遠游。 屩を躡んで遠游を厭ひ、
(六)荷鋤懶躬耕。 鋤を荷うて躬耕に懶し。
有劍任(七)鏽澁。 劍あるも鏽澁に任かせ、
有書任(八)縱横。 書あるも縱横に任かす。
不肯(九)折腰爲五斗米。 肯て腰を折つて五斗米の爲にせず、
不肯(一〇)掉舌下七十城。 肯て舌を掉つて七十城を下さず。
但好覓詩句。 但だ好んで詩句を覓め、
自吟自酬(一一)賡。 自ら吟じて自ら酬賡。
田間曳杖復(一二)帶索。 田間、杖を曳いて復た索を帶び、
傍人(一三)不識笑且輕。 傍人識らず、笑ひ且つ輕んず。
謂是魯(一四)迂儒。 謂ふ是れ魯の迂儒、

たろに因り、人界に謫せられて下ろ。【五】躡屩 屩は蹻ぐつ。虞卿が屩を躡んで、趙の孝王に見えたといふことが、史記の本傳に見えて居る。【六】荷鋤 すきを肩にする。【七】鏽澁 さびて澁る、李綱の劍の詩に鐵花鏽澁蒼蘚痕とある。【八】任縱横 散らかつた儘にしてある。【九】折腰爲五斗米 晉書の陶潛傳に「彭澤の令となる。郡、督郵を遣して至らしむ。縣吏白す、應に束帶して之を見るべし、と。潛曰く、吾、五斗米の爲に腰を折り、拳拳として鄕里の小人に事ふる能はざるかと。印を解いて縣を去る」とある。五斗米は、僅少の俸祿。【一〇】掉舌下七十城 史記淮陰侯傳に「酈通、信に謂つて曰く、酈生は一士、軾に伏して三寸の舌を掉ひ、齊の七十餘城を下す」とある。【一一】

(一五)楚狂生。 楚の狂生。
青邱子聞之不(一六)介意。 青邱子、これを聞けども意に介せず、
吟聲(一七)出吻不絕咿(一八)咿鳴。 吟聲、吻を出でて、咿咿の鳴を絕たず、
朝吟忘其飢。 朝吟、その飢を忘れ、
暮吟散不平。 暮吟、不平を散ず。
當其苦吟時。 その苦吟の時に當つて、
(一九)兀兀如被(二〇)醒。 兀兀として醒を被るが如し。
頭髮不暇櫛。 頭髮、櫛るに暇あらず、
家事不及營。 家事、營むに及ばず、
兒啼不知憐。 兒啼けども、憐むを知らず、
客至不果迎。 客至れども、迎ふるを果さず、
不憂(二一)回也空。 回也の空しきを憂へず、

酬賡 自分で之に和する。【一二】帶索 繩を帶とする。列子に「榮啓期、鹿裘にして索を帶び、琴を鼓して歌ふ」とある。【一三】不識 識別せぬ。【一四】魯迂儒 叔孫通一輩を云ふ。【一五】楚狂生 鳳兮の歌を作つた接輿は楚狂と稱せられて居た。【一六】不介意 心にかけぬ、何とも思はぬ。【一七】出吻 脣から漏れ出る。【一八】咿咿 もの言ふ聲。【一九】兀兀 性體なき貌。【二〇】被醒 醒は醉。【二一】回也空 回は顏回、字は子淵、論語に「賢なるかな回や、一簞の食、一瓢の飮、陋巷に在り、人は其憂に勝へず、回や其樂を改めず、賢なるかな回や」とあり、又論語に「回や其れ庶いか、屢ば空し」とあるから、その簞瓢も、往往にして、空しかつたのである。【二二】猗氏盈 猗頓の富貴、

不慕(二二)猗氏盈。　猗氏の盈つるを慕はず、

不慙被(二三)寛褐。　寛褐を被るを慙ぢず、

不羨垂(二四)華纓。　華纓を垂るるを羨まず、

不問(二五)龍虎苦戰鬪。　問はず、龍虎の苦に戰鬪するを、

不管(二六)烏兎忙奔傾。　管せず、烏兎の忙はしく奔傾するに。

向水際獨坐。　水際に向つて獨坐し、

林中獨行。　林中に獨行し、

(二七)斵元氣。　元氣を斵り、

搜(二八)元精。　元精を搜る、

(二九)造化萬物難(三〇)隱情。　造化萬物、情を隱し難く、

冥茫八(三一)極游(三二)心兵。　冥茫たる八極、心兵を游ばしめ、

坐令(三三)無象作有聲。　坐に無象をして有聲と作らしむ。

微如破(三四)懸蝨。　微は懸蝨を破るが如く、

水經注に「猗頓は、魯の窮士なり。朱公の富を聞き、往いて術を問ふ。朱公曰く、子、速に富まむことを欲すれば、當に五牸を畜ふべしと。ここに於て、十年の間、その息、計るべからず、以て富を猗氏に興す」とある。【二三】寛褐　おのが身には大き過ぎる緜衣、だぶだぶの破衣。【二四】華纓　纓は冠の紐、官職あるもの用ふる立派なる冠の紐。【二五】龍虎苦戰鬪　英雄豪傑の飽くまで戰爭すること、侯圭の割鴻溝賦に龍爭虎鬪兮萬象交奔とあり、韓愈の詩に「龍疲虎困割川原」とある。【二六】烏兎忙奔傾　烏兎は日月、日月が忙はしく奔り傾く。【二七】斷元氣　宇宙の元氣を削り取る。【二八】元精　天地の至精を搜り求める。【二九】造化萬物　宇宙間の森羅萬象。【三〇】難隱情

壯若屠(三五)長鯨。　壯は長鯨を屠るが若く、

清同吸(三六)沆瀣。　清は沆瀣を吸ふに同じく、

險比排(三七)崢嶸。　險は崢嶸を排するに比す。

(三八)靄靄晴雲披。　靄靄として晴雲披き、

(三九)軋軋凍草萌。　軋軋として凍草萌す。

(四〇)高攀天根探月窟。　高く天根を攀ぢて月窟を探り、

(四一)犀照牛渚萬怪呈。　犀は牛渚を照らして萬怪呈す。

妙意俄同鬼神會。　妙意、俄に鬼神と同じく會し、

佳景每與江山爭。　佳景、每に江山と爭ふ。

星虹助(四二)光氣。　星虹、光氣を助け、

煙露滋華英。　煙露、華英を滋す。

聽音諧(四三)韶樂。　音を聽けば韶樂に諧ひ、

(四四)咀味得(四五)大羹。　味を咀んで大羹を得たり。

情は實情。【三一】八極　宇宙を云ふ、八は大數。【三二】心兵　わが心を兵となして攻め立てる。韓愈の詩に冥茫闢心兵とある。【三三】無象　形態なきもの。【三四】破懸蝨　蝨は、だに、列子に「紀昌、射を飛衞に學ぶ。飛衞曰く、視ることを學んで後に可なりと。昌、氂を以て、蝨を牖の南面に懸け、之を望むこと三年の後、車輪の如し、乃ち燕角の弧、朔蓬の簳を以て之を射り、蝨の胸を貫いて、懸、絕えず」とある。【三五】屠長鯨　楊烱の碑文に戮封豕而斬長鯨とある。【三六】吸沆瀣　正韻に「沆瀣は海氣、一に曰く、露氣」とあり、東方朔の七諫に含沆瀣以長生とある。普通に仙人の飲む酒といつて居る。【三七】排崢嶸　峨峨たる山を排列する。【三八】靄靄　もやも

世間無ニ物爲一我娯。　世間、物の我が娯を爲すなく、
自出ニ金石一相轟鍧。　自ら金石を出でて相轟鍧。
江邊茅屋風雨晴。　江邊の茅屋、風雨晴れ、
閉レ門睡足詩初成。　門を閉ぢ、睡足つて、詩、初めて成る。
叩レ壺自高歌。　壺を叩いて自ら高歌し、
不レ顧ニ俗耳驚一。　俗耳の驚くを顧みず。
欲ニ呼ニ君山老父一攜ニ　君山の老父を呼んで、諸仙弄するとこ
諸仙所レ弄之長笛一。　ろの長笛を攜へしめ、
和ニ我此歌一吹ニ月明一。　わが此歌に和して、月明に吹かしめむ」と欲す。
但愁欻忽波浪起。　但だ愁ふ、欻忽波浪起り、
鳥獸駭叫山搖崩。　鳥獸駭叫、山搖崩、
天帝聞レ之怒。　天帝、これを聞いて怒り、
下遣ニ白鶴一迎。　下、白鶴を遣して迎へしめ、

やしたる貌。【三九】 軋軋　氣を得て勢だつ貌。【四〇】 高攀天根探月窟　天の根脚に攀ぢ登つて、月宮の洞窟を探險する。邵雍の詩に「乾遇レ巽時爲ニ月窟一、地逢レ雷處見ニ天根一」とある。【四一】 犀照牛渚　晉書に「溫嶠、牛渚に至る、水深くして測るべからず、世云ふ、その下に怪物多し、と。嶠、遂に犀角を燃やして之を照らす、須臾にして、水族火を覆ひ、奇形怪狀なるを見る。その夜、夢に人謂つて曰く、君と幽明道別、何の意か相照らすや」とある。【四二】 滋華英　滋は潤す、華英ともに花。【四三】 韶樂　韶は舜の樂、善を盡し又美を盡したものと稱せられて居る。【四四】 咀味　咀は味ふ。【四五】 大羹　結構な吸ひ物。【四六】 出金石　韓詩外傳に「原憲、環堵の室、商頌を歌ふ、聲、天地に淪んで金石より出づるが如し」とある。【四七】 轟鍧　鍧は金石の聲、鳴り轟く。【四八】 叩壺　唾壺を叩く、朱松の詩に「客醉高歌叩ニ缺壺一」とある。【四九】 君山老父　前に卷五、松江亭の詩中にも引いたが、博異志に「賈客呂鄕筠、善く笛を吹く、月夜、君山の側に泊し、酒を命じて笛を吹く、忽ち老父あり、舟を拏して來り、袖より笛三管を出す、その一は大きさ合拱の如く、次は常の如く、その一は絕えて小、細筆管の如し。鄕筠、老父に請うて一吹せしむ。老父曰く、大なるものは上天の樂に合し、次は仙樂に合し、小なるものは、老身、朋儕と樂むところのもの、庶類雜つて之を聽く、未だ曲を終るべきや否やを知らず、と。言畢り、笛を抽いて三聲を吹く。湖上風動き、波濤沆瀁、魚鼈跳噴、五聲六聲、君山の上、鳥獸叫噪、月色昏暗、舟人大に恐る。老父遂に止め、數杯を引滿し、舟を棹して去り、隱隱として波間に沒す」とある。【五〇】 欻忽　不意に。【五一】 狡獪　いたづら、惡戲。【五二】 飛珮　飛び廻く玉佩。【五三】 瑤京　天上の白玉京をいふ。

不レ容ニ在レ世作ニ狡獪一。　世に在つて狡獪を作すを容さず、
復結ニ飛珮一還ニ瑤京一。　復た飛珮を結んで瑤京に還るを。

【題義】 この詩は、作者が詩人としての本領を詠出したので、序の意味は、下の如くである――婁江の岸に青邱といふ小山があつて、予は家を其南麓に徙し、山の名に因んで青邱子と號した。閒居無事、唯だ終日苦吟して居るばかり、この頃、この歌を作つて、おのが本志を述べ、世人から詩淫といはれた其嘲を解かうとした――といふのである。この詩は、至正十八年戊戌、吳越に游ぶ少し前の作に係り、青邱は、年、方に二十三であつた。

【詩意】 おのれ青邱子、瘦せては居るが、風骨いとも淸く、それも其筈、もとは天上なる五雲閣下に羣れつどうて居た仙人仲間の隨一人であつて、何時頃か知らぬが、一寸した罪を得て、この塵世に降

謫され、人に向つて本當の姓名を名乘つたことはない。青邱子は、藁ぐつを穿いて遠游することも、厭だといふし、鋤を肩に荷うて躬ら耕して食ふのも、面倒臭いといつて居る。劍はあれども、銹び放題、書物はあつても、散らかした儘で、少しも片付けない。それから、腰を屈めて長官に拜謁し、月に米五斗を頂戴する樣な小役人となることをも肯んぜず、一たび舌を掉へば、齊の七十餘城を下すといふ古しへの辯士の眞似を爲さうとは思はぬ。ただ、平生好んで詩句を案じ、自ら吟じて自ら之に和し、一人で得意がつて居る。田間に杖を曳いては、繩を帶とし、如何にも、ひどい風で散歩をして居る處から、傍人は、その何人たるかを識別せず、風體の餘り賤しきを笑ひ、且つ之を輕蔑し、これは、世事に融通の利かぬ魯の迂儒か、滄浪の歌を唱へた楚の狂生の類であらうといつて居る。青邱子は、かかる噂を聞いても、一向心にかけず、相變らず、詩を吟じ、その聲、唇より出でて、絕えずううといつて呻つて居る。かくて、朝に吟じては其飢を忘れ、暮に吟じては不平を散じ、終年詩を吟じてさへ居れば、それで滿足して居る。が、その苦吟の時に當つては、まるで正體なく、さながら、酒に醉つたと一般、頭髮も櫛を入れる暇なく、一家の事も全く始末をせず、子供が啼いても、可哀相とも思はず、客が來ても、請じ入れやうともせず、顏回の如く簞瓢屢ば空しくなつても、決して心配せず、さうかといつて、猗頓の樣な富貴を慕ひもせず、だぶだぶの古衣を著ても、恥とせず、大官輩が立派な冠纓を垂れて居るのを羨ましいとも思はず、世の騷亂に際し、龍の如く虎の如き英雄豪傑が飽くまで戰爭を續けても、その結果は如何と問ふでもなく、日月が忙しげに奔り傾いても、少しも關係しない。時には水邊に往つて獨坐し、時には林中をたどつて獨行し、宇宙の元氣を削り取り、天地の至精を搜り求める。かうなると、森羅萬象、この人に向つて實情を隱すことなく、因つて、容易に造化の祕奥に參透するを得、身は此に在るも、心魂は冥茫たる宇宙の隅隅に游んで居る。かうして得たところの感想が卽ち詩となるので、形體なきものを化して、聲響を發するものと爲らしめる。その詩は、巨細遠近、兼ね到らざるなく、あらゆる委趣を盡して居て、その微細なることは、吊してある蝨に射中てるが如く、その壯烈なることは、海上に浮ぶ大鯨を屠るが如く、その淸澄なることは、仙家沆瀣の漿を吸ふが如く、その奇險なることは、崢嶸たる亂峰を目前に排列した如くであるし、もやもやして居る晴天の雲も、これが爲に披かれ、軋軋として生氣を含んで居た枯草も、これが爲に俄に萌えて出る。或は高く蒼天の根脚を攀ぢて、月宮の窟を探險し、或は犀角を燃やして、牛渚を照らすと、さまざまの怪物が殘りなく見らるるが如く、如何なる隱祕でも、詩人の筆を以てして盡さぬものはない。詩中に含める妙意は、鬼神とならば會得することが出來るが、なかなか、人間に分からず、詩中に畫き出されたる佳景は、江山と其勝を爭ふ位。その光氣は、星や虹が之を助くるが如く、その華英は、煙や露が之を潤すが如く、その詩の發する音は、かの舜の大韶の樂に諧うて、美を盡し善を盡し、その詩の有する味は、結構なる羹と同じで、甘醎その中を得て居る。そこで、詩を作るより外、こ

の世に於て我が娛樂とするものなく、聲調の瀏亮なるは、金石より出でて、鳴り轟くが如くである。やがて起き上ると、丁度、詩が出來た。そこで、唾壺を扣いて、聲高に自ら之を歌ひ、俗人の耳を驚かすをも顧みない。出來るならば、かの君山の老父を呼び來り、天上の諸仙が吹きすさぶといふ長笛を攜へ來らしめ、わが此歌に和して、月明の下に吹き鳴らして貰ひたい。但し、愁ふるところは、波浪俄に起り、鳥獸は駭いて叫び、山嶽は搖いで崩れむとし、大へんなことに成りかけると、天帝は之を聞いて、ひどく立腹せられ、わざわざ下界に白鶴を降して之を迎へしめ、この世に在つて、惡戲を恣にすることを許されず、そこで、仕方がないから、風に吹き靡く腰佩を締め直して、天上の玉京に歸らねばならぬ樣に成るかも知れぬといふ其一事のみである。

江邊の茅屋、風雨初めて晴れ、四方の景色の鮮かに見える時、門を閉ぢて、十分に晝睡を爲し、

【餘論】この詩は、靑邱集中の冠冕たるのみならず、あらゆる漢詩中に、稀に見るところの傑作であつて、これを世界の文壇に出した處で、決して、引けは取らぬと思ふ。靑邱その人は、詩人の如何なるものかを自覺して居たので、その言ふところは、今日卓絕したる美學者の言ふところと、さながら符節を合する樣である。支那の論詩家は、詩經の大序を以て金科玉條となし、詩は溫柔敦厚を旨とすべく、言ふもの罪なく、聞くもの戒むるに足るといふことを以て、詩の本旨としたが、憐むべし、彼等は、詩を以て道義に隸屬せしめ、文學と敎訓とを混同し、從つて、詩の品位を下落せしめたことを覺らなかつたのである。靑邱が此詩に述ぶるところは、詩人は世の俗人に容れられない、詩人の本領は、宇宙の神祕を探るに在る、さうして出來たものが、眞正の詩であるといふことを極言したので、起首より不㆑管烏兎忙奔傾に至るまでは、詩人の生活狀態を敍し、向㆓水際㆒獨坐より自出㆓金石㆒相轟鏗に至るまでは、作詩より其詩の價値に及び、江邊茅屋風雨晴より以下は、詩の極妙なるものは、絕大の勢力を有するといふことを象徵的に述べたのである。通篇長短錯落、句法の變化を極むると同時に、聲調も申し分なく、つまり、內容と形式と、共に間然するところなきもので、それにつけても、靑邱が尋常一樣、批風抹月の徒に非ざることは、もとより言を俟たない。

登㆓陽山絕頂㆒　　陽山の絕頂に登る

我登㆓此山巓㆒。　われ此山の巓に登り、
不㆑知㆓此山高㆒。　この山の高きを知らず。
但覺羣山總在㆑下。　但だ覺ゆ、羣山すべて下に在り、
坐撫㆓其頂㆒同㆓兒曹㆒。　坐して其頂を撫して、兒曹に同じきを。
又見太湖動㆓我前㆒。　又見る、太湖、わが前に動くを、

【字解】【一】赤城杖　陸游の詩に倚㆑天山作㆓海濤㆒傾、看遍人間兩赤城とあつて、その自注に「靑城山、一名赤城山、而して天台の赤城山は乃ち余の舊游」とあり、又吳志趙達傳の注に「仙人介象、諸方術を善くす。吳主、聞いて之を徵す。吳主、

洶湧三十萬頃煙波濤。　洶湧三十萬頃の煙波濤。
長風吹人度層嶂。　長風人を吹いて層嶂を度り、
不用仙翁赤城(一)杖。　用ひず仙翁赤城の杖。
峰迴秋(二)礙海鶻飛。　峰は廻つて、秋礙る海鶻の飛ぶを、
日出夜聽天雞唱。　日は出でて、夜聽く天雞の唱ふるを。
中有一泉長不枯。　中に一泉あり、長しへに枯れず、
乃是蜿(三)蜒神物之所都。　乃ち是れ蜿蜒神物の都するところ。
老藤陰森洞(四)府黑。　老藤陰森、洞府黑く、
樹上不敢留棲鳥。　樹上敢て棲鳥を留めず。
常(五)年禱雨車。　常年雨を禱るの車。
來此投金(六)符。　ここに來つて金符を投す。

鱸魚を得、廚下をして之を切らしめ、蜀薑を得て羹を作らむと欲す。象、即ち吳主をして、左右の一人を指し、錢五十を以て之に付せしめ、象、一符を書し、以て青竹杖中に著け、行人をして、目を閉ぢて杖に騎せしむ。須臾にして、すでに成都に至る、乃ち薑を買ひ、復た杖に騎し、目を閉ぢ、須臾にして、すでに還つて、吳の廚下に至れば、鱠を切つて適ま了る」とある。【二】秋礙　礙はさへぎる。【三】蜿蜒神物　即ち龍。【四】洞府　洞窟。【五】常年　例年、一に當年に作る。【六】金符　金紙の御符。これは白龍廟を指したので、前に卷二、迎送神曲の原注に「白龍廟は、陽山に在り、世傳ふ、東晉の時、居民繆氏の女、一肉塊を生む、化して白龍となつて去る、女露絕、

靈旗風轉白日晦。　靈旗風轉じて白日晦く、
馬(七)鬣一滴霑三吳(八)。　馬鬣の一滴、三吳を霑す。
巖巒蒼蒼境多異。　巖巒蒼蒼、境に異多く、
樵子尋(九)常不曾至。　樵子、尋常、かつて至らず。
探幽歷險未得歸。　幽を探り、險を歷て、未だ歸るを得ず、
忽聞鐘來澗西寺。　忽ち聞く、鐘の澗西の寺より來るを。
此時望青(一〇)冥。　この時、青冥を望み、
脫落塵世情。　脫落す塵世の情。
白雲冉(一一)冉足下起。　白雲冉冉として足下に起り、
如欲載我昇天行。　われを載せ、天に昇つて行かむと欲するが如し。
古來名賢總何有。　古來名賢、すべて何かある、
只有此山長不朽。　只だ此山の長く朽ちざるあり。
欲呼明月海上來。　明月を呼んで海上より來らしめ、

谿に祠を山巓に立つ」とある。【七】馬鬣一滴　前に卷十、題薑元臥沙龍圖二の詩中に引いて置いたが、續玄怪錄に、龍母が李靖に行雨を依賴する言葉に「郎、馬に乘ぜよ、銜勒を漏らすなかれ、その行くに信せよ、馬、地を跑けて嘶鳴すれば、即ち瓶中の水一滴を取つて、馬鬣の上に滴らせよ、愼んで多きこと勿れ」とある。【八】三吳　指掌圖に「蘇常湖を以て三吳となす」とある。【九】尋常　普通には。【一〇】青冥　青天に同じ。【一一】冉冉　もくもくと湧き出る。【一二】浮邱　仙人の名、詳しくは浮邱伯、列仙傳に「王子晉、好んで笙を吹き、鳳凰の鳴を作す、伊洛の間に遊ぶ、道士浮邱伯あり、接して以て嵩高山に上る」とある。【一三】洪崖　亦た仙人の名、神仙傳に「衞叔卿、華山に歸

照把長生一瓢酒。　照らされて、長生一瓢の酒を把らむと欲す。

（二二）浮邱醉枕肱。　浮邱は醉うて肱を枕にし、

（二三）洪崖笑口開。　洪崖は笑口開く。

天風吹落浩歌聲。　天風吹き落す浩歌の聲、

地上行人盡回首。　地上の行人、盡く首を回らす。

る。漢の武帝、叔卿の子度をして之を求めしむ。その父、數人と博するを見る。度曰く、さきに與に博するものを誰と爲す、叔卿曰く、これ洪崖先生、王子晉、薛容なり」とあり、又郭璞の詩に姮娥揚二妙音一、洪崖頷二其頤一とある。

【題義】陽山は、題下の原注に「城の西北に在り、古しへ餘杭山と名づく、吳中最高の者、中に白龍湫あり、旱には必ず禱る」とあり、姑蘇志に「陽山は、府城の西北三十里に在り、高さ八百五十餘丈、透迤二十餘里、その陰を背にし、陽に面するを以て、故に陽といふ、大峰一十五にして、箭缺を絕頂と爲す。相傳ふ、秦皇、ここに射ると。故に其下に射瀆あり。文殊寺あり。寺內の石井、大旱にも涸れず、白龍洞あり、西に龍母塚あり。東北に白鶴山あり、丁令威の宅たるを以て山に名づく、又白蓮峰と名づくるは、下に白蓮寺あるを以てなり。今澄照寺と名づく、白龍廟在り」と見ゆ。この詩は、即ち陽山の絕頂に登つて作つたのである。

【詩意】われ陽山の絕頂に登ると、この山の高いことが分からないが、唯だ羣山は、すべて低く下方に在つて、ここからは、子供と同じく、その項を撫づべきを覺ゆるのみで、考へて見れば、隨分高い

に相違ない。それから、太湖が我が前に動いて居るのが見え、三十萬頃の煙波は、一望濶然として洶湧して居る。ここに來るまでの間、長風は人を吹いて、層嶂を度らしめ、さながら、羽が生えて飛んで行く樣であつて、仙人の赤城の杖も、格別用ふるには及ばない。羣峰廻立して居るから、秋には、海鶻の飛ぶを遮り、紅日早く上らむとして、夜半には、天雞の叫ぶのが聞こえると思ふ。その間に一條の泉があつて、如何なる旱にも涸れず、その湫を成す處には、龍が蜿蜒として住んで居る。あたりは、太い藤蔓が陰森として鎖ちこめ、仙人の洞府は、窅然としてほの暗く、何となく、恐ろしいから、樹上に棲む烏だにない位。例年、雨を禱る車は、ここに來て、金色の御符を湫中に投ずるのであるが、その效驗著しく、見る間に、靈旗風に靡いて、今まで晴れて居た日も、俄に晦くなり、そして雨を行る仙人が馬の鬣に一滴の水を垂らすと、それが幾尺の甘霖となつて、三吳の全土を霑すのである。巖巒は蒼蒼として、異境頗る多く、普通には、木こりだに來ぬ處であるが、幽を探り、險を歷て、なかなか歸らうとしなかつた。忽ちにして、澗西の寺より、夕を告ぐる鐘聲の響の出づるを聞き、止むなく中止した。この時、頭を仰いで青天を望めば、塵の浮世の情を振ひ落して仕舞ふ樣である。白雲は、冉冉として、脚の下より湧き起り、やがて、われを載せて昇天せしめむとするが如くである。顧みれば、古來の名賢、果して何物を遺したか、唯だ此山のみは、萬古に亙つて朽ちず、依然として殘つて居る。そこで、明月を呼び出して、東海の上より來らしめ、その清光に照らされながら、瓢に入

れた長生の酒を酌まうと思ふ。やがて、興酣なるに至れば、浮邱伯は、醉うて肱を枕にして眠り、洪崖先生は、大口を開いて、呵呵として笑ふであらう。その時、われは高らかに歌ふが、天風が其歌聲を吹き落したならば、地上の行人は、何事が起つたかと思ひ、誰しも、首を回らして仰望するであらう。

【餘論】起首、先づ絶頂の大觀を敍し、長風吹人度層嶂の四句は、登山の途すがらなる景色、中有一泉長不枯の八句は白龍廟、巖巒蒼蒼境多異は、洞の附近を日暮まで探討せしこと、此時望青冥の四句は、塵世を脱落して、將に羽化登仙せむとするを言ひ、古來名賢總何有の八句は餘波で、想像を逞うして、浩浩たる曠懷を敍し、結末も亦た大に振つて居る。

張節婦詞

張節婦の詞

誰言妾有夫。　誰か言ふ、妾に夫ありと、
中路棄妾身先殂。　中路に妾を棄てて、身、先づ殂す。
誰言妾無子。　誰か言ふ妾に子なしと、
側室生兒與夫似。　側室、兒を生んで、夫と似たり。
兒讀書。妾辟纑。　兒は書を讀み、妾は纑を辟く、
空房夜夜聞啼烏。　空房夜夜、啼烏を聞く。
兒能成名妾不嫁。　兒能く名を成し、妾は嫁せず、
良人瞑目黃泉下。　良人目を瞑せむ黃泉の下。

【字解】【一】中路　中道に同じ、又中途。【二】身先殂　殂は死亡。【三】側室　妾を云ふ、漢書文帝紀に「朕は高皇帝側室の子」とある。【四】辟纑　辟は劈に同じ、つんざく。纑はぬの絲、或は麻絲。絲を裂いて細くし、機織の用意をする。

【題義】題下の原注に「靈壽張明府の嫡母、早く寡して志を守る」とある。靈壽は地名なるべく、張の名字は分からないが、明府といへば、太守の尊稱で、先づ立身したものと見える。節婦は、夫の死後、おのが子でない妾腹の倅を守り立てて、家門を盛にしたのである。

【詩意】私に夫があると誰が言ふか、有るには有つたが、半途で私を棄てて、先つて死んで仕舞つた。私に子がないと誰が言ふか、夫の妾が倅を生み、夫と極めて肖て居て、それが即ち私の子である。この兒は、書物を讀み、その側で、私は絲を裂いて居て、空房の中、夜夜烏の啼くのを聞くと、自然傷心に堪へられぬ。しかし、倅は、どうやら立身して名を成すに至り、私は節を守つて、再び嫁せずに居たので、夫は、黃泉の下に之を聞かば、定めて安心して瞑目されるであらう。

【餘論】節婦に代つて言を立て、その中正の道を失はぬ處は、以て、世上の敎訓に充てることが出來る。措辭の上から云ふと、樂府の體を學んだもので、流石に巧慧である。元來、かういふことは、至

極結構ではあるが、目ざましい事實が無くて、筆を下すことが太だ困難である處から、作者は、特に苦心して、いささか一新機軸を出したのであらう。

與レ客飲二西園花下一　客と西園の花下に飲む

一壺酒正滿。　一壺、酒、正に滿ち、
一樹花仍新。　一樹、花、仍ほ新なり。
傾レ壺對二花樹一。　壺を傾けて花樹に對す、
日暮西園春。　日暮、西園の春。
不レ愛二枝上花一。　枝上の花を愛せずして、
愛二此花下人一。　この花下の人を愛す。
相逢莫レ學二花無賴一。　相逢ふ學ぶ莫れ花の無賴なるを、
明日分飛隨二路塵一。　明日分飛して路塵に隨ふ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、西園は、作者の家に在ると見える。

【字解】【一】花無賴　杜甫の詩に韋曲花無賴、家家惱二殺人一とある。無賴は、賴るなし。卽ち誰にも相手にされないといふ義。ここでは、性が惡いといふ位に見れば善からう。

【詩意】一壺の酒は、正に滿ち、一樹の花は、仍ほ新に、この花、この酒、相得て恰も好き折から、壺を傾けつつ花に對し、日暮、ともに西園の春を賞玩しやう。しかし、予は、枝上の花を愛せずして、この花下の人を愛するので、花は本來性が惡く、明日は東西に分飛して、路上の塵を逐ふが、ここに相逢ひし君は、決して之を學ぶことなく、長しへに、交情を持續することが願はしい。

【餘論】この詩は、折角ながら、形を備へて居るだけで、淺俗にして陳腐、取るに足らぬ愚作である。

呉中逢下王才隨二朝京使一赴レ燕南歸上
呉中、王才が朝京使に隨ひ、燕に赴いて、南に歸るに逢ふ

江南草長蝴蝶飛。　江南、草長じて蝴蝶飛ぶ、
白馬新自二燕山一歸。　白馬、新に燕山より歸る。
燕山歸不レ堪レ説。　燕山より歸り、説くに堪へず、
易水寒風薊門雪。　易水の寒風、薊門の雪。
朝邸空隨二使者車一。　朝邸、空しく使者の車に隨ひ、
禁閣不レ受二書生謁一。　禁閣、書生の謁を受けず。

【字解】【一】歌莫哀　杜甫の短歌行、贈二王郎司直一に王郎酒酣拔レ劍斫レ地歌莫レ哀、我能拔二爾抑塞磊落之奇才一とある。歌聲悲む勿れといつて、禁止の辭。何も莫哀といふ歌を唱へるといふのではない。【二】黃金臺　燕の昭王が築いたので、千金を其上に置いて、諸侯の客を招いた。【三】荒基　荒廢した礎石。【四】土

一杯勸㆑君歌（一）莫㆑哀。一杯、君に勸む、歌、哀む莫れ、

歸時應㆑過（二）黃金臺。歸る時、應に過ぐるなるべし黃金臺。

不㆑見（三）荒基㆓秋來土（四）花紫。荒基を見ず、秋來土花紫に、

（五）伯圖已歇昭王死。伯圖、すでに歇んで昭王死す、

千載無㆓人延（六）國士㆒。千載、人の國士を延くなし。

【題義】吳中は、卽ち蘇州。王才の字竝に閱歷等は不詳。朝京使は、張士誠が發して北上せしめた使者であらう。この詩は、蘇州に於て王才に遇ひ、その王才は、近ごろ、朝京使に隨つて燕京に赴き、丁度、ここに歸つて來たといふので、仍つて、その人に贈つたのである。

【詩意】江南に於ては、草がのびて、蝴蝶羣れ飛ぶ二月の頃、君は、白馬に騎して、この頃、燕都から歸つたとのことである。燕都から歸つたが、客中遭遇せしことは、說くに堪へず、易水の寒風、薊門の積雪、冬の北地旅行の辛いことは言はずもがな、その上、使者の車に隨つて、官邸に投宿したが、格別面白いこともなく、天子の居られる處は、咫尺の地であるが、書生に拜謁を許されぬから、滿腹の經綸、展ぶるに由なく、實は、何一つ仕出來さずして歸つたとのことである。そこで、君に一杯を勸め、歌ふにしても、悲むには及ばず、精精、くよくよせぬ樣に、氣を大きくして貰ひたいと申すのである。君の歸る時、黃金臺を過ぎたであらう、その黃金臺は、荒れた礎石さへ見えなくなり、秋來苔が積んで、紫色に見える。昭王逝いて、すでに久しく、霸圖悵として歇み、その後幾千年、昭王の如く、己を謙して國士を延く樣な人は無いから、今さら、仕方がない。

【餘論】この詩は、前に卷十、送㆓王孝廉游㆑京歸㆓錢塘㆒の七古と大體同じであつて、起首より禁闈不㆑受㆓書生謁㆒に至る數句は、皆彼に見えて居る。但し、燕山歸、不㆑堪㆑說の三言二句は、彼に於て帝闈に作つてある。それから以下も、文字こそ聊か違ふが、命意は、全く同じである。不㆑見㆓荒基㆒秋來土花紫は、長句としては、甚だ拙劣なものである。要するに、この二首は、體は稍や違ふが、意象風格、略ぼ相若き、どれが定稿か一寸分からぬ。又その題も、彼には送㆓王孝廉游㆑京歸㆓錢塘㆒とあつて、兩者を併せ觀れば、王孝廉、名は才、朝京使に隨つて燕都に游んで、一先づ吳下に歸著し、これより、更に其故鄕の錢塘に歸るのだといふことが分かる。すると、この題に赴㆑燕南歸とあるは、未だ盡さず、且つ曖昧に失する虞があることと思ふ。いづれにしても、兩首ともに名作といふべき程の者でないことは、確實である。

花苔。【五】伯圖　霸圖に同じ。【六】國士　一國の士、前に屢ば見えたが、豫讓が「智伯は國士もて我を遇す、故に我國士もて之に報ず」といひしに本づく。

白雲泉

白雲泉

白雲不爲雨。　白雲、雨と爲らず、
散在清泉流。　散じて清泉に在つて流る。
泉氣復成雲、　泉氣、復た雲と成り、
山中同一秋。　山中同一の秋。
巖前石竇幽寒處。　巖前の石竇、幽寒の處、
雲自長浮泉自注。　雲は自ら長く浮び、泉は自ら注ぐ。
潛龍未起出深泓。　潛龍、未だ起つて深泓を出でず、
渴鳥時來下高樹。　渴鳥、時に來つて高樹より下る。
雲應無心飛上天。　雲、應に飛んで天に上るに心なかるべく、
泉亦不肯隨奔川。　泉、亦た肯て奔川に隨はず。
老僧愛此不復下　老僧これを愛し、復た山を下つて去らず、
山去。
臥雲飲泉終歲年。　雲に臥し、泉に飲して歲年を終る。

【字解】【一】石竇　石の穴。
【二】深泓　泓は水の溜まり。
【三】歲年　ただ年といふに同じ。

【題義】白雲泉は題下の原注に「天平山腰に在り、乳泉なり」とあり、皐藻集に載する游天平山記に「白雲寺に至る……然る後、その麓より狙杙以て上る。山に怪石多く、臥すが若く、立つが若く、搏つが若く、噬むが若く、蟠挐撐拄、名狀すべからず。復た泉あり、亂石の間より出づ、白雲泉とい ふ。綫脈縈絡、下つて沼に墮つ。瓢を擧げて、酌んで嘗む、味、極めて甘冷。泉上に亭あり、名、泉と同じ、草木秀潤、蔭すべく、息ふべし」とあり、又白居易の詩に、
　天平山上白雲泉、雲自無心水自閒。何必奔衝下山去。更添波浪在人間。
とある。この詩は、卽ち白雲泉を詠じたので、天平山の游記と同時の作であらうと思ふ。
【詩意】白雲は、雨ともならず、いつしか散じて仕舞つて、清泉と一處に流れて居る。そして、泉氣は、再び雲となり、絕えず、反覆循環し、山中は、いつでも秋の氣分である。巖前の石の穴は、幽深にして、自然寒く、そこには白雲が長しへに自ら浮び、清泉が自ら流れて居る。そして、龍は、その流の下なる深い溜りに潛んだ儘、起き出づることなく、渴したる鳥は、水を飲まうと思つて、時たま、高樹から飛んで下りて來る。雲は、格別、飛んで天に上らうとも思はぬし、泉も亦た流れ下つて奔川に隨はうともしない。その傍には、白雲寺といふのがあるが、寺中の老僧は、ひどく氣に入つたと見え、矢張、山を下つて去ることなく、その雲に臥し、その泉を飲み、一生涯、ここに居る積りであるらしい。

【餘論】起四句は、淸警幽妙なるのみならず、偶然にも、今日の理學に協つて居る處が面白い。以下、絕えず雲と泉とを錯綜し、老僧を倩ひ來つて、これを收束したのは、愈よ妙である。

戎王追レ彘圖　　戎王彘を追ふの圖

前騎脫(一)兎奔。　　前騎は脫兎奔り、
後騎驚(二)鴻急。　　後騎は驚鴻急なり。
火燒二秋草一獵場空。　　火は秋草を燒いて、獵場空しく、
(三)一彘窮追勢難レ及。　　一彘窮追、勢、及び難し。
(四)大小當戸左右賢。　　大小當戸、左右賢、
(五)單于勇銳閼(六)支妍。　　單于は勇銳、閼支は姸なり。
雕戈白羽謾爭發。　　雕戈白羽、謾に爭ひ發す、
衆中得(七)レ雋知誰先。　　衆中、雋を得るは、知る誰か先。
君不レ見天(八)策將眞天子。　　君見ずや、天策將は眞天子、
馳二一馬一殪(九)二四豕一。　　一馬を馳せて、四豕を殪す。

【字解】【一】脫兎　孫子に「始は處女の如く、後には脫兎の如し」とある。【二】驚鴻　曹植の洛神賦に「凌レ波微步、翩若二驚鴻一」とあり、東坡の詩に「驚鴻脫兎爭二後先一」とある。【三】一彘　彘はゐのこ、即ち豕であるが、ここでは、野猪。元來、豕も猪も、同一種類で、豕を野に放し飼ひにすると野猪になるといふ話である。【四】大小當戸左右賢　史記匈奴傳に「冒頓强大、左右賢王を置き、左右大當戸を置く」とある。その官號、左右賢王は、左右大臣の如く、大小當戸は、その下の大官である。【五】單于　匈奴君長の號。【六】閼氏　前に卷一、王明君の詩中にも引いて置いたが、集韻に「閼、音煙。氏、一に支に作る。單于の適妻なり」とある、即ち匈奴の皇后。【七】得雋　雋は第一等の獲物、左傳莊公十一年に「雋を得るを克といふ」とある。【八】天策將　通典に「唐の武德の初、秦王、すでに王世充及び竇建德を平らぐ。高祖、秦王の功、今古に殊なるを以て、乃ち特に天策上將軍を置き、以て拜す。位、王公の上に在り」と記してある。【九】殪四豕　唐書唐儉傳に「儉、從つて洛陽苑に獵す。羣豕、林より突出す。帝、射つて四たび發し、輒ち四豕を殪す。一豕躍つて鐙に及ぶ。儉、馬より投じて之を搏つ。帝、劍を拔いて豕を斬り、顧みて笑うて曰く、天策長史、上將の賊を擊つを見ざるか」とある。

【題義】戎王の戎は西戎、西方の未開種族、即ち匈奴。彘は野猪。この詩は、匈奴の單于が獵をして野猪を追ひかけて居る圖に題したのである。

【詩意】前方の騎馬武者は、脫兎の奔るが如く、後方のは、驚鴻の急に飛ぶが如く、各〻後先を爭うて馳せ出して居る。野獸を追ひ出す爲に、枯れた秋草を燒き拂つたから、獵場は一空、何物も殘つて居らぬ。その時、一の野猪は、窮追せられ、非常の勢で逃げ出し、とても追ひつかぬ位。あたりには、大小當戸、左右賢王などが列を作つて差し扣へ、單于は、凜凜しげに、さも勇銳なる身ぶりをして居るし、閼氏は、流石にあでやかに見える。そこで、飾つた弓に白羽の箭を番へて、あてもなく爭つて放つて居るが、この晴れの場所に於て、眞先に第一の獲物を仕留めるのは、誰であるか。しかし、匈

奴の射獵などは、もとより言ふに足らぬので、かの唐の太宗は、その昔、天策上將軍の職に居られたが、一馬を馳せて、物の見事に四頭の野猪を射留められ、射技の精妙、天下に敵なく、匈奴などは、いくら威張つて見た處で、到底、わが中國を覬覦することは出來ない。

【餘論】圖中に見えたる匈奴射獵の狀を詩化して、幾句を費したのは、格別、賞讚を値せぬが、結末、唐の太宗を倩ひ來つて、陪襯となした處は、極めて面白く、全篇、爲に振起するを覺える。

茅山陳道士臥雲所

茅山陳道士の臥雲所

不逐雲渡海。寧隨雲出山。
雲を逐うて海を渡らず、むしろ雲に隨つて山を出でむや。

但邀雲共宿。日夕(一)三峰間。
但だ雲を邀へて共に宿す、日夕、三峰の間。

(二)絪縕枕席潤。(三)晻靄房櫳閒。
絪縕として枕席潤ひ、晻靄として房櫳閒なり。

(四)聽松閣前風滿耳。
聽松閣前、風、耳に滿つ、

吹盡白雲應睡起。
白雲を吹き盡さば、應に睡起すべし。

【字解】【一】三峰　即ち三茅峰、なほ題義の條に詳述する。【二】絪縕　匂やかなる貌。【三】晻靄　もやもやする貌。【四】聽松閣　茅山に在つて、もと陶弘景の棲遅した處。

【題義】茅山は、前に卷五、送蕭隱君の題下に注して置いたが、一統志に「句容縣東南の山、形、句の字の如く、はじめ、句曲山と名づく。後、茅君道を此に得たるに因つて、今、茅山と名づく。道書、第八洞天、第一福地たり。山に三峰あり、三茅君、各〻一峰を占む、これを三茅峰といふ」とある。陳道士は、名字ともに不詳。茅山に隱宅を設け、臥雲所と號せしに因り、青邱は、乃ち此に寄題したのである。

【詩意】身は、雲に隨つて海を渡らうともしない位だから、いかで、雲に隨つて山を出づべき。ただ雲を迎へて、ともに宿し、朝夕、茅山三峰の間に起臥して居る。その間、雲が絪縕として繞ると、枕席、爲に潤ひ、雲が晻靄として立ちこめると、房櫳ともに靜かである。陶弘景の遺跡たる聽松閣の前には、松風吹きすさびて、耳に滿ちて居るが、やがて、白雲を吹き盡したならば、その時、睡より起きやう、つまり、雲の居る間は、臥した儘、決して、起き出でぬ覺悟である。

【餘論】臥雲の二字に就いて構想し、偃臥、雲を離れざる奇趣を敍したのである。

贈醉樵

醉樵に贈る

(一)川釣已遭獵。
川釣、すでに獵に遭ひ、

(二)野耕終改圖。
野耕、終に圖を改む。

【字解】【一】川釣已遭獵　呂尙が渭川に釣して居て、文王の獵するに遇ひ、仍つて、直に其師となりし

不如山中樵。　如かず、山中に樵せむには、
醉臥誰得呼。　醉臥、誰か呼ぶを得む。
采山不采松。　山に采れども松を采らず、
松花可爲酒。　松花は酒と爲すべし。
酒熟誰共斟。　酒熟して誰と共にか斟まむ、
木客爲我友。　木客は我が友たり。
木客已去空石牀。　木客、すでに去つて、石牀空しく、
擧杯向月邀吳剛。　杯を擧げ、月に向つて、吳剛を邀ふ。
借汝快斧斫大桂。　汝の快斧を借つて大桂を斫る、
要令四海增清光。　四海をして清光を增さしめむことを要す
林風吹髮寒擁耳。　林風、髮を吹いて、寒、耳を擁し、
獨枕空樽碧巖裏。　ひとり、空樽に枕す碧巖の裏。
此時忘却負薪歸。　この時、忘却す、薪を負うて歸るを、

こと、李白の詩に如逢渭川獵、猶可帝王師とある。【二】野耕莘改圖　伊尹が有莘の野に耕して居て、湯の招聘に逢ひ、仍つて、おもひ直し、湯を佐けて桀を討ちしこと。史記に「伊尹は處士、湯、人をして之を聘せしむ、五たび反り、然る後に往く」とある。【三】木客　木の精が人の形を爲せるをいふ。十道四蕃志に「虔州上洛山に木客鬼あり、人と交つて甚だ信」とあり、東坡の詩に山中木客解吟詩とある。【四】吳剛　酉陽雜俎に「月中に桂あり、高さ五百丈、下に一人あり、常に之を斫る、樹創隨つて合す。その人、姓は吳、名は剛、仙を學ぶ、過あり、謫して樹を伐らしむ」とある。【五】擁耳　耳を押へて居る。【六】看棊　述異記に「信安郡石室山、晉の時、王質、木を伐つて至り、童子數人、棊して歌ふを見る。質、因つて之を聽く。童子、一物を以て質に與ふ、棗核の如し、質、これを含んで、飢を覺えず。俄頃にして、童子謂つて曰く、何ぞ去らざると。質起つて視れば、斧柯盡く爛す。すでに歸れば復た時人なし」とある。【七】青松化石　一統志に「金華永康縣延眞觀前、唐の建中の間、道士馬自然、庭松を指して曰く、この松、すでに三千年、當に化して石となるべしと。夕に至つて大風雨、その松、果して化す」とある。

猛虎一聲驚不起。　猛虎一聲、驚いて起たず。
世間萬事如浮煙。　世間萬事、浮煙の如し、
看棊何必逢神仙。　棊を看る、何ぞ必ずしも、神仙に逢はむ。
青松化石鶴未返。　青松、石に化して、鶴、未だ返らず、
酒醒又是三千年。　酒醒めて又是れ三千年。

【題意】　醉樵は饒介之の號で、この詩は、卽ち其人に贈つたのである。列朝詩集張簡の傳に「勝國の時、法網寛にして、大人必ずしも仕官せず、浙中、毎歲、詩社あり、一二の名宿、楊廉夫輩の如きを聘して、これを主らしめ、宴賞最も厚し。饒介之、吳中に分守し、自ら醉樵と號し、諸文士を延いて、歌を作らしむ。仲簡の詩擅場、首坐に居り、黃金一餅を贈る、高季迪は白金三斤、楊孟載は一鎰。後、承平久しく、張洪修撰、人の爲に、一文を作るごとに五百錢を得たり」とある。すると、青邱の此作は、當日第二位の選に上つて、賞與を得たものである。

【詩意】　呂尙は渭川に釣して、文王の獵に遭ひ、伊尹は有莘の野に耕し、湯の招聘を受けると、翻然

として考へ直し、ともに起つて、その主に帝業を爲さしめた。しかし、そんな事をするよりも、山中に木こりをして居るが、はるかに宜しく、その醉臥するに當つては、誰も呼び醒ますことが出來ない。これが卽ち醉樵の超絶的なる閒趣である。醉樵の山に分け入るや、松の木だけは伐らないので、そは、松の花が酒を醸せるからである。その松花の酒、方に熟する時、誰を相手にして酌むかといふと、木精が卽ち友である。その木精が立ち去ると、石牀の邊に誰も居ないが、ひとり、杯を擧げ、月に向つて月中に住む吳剛を招き、その持てる大斧を借りて、月中に生ひ茂れる大なる桂樹を斫り倒し、四海をして清光を增さしめやうとする。やがて、空林を度る風は髮を吹き亂し、寒さが甚しいから、ぢつと耳を押さへ、はては、ひとり苔綠なる巖石の間に橫はり、空樽を枕にして、すやすやと眠つて居る。この時は、すでに薪を脊負うて歸ることを忘れたので、まことに呑氣至極な話。やがて、猛虎一聲、すさまじく哮けるに驚かされても、まだ醉が醒めぬから、起き上ることが出來ない。顧みれば、世間萬事は、雲煙の浮べるが如く、まことに詰まらないから、たとひ、神仙でなくとも、棋を圍むものがあつたならば、傍觀するのも、面白からう。青松も、久しきを經れば、化して石となるべく、その松の上に棲む鶴も、何處かに飛び去つて、返り來らず、酒が醒めると、この世に於ては、すでに三千年を經過して居た。

【餘論】中間、吳剛を邀へるの一段は、極めて精彩がある。そして、借汝快斧の二句は、斫却月中桂、清光看合多といへる杜句に本づいたものである。以下二解も、各その後半が振つて居て、殊に青松化石の二句は、仙音縹緲、他に其類なきものである。

雷雨護嬰圖爲包山徐庭蘭賦　雷雨嬰を護る圖、包山徐庭蘭の爲に賦す

兒衣寒。母衣澤。　兒の衣は寒く、母の衣は澀ふ。
風雨蒼(一)黄歸意急。　風雨蒼黄、歸意急なり。
雷忽鳴。兒勿驚。　雷忽ち鳴る、兒驚く勿れ、
抱兒與兒同死生。　兒を抱いて兒と死生を同じうす。
樹聲吹廻水聲注。　樹聲吹き廻つて水聲注ぐ、
(二)田家尚遙無避處。　田家、尚は遙にして避くる處なし。
看圖誰念亂(三)離人。　圖を看て誰か念はむ亂離の人、
白日青天棄兒去。　白日青天、兒を棄てて去るを。

【字解】【一】蒼黄　あわてる。
【二】田家　田舍の家。
【三】亂離人　騷亂の世の人。

【題義】嬰は嬰兒、卽ちみどりこ、包山の徐庭蘭は、詩中に謂はゆる兒で、その母を追慕する爲に、

この圖を作つたものと見える。そして、青邱は、その依賴に應じて、これに題したのであらう。

【詩意】 兒の衣は、寒い位であるが、母の衣は、しとどに溼ひ、この風雨に遇つて、あわてふためき、早く歸りたいと思ふ心は矢の如くである。須臾にして、鳴る神、おどろおどろしく、兒は、ひどく驚いて居るので、母は、兒を抱いた儘、死ぬるも、生きるも、兒と一處にしやうといふ決心。やがて、木の搖すれる聲は吹き廻り、あたりの水の聲は、注ぐが如く、田舍の我が家は、まだ遠くて、おまけに、風雨を避ける處もない。その困苦につけても、母の兒をいたはる至情が分かる。亂離の世に於ては、白日青天に、おのが身を全うする爲に、その兒を棄てる人さへあるに、この圖を見れば、誰も、眞逆と思つて、眞に受けることはあるまい。

【餘論】 この詩は、材料が乏しいのを强ひて構想したのであるが、結末二句の如き、襯映甚だ妙、流石に、青邱の手筆たるに負かぬものである。

南園

君不見平樂館。(一)
古城何處寒雲滿。

南園

君見ずや平樂館、
古城何の處か、寒雲滿つ。

君不見奉誠園。(二)
荒臺無蹤秋草繁。
白日沈山水歸海。
寒暑頻催陵(三)谷改。
皇天大運有推移。
富貴於人豈長在。
請看當年(四)廣陵王。
(五)雙旌六纛何輝光。
幸逢中國久多故。
一家割據誇雄强。
園中歡游恐遲暮。
美人能歌客能賦。
車馬春風日日來。

君見ずや奉誠園、
荒臺蹤なく秋草繁し。
白日は山に沈んで、水は海に歸る、
寒暑、頻りに催して陵谷改まる。
皇天の大運、推移あり、
富貴の人に於ける豈に長しへに在らむや
請ふ看よ、當年の廣陵王、
雙旌六纛、何ぞ輝光。
幸に中國の久しく多故なるに逢ひ、
一家割據して雄强に誇る。
園中歡游、遲暮を恐れ、
美人は能く歌ひ、客は能く賦す。
車馬、春風、日日來る、

【字解】【一】平樂館 漢書武帝紀に「元封六年、夏、京師の民、角抵を上林平樂館に見る」とあり、又李白の詩に陳王昔時宴平樂とある。【二】奉誠園 金檀の注には、元稹の蕭相深誠奉至尊、舊居求作奉誠園の二句を引いてあるが、切實でない。これは、白居易の傷宅に、不見馬家宅、今作奉誠園とあるのを引くべきである。馬燧は、德宗の時に大功を建て、從つて、第宅も華美を極めて居たが、死後、その子孫が持ち切れずして、朝廷に獻じて仕舞つたので、それが卽ち奉誠園である。【三】陵谷改 前に岡であつた處が、いつしか變じて谷となる。【四】廣陵王 十國春秋に「廣陵王元璙、字は德輝、武肅王の第六子、文穆王元瓘の兄なり。吳王行密、女を以て之に妻はす。しきりに、中央建武等軍節度使、蘇常潤等州團練使、太傅同中書門下平章事を勅授せられ、蘇州に在ること

楊花吹滿城南路。　楊花、吹き滿つ城南の路。

疊石爲山。　石を疊んで山と爲し、

引泉爲池。　泉を引いて池と爲す、

(六)辟疆舊園何足奇。　辟疆の舊園、何ぞ奇とするに足らむ。

經營三十年。　經營三十年、

欲令子孫永保之。　子孫をして永く之を保たしめむと欲す。

不知回首今幾時。　知らず、首を回らせば今幾時ぞ、

繁華掃地無復遺。　繁華地を掃うて復た遺すなし。

門掩愁(七)鴟嘯風雨。　門は掩うて、愁鴟、風雨に嘯き、

種菜老翁來作主。　菜を種うるの老翁、來つて主となる。

空餘怪石臥池邊。　空しく怪石を餘して池邊に臥し、

欲問興亡不能語。　興亡を問はむと欲するも、語る能はず。

春已去、人不來。　春、すでに去つて、人、來らず。

三十年、文穆王立つや、晉、廣陵郡王に勅封す」とある。【五】雙旌六纛 唐書百官志に「節度使は、軍旅を總べ、誅殺を顓にするを掌り、雙旌雙節を賜ひ、行けば節を建て、六纛を樹つ」とある。つまり居るときは雙旌、行くときは六纛を樹てるので、旌はのぼり、纛は大旗である。【六】辟疆舊園 晉書王獻之傳に「獻之、かつて吳郡を經、顧辟疆に名園ありと聞き、先づ相識らず、平肩輿に乘じて、徑に入る。時に、辟疆、方に賓友を集む。而して、獻之、遊歷すでに畢り、傍に人なきが若し」とある。【七】愁鴟 鴟は鳶、劉孝威の詩に「愁鴟集古樹」とある。【八】射堂 射を習ふ堂宇、庾信の春賦に「分明入射堂」とある。【九】踘圃 蹴鞠する廣庭、黨潞に「蹋鞠の戯、韋を以て之を

一樹兩樹桃花開。　一樹兩樹、桃花開く、

(八)射堂(九)踘圃俱青苔。　射堂踘圃、ともに青苔。

何須(一〇)雍門琴。　何ぞ須ひむ雍門の琴、

但令對此便可哀。　但だ此に對して便ち哀むべからしむ。

人生不飲胡爲哉。　人生飲まず胡すれぞや、

人生不飲胡爲哉。　人生飲まず胡すれぞや。

爲り、實たすに柔物を以てす、今、これを毬といふ」とある。【一〇】雍門琴 前に卷一、野田行の詩中にも引いて置いたが、桓譚の新論に「雍門周、琴を以て孟嘗君に見ゆ。孟嘗君曰く、先生、琴を鼓する、亦た能く文をして悲しましむるか、と。雍門周、琴を引いて之を鼓し、徐に宮徵を動かし、角羽を叩き、終つて曲を成す、孟嘗君、歔欷して之に就く」とある。

【題義】　南園は、題下の原注に「城南に在り、吳越廣陵王錢元璙の闢くところ、これを營むこと三十年、勝、吳中に甲たり。今の郡學前の菜圃なり」とある。この詩は、南園の荒蕪に歸せしを見、舊を懷ひ、今に感じて作つたのである。

【詩意】　平樂館は、むかし、漢の武帝の時、種種の催しをした處であるが、今は長安の古城中、寒雲天に滿ちて、何處とも分からない。奉誠園は、唐代に聞こえて居たが、今は、荒臺の跡だにもなくして、秋草が生ひ茂つて居るだけである。白日は山に沈み、流水は海に歸し、寒暑は頻りに促し、陵谷は互に相變ずるのが、この世の常態。それといふも、皇天の大運は、推移を旨として居るからで、富

貴の人に於ける、亦た決して永續するものではない。當年の廣陵王は、その權勢、飛ぶ鳥をも落すばかり、身は節度使の重職に任じ、居るには雙旌、出づるには六纛、それが光り輝いて、あたりを拂ふ位。加ふるに、中原の地、變故多く、唐末の騷擾、愈よ甚しきを幸に、一家の者どもは、吳越地方に割據して、その雄强を誇つて居た。そこで、この南園に游び戯れて、日の暮るるを惜み、美人は能く歌ひ、詞客は能く賦し、逸興遄飛。東風吹き渡る春の頃には、日日車馬羣をなして、ここに來り、楊花は城南の路に吹き滿つるばかり。園中には、石を疊んで山と爲し、泉を引いて池をなし、あくまで數奇を盡し、かの辟疆の舊園も物の數ならず、これを經營すること三十年の久しきに及び、後世の子孫をして、永く之を保たしめむとして居た。首を回らせば、今日に至るまで、幾時を經たか知らぬが、繁華地を掃うて空しく、何一つ殘つて居るものはなく、今見るところは、門を堅く鎖めて、鳶が風雨に嘯き、すべて菜畑となつて、老翁は主人顏に之を耕して居るだけである。珍らしい石の池邊に倒れて居るのは、むかしの名殘であるが、これに向つて、興亡を問はむとするも、石は非情の者で、語ることが出來ぬから仕方がない。春は旣に去れども、人は來らず、唯だ一樹二樹の桃が、花を開いて居るだけで、弓場や、蹴鞠の廣庭などは、ともに靑苔が地に滿ちて居る。何も雍門周の琴を聞くまでもなく、これに對すれば、容易に悲哀に堪へざらしめる。人生は、まことに果敢ないもので、盛なるも、終に衰ふるを見れば、酒を飮むより外に詮なきものである。

【餘論】はじめに平樂・奉誠を點出し、その盛衰を言ひ、徐徐として本題に引き入れ、廣陵王の盛時を寫し、一轉して、刻下の荒廢に及び、感慨を以て收束したので、普通の構想ではあるが、敍述周匝、讀者をして、愴然たらしむるは、卽ち詞筆の妙である。

滄浪亭

滄浪亭

(一)滄浪平。　滄浪平かに、
無㆓風波之驚㆒。　風波の驚くなし。
滄浪廣。　滄浪廣くして、
有㆓(二)風月之賞㆒。　風月の賞あり。
(三)吳興長史舊遷謫。　吳興の長史、舊と遷謫、
買㆓得此水㆒自號㆓滄浪客㆒。　この水を買ひ得て、自ら滄浪の客と號す。
垂㆑釣在㆓北渚㆒。　釣を垂れて北渚に在り、

【字解】【一】滄浪　書經に「嶓冢より漾を導き、東流して漢となり、又東して滄浪の水となる」とあるのは、取りも直さず、漢水であるが、又汎く水色といふ義に用ふることがあるので、ここのは、即ちそれであらう。【二】風月之賞　歐陽修の滄浪亭の詩に清風明月本無㆑價、可㆑惜祇賣四萬錢とある。【三】吳興長史舊遷謫　宋史蘇舜欽傳に「范仲淹、その才を薦め、召試して、集賢校理に除せられ、進奏院を監す。會ま、院、神

榜船臨西洲。白鷗不來往。
遣興誰同游。發清歌弄清景。
醉入荷花夢魂冷。天念儒臣(五)去國寃。
故與無塵水雲境。斯人去已遠。
我來空復情。滄浪水雖在。
不似昔年清。躊躇獨過亭前路。
疏葦寒煙沙鳥鳴。

船を榜して西洲に臨む。
白鷗來往せず、
遣興、誰か同游。
清歌を發し、清景を弄す、
醉うて荷花に入つて夢魂冷かなり。
天は、儒臣國を去るの寃を念ひ、
故らに與ふ無塵水雲の境。
この人、去つて已に遠く、
われ來つて空しく復た情。
滄浪水ありと雖も、
昔年の清きに似ず。
躊躇、ひとり過ぐ亭前の路、
疏葦寒煙、沙鳥鳴く。

を祀るに當り、舜欽、右班殿直劉巽と、故紙を鬻ぐ公錢を用ひて、妓樂を召して宴を設く。御史中丞王拱辰、諷して之を得、その屬に諷して、論奏せしむ。事、開封に下し、劾治す。舜欽・巽、自ら盜せしに坐して除名す。これに久しうして、復た起されて湖州長史となり、蘇州に寓居し、木石を買うて滄浪亭を作る」とある。【四】榜船　舟を漕ぐ。【五】儒臣去國寃　蘇舜欽傳に「これより先、舜欽、宰相杜衍の女を娶る。衍、方に仲淹・富弼と政府に在り、庶事を更定せむと欲す、故に、拱辰等、これを便とせず、舜欽を劾奏し、因つて以て衍を撼かさむと欲するなり」とある。

【題義】滄浪亭は、題下の原注に「郡學の東に在り、積水數十畝、子美、これを得、亭を上に構へ、その名、はじめて著はる」とあり、石林詩話に「錢氏廣陵王元璙の別圃、宋の蘇舜欽、これを得、亭を築いて滄浪といふ。これに由つて、滄浪の名、はじめて著はる。積水、數十畝に彌り、旁に小山あり、高下曲折、水を縈帶し、今に至つて吳中の勝境たり。俗に韓王園と名づく。この園、舜欽より後、屢ば主を易へ、紹興の時、かつて韓世忠に得られしを以てなり」とある。この詩は、卽ち滄浪亭に題したのである。

【詩意】滄浪の水は、平かにして、風波の驚くなく、滄浪の水は、廣くして、風月の眺がある。むかし、蘇舜欽は、吳興の長史として、この地に遷謫せられ、因つて、この池を買うて園となし、自らも滄浪の客と號して居た。そこで、釣を垂れむとしては北渚に向ひ、舟を漕いでは西洲に臨み、白鷗が來往せざれば、誰と共に、興を遣つて遊ばうか。やがて、清歌を發して清景を賞し、醉うては、蓮の花咲く間に入つて眠り、夢魂の冷かなるをも苦にしなかつた。天は、儒臣が寃罪を以て京國を去りしことを氣の毒に思召され、わざわざ、俗塵全く其跡を絶てる水雲の境を以て、舜欽その人に與へられたのである。しかし、舜欽一たび逝いて、歲月すでに久しく、われ偶ま此に來るも、追慕の情に堪へず、その上、滄浪の水は、依然として殘つて居るが、むかしの樣に、水は、澄んでも居ない。去りがてにして、亭前の路を過ぎ行けば、頃しも、秋の末、枯れ殘つた疏らなる葦の間には、寒煙白く立ちこ

め、水鳥が淋しげに鳴くのみである。

【餘論】この詩は、程よく纏まつて居て、格別新奇の處もない代りに、平正穏妥、且つ多少の巧思を以て斡旋したものらしく、長短句の配合には、特に意を用ひて、音節は自然酣暢である。

石射堋

石射堋

石射堋。張石城。　石射堋、張石城。

石鼓響或發。石騎勢欲行。　石鼓、響、或は發し、石騎、勢、行かむと欲す。

彷彿古戰場。上有愁雲生。　彷彿たり古戰場、上に愁雲の生ずるあり、

餓鴟嘯寒風。砉若箭鏑鳴。　餓鴟、寒風に嘯き、砉として箭鏑の鳴るが若し。

何人作此留山中。　何人か此を作つて山中に留め、

鳥獸欲過膽盡驚。　鳥獸過ぎむと欲して膽盡く驚く。

疑是神禹治水時。　疑ふらくは是れ、神禹水を治むるの時、

來敎鬼射降妖精。　來つて、鬼をして射つて、妖精を降さしむ。

至今風雨夕。猶聽人馬聲。　今に至つて、風雨の夕、猶ほ聽く人馬の聲。

嘗聞父老言。鼓鳴則有兵。　かつて、父老の言を聞く、鼓鳴れば兵ありと。

方今瘡痍民。脫命見太平。　方今瘡痍の民、命を脫して太平を見る。

我願碎其鼓。隳其堋。　われ願はくは、その鼓を碎き、その堋を隳り、

一人安。四海淸。　一人安く、四海淸く、

自此萬年無戰爭。　これより、萬年、戰爭なからむことを。

【字解】【一】張石城　地名であらう。【二】餓鴟　前に數ば見ゆ、鴟は鳶。【三】砉　砉然、物を截ち割る樣な響。【四】箭鏑　かぶら矢。【五】妖精　妖怪の精。【六】瘡痍民　戰亂の爲に負傷した人民。【七】脫命　幸に命を拾つた。【八】一人　天子を云ふ。

【題意】石射堋は題下の原注に「石城山に在り、石鼓あり、世傳ふ、鼓鳴れば則ち兵ありと。又石馬あり、望めば、人の騎するが如し」とある。堋はあづち、卽ち射埓の義である。

【詩意】石城山には、石射堋があるし、張石城があるし、その名さへ、すでに物物しく、石鼓は、往往にして響を發し、石騎は今にも驅け出しさうな勢をして居る。あたりは、淒寥として、さながら古戰場の如く、上には愁雲が蔽ひかかつて居るし、餓ゑた鳶が寒風に嘯くと、その聲、砉然として、

かぶら矢が鳴つた樣である。元來、誰が、こんな奇怪なものを作つて、山中に置いたのか、鳥獸が此を過ぎむとすれば、いづれも、膽を驚かして、逡巡する。ひよつとすると、むかし、大禹が洪水を治めた時、ことさらに鬼神に命じ、射つて妖精を降さしめ、それが、その儘、殘つて居るのでは無からうか。今に至るも、風雨の夜など、依然として人馬の聲を聞く樣である。かつて、父老の話を聞いたが、ここなる石鼓が鳴れば、兵亂があるとのこと。今しも、人民は、瘡痍を帶びた儘、からくも命拾ひをして、太平の世に逢つたばかりであるので、そんな事があつては、まことに大變。われ願はくは、謂はゆる石鼓を擊ち碎き、石堋を打崩して仕舞ひ、上、御一人も安らかに、四海も淸平であつて、今後、萬年を經るも、全く戰爭の無い樣に致したいものである。

【餘論】前半は、形容刻劃を極めて居るが、その淒味の聊か足らぬは、畢竟、作者得意の詩境で無いからであらう。嘗聞父老言以下は、旨意の在るところ、殊に我願以下は、世の長しへに淸平ならむことを囑望し、忠愛の情の自然ほの見ゆるは、まことに嬉しい。

走狗塘

春隄長。春草(一)淺。
　春隄長く、春草淺し、

此地吳王曾走犬。
　この地、吳王、かつて犬を走らす。

獵場四面圍畫旗。
　獵場四面、畫旗を圍み、

(二)紅炬照輦還宮遲。
　紅炬輦を照らして、宮に還ること遲し。

(三)割鮮夕宴誰共食。
　鮮を割いて、夕宴、誰と共にか食す、

(四)臺上妃子(五)非樊姬(六)。
　臺上の妃子、樊姬に非ず。

春苑年來草仍綠。
　春苑、年來、草仍ほ綠に、

(七)韓盧已去多麋鹿。
　韓盧、すでに去つて、麋鹿多し。

君不見漢皇縱(八)狗
　殊有功。
　君見ずや、漢皇、狗を縱つて殊に功あり。

逐兎直到烏(九)江東。
　兎を逐うて、直に到る烏江の東。

【字解】【一】春草淺　春の草が纔に生じて、まだ十分に伸びざるを云ふ。【二】紅炬　たいまつ。【三】割鮮　新鮮なる肉を料理する。【四】臺上　臺は姑蘇臺。【五】妃子　子は唯だ添へた言葉、西施を云ふ。【六】樊姬　楚の莊王の夫人。莊王の游獵を事とするを諫めむが爲に、わざと肉を食はなかつたといふことで、その詳は、前に卷一、楚妃歎の詩中に述べて置いた。【七】韓盧　獵犬の名、說苑に「韓氏の盧は、天下の疾狗なり、兎を見て指麾すれば失兎なし」とある。【八】縱狗　史記蕭相國世家に「高帝曰く、諸君、獵を知るか。曰く、これを知れり、と。獵狗を知るか。曰く、これを知れり、と。高帝曰く、夫れ獵して獸兎を殺すを知るものは狗なり、しかも、蹤を發して獸の處を指示するものは人なり。今、諸君、徒に能く走獸を得たるのみ、功狗なり。蕭何の如きに至りては、蹤を發して指示す、功人なり」とあり、又淮陰侯列傳に「狡兎死して走狗烹られ、高鳥盡きて良弓藏し、敵國破れて謀臣亡ぶ」とある。【九】烏江東　項羽の敗死せし處、その詳は、前に卷一、虞美人の詩中に述べて置いた。

【題義】走狗塘は、題下の原注に「城西に在り、吳王游獵の處なり」とある。吳王は、卽ち夫差である。

【詩意】頃しも春、隄は長くつづき、草はまだ十分に伸びず、ここは、吳王が獵をして犬を走らした處だといふので、今でも、走狗塘といふ名が殘つて居る。むかし、吳王が獵をした時、狩り場の四面は、盡旗を押し立てて、嚴重に之を圍み、一頭だに逃がさず、やがて、夜になると、炬火に輦を照らされて、遲く宮中に歸つて來た。さて、その獲物を料理して、夕に宴を張るが、誰が御相伴をするかといふと、姑蘇臺に居る妃子、卽ち西施であつて、この女は、樊姬の賢に非ざるが故に、遠慮なく肉を食べて居る。苑中の草は、年來なほ綠なれども、韓盧の如き名犬は、すでに去り、臺下には、麋鹿多きも、最早獵を爲さず、夫差、すでに死し、吳國は亡びて仕舞つたから仕方がない。その獵に就いて思ひ出すが、かの漢の高祖の如きは、自ら手を下さず、唯だ狗を縱つことが上手であつたばかりに、大功を爲し、さしもの項羽は、兎と同じく、やがて、烏江の東に追ひつめられて仕舞つたので、人君たるものは、犬を使ひさへすれば、それで善いのである。

【餘論】結末、君不見の二句は、聊か切實を缺いて居る樣ではあるが、人君は、區區の田獵を事とすべきものではないといふ意を述べて、まさしく、諷諭の妙を極めて居る。

淸冷閣爲陳協律題

淸冷閣、陳協律の爲に題す

臨淸池敞華閣。　淸池に臨み、華閣敞たり。

明月入綺疏。微風颭羅幕。　明月、綺疏に入り、微風、羅幕を颭かす。

白波連遠洲。竹冷芙蓉愁。　白波、遠洲に連り、竹は冷かにして芙蓉愁ふ。

客聽秋聲起。魚驚星影流。　客は秋聲の起るを聽き、魚は星影の流るるに驚く。

氷絃彈罷鵾雞曲。　氷絃、彈じ罷む鵾雞の曲、

天河墮水良宵促。　天河、水に墮ちて良宵促す。

試問西園閣上游。　試みに問ふ、西園閣上の游、

何如南浦舟中宿。　南浦の舟中に宿するに何如ぞや。

【字解】〔一〕敞華閣　敞は、廣くてがらりとして居ること。〔二〕綺疏　綺麗な窓。〔三〕颭羅幕　颭は吹き動かす。〔四〕鵾雞曲　鵾雞は、たうまるといつて、雞の一種。その筋を張つて、琵琶の絃とする。その評は、卷一、王明君の詩中に述べて置いた。この句の意は、鵾雞の筋を張つて氷と見まがふ其絃を彈じて、琵琶の一曲を奏し終つたといふこと。何も、鵾雞の曲といふものがあるのではない。〔五〕天河　銀河。〔六〕墮水　西に傾いて水に接するをいふ。〔七〕良宵促　促は、縮る、迫るといふ意。夜の更けわたりしをいふ。

【題義】淸冷閣は、前に卷四、來鴻軒の題下に注して置いたが、姑蘇志に「吳縣の綠水園は、孫老橋

東に在り、故と朱勔の別墅たり、元の至正中、廬山の陳汝秩・汝言兄弟、これを購ひ得たり。中に來鴻軒・清冷閣・羅徑等の名あり」とある。すると、閣は綠水園中に在るので、陳協律は、汝秩・汝言の孰れかであらう。この詩は、陳協律の依賴に應じて、淸冷閣に題したのである。

【詩意】淸らかなる池を俯瞰する淸冷閣は、廣くがらりとして居るから、明月は、綺麗な窓にさしこみ、その吹く風は、羅の幕を吹き動かして、いかにも涼しさうである。見わたせば、白波は、遠き彼方の洲渚に連り、岸上の竹は、そよいで冷かに、池中の蓮の花は、愁を含んだ樣な風情をして居る。客は、秋聲の颯として吹き起れるを聞いて、悽然たる思に堪へず、魚は星影の流るるに驚いて、時たま、跳ねることがある。やがて、鵾雞の絃を彈じて、琵琶の一曲を奏し終ると、銀河、西に斜にして、水上に落ちむとし、折角の良宵も、いたく更けて仕舞つた。試みに陳協律に問ふが、この西園なる閣上に游ぶことは、南浦の舟中に獨り宿するに比して、いづれか興ありや。そは、無論、前者の方が優れて居るといふであらう。

【餘論】起四句は閣、次の四句は、閣上より見たる光景、結四句は、琵琶を聞いたことを敍したので、その時、その處につけ、殊に相應しきを覺える。

烏夜村

烏夜村

荒村烏夜棲。忽繞月明啼。　荒村、烏、夜棲み、忽ち月明を繞つて啼く。
生得東家女。(一)身爲萬乘妻。(二)　東家の女に生まれ得て、身は萬乘の妻となる。
至今種高樹。不遣烏飛去。　今に至つて、高樹を種ゑ、烏をして飛び去らしめず。
居人凡幾家。愛聽啼啞啞。(三)　居人、凡そ幾家、聽くを愛す、啼いて啞啞たるを。
啼啞啞。勿驚怪。　啼いて啞啞、驚怪する勿れ。
婦開門。向烏拜。　婦は門を開き、烏に向つて拜す。

【字解】【一】生得東家女　東家の女として生まれ得たといふ義。東家は、尋常の家といふ意味で、魯人が孔子を東家の丘と稱したことがある。【二】萬乘妻　皇后。【三】啞啞　烏の啼く聲。

【題義】烏夜村は、題下の原注に「崑山縣に在り、晉の穆帝何皇后の父準、かつて此に寓す。后を產むの夕、羣烏あり、夜、村落を驚かす。自後、烏あつて、徹夜鳴けば、必ず大赦あり」と記してある。

【詩意】荒れたる村落に、烏が夜の宿りを求め、そして、月明を繞つて、騷がしく啼き立てる。その時、東家の女として生まれた小娘は、後に穆帝の皇后となり、まことに、大した出世である。この村では、今日に至るまで、高い木を植ゑて、烏を引き寄せやうとし、幾軒かある居民の家では、啞啞と呼ぶ烏の聲を緣起の善いものとして聞きたがつて居る。烏が一たび啞啞といつて啼くと、決して、驚

き怪むことなく、婦人どもは、門を開き、そして、烏に向つて拜を爲して居る。

【餘論】 簡單なる傳說を詩にしたので、多少苦心の跡は認められるが、何分にも、平板の譏を免れ得ないものである。

醉贈宋卿

醉うて宋卿に贈る

勸君歸來休。　君に勸む、歸り來つて休せよ、

莫作澹蕩游(一)。　澹蕩の游を作す莫れ。

黃雲已蔽燕(二)國晚。　黃雲、すでに蔽ふ燕國の晚、

白露正滿梁(三)園秋。　白露、正に滿つ梁園の秋。

千石酒。萬戶侯。　千石の酒、萬戶侯。

請君論此誰當優。　請ふ君、これを論ず誰か當に優なるべき。

(四)吳門日出花滿樓。　吳門、日、出でて花は樓に滿つ、

小婦喚客不解羞。　小婦、客を喚んで羞を解せず。

君留綠(五)綺琴。　君は留む綠綺琴、

我脫紫(六)衣裘。　われは脫す紫衣裘。

今朝春好能飲否。　今朝春好し、能く飲むや否や、

東風吹散江南愁。　東風吹き散ず江南の愁。

【字解】【一】 澹蕩游　格別の目的なく心のどかに旅行する。【二】 燕國　今の北平一帶で、むかし戰國時代の燕の地であつた。無論、元朝も、此に都して居た。【三】 梁園　梁の孝王の園、孝王は、漢代の大諸侯で、客を愛し、鄒陽・枚乘等が其地に居た。【四】 吳門　今の蘇州。【五】 綠綺琴　綠綺は琴の名、傅玄の文に「楚王に琴あり、繞梁といひ、司馬相如に綠綺あり、蔡邕に焦尾あり、皆名器なり」とある。【六】 紫衣裘　紫色の絹で裏をつけた皮衣。

【題義】 卿は、相親んで云ふ稱呼。宋卿は如何なる人か分からぬが、餘論の條に述べる通り、字を仲溫といつたらしい。この詩は、醉中、賦して宋卿に贈つたのである。

【詩意】 君に勸めるが、故鄕に歸つて、落ち付いて居るのが第一で、氣まぐれの旅行などはせぬ方が善い。今しも、雪げの黃雲は、燕地を蔽うて、天、將に暮れむとし、白露は、梁園に滿ちて、さながら秋の如く、風光慘澹、まさしく、喪亂の世界である。千石の酒を擁して、思ふさま痛飮するのと、萬戶侯に封せられて威張つて居るのと、君は、これを論じて、いづれを優れりとするか。吳門は、流石に平穩無事、相變らず、繁華の有樣であつて、日は出でて花は樓に滿ち、若い女は、客を呼び、まことに人なれて居て、少しも羞らふ氣色がない。君は、綠綺琴を留めて、これを彈せらるべく、われは、紫衣裘を脫いで、起つて踊らうと思ふ。今日は、春景色も殊に宜しいが、君は、能く快飮せらるべきや否や。今しも、東風ゆるく吹いて、江南の愁を吹き散じ、勝游を恣にするには、まことに持

つて來いといふ時節である。

【餘論】燕國梁園の景色が、秋冬の樣だといふのは、元朝の末運に際し、四方の警報日に至る折からだからで、以下、吳門の冶游に足るを言うて、留飲を勸めたのである。金檀の附注に、鐵網珊瑚に、同じく高啓の作に係る醉歌贈二宋仲溫一の一首が載せてあつて、これと互に異なる處から、參考の爲に附載するとある。その詩は、卽ち左の如くである。

書足レ記二姓名一。劍可レ酬二恩讎一。少學兩不レ就。空作二澹蕩游一。與レ君相逢在二東州一。赤氣浮レ而非二凡儔一。驅レ車欲レ過公子宅。苦心無レ伸涕横流。黃雲已蔽燕國晩。白露正滿梁園秋。天高海濶無二處往一。借問何以銷二煩憂一。千石酒。萬戶侯。請君論レ此誰當レ優。吳門日出花滿レ樓。醉眠不レ須レ遣二客休一。君留二綠綺琴一。我脫二紫衣裘一。今朝春好能飲否。東風吹散江南愁。

因つて考ふるに、鐵網珊瑚の方が初稿で、その繁冗を汰して簡潔にしたのが、卽ち前に掲載したものであらう。

潘隱君月樓歌

潘隱君の月樓の歌

樓高高。月皓皓[一]。　樓は高高、月は皓皓。
容レ月多。得レ月早。　月を容るること多く、月を得ること早し。
朝看西墮レ江。　朝に看る、西、江に墮つるを、
夕見東生レ島。　夕に見る、東、島に生ずるを。
我歌二烏飛[二]一向二穹昊[三]一。　われ、烏飛を歌うて、穹昊に向ふ、
樓中之人須二醉倒一。　樓中の人、須らく醉倒すべし。
人長閒。月長好。　人は長く閒に、月は長く好し、
月中藥成[四]人不レ老。　月中、藥成つて人老いず。

【字解】【一】皓皓　月の冴えたる貌。【二】烏飛　曹孟德の短歌行に、月明星稀、烏鵲南飛とあるを云ふ。【三】穹昊　二字、ともに天。【四】月中藥成　傅玄の擬天問に、月中何所レ有、白兎擣二靈藥一とある。

【題義】潘隱君は、名字閲歷、ともに不詳。月樓は、その居宅の號。この詩は、卽ち其樓に寄題したのである。

【詩意】樓は高高として聳え、月は皓皓として冴え渡つて居る。樓は高きが故に、月光を容るることも多く、月を見ることも早い。朝には、殘月が西に向つて江水中に落つるを見るべく、夕には初月が東に當つて島嶼の間から上るのが見える。月の正に明かなる時、樓中の人は、天を仰いで、烏鵲南飛といふ古詩を歌ひつつ、やがて醉ひ倒れて仕舞ふ。かくの如き逸興は、決して他には求められない。人は長しへに閒であるし、月の景色は長しへに宜しく、そして、月中の兎が仙藥を擣いて成り、それを貰つて飲むと、人は卽ち不老である。

【餘論】 潘隱君が樓上に月を得て、獨り清興を恣にする有樣を想像して述べたのである。我歌㆓烏飛㆒の我は、別人ならず、矢張、樓中の人とせねば、意味が取れないと思ふ。

約㆓諸君㆒、看㆓范園杏花㆒、不㆑果、後偶獨游、而杏已盡落、惟桃數樹盛開、感而有㆑賦、因寄㆓諸君㆒

諸君に約して、范園の杏花を看むとして、果さず、後、偶ま獨游す、而かも、杏は已に盡く落ち、惟だ桃數樹盛に開く、感じて賦あり、因つて、諸君に寄す

久欲㆓與㆑君往㆒。　久しく君と往かむと欲す、
那期成㆓獨來㆒。　那ぞ期せむや、獨來を成すを。
(一)參差二月暮。　參差たり二月の暮、
(二)過㆓却杏花開㆒。　杏花の開くを過却す。
杏花雖㆑好今無㆑在。　杏花、好しと雖も、今在るなし、
只有㆓桃花笑相待㆒。　只だ桃花の笑つて相待つあり。
杏白桃紅何(三)淺深。　杏白桃紅、何ぞ淺深、
春還不㆑負㆓看㆑花心㆒。　春は還るも、花を看るの心に負かず。
看㆑花心、君更劇。　花を看るの心、君、更に劇、
莫㆘爲㆓不㆑來空歎息㆒。　來らざるが爲に空しく歎息する莫れ、
世間萬事盡如㆑花。　世間萬事、盡く花の如し、
(四)著㆑意相尋應㆑不㆑得。　意を著けて相尋ぬれば、應に得ざるべし。

【字解】 【一】參差 不揃、ここでは齟齬する、豫期と違ふ。
【二】過却 むなしく送り盡す。
【三】何淺深 何ぞ淺深あらむや。つまり、杏でも、桃でも、花の匂ひは同一である。
【四】著意 注意する。

【題義】 前に卷十に、約㆓諸君㆒游㆓范園㆒看㆓杏花㆒といふ七古があつて、その詩を以て諸友に約し、一處に范園に往つて杏花を賞しやうといつて居た處が、如何なる都合か、遂に約を果さず、その後、青邱は、一人で往つて見た處が、杏花は、すでに散つて仕舞ひ、ただ數樹の桃のみが眞盛りであつた。そこで、感ずるところあつて、この詩を賦し、重ねて諸君に寄せたのである。

【詩意】 久しく諸君と一處に出かける積りであつて、今日ここに獨りで來やうとは、豫期しなかつた。約束が齟齬して、愚圖愚圖して居る内に、二月も暮れて、杏花の盛りを空しく送り過ごして仕舞つた。杏花は、好いといつた處で、すでに散つて、今殘つて居ないから、詮方ないので、跡には、桃花の笑つて客を待つのがあるばかり。杏花の白きも、桃の花の赤きも、花の匂に淺深ある譯ではなく、ここに春の還らむとするに際し、花を看るの心に負かず、折から眞盛りに咲いて居て與れたのは、まことに

に善かつた。元來、花を看むとする心は、諸君の方が予よりも更に劇しいが、ここに來なかつたといつて、歎息するには及ばない。世間の萬事は、すべて、花の如く、注意して尋ねやうとすると、却つて、得られずに終るものである。

【餘論】杏白桃紅の二句は、花を愛する情思を道ひ得て、聊か面白いが、その他は、概して平淺である。

番人移帳圖

懸爾弧、韜我弓。　爾の弧を懸けよ、わが弓を韜まむ。
拔帳何徙楡林東。　帳を拔いて、何にか徙る、楡林の東。
顧語勿驅日暮中野。　顧みて語る、驅る勿れ、日は中野に暮る。
兒未十歲不能騎馬。　兒、未だ十歲ならず、馬に騎する能はず。

【字解】【一】懸爾弧　弧も弓も同じもの、懸は弦を張つた儘、肩にかける。【二】韜我弓　韜は、嚢、即ち弓袋に入れる。【三】楡林　一統志に「楡林は、漢の五原郡、唐の楡林、今、陝西の都司に隸し、地は河套に臨み、朔北の要圖」とある。【四】勿驅　驅は急走する。【五】兒未十歲、不能騎馬　高適の涼州詞に胡兒十歲能騎馬とある。

【題義】番人は匈奴、もとより、未開の種族であるから、テントを張り、水草を追うて轉移するので、この詩は、そのテントを移す處の有樣を畫いた圖に題したのである。

【詩意】弓の始末をするに就いて、汝のは肩に懸けよ、自分のは弓袋に入れて置かう。ここにテントを引き拂うて何處に往くかといへば、落ち付く先は、楡林の東である。顧みて、從僕に向つて云ふには、日が野中に暮るるとも、決して、疾驅してはならぬ。愛する小供は、まだ十歲にも成らず、從つて、馬に乘ることが出來ないので、覺束なくも、とぼとぼと歩むのであるから、あまり急ぐと、置いてきぼりに成る虞があるからである。

【餘論】これは、畫外の趣を道破したので、その點だけは、題畫の精神に協つて居る。

夜聞謝太史誦李杜詩

夜、謝太史が李杜の詩を誦するを聞く

前歌蜀道難。　前には歌ふ蜀道難、
後歌偪仄行。　後には歌ふ偪仄行。
商聲激烈出破屋。　商聲激烈、破屋を出で、
林鳥夜起鄰人驚。　林鳥、夜、起つて、鄰人驚く。
我愁寂寞正欲眠。　われ寂寞を愁へて、正に眠らむと欲す、

【字解】【一】蜀道難　李白の作に係る。【二】偪仄行　杜甫の作に係る。【三】商聲　五音の中で、商聲は秋に應じ、殊に悲愴なものとして知られて居る。【四】鄰人　四鄰の人人。【五】高歌隔舍　鄰れる棟の中で謝太史が高歌する。【六】李

聽ㇾ此起坐心茫然。　これを聽いて起坐、心茫然。
（五）高歌隔ㇾ舍如二相和一。　高歌、舍を隔てて、相和するが如く、
雙淚迸落青燈前。　雙淚、迸つて落つ青燈の前。
（六）李供奉。（七）杜拾遺。　李供奉、杜拾遺、
當時流落俱堪ㇾ悲。　當時流落、ともに悲むに堪へたり。
（八）嚴公欲ㇾ殺（九）力士怒。　嚴公は殺さむと欲し、力士は怒る、
白首江海長憂ㇾ飢。　白首江海長く飢を憂ふ。
二子高才且如ㇾ此。　二子の高才、且つ此の如し、
君今與ㇾ我將二何爲一。　君、今、我と將に何をか爲さむとする。

供奉　李白は、玄宗の朝に、翰林供奉であつた。【七】杜拾遺　杜甫は、安祿山の亂に賊中に陷つたが、やつとの事で、長安より逃げ出し、靈武に至つて肅宗に謁し、仍つて、左拾遺を授けられた。拾遺は、天子の過失を見付けては諫言する役、後の諫議大夫である。【八】嚴公欲殺　唐書、杜甫傳に「嚴武、世舊を以て甫を待つ。甫、これを見て、或時は巾せず。かつて、醉うて武の牀に登り、瞪視して曰く、嚴挺之、乃ち此兒あり、と。武、これを銜み、一日、甫を殺さむと欲す。冠、簾に鉤するもの三たび、左右、その母に白し、奔つて之を救うて止むを得たり」とある。【九】力士怒　前に卷十、鳳臺ニ逸翻の詩中にも引いて置いたが、李翰林別集の序に「高力士、靴を脱せしを以て深恥となす。異日、太眞、重ねて清平調の詞を吟ずるや、力士曰く、飛燕を以て、妃子を指す、これを賤むこと甚し、と。太眞、深く之を然りとす。上、かつて三たび李白に官を命ぜむと欲す、卒に宮中に捍がれて止む」とある。

【題義】　謝太史は謝徵、その略傳は、前に卷七、酬二謝翰林一留別の題下に詳述して置いた。この詩は、青邱が謝徵と共に、元史の編修に與り、天界寺に寄寓して居た頃、各ゝ異なれる一構に住し、夜、謝徵が李杜の古詩を朗誦するのを聞いて作つたのである。

【詩意】　はじめには李白の蜀道難を歌ひ、あとでは杜甫の偪仄行を歌ひ、商聲は、悲愴激烈にして、破屋より出で、林に宿る鳥も、夜、俄に起ち、鄰人も何事かと思つて驚く位。予は、寂寞に堪へずして、丁度、眠に就かうとする折しも、これを聞くと、蹶然として起坐し、心茫然たるばかり。それは謝君が歌ふので、高らかなる其聲は、別に離れた一構の中に在つて、わが愁思と相和するが如く、覺えず、雙行の淚が、迸つて、青燈の前に落ちた。李白といひ、杜甫といひ、その當時、流落して、すこしも落ち付かず、その運命の果敢なきは、ともに悲歎すべきばかり。嚴武は、甫の無禮を怒つて之を殺さうとし、高力士は、白に靴を脱せられたことを怨んで、楊貴妃に焚き付け、やがて、李杜の二人、白髮頭になるまで、江海を經めぐり、碌碌食事もせず、長しへに、飢餓を憂へて居た。二人の高才を以てして、なほ此の如く、今しも、君と我とは、どうしたら善からうかと思ひ惑ふばかりである。

【餘論】　はじめは、歌聲の悲しきをいひ、次に李杜二人を提起して、その坎軻不遇の極めて相似たるを云ひ、暗に爾我二人を以て之に比したので、感慨長しへに盡きず、後に、高謝二人が一處に翰林の職を辭したのも、偶然では無からうと頷かれる。

贈金華隱者　金華隱者に贈る

我聞(一)名山洞府三十六。　われ聞く名山洞府三十六、

(二)一一靈蹤紀(三)眞籙。　一一、靈蹤、眞籙に紀す。

(四)金華秀出向東南。　金華秀出して東南に向ひ、

遠勝(五)陽明與(六)句曲。　遠く勝る陽明と句曲と。

樓臺縹緲開煙霞。　樓臺縹緲として煙霞を開き、

天帝賜與神仙家。　天帝賜與す神仙の家。

(七)靈源有路不可入。　靈源、路あり、入るべからず、

但見幾片流出雲中花。　但だ見る、幾片流し出す雲中の花。

(八)子房之師赤松子。　子房の師、赤松子、

(九)三千年前亦居此。　三千年前、亦た此に居る。

【字解】【一】名山洞府　天下の名山で、仙人の居る處。【二】靈蹤　仙家不思議なる仙跡。【三】眞籙　仙家の記錄、李白の詩に「爲我草眞籙」とある。【四】金華　山の名、浙江金華縣北に在つて、一名長山、亦た常山に作る。元和郡縣志に「長山は、赤松子、道を得るの處。山中諸溪匯流、その下、兩巖對峙、その上に登れば、城郭聚落、宛として目前に在り」と記してある。【五】陽明　本敎龜山白玉上經に「第十洞、會稽山、陽明洞天と名づく」とある。【六】句曲　洞天福地記に「第八句曲山の洞、名づけて金壇華陽の天といふ、茅君の理むるところ、潤州句容縣界に在り」と見ゆ。【七】靈源　仙源に同じ。【八】子房之師赤松子　子房は張良の字、史記留侯世家に「今三寸の舌を以て帝者の師となり、萬戸に封ぜられ、列侯に位す。これ布衣の極、良に於て足れり。願はくは、人間の事を棄て、赤松子に從つて游ばむと。乃ち辟穀道引輕身を學ぶ」とあつて、その索隱に「赤松子は、神農の時の雨師、能く火に入つて自ら燒く、崑崙山上、風雨に隨つて上下するなり」とある。【九】三千年前亦居此　金華山中には、赤松子の遺跡が多く、一統志に「金華山に赤松溪、赤松觀、赤松祠あり」と記してある。【一〇】瑤草　珍らしい草。【一一】老鹿耕田　浙江通志に「鹿田山は、金華縣北二十五里に在り、上に沃野あり、耕すべし」とある。鹿田の名に因んで、この句を作つたものと見える。【一二】黄初平　はじめ羊

飛行恍惚誰解尋。　飛行恍惚、誰か尋ぬるを解せむ、

漫說至今猶不死。　漫に說く、今に至つて、猶ほ死せずと。

松花酒熟何處游。　松花酒熟して、何の處にか游ぶ、

(一〇)瑤草自綠春巖幽。　瑤草自ら綠にして春巖幽なり。

羣羊臥地散如石。　羣羊、地に臥し、散じて石の如く、

(一一)老鹿耕田馴似牛。　老鹿、田を耕し、馴れて牛に似たり。

聞有隱君子。　聞く隱君子ありと、

乃是學仙者。　乃ち是れ仙を學ぶもの。

自從入山中。　山中に入つてより、

不曾到山下。　かつて山下に到らず。

世人莫知其姓名。　世人、その姓名を知るなし、

以山呼之不敢輕。　山を以て之を呼び、敢て輕んせず。

樵夫忽見苦未識。　樵夫忽ち見て、苦に未だ識らず、

只疑便是黃初平。(一二) 只だ疑ふ、便ち是れ黃初平。
嗟我胡爲在塵網。 嗟、われ胡すれぞ塵網に在る、
遠望高峰若天壤。(一三) 遠く高峰を望めば、天壤の若し。
茯苓夜煮儻許餐。(一四) 茯苓、夜煮て、もし餐するを許さば、
鐵杖來敲石門響。(一五) 鐵杖、來つて石門を敲いて響かむ。

を牧して金華山中に居たが、その後、仙人に遇つて、その術を受けたといふことで、その詳は、前に卷八 煮石山房の詩中に注して置いた。【一三】著天壤 その遠く隔絶せるを云ふ。【一四】茯苓夜煮 茯苓は、松の根に生ずる一種の菌類、補血の藥になるので、前に屢ば見ゆ。寰壁續志に「邛州蒲江縣長秋山に女子あり、井を汲んで、茯苓を得、蒸して之を食ひ、仙し去る。主簿王、その遺を食ひ、亦た仙し去る」とある。
【一五】鐵杖 東坡の詩に故教三鐵杖闘二淸堅一とある。

【題義】一統志に「金華洞は、府城の北に在り、即ち道書第三十六金華洞元の天」とある。金華隱者は、その山中に棲んで居る隱士であるが、その本名は、不詳である。

【詩意】聞くところに據れば、天下の名山で仙人の住んで居る洞のある處は、凡そ三十六、いづれも、不思議な靈跡であることは、一一詳細に仙家の記錄に殘つて居る。金華といふ山は、東南方、浙江に在つて秀出し、その巖壑の靈異なることは、陽明句曲にも勝つて居る。樓臺は縹緲、煙霞を開いて出現し、ひと目見ても、この世ならぬ景色で、取りも直さず、天帝より神仙の家に賜はつたものである。仙源に通ずる路はあれども、容易に入るを得ず、唯だ雲中の花の幾片が、溪水に隨つて流れ出るのを見て、その方向を知る位である。かの張良の師たる赤松子は、三千年前、矢張、ここに住んで居たが、飛行自在、その跡は恍惚として、尋ねることが出來ず、今に至るも、猶ほ死せずに居るといふ噂であるが、あまり、あてには成らず、松花の酒熟するとき、何處に遊んで居るか知らぬが、瑤草自ら綠にして、巖谷は春も猶ほ幽邃で、その影だに見えない。あたりには、羣羊地に臥して、その形、石の如く、老鹿は田を耕し、その善く馴れたことは、丁度、牛の樣である。ここに、一人の隱君子があるが、即ち仙術を學ぶ人であつて、一たび山に入りし後は、かつて山下に出て來ないから、從つて、その姓名を知る由なく、山に因んで金華隱者といつて居るのは、決して之を輕んじた譯ではない。樵夫どもは、ふと見かけることがあるが、まだ其顏を篤と識別することが出來ないので、これは、むかしの黃初平かも知れないといつて居る。顧みれば、予は、何故に、浮世の塵網に引ッかかつて居るのか、遠く金華の高峰を望めば、その相隔つこと、啻に天壤のみならず、なかなか、その處に往くことも出來ぬが、もし隱者が、夜、茯苓を煮て、その御相伴を許されるならば、鐵の杖に縋つて往き、石門を敲いて、ほとほとと音なはうと思つて居る。

【餘論】起筆、まことに堂堂として力がある。そして、徐に金華に徼到し、はじめに、その地が赤松子の遺跡たるを云ひ、然る後、刻下、隱者の此に棲めることに及び、これに從つて、おのれも仙を學びたいといふ意を以て收束したので、通篇、些の塵俗の氣を帶びず、一誦、人をして塵界を脫離した

樸な想あらしめる。

春初來
春初めて來る

春初來。　春、初めて來る、
（一）柳條欲舒花未開。　柳條、舒びむと欲して、花、未だ開かず。
曉日窓前鳥聲喜。　曉日窓前、鳥聲喜ぶ、
似報春來喚人起。　春の來るを報じて、人を喚んで起たしむるに似たり。
東風吹暖入（二）煙痕。　東風、暖を吹いて、煙痕に入り、
綠遍江南幾千里。　綠は遍し江南幾千里。
去年春去憶愁人。　去年、春去つて愁人を憶ふ、
倏忽今年又見春。　倏忽、今年、又春を見る。
但欲逢春醉杯酒。　但だ春に逢うて杯酒に醉はむと欲す、
（三）不管相思成白首。　管せず、相思の白首を成すを。

【字解】【一】柳條　柳の枝。【二】煙痕　煙かと思はれる痕。【三】不管　かまはぬ。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】春は初めて來り、柳の枝は舒びむとして居るが、花は未だ咲き出です、朝日の映る窓の前には、鳥の聲喜ばしげに聞こえ、春の來れるを報じて、眠より人を呼び起さうとして居る。ぬるき春風は、草の芽を萌え出さしめて、煙の痕かと疑ふばかり、江南幾千里の遠きに亙つて、一望、靑靑として居る。去年、春行く頃、相隔てて愁に沈める我が友を憶つたが、忽ちにして、今年も又春景色を見る頃となつた。今は唯だ春に逢へるを幸ひ、ともに杯酒に醉はうと欲するので、相思の極、いくら白髮が生えても、かまはない。

【餘論】詞筆、極めて淸便、且つ餘情もあるが、要するに、陳套の想を反覆するに過ぎぬ。

題黃大癡天池石壁圖
黃大癡天池石壁の圖に題す

（一）黃大癡。　黃大癡、
滑稽玩世人不知。　滑稽、世を玩んで人知らず。
疑似（二）阿母傍。　疑ふらくは、阿母の傍、
再謫（三）偸桃兒。　再び偸桃の兒を謫するに似たり。

【字解】【一】黃大癡　元代著名の畫家、その略傳は、題義の項で述べる。【二】阿母　西王母。【三】偸桃兒　東方朔を指す。漢武故事に「東郡、短人を獻ず。東方朔を召して至らしむ。短人曰く、西王母、桃

平生好飲復好畫。　平生、飲を好み、復た畫を好む、
醉後(四)灑墨秋淋漓。　醉後、墨を灑いで秋淋漓。
嘗爲弟子(五)李少翁。　かつて、弟子李少翁の爲に、
貌得(六)華山絶頂之天池。　華山絶頂の天池を貌し得たり。
乃知別有(七)縮地術。　乃ち知る、別に縮地の術あるを、
坐移勝景(八)來書帷。　坐に、勝景を移して書帷に來らしむ。
身騎(九)黃鵠去未遠。　身は黃鵠に騎し、去つて未だ遠からず、
(一〇)縞素飄落流(一一)塵緇。　縞素飄落、塵緇を流る。
(一二)潁川公子欣得之。　潁川の公子、これを得たるを欣び、
手持示我請賦詩。　手に持し、我に示して詩を賦せむことを請ふ。
我聞此中可(一三)度難。　われ聞く、この中、度るべきこと難し、
(一四)玉枕祕記傳自(一五)青牛師。　玉枕の祕記は、青牛の師より傳ふ。

を種ゑ、三千年にして一たび花を開き、三千年にして一たび子を結ぶ、この兒、不良、すでに三過これを偸む」とある。【四】灑墨　墨を飛ばして畫を作る。【五】李少翁　仙人の名、漢の武帝に勸め、反魂香を焚いて、李夫人の亡魂を招いた。前に卷一、李夫人歌の詩中に詳述して置いた。【六】華山　この華山は、西嶽ではなく、吳地に在る同名の山、その頂に大きな池があつて、これを天池と稱する。【七】縮地　神仙傳に「費長房、壺公に遇ふ、神術あり、能く地脈を縮む、千里聚まつて目前に在り、これを放てば復た舊の如し」とある。【八】來書帷　書齋の戸ばりの處に來る。【九】黃鵠　前に屢ば見ゆ、羽の力が強くて、一擧千里と稱せられて居る。【一〇】縞素　畫

池生(一六)碧蓮花。　池に碧蓮花を生じ、
(一七)千葉光陸離。　千葉光陸離。
服食可(一八)騰化。　服食すれば、騰化すべく、
游空駕雲(一九)螭。　空に游んで雲螭に駕す。
奈何靈蹟久(二〇)閟藏。　奈何ぞ、靈蹟、久しく閟藏、
荒竹滿野啼(二一)猩狸。　荒竹、野に滿ちて、猩狸を啼かしむ。
(二二)尋眞羽客不肯一相顧。　眞を尋ぬるの羽客、肯て一たびも相顧みず、
(二三)却借(二四)釋子營(二五)茅茨。　却つて、釋子に借して茅茨を營ましむ。
我昔來游早春時。　われ、昔、來り游ぶ早春の時、
雪殘衆壑鎖寒姿。　雪は殘して、衆壑、寒姿を鎖す。
(二六)磴滑不敢騎馬上。　磴は滑かにして、敢て馬に騎して上らず、

絹をいふ、杜甫の曹將軍畫馬圖引に「縞素漠漠開風沙」とある。【一一】塵緇　緇塵に同じ、緇は黑色、黑色の塵埃。【一二】潁川公子　溫陵の陳彥廉を指す、その人、名字不詳、なほ題辭の項を見よ。【一三】可度難　ここを通過することが困難である。【一四】玉枕祕記　枕中記を云ふ。【一五】青牛師　老子を云ふ、列異傳に「老子西游。關令尹喜、紫氣あつて、關に浮ぶを望み見る、而して、老子、果して青牛に乘じて過ぐ」とある。今、陝西華陰縣東華嶽廟中に青牛樹があつて、老子が青牛を繫いだ處と稱して居る。【一六】碧蓮花　白い蓮、白の純粹なるものを碧といふ。【一七】千葉　花瓣厚く重なり合ふを云ふ。【一八】騰化　昇天して羽化する。【一九】雲螭　螭は龍の屬。【二〇】閟

(二七)青鞵自策桃(二八)笻枝。　青鞵、自ら策す桃笻枝。
上有煙蘿披(二九)拂之(三〇)翠壁。　上には煙蘿披拂の翠壁あり、
下有沙石蕩漾之(三一)清漪。　下には沙石蕩漾の清漪あり。
晴天倒影落明鏡。　晴天、影を倒して、明鏡に落ち、
正如玉女曉沐高鬟垂。　正に、玉女曉に沐して、高鬟垂るるが如し。
飲猿忽下藤裊裊。　飲猿、忽ち下つて藤裊裊、
浴鶴乍立風(三二)澌澌。　浴鶴、乍ち立つて風澌澌たり。
(三三)匡廬有池我未到。　匡廬、池あり、われ未だ到らず、
(三四)未省與此誰(三五)當奇。　未だ省みず、此と誰か當に奇とすべき。
掃石坐其涯。　石を掃うて其涯に坐し、

藏　閉され藏する。【二一】鼯鼲　鼯とたぬき。【二二】導眞　眞は仙人。【二三】却借　ここの借は貸す、つまり自動にも他動にも用ふる。【二四】闍子　佛徒、坊主。【二五】茅茨　かや葺の庵室。【二六】磴滑　石段が滑り易い。【二七】青鞵　鞵は足袋。【二八】桃笻枝　蜀都賦に靈壽桃枝とあつて、その註に「竹の屬、杖となすべし」とある。杜甫に桃竹杖引といふ詩があるが、桃笻は卽ち桃竹であらう。【二九】披拂　ひらき拂ふ。【三〇】翠壁　翠色の絶壁。【三一】清漪　漪は漣波。【三二】澌澌　寒冷の貌。【三三】匡廬　卽ち廬山、むかし、匡氏の兄弟が住んで居た故に云ふ。【三四】未省　未だ知らずといふに同じ。【三五】誰當奇　どちらが奇絶であるかといふ意。【三六】接䍦

沿洄引流巵。　沿洄して流巵を引く。
醉來自照影。　醉ひ來つて、自ら影を照らし、
俯笑知爲誰。　俯して笑ふ、知る誰が爲めぞ。
落梅撲香滿(三六)接䍦。　落梅、香を撲つて、接䍦に滿ち、
暮出東澗鐘鳴遲。　暮に東澗を出でて、鐘鳴ること遲し。
歸來城郭中。　歸り來る、城郭の中、
復受(三七)塵土欺。　復た塵土の欺くを受く。
十年勝賞難再得。　十年、勝賞、再び得難く、
恍若清夢一斷無由追。　恍として、清夢一斷、追ふに由なきが若し。
朝來觀此圖。　朝來、この圖を觀、
惻愴使我悲。　惻愴、われをして悲ましむ。
當時同游已少在。　當時の同游、已に在ること少く、

晉書に「山簡、襄陽に鎭す、童兒歌うて曰く、時時能騎馬、倒著白接䍦」とある。接䍦は白帽。䍦、一に籬に作る。【三七】塵土欺　欺は壓倒される。【三八】形先瘦　形容枯槁の意。【三九】摻摻　紛雜の貌。【四〇】不逢　遭逢でないこと。【四一】漢南巳老司馬樹　晉書桓溫傳に「溫、江陵より北伐し、行いて金城を經、少にして瑯琊たりし時に、種ゑしところの柳を見る、皆すでに十圍、慨然として曰く、木猶ほ此の如し、人何を以てか堪へむと。枝を攀ぢ、條を執り、泫然として流涕す」とある。【四二】峴首巳仆羊公碑　元和郡縣志に「峴山は、襄州襄陽縣の東南九里に在り、東、漢水に臨み、古今の大路なり」とあり、水經注に「峴山、羊祜の襄陽を鎭するや、鄒潤甫と嘗て之に登

我今未老形（三八）先疲。　われ、今、未だ老いず、形、先づ疲る。
人生擾擾（三九）嗟何爲。　人生擾擾、嗟、何をか爲さむ、
（四〇）不達但爲高人嗤。　達せざれば、但だ高人に嗤はる。
（四一）漢南既老司馬樹。　漢南、すでに老ゆ司馬の樹、
（四二）峴首已仆羊公碑。　峴首、すでに仆る羊公の碑。
惟應學（四三）道悟眞（四四）訣。　惟だ當に道を學んで、眞訣を悟るべく、
不與陵谷同遷移。　陵谷と同じく遷移せず。
仙巖洞府孰最好。　仙巖洞府、孰れか最も好き、
東有地（四五）肺西峨（四六）嵋。　東に地肺あり、西に峨嵋。
高崖鐵（四七）鎖不可攀援以徑上。　高崖の鐵鎖、攀援して以て徑に上るべからず、
仰望白雲樓觀空峩巍。　仰望すれば、白雲樓觀、むなしく峩巍。

る。詰の薨後に及び、後人、碑を故處に立つ、望むもの悲感す、杜元凱、これを墮淚碑といふ」とある。峴首は、卽ち峴山の頭。【四三】學道　仙道を學ぶ。【四四】眞訣　眞正の祕訣。【四五】地肺　南徐州記に「茅山、内に靈府洞室七儵九原あり、四方に交通す、外に五穴あり、南に二穴、東西北に各一穴、謂はゆる金陵地肺なり」とある。【四六】峨嵋　山名、輿地志に「眉州城南に在り、岷山より來り、連岡疊嶂、延袤三百餘里、ここに至りて、三峰を突起す、その二峰對峙、宛として蛾眉の若し」とある。【四七】鐵鎖　杜甫の詩に、鐵鎖高垂不可攀、致身福地何蕭爽とある。【四八】太乙舟　太乙の仙人が蓮葉の舟に乘つて來り香なうたといふことで、前に卷十、明月舟の詩中に劉向別傳を引

此山易上何乃遺。　この山、上り易く、何ぞ乃ち遺す、
便與猿鶴秋相期。　便ち猿鶴と秋相期す。
欲借太（四八）乙舟。　借らむと欲す太乙の舟、
夜臥浩（四九）蕩隨風吹。　夜、浩蕩に臥して、風の吹くに隨ふ。
（五〇）洞簫呼起千古月。　洞簫、呼び起す千古の月、
照我白髮涼絲絲。　わが白髮を照らして涼絲絲。
傾玉醪薦瑤（五一）芝。　玉醪を傾け、瑤芝を薦む。
招君來游愼勿辭。　君を招いて來游せしむ、愼んで辭する「勿れ、」
無爲漫對圖畫日夕遙相思。　漫に圖畫に對して、日夕遙に相思ふことを爲す無かれ。

いて詳述して置いた、なほ劉因の詩に高亭雲錦絶淸流、便是吾家太乙舟とある。【四九】浩蕩　水波の廣濶なるを云ふ。【五〇】洞簫　尺八の類。【五一】瑤芝　瑤芝は靈芝。

【題義】　圖繪寶鑑に「黃公望、字は子久、　峰と號す、別號大癡、浙江衢州の人。生まれて神童、三敎に通ず、山水を善くす。富春に居て、江山釣灘の槪を領略す。後、常熟に居り、虞山朝暮の變幻、四時陰霽の氣運を探閱し、心に得て筆に形はす、故に畫くところの千邱萬壑、愈よ出でて愈よ奇、重

帥疊嶂、越よ深く越よ妙、その設色淺絳なるもの多く、青綠水墨のもの少し。董源を師とすと雖も、實は藍より出づ。元の四大家、首に推重す」とあつて、古今に卓絕した山水畫家である。天池は、處處に在るが、ここのは吳地の華山、池の周圍は、斷崖嶄立する故に、天池石壁といつたので、黃大癡は、實際、ここに登つて寫生をしたのである。なほ、この圖の來歷價値に就いては、鳧藻集に載する小引に詳しく、それには「吳の華山に天池石壁あり。老子枕中記に云ふ、その池、度るべきこと難し、と。蓋し、古しへの靈壤なり。元の泰定間、大癡黃先生、游んで之を愛し、爲に四五本を圖す。而して、池の名、益す著はる。これは、その弟子李可道の爲に畫くところ、尤も得意の者なり。溫陵の陳彥廉、これを得、余に詩を其上に賦せむことを求む。或は云ふ、これは廬山天池の景なり、と。余、未だ以て辨ずるあらず、然れども、嘗と別本を見るに、張貞居、これに題し、首句に云ふ、嘗讀二枕中記一と。すなはち、以て華山の池となす。前輩言ふ、貞居、大癡と數ば同じく此に游ぶ、と。すなはち、その言、信、徵すべく、初め必ずしも此を舍てて彼を取らざるなり。因つて、爲に長歌を賦し、吾が鄕の山水を張り、香爐九老と高きを爭はしめむと欲すと云ふ」とある。

【詩意】　黃大癡が其性滑稽にして、この世を茶化したことは、絕えて知る人なく、たとへば、西王母の傍に在つて、桃を偸んだ爲に、兩度まで、人間に降謫された彼の東方朔に似て居ると思ふ。大癡は平生酒を飮むことを好み、又畫をかくことを好み、醉後に墨を灑いで、山水を畫くと、秋に當つて、墨痕の淋漓たるを覺ゆるばかり。ある時、同姓の因で、李少翁とでも云ひさうな、弟子の李可道の爲に、華山の絕頂なる天池の景色を畫いたことがあるが、別に壺公の如き縮地の術があつて、坐ながら、その勝景を移して、書齋の帷帳に來らしめた樣である。大癡は、その後、黃鵠に乘じて此世を去り、その死は、未だ久しきを經ざれども、纔に畫いた折角の名畫は、數ば其主を易へて飄落し、黑い塵埃を浴びて燻つて居たのを、穎川の貴公子、陳彥廉といふ人が掘り出して、喜悅、斜ならず、それを手づから持つて來て予に示し、爲に題詩を作らむことを請うた。聞くところに據れば、天池に往く路は、なかなか險阻で、その事は、枕中記に見え、それは、老子から傳はつたものだといふことで、その世に知られて居たのは、隨分古いやうである。天池の中には、白い蓮花を生じ、しかも、その花は八重で、光彩陸離、これを服食すれば、容易に風骨を換へ、羽化して登仙し、螭龍に跨つて虛空を游びまはることが出來る。しかし、かくの如き靈蹟が、久しい間湮滅し、紛亂したる叢竹が野を蔽うて、あたりは猩猩だの狸だのが啼き叫んで、いたく荒廢したのは、どうした譯か、まことに殘念な話。そこで、仙人を尋ねる羽客輩も、決して、一たびも相顧みず、却つて、その地域を坊主どもに貸したから、かや葺の庵室を建てた位。さきに、予が其地に游んだのは、早春の時であつて、雪は消えて無くなつて居たが、隨處の深谷は、ぼんやり曇つて、寒げなる我が影を鎖し、石段は滑つて、あぶないから、馬に乘つて、登ることも出來ず、仕方がないから、青色の足袋を穿ち、桃竹の杖に縋つて、覺束なくも、

歩んで往つた。やがて、その處に到達し、仰ぎ見れば、上には、煙にまがふ蔦かづらの類が披拂して居る翠色の絶壁があるし、俯瞰すれば、下には、沙石が漾はされて動いて居る漣波の池がある。折しも、天は晴れ、萬峰の倒影は、明鏡の如き池面に浮んで居て、丁度、玉女が朝に髮を洗つて、高い鬢をほどいて居る樣であつた。水を飲みに來る猿は、裊裊たる藤蔓につかまつて岸の邊に下るし、ここに浴して翅を洗つて居る鶴は、澌澌として稍や寒げなる天風に面して立つて居る。廬山にも、矢張、この種類の池があると云ふが、予は、まだ往つて見たことがないから、いづれを奇絶とすべきか、その邊の事は、とんと分からない。それから、石を掃うて水涯に坐し、水に沿うて遊び廻つて、流した盃を受けなどし、醉つた揚句に、自ら影をうつして見ると、誰かといひたい位、まるで別人の如きを笑はずには居られなかつた。兎角する中、梅花を吹き落す夕風は、香氣を送つて、わが帽に滿ち、日暮に東澗を出ると、はじめて、鐘の鳴るのが聞こえ、人里の最早遠からぬことが分かつて、やつと安心した。蘇州城郭の中に歸ると、又ぞろ、塵土に壓倒せられ、十年の長きに亙つて、かくの如き勝賞は、もう一度やつて見ることが出來ず、恍然として、清夢一たび覺めし後は、跡を追ひかけることが出來ぬと同じである。ここに、清晨に坐して、この圖を觀ると、愴然として、悲哀の情に堪へ兼ねるので、當時一處に游んだ連中で、生存するものは、すでに少く、予は、未だ老いざれども、第一に形容枯槁して、見すぼらしく成つて仕舞つた。人生の擾擾たるは、今さら詮なく、濶達に振舞はぬと、高人に笑はれる。漢南の柳樹は、十かかへの大きさとなつて、これを種ゑた桓司馬をして慨然たらしめ、峴山の頭に立てた羊祜の碑は、倒れた儘、起しもせず、今は其人の功德を記憶する人もない位。されば、仙道を學んで、眞正の祕訣を悟るべく、さうすれば、吾のみ長生して、陵谷と共に遷移することもない筈である。そこで、道を學ぶ仙巖洞府は、どこが善からうかといふと、東には、金陵の地肺と稱する茅山があるし、西には、蜀中第一の名山で、一萬尺以上の高さを有する峨嵋もある。しかし、兩處とも、高い懸崖に鐵の鎖がぶら下つて居るから、これに縋つて、一氣に上ることは、なかなか六つかしく、仰げば、白雲に聳ゆる樓觀の巍峩として、卽くべからざるを望むだけである。然るに、天池石壁の附近、さばかり路も困難ではなく、極めて登り易いのは、除却する譯には行かず、秋、猿鶴と共に期して、ここに會合するのは、甚だ宜しい。かくて、太乙の仙人の乘れる蓮葉の舟を借り、夜、浩蕩たる水波の上に臥して、風の吹くに任かせ、どつちへ流されてもかまはず、洞簫を吹いて、終古依然たる明月を呼び起し、そして、絲絲涼しげなる我が白髮を照らさせたならば、定めて愉快であらう。はては、玉醪を傾け、靈芝を食し、追追長生不死の準備をする。その時、君を招いて、是非、御來遊あれと申し送つたならば、君は、注意して、否まぬが善いので、漫然、この畫に對し、日夜、はるかに、相思の情を動かして居ても、何の效果もないことであらう。

【餘論】 起首より手持示レ我請レ賦レ詩に至るまでは、天池石壁圖の由來を記し、我聞此中可レ度難より却

借釋子營茅茨に至るまでは、靈蹟の次第に湮晦に歸せしことを嗟し、我昔來游早春時より恍若清夢一斷無由追に至るまでは、おのが前年の勝游を敍し、これに因つて、その勝景を審にし、畫と相俟ち、覽者をして、なる程と思はしめた處は、極めて巧妙である。朝來觀此圖より不與陵谷同遷移に至るまでは、浮生の事、恃むに足らざるより、學道の一事に徹到し、仙巖洞府孰最好より結末に至るまでは、再び本題に歸つて、天池の最も其所を得たるを言うて、どうか、再び其地に行きたい、その時は君を招くから是非來いといつて、前に顧應したのである。この詩は、情語景語、相錯はり、長句短句、相接し、まさしく、技巧の妙を極めて居る。

書夢中　　夢中を書す

夢行塞(一)下沙。　夢に行く塞下の沙、
無水無蒹(二)葭。　水なく、蒹葭なし。
牧羊人歸霜草短。　羊を牧するの人は歸つて、霜草短く、
平地雁羣棲不暖。　平地雁羣つて、棲、暖かならず。
騎馬茫茫入遠煙。　馬に騎して、茫茫、遠煙に入る、
一行銜起上秋天。　一行銜起して、秋天に上る。
我夢驚(三)回雁飛去。　わが夢は驚回し、雁は飛び去る、
角(四)聲吹斷江城曙。　角聲吹き斷つ江城の曙。

【字解】〔一〕塞下沙　城塞の近くに在る沙漠。〔二〕蒹葭　よしの類、詩經に蒹葭蒼蒼、白露爲霜とある。〔三〕驚回　驚いて醒める。〔四〕角聲　角は喇叭の形をした樂器で、首として軍中に用ふる。

【題義】夢中に見たことを敍述したのである。

【詩意】夢に邊塞の下なる沙漠に行つたが、その附近一帶、水もなく、蒹葭もなく、荒涼滿目、羊を牧する人も歸つて仕舞ひ、霜を帶びた秋草は短く、雁は平地に下りて宿つて居るが、これでは、如何にも寒さうである。その時、われは、馬に跨つて、茫茫たる遠煙の中に驅け入ると、一行の雁が俄に起つて、秋天に上つた。その音に驚いて、わが夢は醒め、雁は何處かへ消えて無くなり、角聲はじめて吹き斷え、江城には、ほのぼのと曙色を生じた。

【餘論】もとより珍らしい夢でもなく、從つて、これを詩にして見た處で、さして奇警でも無い樣である。

嫣雉子歌　　嫣雉子の歌

嫣(一)雉子。　嫣雉子、

乃是(二)軒轅之裔(三)虞鰥之孫。　乃ち是れ軒轅の裔、虞鰥の子。
(四)混沌旣死一萬年。　混沌、すでに死して一萬年、
獨抱(五)大樸存。　ひとり大樸を抱いて存す。
竊伏在(六)草野。(七)冥心究(八)皇墳。　竊に伏して草野に在り、冥心、皇墳を究む。
蚤逢(九)三光(一〇)五嶽之氣乍分　蚤く逢ふ三光五嶽の氣、乍ち分裂するに、
裂。
(一一)天猨下地舐血流渾渾。　天猨地に下り、血を舐めて流渾渾たり。
(一二)鹿走秦中原。(一三)蛇鬭鄭國門。　鹿は走る秦の中原、蛇は鬭ふ鄭の國門。
(一四)俎豆棄草莽。(一五)干戈欻崩奔。　俎豆は草莽に棄てられ、干戈、欻ち崩奔。
嫣雉子便欲東游渡(一六)弱水。　嫣雉子、便ち東游して弱水を渡り、
(一七)沐髮(一八)滄海朝陽盆。　髮を滄海の朝陽盆に沐せむと欲す。
又欲西行泝(一九)河漢。踰(二〇)崑崙。　又西行、河漢を泝り、崑崙を踰えむと欲す。
(二一)山橫川阻兩地俱不可以　山は橫はり、川は阻て、兩地、ともに以て往くべからず、

往兮。
歸來掩戶臥(二二)旦昏。　歸り來つて、戶を掩うて旦昏に臥す。
蒔黍(二三)一區。注(二四)醪一樽。　黍一區を蒔き、醪一樽を注ぎ、
妻給(二五)井臼。兒牧雞豚。　妻は井臼を給し、兒は雞豚を牧す。
不(二六)詰曲以媚俗。　詰曲以て俗に媚びず、
不(二七)偃蹇而凌尊。　偃蹇にして尊を凌がず。
作爲古文詞。(二八)言高氣(二九)醇溫。　古文詞を作爲して、言高くして氣醇溫。
手提(三〇)數寸管。欲發(三一)義理根。　手に數寸の管を提げ、義理の根を發せむと欲す。
上探孔孟心。下弔(三二)屈賈魂。　上、孔孟の心を探り、下、屈賈の魂を弔ふ。
其質耀金石。其芳吐(三三)蘭蓀。　その質、金石に耀き、その芳、蘭蓀を吐く。
(三四)叩虛答有響。斲險成無痕。　虛を叩けば、答へて響あり、險を斲れば、成つて痕なし。
陸珍(三五)雜水怪。變狀弗可論。　陸珍、水怪に雜はり、變狀、論ずべからず。
幾年兀兀不肯出。　幾年か、兀兀として肯て出でず、

坐待眞（三六）主應運九（三七）五開乾坤。
坐に待つ、眞主の運に應じて、九五、乾坤を開くを。

鶴（三八）書自天來。幽（三九）隱初見拔。
鶴書、天より來り、幽隱、はじめて拔かる。

使者遠造廬。雞鳴起膏（四〇）轄。
使者、遠く廬に造り、雞鳴、起つて轄に膏す。

與纂金匱（四一）編。尚書爲給（四二）札。
ともに金匱の編を纂し、尚書、爲に札を給す。

姦魂泣幽塚。下恐遭誅殺。
姦魂、幽塚に泣き、下、誅殺に遭はむことを恐る。

書成一代進紫宸。
書、一代を成して、紫宸に進む、

鸞（四三）旗羽（四四）衞夾（四五）陛陳。
鸞旗羽衞、陛を夾んで陳ぬ。

閤（四六）門導謁稱小臣。
閤門導謁して、小臣と稱す、

麻（四七）衣不脫拜聖人。
麻衣脫せずして、聖人を拜す。

捧（四八）函近前殿。龍顏喜回（四九）春。
函を捧げて、前殿に近く、龍顏、喜んで春を回す。

敕賚內（五〇）帑之金與綺（五一）段。
敕して內帑の金と綺段とを賚ふ、

其文織作銀（五二）麒麟。
その文、織つて作す銀麒麟。

蒙恩乞還家。以奉白髮親。
恩を蒙つて、乞うて家に還り、以て白髮の親に奉す。

戴古（五三）弁。垂長（五四）紳。
古弁を戴き、長紳を垂れ、

自號山澤之臞（五五）民。
自ら山澤の臞民と號す。

嬀蜼子幸際明（五六）良時。
嬀蜼子、幸に明良の時に際し、

無爲寂默坐老東海湄。
無爲寂默、坐して東海の湄に老ゆ。

青（五七）邱有客鈍且癡。
青邱、客あり、鈍且つ癡、

與汝欲結同（五八）襟期。
汝と結ばむと欲す同襟の期。

左鼓清（五九）瑟。右吹鳴（六〇）篪。
左に清瑟を鼓し、右に鳴篪を吹き、

作歌共祝天子壽。
歌を作つてともに祝す天子の壽、

五（六一）風十雨萬國赤子同熙（六二）熙。
五風十雨、萬國の赤子同じく熙熙。

【字解】【一】嬀蜼子 王常宗の號、その詳は、題義の項で述べる。【二】軒轅 卽ち黃帝。【三】虞鰥 鰥は男の妻なきもの。舜、はじめ妻なきが故に云ふ。【四】混沌旣死 莊子に「南海の帝を儵となし、北海の帝を忽となし、中央の帝を混沌となす。儵と

忽と、時に混沌の地に相遇ふ。渾沌、これを待つこと甚だ善し。儵忽、渾沌の德に報ぜむことを謀る。曰く、人皆七竅あり、以て視聽食息す。これ獨り有るなし、嘗試に之を鑿たむ、と。日に一竅を鑿ち、七日にして渾沌死す」とある。【五】 大樸　即ち大道、樸は純樸にして自然の儘なる義。【六】 草野　草茂る野べ、即ち民間。【七】 冥心　心を專にする。【八】 皇墳　韓愈の詩に高詞媲ニ皇墳一とあり、孔安國の尙書序に「伏羲・神農・黃帝の書、これを三墳といふ」とある。【九】 三光　日月星を併稱す。【一〇】 五嶽　前に數ば見ゆ、九州の鎭となれる名山の總稱。東は泰山、南は衡山、西は華山、北は恆山、中央は嵩山。【一一】 天狼　前に卷六、卞將軍墓の詩に見ゆ。星の名。この星が落ちると、戰亂が起る。【一二】 鹿走秦中原　前に卷四、感舊の詩中に見ゆ。秦の始皇の崩後、中原の地が亂れたるを云ふ。鹿は狩獵の目的物で、ここでは帝位を指す。【一三】 蛇鬪鄭國門　左傳に「はじめ、內蛇、外蛇と鄭の南門中に鬪ひ、內蛇死す、六年にして厲公入る」とある。【一四】 俎豆　俎はつくゑ、祭享の器、牲を載せて薦むるに用ふ。豆はたかつき、木製の食器。ともに祭祀の時に供物をなする。【一五】 干戈　楯と戟、兵器の義に用ふ。【一六】 弱水　山海經に「勞山、弱水出で、西流して洛に注ぐ」とあり、舊唐書東女國傳に「その王、居るところ、康延と名づく、川中に弱水あり、南流す、牛皮を用ひて船となし、以て渡る」とある。【一七】 沐髮　髮を洗ふ、謝朓の辭隋王牋に沐レ髮晞レ陽、未レ測ニ涯涘一とある。【一八】 滄海朝陽盆　朝日に照らされる滄海、盆に似たるが故に云ふ。【一九】 河漢　銀河。【二〇】 崑崙　西方の仙境、西王母の住む處。【二一】 山横川阻　山は横ばり、川は路を妨げる。【二二】 旦昏　朝暮に同じ。【二三】 一區　一區劃の地。【二四】 醪　濁り酒。【二五】 井臼　水を汲み米を舂く。【二六】 詰曲　無理に曲げる。【二七】 偃蹇　のさばつて獨りで偉くして居る。【二八】 言高　言辭の高尙なること。【二九】 醇溫　醇粹にして溫厚。【三〇】 數寸管　短い筆。【三一】 義理根　義理の根本。【三二】 屈賈　屈原と賈誼。屈原は湘水に投じて死し、後に賈誼が其地を過ぎて弔つたことがある。そこで、史記では、これを合傳にしてある。【三三】 蘭蓀　蓀は菖の一種、花あやめ、ともに香草の名。【三四】 叩虛　中空だと思つて敲く。【三五】 兀兀　說文に「動かざる貌」とあり、韓愈の進學解に恆兀兀以窮レ年とある。【三六】 眞主　眞正の天子。【三七】 九五　易の乾卦の九五に飛龍在レ天とあつて、天子の卽位を云ふ。【三八】 鶴書　朝廷より召し出しの書狀。孔稚珪の北山移文に鳴鶴入レ谷、鶴書赴レ隴とあつて、その注に「蕭子良の古文篆隸文體に曰く、鶴頭書と偃波書と、ともに詔板用ふるところ」とある。【三九】 幽隱　幽僻隱晦の地に住むもの。【四〇】 香轄　韻會に「轄は車の軸端の鍵」とあつて、それに油をさして出發の準備をする。【四一】 金匱　匱は櫃、金屬製の櫃に入れて珍藏して置いた史料。【四二】 給札　原稿用紙を支給する。【四三】 鸞旗　天皇旗、その上に鸞を畫く。【四四】 羽衞　羽林の兵の警備。【四五】 夾陛　陛は殿階。【四六】 閤門導謁　閤門は、正殿の傍に在る小門、そこより入り、案內されて拜謁する。宋史職官志に「東上閤門、西上閤門使、各三人、朝會宴享供奉贊相禮儀の事を掌る。もし慶禮奉表は、東上閤門、これを掌り、慰禮進名は、西上閤門、これを掌る」とある。【四七】 麻衣　粗末な衣、もとより禮裝ではない。摭言に「劉虛白、裴垣と硯席を同じうす。垣は主文、虛白は猶ほ是れ舉子、簾前一絕句を獻じて云ふ、二十年前此夜中、一般燈燭一般風、不レ知歲月能多少、猶著ニ麻衣一待ニ至公一」とある。【四八】 捧函　函は原稿を入れた函。【四九】 回春　春が立ち戾つて來た。【五〇】 內帑　御內儲。【五一】 綺段　見事な織物。【五二】 銀麒麟　銀の絲で麒麟が織り出してある、杜甫の麗人行に繡羅衣裳照ニ暮春一、蹙金孔雀銀麒麟とある。【五三】 古弁　むかし風な冠。【五四】 長紳　長い帶。【五五】 臞民　痩せた人。【五六】 明良時　明主良臣の際會した太平の時。【五七】 靑邱有客　作者自ら謂ふ。【五八】 同襟期　一處に會合する機會、杜甫の詩に時赴鄭老同襟期とある。【五九】 清瑟　瑟は琴の屬。【六〇】 鳴篪　篪は橫笛の一種、長さ一尺四寸、周圍三寸、八孔。詩經に伯氏吹レ塤、仲氏吹レ篪とある。【六一】 五風十雨　前に數ば見ゆ、五日に一たび風がふき、十日に一たび雨ふるといふ太平の世。【六二】 熙熙　樂しげなる貌。

【題義】 嬀蜼子は、題下の原注に「友王常宗の爲に作る、蓋し其號なり」とある。王常宗は、前に卷三、春日懷ニ十友一詩の第一に出て居て、そこに略傳を記して置いたから、參照して貰ひたい。嬀は陳の姓、王常宗は、本と陳氏なるより云ひ、蜼は蜘蛛猿といつて、小さい猿。すると、嬀蜼子とは、もと陳姓で、蜘蛛猿の如き貌を爲す人といふ意味であらう。婁堅の王常宗傳に「先生の諱を得るに方つてや、自ら嬀蜼子と號し、以て志を見はす。嬀は、陳の姓なり。先生、もと陳氏の裔、姓を復せむ

と欲して、未だ果さず。雌は、物に於て昂尾長鼻、雨ふれば木に挂り、尾を以て鼻を塞ぐ」とある。序に云ふが、嫣といふ姓は、舜から出たので、書の堯典に釐降二女于嫣汭」とあつて、舜は堯の二女と婚せし後、嫣水の邊に居たから、その子孫は、地名を取つて姓とした。そこで、この詩の起首に軒轅之裔虞鰥之孫と特記した譯である。この詩は、王常宗が元史編撰の事畢つて歸鄕した時、靑邱も、矢張、すでに歸家して居たから、賦して贈つたのである。

【詩意】嫣雌子は、取りも直さず、黃帝の末裔で、虞舜の子孫である。混沌、死してより一萬年、世は唯だ功利を趁ふに專らなる折から、君のみは、ひとり至道を其身に體し、人に知れぬやうに、田舍に引ッ込んで、專心、一意、古しへの典籍を研究して居る。會ま、元の末運に際し、三光五嶽の氣は分裂して、中國は瓦解し、天狼の星は地に落ちて、血の渾渾として流れるのを舐つて居るといふ位、四海は爭戰を事として居た。たとへば、秦の始皇の崩後、羣雄が中原の鹿を爭ふが如く、鄭の南門の內外なる蛇が相鬪ひ、外蛇が勝つたのが、前兆となつて、厲公が入國するといふ樣な工合。祭祀の時に用ふる俎豆の類は、草むらの中に投げ棄てられ、どこに往つても、干戈の取り沙汰ばかりであつた。そこで、嫣雌子は、こんな處に居ては大變だといふので、東游して弱水を渡り、そして、朝日に照らされた滄海の盆の樣な水に臨んで髮を洗はむとし、さなくば、西に行つて、銀河を溯り、そして、西王母の住む崑崙を踰えて、なほ彼方に往つて見たいと思つて居たものの、山は橫はり、川は阻て、兩地ともに、往くことが出來ないから、引きかへして、戶を閉ぢた儘、朝暮を通じて、臥して居た。その時の生活狀態はと云ふと、黍一區を蒔き、濁酒一樽を盈たし、妻は、井を汲んだり、米を舂いたりして居るし、倅は、雞の世話をしたり、豚を飼つたりして居る。君は、いやいやながら、己を曲げて世の俗人に媚ぶることはせず、さうかといつて、のさばつて、橫柄に構へて、尊貴の人を凌辱することもしない。この間、古文詞を作つたが、その言語高尙にして氣象溫醇、まことに希に見るところ。君は、手に數寸の筆を提げて、義理の根本を闡明しやうといふので、上は孔丘・孟軻の本心を探り、下は屈原・賈誼の冤魂を弔ひ、文行を兼備し、古今を達觀し、文章の質は金石を耀かすべく、その芳は、蘭蓀の樣な香氣を吐き、中が空かと思つて、これを叩くと、答へて響を爲し、險なるを削りならした揭句、渾然として痕なく、水陸の珍怪を併せて、千變萬化の狀は、到底論じ盡されぬ位。君は、幾年の久しきに亙り、兀兀として動かず、草小屋に引ッ込んだ儘で、眞正の天子が天運に應じて出で、飛龍の天に在るが如く、一朝卽位して、乾坤を開くことを待つて居られた。すると、豫期に違はず、明の太祖が卽位せられ、態態、御召狀を下されて、草莽幽隱の名士を初めて拔擢することになり、使者は、遠くより君の菴を尋ねて來たから、君は、直に之を諾し、夜あけに雞の鳴く頃、車轄に油をさして、發程の準備を整へられた。程なく、著京すると、帝室所藏の史料を編纂することとなり、尙書省より用紙を供給された。君の史筆は、いささかも、事實を枉げずに直書するから、姦雄の魂は、墓中に泣

き、地下に在つても、誅殺に遭はむことを恐れて居た。やがて、元一代の歴史が愈よ出來上ると、これを進獻する爲に、紫宸に朝し、あたりには、鸞旗竝び立ち、羽林の兵士が嚴重に警衞し、殿階を夾んで整列して居た。君は、側の閤門より入り、しるべせられて謁見し、小臣と稱しつつ、麻衣を著けた儘で、天子を拜した。そこで、史稿を入れた函を捧げて殿前に近づくと、龍顏、喜を含んで、忽ち春を回せしが如く、御機嫌、斜ならず、感賞の餘り、勅して御內帑の金と見事な織物とを賜はつたが、それには、銀の絲で麒麟を織り出してあつて、滅多に見たことも無いやうなものであつた。君は、聖恩の渥きを蒙り、御暇を願つて、家に歸り、これからは、白髮の老親に孝養を盡さうといふ決心で、古めかしい冠を戴き、長い帶を垂れ、全然、浮世ばなれをして、自ら山澤の瘦せ浪人と號して居た。嫣雌子よ、君は、明主良臣の結構なる時に遇ひ、無爲寂默、坐ながら、東海の濱に老いむとして居られる。われは、靑邱に寄寓して居て、資性頑鈍にして癡愚であるが、君と會同の機會を約して、詩酒徵逐の樂を縱にしやうと思ふ。その時は、左に淸瑟を皷し、右に鳴篪を吹き、歌を作つて、ともに聖天子の御世、千代萬代に續かむことを壽ぎ、そして、五日に風、十日に雨といふやうに、陰陽善く調ひ、萬國の赤子と共に、煕煕として笑ひさざめいて居たいといふ意を述べることに致さう。

【餘論】起首より冥心究㆓皇墳㆒に至るまでは、嫣雌子の出身を敍し、蚤逢三光五嶽乍分裂より歸來掩㆑戸臥㆓旦昏㆒に至るまでは、元季に亂を避けむとして果さず、相變らず蘇州に隱居して居たことを記し、蒔㆓黍一區㆒より坐待眞主應㆑運九五開㆓乾坤㆒に至るまでは、隱居中の生活狀態より、その愈よ文章の妙を得たることを述べ、鶴書自㆑天來より自號㆓山澤之臞民㆒に至るまでは、修史の始末に繼ぐに、恩を蒙つて東歸せしを以てし、最後に嫣雌子幸際㆓明良時㆒より結末に至るまでは、爾我の交情に及び、且つ共に太平を謳歌したいといつて、世の至治を囑望したのである。

贈㆓劉生㆒歌

劉生に贈るの歌

君不㆑見(一)歐冶子。
君見ずや歐冶子、

(二)金鑄㆓魚腸㆒照㆓吳市㆒。
金、魚腸を鑄つて、吳市を照らす。

君不㆑見(三)徐夫人。
君見ずや、徐夫人、

(四)藥淬㆓匕首㆒驚㆓(五)函秦㆒。
藥、匕首を淬して、函秦を驚かす。

奇鋒當年非㆑不㆑利。
奇鋒、當年、利ならざるに非ず、

氣奪㆓秋雲㆒愁㆓(六)白帝㆒。
氣は秋雲を奪うて、白帝を愁へしむ。

(七)伯圖恃㆑此竟無㆑成。
伯圖、これを恃んで、竟に成るなし、

【字解】【一】歐冶子　吳越春秋に「干將、歐冶子と師を同じうし、ともに能く劍を爲る」とある。【二】金鑄魚腸　金は銅、むかしの劍は、銅を以て鑄造した。魚腸は、劍の名。吳越春秋に「越王允常、歐冶子を聘して、名劍五枚を作る、秦曹・巨闕・魚腸・純鉤・湛盧」とある。【三】徐夫人　史記刺客列傳に「ここに於て、太子、豫め天下の利匕首を求め、

(八)良冶徒爲殺人器。　良冶徒に爲る殺人の器。

何如(九)劉生獨釆(一〇)昆吾鋼。　何ぞ如かむ、劉生、ひとり昆吾の鋼を釆り、

大爐夜鍛騰虹光。　大爐、夜鍛へて、虹光の騰るに。

(一一)神鍼(一二)妙刃兩如水。　神鍼妙刃、兩つながら水の如し、

提出(一三)二豎皆奔藏。　提出すれば、二豎、皆奔藏。

利器之功有如此。　利器の功、かくの如きあり、

特爲醫仙起人死。　特に醫仙の爲に人の死を起す。

囊中長得伴(一四)刀圭。　囊中、長く刀圭を伴ふを得たり、

海上何須(一五)剸犀兕。　海上、何ぞ須ひむ、犀兕を剸るを。

我看十年(一六)太白西方明。　われ看る、十年、太白、西方に明かに、

(一七)銅山尋鑿兵縱橫。　銅山尋鑿、兵縱橫。

幸逢聖人生。　幸に聖人の生まるるに逢ひ、

干戈戢四海清。　干戈戢まり、四海清し。

願生但制此器勿制兵。　願はくは、生、但だ此器を制して、兵を制する勿れ、

民無(一八)疫癘樂太平。　民に疫癘なくして太平を樂まむ。

趙人徐夫人の匕首を得たり」とあつて、索隱に「徐は姓、夫人は名、男子を謂ふなり」とある。【四】橐淬匕首　上文の續きに「これを百金に取り、工をして藥を以て、之を淬せしむ」とあつて、索隱に「淬は染なり、毒藥を以て劍鍔に染むるを謂ふなり」とある。【五】函秦　函谷關内の秦。【六】白帝　史記高祖本紀に「高祖、酒を被り、夜、澤中を經、大蛇、徑に當る。高祖、劍を拔いて蛇を斬る。後に一老嫗あり、夜、哭して曰く、吾は白帝の子なり、化して蛇となつて、道に當る、今、赤帝の子に之を斬らる」とあつて、その注に「秦は西戎に居り、少昊の神を主とし、西畤を作つて白帝を祠る」とある。【七】伯圖　霸圖に同じ。【八】良冶　すぐれたる冶工。【九】劉生　題義の條を見よ。【一〇】昆吾鋼　鋼は鋼鐵、列子に「西海の上に昆吾石多し、冶して鐵となして劍を作る、玉を切ること、泥の如し」とある。【一一】神鍼　病を治するに用ふる針、隋書經籍志に、赤烏神鍼經一卷があつて、針治の術は早くから開けて居つた。【一二】妙刃　醫用の刀、元稹の詩に、磨礱刮骨刀とある。【一三】二豎　病の神、左傳に「晉侯疾む、醫を秦に求む。秦伯、醫緩をして之を爲さしむ。未だ至らず、公、夢む、疾、二豎子となつて曰く、彼は良醫なり、われを傷つけむことを懼る、焉くにか之を逃れむ。その一曰く、肓の上、膏の下に居らば、われを若何」とある。【一四】刀圭　藥を調合するに用ふ、前に卷四、贈惠山醫僧の詩中に見ゆ。【一五】剸犀兕　犀や兕を切り殺す。兕は、野牛に似て色青く、重さ千斤、一角あり、長さ三尺餘、性、よく抵觸するを以て、その角にて、罰杯を爲りて酒戒と爲す、皮は、堅厚にして甲を製す。つまり、犀の一種で、やや小さいものと見える。李尤の寶劍銘に、龍淵耀奇、太阿飛名、陸斷犀兕、水截鯢鯨とある。【一六】太白　即ち明星、兵亂の象として知らる。前に卷四、感舊の詩中に詳述して置いた。【一七】銅山　漢書食貨志に「建元以來、用少し、縣官、往往、銅山に卽いて錢を鑄る」とある。【一八】疫癘　流行病。

【通義】劉生は、題下の原注に「生、鍛を善くす、李鍊師の爲に、三隅鐵劑藥刀を製す、歌を求む、これに贈る」とある。その人、名字不詳。この詩は、劉生の請に因つて、賦して、これに贈つたので

ある。

【詩意】古しへの歐冶子は、銅を以て魚腸の劍を鑄り、劍光は、遍ねく吳市を照らした。又徐夫人といふものがあつて、その人の造つた短刀を燕の太子が買ひ取り、毒藥を鍔の處に仕込み、そして荊軻に授けて秦に之かしめた。二人の造つた劍は、鋒先が鋭くて、隨分よく切れるが、その凛烈の氣は、秋雲を奪ひ、秋の神たる白帝を愁へしむるばかり、こんな者を恃みとして居ては、霸圖の成就する筈もなく、折角の良冶をして、徒に殺人の用具を造らしめたのは、まことに、遺憾である。ここに、劉生は、昆吾に產する鋼鐵を采取し、夜、大きな爐で鍛へると、虹の樣な光が立ちのぼり、針にしても、藥刀にしても、晶瑩水の如く、これを提げて出さへすれば、例の二豎なども、辟易して走り匿れる。利器の功用は、かくの如く、そして仙醫の手に渡すと、人の死を起さしめ、囊中に在つては、常に刀圭と一處に置かれ、海邊に出かけて、犀や野牛を屠るにも及ばない。この十年以來、太白星は高く西天に輝き、到る處、銅山を發掘して、軍資となし、天下は、兵馬の縱横に任かせて居たが、幸にして、大明の天子が世に出た爲に、さしもの干戈、一朝にして戢まり、四海皆清平となつた。生よ、願はくは、かくの如く、仁術に役立つ道具のみを作つて、兵器などは製造せぬが善いので、さうすれば、人民も疫癘に苦まずして、太平を樂むことが出來やう。

【餘論】この詩は、平易率直、趣意は至極尤もらしいが、題の性質上、どうも、あつといつて感服すべき程のものではない。

登金陵雨花臺望大江

金陵の雨花臺に登りて大江を望む

大江來從萬山中。　大江は萬山の中より來り、
山勢盡與江流東。　山勢、盡く江流と東す。
鍾山如龍獨西上。　鍾山は龍の如く、ひとり西上し、
欲破巨浪乘長風。　巨浪を破つて長風に乘せむと欲す。
江山相雄不相讓。　江山、相雄として相讓らず、
形勝爭誇天下壯。　形勝、爭つて誇る天下に壯なるを。
秦皇空此瘞黃金。　秦皇、空しく此に黃金を瘞む。
佳氣葱葱至今王。　佳氣葱葱、今に至つて王なり。
我懷鬱塞何由開。　わが懷、鬱塞、何に由つて開かむ。
酒酣走上城南臺。　酒酣に、走つて上る城南の臺。

【字解】【一】大江　普通に云ふ揚子江。支那第一の最大の川で、源を青海の巴顔喀喇山の南麓に發し、流れて雲南・四川・湖北・湖南・江西・安徽の諸省を經、江蘇の崇明縣に至つて海に入り、その長さ、九千九百六十華里、俗に長江と稱し、その下流を揚子江と稱して居る。【二】萬山　宜昌以西を云ふ。【三】鍾山　南京の東北に在つて、俗に紫金山と稱して居る。諸葛亮が鍾山龍蟠といつたのは、卽ち此處である。吳の孫權は、その祖の諱を避けて、名を蔣山と更めたが、宋に成つてから復た鍾山と稱した。【四】秦皇　丹陽記に「秦

坐覺蒼茫萬古意。　坐に覺ゆ、蒼茫萬古の意、
遠自二荒煙落日之中一來。　遠く荒煙落日の中より來る。
（九）石頭城下濤聲怒。　石頭城下、濤聲怒り、
武騎千羣誰敢渡。　武騎千羣、誰か敢て渡らむ。
（一〇）黄旗入レ洛竟何祥。　黄旗洛に入る、竟に何の祥、
（一一）鐵鎖横レ江未レ爲レ固。　鐵鎖、江に横はるも、未だ固と爲さず。
前（一二）三國。後（一三）六朝。　前には三國、後には六朝、
草生二宮闕一何蕭蕭。　草は宮闕に生じて何ぞ蕭蕭。
英雄乘レ時務二割據一。　英雄、時に乘じて割據を務め、
幾度戰血流二寒潮一。　幾度か、戰血、寒潮に流る。
我生幸逢二聖人起一　わが生、幸に逢ふ、聖人の南國に起るに、
南國一。

の始皇、金玉雜寶を埋め、以て天子の氣を厭す、故に金陵と名づく」とある。【五】 葱葱 盛にして生氣ある貌。【六】 至今王 王は旺、盛なりといふ意。【七】 鬱塞 もやもやして開かぬこと。【八】 城南臺 雨花臺をいふ、なほ題意の條を見よ。【九】 石頭城 南京の西、石頭山に在る。漢の建安十六年、孫權は治を秣陵に移し、明年、ここに城いた。その後、沿革はあるが、その遺址は、今でも殘つて居る。宋の張舜民は「石頭城は、天生の城壁あつて、城の如く然り。江行、北より來るもの、石頭城に循ひ、轉じて秦淮に入る」といひ、陸游は「龍灣より石頭山を望む、山甚だ高からず、然れども、江中に峭立し、鐵甕、垣牆の如し」といつて居る。【一〇】 黄旗入洛 三國志の吳

禍亂初平事二休息一。　禍亂、はじめて平らいで、休息を事とす。
從レ今四海永爲レ家。　今より、四海永く家となし、
不レ用（一四）長江限二南北一。　用ひず長江南北に限るを。

志に「はじめ、丹陽の刁玄、國人を誑いて曰く、黄旗紫蓋、東南に見はると。又讖書に童謠あり、曰く、吳天子當レ上と。皓、これを聞いて、喜んで曰く、これ天命なり、と。即ち其母妻子及び後宮數十人を載せ、牛渚の陸道より西上せむとし、云ふ、青蓋、洛陽に入り、以て天命に順はむ、と。行いて大雪に遇つて乃ち還る」とある。その後、孫皓は晋軍に敗られて降りし後、洛陽に入つたので、上の童謠等は、皆吳の滅亡に應ずるのであつた。【一一】 鐵鎖横江 晋書に「王濬、吳の丹陽を攻めて之に克つ、吳人、江磧要害の處に於て、並に鐵鎖を以て、これを横截し、又鐵錐を作り、長さ丈餘、暗に江中に置き、逆に舟艦を拒ぐ。王濬、大筏數十を作り、方百餘步、草を縛して人となし、甲を被り、仗を持せしめ、水に善きものをして、筏を以て先行せしめ、鐵錐に遇へば、錐、輒筏に著いて去る。又大炬を作り、長さ十餘丈、大數十圍、灌ぐに麻油を以てし、船前に在つて鎖に遇へば、炬を燃やして之を燒く。須臾にして、融液斷絕、船、礙るところなし」とある。【一二】 三國 魏蜀吳をいふ。【一三】 六朝 三國の時、金陵に都した吳を始めとし、東晉、並に宋齊梁陳を併稱す。その後、隋は天下を統一して長安に都した。【一四】 長江限南北 曹丕が吳を伐たむとし、江に臨み、やがて引き返した時の言葉で、三國志の魏志に見ゆ。

【題義】 金陵は、今の南京、雨花臺は、江寧府志に「南城三里、聚寶門外に在り、岡阜の最高處に據る。梁の武帝の時、雲光法師、經を此に講ず。凡そ經を講すれば、天、花を雨ふらして、雪片の如し。故に以て其臺に名づく」とある。大江は揚子江。この詩は、雨花臺に上り、江山の形勢を觀て、感慨の餘に作つたので、即ち青邱が南京に居た時の事に係るのである。

【詩意】揚子江は、巴蜀萬山の中より流れ來り、そして、兩岸の山勢は、すべて、江流と共に東向して、ここにも、その餘脈を存して居る。ひとり、鍾山のみは、龍の如き形をなし、反對に獨り西上し、巨浪を破り、長風に乘じて昇天せむとする樣である。江山は、互に其雄を競うて、少しも相讓らず、そして、その形勝の天下に壯なることを爭うて誇つて居る。むかし、秦の始皇帝は、むなしく、ここに黃金を埋めて、天子の氣を鎭壓したが、その佳氣は、葱葱として、今日なほ盛である。われ、この地に在つて、懷抱鬱塞、不愉快で仕方がない處から、酒酣なる時、走つて、城南なる雨花臺に上つて曠望すると、蒼茫萬古、今を感じ、舊を懷ふ念が、遠く落日荒煙の中より來るを覺えた。石頭城下には、濤聲怒るが如く、武騎千羣を以てするも、なかなか渡ることが出來ない。むかし、吳國の末路、黃旗洛に入るといふ童謠が流行したが、それは、何の兆候であつたか、鐵鎖を以て江を橫斷しても、西晉の舟軍を防ぐことは出來なかつた。前には三國の吳あり、後には六朝の國國あり、當時の宮闕は、草が蕭蕭として生ひ茂つて居る。英雄は、時に乘じ、割據を務めて、この江山の要害を利とし、戰爭も度度あつて、血は寒潮に流れ、江水も爲に赤くなつた位。ここに、われは、幸にも、聖人の南國より起れるに逢ひ、さしもの禍亂、はじめて平らいで、休息を事とする目出たき御世となつた。されば、今より後は、四海一家となり、長江を界として、南北對立、その霸を爭ふ樣なことの無い樣に致したい。

【餘論】この詩は、集中有數の傑作と稱すべく、起首より遶自荒煙落日之中來に至るまでは、雨花臺上の曠觀を敍し、金陵の形勢も、自然ここに盡されて居る。石頭城下濤聲怒の四句は、はじめて此に國せし吳の末運を傷み、前三國の五句は六朝の跡を弔ひ、我生より以下は、明祖の勃興を頌し、曹丕の語を飜用して、收束とした處は、最も面白く、これを禹域剡下の形勢に對照すると、又別種の感慨を催す次第である。

春日客園無花偶感

春日、客園に花なし、偶感

荒園多青草。
荒園、青草多く、

而無一樹花。
しかも、一樹の花なし。

東風吹春來。
東風、春を吹いて來るも、

只向何人家。
只だ何人の家に向ふ。

(一)南池舊日花滿煙。
南池舊日、花、煙に滿つ、

美人夜彈(二)蜀國絃。
美人、夜、彈ず蜀國の絃。

亂枝迷眼歸不得。
亂枝、眼を迷はして歸り得ず、

長短句體　春日客園無花偶感

【字解】【一】南池　蘇州の名園を指すのであらう。【二】蜀國絃　蜀中に產する絃を張つた琴。

醉帶月露花陰眠。　醉うて月露を帶びて、花陰に眠る。

無花雖足歎。　花なきは歎ずるに足ると雖も、

無酒更可悲。　酒なきは、更に悲むべし。

如今但得一壺滿。　今の如き、但だ一壺の滿つるを得ば、

何用紛紛紅紫爲。　何ぞ紛紛たる紅紫を用ふるを爲さむ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、客園は、南京なる鍾山里第の庭を指したのであらう。

【詩意】荒れはてた庭園には、青草のみ多くして、一株の花だになく、東風春を吹き來るも、ここには、全く音づれず、何人の家に向ふかと問ひたい位。むかし、南池に遊びし時は、花が咲き揃つて、煙中に滿ち、夜になると、美人が琴を彈じて、愈よ興を添へた。入り亂れたる花の枝は、わが目を迷はし、留賞久しきを經ても歸り得ず、はては、醉うて月光露氣を身にしめた儘、花かげに眠つて仕舞つた。かういふことは、到底、この地に於て求められない。花の無いのは、すでに嘆ずるに足るべく、酒なきに至つては、更に悲むべきことである。元來、花より酒で、今、もし壺に一ぱいの酒を得たならば、それで、しばらくは凌ぐことも出來るから、紛紛たる紅紫の花などは、どうでも宜しい。

【餘論】大體、卑近淺俗を免れないが、中間の一解、南池の舊游を敍して、いくらか波瀾を添へた處は、流石に面白い。

白下送錢判官岳　白下、錢判官岳を送る

(一)白門有垂楊。　白門に垂楊あり、

復有春酒香。　復た春酒の香あり。

此地逢(二)君誰。　この地、君に逢ふは誰ぞ、

乃是錢(三)少陽。　乃ち是れ錢少陽。

相逢既沽白門酒。　相逢ふ、すでに沽ふ白門の酒、

相送還攀白門柳。　相送つて、還た攀づ白門の柳。

不向(四)公車更上書。　公車に向つて更に書を上らず、

却趨官署初垂綬。　却つて、官署に趨つて初めて綬を垂る。

日落淮水頭。　日は落つ淮水の頭、

送君去悠悠。　君を送る去つて悠悠。

【字解】【一】白門　南京城門の一で、前に數ば見えて居た。【二】逢君誰　貴下に御目にかかつた、お見それ申したが、貴下は誰方かといふ義。【三】錢少陽　李白に、贈錢徵君少陽の詩があつて、同姓の故を以て、これに比擬したのである。【四】公車　天子の正式鹵簿。上書とは、それに向つて直訴すること。

(五)梁王苑裏花飛盡。明日相思過汴州。　梁王苑裏、花、飛び盡す、明日相思、汴州を過ぐ。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】白門には、柳がしだれて居るし、白下は、白門の外、前に數ば見えて居た。當の處。ここに、君に逢つたが、誰方かと問へば、春酒の香ばしきを賣る店もあつて、卽ち錢君であつた。すでに相逢ひし上は、白門の酒を沽ひ、相送らむとしては、白門の柳を攀ぢて之を折つた。君は、天子の公車に向つて直訴されずに、早くも任官して、官署に奉職せらるる身分となり、今しも、印綬を垂れて赴任される。見渡せば、日は淮水の邊に落ち、君の行く手の道は、悠悠として遙かである。古しへの梁王の苑中、花すでに飛び盡し、客懷轉た凄涼たる折しも、明日、君は相思の念を抱きつつ、汴州を過ぎ行かれるであらう。

【餘論】錢判官は、名字ともに不詳で、もとより格別の人でもないから、この詩も、一向振つて居らぬ。そして、任地は何處か分からぬが、汴州を過ぎて、なほ其先といへば、定めて陝西地方だらうと思はれる。

聽錢文則琴呈良夫

錢文則の琴を聽いて、良夫に呈す

(一)古樂久不聞。　古樂、久しく聞かず、
古器亦殘缺。　古器、亦た殘缺。
惟有(二)朱絃琴。　惟だ朱絃の琴あり、
韻與箏瑟迥殊別。　韻は箏瑟と迥かに殊別。
此夜聽君彈。　この夜、君の彈ずるを聽き、
四座寂不喧。　四座、寂として喧しからず。
古人有遺恨。　古人、遺恨あり、
似向絃中言。　絃中に向つて言ふに似たり。
(三)初調乍(四)沖融。　初調、乍ち沖融、
再弄忽悽惋。　再弄、忽ち悽惋。
秋猿春鳥(五)相間啼。　秋猿春鳥、相間して啼き、
夢繞瀟湘碧雲遠。　夢は瀟湘を繞つて、碧雲遠し。
(六)怒濤勢(七)出峽。　怒濤、勢、峽を出で、
(八)鬪石轟(九)奔雷。　鬪石、奔雷を轟かす。

長短句體　聽錢文則琴呈良夫

【五】梁王苑裏　むかし、梁の孝王が修治した庭園で、汴州に在る。

【字解】【一】古樂　古しへの樂、主として三代に就いて云ふ。【二】朱絃琴　禮記に「太廟の瑟、朱絃、一倡三嘆」とあるに本づく。【三】初調　初めの調子。【四】沖融　のどかで融和なること。【五】相間啼　間はまじる。【六】怒濤　孟貫の詩に江上秋風捲怒濤とある。【七】出峽　李白の詩に獨抱白雲閑素琴、彈爲三峽流泉音とあつて、その注に「三峽流泉は、琴操の名なり」とある。【八】鬪石　高適の山亭の詩に「鬪石類廣轆、飛流寫瀑淺」とある。【九】奔雷　世説に「趙師、字は耶利、善く琴を鼓す。貞觀の初、獨歩、京に上る。かつて云ふ、吳聲は清婉、長江廣流の若く、綿綿、徐に逝く、國士の風。蜀聲は躁急、急瀉奔雷の若く、亦た一時の俊快」とある。【一〇】銅瓶　杜甫の詩に陰井敲銅瓶とある。

漫流入滄海。　漫流、滄海に入り、
悠然去無回。　悠然として、去つて回るなし。
(一〇)銅瓶一墮井。　銅瓶、一たび井に墮つ、
汲引不可上。　汲引上るべからず。
離車軋軋曉出關。　離車軋軋として曉に關を出づ、
欲行未行苦惆悵。　行かむと欲して未だ行かず、苦だ惆悵。
夜深庭樹風雨驚。　夜は深くして、庭樹、風雨驚く、
恍疑鬼(一一)神入蒲城。　恍として疑ふ、鬼神の蒲城に入るを。
須臾響靜月照席。　須臾にして、響靜に、月は席を照らす、
玉壺凍破氷崢嶸。　玉壺凍破して氷崢嶸。
我心正如水。　わが心、正に水の如し、
萬籟不到耳。　萬籟、耳に到らず。
無端聽此聲。　無端、この聲を聽く、

【一一】鬼神入蒲城　前に卷七、爲因師題松楠飛瀑圖の詩中に引いて置いたが、杜甫の奉山水障歌に、反思前夜風雨急、乃是蒲城鬼神入とある。【一二】胡笳　胡笳十八拍を云ふ、下を見よ。【一三】文姫　蔡琰別傳に「琰、字は文姫、興平中、喪亂、胡騎に獲られ、南匈奴左賢王に沒す。十二年春正月、胡殿に登り、笳の音に感じて、胡笳十八拍を作る」とある。【一四】履霜　詳しくは履霜操といふ。琴操に「尹伯奇、至孝、後母これを譖す。清晨、霜を履み、琴を援つて、履霜操を作る」とある。【一五】南風　家語に「帝舜、五絃の琴を彈じ、南風の詩を歌うて曰く、南風之薰兮、可以解吾民之慍兮、南風之時兮、可以阜吾民之財兮」とある。【一六】文王　琴錄に「文王、

雙淚迸落百感生。　雙淚迸落して百感生ず。
起請且莫彈胡(一二)笳。　起つて請ふ、且つ胡笳を彈ずる莫れ、
(一三)文姫思家意杳嗟。　文姫家を思うて意杳嗟。
請莫彈(一四)履霜。　請ふ、履霜を彈ずる莫れ、
孝子在野愁彷徨。　孝子、野に在り、愁彷徨。
願君拂拭登高堂。　願はくは、君、拂拭して高堂に登り、
先彈(一五)南風後文(一六)王。　先づ南風を彈じ、後には文王。
美哉大(一七)雅聲洋洋。　美なるかな、大雅聲洋洋、
使我坐聽憂倶忘。　われをして、坐聽、憂、倶に忘れしむ。

太公を渭陽に得、大に悅び、乃ち琴を援つて之を鼓し、自ら思士の意を敍す、故に文王思士操あり」と見ゆ。【一七】大雅　ここのは、詩經に在る大雅の意味ではなく、大に雅趣があるといふ義であらう。

【題義】 鳧藻集に贈錢文則序といふ一文があつて、その中に「山陽の錢文則、書を讀み、好んで善を修し、琴を鼓す」とあるが、その他の事が分からぬ。つまり、琴工としては、一かどの素養のあつた君子人と見える。良夫は、いづれ字であらうが、誰か分からぬ。この人が主となつて、錢文則を招聘したものと思はれる。そこで、この詩は、錢文則の琴を彈ずるを聽き、賦して席主たる良夫その人に

贈つたのである。

【詩意】三代の古樂は、久しく聞かず、その頃の古器も、殘破缺損して仕舞つたが、ただ朱絃の琴のみは、なほ儼存し、その音韻の淸越なるは、箏瑟の類とは、夐然として異なつて居る。今夜、錢君の琴を彈ずるを聞いたが、流石に名手であるから、四座寂然として、聲をも立てず、いづれも、謹んで拜聽して居た。その琴の音は、大體、古人の盡きぬ遺恨を絃に託して言はせる樣なものである。はじめの調子は、冲然融和であつたが、再弄すれば、悽然哀惋、これを譬ふれば、秋、猿聲の悲しきと、春、鳥語の長閑けきとが、相雜はつて、ちやんぽんに啼くが如く、夢魂遠く去つて、碧雲の飛び迷ふ瀟湘の邊を繞る樣な想がした。しばらくすると、怒濤の勢すさまじく、三峽を走り出で、水と相鬭ふ石は、奔雷を轟かせ、はては、緩やかに流れて滄海に入り、悠悠として去つて、復た回らざるが如くである。又たとふれば、銅瓶が一たび井の底に落ち込むと、いくら汲引しても、上げることが出來ない樣でもあるし、ひとり離れ行く車の聲、軋軋として、曉早く關門を出でむとし、行かむと欲して未だ行かず、惆悵として心に思ひ惱んで居る樣である。時しも、夜は深く、庭樹には風雨襲ひ來り、恍然として、鬼神、蒲城に入りしを疑ふばかり。しばらくすると、風雨、響靜かに、空も晴れ渡つたと見えて、月色皎皎として、席を照らし、その淨潔なることは、玉壺が寒氣の爲にひび破れて、中には、氷が峥嶸として堅く凝結して居る樣であつた。わが心、さながら、水の如く、浮世の汚塵を離れ、萬籟の聲は、耳にも入らなかつたが、ゆくりなくも、この琴の響を聞くと、兩の目からは、淚が迸り落ち、百感愴然として胸に生じた。そこで、起つて錢君に向ひ、胡笳十八拍の曲は、彈せぬが善い、何となれば、蔡文姬が家を懷うて、歎息の意を漏らしたものであるからだといひ、又履霜操は、彈せずもがな、何となれば、孝子の尹伯奇が野に在つて、孤身伴なきを愁へて彷徨したことを述べたものだからといつた。それよりも、注意して琴を搔き拂つた後、高堂に登り、第一に南風、次に文王の曲を奏して貰ひたい。この二曲の特質として、大に雅致ある聲の洋洋として洵に美なるは、われをして、坐して聽かば、憂をも併せて忘れしめるからである。

【餘論】起八句は總提、初調乍冲融より欲レ行未レ行苦惆悵に至るまでは琴聲の形容で、例の序破急といふ樣な音律の遞變を略ぼ盡して居る。夜深庭樹風雨驚の四句は、琴を彈じ罷んだ時の實景で、琵琶行に東船西舫悄無レ言、唯見江心秋月白といつた樣な處。我心正如レ水の四句は、自家の感想。起請且莫レ彈二胡笳一以下は、悲哀な曲は止めにして、南風・文王の如き、雍和淸純の音を聞かせて貰ひたいといひ、又暗に時世の此の如くならむことを囑望したので、ここが卽ち席主の良夫に併せて贈るといふ意に副うて居るのであらう。

雪齋爲二述上人一賦

雪齋、述上人の爲に賦す

君不見韓刺史(一)。　君見ずや韓刺史、
疲馬度(二)關愁欲死。　疲馬關を度つて、愁へて死せむと欲す。
君不見党(三)將軍。　君見ずや、党將軍、
美人擁帳飲正醺。　美人、帳を擁して、飲、正に醺す。
憔悴豪華兩何有。　憔悴豪華、兩つながら何かあらむ、
世人徒勞競奔走。　世人、徒勞、競うて奔走。
雪深三尺坐(四)寒龕。　雪深きこと三尺、寒龕に坐す、
誰似西齋衲(五)衣叟。　誰か似たる、西齋の衲衣叟。
開門一笑定(六)起遲。　門を開いて、一笑、定より起つこと遲く、
虛空大地皆春(七)熙。　虛空大地、皆春熙。
松梢一片忽墮響。　松梢一片、忽ち響を墮し、
夜靜山空人不知。　夜は靜かに、山は空しくして、人知らず。
此地應憐無(八)熱惱。　この地、應に憐むべし熱惱なきを、

【字解】【一】韓刺史　韓愈、佛骨を諫めしに因つて、潮州刺史に左遷せらる。【二】度關　關は藍田關、普通に略して藍關といふ。長安の東南、終南山脈の盡くる處に當つて居る。韓愈の至藍關示姪孫湘の詩に雲横秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前とある。【三】党將軍　即ち党大尉、前に引いたことがあるが、事文類聚に「陶穀、党大尉の家姬を得たり、雪水を取つて茶を烹る。曰く、党家、この樂ありや否や。曰く、彼、安んぞ此を識らむ、但だ能く銷金帳下に於て、羊羔美酒を飲むのみ」とある。【四】寒龕　龕は小さな佛堂。【五】衲衣　僧衣。【六】定起　禪定より起つて出て來る。【七】春熙　春めいて長閑なること。【八】無熱惱　東坡の雪齋の詩に人間熱惱無處洗、故向西齋作雪峰とある。【九】蠟屐　晉書阮孚傳に「はじめ、祖約は性、財を好み、孚は性、屐を好み、同じく是れ累、而して未だ其得失を判せず。約に詣るあり、正に財物を料るを見る。客至る、屏當するも盡きず、身を以て之を蔽ふ。阮に詣るあり、正に自ら屐に蠟するを見る、因つて歎じて曰く、未だ知らず、一生、當に幾量の屐を著くべきか、と。ここに于て、勝負はじめて分かる」とある。【10】從埋　從は任かす。

尋梅莫若尋詩好。　梅を尋ぬるは詩を尋ぬるの好きに若く「なし。」
便穿蠟(九)屐踏瓊瑤。　便ち蠟屐を穿つて瓊瑤を踏み、
曉徑從(一〇)埋不須掃。　曉徑、埋もるに從せて、掃ふを須ひず。

【題義】雪齋は逖上人の居室の號であるが、上人の本名閲歷等は分からぬ。

【詩意】韓愈は潮州に左遷されしとき、疲れた馬を驅つて、覺束なくも、雪中に藍關を度つて、憂愁の極、殆んど死なむばかり。党大尉は、銷金帳裏に坐して、雪を賞し、美人が傍に侍坐し、酒を飲んで、やつと醉が廻つた。韓公の憔悴と党家の豪華と、この兩者は、何でもないのに、世人は、徒勞を顧みず、しきりに奔走して、皆憔悴を避けて、豪華に就かうとして居る。ここに、雪が積んで、三尺の深さにも及びし時、西齋の高僧は、ひとり寒龕の中に坐し、他に一寸その類もない位。やがて、定中より起つこと遲く、門を開いて一笑し、虛空大地、皆春めいて長閑であるといつて居る。その內に、松の梢の上より、雪の塊まりが一つ轉げ落ちて來たが、夜は靜かに、山は空しくして、誰も知つて居る人はない。ここに來れば、煩惱の爲に心頭を熱することもあるまじく、梅を尋ぬるよりも、詩を尋

ねる方が好い。そこで、蠟を施した足駄を穿き、瓊瑤と見まがふ雪を踏んで出かけると、曉早く、門内の細徑は、雪の埋めるに任かして、まだ掻き除けもしてなかつた。

【餘論】この詩は、簡勁の趣があつて、程よく、まとまつて居るのみならず、詩思清澄、一誦、人の肺腑を淨くせしめる。就中、松梢一片の二句は、雋句であつて、空山積雪の實況は、まさしく、ここに盡きて居る。

燕覆巢

燕、巢を覆す

雙燕生五雛。　雙燕、五雛を生み、
怡怡向高屋。　怡怡として高屋に向ふ。
雛飢母出風雨來。　雛は飢ゑ、母は出でて、風雨來る、
新作深巢竟傾覆。　新に深巢を作つて、竟に傾覆。
主人念雛不解飛。　主人、雛が飛ぶを解せざるを念ひ、
移之別壘(二)待母歸。　これを別壘に移して、母の歸るを待たしむ。
雛雖得壘燕勿喜。　雛は壘を得たりと雖も、燕は喜ぶなし、
相逢主人亦偶爾(三)。　相逢ふ、主人、亦た偶爾。
明年作巢當更好。　明年、巢を作る、當に更に好かるべし、
須信安居最難保。　須らく信すべし、安居最も保ちがたきを。

【字解】【一】不解飛　飛ぶことが出來ぬ。【二】別壘　他の燕の巢。【三】偶爾　偶然、格別心を用ひぬこと。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】雌雄の燕が五羽の雛鳥を生み、怡怡として、さも嬉しげに、高い屋根の方を見て居た。兎角する內、雛鳥が飢ゑて、頻りに啼き叫ぶに因り、親鳥は、餌を探して來る爲に、飛び出した處が、風雨颯然として、遽に襲ひ來り、折角、新に構へた巢は、ひツくりかへつて仕舞つた。主人は、これを見て、雛鳥のまだ飛ぶことの出來ぬのを氣の毒と思ひ、そツくり、これを別の巢に入れて、親鳥の歸るを待たしめた。そこで、雛鳥は、巢を得て、幸に無事であつたが、親鳥は、歸つて來ても、格列喜びもしない。何となれば、主人は、ほんの氣まぐれに、一寸そんな事をして見たので、もとより、仁慈の本性から出たことではないからである。されば、明年、又巢を造るならば、もつと、丈夫に、しツかりとする方が善いので、平安なる居處も、永久に保ち難いといふことを始めて信じたであらう。

【餘論】多少の諷諭はあるらしいが、何分にも、淺薄卑近を免れぬ。

五禽言、和張水部

五禽言、張水部に和す

（一）泥滑滑。啼空山。　泥滑滑、空山に啼く。
行人愁。道路難。　行人愁へ、道路難し。
高天浮雲自多雨。　高天の浮雲、自ら雨多く、
人不知還空怨汝。　人は還るを知らずして、空しく汝を怨む。

【字解】【一】泥滑滑　鳥の名、本草に「山菌子、即ち竹雞なり。蜀人、呼んで雞頭鶻となし、南人、呼んで泥滑滑となす、その聲に因るなり」とあり、梅聖俞の竹雞の詩に、泥滑滑苦竹岡、雨蕭蕭、馬上郎とある。

【題義】五禽言は、五種の鳥の聲に就いて構想したので、この體は、梅聖俞に始まり、東坡が之に倣ひ、その後、時たま作る人があるので、青邱も矢張試みに遣つて見たのであらう。東坡の五禽言の序に「梅聖俞、四禽言を作る。余、定惠院に寓居す、舍を繞つて皆茂林修竹、春夏の候、鳥鳴くこと百族、土人多く其聲の似たるものを以て之に名づく。遂に聖俞の體を用ひて五禽言を作る」とある。大抵、その鳥は、本名の外、その鳴聲に因つて、異名を設けてあるので、例せば、竹雞を泥滑滑といひ、布穀を脱却破袴といふの類である。但し、その鳥は、大抵和名が判然せず、どういふ性質の者か、よく分からぬから、唯だ其異名の樣な聲をするものとして解釋する外はない。張水部の水部は官名、唐六典に「晉宋齊梁陳より、宗廟を營むには、權りに水部尚書を置き、事畢れば之を省く。隋の開皇二年、はじめて工部尚書を置く」とある。すると、水部は工部の古稱として用ひて居るものらしい。なほ、一本に張子宜に作るといへば、水部は、字を子宜、名を適といひ、青邱と同邑の人である。この詩は、張水部の作を見たるに因り、これに和して作つたのである。

【詩意】泥滑滑といふ鳥が空山の中に啼くと、旅人は、折から、道路の歩き惡いのを苦にして居る。山上天高く、たださへ雨勝であるのに、泥滑滑といつて、雨を喜ぶ樣に聞こえる處から、人は、いつ目的地に歸著するとも分からないので、緣起でもないといつて、ひたすら汝を怨んで居る。

（二）提壺盧。趣沽酒。　提壺盧、酒を沽ふを趣す。
（三）杏花村中媼家有。　杏花村中、媼家あり。
君如不飲過却春。　君もし飲まずして春を過却すれば、
此鳥枝頭應笑人。　この鳥、枝頭、應に人を笑ふべし。

【字解】【二】提壺盧　鳥の名、歐陽修の詩に、獨有花上提壺盧、勸我有酒花前傾とある。【三】杏花村　杜牧の詩に、借問酒家何處有、牧童遙指杏花村とある。

【詩意】提壺盧、即ち酒壺を提げよといつて鳴く鳥は、さながら、酒を買へといつて、催促する樣であつて、又幸にも、杏花咲き匂ふ此村には、酒を賣る老媼の家がある。君、もし酒を飲まずして、折角の春を空しく過ごし去らば、この鳥は、枝頭に在つて、人を笑ふであらう。

(一)郭公郭公。　郭公、郭公。
天寒水空。　天寒くして水空し、
朝飛暮棲蒹(二)葦中。　朝に飛び暮に棲む蒹葦の中。
蒹葦中啼不息。　蒹葦の中、啼いて息まず、
千載魂應怨亡(三)國。　千載、魂、應に亡國を怨むべし。

【字解】【一】郭公　爾雅に「鳲鳩、一名は布穀、又郭公と名づく、又鶻鵃と名づく」とある。【二】蒹葦　二字ともに蘆、又はよしの類。【三】亡國　左傳に「齊の桓公、郭に之き、父老に問うて曰く、郭、何の故に亡ぶ。曰く、その善を善とし惡を惡とするを以てなり。公曰く、子の言の若くんば、乃ち賢君なり、何ぞ亡ぶるに至る。父老曰く、郭公、善を善として用ふる能はず、惡を惡として去る能はず、亡ぶる所以なり」とある。

【詩意】郭公、郭公と啼き叫びつつ、天寒くして水空濶なる秋の末、枯れかかつた蘆の中から、朝に飛び出し、暮に又歸つて宿る。この鳥は、蘆の中に居て、終日啼き通しであるが、むかし、郭の地に君たりし其人の魂が、長しへに死せず、化して鳥となつて、千載の後、その國の亡びたことを怨んで居るのであらう。

(一)婆餅焦。　婆餅焦、
婆去餉(二)孫田(三)隴遙。　婆去り孫に餉せむとして田隴遙なり。

【字解】【一】婆餅焦　鳥の名、稗史に「戍婦あり、山頭より夫を望む、時に餅を烝て餉と爲し、その子なして之を偵せしむ。その焦げて食ふべからざるを恐る。母、久しうして至らず、子、往いて之を視れば、すでに化して鳥となり、但だ婆餅焦と呼ぶなり」とある。【二】餉孫　餉は食を送る。【三】田隴　隴は田間の小高き處。

隴頭小麥穗已搖。　隴頭の小麥、穗、すでに搖く。
但願好收食自饒。　但だ願ふ、好く收めて食自ら饒なるを。
爾莫憂婆餅焦。　爾、憂ふる莫れ、婆餅の焦ぐるを。

【詩意】婆餅焦といふ鳥が啼いて居るが、老婆は、去つて其孫に食を送らむとし、遙に田隴を望みつつ、とぼとぼと歩んで居る。隴頭の小麥は、穗が出揃ひ、風に隨つて搖らめいて居るから、これを刈り取れば、汝の食物には不足なく、餅が焦げて、老婆が化して鳥に成つた處で、汝は最早食ふには困らない。

(一)脫却破袴。　脫却破袴、
脫却破袴。　脫却破袴。
溪深無船須涉(二)渡。　溪は深く、船なく、須らく涉渡すべし。
亦思脫舊復換新。　亦た思ふ、舊を脫して復た新に換へむ
春(三)機已空愁殺人。　春機、已に空しく人を愁殺す。ことを。

【字解】【一】脫却破袴　鳥の名、東坡の禽言の詩に「溪邊布穀兒、勸レ我脫二破袴一」とあり、陳師道の詩に「潑袴不レ容レ脫、鳥語徒殷勤」とあつて、その自注に「人、布穀を以て催耕となす、その聲、脫了潑袴といふ」とある。破袴の袴は下衣、即ちヅボンの

如きものを云ふ。【三】渉渡　徒渉する。【三】春機已空　春に成つて野良仕事が忙しいので、機を片付けて仕舞つた。

【詩意】脫却破袴、脫却破袴といつて鳥が啼いて居る。つまり、破れたヅボンを脫いで仕舞へといふので、丁度、この處は、谿の深いのに渡し船がないから、徒渉する外なく、いやでも、ヅボンを脫がねばならぬ。とても事に、舊いヅボンを脫いで、新しいのに換へたいと思ふが、春に成つて、野良仕事が忙しく、機を片付けて仕舞つたから、新しいヅボンを織ることが出來ず、矢張、もとの儘にして置くとしやう。

【餘論】首首、皆禽言に因んで趣向を設けたのであるが、さう面白くはなく、大家の集中、宜しく一あるべくして、二あるべからざるものである。

約王孝廉看梅　王孝廉に約して、梅を看る

君莫憶東閣吟。　君、憶ふ莫れ東閣に吟ずるを、
我莫憶西湖見。　我、憶ふ莫し西湖に見るを。
兩地年來信不通。　兩地年來、信通せず、
塵埃正滿春風面。　塵埃正に滿つ春風の面。

【字解】【一】東閣吟　初學記に「何遜・揚州法曹となる、廨舍に梅一株あり、遜、かつて、その下に吟詠す。後、洛に居りて之を思ひ、再び其任を請うて揚州に抵る。花、方に盛に開く。遜、樹に對し、彷徨終日、

不知山中三日雪掩扃。　知らず、山中三日、雪、扃を掩ふを、
修竹斜倚愁娉婷。　修竹、斜に倚つて娉婷を愁ふ。
讀書屋空滿梁月。　讀書屋空し滿梁の月、
夢斷冷落留餘馨。　夢斷えて、冷落、餘馨を留む。
相尋定有迎船鶴。　相尋ぬる、定めて船を迎ふるの鶴あらむ、
煙霧籠寒縞衣薄。　煙霧寒を籠めて縞衣薄し。
一尊好共煖花魂。　一尊好し共に花魂を煖めむ、
明日關山笛中落。　明日關山笛中に落つ。

去る能はず」とあり、杜甫の詩に、東閣官梅動詩興、還如何遜在揚州とある。【二】西湖見　林逋が西湖の孤山に隱居して梅を種ゑたといふことがある。【三】兩地　揚州と西湖。【四】掩扃　扃はとぼそ。【五】娉婷　たをやなる貌、梅花を形容して云ふ。【六】滿梁月　杜甫が李白を夢みて作つた詩に、屋梁看落月、猶疑照顏色とある。【七】迎船鶴　林逋が鶴を飼つて置いて、これを放ち、客が來ると、飛び還つて知らせたといふことがある。【八】縞衣　縞は純白、梅花を形容して云ふ。【九】笛中落　笛中に梅花落の曲あるより云ふ。

【題義】說明に及ばぬ。但し、王孝廉の名字閱歷等は分からぬ。

【詩意】君は、揚州の梅花を憶うて、東閣に吟ずるにも及ばぬし、われも亦た態態西湖まで出かけて、梅を見やうとも思はない。揚州と西湖と、兩地ともに隔絕し、年來音信通せず、春風吹き至れども、

浮世にさすらふ身は、塵埃面に滿ちて、全く俗了されて居る。しかし、この頃、山中では三日も雪が降りつゞいて、修竹がたわめて、斜に梅花に倚りかかり、そして、梅花のあでやかなるが、術なき風情をして居るのは、殊に趣がある。わが讀書の家は、外に人もなく、落月、屋梁に挂り、恍として、人の面影を見るが如く、やがて、夢が醒めると、名殘の匂ひが殘つて居る。君が此に御出になれば、定めて、鶴が飛んで往つて、その船を迎へるであらうし、煙霧、寒氣を籠むる中に、梅花は、縞衣の薄きを披いて居る樣に見えるであらう。かくて、一尊を共にし、併せて、冷かなる花魂を煖めて、おもふ存分、留賞したいと思ふ。さうでもしないと、明日、名にしおふ梅花落の一曲を吹きすさぶ笛の音につれて、花片紛紛として關山に落ち、その時、いくら悔やんでも及ばぬことであらう。

【餘論】唯だ共に梅花を賞して痛飮したいといふことを、これだけに引き伸ばし、且つ千古の風情を傳へたのは、流石に手際であるが、文字に囚はれて、用筆、聊か窘束したる傾向がありはせぬかと危まれる。

題滕用衡所藏山水圖

滕用衡藏するところの山水の圖に題す

滕(一)君興在煙(二)霞間。　滕君、興は煙霞の間に在り、

遠游十年今始還。　遠游十年、今、はじめて還る。

畫圖示我有層嶂。　畫圖、われに示す層嶂あり、

竟似何處之名山。　竟に何の處の名山に似たる。

君言我初適東越。　君は言ふ、われ初め東越に適く、

酒(三)船橫渡鏡(四)湖月。　酒船、橫に渡る鏡湖の月。

醉詠謫(五)仙天姥吟。　醉うて詠ず謫仙の天姥吟、

海光欲曙清猿歇。　海光、曙ならむと欲して、清猿歇む。

瑤草春已生。　瑤草、春すでに生ず、

便入金(六)華行。　便ち金華に入つて行く。

道逢牧羊兒。　道に逢ふ牧羊の兒、

疑是黃(七)初平。　疑ふらくは是れ黃初平。

從此西游楚(八)江水。　これより、西に游ぶ、楚江の水、

大帆如雲挂空裏。　大帆、雲の如く空裏に挂る。

【字解】【一】滕君　即ち用衡、題義の項に於て詳述する。【二】煙霞　山水といふに同じ、唐書田游巖傳に「游巖、箕山に隱る。高宗、嵩山に幸し、親ら其門に至る。游巖、野服出でて拜す。帝曰く、先生、このごろ佳なりや否や。答へて曰く、臣は、謂はゆる泉石膏肓、煙霞痼疾なるものなり」とある。【三】酒船　酒を載せた船、即ち遊山船。【四】鏡湖　一統志に「紹興府城の西南鑑湖、一名鏡湖、漢の太守馬臻鑿つ。詔して、賀知章に鑑湖一曲を賜ふとは、即ち此れ」とある。【五】謫仙天姥吟　天姥は山名。李白に夢游天姥吟の一篇がある。【六】金華　山名、前に數ば見ゆ。【七】黃初平　前に卷八、煮石山房の詩中にも見えたが、列仙傳に「黃初平は、丹溪の人なり、年十五、家、羊を牧せしむ。道士あ

(九)柁樓醲酒喚長風。
一日看山一千里。
不聞(一〇)東林鐘。
但見(一一)香爐峰。
波迷(一二)洞庭闊。
樹隔(一三)瀟湘重。
白沙翠壁經過好。
就中幾度曾幽討。
(一四)麻姑壇上掃落花。
(一五)堯女祠前(一六)薦芳藻。
晚客湖南(一七)逢雁回。
登臨長上(一八)定王臺。
天從(一九)朱鳥峰頭轉。

柁樓、酒を醲いで、長風に喚び、
一日、山を看る一千里。
聞かず東林の鐘、
但だ見る香爐峰。
波迷うて洞庭闊く、
樹隔てて瀟湘重る。
白沙翠壁、經過好し、
就中、幾度か、かつて幽討。
麻姑壇上、落花を掃ひ、
堯女祠前、芳藻を薦む。
晚に湖南に客として、雁の回るに逢ひ、
登臨、長く上る定王臺。
天は朱鳥峰頭より轉じ、

り、その良謹を見、便ち率ゐて金華山石室の中に至り、四十餘年、復た家を思はず」とある。【八】楚江　揚子江を云ふ。【九】柁樓　船上に在る物見櫓、杜甫の詩に翻疑柁樓底、晚飯越中行とある。【一〇】東林　一統志に「東林寺は、廬山に在り、晉僧慧遠、同門の慧永と西林に居り、學徒日に衆く、別に林の東に居る。謝靈運、爲に池を鑿ち、蓮を種ゑ、蓮社と號す」とある。【一一】香爐峰　前に卷八、廬山宋隱君の詩中にも見えたが、廬山の北に在つて、奇峰突起、その狀、香爐の如きが故に名づけ、山下に瀑布があつて、世に著聞して居る。又白居易の文に「匡廬奇秀、天下の山に甲たり、山北の峰を香爐峰といふ、峰北の寺を遺愛寺といふ、その境勝絕、又廬山に甲

江自(二〇)黃牛峽外來。
(二一)蒐奇歷險今應倦。
默坐舊游空數遍。
時向明窓看此圖。
好山一一皆重見。
我聞君言自嘆嗟。
身如處女愁離家。
閉門讀書無(二二)牛車。
(二三)髀肉漸生空鬢華。
牀前塵土蔽(二四)雙屐。
何不著之踐苔石。
幸逢盛世道路平。
(二五)五嶽尋眞皆可適。

江は黃牛峽外より來る。
奇を蒐め、險を歷て、今、應に倦むべし、
默坐、舊游、空しく數へ遍し。
時に明窓に向つて此圖を看る、
好山一一、皆重ねて見る。
われ、君の言を聞いて、自ら嘆嗟、
身は處女の如く、家を離るるを愁ふ。
門を閉ぢて書を讀み、牛車なく、
髀肉、漸く生じて、空しく鬢華。
牀前の塵土、雙屐を蔽ふ、
何ぞ之を著けて苔石を踐まざる。
幸に逢ふ、盛世、道路の平かなるに、
五嶽、眞を尋ねて、皆適くべし。

たり」とある。【一二】洞庭　湖水の名。【一三】瀟湘　二水の名、その合流して洞庭湖に入る附近一帶を瀟湘といふ。【一四】麻姑壇　一統志に「麻姑山は、建昌府西南に在り、周廻四百里、即ち道書三十六洞天の一」とあり、李白の詩に石壁麻姑壇とある。【一五】堯女祠　黃陵廟、娥皇・女英を祀る、即ち堯の二女で舜の妻である、なほ其詳は、前に卷一、湘中紘の詩中に見えて居る。【一六】薦芳藻　即ち蘋藻を薦めると同じで、廟前に供へ物をする。【一七】逢雁回　一統志に「回雁峰は、衡州府城の南に在り、雁、衡陽に至つて過ぎず、春に遇うて回る、故に名づく」とある。【一八】定王臺　長沙の定王は、漢の景帝の子で、その人の作つた臺。金檀注の本に楚王臺に作

便當往抱綠綺(二六)彈松風。　便に當に往いて、綠綺を抱いて松風に彈じ、

行盡萬壑千巖中。　行き盡す萬壑千巖の中、

仙書探得金匱(二七)空。　仙書、金匱を探り得て空しかるべし。

歸來誇君重相逢。　歸り來つて、君に誇り、重ねて相逢ふ、

握手一笑吳門東。　手を握つて一笑吳門の東。

つてあるのは、宜しくない。【一九】朱鳥峰　南嶽、即ち衡山を云ふ。文耀鈎に「南宮赤帝、その精を朱鳥となす」とあり、杜甫の望嶽の詩に南嶽配二朱鳥一とある。【二〇】黃牛峽　前に卷一、竹枝詞の詩中にも見えたが、宜昌の西に在つて、重巖疊起、最高處は、人の刀を負うて牛を牽く狀の如く、人は黑く、牛は黃、江流紆曲、數宿を經るも、猶ほ之を望み見るといふ。【二一】蒐奇　蒐は、春、狩獵を爲すこと。集まるといふ義に用ふ。【二二】無牛車　車の片われもない。【二三】髀肉漸生　劉備が劉表の處に居て、廁に上つて歎息した言葉。前に卷十、北郭秋夜の詩中に見えて居る。【二四】雙屐　二つの下駄。【二五】五嶽　前に數ば見ゆ。【二六】綠綺　前に數ば見ゆ、司馬相如の琴の名、李白の詩に蜀僧抱二綠綺一、西下二峨眉峰一、爲レ我一揮レ手、如レ聽二萬壑松一とある。【二七】金匱　前に數ば見ゆ、金屬製の櫃。

【題義】滕用衡は、姑蘇志に「滕用亨、字は用衡、長洲の人、問學辨博、文詞爾雅、尤も六書の學に精しく、その篆隷の妙、高く近世に出づ。永樂三年、召し見、面のあたり篆書を試みて旨に稱ひ、翰林待詔を授けらる。かつて、上に侍して、畫卷を閲するや、衆、目して趙千里となす。用亨、頓首して言ふ、筆意、王晉卿に類すと。卷を終るに及びて、果して、駙馬都尉王侁の名あり」とあつて、餘程、鑒識に長じて居る人と思はれる。この詩は、滕用衡の所藏に係る山水の圖に題したので、その圖の筆者は分からぬが、いづれ、相當な人であつたらう。

【詩意】滕君は、興を山水の間に縱にし、十年間も、遠方に游んで居て、今やツと歸國された。そして、予に畫を見せられたが、その中に畫き出された層嶂は、果して、何處の名山に似て居るか、いづれ、君が旅中目睹したところであらう。君が言ふには、われは、初に東越に往き、游山船に酒を載せて、月下に鏡湖を渡り、醉中、李白の作に係る天姥吟を朗誦すると、やがて、海の方が白みかかつて、猿が鳴き止んだ。春、すでに回つて、瑤草の萌え出づる頃、金華山に分け入つたが、道すがら、出逢つた牧羊の小童は、古しへの黃初平ではないかと思はれた。それより、一轉して、西、揚子江に游び、大帆は雲の如く、空中に挂り、それで、江水を溯る間、身は舵樓に倚つて、酒を灑ぎつつ長風に向つて呼號し、山を眺めながら、一日の間に一千里を馳せた。次に、廬山に入つたが、東林寺の鐘の聲だに聞かず、唯だ香爐峰だけは見逃さなかつた。波浪一白、望眼爲に迷はむばかりにして、洞庭は流石に濶く、遠樹相隔てて、瀟湘の二水は、重なり合つて見える。白沙翠壁相連る處は、經過するも面白く、中には、幾たびか尋ねた勝地もあるので、麻姑仙壇の下に落花を掃ひ、黃陵廟前に蘋藻を薦めたのが、即ちそれである。最後に、湖南に入つて、雁の北歸する春の頃、定王臺に登臨すると、天は、衡山の頂より轉ずるが如く、大江は、はるかに黃牛峽から流れ下つて居る。久しい旅の間には、奇勝を狩り集め、險阻な路を歷て、今は、もう厭きはてて仕舞ひ、默坐して、空しく舊游の跡を

數へて見るだけである。そこで、時たま、明るい窓の下で、この畫を繰り廣げると、面白さうな山は、いづれも、ここに再び御目にかかつたので、つまり曾游の地でないものはないと、かう云はれた。われは、君の話を聞くと、まことに、嘆息に堪へないことがあるので、この身は、箱入娘の如く、家を離れるのが、兎角いやである處から、門を閉ぢて書を讀み、出かけたくても、車の片われだになく、あんまり、氣樂にして居るものだから、股には贅肉を生じ、そして、鬢は白くなつて、いつしか、年が寄つて仕舞つた。しかし、牀前には、雙屐が塵土に蔽はれた儘、ちやんと殘つて居るので、何故、これを足に穿いて、苔石を踏まないのか。今しも、目出たき太平の御世であつて、道路平かにして、五嶽に仙人を尋ねることも、造作なく、決して、往かれぬ處とてはない。されば、綠綺琴を抱いて出かけ、松風颯颯の下に之を彈じ、萬壑千山を行き盡し、洞中に藏してある金匱を殘りなく探して、仙書を手に入れたいと思ふ。かくて、恙もなくて歸つて來たならば、重ねて、君に逢うて自慢をなし、笑ひながら、吳門の東に於て握手をしたいものである。

【餘論】起四句は總提、君言我初適東越より好山一一皆重見に至るまでは、滕君の口を借りて、その游蹤を歷擧し、畫中の山は、何處とも分からぬが、皆重ねて見るものであると云はしめた處には、無限の含蓄がある。以下、自分の腑甲斐なきことより始め、とてもの事に、一と奮發して、洞府に仙書を探りし後、又御目にかからうと云つた處は、流石に丈夫蓬桑の本志に負かず、さしもの滕君も、稍や煙に卷かれた樣な工合、章法より見れば、まさしく、一步を拓開したものである。

余未有嗣雪海道人以張仙畫像見贈蓋蘇老泉嘗禱而得二子者予感其意因賦詩以謝

余、未だ嗣あらず、雪海道人、張仙の畫像を以て贈らる、蓋し、蘇老泉、嘗て禱つて二子を得たるもの、予、其意に感じ、因つて詩を賦して以て謝す

我年已及壯。(一)
吉夢未兆熊。(二)
雖有三女兒。
豈足慰乃公。(三)
每聞鄰家子。
夜雨誦經史。
起坐秋燈前。

われ、年すでに、壯に及び、
吉夢、未だ熊を兆せず。
三女兒ありと雖も、
豈に乃公を慰むるに足らむや。
每に聞く、鄰家の子、
夜雨、經史を誦するを。
起つて坐す秋燈の前、

【字解】【一】已及壯　年、三十に及びしこと。【二】未兆熊　詩經に維熊維羆、男子之祥とある。【三】乃公　自ら稱す。史記高祖本紀に「幾んど乃公の事を敗る」とある。【四】成都仙　即ち張仙、十國春秋、後蜀慧妃徐氏傳に「氏は青城の人、幼にして才色あり、後主、これを嬖し、花蕊夫人と號す、國亡びて宋に入る、心、未だ蜀を亡びたりとせず、每に

顧影長嗟不能止。　影を顧みて、長嗟、止む能はず。
道人念我書無傳。　道人、わが書、傳なきを念ひ、
畫圖卷贈成都仙。（四）　畫圖、卷いて贈る成都の仙。
云昔蘇夫子。（五）　云ふ、むかし、蘇夫子、
建之玉局禱甚虔。（六）　これを玉局に建て、禱る甚だ虔むと。
乃生五色兩鳳鷄。（七）　乃ち五色の兩鳳鷄を生じ、
和鳴上下遂與夫　和鳴上下して、遂に夫子と相聯翩たり。
子相聯翩。
勸我勤禮之。　われに勸めて、勤めて之を禮す、
當有明珠出深淵。（八）　當に明珠の深淵に出づるあるべし。
我感道人意。　われ道人の意に感じ、
捧觴拜其前。（九）　觴を捧げて、その前に拜す。
君不見東家翁。　君見ずや、東家の翁、

後主の像を懸けて、以て祀り、詭つて子に宜しきの神と言ふ」とあつて、その注に「張仙挾彈圖は、即ち後主なり、童子は太子玄喆たり、武士は趙廷隱たり」とある。花蕊夫人が張仙圖と稱して居たのは、後主が彈を挾んで居たのであるが、本物の張仙圖は、もとより有つたのである。【五】蘇夫子　蘇老泉を云ふ。【六】玉局　洞の名、茅亭客話に「蜀の玉局洞中、五色の雲を出す、覩るもの千餘人、時を移して散ず」とある。【七】鳳鷄　鷄は鳳雛の略、矢張り鳳凰。【八】明珠出深淵　北齊書陸印傳に「印、少にして、善く文を屬し、甚だ河間邢邵に賞ぜらる。邵、又印の父子彰と交游す。かつて、子彰に謂つて曰く、吾以ふ、卿、老蚌、遂に明珠を出す」とある。【九】捧觴　御神酒を供へ

力耕積多田。　力耕して多田を積む。
平生辛苦立門戶。　平生辛苦、門戶を立て、
兩兒棄擲如浮煙。　兩兒、棄擲して浮煙の如し。
惡兒亦何須。　惡兒、亦た何をか須ひむ、
願得一子賢。　願はくは、一子の賢を得む。
上以承吾宗。　上は以て吾が宗を承け、
下以與吾玄。（一〇）　下は以て吾が玄を與へむ。
仙乎有驗看明年。　仙か、驗あり、明年を看よ、
請君更賦懸弧篇。（一一）　請ふ、君、更に賦せよ懸弧の篇。

る。【一〇】與吾玄　前に卷一、神仙曲の詩中に引いて置いたが、揚子法言に「苗にして秀でざるは、吾が家の童烏か、九齡にして我が玄文を與ふ」とある。揚雄の子の早熟なりしこと。ここでは、唯だおのが舊作を傳へることだけを取つたのである。【一一】懸弧篇　禮記内則に「子生まる、男子は弧を門左に設け、女子は帨を門右に設く。國君世子生まるれば、射人、桑弧蓬矢を以て、六たび天地四方を射る」とある。

【題義】　この題は——予、未だ後嗣の男子あらず、ここに、雪海道人といふ道士が、張仙の畫像を以て態態贈られた。蓋し、蘇老泉も嘗て此像に禱つて、軾・轍の二子を得たといふこと。そこで、その厚意を感謝し、詩を賦して謝を爲したといふのである。

【詩意】　われ、年、すでに三十に成つたが、不幸にして、男子の祥と稱する熊羆の夢を見たこともな

く、三人の娘はあるが、とても、乃公を慰めるに足らない。そこで、鄰家の小倅が雨ふる夜など、經史を誦讀するを聞くと、羨ましくて堪まらず、起つて秋燈の前に坐し、おのが影を顧み、長嘆して止むことが出來ない。ここに、雪海道人は、わが著述を後世に傳へる樣な嗣子なきことを氣にかけ、蜀の成都の張仙の畫像を卷いて贈られた。聞けば、むかし、蘇老泉先生は、この畫像を玉局洞中に祀りこみ、非常に謹んで禱り、その爲に、羽毛五色の雙鳳凰に比すべき樣な東坡潁濱といふ立派な息子が二人も生まれ、互に上になつたり下になつたりして和鳴し、遂に老泉と共に、聯翩として竝び翺つたとのことで、われに勸めて、怠らず之を拜禮すると、乾度、明珠が深淵より出づるが如く、男子が生まれるに相違ないといつた。予は道人の厚意に感じ、御神酒を供へて、像前に拜禮をした。東家の主翁は、せッせと耕作をして、田地を澤山殖やし、平生辛苦して門戸を立て、大分盛になつた處が、兩兒は、そんな事に頓著せず、その家業を抛擲すること、浮煙の如く、その家は、とうとうつぶれて仕舞つた。して見れば、惡い子供では仕方がないので、ただ一人で善いから、怜悧なものが欲しい。さういふ賢子があれば、上は以て吾が宗の祀を承けしむべく、下は以て太玄經に比すべき我が著述を傳へることが出來る。張仙にして靈驗あらば、どうか、來年、子を授け玉へ。その時は、更に道人に乞うて、弧を門左に懸ける其祝の詩を作つて貰ひたいものである。

【餘論】起首より顧レ影長嗟不レ能レ止に至るまでは、青邱自身、繼嗣なくして、寂寥に堪へざる趣を述べ、道人念二我書無一レ傳より當レ有三明珠出二深淵一に至るまでは、張仙の像を贈るに就いて、道人の懇に勸めた言葉を其儘寫し、委曲丁寧。以下は、自己の感慨で、是非、明年子が生まれて欲しいといふ意を逗露したのである。この詩は、決して名作ではないが、これに因つて、青邱の身生が略ぼ窺はれる。それから、程遠からず、青邱は一男を擧げて、大に喜んだが、不幸にも殤して仕舞ひ、やがて、青邱の死後、唯だ二女を餘せしのみなることは、卷首の略傳中に記した通りである。

釣臺歌、送二嚴陵徐尊生太史一

釣臺の歌、嚴陵の徐尊生太史を送る

羊裘翁。遺二釣臺一。
蒼翠兩相向。
勢壓千(一)崔嵬。
巉巖峭壁聳二雲表一。
(二)泱泱(三)桐江流遶二其下一徒(四)喧豗。

羊裘の翁、釣臺を遺す。
蒼翠兩つながら相向ひ、
勢は壓す千崔嵬。
巉巖峭壁、雲表に聳え、
泱泱たる桐江、流れて其下を遶つて、
徒に喧豗。

【字解】【一】千崔嵬 無數の峰巒。【二】泱泱 水の漲る貌。【三】桐江 一統志に「天目より出づ」とある。【四】喧豗 騒がしいこと、李白の詩飛泉瀑流爭喧豗とある。

清風在翁振千古。　清風、翁に在つて、千古に振ひ、
唾視軒冕(五)浮輕埃。　軒冕を唾視して、輕埃よりも浮なり。
心懷高潔猶可覩。　心懷高潔、猶ほ覩るべし、
時吐片月峰頭來。　時に片月を吐いて峰頭に來る。
先生當代詞林。　先生は當代の詞林、
載筆有良史才。　筆を載せて良史の才あり。
不展調元(六)手居鼎(七)台。　調元の手を展べて鼎台に居らず、
却思釣臺亟歸去。　却つて、釣臺を思うて亟かに歸り去る。
胸襟灑落何如哉。　胸襟灑落、何如ぞや、
胸中之樂何如哉。　胸中の樂、何如ぞや。

【五】軒冕　車と禮冠、大官の仕度。
【六】調元手　宇宙の元氣、卽ち陰陽を調和する手腕、宰相たるべき器量。
【七】鼎台　三公の位。

【題意】釣臺は、一統志に「桐廬の富春山に在り、一名嚴陵山、淸麗奇絕、錦峰繡嶺と號す。前は大江に臨む、卽ち嚴子陵の釣せし處、左右二臺、各、高さ數百丈」とある。嚴陵は、嚴子陵の姓名を約めたので、今では富春一帶の地名となつて居る。後漢書隱逸傳に「嚴光、字は子陵、小字は狂奴、餘姚の人、少にして光武と同學。帝の卽位するに及び、物色して之を訪はしむ。齊國上言す、男子あり、羊裘を披いて澤中に釣ると。帝、光たるを知るや、安車玄纁を備へ、三聘、乃ち至る、諫議大夫に除せしが屆せず」とある。徐尊生は、列朝詩集に「字は大年、淳安の人、洪武三年、召して元史を修す。史成るや、翰林應奉文學を授かる。自ら引いて去るを求めしが、省臣、留めて、庚申君史を修せしめ、又禮樂書を編集し、書成るや、乃ち始めて歸るを得たり」とあつて、青邱と略ぼ同じ經歷で、稍や後まで殘り、やッと歸里した人である。この詩は、嚴陵の徐尊生が官を罷めて歸里するに就いて、その行を送る爲め、特に其故里なる釣臺に託して、歌を作つたのである。

【詩意】羊裘の老人嚴子陵は、ここに釣臺を遺した。その釣臺のある處は、錦峰繡嶺といふ兩山で、蒼翠こんもりとして相對し、その勢は、無數の峰巒をも壓して踏まへむばかり。巉巖峭壁は、雲表に聳え、泱泱たる桐江は、その山の下を繞つて流れ、水の音は、極めて騷がしい。嚴子陵の淸風は、千古に振ひ、軒冕などは、唾も同樣に見て、輕い塵埃よりも浮浮したものと考へて居た。その心懷の高潔なることは、今でも峰頭にさし上る片月を見て、略ぼそれかと想像される。ここに、徐太史は、當代詞林の一名家、筆を載せれば、天晴、良史の才のある御人であるが、調元の手を展ばして、三公の位に居ることを願はず、却つて故國の釣臺を思うて、速かに歸り去られるとのことで、胸襟の灑落な

309
65

るは、如何ばかりか、胸中の樂は、如何ばかりか、まことに、他に其類なきものである。

【餘論】 起首より時吐二片月一峰頭來に至るまでは前半で、純ら釣臺及び嚴子陵を寫し、後半は、徐太史竝に其歸鄕を云ひ、兩者が自然交錯して居る處が、極めて面白く、從つて、結構頗る緊健である。

終

續國譯漢文大成

文學部 八十三

309
65

帙入

始

吉田徠郎氏
寄贈本

續國譯漢文大成

文學部第八十三册（第二十一帙の三）

高靑邱詩集 三の三

309
65

高青邱集 巻十二

五言律詩

草堂夜集

山家具雞黍。夜與故人期。　山家、雞黍を具へ、夜、故人と期す。

暫喜逢歡會。都忘在亂離。　暫く歡會に逢ふを喜び、すべて亂離に在るを忘る。

火寒移坐密。燭盡得詩遲。　火寒くして坐を移すこと密、燭盡きて詩を得ること遲し。

莫聽高城角。明朝別又悲。　聽くなかれ高城の角、明朝別又悲し。

【字解】【一】雞黍　雞を殺し黍を炊いで、御馳走をする。【二】移坐密　坐を移して互に接近する。

【題義】草堂は、青邱の寓居。ある夜、そこに詩會を催し、その席上に於て作つたのである。

【詩意】折角、この夜、詩會を催すのであるが、山家の事とて、格別珍らしいものなく、雞を殺し、黍を炊ぎ、やッと用意が整うて、人人は、追追參集した。しばしの間なりとも、ここに、樂しき會合を爲すことは、まことに喜ばしく、今しも、亂離の世に在ることも、すッかり忘れた位。やがて、火が

灰がちに成つて、消えかけると、期せずして、皆の者が坐を移して、くッつき合ひ、燭盡きむとする頃、やッと詩が出來て、どうやら、責任を果したといふ樣な工合。程なく蘇州城の高い處で、角聲寒を警めて吹くだらうが、明朝の別れの悲しきを思へば、むしろ、之を聞かぬ方が宜しい。

【餘論】至極なだらかに出來て居て、應酬の作としては、先づ存するに足るべく、殊に前聯十字は、その時世に極めて適切である——以下、毎首に評語を書くことは、いたづらに紙數を増すのみならず、千篇一律になつて面白くないから、御免を蒙ることとし、その佳なるものに限りて、幾許の閑言語を弄することにする。

過胡博士郊居

胡博士の郊居を過ぐ

頭白蘭陵(一)客。幽居共(二)一村。　頭は白し蘭陵の客、幽居共に一村。
老來吟力退。貧去告(三)身存。　老來、吟力退き、貧去、告身存す。
夕(四)吹鳴梨葉。秋泉注稻根。　夕吹、梨葉を鳴らし、秋泉、稻根に注ぐ。
時因來問(五)筮。獨叩樹間門。　時に來つて筮を問ふに因つて、獨り叩く樹間の門。

【字解】【一】蘭陵　一統志に「常州武進縣、晉、南蘭陵郡を置く、梁、改めて蘭陵縣となす」とある。元來、蘭陵は、戰國の末、荀卿が晩年居つた處、胡博士は其地の人であつたらうが、併せて荀卿に比擬する意も籠つて居る。【二】共一村　青邱と同じ處に寓居したものと見える。【三】告身　唐書に「文武官、皆告身を給す、符を以て其上に印す、これを告身といふ」とあつて、卽ち今の辭令書。【四】夕吹　夕風。【五】問筮　題下の原注に「胡は筮を善くす」とある。

【題義】この詩は、同村に居る胡博士の寓居を訪問して作つたのである。博士、名は翰、後に卷十三に答胡博士留別の詩があつて、多分、その人と思はれるから、略傳は、その處で述べることにする。

【詩意】君は、蘭陵の出身で、學問もあるが、世に用ひられずして、頭も白くなり、われと同じく、この村内に幽居を定めて居る。老來、詩を作る力も次第に退き、貧乏になつても、むかし貰つた辭令書だけは、殘つて居て、もとは、御歷歷である。君の居宅のあたりは、今しも秋の末、夕風は、さわさわと梨の葉を鳴らし、秋の泉は、刈つた跡の稻の根に注いで居る。予は、卜筮を遣つて貰ふ爲に、ひとり來つて、樹間の門を叩き、ここに君を訪うたのである。

送茅侯

茅侯を送る

(一)欲知難別意。孤棹去還停。　別れ難きの意を知らしめむと欲す、孤棹去つて還た停まる。
(二)候吏分(三)遙邇。離(四)人雜醉醒。　候吏、遙邇を分ち、離人、醉醒を雜ふ。
城臨秋水渡。樹帶夕陽亭。　城は秋水の渡に臨み、樹は夕陽の亭を帶ぶ。

（五）後夜看吟燭。憐君宿郡廳。（六）　後夜、吟燭を看る、憐む、君が郡廳に宿するを。

【字解】【一】欲知　知らむと欲すではなく、知らしめむと欲すと讀みたい。漢文では、自動、他動の區別は、はつきりしないし、且つ、これは詩であるから、かういふ用法も、許されることと思ふ。【二】候吏　送迎の役人。【三】遠邇　遠近に同じ。【四】離人　客子といふに同じ。【五】後夜　他夜に同じ。【六】郡廳　郡の官舍。

【題義】茅侯の侯は君に同じ、つまり茅君、その人、名字不詳。又何の爲、何處に往くか、ともに分からぬが、さう遠くもない處に赴任するものらしい。

【詩意】君は、別れ難き意に惱んで居ることを知らしめむが爲に、一葉の舟に棹して、客程に上つたものの、一たび去つては、又止まり、しきりに、躑躅して居られる。送迎の吏員どもは、遠近の各處に分かれて出張つて居るし、從行の者の中には、醉つて居るのも、醒めて居るのも交つて居る。州城は、秋水の漲れる渡頭に臨み、樹は、夕日うつらふ驛亭を籠め、ここが卽ち君に別れた處である。それから、他夜、われ獨り微吟しつつ、燈火に對する時は、君が伴もなくて、郡の官舍に居られることを思ふであらう。

【餘論】後聯十字は、明瑩にして、遠佇神に入るの妙がある。

孤雁

孤　雁

（一）衡陽初失伴。歸路遠飛單。　衡陽、はじめて伴を失ひ、歸路、遠く飛んで單なり。

（二）度隴（三）將書怯。排空（四）作陣難。　隴を度つて書を將て怯、空を排して、陣を作すこと難し。

呼羣雲外急。弔影月中殘。　羣を呼んで雲外に急、影を弔うて月中に殘す。

不共（五）鳧鷖宿。兼葭夜夜寒。　鳧鷖と共に宿せず、兼葭、夜夜寒し。

【字解】【一】衡陽　衡山の南、前に卷十一、題三殷用衡所藏山水圖一の詩中にも引いたが、一統志に「回雁峰は、衡州府城の南に在り、雁、衡陽に至つて過ぎず、春に遇うて回る、故に名づく」とあり、王勃の滕王閣序に雁陣驚寒、聲斷衡陽之浦一とあつて、雁は回雁峰より南へは飛んで行かないといふことに成つて居る。【二】度隴　隴は隴山ではなく、田隴の義であらう。【三】將書怯　手紙を言づかつて居る爲に氣が配る。漢書蘇武傳に「常惠、使者に敎へて言はしむ、天子、上林中に射て、雁を得たり、足に帛書を繫ぐあり、言ふ、武は某の澤中に在り」といふのが、雁信の出處になつて居るが、蘇武の書は捏造したことで、實際有つたことではない。【四】作陣　雁の羣が行列をなすこと。【五】鳧鷖　鴨とあひる。

【題義】孤雁を詠じたので、卽ち詠物の體である。

【詩意】雁は、初め羣をなして、南飛して來たが、衡山の南に於て、同伴にはぐれ、歸る時には、唯だ一羽、遠い天空の上を飛んで居る。大地に下つて、田隴の上を度らうとすると、手紙を言づかつて居るので、萬一の變があつてはならぬといふ心配があるし、最早、大空を推し開くばかりに、陣勢を爲して勢よく飛ぶことも出來ぬ。そこで、たまたま、同伴が來さうなものだといふので、急に雲外に

叫ぶこともあるし、おのが影の淋しきを弔ひつつ、やがて月中に見えなくなつて仕舞ふ。鴨やあひると一處に宿すれば、のん氣で善かりさうだが、蒹葭枯れ盡して、夜夜寒く、とても假り寢の夢を結ぶことが出來ないから、下に降りもせず、せッせと飛んで行くので、まことに、憐な身の上である。

曉步園池　　曉に園池を步す

髮隨秋葉落。心共曉雲舒。　髮は秋葉に隨つて落ち、心は曉雲と共に舒ぶ。
稍改新題句。渾忘舊讀書。　稍や新題の句を改め、すべて舊讀の書を忘る。
林爭移樹鳥。池響食萍魚。　林には、樹に移るの鳥を爭はしめ、池には、「萍を食ふの魚を響かしむ。」
無限悠然意。涼天獨步餘。　無限悠然の意、涼天獨步の餘。

【字解】【一】新題句　新に得たる詩句。【二】舊讀書　むかし讀んだ書。【三】食萍　萍は浮草。

【題義】步園池とは、無論、園中なる池の周圍を散步すること。

【詩意】わが髮は、秋の枯葉とともに脫落し、年の寄つたのは、流石に悲しいが、散步する時の心持は、曉の雲と同じく、舒びやかで開く樣な氣がする。その間、新に得た詩句を頻りに直して見たりしたが、むかし讀んだ書物をすッかり忘れて仕舞つて、おもふ樣な好い字面の見つからないのは、殘念である。林中には、羣鳥、樹に移らむとして、互に相爭ひ、池心には、魚が浮草を食つて、ばくばくと響を爲して居る。涼天の下に獨り散步すると、悠然として無限の興味の存するを覺え、まことに、のん氣で面白い。

【餘論】後聯十字は、稍や刻劃に過ぎて居るが、西崑體に近き佳句である。

次韻過建平縣　　次韻、建平縣を過ぐ

縣雖三戶小。地僻罷兵防。　縣は、三戶小なりと雖も、地は僻にして、兵防を罷む。
茶市逢山客。楓祠祭石郞。　茶市、山客に逢ひ、楓祠、石郞を祭る。
雲埋鳴澗斧。沙膠度溪航。　雲は埋む澗に鳴るの斧、沙は膠す溪を度るの航。
應愛青山好。經過駐旅裝。　應に愛すべし、青山の好きを、經過して旅裝を駐む。

【字解】【一】三戶小　史記項羽本紀に「楚の南公曰く、楚は三戶と雖も、秦を亡ぼすは必ず楚ならむ」とあつて、その注に「三戶とは、楚の三大姓、昭屈景なり」とある。出處は、無論、これであらうが、意味は、人家唯だ三軒といつて、戶數の極めて少きを云つたのである。【二】兵防　兵を以て防禦する。【三】茶市　茶の市場。【四】楓祠　楓樹に倚り添ふ小祠。【五】石郞　一統志に「宋の石公弼、廣德縣に知たり、政績あり」と見ゆ。【六】鳴澗斧　樵夫の斧聲が澗中に鳴る。【七】度溪航　航は小舟。

【題義】建平は、廣德州に屬した山縣、ある人が其地を經過した詩を見せたから、次韻したといふの

で、靑邱自身、そこに旅行をしたのではないらしい。

【詩意】建平縣は、戶數も碌碌無い位であるが、地の僻遠なる爲め、寇盜の來襲するものなく、剗下騷亂の世でも、鄕兵を以て、防守する必要はない。時たま、茶の市場が開かれると、山中に住むものが、商品を賣り出しに來るし、楓樹の下なる小祠には、石公弼を祀つて、長しへに、その政績を記念して居る。樵夫の斧聲は、澗中に響いて居るが、白雲に埋められて、何處とも分からず、溪を度る小舟は、沙に膠著した儘、棄てッぽかしてある。靑山の景色、殊に宜しくして、愛するに堪へたる程であるから、經過するものは、旅裝を駐めて、しばしば留賞して時を移すとのことである。

【餘論】この詩の後聯は、いささか面白く、溪山幽僻の景を盡して居る。

鵲軒

鵲軒

金華朱少府、生時有鵲集於庭後樹、每歲生日、輒一來、其母將死、鵲悲鳴、久之而去、因以名軒、識其思母之意云、

【訓讀】金華の朱少府、生まるる時、鵲あつて、庭後の樹に集まる。每歲生日、輒ち一たび來る。その母、將に死せむとするや、鵲、悲鳴し、これに久しうして去る。因つて、以て軒に名づけ、その母を思ふの意を識すと云ふ。

神鵲曉鳴枝。飛來自有期。　神鵲、曉に枝に鳴き、飛び來る、自ら期あり。

門前(一)懸矢日。堂上(二)捧樽時。　門前、矢を懸くるの日、堂上、樽を捧ぐるの時。

詎信(三)塡河事。寧歌(四)繞樹詩。　詎ぞ信せむ、河を塡むるの事、寧ろ歌はむや、「樹を繞る」の詩。

只憐君望斷。(五)風木助餘悲。　只だ憐む、君望み斷え、風木、餘悲を助くるを。

【字解】【一】門前懸矢　前に卷十一、張仙畫像の詩中にも引いたが、禮記內則に「子生まる、男子ならば、弧を門左に設く」とある。【二】堂上捧樽　高堂の上に酒樽を捧げて生辰を祝す。【三】塡河事　淮南子に「烏鵲、河を塡めて織女を渡す」とある。【四】繞樹詩　曹孟德の短歌行に月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、何枝可依とあつて、これは、劉備の未だ地を得ずして、諸方に流浪するのを嘲つたのだと稱せられて居る。【五】風木　前に卷一、風樹操の題下に引いたが、韓詩外傳に載せたる皐魚の言に「樹、靜ならむと欲するも、風、息まず、子、養はむと欲するも、親、逮ばず、往いて見るを得べからざるものは親なり、皆、請ふ、これより辭せむ」とある。

【題義】小序の意味は――金華の朱少府は、生まれる時に、鵲が庭後の木に止まつたことがあり、それから、每年誕生日には、必ず一たび來た。そして、母の將に死せむとする時にも、來て悲鳴し、これに久しうして、飛び去つた。そこで、朱君は、その居るところを鵲軒と號し、母を思ふ誠意を識したとのことで、仍つて、その軒に寄題したのである。なほ少府は、縣令の尊稱。朱少府その人、名字等不詳。

【詩意】 曉早く、神鵲が枝上に啼くが、その飛び來るは、必ず期あつて愆たず、門前に弧を懸けて、朱君が生まれた時を始めとし、堂上に酒樽を捧げて、御祝をする誕生日には、屹度飛んで來た。鵲は、銀河を塡めて織女を渡すといふが、そんな事は、信ずるに足らず、又樹を繞る三匝、何の枝か依るべきといつて、流浪の生涯に喩へられたこともあるが、そんな詩は歌ふにも及ばない。唯だ憐むべきは、朱君が戀しさの餘りに、之を望めども跡方だに見えず、母を喪うて、風木の嘆に堪へざる時、特に飛び來つて、餘悲を助けたことで、朱君が、これを以て軒に名づけたのは、もとより偶然ではない。

寄杜二進士

杜二進士に寄す

花開寄別離。花落正相思。　花、開いて別離を寄せ、花、落ちて正に相思ふ。

交誼多年見。鄉愁近日知。　交誼、多年見はれ、鄉愁、近日知る。

我方淹上國。君豈老明時。　われ方に上國に淹し、君、豈に明時に老いむや。

試問江干閣。同登復共誰。　試みに問ふ江干の閣、同登、復た誰と共にかせむ。

【字解】【一】寄別離　別離の思を寄せる。【二】鄉愁　故鄉を思ふ心。【三】上國　帝都一帶の地を云ふ。【四】明時　聖明の御代。【五】江干閣　江邊の樓閣。

【題義】 杜二の二は排行、よくは分からぬが多分、名を彥正といつた人であらう。

【詩意】 花の開く時は、別離の思を詠出して遠く君に寄せ、花の落ちた時は、相思の情に堪へず、到底、君を忘れることはない。それも其筈、君との交誼は、すでに年久しく、眞情愈よ顯はれ、その上、われは故鄉を思ふ心が近日愈よ切なるが故である。今しも、われは、帝都に淹留して居るが、君の才、決して、この聖明の御世に空しく老い朽ちるものではなく、立身も遠からぬことであらう。今しも、江邊の樓閣に、君は誰と共に登臨されるか、予の居ないにつけて、定めて、相思うて居て吳れるであらう。

雨篷

雨篷

楚雨滿汀洲。瀟瀟灑客舟。　楚雨、汀洲に滿ち、瀟瀟として客舟に灑ぐ。

夢驚孤枕夜。愁掩一篷秋。　夢は驚く孤枕の夜、愁は掩ふ一篷の秋。

葦葉寒相戰。灘聲暗共流。　葦葉、寒、相戰ぎ、灘聲、暗、共に流る。

此時湘浦上。同聽只沙鷗。　この時、湘浦の上、同じく聽くは只だ沙鷗。

【字解】【一】楚雨　楚は江南一帶の地を汎稱す。【二】湘浦　湘水の入り江。

【題義】雨篷の篷はとま、舟の上に掩ひかけるもの。この詩は、雨に濡れた篷を詠じたので、雨中の舟といふのと、略ぼ同じである。

【詩意】楚天の雨は、江上の汀洲に滿ち、瀟瀟として客舟に灑ぎかかつて居る。その雨聲の爲に、孤枕の夜夢は、忽ち驚かされて醒め、篷は秋の冷かさを掩うて居るが、愁は到底禁せられない。岸上の葦の葉は、寒氣を帶びて戰ぎ、江心の灘聲は、暗中に在つて、共に流れて居る。この時、湘水の入り江に宿すると、一しほ物さびしく、唯だ岸邊の鷗が同じく此聲を聞いて居るのみである。

【餘論】前聯は第二句より出で、後聯は第二句を承け、そして、相戰といひ、共流といひ、皆楚雨と併せて云つたので、頗る細心の工夫である。結二句、やや振はぬのは遺憾であるが、夢驚の十字は、新警高婉を以て許すべきものである。

聽秋軒爲僧賦

聽秋軒、僧の爲に賦す

(一)西澗秋聲起。涼風助振號。

西澗、秋聲起り、涼風助けて振號。

數禽翻樹裏。萬葉下(二)亭皐。

數禽、樹裏に翻り、萬葉、亭皐を下る。

初訝來山雨。還疑捲浪濤。

初めは山雨來るかと訝り、還た浪濤を捲くかと疑ふ。

老僧方入定。終夜任(三)蕭騷。

老僧、方に定に入り、終夜、蕭騷に任かす。

【字解】(一) 西澗　西の谷間。秋は方位でいへば西に當るから、西澗といふのが殊に適切である。(二) 亭皐　驛亭附近の澤地。(三) 蕭騷　秋聲の寂しげに鳴り響く聲をいふ。

【題義】この詩は、ある僧の依賴に應じて、その菴室なる聽秋軒に寄題したのである。

【詩意】西なる谷間から、秋聲が颯然として吹き起ると、涼風が之を助けて、夥しく振動呼號する。數羽の棲禽は驚いて、木の間から翻り落ち、萬片の落葉は、驛亭附近の澤地に散り布いて居る。その初めて起るときは、山雨の來るかと訝つたが、翻つて又、波濤を捲き起す如き樣である。軒の名にしおふ秋聲は、此の如くであるが、菴主の老僧は、流石に修養を積んだ人であるから、定に入りし後、少しも心を亂さず、夜もすがら、その聲の騷がしきに任かせて、一向平氣である。

杏花飛燕圖

杏花飛燕の圖

雙飛如鬬(一)捷。終日幾西東。

雙飛して捷を鬬はすが如く、終日幾たびか西東。

尾拂花梢露。身翻柳絮風。

尾は拂ふ花梢の露、身は翻る柳絮の風。

入簾時趁蝶。歸(二)壘每銜蟲。

簾に入つて時に蝶を趁ひ、壘に歸つて每に蟲を銜む。

何處長相見。佳人院落中。　何の處か、長しへに相見る、佳人院落の中。

【字解】【一】鬪捷　捷は敏捷、素早きこと。【二】歸壘　壘は燕の巣。【三】院落　落は區劃の義。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】二羽の燕は、竝び飛んで、互に敏捷を爭ふが如く、終日幾たびか、西に往つたり、東に往つたりして居る。その間、尾は花の梢の露を拂ひ落し、身は柳の綿を飛ばす輕風の中に翻つて居る。簾內に飛び込んでは、時に蝶の跡を趁ひ、巣に歸つた時は、いつでも、蟲を口にくはへて、雛に哺む積りである。この雙燕は、何處で、いつでも見かけるかといへば、佳人の住む深院の一構の中が第一で、さすがに、情思あるものと見える。

扇

皎皎復團團。何人剪素紈。　皎皎復た團團、何人か素紈を剪る。

驅蠅臨几席。撲蝶近闌干。　蠅を驅つて几席に臨み、蝶を撲つて闌干に近し。

似月驚朝見。生風變夏寒。　月に似て、朝に見るに驚き、風を生じて、夏の寒きに變ず。

時移當自棄。莫怨繪乘鸞。　時移つて當に自ら棄てらるべし、乘鸞を繪くを怨む莫れ。

【字解】【一】皎皎　光明の貌。【二】團團　丸い貌、班婕妤の怨歌行に「新裂齊紈素、皎潔若霜雪、裁爲合歡扇、團團似明月」とあるに本づく。【三】剪素紈　素紈は白色の練り絹。上に引ける怨歌行の「新裂齊紈素」と同義。又瑯嬛記に「沈休文、雨夜、齋中に獨坐す。風、竹扉を開く、一女子あり、絡絲具を攜へ、門に入つて便ち坐す。風、細雨を飄して、絲の如し。女、風に隨つて引絡すれば、絡絲斷えず、異絲の若し。沈に贈つて曰く、これを氷絲といふ、君に贈り、遣つて以て氷紈と爲さしめむ、と。沈、後、織つて紈と成し、扇を製す、夏日に當つて、甫めて攜へて手に在れば、搖かさずして自ら涼し」とある。【四】似月　上に引ける怨歌行の「團團似明月」と同じ。【五】時移當自棄　怨歌行の終に「常恐秋節至、涼飈奪炎熱、棄捐篋笥中、恩情中道絕」とある。【六】繪乘鸞　江淹が班婕妤に擬した詩に「紈扇如團月、出自機中素、畫作秦王女、乘鸞向煙霧」とある。

【題義】ここに謂ふ扇は、日本でいふ「あふぎ」ではなく、團扇、卽ちうちはである。元來、扇の本義は團扇、丸いものと決まつて居る。それから、例の疊める扇は、宋元の頃、はじめて、日本から支那に輸入したので、當時これを珍重したことが、諸名家の詩中に散見し、もとは摺疊扇といひ、その後、支那でも製造する樣になつたのである。

【詩意】團扇は、皎皎として奇麗であるし、又團團として形は丸く、もと何人が白絹を剪つて造つたのであるか。ある時は、蠅を追つて、御馳走の竝べる宴席に臨むべく、ある時は、蝶を撲つて、花咲き匂ふ欄干に近づくことがある。その形の丸い處は、月に似て居るが、夜を待たず、朝でも見えるのは、不思議ともいふべく、風を生じては、夏を變じて寒からしめる。しかし、時移つて、秋の涼しきに遇へば、自然棄てらるべきものであつて、表の繪には、秦の弄玉が鸞に乘じて、その夫の蕭史と共

に、昇天する處が畫いてあつても、その樣に長しへに追隨することが出來ぬから、こんな繪は、癡の種だといつて、怨んだ處で仕方がない。

【餘論】　これより以下、詠物の詩が十首ばかり、竝んで居るが、いづれも、拙劣甚しく、殊に、この扇の詩の兩聯に至つては、卑俗庸劣、とても御話に成らず、これでも、靑邱の詩かと言ひたくなる位である。

新荷

(一)如蓋復(二)如鈿。初生雨後天。　　蓋の如く、復た鈿の如し、初めて生ず雨後の天。

葉低浮水上。莖弱(三)嫋風前。　　葉は低くして水上に浮び、莖は弱くして風前に嫋たり。

乍覆游魚戲。難藏宿鷺眠。　　乍ち游魚の戲るるを覆ふも、宿鷺の眠を藏し難し。

佳人休便折。留蔭採蓮船。　　佳人、便ち折るを休めよ、留めて蔭せよ採蓮の船。

【字解】【一】如蓋　蓋は車蓋、蓮の葉の圓く大きくなつたものを云ふ。【二】如鈿　鈿は笄の類、まだ葉の十分に開かないのを云ふ。【三】嫋　たをやか、しなしなして居る貌。

【題義】　爾雅に「荷は芙蕖なり、その莖は茄、その葉は荷、その花は菡萏、その實は蓮、その根は藕、その中は菂」とある。すると、新荷は、新に展び開いた蓮の葉である。

【詩意】　蓮の葉は、雨後初めて長成し、その大なるものは、車蓋の如く、その小なるものは、笄の如く、そして、葉は低く水面に浮び、中には、水上に出たのもあるが、その莖は弱弱しくして、たをやかに風前に立つて居る。葉は、やッと廣がつたばかりで、游魚の戲るるを覆ふことは出來るが、鷺の宿して眠れるを匿すことは出來ない。佳人よ、わけもなく折り去ることなく、これを留めて、その茂るに任かせたならば、他日、蓮の花を採る時、船を其蔭に寄せることが出來るやうに成らう。

鷺

雪羽(一)獨(二)修修。閒情戀遠洲。　　雪羽、ひとり修修、閒情、遠洲を戀ふ。

聲沈煙浦晩。影度月灘秋。　　聲は沈む煙浦の晩、影は度る月灘の秋。

避棹驚時起。窺魚立未休。　　棹を避けて驚いて時に起ち、魚を窺うて立つて未だ休まず。

蒹葭同夜宿。應只許沙鷗。　　蒹葭、夜宿を同じうす、應に只だ沙鷗に許すべし。

【字解】【一】雪羽　純白なること雪の如き羽毛。【二】修修　長き貌。

【題義】　說明に及ばぬ。

【詩意】鷺は、雪白の羽毛、修修として長く、その性情、亦た頗る閒放にして、人の居ない樣な遠洲を慕はしく思つて居る。日暮、煙こめたる浦口に其聲沈む時、秋夜、月冴えたる奔流を其影の度る折からなど、殊に風情がある。或は棹を避けて、驚きつつ時に飛び上り、或は魚を窺うて、立ちどほして居る。夜、蒹葭の陰に同じく宿することは、沙鷗にだけ許すので、元來、鷗とは極めて相似たものである。

【餘論】前聯十字は、簡切取るべきものである。

馬

名駒產渥洼。牽出萬人誇。
逸足輕千里。高鬣散五花。
城南游紫陌。塞上踏黃沙。
不受蠻奴策。驕嘶向日斜。

名駒、渥洼に產し、牽き出でて萬人に誇る。
逸足、千里を輕んじ、高鬣、五花を散す。
城南、紫陌に游び、塞上、黃沙を踏む。
蠻奴の策を受けず、驕嘶して日の斜なるに向ふ。

【字解】【一】渥洼 杜甫の詩に飄飄西極馬、來自渥洼池とあつて、西域の地名。【二】逸足 世にすぐれたる駿足。【三】高鬣 鬣はたてがみ。【四】五花 杜甫の高都護驄馬行に五花散作雲滿身、萬里方看汗流血とあり、韋斷に「唐人、剪騣馬を尙ぶ、三騣の者を三花といひ、五騣の者を五花といふ」とある。すると、五花とは、鬣を五段に剪り揃へたものであらう。【五】蠻奴策 蠻奴は南蠻人で、奴隷となつて居るもの、策は鞭。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】渥洼に產する名馬を牽き出して、自慢らしく萬人に見せて居るが、なる程、その優れたる駿足は、千里の遠きを物の數ともせず、長い鬣は、五花と稱して、五段に剪り揃へてある。それから城南に出かけては、都大路を游行し、塞上に出でては、滿目の黃沙を踏み、どこに往つても、勢が善い。されば、蠻奴に鞭たれることもなく、夕日の中に於て、誇らしげに高く嘶いて居る。

梧桐

井邊雙玉樹。高翠自生涼。
影散秋雲薄。聲喧夜雨長。
疏英飄碧簟。亂葉響銀牀。
綠綺誰能斲。持將奏鳳凰。

井邊の雙玉樹、高翠自ら涼を生ず。
影は散じて秋雲薄く、聲は喧しくして夜雨長し。
疏英、碧簟に飄り、亂葉、銀牀に響く。
綠綺、誰か能く斲らむ、持し將て鳳凰を奏す。

【字解】【一】疏英 まばらに咲く花。【二】碧簟 碧色の竹むしろ。【三】亂葉 亂れて落つる葉。【四】銀牀 李白の詩に梧

桐落金井一葉飛銀牀とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】井戸の邊に、二本の見事な桐の樹があつて、見あぐるばかりの翠色は、自然涼しげである。その影の散せし時は、秋雲の薄くなつて晴れしを知るべく、聲の喧しきは、夜もすがら、雨が降り注ぐからである。まばらなる花が散つて碧簟に飄る時、さわさわと亂るる葉が響をなして銀牀に飄へる折からなど、ともに風情がある。誰か之を斲つて、綠綺の琴となし、それを持ち出して、鳳凰于飛の一曲を奏するか。桐は、材となつても、殊に貴いものである。

圍棊

偶與銷閒客。圍棊向竹林。
聲敲驚鶴夢。局罷轉桐陰。
對坐忘言久。相攻運意深。
此間元有樂。何用橘中尋。

圍棊

偶ま銷閒の客と、棊を圍んで竹林に向ふ。
聲は敲いて鶴夢を驚かし、局は罷んで桐陰を轉ず。
對坐、言を忘るること久しく、相攻めて、意を運らすこと深し。
この間、元と樂あり、何ぞ橘中に尋ぬるを用ひむ。

【字解】【一】聲敲　石を下して棊盤を敲くこと。【二】局罷　ひと勝負終りしこと。【三】橘中樂　前に卷八、書夢の詩中にも引いたが、幽冥錄に「巴邛の人、一大橘を剖く、中に二叟あり、相對して象戲す」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】偶ま銷閒の客と共に、竹林の近くに坐して碁を打つた。その石を下す聲は、鶴の夢を驚かすべく、ひと勝負濟むと、桐の木影が移つて行つて、大分時を經過したことが分かつた。兩人對坐せる間は、久しく物いふことを忘れ、互に攻め合ふ爲には、隨分深く考へた。かくする間に、一種の妙味が樂となるのであつて、何も古しへの仙人の如く、橘實の中で遣るにも及ばない。

池上晚酌

夕陽初雨後。團扇送涼過。
竹裏方歸鳥。沙邊尙浴鵝。
脫巾懸峭壁。流斝逐回波。
六逸當年樂。何如此處多。

池上晚酌

夕陽初めて雨後、團扇、涼を送つて過ぐ。
竹裏、方に歸鳥、沙邊、尙は鵝を浴す。
巾を脫して峭壁に懸け、斝を流して回波を逐ふ。
六逸、當年の樂、この處の多きに何如。

【字解】【一】流斝　斝は玉爵、卽ち玉の盃。【二】六逸　唐史に「李白・孔巢父・韓準・裴政・張叔明・陶沔、徂徠山に居り、竹溪六逸と號す」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】雨後に、ヤッと夕日が出たから、團扇を揮つて、涼を逐りつつ出かけて行つた。竹藪の中では、丁度、鳥が塒を爭つて歸つて來たが、岸邊に近い處では、未だ鵝鳥が泳いで居る。そこで、頭巾を脫いで、峭壁に挂け、杯を流して、波を追ひかける。むかし、六逸は竹溪に會飮したといふが、現在、ここの樂多きに比して、その優劣、果して如何であつたらう。

簟

(一)蠻籐巧織成。乍展覺涼生。
紋蹙寒波細。光搖夜月明。
坐令(二)葵扇棄。眠稱(三)石牀平。
須信南軒下。炎天夢亦淸。

簟

蠻籐、巧に織り成す、乍ち展べて、涼生ずるを覺ゆ。
紋、蹙まつて寒波細、光、搖いて夜月明かなり。
坐せば、葵扇をして棄てしめ、眠れば、石牀の平かなるに稱ふ。
須らく信ずべし、南軒の下、炎天、夢も亦た淸きを。

【字解】(一)蠻籐　南方に產する籐。(二)葵扇　詳しくは蒲葵扇、蒲葵の葉で造つた團扇。晉書謝安傳に「鄕人に中宿縣を罷むるものあり、還つて、安に詣る。安、其の歸資を問ふ。答へて曰く、蒲葵扇五萬あり、と。安、乃ち其中なるものを取つて之を捉る。京師の士庶、競うて市ひ、價、數倍を增す」とある。(三)石牀平　王維の詩に「雨花應共石牀平」とある。

【題義】簟は、邦訓竹むしろ、竹を剝いで造つたのもあるが、ここのは、籐で編んだものである。

【詩意】この竹むしろは、蠻地に產する籐を以て手際よく織り成したので、これを展げると、涼氣の自ら生ずるを覺える位。その上に浮いて見える斑紋は、縮まつて、さながら寒波の細細として打寄する如く、その光澤は、月影を搖かすと、一層はツきりして見える。この上に坐せば、蒲葵の扇も不用であるし、寢心地の善いことは、さながら、石牀の平かなるに匹敵する。無論、これを南軒の下に持ち出すと、どんな炎天でも、夢淸くして、まことに善い心持であらう。

射柳

風煖畫旗張。將軍集射場。
馬驕嫌轡急。人勇喜弓强。
但見靑條折。那知白(一)羽翔。
三軍歡笑處。巧中勝(二)穿楊。

射柳

風煖かにして畫旗張り、將軍、射場に集まる。
馬驕つて、轡の急なるを嫌ひ、人勇んで、弓の强きを喜ぶ。
但だ見る、靑條の折るるを、那ぞ知らむ、白羽の翔けるを。
三軍歡笑の處、巧に中つるは、穿楊に勝れり。

【字解】(一)白羽　白羽の矢、國語に「吳王、士卒萬人を陳し、以て方陣となす、皆白常・白旂・素甲・白羽の矰、これを望めば荼の如し」とあつて、その注に「矰は矢の名、白羽を以て飾となす」とある。(二)穿楊　楊は柳の葉、養由基が弓の名人で、百步離

れて柳の葉に射中てたといふことは、前にも引いて置いた。

【題義】演繁露に「射柳は、古しへの躤柳に本づき、柳を折つて毬場に環挿し、軍士、馬を馳せて之を射る。その鏃、甚だ濶く、これを射れば卽ち斷ゆ」とあつて、弓術の一演技である。

【詩意】風は煖かにして、まことに好い日和、射場の周圍には、畫旗を建て、將軍も出席された。馬は、意氣頗る驕つて、手綱で嚴しく締められることを嫌ひ、人は、勇み立つて、弓の强きを挽くことが、自慢である。やがて、物の見事に、柳の枝の射飛ばされるのが見えたが、白羽の矢の飛んで來るのは、分からなかつた位。すると、三軍の士は、やんやと喝采し、その巧に射中てたことは、古しへ百步を隔てて其技の精を誇つた養由基にも勝つて居た。

流螢

（一）熠燿復青熒。流光不自停。
熠燿、復た青熒、流光自ら停まらず。

暗飛如避月。遠墮欲隨星。
暗に飛んで、月を避くるが如く、遠く墮ちて、星に隨はむと欲す。

穿樹臨（二）幽檻。（三）緣莎（四）集小庭。
樹を穿つて、幽檻に臨み、莎に緣つて、小庭に集まる。

莫將（五）羅扇撲。（六）囊取照（七）遺經。
羅扇を以て撲つ莫れ、囊取して遺經を照らさむ。

【字解】【一】熠燿　螢の別名でもあるが、ここでは、矢張、光るといふ義に見た方が善からう。【二】幽檻　檻は欄干。【三】緣莎　莎は溼地の草。【四】集小庭　集はとまる、ここでは聚まるといふ意ではない。【五】羅扇撲　杜牧の宮詞に輕羅小扇撲流螢」とある。【六】囊取　捕へて囊に入れる。晉書車胤傳に「胤、博學多通、家貧にして常に油を得ず。夏月は練囊に數十の螢火を盛り、以て書を照らし、夜、以て日に繼ぐ」とある。【七】遺經　聖人の書き殘した經書。

【題義】流螢は、何處からとも分からず飛んで過ぎ行く螢である。

【詩意】螢の光るは、無論の事だが、よく見ると、青く熒いて居て、中にも流螢は、自ら停まらず、すうツと通つて仕舞ふ。その暗い處を目がけて飛ぶは、さながら、月を避くるが如く、遠くで地に墮ちた處は、流星に隨つて往つたかと思はれる。やがて、木の深い處を穿ち入つて、欄干の近くまで來ることもあるし、溼草に縋つて、小庭に止まつて居ることもある。これは、輕羅の小扇を以て撲つことなく、捕へて囊に入れ、聖人の遺經を照らさせ、勉學の人の益になる樣にしたら善からう。

水殿圖

波影繞闌干。淸虛似（一）廣寒。
波影、闌干を繞り、淸虛、廣寒に似たり。

（二）荷香臨檻挹。月色捲簾看。
荷香、檻に臨みて挹し、月色、簾を捲いて看る。

夜靜聞清吹。涼多却素紈（三）。　夜は靜にして清吹を聞き、涼多くして素紈を却く。

宴酣思薦鱠（四）。銀縷簇金盤（五）。　宴、酣にして鱠を薦めむことを思ふ、銀縷、金盤に簇る。

【字解】【一】廣寒　月宮を云ふ。龍城錄に「上皇、申天師・道士・鴻都の客と、八月望日の夜、三人同じく雲上に在り、月中に游んで、一大宮を見る、榜して、廣寒清虛の府といふ」とある。この上皇は、唐の玄宗。【二】荷香　蓮の花の匂ひ、庾信の詩に荷香薰二水殿一とある。【三】素紈　團扇をいふ、班婕好の新裂二齊紈素一の句に本づく。【四】薦鱠　鱠はなます、刺身の類、吳越春秋に「子胥、吳に歸る。吳王、將に至らむとするを聞き、魚を治して鱠となす。時を過ぎて至らず、魚に臭あり。須臾にして、子胥至る。闔閭、鱠を出して食ふ、その臭を知らず。吳人鱠を作るもの、闔閭の造るよりするなり」とある。【五】銀縷　銀絲に同じ、細くして、その色、銀の如きをいふ。前に卷五、游二寶積山一の詩中にも引いたが、歐陽原功の詩に吳王宮中宴未レ終、銀絲斫レ膾飛龍鬢とある。

【題義】水殿の圖は、いづれ、水上殿閣の模樣を畫いたもので、何處とも分からぬが、詩で見ると、どうも、吳宮らしい。越絕書に「吳王、姑蘇臺を起し、春宵宮を立て、長夜の飲を爲し、天池を作り、池中に青龍舟を作り、日に西施と水嬉を爲す」とあり、李白の詩に風動二荷花一水殿香、姑蘇臺上宴二吳王一とある。なほ水殿の圖といふ題は、水殿の圖その物を詠じたのではなく、水殿の圖に題したので、すべて、何何圖とあるは、皆さうである。

【詩意】波影縹緲として、欄干を繞り、清虛たる其樣は、廣寒の名にしおふ月宮に似て居る。蓮花の香は、檻に臨んで齅ぐことが出來るし、月色は、簾を捲き上げさへすれば、十分に見える。夜の更けて靜かなる儘に、笛を吹く音が聞こえ、涼味多きに因つて、白絹の團扇も不用である。やがて、宴酣なる時、魚の膾が欲しいといへば、銀絲の如く細かに剋んだのを金盤に一ぱい入れて差し出した。

【餘論】この詩中、清の字が複して居る。

新蟬

翾翾（一）乍離脫（二）。咽咽試初鳴。　翾翾として乍ち離脫し、咽咽として初鳴を試む。

隔葉棲身穩。移柯（三）忽意驚。　葉を隔てて身を棲ますこと穩、柯に移つて忽ち意驚く。

亂催窓日墮。微喚浦風生。　亂れて窓日を催して墮さしめ、微に浦風を喚んで生ず。

何待當秋聽。今朝已感情。　何ぞ秋に當つて聽くを待たむ、今朝すでに情を感ず。

【字解】【一】翾翾　身の輕い貌。【二】離脫　殼から脫け出る。【三】移柯　柯は枝。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】さも身も輕げに、殼から脫け出たのが、卽ち新蟬であつて、咽びながら、試みに初めて鳴き出した。葉を隔てて身を棲ませば、一寸見つからぬから、まことに安穩であるが、枝に移らうとする

と、まだ慣れぬこととて、心に驚く樣である。その高い聲で亂鳴するに當つては、窓にさす夕日を落さしめ、細い聲で微吟する時は、浦上の風を生せしむる樣である。何も秋に當つてから聞くことを待たず、今朝、これを聞いてだに、すでに、わが情に感じたので、蟬の聲は、まことに哀れなものである。

林間避暑

林間に暑を避く

自愛蠻籐滑。閒舒臥石苔。　自ら愛す、蠻籐の滑かなるを、閒に舒べて石苔に臥す。

松風催暑去。竹月送涼來。　松風、暑を催して去らしめ、竹月、涼を送つて來る。

石氣生琴薦。泉香入茗杯。　石氣、琴薦に生じ、泉香、茗杯に入る。

却憐行路子。愁暍向黃埃。　却つて憐む行路の子、暍を愁へて黃埃に向ふ。

【字解】【一】蠻籐　竹むしろ、前の聲を詠する詩にも蠻籐巧織成とあつた。【二】催暑去　暑氣に向つて催促して去らしめる。【三】琴薦　琴を入れる嚢、皮日休の詩に蟲絲度日縈琴薦とある。【四】行路子　旅客。【五】愁暍　暍は熱に中ること、日射病に罹る。【六】黃埃　沙ほこり。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】簟で造つた竹むしろのすべすべしたのが、氣に入つたので、これを展べて、石苔の上に横臥した。颯颯たる松上の風は、暑氣を追ひ除けて去らしめ、娟娟たる竹間の月は、涼を送つて來て、まことに心もちが善い。石氣は、濛濛として、琴の嚢に生じて之を溼し、泉の味は、椀中の茶に入つて、それと知らるるばかり。氣の毒なのは、旅行する人で、この炎天に際し、暑氣に中てられむことを氣遣ひつつ、沙ほこりの中を歩いて居る。

【餘論】松風竹月の十字は、名聯を推すべきも、篇中、石の字が複して居るのは、一寸目ざはりである。

送劉省郎出佐邊郡

劉省郎の出でて邊郡に佐たるを送る

符券前軍重。衣冠上客才。　符券、前軍重く、衣冠、上客の才。

地圖連異壤。星次出中台。　地圖、異壤に連り、星次、中台に出づ。

暮雨車投峽。秋風扇却埃。　暮雨、車、峽に投じ、秋風、扇、埃を却く。

省中梧樹在。鳴鳳會重來。　省中、梧樹在り、鳴鳳、會ず重ねて來らむ。

【字解】【一】符券　唐書百官志に「門下侍郎二人、侍中の職を掌貳し、侍中闕くれば、殺んで、符券を封じ、傳驛を給す」とあ

る。【二】上客　諸侯の賓客。【三】中台　晉書天文志に「三台六星、上中下、兩兩相居り、文昌に起り、列して太微に抵る。一に曰く、天柱、三公の位なり。人に在りては、三公といひ、天に在つては三台といふ」とあり、蘇頲の「贈彭州權別駕」の詩に「邇遣歌謠迥、半刺徒開趨數揖中台」とある。【四】省中　省は門下省。【五】梧樹　杜甫の詩に拔垣竹埤梧十尋とある。

【題義】この詩は、門下侍郞の職に居た劉某が、何處か知らぬが、重要なる邊郡の佐、卽ち太守副貳となつて、新に赴任するのを送つたのである。

【詩意】君は、今まで門下侍郞の職に居て、時には符劵を封ずることを掌り、軍隊の人に重んぜられて居たが、もと諸侯の上客たるべき才あるにより、今回は、邊郡の佐となり、衣冠堂堂として赴任される。その場處は、地圖で見ると、異域に連つて居る邊要の大郡であつて、これまで、天上の星の順序からいふと、中台であつた其清要なる職から轉任されたのも、いかさま、尤もな事である。途すがら、暮雨に逢うては、車を峽中に寄せて、民家に泊まることもあらうし、秋風の吹くにつけては、團扇を手にして、沙ほこりを拂はなければなるまい。門下省には、桐の木があつて、鳳凰は其上に止まつて、朝陽に鳴くものと決まつて居るから、君は、遠からず、召し還されて、舊省に入るべく、暫時の事であるにつけても、精勵して、その職務に盡して貰ひたい。

湓浦琵琶圖

湓浦琵琶の圖

秋夜相逢處。閨愁雜宦情。　秋夜相逢ふの處、閨愁、宦情に雜はる。

四絃風共拂。兩棹月同明。　四絃、風、ともに拂ひ、兩棹、月、同じく明かなり。

司馬青衫溼。佳人白髮生。　司馬、青衫溼ひ、佳人、白髮生ず。

至今湓浦上。楓葉尙哀聲。　今に至つて、湓浦の上、楓葉、尙ほ哀聲。

【字解】【一】閨愁　閨下に獨處する愁。【二】宦情　謫官遷謫の情。【三】四絃　琵琶を云ふ。【四】兩棹　二艘の舟。【五】司馬青衫溼　白居易の琵琶行に座中泣下誰最多、江州司馬青衫溼とある。【六】楓葉　同じく琵琶行に楓葉荻花秋瑟瑟とある。

【題義】湓浦は、一統志に「九江府城の西に在り。又琵琶亭は、城西大江の濱に在り。唐の司馬白居易、客を湓浦口に送り、夜、鄰舟琵琶の聲を聞いて、これを問へば、長安の倡女、商人に嫁す、爲に琵琶行を作る、後人、因つて以て亭に名づく」とある。それから、白居易の琵琶行には、序があつて「元和十年、予、九江郡司馬に左遷せらる。明年秋、客を湓浦江に送り、舟中、夜、琵琶を彈ずるものを聞く。その音を聽くに、錚錚然として、京都の聲あり。その人を問へば、本と長安の倡女、かつて琵琶を穆曹兩善才に學ぶ、年長じ、色衰へ、身を委して賈人の婦となる。遂に酒を命じ、數曲を快彈せしむ。曲、罷んで憫然、自ら少小の時、歡樂の事を敍し、今漂淪憔悴、江湖の間に轉徙す。予出官二年、恬然自ら安んず。この人の言に感じ、この夕、はじめて遷謫の意あり。因つて、長句を爲り、

歌うて以て之に贈る、凡そ六百一十二言、命けて琵琶行といふ」とある。湓浦に琵琶を彈ずるといへば、卽ち琵琶行のことで、この詩は、取りも直さず、琵琶行の畫に題したのである。

【詩意】秋夜、白樂天が商婦に逢ひし時、閨愁は宦情と雜はり、まことに、感愴に堪へず。やがて、四絃、風と共に搔き鳴らせば、兩方の舟に月が同じく明かであつた。江州司馬は、涙の爲に靑衫を濕し、孤舟の佳人は、白髮の生せしを嘆息したであらう。今に至るも、湓浦の邊では、楓葉が哀れなる聲をなし、當日の恨は、依然として、なほ盡きない。

金人馬圖

金人馬の圖

名王(一)愛游獵。初試射鵰(二)弓。　名王、游獵を愛す、初めて試む、鵰を射るの弓。

白草秋原曠。黃沙晚塞空。　白草、秋原曠く、黃沙、晚塞空し。

琵琶應漢女。騕褭(三)是胡驄。　琵琶は、當に漢女なるべし、騕褭は、是れ胡驄。

歸醉葡萄綠。穹廬(四)在月中。　歸つて醉ふ葡萄の綠、穹廬、月中に在り。

【字解】【一】名王　匈奴の大臣輩を云ふ。【二】射鵰　鵰はくまだか。【三】騕褭　古の良馬の名。【四】穹廬　テント。

【題義】金人馬の金は國名、もと滿洲の北方から起り、遼を滅し、支那に侵入して南宋と對立して居た。この詩は、金時代の人馬の有樣を畫いた圖に題したのである。

【詩意】金國の大臣輩は、游獵を好み、ここに、弓矢を攜へて、鵰を射落さうとして居るが、見わたすかぎり、白草茫茫として秋原廣く、その先は、黃沙漠漠として、邊塞日暮人なき有樣、琵琶を彈じて居るのは、いづれ中國の婦人であらうし、古しへの騕褭にも比すべき駿馬は、胡馬であらう。やがて、歸つて來て、テントに入り、今夜、月の明かなるを眺めつつ、葡萄の酒の綠なるを滿引して居る。

夜訪芑蟾二釋子因宿西澗聽琴

夜、芑・蟾二釋子を訪ひ、因つて西澗に宿して琴を聽く

淸夜獨幽尋。巖扉落葉深。　淸夜、ひとり幽尋、巖扉、落葉深し。

許攜陶令酒(一)。來聽穎師琴(二)。　陶令の酒を攜へて、穎師の琴を聽くを許す。

人醉月沈閣。鳥啼風滿林。　人、醉うて、月、閣に沈み、鳥、啼いて、風、林に滿つ。

應留西澗水。千載寫餘音。　應に西澗の水を留めて、千載、餘音を寫すべし。

【字解】【一】陶令酒　陶潛、彭澤令となり、又酒を愛して居た。【二】穎師琴　韓愈に聽穎師彈琴の詩があり、李賀に聽穎師

彈琴歌あるを見れば、いづれ、その頃の名手であつたらう。

【題義】芑蟾二釋子は、芑上人・蟾上人といふ二人の坊さんで、集中に數ば見えて居る。この詩は、夜、二人の僧を訪ひ、因つて、西澗の草庵に宿し、その琴を彈ずるを聽いて作つたといふので、二人は同じ處に居り、又いづれか一人琴を善くしたものと思はれる。

【詩意】清夜に乘じて、ひとり、二釋子の草庵を尋ねると、巖下の柴扉には、落葉が深く溜まつて居た。われは、陶淵明の如く、酒を攜へて來り、そして、潁師にも比すべき名人の琴を拜聽することを許された。その醉ひかかつた時には、月、閣に沈みて、夜愈よ遲く、そして、風、林に滿ちて、烏が驚いて騒ぎ立てた。その琴聲の妙なるに至りては、これを西澗の水に留めて、千載の後まで、その餘韻を傳へたいと思ふばかりである。

【餘論】後聯十字は、聊か清警の趣を得て居る。

錢塘送馬使君之吳中

錢塘、馬使君の吳中に之くを送る

樟(一)亭離席散。遙發畫(二)幡車。

樟亭、離席散じ、遙に發す畫幡の車。

飛雉新(三)阡麥。啼鶯故(四)苑花。

飛雉、新阡の麥、啼鶯、故苑の花。

望山登郡閣。行水到田家。

山を望みて、郡閣に登り、水を行つて、田家に到る。

莫道凝(五)香句。前人獨可誇。

道ふ莫れ、凝香の句、前人ひとり誇るべしと、

【字解】【一】樟亭　杭州府志に「樟亭は、錢塘縣舊治の南五里に在り。今の浙江驛は、その故址なり」とある。【二】畫幡車　幡は車の泥よけで、そこに畫をかいた車。謝承の後漢書に「鄭弘、淮陰太守に遷る。春を行つて大旱、車に隨つて雨を致す、白鹿、道に方び、轂を挾んで行く。弘、怪んで主簿黄國に問ふ、鹿は吉となすか、凶となすか、と。國、拜賀して曰く、聞く、三公の車幡には鹿を畫いて作ると、明府、必ず宰相と作らむ」とある。【三】新阡麥　新阡は、新に開いた田畝。【四】故苑　南宋の故宮を指したので、杭州府志に載する西湖十景の中に柳浪聞鶯がある。【五】凝香句　韋應物の郡齋燕集詩に、兵衞森畫戟、燕寢凝清香とあつて、蘇州官蹟志に「韋、詩を嗜む、吳中目して詩仙となす。蓋し、その畫戟清香の辭、最も膾炙となす。府治の後に凝香堂あり、以て韋應物・王仲舒・白居易・劉禹錫・范仲淹、五賢の像を内に奉ず」とある。

【題義】この詩は、錢塘に於て、馬太守が吳中に赴任するのを送つたので、多分、作者が吳越に游んで居た間の作であらう。使君は、太守の尊稱で、前に數ば見えて居る。

【詩意】樟亭に於ける餞別の宴、方に散せし時、君は、畫幡車に乘つて、はるかなる旅路に上られる。今しも、春の末、雉は新に開いた畑の麥の下に鳴き、鶯は、むかしの宮苑の花に啼いて居る。途すがら、山を望むが爲に、郡廳の高閣に上ることもあるべく、水に傍うて、田家に至ることもあらう。吳中は、むかし、韋應物が畫戟清香の名句を留め、その爲に、凝香堂の設けさへあるが、君の才、決して其下に在らず、前人をして、獨り之を誇らしめぬであらう。

與劉將軍・杜文學晚登西城

劉將軍・杜文學と晚に西城に登る

(一)木落悲南國。城高見(二)北辰。　木落ちて南國を悲み、城高くして北辰を見る。

飄零猶有客。經濟豈無人。　飄零、なほ客あり、經濟、豈に人なからむや。

鳥過風生翼。龍歸雨在鱗。　鳥過ぎて風翼に生じ、龍歸つて雨鱗に在り。

相期俱努力。天地正(三)烽塵。　相期して俱に努力、天地正に烽塵。

【字解】(一) 木落　木の葉の落ちること。(二) 北辰　北斗。(三) 烽塵　烽火と煙塵、戰亂甚しきを云ふ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、西城は、蘇州府城の西門の樓であらう。劉杜二人は、名字閱歷、ともに不詳。

【詩意】落葉の節に當つて、南國の景色、物さびしく、城樓高くして、北斗が見え、その下は、卽ち帝都の在るところである。われ等は、皆飄零の客であるが、胸中には、經濟の大策を貯へて居る。鳥が飛び過ぐると、羽翼に風を生じ、まことに得意の有樣、龍は、折角天に上りかけたが、どうした事か、歸つて來て、鱗には雨を殘して居るが、これでは如何にも仕方がなく、賢愚地を易へたといふ樣な安排。ここに諸君と約し、烽火煙塵、天地に滿ちて、世は刈菰と亂れし折から、ともに努力して、天晴、偉業を建てたいものである。

【餘論】この詩は、一句として隙の擊つべきものなく、通篇、超脫高妙、まさしく、完璧の作である。起首を對句にした處も面白く、後聯は、謂はゆる賦にして比なるものである。

和周山人見寄寒夜客懷之作

周山人の寒夜客懷の作を寄せらるるに和す

亂世難爲客。流年易作翁。　亂世、客と爲り難く、流年、翁と作り易し。

百憂尋歲暮。孤夢怯山空。　百憂、歲暮を尋ね、孤夢山の空しきを怯る。

門掩雲峰裏。燈明雪竹中。　門は掩ふ雲峰の裏、燈は明かに雪竹の中。

無因乘夜訪。相慰一尊同。　夜に乘じて訪ひ、相慰めて、一尊を同じうするに因なし。

【題義】この詩は、周山人が寒夜客懷といふ詩を寄せたから、これに和して答へたのである。山人は、前にも見えたが、名字不詳。

【詩意】この亂世に當つて、異鄉に客となつて居るのも、容易な事ではなく、流年の爲に、用捨なく老人になつて仕舞ふ。さまざまの心配は、歲の暮に際して、一齊に尋ね來り、獨り寢の夢は、山空しくして人なきを恐れる位。雲に聳ゆる羣峰の底に在つて、門を閉ぢ、雪を帶びた竹の中に、燈火ひと

り明かである。君の事を思はぬでもないが、夜に乗じて往いて訪ひ、相慰めて、一尊を同じうすることは、どうも、序がなくて、一寸出來ない。

【餘論】雲峰、雪竹の十字は、清迴鮮明である。

哭臨川公

臨川公を哭す

身用已時危。衰殘況病欺。　身用ひられて、すでに時危く、衰殘、況んや病に欺かるるをや。

竟成黃犬歎。莫遂白鷗期。　竟に黃犬の歎を成し、白鷗の期を遂ぐるなし。

東閣圖書散。西園草露垂。　東閣、圖書散じ、西園、草露垂る。

無因奠江上。應負十年知。　江上に奠するに因なく、應に十年の知に負くなるべし。

【字解】【一】病欺　病に壓倒せられる。【二】黃犬歎　史記李斯列傳に「斯、その中子と倶に執へらる、顧みて謂つて曰く、吾、若と復た黃犬を牽いて、上蔡東門を出で、狡兎を逐はむと欲するも、豈に得べけむや」とある。【三】白鷗期　隱遁して江上に白鷗と共に居る。【四】奠江上　奠は物を供へて祭をすること。

【題義】臨川公は饒介、この人は張士誠に屬して大官に居り、青邱等も、これに禮遇されたが、士誠の敗後、刑せられたから、これを哭する爲に作つたのである。

【詩意】公が任用されたのは、危急の時であつて、隨分骨を折つて働いたが、老年に成つた上に、病に壓倒せられ、まことに、お氣の毒な始末。その上、刑に處せられ、むなしく、李斯の如く黃犬の歎をなし、功成り身退いて、白鷗を友とするといふ兼ねての希望を遂げることが出來なかつた。公の歿後、東閣に儲へてあつた圖書は、散り散りに成つて仕舞ひ、西園には、草の露が垂れて、物さびしき有樣。ここに、江上に出かけて、心ばかりの御祭をすることさへ出來ず、十年の知遇に負くのは、まことに、殘念なことである。

一窗秋影

一窗の秋影

修竹與疏桐。秋陰接桂叢。　修竹と疏桐と、秋陰、桂叢に接す。

竝生金井側。同映綺疏中。　竝に金井の側に生じて、同じく、綺疏の中に映ず。

隱匿纔籠霧。交橫忽颭風。　隱匿、わづかに霧を籠め、交橫、忽ち風に颭く。

不須懷故館。月落併成空。　須ひず、故館を懷ふを、月落つれば併せて空と成る。

【字解】【一】秋陰　秋の曇り。【二】金井　前に數ば見ゆ、銅にて包みたる井欄。【三】綺疏　きれいな窓。【四】故館　舊宅に同じ。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】丈高き竹と、葉の疏になつた桐とが、秋の曇りを帶びて、桂樹の叢を成せるに接近して居る。これ等は、すべて、金井の側に生じて居るので、又同じく、綺麗な窓に其影を映じて居る。その隱れて見えなくなつたのは、霧に籠められたからであつて、枝條の入り交はつて居るのは、風に動かされたからである。この一窓の秋影に對して、舊宅を思ひ出しさうになつたが、やがて、月が落ちると、すべての影は無くなつて仕舞つて、あとには何も殘つて居らぬ。

早春侍皇太子游東苑池上呈青坊諸公

早春、皇太子の東苑池上に游ぶに侍し、青坊の諸公に呈す

銅(一)輦出紆(二)徐。春(三)宮晝講餘。
銅輦、出でて紆徐、春宮、晝講の餘。

戟(四)煩郎將衞。簡(五)授大夫書。
戟は郎將を煩はして衞り、簡は大夫に授けて書せしむ。

草長園鳴鹿。氷開沼躍魚。
草長じて園に鹿を鳴き、氷開いて沼に魚を躍らしむ。

從游伴商(六)皓。忝(七)竊愧何如。
從游、商皓に伴ふ、忝竊、愧づ何如。

【字解】【一】銅輦　陸機の詩に「撫劍遵銅輦」とあつて、その注に「銅輦は、太子の車飾」とある。【二】紆徐　緩ゆくり靜かなること。【三】春宮　竹書紀年に「周の穆王、春宮に居る」とある。易で云ふと、太子は震の卦、東方に當り、春で、青色なるより云ふ。【四】戟煩郎將衞　通典に「凡そ、郎官は、皆更直して戟を執り、諸殿門を宿衞するを主る、侍衞の故を以て、通じて、これを侍郎といふ」とある。郎將は、もと軍人で、侍郎たるより云ふ。【五】簡授大夫書　謝靈運の雪賦に「歳、將に暮れむとし、時、すでに昏く、寒風積んで、愁雲繁し。梁王悦ばず、兎園に游ぶ。俄にして、微霰零ち、密雪下る。王、乃ち簡を司馬大夫に授けて曰く、寡人の爲に之を賦せよ」とある。簡は紙。【六】商皓　商山の四皓。【七】忝竊　忝くも恩遇を竊む。

【題義】この詩は、春の初、皇太子に陪して、宮城中の東苑なる池上に游び、賦して、東宮近侍の諸公に呈したので、無論、青邱が南京に居た頃の作である。青坊は、東宮の詰所。

【詩意】太子の銅輦は、そろそろと出て行かれるが、それは春宮に於て、晝の講書が濟んだ後であつた。郎將は、戟を執つて宿衞し、大夫は、紙を賜はつて、その作を寫すことになつて居る。頃しも春の初、草は長じて、園内に鹿が鳴き、氷は解けて、池中には魚が躍つて居る。予が太子に陪游し、商山の四皓の如き師傅の人人と同伴するのは、忝くも恩遇を竊んだ譯で、顧みると、まことに、慙愧に堪へぬ次第である。

題谿山小隱

谿山小隱に題す

何處谿山隱。衡(一)門對野橋。
何處の谿山の隱か、衡門、野橋に對す。

晩風攜鶴子(二)。春雨種魚苗(三)。　晩風、鶴子を攜へ、春雨、魚苗を種う。

小徑斜通竹。疏籬曲護蕉。　小徑、斜に竹に通じ、疏籬、曲つて蕉を護す。

人生閒自足。不問楚辭招(四)。　人生、閒、自ら足る、楚辭の招くを問はず。

【字解】【一】衡門　かや葺の門。【二】鶴子　鶴の雛。【三】魚苗　魚の新に孵化せしもの、避暑錄話に「浙東の人、率ね陂塘を以て魚を養ひ、春、魚初めて生ずる時に乘じ、種を江外に取る。長さ寸に過ぎず、木桶を以て水中に置き、草を細切して食となし、蠶に食ますが如し、これを魚苗といふ」とある。【四】楚辭招　楚辭に招隱士の一篇あるより云ふ、杜甫の詩に要レ歸歸未レ得、不レ用楚辭招とある。

【題義】この詩は、谿山小隱の圖に題したのである。

【詩意】ここは、何の處の谿山か知らぬが、衡門は野橋に對して、現に隱棲の人が居る。晩風爽かなる折から、鶴の雛を攜へて逍遙し、春雨そぼふる時、魚の子の世話をして居る。細徑は、斜に竹間に通じ、疏籬は、曲つて芭蕉を保護して居る。かういふ處に居れば、人生、閒、自ら足るべく、招隱士の篇中に見ゆる如く、何も態態山中に招いて貰ふにも及ばない。

城西客舍、送周著作砥

城西の客舍、周著作砥を送る

客中寒食(一)後。惆悵送君違。　客中、寒食の後、惆悵、君を送つて違ふ。

花隱歸城旆(二)。風吹渡水衣。　花は隱す、城に歸るの旆、風は吹く、水を渡るの衣。

夜窓炊黍散。春苑鬪茶(三)稀。　夜窓、黍を炊いで散じ、春苑、茶を鬪はすこと稀なり。

誰念西齋雨。相思獨掩扉。　誰か念はむ、西齋の雨、相思、ひとり扉を掩ふを。

【字解】【一】寒食　冬至より一百五日、この日、火食を禁ずるのは、晉の介子推が焚死せし日たるを以て、後人、これを悲んで、さうするのだといふ傳說がある。鄴中記に「冷食三日、乾粥を作つて之を食ふ、中國、以て寒食となす」とある。【二】歸城旆　旆は旗。【三】鬪茶　茶錄に「建安、茶を鬪はす、水痕先づ沒するものを以て負となし、倹つこと久しきものを勝となす、故に勝負を較ぶるの說に曰く、相去る一水兩水」とあり、范仲淹の鬪茶歌に鬪二茶味一兮輕二醍醐一、鬪二茶香一兮薄二蘭芷一とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】客中寒食に遇うて、たださへ淋しき折から、君を送る爲に、折角來たところが、間に合はなかつたのは、いかにも殘念で、惆悵の思を禁ずることが出來ない。見れば、君を送りに來た連中は、すでに城中に引き返し、その押し立てて來た旗は、花に隱れ、そして、君は水を渡らむとして、風が其衣を飄して居る。おもへば、夜の窓下に、君と共に黍を炊いだこともあつたが、雅會すでに散じて、再びすべからず、これより、春苑の中に於て、茶を鬪はす樣な風流な遊びをすることも稀であらう。今しも、西齋に雨瀟瀟たる折から、ひとり扉を閉ぢて、相思に堪へざるは、まことに、豫期せぬ

ことである。

兵後出郭

俯仰興亡異。青山落照中。
民歸鄰樹在。兵去壘煙空。
城角猶悲奏。江帆始遠通。
昔年荊棘露。又滿闔閭宮。

兵後、郭を出づ

俯仰、興亡異なり、青山落照の中。
民歸つて鄰樹在り、兵去つて壘煙空し。
城角、なほ悲しく奏し、江帆、はじめて遠く通す。
昔年荊棘の露、又滿つ闔閭宮。

【字解】【一】闔閭宮　闔閭は吳王の名、これは、姑蘇臺を指したのである。

【題義】この詩は、兵亂の後、城を出でて郊外を逍遙した時に作つたのである。

【詩意】地に俯し、天を仰げば、興亡、事、自ら異にして、亂後の光景は、傷心慘目。一帶の青山は、夕陽の中に隱見して、さながら、愁を含んで居る樣に見える。人民は、やッと歸つて來たが、鄰家の木だけ殘つて居て、その他の家屋は、すべて燒かれて仕舞ひ、兵隊は、すッかり引き上げ、殘壘寂寞として、煙だに上らない。城上の角聲は、なほ悲しげに奏し、江上の估帆は、やッと、遠方に往復するやうに成つた。蘇州は、從來幾度も戰亂を經た處で、むかし荊棘に露を置いたと同じ樣に、荒涼たる景色を、又ぞろ闔閭の宮址に見るのは、まことに感慨に堪へぬことである。

【餘論】破題の二句は、頗る面白く、且つ力あるを覺えるが、その他の之に副はざるは、まことに遺憾である。

謝賜衣

臚呼遙捧賜。服拜望蓬萊。
香帶爐煙下。光迎扇月開。
奇紋天女織。新樣內工裁。
被澤徒深厚。慙無奪錦才。

賜衣を謝す

臚呼、遙に賜を捧げ、服拜して蓬萊を望む。
香は爐煙を帶びて下り、光は扇月を迎へて開く。
奇紋、天女織り、新樣、內工裁す。
澤を被る、徒に深厚、慙づらくは、奪錦の才なきを。

【字解】【一】臚呼　宮中に於て、次から次へと傳呼すること、唐書儀衞志に「朝日、御史大夫、贊官を領し、殿の西廡に至り、從官朱衣傳呼し、百官を促して班に就かしむ」とある。【二】服拜　賜はつた其衣を著て拜を爲す。【三】蓬萊　唐宮の名、天子の正殿。【四】帶爐煙下　賈至の詩に衣冠身惹御爐香とある。【五】扇月開　庾信の詩に歌聲上扇月とある。扇は羽團扇で、天子の後より差し翳すもの。【六】內工　宮中に抱へてある仕立屋。周禮に「典絲は絲の入るを掌つて、その物を辨じ、絲を外內工に分つ」とあつて、その注に「外工は外嬪婦なり、內工は女御なり」とあるが、後世は、さうではなく、別に職人を雇ひ入れてあつたものと見

える。【七】奪錦才　唐書宋之問傳に「武后、洛南の龍門に游び、從臣に詔して詩を賦せしむ。左史東方虬、詩先づ成る。后、錦袍を賜ふ。之問、しばらくして獻ず。后、これを覽て歎賞し、更に袍を奪うて賜ふ」とあり、杜甫の詩に詩成奪錦袍とある。

【題義】この詩は、天子より衣を賜はつたことを謝して作つたのである。

【詩意】宮中に傳呼して遙に賜を捧げて來り、これを頂戴した後は、直に著下ろし、天子の正殿の方に向つて拜を爲した。その衣の餘香は、御爐の煙を帶びて、焚きしめたものであるし、その光は、羽闔扇に上る月を迎へて、一しほ、きらびやかに見える。その珍らしい紋は、天女の織つたのであらうし、新式の仕立て方は、御抱への職人が裁つて縫つたのである。聖主の恩澤を被ること、かくの如く深厚でありながら、わが身、太だ譾劣にして、かの宋之問の如く、人の錦袍まで奪ふ樣な天晴の美才なきは、まことに、慙愧に堪へぬ次第である。

西清對雨

西清、雨に對す

楚臺雲起遠。漢苑雨來微。　楚臺、雲起ること遠く、漢苑、雨來ること微なり。

曉溼宮城旆。寒沾陛楯衣。　曉に宮城の旆を溼し、寒く陛楯の衣を沾す。

溝中隨葉墮。爐畔帶煙飛。　溝中、葉に隨つて墮ち、爐畔、煙を帶びて飛ぶ。

坐詠西清暇。君王召對稀。　坐詠、西清の暇、君王、召對稀なり。

【字解】【一】楚臺　楚は大國の義に取り、兼れて楚の襄王巫山雲雨の事實に關帶して云ふのであらう。【二】漢苑　漢は、歷代中最も盛な治世なるより云ふ。【三】陛楯衣　說苑に「執素綺楯、堂楯を肆戰にし、風雨に從つて弊るるも、士、かつて以て衣に緣するを得ず」とある。楯は欄楯、卽ち手すり、陛楯は殿階に接近して居る手すりで、衣は、そこに懸けてある幕。

【題義】上林賦に靑龍蚴蟉於東廂、象輿婉僤於西淸とあつて、その注に「西淸は、西廂中、淸淨の處なり」とある。すると、西淸は、宮中の控へ所で、西の溜まりとでも云つた樣な處と見える。この詩は、その西淸に於て、雨の降るのを眺めて作つたのである。

【詩意】遠くの高臺の上に雲が起ると、苑中に微雨が瀟瀟として降つて來た。その雨は、曉早く、宮城の旗を溼し、寒げに殿階の手すりの幕をも濡らすばかり。落葉と共に宮濠の中に落ち、香煙を帶びて御爐の邊に飛んで來る。身は、西淸の控へ所に居て、この景色を眺めながら坐詠し、極めて暇であつて、こんな時に、君王が召し出して質問でもして下さらばと思ふが、生憎、さういふ事の無いのは遺憾である。

夜宿太廟齋宮

夜、太廟の齋宮に宿す

鳥散廟壖空。淸香肅閟宮。　鳥散じて廟壖空しく、淸香、閟宮肅たり。

太常齋禁密。列祖享儀崇。　太常、齋禁密、列祖、享儀崇し。
井叩銅瓶月。塀鳴玉珮風。　井は叩く銅瓶の月、塀は鳴る玉珮の風。
聽鐘候車駕。庭燎已熣熣。　鐘を聽いて車駕を候す、庭燎、すでに熣熣。

【字解】【一】廟壖　壖は犍に同じ、牆外の短垣をいふ、漢書晁錯傳に「內史府は、太上廟壖中門の東に居る、出づるに便ならず、錯、乃ち門を穿つて南に出で、廟壖を穿つ」とある。【二】閟宮　閟は深く鎖す、おたまや、靈廟。詩經に閟宮有侐、實實枚枚とある。【三】太常　漢書百官公卿表に「奉常は、秦の官、宗廟の禮儀を掌る。景帝の中六年、更めて太常と名づく」とある。【四】齋禁　物いみをするに就いての禁制、後漢書周澤傳に「かつて、病に齋宮に臥す。その妻、澤の老病を哀み、闚うて苦むところを問ふ。澤、大に怒り、妻が齋禁を干犯せしを以て、收めて詔獄に送る。時人、これが語を爲して曰く、生世不諧、作太常妻、一歲三百六十日、三百五十九日齋」とある。【五】塀鳴　塀は敷瓦。【六】庭燎　庭の篝火。【七】熣熣　光明の貌。

【題義】太廟は、帝室の御先祖を祀つた廟所。齋宮は、祭儀に列する職員の物忌をする部屋。作者も、ある時、太廟の祭祀に關係して、ここに宿せしに因つて作つたのである。

【詩意】樹上の棲鴉は、驚いて飛び起ち、廟垣のあたり、人もなく、物とはなしに、一種の淸香が漾うて、おたまやの中は、森嚴の氣に滿ちて居る。太常の役人は、物忌の禁制がやかましく、御先祖代代祭享の儀式は、まことに尊げに見える。銅製の釣瓶を以て月下に井を汲み、玉珮は、敷瓦に鳴り響いて、風を起すばかり。その內に、鐘が鳴つたから、主上著御の御待ち受けをする爲に、庭上に於ては、篝火が燃え上つて、熣熣と輝いて居る。

送秦主客遷侍儀使

秦主客の侍儀使に遷るを送る

蕃客來曾識。衣冠上國風。　蕃客、來つて曾て識る、衣冠上國の風。
承恩趨北闕。罷直出南宮。　恩を承けて北闕に趨り、直を罷めて南宮を出づ。
導駕爐煙裏。催班漏點中。　駕を導く爐煙の裏、班を催す漏點の中。
時淸多奏頌。還向閤門通。　時淸くして多く頌を奏す、還た閤門に向つて通ず。

【字解】【一】蕃客　外國の使者。【二】北闕　宮城を云ふ。【三】南宮　宮城の南に在つて諸官署の在るところ。【四】催班　拜謁の行列を促して案內する。【五】漏點　漏聲に同じ、漏は水時計。【六】閤門　正殿の側の小門。

【題義】唐書百官志に「主客郎中・員外、各一人、諸蕃朝見の事を掌る」とあり、鄭谷の寄同年禮部趙郎中の詩に小儀澄瀞轉中儀とあつて、金榧の按に「唐人、禮部郎中を謂うて中儀となし、員外郎を小儀となし、亦た少儀といふ」とある。この詩は、秦某が外務省の役員から、式部官に轉任したのを送つたのである。

【詩意】外國の使者は、かつて來朝した時、君が衣冠堂堂、都の手ぶりをして居たのを見分けた位。

頃ろ、聖恩を承けて宮中直參となり、最早、南宮に宿直することは無い樣に成つた。今後は、爐煙の中に出御の案内をなし、水時計の音につれて、朝參の班列を促き立てるのが本職である。今しも、目出たき大御世で、頌を上るものも多い處から、時時、正殿の傍門から直に參殿することもあつて、何につけても、結構な身分である。

春日退直、呈禁署諸公　春日退直、禁署の諸公に呈す

待詔直東華。歸休每日斜。　詔を待つて東華に直し、歸休、每に日斜なり。
職連詞客苑。俸入酒胡家。　職は詞客の苑に連り、俸は酒胡の家に入る。
簷網長縈絮。庭磚欲過花。　簷網、長く絮を縈り、庭磚、花を過ぎむと欲す。
知君未出院。應草侍中麻。　知る、君が未だ院を出でざるを、應に草すべし侍中の麻。

【字解】【一】待詔　まだ本官に任ぜずして候補となつて居ること。【二】東華　門の名。【三】詞客苑　翰林を云ふ。【四】酒胡家　辛延年の詩に、「笑謂酒家胡」とあつて、胡姫の居る酒樓。【五】庭磚　磚は敷瓦。【六】過花　花影が過ぎて行く。【七】未出院　院は御殿。【八】侍中麻　麻は詔敕、侍中が之を起草するのである。

【題義】春日、詰所より退出し、仍つて、宮中奉仕の諸君に呈したのである。

【詩意】予は、待詔として、東華門に近き控所に出仕し、その退出するのは、毎毎日の斜なる頃である。わが職は、翰林に接近して居て、俸給は、胡姫の居る酒家に入れ上げて仕舞ふ位。檐の蜘蛛の網には、柳の花が引ッかかり、庭の敷瓦の上には、花影が移つて行き、春の夕ぐれは、風情があつて、游賞に適して居る。それだのに、君がまだ御殿から退出せぬのは、侍中として詔敕を起草して居る爲でもあらうか。

送張司勳赴寶慶同知　張司勳の寶慶同知に赴くを送る

乍出司勳幕。還乘別駕車。　乍ち司勳の幕を出で、還た乘ず別駕の車。
按圖猶漢地。輸布盡蠻家。　圖を按ずれば、猶は漢地、布を輸するは、盡く蠻家。
山熱蛇懸樹。江晴鶴浴沙。　山は熱して、蛇、樹に懸り、江は晴れて、鶴、沙に浴す。
郡樓回首處。北斗近京華。　郡樓、首を回らす處、北斗、京華に近し。

【字解】【一】司勳　題義の條に注して置く。【二】別駕　刺史の次役、州を巡察する時に隨行する。唐六典に「後漢、州に別駕を置く、歷代皆之あり」とあつて、同知は、恰も之に相當するものである。【三】輸布　元史泰定帝紀に「致和元年、雲南安隆寨土官岑世宗、その兄と相攻む、その民三萬二千戶を籍して來附し、歲ごとに布三千匹を輸す」とあつて、南方からは、主として布を上納

したものと見える。【三】蛇懸 柳宗元の詩に「陸森野葛交蔽日、懸蛇結虺如蒲萄」とある。

【題義】司勳は、周禮に「夏官司勳、六卿賞地の法を掌り、以て其功を等す、その功あるものは、銘して王の太常に書し、大蒸に祭り、司勳、これに詔す」とあつて、今でいふと賞勳局總裁。寶慶は府名、一統志に「湖南に屬す」とある。同知は、太守の次役、この詩は、張某が司勳より寶慶の同知に轉任するのを送つたのである。

【詩意】君は、今、司勳の幕より出で、別駕の車に乘つて、遠く湖南に赴任される。地圖を按ずれば、そこも、矢張、帝國の版圖であるが、布を上納するのは蠻族のみである。山は熱氣を含みて、蛇が木に懸り、晴れた日には、鶴が江邊の沙に浴して居る。その風土民情、中原とは餘程異なつて見える。郡樓に登つて首を回らして望めば、北斗のあたりが卽ち帝都で、相去ること萬里、まことに、御苦勞ではあるが、精精、その職を盡して貰ひたい。

【餘論】山熱、江晴の十字は、南荒毒熱の境を寫し出して、まことに奇儁の極である。

寓天界寺

天界寺に寓す

雨過帝城頭。香凝佛界幽。　雨は過ぐ帝城の頭、香は凝つて佛界幽なり。

果園春乳雀。花殿午鳴鳩。　果園、春、雀を乳し、花殿、午、鳩を鳴かしむ。

萬履隨鐘集。千燈入鏡流。　萬履、鐘に隨つて集まり、千燈、鏡に入つて流る。

禪居容旅跡。不覺久淹留。　禪居、旅跡を容る、覺えず久しく淹留。

【字解】【一】乳雀 雀が其雛を養ふ。【二】千燈 法苑珠林に「明月寶珠、及び摩尼珠等、用つて塔燈と爲す」とある。

【題義】前に略傳中に述べた通り、青邱は、元史編纂の爲め、召されて南京に入り、史局が天界寺に開かれた爲に、同僚と共に、寺中に假寓することに成つたので、これは卽ち其時の作である。

【詩意】雨は宮城の邊を過ぎて、一天塵を洗ひ、ここ天界寺中には、妙香自ら凝つて、佛界は殊に靜幽である。果園に於ては、春、雀が雛に哺み、花殿の近くでは、亭午の頃、鳩が鳴いて居る。鐘が一たび響くと、參詣の道俗、一齊に押し寄せて、萬履、ここに集まり、本尊の前に燈明を幾つも點すると、鏡に映つて、さながら流れる樣に見える。もとより禪を學ぶものの居る處であるが、羈旅の客跡を容るるを許された故に、ここに淹留して、大分久しく成つた。

送前進士夏尚之歸宜春

前進士夏尚之の宜春に歸るを送る

淒涼庾開府。老去復如何。　淒涼たり庾開府、老去、復た如何。

故國歸鴻少。新朝振鷺多。　故國、歸鴻少く、新朝、振鷺多し。

菊荒應自歎。麥秀竟誰歌。　菊荒れて、應に自ら歎ずべく、麥秀でて、竟に誰か歌ふ。

相送堪愁思。蕭蕭楚水波。　相送つて愁思に堪ふ、蕭蕭たり楚水の波。

【字解】【一】庾開府　周書庾信傳に「信、字は子山、南陽新野の人、梁に仕へて、爵、武康縣侯を襲ぐ。梁亡びて魏に仕へ、弘農守となり、驃騎大將軍開府儀同三司に遷り、爵、義城縣侯に進む。哀江南賦を作る」とある。【二】振鷺　詩經に振鷺于飛、于彼西雝」とあつて、注に「二王の後、來つて祭を助くるの詩たり」とある。ここでは官職ある人の行列を爲すを云ふ。【三】菊荒　陶潜の歸去來辭に三徑就荒、松菊猶存とあるを翻用す。【四】麥秀　尚書大傳に「微子、周に朝せむとし、殷の故墟を過ぎて、麥秀の歌を作る」とある。【五】楚水　揚子江を云ふ。

【題義】前進士は、前朝、卽ち元の進士、夏尙之は、名字閱歷ともに不詳であるが、詩で見ると、心を前朝に存し、新に明の興つたことを喜ばぬものらしい。宜春は縣名、江西袁州府に屬して居る。この詩は、前朝進士夏尙之の宜春に歸鄕するを送つたのである。

【詩意】君の境涯の淒涼なることは、古しへの庾信の如く、年を取つては、如何であるか。今、故國には、歸る雁だに少く、新朝には、就職者が澤山ある。三徑の菊さへ荒れたるに至つては、自ら歎息を禁せざるべく、前朝宮闕の址に麥の秀でて漸漸たるを見れば、歌ふことさへ懶いであらう。ここに、君の歸國を送れば、愁思自ら生じ、大江の波蕭蕭として、愈よ物さびしげに見える。

【餘論】後聯は、有りふれた典故を翻用した處が面白いので、熟事生用とは、卽ち此事である。

早出鍾山門未開立候久之
早く鍾山門を出でむとして未だ開かず、立候、これに久しうす

關吏收魚鑰。趨朝阻向晨。　關吏、魚鑰を收め、朝に趨らむとし、阻てられて晨に向ふ。

忘鳴雞睡熟。倦立馬嘶頻。　鳴くを忘れて、雞、睡熟し、倦立、馬、嘶くこと頻りなり。

柝靜霜飛堞。鐘來月墮津。　柝は靜にして、霜、堞に飛び、鐘來つて、月、津に墮つ。

可憐同候者。多是未閒人。　憐むべし、同候の者、多くは是れ未だ閒ならざるの人。

【字解】【一】關吏　門番。【二】魚鑰　門の錠、芝田錄に「門鑰、必ず魚を以てす、その目を瞑せずして、夜を守るの義に取る」とある。【三】趨朝　參朝する。【四】阻　妨害される。【五】柝靜　柝は拍子木。【六】飛堞　堞は城垣。【七】墮津　津は舟つきの處。【八】同候者　一處に開門を待つて居る人人。

【題義】この詩は、朝早く、鍾山門から出やうとした處が、門が明かぬ爲に、止むを得ず、しばらく立つて待つて居たといふことを作つたのである。

【詩意】門番は、錠を卸した儘で、明けて呉れぬから、參朝せむとした處を妨げられて、次第に、時

が移つて、朝まだきとなつて仕舞つた。これは、雞が朝鳴くことを忘れて、睡、なほ熟して居るからであらうが、ぢつと立つて、飽きる程まで待つて居ると、馬が頻りに嘶いた。拍子木の響は靜にして、霜は城垣の上に飛び、鐘が鳴ると、殘月は、舟つきの埠頭に落ちた。ここに、氣の毒なのは、われと一處に城門の開くのを待つて居るもので、多くは是れ忙がしい人達と見えた。

雪夜宿翰林院呈危宋二院長

雪夜、翰林院に宿し、危・宋二院長に呈す

偶伴王摩詰。寒宵宿禁林。　偶ま王摩詰に伴ひ、寒宵、禁林に宿す。

院鈴風外靜。宮漏雪中沈。　院鈴、風外に靜に、宮漏、雪中に沈む。

絳蠟銷吟燭。靑綾擁賜衾。　絳蠟、吟燭を銷し、靑綾、賜衾を擁す。

明朝陪賀瑞。銀闕曉光深。　明朝、陪して瑞を賀す、銀闕、曉光深し。

【字解】【一】王摩詰　王維、字は摩詰、同崔員外秋宵寓直の詩がある。【二】禁林　翰林院を云ふ。【三】院鈴　戎幕閒話に「翰林院に懸鈴あり、以て中夜の特急に備ふ。文書の出入には、索を引いて、以て傳呼に代ふ」とあり、韓偓の詩に、坐久忽聞鈴索動玉堂西畔響丁東とある。【四】絳蠟　赤色の蠟燭。【五】靑綾　靑色の綾ぎぬで造つた衾被。翰林院に備へ付けてあつて、宿直する者の使用に供する。【六】賀瑞　謝惠連の雪賦に盈尺則呈瑞於豐年とある。【七】銀闕　雪の爲に銀色に見える宮闕。

【題義】この詩は、雪夜、翰林院に當直し、危・宋二人の院長に呈したので、危は危素、宋は宋濂であらう。

【詩意】偶ま、古しへの王維に比すべき二院長に伴うて、寒夜、翰林院に當直した。例の懸鈴は、引き動かすことなくして、風外に靜かであるし、漏刻の音は、雪中に沈んで聞こえる。やがて、赤色の蠟燭も、燃え切つて、夜も大分更けたから、靑綾の衾をかついで、眠りに就くことにした。明朝、二君に陪して、豐年の瑞を賀する爲に參朝すると、宮闕、銀色をなし、曉光が一しほ深く見えるであらう。

【餘論】前聯十字は、巧警にして、中晩の遺と稱すべきものである。

自天界寺移寓鍾山里

天界寺より寓を鍾山里に移す

移寓鍾山里。開軒見翠微。　寓を移す鍾山里、軒を開いて翠微を見る。

寺僧違乍遠。鄰父識猶稀。　寺僧、違うて乍ち遠く、鄰父識ること猶ほ稀なり。

愛讀明開牖。防偸固設扉。　讀を愛して明かに牖を開き、偸を防いで固く扉を設く。

誰言新舍好。畢竟未如歸。　誰か言ふ新舍好しと、畢竟、未だ歸るに如かず。

【字解】【一】鍾山里　鍾山の麓に在る。【二】翠微　山色を云ふ。爾雅に「山、未だ頂上に及ばず、翠微といふ」とあつて、その疏に「山、未だ頂上に及ばず、旁に在り、山氣青縹色、故に翠微といふなり」とあり、又愼夏漫筆に爾雅釋言を引いて「凡そ、山、遠く之を望めば翠、これに近づけば翠漸く微」と、あり、岳飛の詩に經年塵土滿征衣、特特尋芳上翠微とある。又轉じて山の中腹をいふこともある。【三】逢乍違　違は、逢へなくなること。【四】識猶稀　顏を見覺えたものは、まだ少い。【五】防偸　竊盜を防ぐ。晉書王獻之傳に「夜、齋中に臥す、偸人あり、その室に入り、物を盜んで、すべて盡く。獻之、徐に曰く、偸兒、靑氈は我が家の舊物、特に是を置くべしと、羣偸皆走る」とある。【六】新舍　新宅に同じ。

【題義】この詩は、青邱が天界寺の假寓から鍾山の里に移つた時に作つたのである。

【詩意】今回、寓を鍾山里に移したが、軒窓を開けば、山色が見えるので、まことに住み心地が善い。天界寺の坊さん達には、逢ふことも出來ず、これから、疏遠になるであらうし、鄰家の主人などは、面知りになつたものは、まだ稀である。書物を讀むことが好きだから、あかるく窓を開き、竊盜を防ぐ爲に、嚴重に扉を設けた。人は、この新宅が善いといふかも知れぬが、結局は、故鄕に歸つた方が、どれ程善いか分からぬ。

夜逢故郡賀冬至使胡浦二博士同宿

夜、故郡の賀冬至使胡・浦二博士に逢ひて、同宿す

會宿本無期。忻逢兩舊知。　會宿、本と期なし、逢ふを忻ぶ兩舊知。
問年驚別久。候曉畏朝遲。　年を問うて、別の久しきに驚き、曉を候して、朝の遲きを畏る。
寒澁高城漏。陽廻上苑枝。　寒は澁る高城の漏、陽は廻る上苑の枝。
明朝使事畢。歸騎又天涯。　明朝、使事畢らば、歸騎又天涯。

【字解】【一】會宿　一處に宿する。【二】朝遲　參朝が遲くなる。【三】陽廻　陽氣が歸つて來る、冬至は一陽來復の節なるが故に云ふ。【四】上苑　宮中の御苑。

【題義】故郡は卽ち吳郡、蘇州を云ふ。この詩は、故鄕の蘇州から、胡・浦二博士が賀冬至使として上京するに逢ひ、これと同宿した時に作つたのである。

【詩意】一處に會宿するのは、思ひがけぬことで、ここに舊知たる二博士に逢つたのは、まことに嬉しい。もう何年になるかを問うて、別の久しきに驚き、夜の明けるのを待つて居るのは、參朝の遲くなることを心配して居るからである。高城の漏聲は、寒氣の爲に澁つて居るが、上苑の樹木には、一陽來復の景色が、ありありと見えるであらう。かくて、明朝、使の役目が濟むと、歸騎再び天涯に向ひ、遺憾ながら御別となるのである。

至日夜坐客館

至日、夜、客館に坐す

(一)久客漸忘家。今宵忽感嗟。
旅蹤猶泊(二)梗。陽氣又吹(三)葭。
(四)巷屋門封雪。鄉關路遶沙。
閨中想逢(五)節。也解憶京華。

久客、漸く家を忘る、今宵、忽ち感嗟。
旅蹤、猶ほ梗を泊し、陽氣、又葭を吹く。
巷屋、門、雪に封せられ、鄉關、路、沙を遶る。
閨中、節に逢ふを想ふ、也た京華を憶ふを解す。

【字解】【一】久客　久しく異鄉に居る客。【二】泊梗　梗は小枝、水上に浮んで、一寸何かに引ッかかつて居る。【三】吹葭　後漢書の律曆志に「候氣の法、室を爲る三重、戸閉ぢて、塗釁必ず周密、布、室中に緹縵し、木を以て案と爲し、每律各一、內庳外高、その方位に從ひ、律を其上に加へ、葭灰の灰を以て其內端を抑へ、律を案じて之を候し、氣至るものは灰散ず」とあり、杜甫の詩に刺繡五紋添弱線、吹葭六琯動飛灰」とある。【四】巷屋　路次の中に在る家。【五】逢節　冬至に遇ふ。

【題義】この詩は、冬至の夜、客館に居て作つたので、前詩を作つた其翌日の事と見える。

【詩意】身は久客となつて、次第に家を忘れむとして居たが、今夜、忽然として感嘆杏嗟を禁せられなかつた。わが客蹤は、丁度、小枝が水に浮んで、何かに引ッかかつた樣であるし、今日しも、冬至で、陽氣は管中の葭灰を吹き飛ばした。路次の奧なる我が家は、門まで雪に封せられ、故鄉に通ずる路は、江邊の沙を遶つて行くのである。閨中なる我が妻も、矢張、この佳節に逢ひ、自然、わが居る都の方を憶つて居るであらう。

送鮑翰林遷官陝右

鮑翰林の官を陝右に遷さるるを送る

(一)鑾坡初罷直。西去惜離羣。
載筆唐(二)供奉。褰(三)帷漢使君。
濁流河(四)驛雨。高樹嶽(五)祠雲。
公暇應懷古。登(六)臨賦夕(七)曛。

鑾坡、はじめて直を罷め、西に去つて、離羣を惜む。
筆を載す、唐の供奉、帷を褰ぐ漢の使君。
濁流河驛の雨、高樹嶽祠の雲。
公暇、應に古しへを懷ひ、登臨、夕曛を賦すなるべし。

【字解】【一】鑾坡　翰林を云ふ。【二】唐供奉　李白が玄宗の朝に翰林供奉たりしを云ふ。【三】褰帷漢使君　使君は太守の尊稱、後漢書賈琮傳に「琮、冀州となる、傳車、赤帷裳を垂る。琮曰く、刺史は、當に遠く視、廣く聽き、美惡を糾察すべし、何ぞ帷裳を垂れて、以て自ら掩はむや、と。命じて、これを褰げしむ」とある。【四】河驛　河は黃河、河上の亭驛。【五】嶽祠　華山の祠廟。【六】登臨　高い處に登つて眺め下すこと。【七】夕曛　夕日に同じ。

【題義】姓譜に「鮑頫、字は尙絅、歙の人。洪武の初、薦められて元史を修し、翰林修撰に陞り、出でて耀州同知となる」とあつて、靑邱と同一出身の人。この詩は、その人が、今次陝西の耀州に赴任するを送つたのである。

【詩意】君は、今回、翰林に出仕することを罷めて、陝西に赴任せられるとのことで、ひとり、羣を離れて遠行されるのは、まことに名殘惜しい。君の作詩の才藻は、筆を載せた唐の李白に比すべく、君の治民の本領は、帷を褰げた漢の賈琮の樣である。赴任の路すがら、黃河の邊なる驛亭に雨が降ると、濁流滔滔として下り、華山の麓なる祠廟に雲立ち籠むれば、高樹濛濛として見え、流石に、壯絕の景色であらう。公事暇ある折ふしは、高きに登つて、懷古の思に耽り、夕陽の中に詩を作り、天晴の名作を出されることであらう。

【餘論】後聯十字は、豪壯なる陝西の景物の一斑を繪き出して、簡切勁直である。

送姚架閣

姚架閣を送る

（一）芳晨悵別筵。新柳驛亭前。
芳晨、別筵悵たり、新柳驛亭の前。

客散春城酒。人登暮雨船。
客は散す春城の酒、人は登る暮雨の船。

江樓先見日。郡界遠臨邊。
江樓、先づ日を見、郡界、遠く邊に臨む。

到後安民俗。應知從（二）事賢。
到る後、民俗を安んず、應に知るべし從事の賢。

【字解】（一）芳晨 春の日。晨といつても必ずしも朝には限らない。（二）從事賢 隋書百官志に「從事は從九品たり」とあり、世說に「習鑿齒、史才常ならず、宣武、これを器とす。未だ三十ならず、便ち荊州治中となる。鑿齒の謝箋に云ふ、明公に遇はざれば、荊州の老從事のみ」とある。

【題義】架閣は、前にも見えたが、地方の小官である。この詩は、架閣に任せられた姚某の遠地に赴任するを送つたのであるが、その地は、何處か分からない。

【詩意】新柳の煙れる驛亭の前に於て、春日、別筵が催され、春城の酒に醉つた客が散じ去る頃、君は、暮雨瀟瀟の中、舟に乘つて發程される。君の任地は、山川險絕、江樓に上れば、早く日の出が見え、郡界は、遠く邊地に臨んで居る。君の手腕を以て、著任後、功績を擧げて民俗を安んじたならば、從事中の賢者として知られ、やがて、榮遷の慶があるだらう。

【餘論】前聯十字は、含蓄に富み、餘情の盡きざるを覺える。

送曾主簿之平樂

曾主簿の平樂に之くを送る

路出桂（一）江東。鄉（二）音想未通。
路は出づ桂江の東、鄉音、想ふに未だ通せず。

蛇飛山苦霧。鵬（三）運海多風。
蛇は飛んで、山、霧に苦み、鵬は運して海に風多し。

（四）木魅長欺客。花（五）蠻少學農。
木魅、長く客を欺き、花蠻、農を學ぶこと少し。

縣廳何處在。椰葉晚陰中。　縣廳、何の處にか在る、椰葉晚陰の中。

【字解】【一】桂江　一統志に「梧州府城の西に在り」と見ゆ。【二】鄕晋　地方の訛り。【三】鵬運　莊子に「この鳥や、海運すれば、將に南溟に徙らむとす」とあつて、字面は、ここから出て居るが、鵬が其身を運んで飛び去るといふ意。【四】木魅　寰宇記に「平樂府城東榮山上に九峰あり、險、陟るべからず、かつて木客あり、形、小兒に似、行坐衣服、人に異ならず、時に市に出でて、作器を易ふ、人、亦た別つなし」とあり、鮑照の蕪城賦に木魅山鬼、野鼠城狐、風嘷雨嘯、昏見晨趨とある。【五】花變　炎徼記聞に「古しへ、八蠻と稱す、その文面、尤も異なるもの、飛頭・鑿齒・鼻飮・花面・赤裩の屬あり」と見えて居る、すると、花變は、額に花の入れ墨をして居る蠻族と見える。

【題義】主簿は縣令の下役、平樂は廣西平樂府平樂縣。この詩は、主簿曾某の廣西に赴任するを送つたのである。

【詩意】行き行きて、一路、桂江の東に出づると、卽ち平樂で、君の任地であるが、もとより、遠隔の蠻境であるから、地方の訛りは、なかなか分かるまい。木精は人に化して、常に旅客を騙かし、蛇は飛んで、山には霧深く、鵬は起たむとして、海には風が多い。顏に花形の入れ墨をした蠻族は、農耕を爲すこと少く、見るところの山川民俗、もとより、中國とは違つて、なかなか恐ろしげである。そして、縣の役所は何處かといへば、椰子の葉繁くして、日暮、陰を成せる其中に在る。

桓簡公廟

桓簡公の廟

荒林慘淡中。石馬欲斷風。　荒林慘淡の中、石馬、風に斷かむと欲す。
功在山留碣。威存廟挂弓。　功在り、山に碣を留め、威存して、廟に弓を挂く。
飢鴉迎祭客。走鼠駭巫童。　飢鴉、祭客を迎へ、走鼠、巫童を駭かす。
千載宣城道。人憐內史忠。　千載宣城の道、人は憐む內史の忠。

【字解】【一】石馬　廟の前に据ゑてある石造の馬。【二】祭客　參詣して祭をなす人。【三】巫童　年わかき巫女。【四】內史　卽ち桓彝。

【題義】晉書に「桓彝、字は茂卿、譙國の人、宣城の內史たり。蘇峻の涇縣を攻むるや、彝、力守年を經、城陷つて死す。賊平らぐ、廷尉を追贈し、諡して簡といひ、咸安中、改めて太常を贈る」とあり、一統志に「靈惠廟は、涇縣の西に在り、晉の宣城內史桓彝を祀る、又桓彝の墓は府城の北に在り」と見ゆ。この詩は、卽ち桓彝の廟に詣でて作つたのである。

【詩意】慘澹として荒れたる林の中に、一字の廟があつて、廟前の石馬は、風に嘶かむとして居る。ここは、卽ち桓彝を祀つた處で、その功績は、長しへに世に在つて、山上には碑碣を留め、威靈なほ存して、廟中には、形見の弓が挂けてある。飢鴉は、供へ物を持つて來る祭客を迎へて、かしましく叫び、鼠が走り出て、年わかき巫女を驚かすことがある。千載後の今日、宣城への道を行くものは、

當日、その地の內史たりし桓彝の忠烈を憐まぬものは無い。

【餘論】前聯は莊重典雅、よく桓簡公その人を盡して、阿堵傳神の妙がある。

送陳則

陳則を送る

挾策去誰親。侯門不禮賓。　策を挾んで、去つて誰にか親む、侯門、賓を禮せす。

愁邊長夜雨。夢裏少年春。　愁邊長夜の雨、夢裏少年の春。

樹引離鄉路。花驕失意人。　樹は引く離鄉の路、花は驕る失意の人。

一杯歌短調。相送欲沾巾。　一杯、短調を歌ふ、相送つて巾を沾さむと欲す。

【字解】【一】挾策　策は馬鞭。【二】夢裏少年春　白居易の詩に、還有少年春氣味、時時暫到夢中來とある。【三】短調　短章に同じ。

【題義】陳則、字は文彥、北郭に居て、青邱の熟友であつた。その詳は、前に卷三、春日懷十友の詩に見えて居る。

【詩意】君は、鞭を挾んで、はるばる上京したが、誰が特に相親んで吳れたか、剡下諸侯の門では、決して賓客を禮遇せぬから仕方がない。愁邊には、長夜の雨降り注ぎ、夢中には、少年の春を追思し、愈よ情に堪へられない。故鄉を離れる路は、竝木に引かれて、明かに見えて居るし、花は、今が眞盛りで、さながら失意の人に驕つて居る樣である。ここに、一杯の酒を酌み、短章を歌うて、君の歸鄉を送れば、感慨極まらず、涙下つて、衣巾を霑すばかりである。

【餘論】愁邊の十字は、平易流麗の中に感愴を含んで、まさしく白傅の調である。

暮春送陳郎中出守檇李

暮春、陳郎中の出でて檇李に守たるを送る

出幕方爲郡。行車動畫輪。　幕を出でて、方に郡となり、行車、畫輪を動かす。

圖書歸省吏。風俗問州人。　圖書、省吏に歸し、風俗、州人に問ふ。

塘水龍鱗細。城槐兎目新。　塘水、龍鱗細、城槐、兎目新なり。

莫言花已盡。君到自陽春。　言ふ莫れ、花すでに盡くと、君到らば自ら陽春。

【字解】【一】爲郡　郡の太守となる。【二】省吏　郡の屬吏。【三】兎目　博物志に「槐葉生じ、五日なるを兎目といひ、十日なるを鼠耳といふ」とある。【四】陽春　開元遺事に「人、宋璟を謂うて有脚陽春と爲す、至るところの處、陽春の物を煦むるが如きを言ふなり」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】君は、禮部の幕中より出でて、今次、檇李の太守となり、葦輪を動かし、行車を進めて赴任される。文書類は、屬吏輩に任かせて置き、主として、州人に向つて風俗を問ひ、それで施政の方針を定めて行かれる。陂塘に包まれる水は、漣波起つて龍鱗の如く細かであるし、城中の槐樹は、初めて芽を出して、兎の目の樣である。春、方に暮れて、花すでに盡くるとき、君の德は、陽春が物を暖める樣であつて、無論、人民も心服するに相違ない。

送楊從事從軍

楊從事の從軍を送る

南風薰燕麥。送子悵如何。
南風、燕麥に薰し、子を送る、悵として如何。

迢遞戎車役。淒涼橫笛歌。
迢遞たり戎車の役、淒涼たり橫笛の歌。

天籠平野迥。山繞古關多。
天は平野を籠めて迥かに、山は古關を繞つて多し。

莫笑書生怯。能當曳落河。
笑ふ莫れ、書生の怯、能く當る曳落河。

【字解】【一】燕麥　からす麥。【二】迢遞　路の遠きを云ふ。【三】戎車　兵車に同じ。【四】曳落河　前に卷十、寄陶生の詩中に見ゆ、夷語にて健兒の義。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】南風が燕麥を吹いて薰る四五月の交、ここに、君の遠征を送れば、悵然たる思に堪へられぬ。兵車に乘つて干役する其路は、いとも遙かに、折から、橫笛に和して聞こえる歌は、極めて淒涼である。君の行く手には、天が平野を籠めて迥かに、山は古關を繞つて亂立して居る。書生を嘲つて臆病といふのは、間違つた話で、その氣力は、まさしく、胡中の健兒に抗敵することが出來る。

【餘論】天籠の十字は氣象壯豁、かういふ敍景の語は、蓋し作者の得意とするところである。

送王員外遷崇教

王員外の崇敎に遷るを送る

能書晉公子。淸宦稱高情。
能書、晉の公子、淸宦、高情に稱ふ。

海樹朝帆遠。江風夏服輕。
海樹、朝帆遠く、江風、夏服輕し。

官從三省去。僧出萬山迎。
官は三省より去り、僧は萬山を出でて迎ふ。

誰說簪纓累。名林得按行。
誰か說く簪纓の累、名林、按行を得たり。

【字解】【一】晉公子　晉朝の貴公子、王獻之を指す。晉書の本傳に「幼時、書を學ぶ、その父羲之、後より其筆を掣するも得ず、歎じて曰く、この兒、後、當に復た大名あるべし」とある。【二】海樹　海邊の樹木。【三】三省　中書・黃門・尙書を合稱す。【四】簪纓累　仕官の係累。【五】名林　著名なる叢林、卽ち寺。【六】按行　調べて步く。

【題義】 題下の原注に「崇敎は典僧の官」とあつて、宗敎局の吏員。この詩は、王員外の崇敎に轉任したのを送つたのである。

【詩意】 君の能書は、王獻之に比すべく、今次、崇敎てふ淸官に就かれたのは、高尙なる情思に協つて、定めて本懐の至であらう。すでに就任した上は、處處の寺觀を調べて歩くので、その途中、海邊の樹色蒼蒼として、朝に帆影遠く、江上の風意冷冷として、夏も衣服の輕きを覺える。君は三省の命を受けて出張され、到る處、坊さん達が山奥から出て來て歡迎する。かくの如く、名だたる叢林を調べ歩くのは、まことに、結構なことで、決して仕官上の係累を說くに及ばず、役人といふものの、一種特別の職掌である。

吳中送顧生歸海陵

涼風初變柳。歸興片帆孤。
家向（一）三秋到。田經幾歲蕪。
舊音猶（二）帶楚。新夢（三）未離吳。
明日江南北。相思（四）有雁無。

吳中、顧生の海陵に歸るを送る

涼風、はじめて柳を變じ、歸興、片帆孤なり。
家は三秋に向つて到り、田は幾歲を經て蕪す。
舊音、猶ほ楚を帶び、新夢、未だ吳を離れず。
明日、江の南北、相思、雁ありや無や。

【字解】 【一】三秋　秋は三月に亙るが故に云ふ、唯だ秋といふに同じ。【二】帶楚　楚地の訛りを帶びて居る。【三】未離吳　吳は蘇州を指す。【四】有雁無　雁ありや否やと訓すべし。

【題義】 吳中は蘇州。海陵は一統志に「揚州泰興縣、隋の海陵の地」とある。顧生は、名字不詳。

【詩意】 涼風吹き至つて、柳の葉の色を變せむとする頃、君は歸興勃然、孤帆を挂けて出發される。そこで、秋、家に到著されるが、田園は、幾年をか經て、大分荒れて居るであらう。君の言葉は、楚地の訛りを存して、少しも他國化せず、しかし、歸後の新夢は、この蘇州を離れぬであらう。明日、江の南北を隔つとき、相思の情を空飛ぶ雁に寄せて、書を贈られるか如何か、予は、首を延ばして待つて居る。

園中

席暖林中憩。衣涼水上歸。
腐瓜蟲食遍。空樹鶴巢稀。
（一）邂逅幽尋得。（二）參差薄願違。
喜無來往者。秋草沒園扉。

園中

席暖かにして林中に憩ひ、衣涼しくして水上に歸る。
腐瓜、蟲食うて遍ねく、空樹、鶴巢ふこと稀なり。
邂逅、幽尋を得たり、參差、薄願違ふ。
喜ぶ來往の者なきを、秋草、園扉を沒す。

【字解】〔一〕邂逅　偶然の意。〔二〕參差　豫期と反すること。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】林中に坐憩して、席の暖かなるに至り、やがて水邊より歸ると、衣まで涼しくなつた。腐つた瓜は、蟲が殆んど食ひ盡して仕舞ひ、枝の透いた木には、鶴も巢を結ばない。ここに、偶然、幽尋を試みたが、豫期に反して、ささやかなる我が願も遂げられて居ない。唯だ喜ぶべきは、來往するもののなく、秋草、園扉を沒し、四境の極めて物靜かなることである。

送前國子王助教歸臨川

前の國子王助敎の臨川に歸るを送る

去國獨依依。羈臣淚滿衣。　國を去つて獨り依依、羈臣、淚、衣に滿つ。
夢中燕月遠。望裏楚山微。　夢中、燕月遠く、望裏、楚山微なり。
世變人驚老。身全詔許歸。　世、變じて、人、老に驚き、身、全うして、詔して歸る〔を許す。〕
舟前楓葉落。應到故園扉。　舟前、楓葉落つ、應に故園の扉に到るべし。

【字解】〔一〕依依　低徊して去るに忍びざる貌。〔二〕羈臣　羈旅の臣。

【題義】國子は卽ち國子學、今の大學。前の字があるから、この王某は、元末助敎の職に居たので、後に南京に召し出されたのであらう。それが、今次、臨川に歸鄕するといふので、靑邱は、乃ち共行を送つたのである。

【詩意】君は鄕國を去つてより、依依として獨り心に忍びず、羈旅の臣として、淚は衣に滿つるばかり。燕山なる舊都の月は、夢中に遠く、一望すれば、鄕里なる楚地の山は、かすかに見える。世が變つて、自らその老いたるに驚き、一身、幸に全く、この度、詔して歸國することを許された。君の乘れる舟の前には、紅葉が紛紛として落ちるが、やがて、君に隨つて、故園の柴扉にまでも到るであらう。

送潘巡檢之閩中

潘巡檢の閩中に之くを送る

京師到閩海。秋色幾程餘。　京師より閩海に到る、秋色幾程の餘。
莎柵山兵守。榕林島戶居。　莎柵、山兵守り、榕林、島戶居る。
曉衙雞應鼓。晚邏騎隨車。　曉衙、雞、鼓に應じ、晚邏、騎、車に隨ふ。
清世元無盜。將軍好讀書。　清世、元と盜なし、將軍、好んで書を讀む。

【字解】【一】閩海　閩越の海岸、今の福州地方。【二】莎柵　後周書李遠傳に「かつて、莎柵に校獵す、石を叢蒲中に見、以て伏兎となし、これを射て中り、鏃入ること寸餘」とある、莎草の中に設けたる柵。【三】榕林　榕樹の林、番舍の草木狀に「榕は、葉、木麻の如く、その蔭十畝」とあり、東坡の詩に、忽行榕林中、跨空飛拱枅」とある。【四】曉衙　衙は廳舍。【五】曉邏　邏は伺察。【六】無盜　盜は泥棒ではなく、亂寇の徒。

【題義】續文獻通考に「明、外府州縣關津要害の處所に於て、巡檢一員を設け、徭編の弓兵二三十人を率領し、專ら巡緝盤詰を務む」とある。この詩は、潘某が巡檢に任命されて、閩中、即ち福州地方に赴任するのを送つたのである。

【詩意】ここ南京の都から、閩越の海岸までは、何里あるか知らぬが、秋色渺然として、餘程遠く見える。彼の地に於ては、莎草の中に柵を設けて、山兵、これを守り、榕樹の林を成せる中には、島民が居を構へて居る。曉早く廳舍を開くと、雞が鼓に應じて鳴き、日暮に偵察に出かける時は、車の後に騎兵を從へて行く。しかし、今は清平の御世、亂寇の徒などは絶無で、君も定めて閑暇であらうが、幸ひ讀書を好まれるさうだから、退屈されることも無くて過ごされるであらう。

送思上人

思上人を送る

（一）名林雖盡廢。南去只隨緣。　名林、盡く廢すと雖も、南去、只だ緣に隨ふ。

（二）野飯晨留鉢。城鐘夜到船。　野飯、晨に鉢を留め、城鐘、夜、船に到る。

（三）虎馴應畏法。鳥喚不驚禪。　虎は馴れて應に法を畏るべし、鳥は喚んで禪を驚かさず。

他日期相見。高峰舊塔前。　他日相見るを期す、高峰舊塔の前。

【字解】【一】名林　前に送王員外遷崇教の詩中にも見えて居た、著名なる寺。【二】野飯　田舍の飯。【三】虎馴　朝野僉載に「空如禪師、陸渾山に入り、蘭若に坐す、虎暴せず、山中偶ま野猪の虎と鬭ふを見、藜杖を以て之を揮つて曰く、檀越、須らく相爭ふべからずと、即ち分散す」とある。

【題義】上人の名字閱歷等は、よく分からぬが、當時、有名な高僧であつたらしく、釋妙聲の送思上人游方序に「吳郡の思上人、天台氏の學を業とし、長洲の文殊寺に主たること數年、人の從つて化するもの、甚だ衆し。今乃ち棄てて去り、山水の間に翛然たり、繫がざるの舟、空を行くの雲の如く、何ぞ羈すべけむや」とあつて、この詩も、矢張、同時に、その飛錫を送つたのであらう。

【詩意】名だたる寺院は、すツかり荒廢して、君が巡錫しても、格別得るところもあるまいが、今次の南行は、唯だ隨緣、即ち成り行き次第である。朝に田舍で飯に有り付いた時、鉢を留めて心ばかりの謝禮とすることもあらうし、夜、船中に寝て居ると、城上の鐘聲が遠く聞こえるだらう。虎も馴れて、法力を畏れるであらうし、鳥が鳴いても、坐禪の邪魔には成らない。いづれ、他日高峰舊塔の前に於て、再び御目に懸るであらうから、その時まで、恙もなくて、在はさむことを希望する。

宴王將軍第

王將軍の第に宴す

流水通侯第。行雲傍妓臺。　流水、侯第に通じ、行雲、妓臺に傍ふ。

雨催牙仗散。風引羽觴來。　雨は牙仗を催して散じ、風は羽觴を引いて來る、

曲學移聲按。詩隨得韻裁。　曲は聲を移すを學んで按じ、詩は韻を得るに隨つて裁す。

莫令游宴歇。次第過花開。　游宴をして歇み、次第に花の開くを過ごさしむる莫れ。

【字解】【一】侯第　公侯等、貴人の邸。【二】行雲　巫山の神女の朝に雲となり暮に雨となるを暗用す。【三】妓臺　妓は家妓、即ち羣妾、それ等の居る部屋を指したのであらう。【四】牙仗　牙は將軍の牙旗、その牙旗を擁護して居る兵仗。【五】羽觴　席上を早く巡るより羽といふ。【六】曲　歌曲。【七】移聲　節を調へる。

【題義】説明に及ばぬ。但し、王將軍の名字閲歷等は不詳。

【詩意】庭内を走る流水は、侯家にも通じ、羣妾の居る一構の亭臺には、行雲の倚り添ふ想がある。この日、宴酣なるに當つて、雨が降つて來たので、物物しき牙旗の兵仗などは、解散して仕舞ひ、風は羽觴を引いて、愈よ急に廻らしめる。妓人どもは、節を調へることの出來た處で、歌曲を奏し、座客は、韻を得るに隨つて詩を作り、席上は、なかなか賑かである。この游宴を止めて、しづ心なく、次第に花盛りを過ごさしめる樣なことなく、幸ひの折から、十分に、春の景色を吟賞したいものである。

送朱從事之吳興

朱從事の吳興に之くを送る

釋褐方從宦。青山故郡鄰。　褐を釋いて、方に宦に從ひ、青山、故郡に鄰る。

草深湖帶雨。花暗驛藏春。　草深くして、湖、雨を帶び、花暗くして、驛、春を藏す。

鼓聚祈蠶女。舟逢射鴨人。　鼓は聚む蠶を祈るの女、舟は逢ふ鴨を射るの人。

幕中應待久。徒此惜離辰。　幕中、應に待つこと久しかるべし、徒に此に離辰を惜む。

【字解】【一】釋褐　粗衣を脫して朝衣に著換へる、即ち始めて出仕すること。揚雄の解嘲に、或釋褐而傅とあり、國朝會要に「興國二年、はじめて呂蒙正等に賜うて、褐を釋かしめ、後、遂に例となす」とある。【二】祈蠶女　陸游の詩に、戶戶祈蠶喧鼓笛と ある。蠶が善く上がる樣にと祈ること。【三】射鴨　水上に居る鴨を射る、前に卷二、射鴨詞に詳しく見えて居る。【四】離辰　別離の時。

【題義】從事は、地方長官に隸屬して、今の理事官の如きもの。吳興は蘇州附近。この詩は、從事朱某の吳興に赴任するを送つたので、矢張、青邱が南京に居た時分の作であらう。

【詩意】君は、今回、はじめて出仕して任命せられ、その行くところは、青山、故郡に近き處、即ち

呉興の地である。途すがら、草は深くして、湖水は雨を帶び、花は暗くして、驛亭に春景色を匿し、折から、三月の半ば過ぎて、流石に眺は面白い。鼓聲の鼕鼕たるは、蠶を祈る村女どもを聚めるのであるし、舟を乘り出すと、鴨を射る者にも出遇ふであらう。幕中では、久しく、君の著任を待つて居るに相違ないので、ここに、別離の時を惜んで、愚圖愚圖して居るのは、本意でもあるまじく、早速、旅程に登られたらば善からうと思ふ。

【餘論】 草深、花暗の十字は、例の寫景の名聯である。

和友人過采石

友人の采石を過ぐるに和す

山暝斷磯頭。猿聲兩岸愁。

山は暝す斷磯の頭、猿聲、兩岸に愁ふ。

柳間娼女酒。月下估人舟。

柳間娼女の酒、月下估人の舟。

擒虎嗟橫渡。騎鯨憶醉游。

擒虎、橫渡を嗟し、騎鯨、醉游を憶ふ。

停橈正懷古。風急葦花秋。

橈を停めて、正に古しへを懷ふ、風は急なり葦花の秋。

【字解】【一】斷磯 磯は邦訓いそであるが、本義は絕壁。【二】估人 行商の人。【三】擒虎 人名、隋書韓擒傳に「高祖、大擧して陳を伐つ、擒、五百人を率ゐて、宵に采石を濟る、守者皆醉ふ、擒、遂に之を取る」とある。擒、本名は擒虎。【四】騎鯨 李白が采石の江中に於て、月を掬せむとし、誤つて、水に落ちて死んだのを、後人は鯨に騎して去つたといつて居たので、その詳は、前に卷十、鳳臺圖の詩中に詳說して置いた。【五】停橈 橈は舟を行る櫂であるが、ここでは、舟の義に用ふ。

【題義】 この題は、一に和包師聖同知過采石に作つてあるといふから、友人は、卽ち包師聖であらう。采石は、南京の西、當塗の西北二十里に當り、牛渚の山が江中に突入した處の絕壁である。ここは、むかしから、要衝の地で、孫策は劉繇を牛渚の營に攻め、孫權は周瑜をして此に屯せしめ、爾後、重鎭となり、隋の韓擒虎の陳を滅せしも、明の常遇春の元兵を敗りしも、ともに、この道に由つたのである。

【詩意】 采石磯頭の山は、暮れかかり、兩岸の猿は、愁を含めるが如く、柳の間には、酒を賣つて居る娼婦があるし、月下には、估客の舟が羣がつて居る。むかし、韓擒虎が橫に江水を絕つて渡つたのも、李白が醉游の中に鯨に騎して去つたのも、皆、ここに於てし、俯仰の餘、感慨に堪へざらしめる。舟を停めて、往事を思へば、秋風颯として至り、蘆の花が吹き亂されて、一しほ、景色が淋しく見える。

【餘論】 後聯は、擒虎の橫渡を嗟し、騎鯨の醉游を憶ふといふ義であるが、文字の上からいふと、擒虎その人が橫渡を嗟し、李白が自ら醉游を憶ふといふ樣に聞こえる。もとより、詩は文章と異にして、かかる一種の語法を承認して居ることは、勿論であるが、決して、感服すべきものではない。擒虎と

騎鯨との對も、一寸面白い樣であるが、實は苦しまぎれの小刀細工に過ぎぬ。

誚柳　柳に誚る

何恨苦長顰。纖姿嫵媚(一)春。　何を恨んで、苦に長く顰す、纖姿、嫵媚の春。
慣愁行路客。羞比舞筵人。　行路の客を愁へしむるに慣れ、舞筵の人に比せらるるを羞づ。
亂葉斜斜雨。狂花(二)衰衰塵。　亂葉斜斜の雨、狂花衰衰の塵。
殘蟬來噪日。應落漢潭(三)濱。　殘蟬來り噪ぐの日、應に落つべし漢潭の濱。

【字解】(一)嫵媚　なまめかしき貌。(二)狂花　柳絮を云ふ。(三)漢潭　漢水の淵。桓溫が、おのが植ゑた柳の大きくなつたのを見て、嘆息したといふことがあつて、その地は漢南であるが、ここには、漢潭濱と云つたのであらう。

【題義】誚は、戲れる、嘲るといふ義で、この詩は、即ち柳を嘲つたのである。

【詩意】柳の纖細なる姿は、春に當つて、愈よなまめかしく、何を恨んで、長しへに眉を顰めて居るのであらうか。生來、路を行く旅人の心を愁へしめることが上手でありながら、筵上に舞ふ美人に比せらるるを羞ぢて居る。柳の葉は、斜斜たる雨に亂れ靡き、その花は、衰衰たる塵に混じて飛んで行く。やがて、秋に成つて、殘蟬が來て止まつて噪ぐ折から、葉が黃ばんで、漢水の邊に散るのは、一段傷心の景であつて、むかし、桓溫が之を見て歎息したのも、尤もな事である。

無題　無題

顧影出中堂(一)。長眉學內妝(二)。　影を顧みて、中堂を出で、長眉、內妝を學ぶ。
本爲戚里(三)婦。不是狹斜(四)倡。　本と戚里の婦たり、是れ狹斜の倡ならず。
扇撲園中蝶。箏彈陌上桑(五)。　扇は撲つ園中の蝶、箏は彈ず陌上桑。
相逢不敢笑。只恐斷君腸。　相逢ふも、敢て笑はず、只だ恐らくは、君の腸を斷たむことを。

【字解】(一)中堂　奥向をいふ。(二)內妝　宮女の妝。(三)戚里　天子の母方の親族の居る處、轉じて外戚の義に用ふ。史記萬石君傳に「その家を長安中の戚里に徙す、姊、美人たるを以てなり」とある。(四)狹斜　狹い路次といふのが本義であるが、唐代長安の花柳境は、裏町の狹い處に在りしに因つて、游里の意味に用ひて居る。盧照鄰の長安古意に、長安大道連狹斜、靑牛白馬七香車とある。(五)陌上桑　漢代の樂府題で、相和歌辭に屬し、一に豔歌羅敷行に作つてある。古今注に「陌上桑は、秦氏の女子に出づ。秦氏は邯鄲の人、女あり、羅敷と名づく、邑人千乘王仁の妻たり。王仁、後に趙王の家令となる。羅敷、出でて桑を陌上に采る。趙王、臺に登り、見て之を悅び、因つて、酒を置いて、奪はむと欲す。羅敷、彈箏に巧なり、乃ち陌上桑の歌を作り、以て自ら明かにす、趙王、乃ち止む」とある。

【題義】無題は題が無いとか、題を失つたとかいふのではなく、李商隱が、その緣情諸什に冠するに

無題を以てせしより、後人は皆之を沿襲して居るので、主として、閨閤間の情事に關した詩を指すことが、慣例に成つて居て、靑邱の此作も、無論、その一例に當つべきものである。

【詩意】美人が其影を顧みつつ、深閨から出て來たが、眉を長く描いたのは、御殿風の粧を眞似たのである。この人は、もと天子外戚の身内であつて、游里の倡婦ではなく、從つて、自然と品格が備はつて居る。庭園に出でては、團扇を以て蝶を撲ち、箏を彈じて陌上桑の古曲を彈じ、その貞志、決して移らざることを仄めかして居る。その相逢うて敢て笑はざるは、君の心腸を斷つて、眷戀の情に堪へざらしめるのを恐れるからであつて、もとより、生來の無愛想ではない。

京師寓廨三首

京師寓廨　三首

誰言舊隱非。靜里且相依。　誰か言ふ、舊隱非なりと、靜里、且つ相依る。
綠樹城通(一)苑。靑山寺對扉。　綠樹、城、苑に通じ、靑山、寺、扉に對す。
官閒休(二)直早。客久夢還稀。　官は閒にして直を休むること早く、客久しくして還るを夢むること稀なり。
是物春(三)來典。唯存舊賜衣。　この物、春來典す、ただ存す舊賜衣。

【字解】【一】通苑　苑は御苑。【二】休直　退出。【三】春來典　杜甫の詩に、朝回日日典二春衣一とある。

【題義】寓廨の廨は官舍。元史の編修に際し、史局は天界寺に設けられ、そして、編修員の連中は、便宜上、皆寺中に寓居したので、この詩は、卽ち其假寓の實況を詠じたのである。

【詩意】わが往日の棲隱は、すでに駄目となつたといふ譯でもないが、上京の後は、しばらく、この靜かな處に寄寓して居る。綠樹は、城を繞つて、御苑に通じ、靑山は、寺に近くして、扉に對して居る。もとより、閒官であるから、退出することも早く、久客の身は、還鄕の夢だに稀である。羈居岑寂、一物なく、唯だ曩に頂戴した朝衣があるが、これとても、春來質に入れて置いたのを、やツと近ごろ受け戻したのである。

幾夜頻聽雨。經春不見花。　幾夜か、頻りに雨を聽き、春を經れども、花を見ず。
(一)靡蕪(二)靑渚燕。楊柳(三)白門鴉。　靡蕪、靑渚の燕、楊柳、白門の鴉。
拙宦危機遠。工吟癖性加。　拙宦、危機遠く、工吟、癖性加はる。
(四)閒坊車馬少。不似住京華。　閒坊、車馬少く、京華に住するに似ず。

【字解】【一】靡蕪　草の茂みをいふ。【二】靑渚　地名かとも思はれるが、不詳。【三】白門　前に數ば見えた白下門で、李白の詩に何處最關情、烏啼白門柳とある。【四】閒坊　靜かなる街路。

【詩意】幾夜か、打つづけて雨の降る聲を聞いたが、春に成つても、花は、まだ咲き出さぬ。草の生ひ茂れる青渚には、燕が飛び繞り、柳の立ち列ぶ白門には、鴉が啼いて居る。身は、仕官に不得意なる儘、却つて、危機に遠ざかり、詩は、追追上手になつて、性癖が愈よ加はつて來た。この邊は、靜かな町であつて、車馬の往來極めて少く、とんと、都に住んで居るにも似つかはしからぬ位である。

寂寞過(一)芳時。幽懷只自知。　寂寞として芳時を過ぎ、幽懷、只だ自ら知る。

袖無(二)投相刺。篋有寄僧詩。　袖には相に投ずるの刺なく、篋には僧に寄するの詩あり。

鼠跡塵凝帳。蛙聲雨到池。　鼠跡、塵、帳に凝り、蛙聲、雨、池に到る。

疎慵堪(三)置散。不敢怨名卑。　疎慵、置散に堪へたり、敢て名の卑きを怨まず。

【字解】【一】芳時　春酣なる時。【二】投相刺　宰相に差し出す名刺、梁書諸葛璩傳に「江祀、璩を明帝に薦めて曰く、璩、貧に安んじ、道を守り、禮を悅び、詩に敦く、未だ嘗て刺を邦宰に投じ、裾を府守に曳かず」とある。刺を宰相に投ずるは、卽ち權門に出入して、一身の爲に色色運動することである。【三】置散　閑散な職に置く、韓愈の進學解に投閒置散、乃分之宜とある。

【詩意】寂寞として花の盛りを過ごしたが、一片の幽懷、只だ自ら知るのみである。袖裏には、宰相に差出す名刺もなく、篋中には、坊さんに贈つた詩がある。塵は紗帳にこびり付いて、鼠の足跡がはつきりと見え、雨は池塘に滿ちて、蛙の聲が騒がしく聞こえる。自分は、本來無性の怠け者であるから、史官といふ樣な閑散な職に置かれたのが、丁度、適當であつて、聲名の卑いことなどは、何とも思つて居ない。

【餘論】袖無の一聯は、作者の人物の高尚なることを想見すべく、平衍夷曠を以て推すべき佳聯である。

送舒徵士考禮畢歸四明

舒徵士の考禮畢りて四明に歸るを送る

寄語關門吏。休輕尙布衣。　語を寄す關門の吏、尙ほ布衣なるを輕んずるを休めよ。

(一)叔孫聊應召。(二)周黨竟辭歸。　叔孫、聊か應に召さるべし、周黨、竟に辭して歸る。

赤日京塵遠。蒼煙海樹微。　赤日、京塵遠く、蒼煙、海樹微なり。

送君還自歎。老却故山薇。　君を送つて、還た自ら歎ず、老却す故山の薇。

【字解】【一】叔孫　漢書叔孫通傳に「博士となる。高祖に說き、朝儀を起し、古禮を采り、秦儀と雜へて之を就し、はじめて長樂宮に用ふ、諸王より以下、震恐せざるなし。通を拜して奉常となす」とある。【二】周黨　後漢の初の逸士。前に卷三、詠三隱逸一十六首の中に評述して置いた。

【題義】四明は、一統志に「寧波府、唐には明州といふ、四明山は府城の西南に在り」と見ゆ。この詩は、舒某が徵士となつて上京し、禮部の試驗を受けし後、四明に歸鄕するを送つたのである。この人は、多分試驗に及第したが、朝廷の現狀を見て、仕官を欲せず、直に歸鄕したのであらう。

【詩意】闕門の役人に寄語するが、舒君は、依然、無官の布衣だといつて、輕蔑してはならぬ。君は、古しへの叔孫通の如く、召し出されて、大に登庸せらるべき筈であつたが、周黨の樣な高節を抱き、たつて辭退して歸鄕されるのである。途すがら顧みれば、赤日の下に都の沙塵は次第に遠ざかり、蒼煙棚引く處、海邊の樹色は、薄く見えて居る。君を送るに就けて、予も亦た歎息に堪へないので、早く故山に歸り、薇を采つて生活して居たいと思つて居たものの、今しも、春盡きて、薇も段段末になり、そして、まだ何時歸れるか分からない。

【餘論】赤日、蒼煙の十字は、氣象壯濶、例の御手の物である。

陪客登陶丘

客に陪して陶丘に登る

相逢俱失意。此地偶同游。

相逢ふ、俱に失意、この地、偶ま同游。

獨樹邀人去。斜陽爲客留。

獨樹、人を邀へて去り、斜陽、客の爲に留まる。

依村煙景夕。近水竹聲秋。

村に依る煙景の夕、水に近く竹聲の秋。

謾有歸歟歎。何山是故丘。

謾に歸歟の歎あり、何の山か是れ故丘。

【字解】【一】獨樹 一本立てる木、王褒の詩に平原看獨樹とある。【二】煙景 煙を帶びたる景色。【三】歸歟 論語に「歸らむ歟、歸らむ歟、吾が黨の小子」とある。【四】故丘 故山、故園に同じ。

【題義】說明に及ばぬ。陶丘は、何處か分からぬが、或は婁江の岸上かも知れぬ。

【詩意】君と相逢ひ、ともに失意を嘆き詫びつつ、料らずも一處に此に游んだ。獨樹は人を迎ふるが如く、斜陽は、客の爲に、ことさらに留まつて居る樣である。村を繞つて煙れる景色は、次第に夕ならむとし、水に近き邊には、竹聲すでに秋をなして居る。ここに、早く歸りたいと歎息するものの、どの山が、果して、わが故丘であるかと思ひ惑ふのも、はかないことである。

【餘論】後聯十字は、放翁の口吻に似て居る樣である。

王公子宅五月菊

王公子宅の五月菊

秋英忽夏發。宛在阿戎家。

秋英忽ち夏發し、宛として、阿戎の家に在り。

細認驚初見。高吟喜共誇。

細に認めて、初めて見たるに驚き、高吟して共に誇るを喜ぶ。

不依寒竹雨。欲映午榴霞。　寒竹の雨に依らず、午榴の霞に映せむと欲す。

我意甘遲暮。尊前有此花。　わが意、遲暮を甘んず、尊前、この花あり。

【字解】【一】秋英　秋の花、即ち菊。【二】阿戎　晉書に「王渾の子、戎、年十五。阮籍、渾に謂つて曰く、濬仲清爽、卿の倫に非ざるなり、卿と言ふは、阿戎と語るに如かず」とある。【三】遲暮　老境。

【題義】題下の原注に「吳郡の王君明仲は、淸獻公の子」とあつて、王君は、名家の出なるが故に、特に公子と云つたのである。五月菊は、夏菊と思はれる。この詩は、王君の宅に夏菊を見て作つたのである。

【詩意】秋咲くべき菊が、夏咲き出で、おまけに、ここは、阿戎の樣な洒脫なる少年公子の家である。仔細に眺めると、今まで見たこともないものであつて、高吟して、主人と共に誇らしげに、この花を賞した。この菊は、秋寒げなる竹の雨に倚り添はうとせずして、夏の眞晝に燃えて、夕やけの如く見ゆる石榴の花と相映じて居る。われ、幸に老境に甘んじて居たのに、樽前にかういふ花があるのは、まことに、豫想外の事である。

送周復秀才、賦行李中一物得紈扇

周復秀才を送る、行李中の一物を賦して紈扇を得たり

不畫乘鸞女。應憐素質新。　乘鸞の女を畫かず、應に素質の新なるを憐むべし。

霜機驚落早。風塵讓揮頻。　霜機、落つるの早きに驚き、風塵、揮ふの頻りなるに讓る。

席上曾歌怨。窓間或掩顰。　席上、かつて怨を歌ひ、窓間、或は顰を掩ふ。

何如爲君子。遠路障埃塵。　何ぞ如かむ、君子の爲に、遠路、埃塵を障るには。

【字解】【一】乘鸞女　前に扇ノ詩中にも引いたが、江淹の詩に畫作秦王女、乘鸞向煙霧とある。【二】素質　團扇は白い練り絹で造るが故に云ふ。【三】霜機　白い絹を織る機。【四】風塵　風を生ずる拂子。【五】歌怨　班婕妤が團扇に託して、おのが薄命を歎き託びた詩を怨歌行と題してあるを云ふ。なほ、李商隱の詩に畑分歌扇淚とある。【六】掩顰　ひそめる顏を匿す、溫子昇の詩に妖姬掩扇歌とある。

【題義】周復秀才の遠行を送らむとし、その荷物の中の一物を詠ずることにし、予は、紈扇を得たから、この詩を作つたといふので、つまり、團扇に託して、送別の意を述べたのである。秀才は、どういふ譯で、どこに行くのか、その邊の事は、一切不詳である。

【詩意】この團扇には、乘鸞の弄玉などは畫かず、小ざつぱりして居て、紈素の新なるは、殊に愛すべきを覺える。この紈素は、白地を織る機の上から早く落ちて來て、やがて、細工されて、團扇となつたので、その打續いて揮り動かされることに就いては、拂子とても到底及ばぬであらう。席上、こ

れにかこつけて、怨歌を唱へたものもあるし、窓間、これを以て顰める其顔を掩うたこともあるが、君子の爲に、遠路、塵埃を障るの一事は、取り分け、稱すべきことである。

送流人

（一）漢條應偶觸。蠻俗未能諳。
海近風多（二）颶。山昏（三）瘴似（四）嵐。
行衝（五）哀甸虎。食畏（六）蠱家蠶。
鄕國何年返。懸知老（七）日南。

流人を送る

漢條、應に偶ま觸るるなるべし、蠻俗、未だ諳んずる能はず。
海は近くして、風、颶多く、山は昏くして、瘴、嵐に似たり。
行いては衝く哀甸の虎、食には畏る蠱家の蠶。
鄕國、何の年か返る、はるかに知る、日南に老ゆるを。

【字解】【一】漢條　條は法律の個條、漢は例の如く擬へて云ふ。【二】颶　大暴風。【三】瘴　毒熱の氣。【四】嵐　山氣。【五】哀甸　一統志に「雲南永昌軍民府は、古しへの哀牢國、故に哀甸哀牢といふ。本名安樂、夷語訛して哀牢となる」とある。【六】蠱家蠶　周禮に「庶氏、毒蠱を除くを掌る」とあり、宋太祖紀に「永州諸縣民の蠱を畜ふもの、三百二十六家を鄙處に徙し、復た鄕に齒するを得ざらしむ」とあり、虛谷閒鈔に「鄕閭、晨に晤んで戶を啓けば、一小籠子を見る、開き視れば、乃ち白金酒器、數十事、挈へ歸れば、股上に物あり、蠕蠕然として動き、金色爛然たるを覺ゆ、乃ち一蠶なり。友人識るものあり、曰く、これ謂はゆる金蠶蠱なり、能く人の腹中に入り、腸胃を殘嚙し、復た完然として出づ」とある。すると、蠱とは蠶の如き形を爲せる毒蟲、蠱家とは、これを飼養して居る巫覡の類であらう。【七】日南　漢書地理志に「日南郡は、故の秦の象郡、武帝の元鼎六年、更めて名づく」とあつて、その注に「その日の南に在るを言ふ、謂はゆる北戶を開いて以て日に向ふもの」とある。

【題義】流人は、罪を得て遠地に配流せらるるもの。この詩は、即ち之を送つたのである。

【詩意】君達は、偶然に法律の箇條に觸れたので、もとより、格別の惡事を爲したのでもなく、遠流されるとは、まことに氣の毒千萬、殊に行く先の蠻地の風俗は、まだ十分に知つて居ない位。その地は、海近くして、颶風屢ば到り、毒熱の氣、山を昏くして、煙嵐と疑はれる。路を行いては、哀甸の虎にぶッつかることもあるべく、食事をするに際しては、注意して、蠱家の蠶を口にしてはならぬ。何時になつたら故鄕に返れるか、その邊の事は、とんと分からず、多分は、日南の地に老い朽ちるであらうが、潔く思ひ諦めて、餘りくよくよせぬが善からう。

贈張省郎

（一）漢署早爲郎。長游（二）鳳沼旁。
雞知（三）壺水候。馬識（四）火城光。
每載（五）趨曹筆。時熏（六）直省香。
（七）邊書無一羽。（八）冠蓋得翺翔。

張省郎に贈る

漢署、早く郎となり、長く游ぶ鳳沼の旁。
雞は壺水の候を知り、馬は火城の光を識る。
每に趨曹の筆を載せ、時に直省の香を熏ず。
邊書、一羽なく、冠蓋、翺翔するを得たり。

【字解】【一】漢署　漢代の役所。ここでは中書省を指して云ふ。【二】鳳沼　即ち鳳凰池、中書省の近くに在るので、後には、省の異名の如くなつて居る。【三】銅水候　銅は銅壺、即ち水時計、時計の刻限。【四】火城　國史補に「元日冬至ごとに、仗を立て、大官は皆珂傘を備へて燭を列し、五六百炬に至るものあり、宰相將に至らむとすれば、衆皆燭を滅して之を避く」とあり、東坡の詩に萬人爭看火城還とある。【五】趨省筆　漢官儀に「八座、成を受け、事、郎に決す、筆を下せば詔策となり、言を出せば詔命となる」とある。省は他省の吏員。その吏員を趨走せしめる詔敕の筆といふ義。【六】直省香　漢官儀に「その入つて臺廨に直する、侍史一人、女侍史二人を給し、皆、端正妖麗を選び、香爐香嚢を執り、燒薰して衣服を護す」とあり、梅堯臣の詩に、官奴休執燭、侍史正薫衣とある。省中に宿直すれば、香を焚いて、衣服を薫ぜしめらる。【七】邊書無一羽　邊庭に一羽書なしといふ意。漢書高帝紀の注に「檄は、木簡を以て書と爲し、長さ尺二寸、徵召に用ふるなり。急事あらば、加ふるに、鳥羽を以て之に插み、名づけて羽書といふ」とある。【八】冠蓋　蓋は車蓋、併せて大官の禮裝。

【題義】この詩は、中書省の郎中たる張某に贈つたのである。

【詩意】君は、早くより、郎中となつて、鳳池の傍に游び、中書の職務に携はつて居る、雞が漏刻を知つて、曉を報ずると、君も、その時分に出仕されるし、元日冬至に火城を設ける場合など、第一に其處に臨むから、馬まで之を識別して居る。毎毎筆を載せ、入朝して詔書を草し、各省の屬僚を趨走せしめ、時たま宿直すると、女侍史が付き添つて居て、香を衣服に焚きしめて呉れる。今しも、四海無事、邊境から羽書の來ることもないから、冠蓋堂堂として、廟廊の間に翺翔することが出來るので、まことに結構な事である。

送瀚公住靈巖

離宮游路絶。名寺道場開。　離宮、游路絶え、名寺、道場開く。

我昔題詩去。師今説法來。　われ、昔、詩を題して去り、師、今、法を説いて來る。

茱萸垂澗戸。菡萏發池臺。　茱萸は澗戸に垂れ、菡萏は池臺に發す。

興壞倶空幻。登臨不用哀。　興壞ともに空幻、登臨、哀むを用ひず。

【字解】【一】離宮　靈巖は即ち館娃宮の址、呉王夫差の離宮であつた。【二】茱萸　ぐみ。【三】菡萏　蓮の花。【四】興壞　盛衰・興替に同じ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、瀚公の本名は不詳。

【詩意】ここは、呉王夫差の離宮の址で、荒廢すでに久しくして、游覽の路も無いやうであるが、幸に名だたる寺が設けられて、一大道場に成つて居る。さきに、予は其處に游んで、詩を題したことがあるが、今や、老師は、晉山せられて、妙法を講説するとのことである。頃しも秋、茱萸は枝もたわわになつて、澗邊の菴の傍に垂れ、蓮の花も、今が盛りで、池臺を繞つて居る。世事の盛衰は、本來空にして幻、ここに登臨しても、格別悲むに及ばぬことである。

送宿衞將出守鄧州

(一)中郎身領仗。(二)宿衞在(三)承明。
舊射雙鵰落。新乘(四)五馬行。
紅雲遙(五)魏闕。(六)白水近(七)穰城。
好勸諸年少。春來賣劍耕。

宿衞將の出でて鄧州に守たるを送る

中郎、身、仗を領し、宿衞して承明に在り。
舊と雙鵰を射つて落し、新に五馬に乘じて行く。
紅雲、魏闕遙に、白水、穰城に近し。
好し勸めむ諸年少、春來、劍を賣つて耕せ。

【字解】【一】中郎　中郎將の略。【二】宿衞　宮城を護衞する。【三】承明　宿衞する者の溜まり所、漢書に「君、承明の廬を厭ふ」とあつて、注に「石渠閣外、直宿の止まるところ、廬といふ」とある。【四】五馬　官儀に「漢制、九卿は二千石、右驂を以てし、太守は四馬のみ、その加秩あつて二千石に中るものは、乃ち右驂、故に五馬を以て太守の美稱と爲す」とあり、遯齋閒覽に「漢時、朝臣出でて使し、太守と爲れば一馬を增す、故に五馬といふ」とある。【五】魏闕　魏は巍、巍然たる宮闕、卽ち宮城。【六】白水　清んだ水。【七】穰城　鄧州志に「州東新野縣、鄧州に屬す、縣に白河あり」と見ゆ。

【題義】晉書武帝紀に「中軍將軍を置き、以て宿衞を統ぶ」とあり、鄧州は一統志に「春秋の時、鄧侯の國、秦には穰邑となし、漢には穰縣となし、南陽府に屬す」とある。この詩は、宿衞將たりし某が、鄧州の太守となつて、新に赴任するのを送つたのである。

【詩意】これまで、君は中郎將に在官し、みづから兵仗を領して、宮城を護衞し、そして、承明の溜まり所に居たので、材武絕倫、一矢に雙鵰を射落した程であつたが、今回は、太守に轉じ、五馬に乘じて、花花しく赴任される。途すがら、顧みれば、紅雲棚引く處、魏闕は次第に遠く隔り、前面には、白水滔滔として穰城も程近くなつて來る。君の如き武臣でさへ、この通りであるから、諸年少輩も、春來、劍を賣つて牛に換へ、この太平の御世に際し、長閑かに田を耕すのが然るべきことであるといつて、懇に勸告する次第である。

甘露寺

勝地江山壯。名林歲月遙。
剎藏(一)京口樹。鐘送(二)海門潮。
月黑(三)龍光發。天清(四)蜃氣銷。
何當尋(五)很石。閒坐話(六)前朝。

甘露寺

勝地、江山壯に、名林、歲月遙なり。
剎は藏す、京口の樹、鐘は送る海門の潮。
月は黑くして龍光發し、天淸くして蜃氣銷ゆ。
何ぞ當に很石を尋ね、閒坐、前朝を話すべき。

【字解】【一】京口　地名、揚子江の北岸。【二】海門　縣名、一統志に「通州に屬す、今、海に沒す」とある。【三】龍光　金龍の鱗の光。【四】蜃氣　本草に「蜃は、蛟の屬、能く氣を吁き、樓臺城郭の狀を成す、將に雨ふらむとすれば卽ち見はる、蜃樓と名づけ、又海市といふ」とある。【五】很石　一統志に「甘露寺內に在り、石の狀、羊の如し。相傳ふ、諸葛孔明、その上に坐し、孫仲謀と孟德を攻むるを謀るもの」とある。【六】前朝　主として六朝の國國を云ふ。

【題義】甘露寺は、一統志に「鎭江府北固山上に在り、吳の甘露年中に建つ、因つて名づく、內に梁の武帝の書、天下第一江山の六字あり」と記してある。

【詩意】ここは、音に聞く勝地であつて、江山の形勢は雄壯であるし、甘露寺も、著名なる叢林であつて、久しく歲月を經過した。堂塔は、京口に連る樹色の中に匿れ、鐘聲は、海門の潮を送つて押し寄せしめる。月の黑き夜など、金龍の鱗光が明かに映發し、天が淸むと、蜃氣が初めて銷え、打見たるところ、極めて開豁である。されば、何も很石を尋ね、その上に閒坐して、六朝の舊事を話して懷古の想に耽らずとも善いので、つまり、景色を賞すれば、それで澤山である。

送張羽後夜坐西齋

（一）閒齋聽鐘坐。（二）憂緖悵多端。
鳴雁雨中急。離人江上寒。
秋燈下木葉。夜艇隔風湍。
別後情蕭索。方知舊會歡。

張羽を送つて後、夜、西齋に坐す

閒齋、鐘を聽いて坐し、憂緖、悵として多端。
鳴雁、雨中に急、離人、江上に寒し。
秋燈、木葉を下し、夜艇、風湍を隔つ。
別後、情蕭索、方に知る舊會の歡。

【字解】【一】閒齋 物靜かなる西齋。【二】憂緖 さまざまに思ひ惱む心緖。

【題義】この詩は、張羽の遠行を送りし後、夜、ひとり西齋に坐し、愁思の堪へられぬままに作つたのである。

【詩意】ひとり、物靜かなる西齋に坐して、鐘の聲を聽いて居ると、悵然として、さまざまに思ひ惱んで居る。鳴雁の聲は、雨中に急であるし、離れ行く征人は、江上の寒さに堪へられぬであらう。秋燈の下には、木葉紛紛として下るべく、夜泊の舟は、風に鳴る奔湍を隔てて居る。旅況、かくの如きを思へば、別後、殊に物さびしく、ここに至りて、愈よ舊日會同の喜ばしさを知るのである。

【餘論】前聯は刻劃せずして、自然巧妙、後聯と共に、張羽の旅況を臆測したのである。

徐山人別墅

茶香（一）孤墅發。竹色（二）四鄰分。
掃地侵（三）蟲字。開窓散鳥羣。
樹涼池過雨。苔潤石生雲。
我出無車馬。偏宜訪（四）隱君。

徐山人の別墅

茶香、孤墅より發し、竹色、四鄰分かる。
地を掃うて蟲字を侵し、窓を開いて鳥羣を散ず。
樹涼しくして、池、雨を過ぎ、苔潤うて、石、雲を生ず。
われ出でむとして車馬なく、偏に隱君を訪ふに宜し。

【字解】【一】孤墅 墅は別莊。【二】四鄰分 分は分明の義。【三】蟲字 文心雕龍に鳥鳴似語、蟲葉成字とあつて、落葉に指

したものであらう。【三】隱君　隱士に同じ。

【題義】徐山人は、例の徐賁。この詩は、その別莊を訪うて作つたのである。

【詩意】香ばしき茶煙は、君の莊中より發し、竹の葉色は、青青として、四鄰とは打つて變つて、はツきりとして居る。庭上を掃除する際は、蟲が食んで字を爲せる落葉を押し除け、窓を開くと、近くに居た鳥の羣が驚いて飛び起つ。樹の涼しきは、池邊、雨の過ぎたるに因り、苔の潤へるは、石上、雲を生じたからである。予は、貧窮の身、外出するにも車馬なく、唯だ徒歩して、君の如き隱士を訪ふことだけは出來る。

【餘論】樹涼の十字は、名聯として數ふべきものである。金檀注本には、金蘭集補遺改本として、左の一首を附記してある。

吾憐甫子宅。門對二晩山曛一。客去嘗留レ月。僧來楊掃レ雲。茶香孤嶼發。竹色四鄰分。莫レ厭頻相過。言レ懷少レ似レ君。

この詩は、前の起聯を以て後聯となし、前聯はあまり面白くない。これを改作とすると、却つて折角の者を惡くして仕舞つた樣なもので、むしろ、この方が原作、前に揭げた方が定稿であらうと思はれる。

客館秋懷

獨臥愁二空館一。墻陰野豆開。
暑將(一)潮氣一斂。秋與二竹聲一來。
身賤多違レ志。時清少二棄材一。
慙非(二)張仲蔚一。門戶有二蒿萊一。

客館秋懷

獨臥、空館を愁へ、墻陰、野豆開く。
暑は潮氣と斂まり、秋は竹聲と來る。
身賤しくして多く志に違ひ、時清くして棄材少し。
慙づ張仲蔚に非ず、門戶に蒿萊あるを。

【字解】【一】暑將潮氣斂　將は「もつて」と訓する場合が多いけれども、ここでは「と」と訓する方が穩當である。【二】張仲蔚　皇甫謐の高士傳に「張仲蔚は、平陵の人、居るところ、蓬蒿人を沒す、榮名を治めず、時人識るなし」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】ひとり、客舍の空館に臥して、愁に堪へず、牆根の陰には、野豆が花を開いて居る。今しも、殘暑は、潮氣と共に收まり、秋は、竹聲と共に音づれて來た。身は貧賤の爲に、志すことも、多くは成し遂げず、清平の世には、棄材少く、それぞれ用ひられて居るのに、こんな事では仕方がない。慙づべきは、この身、古しへの張仲蔚に非ずして、その居るところだけが、頗る相似て蓬蒿に沒して居るといふことである。

【餘論】前聯十字は、全篇の警策である。

秋夜宿周記室草堂送王才

秋夜、周記室の草堂に宿して王才を送る

相別還相戀。秋宵暫對牀。　相別れて、還た相戀ふ、秋宵、しばらく對牀。
人情貧後見。客况醉中忘。　人情、貧後に見はれ、客况、醉中に忘る。
池柳疏含吹。江雲薄護霜。　池柳、疏に吹を含み、江雲、薄く霜を護す。
離舟待明發。愁思劇茫茫。　離舟、明發を待つ、愁思、劇だ茫茫。

【字解】【一】含吹　風を含むといふ義、唐の太宗の雨と題する詩に濛柳添レ絲密、含レ吹織ニ空羅一とある。【二】明發　明朝に同じ。

【題義】 說明に及ばぬ。周記室は、前に數ば見えて居た。

【詩意】 すでに、王君と相別れたる後、翻つて戀しく覺え、秋の夜、しばらく周記室と牀を對して居た。人の眞情は、貧後に於て見はれ、客中の窮况も、醉中に於て忘れて仕舞ふ。池邊の柳は疏にして、風を含み、江上の雲は薄くして、霜を護るが如くである。王君の舟は、明朝を待つて發程するとのことで、わが愁思は、甚だ茫茫として盡くることはない。

【餘論】 前聯は、窮中の實况で、まさしく、閱世の語である。

江上雨

江上の雨

冥冥衆樹昏、浩浩一江渾。　冥冥として衆樹昏く、浩浩として一江渾る。
急有廻風韻。輕無入霧痕。　急にして廻風の韻あり、輕くして霧に入るの痕なし。
鳥啼叢竹嶺。人臥落花村。　鳥は啼く叢竹の嶺、人は臥す落花の村。
門巷春泥滑。誰來共酒尊。　門巷、春泥滑かに、誰か來つて酒尊を共にせむ。

【字解】【一】浩浩　ひろき貌。【二】一江渾　渾は濁る。【三】叢竹嶺　竹の叢生して居る山。

【題義】 說明に及ばぬ。

【詩意】 雨の爲に、冥冥として、多くの樹は昏くなり、浩浩として、一江の水は、濁つて居る。急に降り注ぐ時には、風に吹き廻らされる樣な響があるし、輕く飛ぶ時には、霧に入る痕だに無い。鳥は、竹の叢生せる山路に啼き、人は、懶げに落花の村に臥して居る。門巷は、ぬかるみで步き惡く、ここに訪ひ來つて、酒樽を共にする人もない。

【餘論】 後聯は、巧に雨中の光景を描き出して居る。

送賈二進士歸省

賈二進士の歸省するを送る

年少擅詞華。曾看手八叉。　年少、詞華を擅にし、かつて看る手八叉。

晨裝歸路雨。春酒別筵花。　晨裝、歸路の雨、春酒、別筵の花。

馬帶雲過嶺。人同燕到家。　馬は雲を帶びて嶺を過ぎ、人は燕と同じく家に到る。

罷官趨覲好。不是謫長沙。　官を罷めて趨覲好し、これ長沙に謫せられしならず。

【字解】【一】詞華　文詞の光華。【二】手八叉　溫庭筠が八叉手の間に八韻の詩を成したといふことで、前に卷十、送張貢士の詩中に引いて置いた。【三】晨裝　朝早く出發する時の旅裝。【四】趨覲　家庭に走つて兩親に見える、即ち歸省に同じ。【五】長沙　漢書賈誼傳に「誼、長沙王の太傅となり、湘水を渡り、賦を爲つて以て屈原を弔うて曰く、恭承嘉惠兮竢罪長沙」とある。

【題義】賈二の二は排行、名字は不詳。

【詩意】君は、年少にして詞華を擅にし、かつて試場に於ては、八叉手の間に八韻の詩を成した位。明朝、旅裝を整へ、歸路の雨にぬれそぼちつつ行くであらうが、今日は、ここの別筵に於て、春酒を酌んで、ともに花を看るが善からう。途すがら、馬は、雲を帶びて嶺路を過ぎ、人は、燕子と同じく家に至るであらう。君が官を罷めて歸省されるのは、まことに宜しく、決して、古しへの賈誼が罪を獲て長沙に謫せられた樣なものでは無い。

【餘論】後聯は、語法も一寸珍らしく、平易にして且つ緊健である。

贈衍師

衍師に贈る

石橋尋禮罷。歸住白雲層。　石橋、尋ねて禮し罷み、歸つて住す白雲の層。

法悟經慵讀。年衰塔倦登。　法悟つて、經、讀むに慵く、年、衰へて、塔、登るに倦む。

青苔生砌錫。黃葉翳龕燈。　青苔、砌錫に生じ、黃葉、龕燈を翳す。

我欲相依老。前身恐是僧。　われ、相依つて老いむと欲す、前身、恐らくは是れ僧。

【字解】【一】石橋　啓蒙記の注に「天台山、絡溪水險、前に石橋あり、徑、尺に盈たず、長さ數十丈、下、絕澗に臨む」とある。【二】法悟　妙法を悟る。【三】砌錫　砌は階、それを錫で甃んである。【四】翳　かざす。【五】龕燈　龕は小さな堂。

【題義】衍師は道衍、前に春日懷十友の詩にも見えて居た。

【詩意】上人は、すでに天台の石橋を尋ねて拜禮をなし、歸つて白雲層を爲せる亂山の上に住んで居られる。妙法を悟つた後は、御經も讀むに懶く、年を取ると、塔に上ることが、なかなか大儀である。青苔は、錫で甃んだ殿階に生じ、黃葉は、龕中の燈火に翳して飄つて來る。この靜寂の有樣は、とても人間には見られぬ位、われは、上人と一處に居て、老い行かうと思ふので、どうやら、わが前身

は、多分僧侶であつたらしい。

送錢氏兩甥度嶺

錢氏兩甥の嶺を度るを送る

吏送(一)投荒去。應歸(二)下瀨營。
一家十口散。萬里兩身行。
(三)洞獠欺商市。(四)山魈喚客名。
江邊南望泣。不盡(五)渭陽情。

吏は、投荒を送つて去り、應に下瀨の營に歸るべし。
一家、十口散じ、萬里、兩身行く。
洞獠、商市を欺き、山魈、客名を喚ぶ。
江邊、南望して泣く、渭陽の情を盡さず。

【字解】【一】投荒　未開の邊境に赴く。【二】下瀨營　漢書武帝紀に「甲を下瀨將軍となし、蒼梧を下る」とあつて、その注に「瀨は湍なり、吳越、これを瀨といひ、中國、これを磧といふ」とあり、李嶠の凱旋の詩に佇想江陵陣、猶疑下瀨師とある。下瀨は、早瀨を下ること、それが軍隊の名にも成つて居るので、營といへば、その軍隊の駐屯する處。【三】洞獠　集韻に「西南夷、これを獠といふ」とある。【四】山魈　抱朴子登陟篇に「山精、形、小兒の如く、獨足後に向ひ、夜、喜んで人を犯す、名を魈といふ、その名を呼べば、犯す能はざるなり」とある。【五】渭陽　舅、卽ちをぢの義。詩の秦風に我送舅氏、曰至渭陽とあるに本づく。

【題義】兩甥といへば、母方の甥二人で、これに因つて、靑邱の母の錢氏であつたことも分かる。度嶺は嶺南に赴くことで、いづれ、今の兩廣の地であらう。この詩は、錢氏兩甥の嶺南に赴くを送つたので、詩で見ると、矢張、征戍の爲であらうと思はれる。

【詩意】官吏どもは、汝等の南荒に向ふのを送つて行くとのことで、いづれ、下瀨の兵營に落ち付くことであらう。汝の一家は、十人の眷屬であつたのに、盡く分散し、そして、汝等二人、萬里の遠くに行くのである。穴居の蠻民どもは、時時出て來て、市場に妨害を加へ、山魈は、却つて過客の名を知つて、これを呼び止めやうとする。ここに、汝を送るにつけて、江邊に立ちつつ、南望して泣き、叔父たる我が職分を十分に盡し得ぬのを遺憾に思ふ次第である。

【餘論】前聯は、聊か算博士の譏を免れぬが、湊合自然に巧妙である。

送客歸閩省覲

客の閩に歸りて省覲するを送る

秋城聞(一)暮砧。歸思忽盈襟。
客久依人遍。親衰念子深。
青山分嶺路。(二)紅荔到鄕林。
(三)菽水還堪樂。何須(四)季子金。

秋城、暮砧を聞き、歸思、忽ち襟に盈つ。
客久しくして人に依ること遍ねく、親衰へて子を念ふこと深し。
靑山、嶺路を分ち、紅荔、鄕林に到る。
菽水、還た樂むに堪へたり、何ぞ季子の金を須ひむ。

【字解】【一】暮砧　暮に打つ砧の聲。【二】盈襟　胸に滿つといふに同じ。【三】紅荔　蔡襄の荔枝譜に「その實、廣上にして圓下、大さ徑寸有五分ばかり、香氣清遠、色澤鮮紫、膜は桃花の紅の如し」とあり、皮日休の詩に紅荔懸櫻絡とある。【四】菽水　禮記に「菽を啜ひ、水を飲んで、その歡を盡す、これ之を孝といふ」とある。貧窮の中に在つて孝を盡すこと。【五】季子金　季子は蘇秦の字。その六國從約の長となつて家に歸りし時、妻嫂は痛く懼れ入つて、待遇おろそかならず、如何なる故かといつて問ふと、「季子の金多きに見ればなり」といつたことが、史記の列傳に見えて居る。

【題義】閩は今の福州地方。この詩は、客の閩中に歸つて親を省するを送つたのである。

【詩意】秋城の日暮に砧うつ聲を聞くと、歸國の念が胸に湧いて、殆んど禁ぜられない。君は久しく客となつて居て、隨分、人の世話にも成り、まだ其志を達せず、御兩親は、年を取つて、ひどく君の事を思つて居られるから、今次の歸省は、至極、結構な事である。青山の間は峠の路を分けて入り、荔枝の畑を行くと、自然、故鄕に赴くので、一寸他には見られぬ景色。たとひ、貧窮の中に在つて、菽を食ひ水を飲んでも、親に奉侍するのが、孝の大なるものであつて、何も蘇秦の如く、六國從約の長となつて、懷中を暖かくせずとも宜しい。

【餘論】前聯十字は、情眞にして語摯、一誦、人をして黯然たらしめる。

圓明佛舍、訪呂山人

圓明佛舍に呂山人を訪ふ

憐君不出院。結夏（一）與僧同。　憐む、君が院を出でず、結夏、僧と同じきを。

陰竹行廊遠。香花掩殿空。　陰竹、廊を行つて遠く、香花、殿を掩うて空し。

飯分齋鉢裏。書寄藏函（二）中。　飯は分つ齋鉢の裏、書は寄す藏函の中。

茶宴（三）歸來晚。西林一磬風。　茶宴、歸り來ること晚し、西林、一磬の風。

【字解】【一】結夏　荊楚歲時記に「四月十五日、天下の僧尼、禪刹に就いて挂搭す、これを結夏といふ」とある。結夏は卽ち安居。四月十五日より、僧衆が一所に靜居して修行すること、その期限は、九十日。夏備り、夏居ともいふ。徐賁の詩に、不出眞如結夏僧とある。【二】藏函中　經藏の箱の中、白居易の自記に「文集、五本あり、一本は廬山東林寺經藏院に在り、一本は蘇州南禪寺經藏の內に在り」と見ゆ。【三】茶宴　卽ち茶會、雲仙雜記に「錢起、字は仲文、趙莒と茶宴を爲し、又、かつて長孫の宅を過ぎ、朗上人と茶會を爲す」とある。

【題義】圓明精舍は、姑蘇志に「圓明寺は、吳江縣二十三都に在り」と見ゆ。この詩は、圓明寺に山人の呂某を訪うて作つたのである。

【詩意】君が院をば出でず、多くの僧と共に、夏ごもりを致されるのは、まことに奇特の至。陰を投ずる竹に傍うて、長廊を巡れば遙けく、香ばしき花に掩はれて、佛殿の中には、人も居ない。飯は、齋の鉢より分けて貰ひ、おのが著した書は、經藏に寄贈して、函中に入れてある。茶會を畢つて歸れば、日すでに暮れ、西林の風に飄へる磬聲が、いと淋しげに聞こえるのみである。

答宗人廉夜飲王氏池亭見懷

宗人廉、夜、王氏の池亭に飲み、懷はるるに答ふ

遙聞池上酌。涼夜失炎天。(一) はるかに聞く、池上に酌むと、涼夜失炎の天。

酒碧傾當竹。衣香坐近蓮。 酒は碧に、傾けて竹に當り、衣香ばしく、坐して蓮に近し。

沿波人弄月。翻樹鳥鳴煙。 波に沿うて、人、月を弄し、樹に翻つて、鳥、煙に鳴く。

座上誰相憶。唯應是惠連。(二) 座上、誰か相憶ふ、唯だ應に是れ惠連なるべし。

【字解】【一】失炎天 暑氣の無くなつた天氣。【二】惠連 南史謝方明傳に「子惠連、年十歲、能く文を屬す。族兄靈運、これを嘉賞して云ふ、篇章ある每に、惠連に對すれば、輒ち佳語を得と。かつて、永嘉の西堂に於て詩を思ひ、竟日就らず、忽ち夢に惠連を見る、即ち池塘生二春草一を得、大に以て工と爲す」とある。

【題義】宗人は同宗、即ち同姓の人、名を廉といふから、即ち高廉。その高廉が、ある夜、王氏の池樓に飲み、寄懷の作を寄せたから、これに答へたのである。

【詩意】はるかに承れば、涼夜、暑熱の忽ち去りしに乘じて、王氏の池亭で會飲したとのことで、酒の碧なるは、竹に向つて之を酌むからであらうし、衣の香ばしきは、蓮の花に近く坐つて居たからであらう。波に沿うて、池上を徘徊しつつ、人が月を弄ぶと、木の上から翻つて、鳥が煙の中に鳴いて居る。その座上、誰が最も予を憶つたかといへば、かの惠連に比すべき我が族弟、即ち足下であつたらう。

【餘論】すでに他を以て惠連に比した上は、隱然、自ら靈運を以て居るので、作者に於ては、もとより當然の事であらう。この詩中、池上といひ、座上といひ、上の字の複して居るのは、まことに目障りである。

賦得蟬送別

蟬を賦し得て、別を送る

疏槐細柳中。涼占一枝風。 疏槐細柳の中、涼は占む一枝の風。

蛻出形猶弱。驚飛響未終。 蛻出して形なほ弱、驚飛して響未だ終らず。

雨來林館靜。日下驛門空。(一) 雨、來つて林館靜に、日、下つて驛門空し。

離管尊前發。淒涼調正同。(二) 離管、尊前に發す、淒涼、調、正に同じ。

【字解】【一】林館 林中の亭館。【二】離管 別離の際に吹く竹管といふので、即ち笛であらう。

【題義】ある人の遠行を送るに際し、蟬を詠じて、餞別の意を寓したのである。

【詩意】槐葉疏に柳樹密なる中に在つて、蟬は、涼しげに枝に止まつて、折から吹く風を獨占して居る。この蟬は、やつと脫け出たばかりで、體も尙ほ弱弱しく、驚いて飛ぶと、いつまでも、鳴く聲を止めない。雨が降つて林中の亭館靜なる時、夕日が沈んで驛門に人なき折から、蟬の最も得意な時分である。ここに、君の行を送つて、尊前に笛を吹くものがあつたが、その淒涼の調は、さながら、この蟬の聲に似て居る樣である。

何隱君小墅

移家營別墅。一徑竹扉開。
泉滿疏渠放。花多借地栽。
壁間田器挂。窓裏浦帆來。
自戀幽居樂。誰言是棄材。

何隱君の小墅

家を移して別墅を營み、一徑、竹扉開く。
泉は滿ち、渠を疏して放ち、花は多く、地を借りて栽う。
壁間に田器挂り、窓裏に浦帆來る。
自ら戀ふ幽居の樂、誰か言ふ、是れ棄材。

【字解】【一】疏渠　溝渠を疏通させる。【二】田器　すき鍬の類。【三】浦帆　浦上の行舟。

【題義】小墅は、ささやかな別莊。何隱君は、名字閱歷ともに不詳。

【詩意】君は、家を移して、專ら別莊の方を經營せられ、一徑をたどり行くと、どん詰まりに、竹の扉が開いて居る。泉の滿ち溢へた時は、溝渠を疏通して之を放出し、花は多すぎる位で、附近の土地を借りて栽植して居る、壁間には、犂や鍬が挂けてあつて、その本業を知るべく、窓の中には、浦上の帆影が見えて、景色が頗る面白い。君は、自ら幽居の樂を眷戀して此に居るといふが、いかにも御尤もで、誰も役に立たぬ人物だといつて、けなすものはない。

【餘論】後聯は、小墅內外の景を分敍して、さながら視るが如くである。

贈張明府

聞道彈琴處。門前柳帶沙。
海珍通估市。湖稅減漁家。
暮港迷荷葉。秋田間豆花。
亂來無此地。君政亦堪誇。

張明府に贈る

聞くならく、琴を彈ずる處、門前、柳、沙を帶ぶと。
海珍、估市を通じ、湖稅、漁家に減ず。
暮港、荷葉を迷ひ、秋田、豆花を間る。
亂來、この地なし、君の政、亦た誇るに堪へたり。

【字解】【一】彈琴　宓子賤の故事、前に數ば見えて居たが、呂氏春秋に「宓子賤、琴を彈じて單父を治む」とある。【二】海珍　海外の珍貨。【三】湖稅　湖上の漁業稅。【四】暮港　港は入江。【五】間豆花　まじる、田の中處處に種ゑてある。

【題義】明府は太守の尊稱。この詩は、太守張某に贈つたので、詩で見ると、その任地は、兩廣邊であるらしい。

【詩意】承はれば、君は琴を彈じて、領内自然に治まり、お宅の門前には、柳が沙を帶び、水に傍うて種ゑてあるとのことである。海外の珍貨は、商人の市場に引きも切らず出で、湖上の漁業稅は、漁家の爲を思うて、大分減少された。入江の夕ぐれには、蓮の葉が一ぱいの爲に、望眼將に迷はむとし、秋の畑には、處處に豆の花が咲いて居る。一たび爭亂を經たる後、天下の廣きも、この地の如き安寧で住み善い處は少く、君の政績は、まさしく世に誇るべきものである。

【餘論】湖稅減漁家は、湖稅が餘り甚しい爲に、漁家が減少したといふのではなく、從來高かつたのを漁家の爲に減少したと見ねば、意義不通となるが、その曖昧にして語法の好ましからぬことは、辯を俟たぬ。

送唐博士肅移家檇李

唐博士肅の家を檇李に移すを送る

楊柳發初齊。春陰廢苑西。

楊柳、發して初めて齊しく、春陰廢苑の西。

故人乘醉別。新鳥傍愁啼。

故人、醉に乘じて別れ、新鳥、愁に傍うて啼く。

舟重全家去。詩多一路題。

舟は重くして全家去り、詩は多くして一路題す。

杏花開北郭。誰復共招攜。

杏花、北郭に開いて、誰か復た共に招攜。

【字解】【一】初齊　出揃ふ。

【題義】列朝詩集に「唐肅、字は處敬、會稽の人、至正己亥、江浙の鄕試に中りて、黃岡書院山長を授けられ、嘉興儒學正に轉ず。洪武の初、召されて禮樂書を修し、應奉翰林文學兼國史院編修官に擢んでられしが、疾んで朝を失ひしを以て、罷めて歸里し、佃濠の瞿相山に謫せられ、歲餘にして卒す」とある。すると、この詩は、靑邱が南京に居た頃の作で、唐肅の官を罷めて歸里するを送つたのである。

【詩意】柳の葉は、初めて出そろひ、廢苑のあたりは、曇つて、ぼんやりして居る。わが友は、醉に乘じて別れ去り、春の鳥は、わが愁に傍うて啼いて居る。一家の眷屬を載せた爲に、舟は重げに見え、途すがら留題して行くから、詩は澤山出來るであらう。さはれ、君去りし後は、北郭に杏花開くとも、誰と共に相攜へて游賞すべきか。それを思ふと、まことに、物さびしく遺憾の至である。

贈妓

妓に贈る

樂籍（一）小（二）名收。侯家舊主（三）謳。

樂籍、小名收まる、侯家の舊主謳。

笑能撩客喜。醉肯逐人留。　笑へば能く客を撩して喜ばしめ、醉ふも肯て人を逐うて留まらむや。
蝶(四)識薫香氣。鶯慚度曲喉。　蝶は識る薫香の氣、鶯は慙づ度曲の喉。
更憐諳酒令(五)。少日住揚州(六)。　更に憐む、酒令を諳んずるを、少日、揚州に住す。

【字解】【一】樂籍　妓流の名籍、牧竪閒談に「元和中、成都の樂籍、薛濤といふもの、篇章を善くし、辭辯を足る」とある。【二】小名　即ち藝名、宋の王銍に侍兒小名錄がある。【三】主謳　音頭取り、漢書衛皇后傳に「后、字は子夫、平陽の主謳者たり。すでに飲む、帝、ひとり子夫を悅び、遂に宮に入る」とある。【四】蝶識　開元遺事に「都下の名妓楚蓮香、國色無雙、出入ことに蜂蝶相隨ふ、その香を慕ふを以てなり」とある。【五】酒令　賓退錄に「後漢の賈逵、かつて酒令を作る。唐、最も盛なり。本朝、歐公、九射格を作り、勝負を分たす。酒を飲むもの、皆適然に出づ。陳述古、亦た嘗て酒令を作る。近ごろ、李如圭、漢酒令を作る。今、館閣小酒令一卷あり」と見ゆ。多く謎の樣なもので、これを言ひ中てぬものは、罰として飲ませられる。【六】揚州　杜牧の詩に、十年一覺揚州夢、贏得青樓薄倖名とあつて、唐の中葉に於て、揚州は、天下第一風流の勝區であつた。

【題義】この詩は、ある席上に於て、侍坐の妓に贈つたのである。

【詩意】今こそ、妓籍に藝名を掲げて居るが、もとは、侯家の音頭取りであつた。その笑ふ時は、客の心を撩亂して喜ばしめ、醉つた處で、人に口說かれて留宿することを肯んせず、生來の堅造として知られて居る。蝶は、衣の焚き物の香を識別して、その後に隨ひ、鶯さへも、歌ふ喉のすぐれたるに對して、慙ぢ入るばかり。その上、酒令を諳記して居て、取り持ちが上手であるが、それも其筈、若い時、揚州に住んで居て、嬌名を一時に擅にしたのである。

送顧倅之錢塘

顧倅の錢塘に之くを送る

之(一)官卽勝游。送別漫多愁。　官に之くは卽ち勝游、送別、漫に多愁。
草色荒宮燕。槐陰(二)遠驛(三)騶。　草色、荒宮の燕、槐陰、遠驛の騶。
湖通朝汲井。潮動夜眠樓。　湖は通じて、朝に井を汲み、潮は動いて、夜、樓に眠る。
早向臨平(四)過。荷花已欲秋。　早く臨平に向つて過ぎよ、荷花、すでに秋ならむと欲す。

【字解】【一】之官　赴任する。【二】槐陰　槐は多く街路の並木として種ゑてある。【三】遠驛騶　遠い驛に向つて驂せる馬。【四】臨平　杭州府志に「臨平山は、仁和縣に屬す」とある。

【題義】倅は縣官の次役。この詩は、縣倅顧某の錢塘に赴任を送つたのである。

【詩意】赴任することが、取りも直さず勝游であつて、君の得意は、さることながら、ここに、その行を送るに際しては、自然愁に堪へられない。草色青青として、燕は荒宮に舞ひ、槐陰漠漠として、馬は遠驛に向つて行く。任地の錢塘は、西湖にも海にも近い處、朝早く井水を汲むと、井は西湖に通じて居るし、夜遲く樓上に眠ると、樓は潮聲に動かされる。なるべく早く臨平を過ぎるが善いので、

名だたる蓮は、丁度今が見頃であらう。

【餘論】後聯は、錢塘の風土を寫して、極めて的確である。

答高廉同飲後見寄　　高廉の同飲後、寄せらるるに答ふ

竹林清暑宴。客散獨歸時。　　竹林清暑の宴、客は散す獨歸の時。
愁記歡餘別。醒慙醉後詩。　　愁へて記す歡餘の別、醒めて慙づ醉後の詩。
蟬催斜景急。鳥度廣川遲。　　蟬は斜景を催して急、鳥は廣川を度つて遲し。
何事聞鐘處。勞君尙遠思。　　何事ぞ鐘を聞くの處、君を勞して尙ほ遠く思はしむ。

【字解】【一】清暑宴　暑氣拂ひの酒宴。【二】斜景　景は日影、斜陽に同じ。【三】廣川　川は、必ずしも江河ではなく、平原をいふ。

【題義】高廉は、卽ち前に一寸見えた宗人廉である。この詩は、高廉と會飲せし後、廉から詩を寄せて來たから、これに答へたのである。

【詩意】竹林中に暑氣拂ひの酒宴を催し、やがて、坐客皆散せしに因つて、自分も一人で歸つて來た。しかし折角歡を盡せし後に別れるもつらく、醒めての後に醉後の詩を見ると、出鱈目で、全く成つて居らぬが愧かしい。歸る途すがら、蟬は急に嘶いて、斜陽を促すが如く、鳥は廣い平原を度つて、歸り行くのも早くはない。夕ぐれの鐘を聞いて居る處へ、君が遠思を勞して、態態寄懷の詩を寄せられた、その御志は、まことに辱い。

沈徵士鉉野亭　　沈徵士鉉の野亭

淸時猶在野。獨臥見高情。　　淸時、猶ほ野に在り、獨臥、高情を見る。
移艇聞煙唱。鉤簾看雨耕。　　艇を移して煙唱を聞き、簾を鉤して雨耕を看る。
江晴雙鶴下。樹晚一牛鳴。　　江は晴れて雙鶴下り、樹は晚にして一牛鳴く。
回首徒相憶。柴車不入城。　　首を回らして徒に相憶ふ、柴車、城に入らず。

【字解】【一】淸時　太平の世。【二】煙唱　煙中の漁唱、卽ち漁歌。【三】雙鶴　鶴はこうのとり。【四】柴車　高士傳に「何默、かつて穴陽に隱み、柴車に乘す」とあつて、粗末なる車。

【題義】徵士沈鉉は、前に卷六、送沈徵士鉉歸海上の題下に注して置いたが、その中に「世郊外に居り、室を築いて野亭といふ」とあるから、ここの野亭は、卽ちそれで、あまり平凡ではあるが、居室の號と見える。この詩は、卽ち沈鉉の野亭に寄題したのである。

【詩意】この太平の世に際し、君は依然として野に居り、悠悠獨臥、その高情は、明かに知られる。そこで閒なる儘、小舟を移して煙中の漁歌を聞き、簾を捲き上げて雨裏に耕す有様を見て居る。江天晴れたる時は、雙鸛下り來り、樹色たそがるる折から、一牛が地に鳴いて居る。おもへば、日夕徒に相憶ふだけで、君は柴車に乘つて城中に入ることなき爲め、滅多に、御目にかかれぬのは殘念である。

題醫師王隱君墓表後

醫師王隱君の墓表の後に題す

孤舟別楚水。客鬢已蒼蒼。　孤舟、楚水に別る、客鬢、すでに蒼蒼。

竟賦招魂些。虛傳續命方。　竟に賦す招魂の些、虛しく傳ふ續命の方。

悲風柏隴小。積雨藥園荒。　悲風、柏隴小、積雨、藥園荒る。

生滅雖能悟。看碑亦感傷。　生滅、能く悟ると雖も、碑を看て亦た感傷。

【字解】【一】蒼蒼　ここでは青いことはなく、古色蒼然の蒼で、色を失ふ、灰色になる、つまり白いこと。【二】招魂些　些は楚辭に見えた語助で、ここでは楚辭といふ義。【三】續命方　命を延ばす藥方。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】むかし、揚子江上に孤舟を乘り出して、君に別れし後、予は、客鬢すでに白く、大分、年が寄つた。料らざりき、ここに、君の死を弔うて、招魂の楚辭を賦せむとは。そして、君の家には、續命の藥方があつたといふが、かうなつて見ると、何の效果もなかつたものと思はれる。今しも、悲風吹き渡つて、柏樹茂れる墓は、極めて小さく、積雨の爲に、折角の藥園も、荒れはてて仕舞つた。生滅常ならざることは、十分悟り切つて居るが、碑を見ると、矢張、感傷に堪へられない。

贈朱山人

朱山人に贈る

老來嫌衆累。依澗獨開房。　老來、衆累を嫌ひ、澗に依つて、ひとり房を開く。

積雨苔生桁。廻風葉滿牀。　積雨、苔、桁に生じ、廻風、葉、牀に滿つ。

學僧持淨律。避客錄奇方。　僧を學んで淨律を持し、客を避けて奇方を錄す。

若問塵中事。無聞不是忘。　もし塵中の事を問はば、無聞、これ忘ならず。

【字解】【一】衆累　多くの俗累。【二】苔生桁　桁は衣桁、古樂府東門行に「還視桁上無懸衣」とある。【三】淨律　清淨なる戒律、傳燈錄に「無上菩提、身に被るを戒となし、口に說くを法となし、心に行ふを律となす」とあり、指月錄に淨律淨心、心卽是佛とある。【四】奇方　珍らしき藥方、唐書陸贄傳贊に「贄、すでに荒遠に放たる、常に戸を閉ぢ、人、その面を識らず、古今集驗方五十

嘗を罵り、以て郷人に示すといふ」とある。

【題義】説明に及ばぬ。但し、山人の名字閲歴等は不詳。

【詩意】君は、老來、さまざまの世上の俗累が、うるさいといつて、澗に傍うて、ひとり山房を開かれた。長雨の折など、苔が衣桁の上に生じ、廻風一たび過ぐれば、落葉は吟牀に滿つるばかり。又僧を學んで、淸淨なる戒律を固守し、客を避けて、珍らしい藥方を頻りに蒐錄して居る。もし、塵中の事を問うたらば、敢て忘れたではないが、この頃は、丸で耳にせぬから、何も知らないと云はれるだらう。

【餘論】前聯は工警、巧に澗上の隱棲を寫して居る。

谿上

秋色共谿長。游人語（一）笑涼。
萍開天倒影。蓮（二）墮水流香。
（三）魚罶和星漉。禽（四）罝帶雨張。
從今搖桂（五）櫂。不必問瀟湘。

谿上

秋色、谿と共に長く、游人、語笑涼し。
萍は開いて、天、影を倒にし、蓮は墮ちて、水、香を流す。
魚罶、星に和して漉き、禽罝、雨を帶びて張る。
今より桂櫂を搖かし、必ずしも瀟湘を問はず。

【字解】（一）語笑　笑語に同じ。（二）蓮墮　蓮の花が落ちる。（三）魚罶　罶は竹で造つた捕魚の具。（四）禽罝　鳥を捕ふる網。（五）桂櫂　楚辭の九歌に桂櫂兮蘭枻とあつて、香木で造つた櫂。

【題義】ただ谿上では分からぬが、檇李詩繫には、査家蕩と題し、蕩は嘉善縣北に在つて藕花が多いとのことである。

【詩意】秋色は、谿水と共に長く、游人の笑語は、涼しげに聞こえる。浮草が開くと、天は影を倒にして池中に映じ、蓮の花が落ちると、流るる水も、香を帶べるが如くである。星あかりの下に、魚の罶を引き出して見たり、雨の中に、鳥を捕ふる網を張つたりして居る。今より、桂櫂を用意して漕ぎ出すと、又一段の樂で、必ずしも、瀟湘を問ふには及ばない。

次韻楊儀曹雨中

雨中池閣曉。清簟（一）薦文漪。
陰恐晴期遠。寒疑暑候遲。
荷高擎欲折。柳重舞難攲。
應阻陪（二）高詠。開簾看散（三）絲。

楊儀曹の雨中に次韻す

雨中池閣の曉、清簟、薦文漪たり。
陰は恐る晴期の遠きを、寒は疑ふ暑候の遲きを。
荷は高くして擎ぐれば折れむと欲し、柳は重くして舞へば攲て難し。
應に高詠に陪するを阻つなるべし、簾を開いて散絲を看る。

【字解】【一】萬文簟　竹むしろの上の斑紋が漣波の樣である。【二】陪高詠　吟席に陪する。【三】散絲　雨の降るを形容して云ふ。

【題義】唐書百官志に「武德三年、儀曹郎を改めて禮部郎中といふ」とあるから、儀曹は即ち禮部郎中の古稱。その職に居た楊某が雨中の詩を寄せられたから、次韻して之に答へたのである。

【詩意】曉早く、雨中の池閣に横臥して居ると、竹むしろの斑紋は、漣波の如く、さも涼しさうに見える。しかし、この曇天は、容易に晴れさうもなく、あまり寒いので、夏の季候が遲いのかと疑ふばかり。雨を帶びては、蓮の葉の高きは、擎げたるまま折れさうであるし、柳の葉は重たげであつて、舞ふ時は、直立して居られぬ樣である。どうか、吟席に陪したいと思つて居るものの、簾を開いて、細雨絲を散ずるが如く降り來るを見れば、これに妨げられて、まことに、不本意の至である。

寄錢塘諸故人

錢塘の諸故人に寄す

年少客名都（一）。狂游每共呼。　年少、名都に客たり、狂游、每に共に呼ぶ。

荷深箏在舫。竹靜矢鳴壺（二）。　荷深くして、箏、舫に在り、竹、靜にして、矢、壺に鳴る。

明月潮千里。殘陽雨半湖。　明月、潮千里、殘陽、雨半湖。

故人能念否。歡意近來無。　故人能く念ふや否や、歡意近來無し。

【字解】【一】名都　即ち錢塘、もと南宋の都たりしが故に云ふ。【二】矢鳴壺　これは投壺の戯で、遠く離れて矢を壺中に投げ入れ、その多寡に因つて、勝負を競ふのである。

【題義】說明に及ばぬ。靑邱は、吳越の游を爲せし時、錢塘に立ち寄つて淹留したことがあるので、その折の知人輩に寄せたのである。

【詩意】さきに、年少の時、錢塘に客となり、日夕狂游、每に諸君と共に誘ひ合つて居た。蓮の花の深い處に、游山舟を漕ぎ入れて、箏を彈せしめ、竹影靜かなる邊に於ては、投壺の游戯を試みたことがある。明月の下には、千里の潮が押し寄せ來り、夕陽の中には、半湖の雨が未だ晴れずに居た。予は、近ごろ、格別面白いこともなくて、いたく閉口して居る折から、舊知の諸君は、幸に予を念つて居て吳れるか如何。

送烏程馮明府

烏程の馮明府を送る

靑山若下（一）南。一騎入晴嵐（二）。　靑山、若下の南、一騎、晴嵐に入る。

縣治（三）琴聲古。泉香酒（四）味甘。　縣、治まつて琴聲古く、泉、香ばしくして酒味甘し。

竹欄春護鴨。葦箔夏分蠶。　竹欄、春、鴨を護し、葦箔、夏、蠶を分つ。

大小馮君後。傳家爾最堪。　大小馮君の後、傳家、爾、最も堪へたり。

【字解】【一】若下　一統志に「湖州長興に上若下若水あり」と見ゆ。【二】晴嵐　嵐は山氣。【三】絃治琴聲古　宓子賤の故事、前に贈張明府の詩中にも見ゆ。【四】酒味甘　吳地理志に「吳興烏程縣、酒、名あり」と見え、郡國志に「古しへ、烏巾の程林、ここに居り、能く酒を釀し、因つて、以て酒に名づく」とある。【五】葦箔　葦を編んで簾の如くし、その上で蠶を飼ふ。馬祖常の詩に蓽門仍葦箔とある。【六】大小馮君　漢書に「馮野王、その弟立と皆奉世の子なり。立、五原太守となり、西河・上郡に徙る、治行、野王と相似たり、民、これを歌うて曰く、大馮君。小馮君。兄弟繼踵相因循。聰明賢知惠吏民。政如魯衞德化鈞。周公康叔猶二君。」とある。

【題義】この詩は、烏程の太守馮某の赴任を送つたのである。

【詩意】下若水の南なる青山の麓を過ぎて、唯だ一騎、晴れたる山氣の中に乘り入つて赴任される。縣は治まつて、琴聲、古調を弄し、泉は香ばしく、從つて、それで釀した酒は、極めて味が善い。春、竹の欄をしつらへて鴨を飼ひ、夏、葦の簾を編んで、その上で蠶を養ふ。むかし、大馮君・小馮君といふ賢守があつたが、傳家の吏治は、君だけには屹度出來ると思ふので、何分しつかりと遣つて貰ひたい。

【餘論】大小馮君は、千年も前で、あまり懸け離れて居るが、同姓ではあるし、太守として令名もあつたし、先づ以て切實であらう。

喜了上人見過

　　　　了上人の過ぎらるるを喜ぶ

幾時西澗別。忽喜過家園。　幾時か西澗に別る、忽ち喜ぶ家園を過ぐるを。

澹泊林間供。虛空世外言。　澹泊林間の供、虛空世外の言。

豆花零晚架。瓜蔓絡秋垣。　豆花、晚架に零ち、瓜蔓、秋垣に絡ふ。

莫厭頻相顧。衡門久息喧。　厭ふ莫れ、頻りに相顧みるを、衡門、久しく喧を息む。

【字解】【一】幾時　何時の義。【二】家園　青邱の鄕里を指す。【三】林間供　供は飮食。【四】晚架　架は棚。【五】息喧　喧は騷がしきこと、世と遠ざかる。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】西澗に於て上人と別れたのは、何時であつたか、はッきり覺えても居らぬが、今日、ここ予の鄕里を訪問されたのは、まことに喜ばしい。何分、林間の侘住居で、碌な物も差上げられないが、世外の話は虛空であつて、格別、毒にもならない。頃しも秋、豆の花は古りたる棚より落ち、瓜の蔓は、破れ垣に卷きついて居る。どうか足繁く來て御貰ひしたいので、予は、衡門の中に在つて、久し

く世事を忘れ、まことに、寂寥の思に堪へられない。

【餘論】金檀注本には、第七句に頻相過とあつて、過の字が第二句、過家園の過と重複する處から、ここでは、大全集に據つて、前に掲げた通り、頻相顧と訂正して置いた。

病目　　目を病む

閉目洗黃蓮。深窓坐兀然〔一〕。　目を閉ぢて、黃蓮に洗ひ、深窓、坐して兀然。

未忘聽鳥興。暫絕看花緣。　未だ鳥を聽くの興を忘れず、暫く絕つ花を看るの緣。

問女知簷日。嗔奴畏竈煙。　女に問うて簷日を知り、奴を嗔つて竈煙を畏る。

願因無見處。得證定心禪。　願はくは見る處なきに因つて、定心の禪を證するを得む。

【字解】〔一〕黃蘗　藥の名、本草綱目に「黃蘗は、主として熱氣を治す、目痛み、眥傷つくも、涙出でて目を明かにす」とある。〔二〕兀然　獨坐の貌。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】この頃、目を煩つて居る處から、黃蓮を煎じた汁で、雙眼を閉ぢたまま之を洗ひ、深窓の下に、何も爲すことなく、つくねんとして兀坐し、耳は確かであるから、鳥聲を聽いて打興ずることは出來るが、しばらくは、花を看ることも出來ず、娘に問うて、檐の日影の移れるを知り、家僕を叱りつけて、竈の煙が燻つては困まるといつた。全く物を見ない上は、禪でいふ定心の域に到達したいものだと思つて居る。

病目不飮　　目を病みて飮まず

患目未全明。醫敎謝麴生〔一〕。　目を患へて、未だ全く明かならず、醫は麴生を謝せしむ。

暫從彭澤〔二〕止。恐學左邱〔三〕盲。　暫く彭澤の止むるに從せ、左邱の盲を學ばむことを恐る。

壁下蘭〔四〕尊掩。林間藥臼鳴。　壁下、蘭尊掩ひ、林間、藥臼鳴る。

坐聽連日雨。何物慰閒情。　坐して聽く連日の雨、何物か閒情を慰めむ。

【字解】〔一〕麴生　酒を云ふ。開天傳信記に「葉法善、玄眞觀に居る、かつて、朝客十餘人あり、これに詣る。滿坐酒を思ふ。忽ち一人あり、門を叩いて云ふ、麴秀才と。傲睨して直に入る。法善、ひそかに小劍を以て之を擊てば、手に隨つて元を喪ひ、階下に墜ち、化して瓶榼となる。一坐驚いて、遽に其處を視れば、乃ち盈瓶の醲醞なり、咸な大に笑つて之を飮み、醉うて、その瓶を撫して曰く、麴生の風味、忘るべからざるなり」とある。酒は、元と麴より造るから麴生といつたのである。〔二〕彭澤止　陶淵明に止酒の詩あるより云ふ。〔三〕左邱盲　史記太史公自序に「左邱、明を失ひ、厥れ國語あり」と見ゆ。〔四〕蘭尊　木蘭の材で造つた酒樽、或は蘭の字を唯だの形容と見ても宜しい。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】目を煩つて、まだ全癒せぬ處から、醫者は、酒を禁せよといつた。そこで、しばらく陶彭澤が酒を止めた眞似をしたが、左邱明の如く盲目に成つては困まるからである。蘭亭は、壁下に在つて、蓋をした儘であるし、林間に於ては、臼で藥を搗く聲が聞こえる。つくねんと坐つた儘、連日降りつゞく雨の聲を聞いて居ると、無聊禁せず、しかも、この閒情を慰める物の無いのは、まことに閉口である。

賦得蟹送人之官

蟹を賦し得て、人の官に之くを送る

吐沫亂珠流。(一)無腸豈識愁。　沫を吐けば、亂珠流れ、無腸、豈に愁を識らむや。
香宜(二)橙實晩。肥過(三)稻花秋。　香は橙實の晩に宜しく、肥は稻花の秋を過ぐ。
(四)出簖來深浦。(五)隨燈聚遠洲。　簖を出でて深浦に來り、燈に隨つて遠洲に聚まる。
郡齋初退食。可怕有(六)監州。　郡齋、はじめて退食、怕るべし監州あるを。

【字解】【一】無腸　抱朴子に「山中辰日、無腸公子と稱するものは蟹なり」とある。【二】橙實晩　劉克莊の詩に香切橙實蟹正肥とあつて、橙實は蟹に添へることになつて居る。即ち、その酸汁を懸けて、味を增す爲めであらう。【三】稻花秋　陸龜蒙の蟹志に「江東の人云ふ、稻の登るや、率れ一穗を執り、以て其魁を朝し、然る後、その之くところに從ひ、蚤夜覺沸、江を指して奔る。漁者、緯簫、その流を承けて之を障る、名づけて蟹斷といふ」とある。【四】出簖　簖は上に見えた蟹斷。【五】隨燈　本草に「蟹、性、明に走る」とある。【六】監州　通判を云ふ。歸田錄に「國初、通判、常に知州と權を爭ふ。每に云ふ、我は是れ郡監と。錢昆といふものあり、餘杭の人、浙人、蟹を嗜む、常に外に補せられむことを求む。郡人、その欲するところを問ふ、曰く、但た螃蟹あつて、通判なき處を得ば可なりと。今に至つて、人、以て口實となす」とある。

【題義】説明に及ばぬ。但し、その人は、太守として何處ぞへ赴任するのであらう。

【詩意】蟹が沫を吐くと、珠玉紛亂して流れる樣に見えるが、もとより心腸が無いから、人情を解せず、從つて、愁とは何等の關係もない。その蟹の肉の香を帶びたるは、殊に橙の實の熟する頃に宜しく、その肥えるのは、稻花の秋を過ぎてからである。簖から脫け出でて深い入江に來ても、燈光に隨つて、遠い沙洲の上に集まり、容易に人に捕獲されて仕舞ふ。君も退廳して、官舍に閒居する時、定めて、この蟹を食ふであらうが、むかしの知州輩で、蟹は善いが通判は氣に食はぬといつた人もある通り、通判に對しては、一目置いて、平生、これを怕れて居ることであらう。

江上早發

江上早發

(一)蒼蒼汀霧起。何處望(二)高城。　蒼蒼として汀霧起り、何の處にか高城を望まむ。

游子曉初發。居人寒未耕。　游子、曉、はじめて發し、居人、寒、未だ耕さず。

犬鳴林月落。魚躍浦風生。　犬は鳴いて林月落ち、魚は躍つて浦風生ず。

已有先行者。煙中聞棹聲。　すでに先行の者あり、煙中、棹聲を聞く。

【字解】【一】蒼蒼　ここのも青い意味ではなくて白色。【二】高城　城は城壁。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】汀の霧は、白く立ちこめ、高い城壁も、何處かと思ふ位。旅客は、曉、すでに出發したが、居民は、寒さに恐れて、まだ耕作に出て來ない。犬が鳴いて、殘月、林外に落ち、魚が躍ると、微風、浦上に生ずる。但し、吾よりも早く出かけた人もあるらしく、煙の中で棹の聲が聞こえて居る。

【餘論】後半四句、一氣呵成、そして、頸聯の對仗も、穩妥にして、且つ切當である。これは、寧ろ此四句だけを存して五絶にした方が善かつたかも知れないので、まして、第一句の汀霧は、結句の煙中と衝突する傾向がある。

客舍喜姪庸至

客舍、姪庸の至るを喜ぶ

客裏逢人喜。相過況阿宜。　客裏、人に逢うて喜ぶ、相過ぐ、況んや阿宜なるをや。

遠游驚歲晚。多難惜門衰。　遠游、歲晚に驚き、多難、門の衰へたるを惜む。

帆落江橋近。鐘來野店遲。　帆、落ちて江橋近く、鐘、來つて野店遲し。

一杯燈下語。渾似在家時。　一杯、燈下に語る、すべて家に在るの時に似たり。

【字解】【一】阿宜　杜牧の姪の小字を阿宜といつた。【二】門衰　家門が衰微する。【三】帆落　帆を卸して仕舞ふ。

【題義】姪といふからには、兄の子で、現に靑邱には二兄があつて、その一は、吳の張士誠亡びし後、遠地に移されたことが、前に見えて居て、或は其方の兄の子かと思はれる。これは、多分、靑邱が南京に居た頃の作であらう。

【詩意】客中岑寂、人に逢ふことは、極めて嬉しく、まして、肉身の甥に於ては、猶更の事である。われは、遠游して、歲の將に暮れむとするに驚き、不幸つづきで、家門の衰微したのは、まことに、殘念である。汝が此に來る途すがら、帆を卸せば、江橋すでに近く、鐘が聞こえると、野店に日が暮れかかつたであらう。今しも、燈下に酒を傾けつつ、つきぬ話をして居ると、丸で家に居た時と同じ樣な氣がする。

哭周記室

萬里一羈臣(一)。悲歌楚水春。
漫期重會面。竟作永傷神。
主祭唯孤姪。收詩(二)有故人。
獨揮聞笛淚(三)。斜日下西鄰。

周記室を哭す

萬里一羈臣、悲歌楚水の春。
漫に期す、重ねて會面せむことを、竟に永く傷神することを作す。
祭を主るは、唯だ孤姪、詩を收むる、故人あり。
獨り揮ふ笛を聞くの淚、斜日、西鄰を下る。

【字解】【一】羈臣　前に數ば見ゆ、羈旅の臣。遠く家鄕を離れて仕官する人。【二】收詩　遺稿の詩を取り收めて整理する。【三】聞笛淚　前に卷四、競使君の五古中にも引いたが、晉書向秀傳に「秀、山陽の舊廬を經、鄰人、笛を吹くものあり、聲を發すること寥亮、秀、乃ち思舊賦を作る」とある。

【題意】說明に及ばぬ。但し、周記室は、前に數ば見えて居た靑邱の熟友である。

【詩意】君は、萬里の遠國から來た羈旅の臣で、揚子江岸の春を悲歌し、生涯、不得意を免れなかつた。さきには、いづれ重ねて逢へるだらうと思つて居た處が、料らざりき、凶音忽ち至り、永く傷心せむとは。君の歿後、嗣子なく、祭を主るは、唯だ一人の甥であつたが、遺詩を取りまとめるに、然るべき友人のあつたのは、まだしも幸である。ここに、笛を聞いて、われ獨り淚を揮へば、折から、夕日が西鄰に下つて、愈よ物さびしきを覺えた。

【餘論】後聯は、哀痛の極、詞客身後の寂寞を道ひ得て、復た餘蘊なきものである。

過永定廢寺

亂後僧何去。門閒落葉時。
晝昏(一)秋蠹(二)老。齋斷(三)午禽飢。
罷說傳心法(四)。猶看賜額碑。
不知興壞理。來此豈無悲。

永定の廢寺を過ぐ

亂後、僧いづくにか去る、門は閒なり落葉の時。
晝昏くして秋蠹老い、齋斷えて午禽飢う。
傳心の法を說くを罷め、猶ほ看る賜額の碑。
興壞の理を知らず、ここに來る、豈に悲なからむや。

【字解】【一】晝昏　壁畫が古くなつて、ぼんやりして來た。【二】秋蠹　蠹は紙蟲の類。【三】齋斷　齋は僧食、とき。【四】傳心法　心から心に傳へる妙法、即ち佛法。

【題意】姑蘇志に「永定敎寺は、吳江縣荒浦村に在り」と見え、この詩は、その寺の荒廢に歸した實況を詠じたのである。

【詩意】戰亂の後、寺中の僧侶は、何處へか散り失せて、さしもの名刹も、今は無住となり、折から、落葉する時に際して、山門の邊、いとも靜にして、音なふ人もない。壁畫は年を經て、模糊に歸し、秋蠹も、老いては、これを食まうともせず、僧食を設けず、從つて殘飯を投げ與へることもないから、

晝見る鳥も、飢ゑて居る樣である。ここに在つて、妙法を說き出づる人なきも、むかし、敕額を賜はつた旨を記した石碑だけは、殘つて居る。予は、興廢の理を知らざれども、眼前に、この寺の荒れはてた模樣を見ると、自然に悲しく成つて來る。

楓橋送丁鳳

楓橋、丁鳳を送る

紅葉寺前(一)橋。停君晚去(二)橈。　紅葉寺前の橋、君が晚去の橈を停む。

醉應忘世(三)難。歸不計程遙。　醉うては、應に世難を忘るべく、歸るには、程の遙なるを計らず。

山隱初沈日。風催欲上潮。　山に隱れて初めて日を沈め、風催して潮を上らむと欲す。

離魂來此處。還似灞(四)陵銷。　離魂、この處に來る、還た灞陵に銷ゆるに似たり。

【字解】【一】寺前橋　寺は卽ち寒山寺。【二】晚去橈　日暮に出發する舟。【三】世難　浮世の多難なること。【四】灞陵　長安の東北に灞水があつて、そこに架せる橋を灞橋といひ、橋邊には柳多く、唐代、人を送る時には、ここに來て柳を折るを例とした。その近傍に、漢の文帝の陵があるから、ここには灞陵といつたので、實は、灞橋と云つた方が通りが善いが、前に寺前橋といつて、橋の字を使つたから、止むなく、灞陵としたのであらう。

【題意】楓橋は、唐の張繼が舟を泊して、例の月落烏啼の詩を作つた處で、その近傍なる寒山寺と共に爾後甚だ著名である。地は、蘇州閶門の西、日本里數で一里ばかりの處に當り、むかし、旅客は城內から漕ぎ出して、ここを通つたので、その川は、卽ち運河の支流である。この詩は、楓橋まで態態跡を付けて來て、丁鳳の歸國を送つたのである。但し、鳳の字竝に閱歷等は不詳。

【詩意】ここに、紅葉に埋められた寒山寺の前なる楓橋の邊に來り、日暮、將に發程せむとする君の舟を止めて、聊か別意を表した。醉中には、浮世の多難を忘るべきも、君の歸るは、程の遠きを計らず、隨分長旅である。見わたせば、夕日は山に隱れて、初めて沈み、潮は風に促されて、さし始めた。ここに來て別を爲す上は、自然、銷魂を禁せず、さながら、古しへの灞陵に似て居る樣である。

盜發漢侍中許械墓

盜、漢侍中許械の墓を發く

古塚竟誰穿。虛傳錮(一)最堅。　古塚、竟に誰か穿つ、虛しく傳ふ、錮、最も堅きを。

(二)玉魚宵已出。石獸曉猶眠。　玉魚、宵、すでに出で、石獸、曉、猶ほ眠る。

長夜俄看日。幽(三)臺不掩泉。　長夜、俄に日を看るも、幽臺、泉を掩はず。

須知摸(四)金者。亦到漢陵前。　須らく知るべし、摸金の者、亦た漢陵の前に到りしを。

【字解】【一】錮最堅　錮は封錮。【二】玉魚　玉で魚の形を造つたので、明器と同じく棺中に入れて埋葬する。杜甫の詩に昔日玉魚蒙葬地、早時金盌出人間」とある。【三】窮泉　地下を云ふ。【四】摸金者　陳琳が袁紹の爲に豫州に檄する文に「操、又特に發邱中郎將・摸金校尉を置き、過ぐるところ隳突、骸として露はれざるはなし」とある。すると、摸金者は卽ち摸金校尉、陵墓の發掘を其職として居たらしい。

【題義】許僬の墓は、題下の原注に「宜興に在り」と記してある。それから、周必大の游山集に「周橋を渡つて、後漢許太尉馘の墓を訪ふ。古翁仲・龜趺あり、大墩相連り、漸く邑人に劚掘せらる」とあるを見れば、早くから發掘されて居たので、ここに謂ふのは、最近、大仕掛に遣らかしたものと思はれる。

【詩意】この古塚は、畢竟、誰が發掘したのか、封錮は至極堅固といふ評判であつたが、すツかり裏切られた譯である。棺中に收めてあつた玉魚は、夜、すでに取り出され、石獸のみは、曉になつても、平氣で眠つて居る。すでに、發かれたのであるから、墓中では、長夜が明けて、俄に日を見た樣な譯であるが、どうせ、地下であつて、黃泉を掩ひ塞ぐことは出來ない。しかし、古墳發掘は、決して珍らしいことではないので、むかし、曹操の時に、摸金校尉といふものがあつて、漢代の帝陵に、どしどし手を著けて、頻りに之を荒したといふことである。

過海昌贈李侯

海昌を過ぎて、李侯に贈る

(一)閒廳晝下簾。秋色滿疏髯。
閒廳、晝、簾を下し、秋色、疏髯に滿つ。

(二)久戍殘兵老。(三)多貧長吏廉。
久戍、殘兵老い、多貧、長吏廉なり。

陰風潮動郭。晴日地(四)生鹽。
陰風、潮、郭に動き、晴日、地、鹽を生ず。

(五)三老相逢說。年來(六)戸牖添。
三老相逢うて說く、年來、戸牖添ふと。

【字解】【一】閒廳　ひまな役所。【二】久戍　久しく駐屯して居る。【三】多貧　貧窮甚しきこと。【四】生鹽　鹽を製出する。【五】三老　禮記に「三老五更を大學に食はしむ」とあつて、月令章句の注に「三老は國老なり、五老は庶老なり」とある。【六】戸牖　牖は牖、牖戸、規定以外の居宅。

【題義】海昌は錢塘の南、作者は吳越に游んだ時、ここを通過したので、前に卷三、登海昌城樓望海の題下に詳しく述べて置いた。李侯は李君に同じく、前に卷四に送海昌守李使君遷海虞の詩に見えた、その李使君である。この詩は、海昌縣を過ぎて、縣令の李君に贈つたのである。

【詩意】縣の役所は、公務多端ならず、大に閒暇ある處から、晝でも、簾を下して閉廳することがあるし、秋色は、君の疏髯に滿ち、大分霜を帶びて白く成りかけて來た。久しく、屯營を撤せざる爲め、居殘りの兵卒も年老い、貧窮の甚しきに甘んじ、長官たる君は、廉潔を以て知られて居る。陰風吹

き到る折から、潮聲は城郭を動かし、天が晴れて日がきらきらして居る時には、鹽田に於て、どんどん鹽を製出する。かくの如く、地僻にして爭亂に遠ざかり、且つ殖産が盛であるから、戶口蕃殖し、古老の話では、年年、剩戶が頻りに增加したとのことである。

送易從事祖飮南渚

易從事を送りて、南渚に祖飮す

疏楊映老荷。別處最秋多。　疏楊、老荷に映ず、別るる處、最も秋多し。
送客年年路。愁人日日波。　客を送る年年の路、人を愁へしむ日日の波。
霞明添醉色。風急斷離歌。　霞、明かにして醉色を添へ、風、急にして離歌を斷つ。
莫爲官程促。青山易看過。　官程の爲に促さるる莫れ、青山、看過し易し。

【字解】 一 疏楊 半ば落葉して、まばらに成つた楊柳。【二】 老荷 末になつた蓮の花。【三】 官程 官で規定された日程。

【題義】 易從事は名字不詳。祖は、犯軷の祭を行ふ、つまり、出發に先つて、道祖神を祀ること、それから轉じて、送別の意味になる。この詩は、易從事の遠行を送り、仍つて、南渚に於て宴飮を催したといふので、この人は、蓋し舟で行くと見える。

【詩意】 半ば落葉して疏になつた柳は、末になつた蓮の花に映じ、ここ送別の處が、一番秋景に富んで居る。年年、ここより出發する客を送るが、日日、江上の波は、人を愁へしめる。夕やけが赤くなる頃、人も醉色を添へ、風が急なるとき、別れの歌を止め、追手の風に送られて、君は愈よ出發される。行く手の青山は、景色頗る面白いが、ただ輕輕看過し易いから、豫定の日程に促されて、あまり、忙しく行き過ぎざらむことを切望する。

【餘論】 前聯は、平凡の樣であるが、實は錘鍊の後に得たる名聯である。

題張靜居畫

張靜居の畫に題す

楚客寫荆岑。秋雲隔浦陰。　楚客、荆岑を寫す、秋雲、隔浦陰る。
人家連橘塢。水廟映楓林。　人家、橘塢に連り、水廟、楓林に映ず。
亂後淸游歇。愁邊遠色深。　亂後、淸游歇み、愁邊、遠色深し。
相看休向晚。怕有峽猿吟。　相看て晚に向ふを休めよ、怕らくは峽猿の吟ずるあらむ。

【字解】 【一】 楚客 張靜居を指す。【二】 荆岑 荆は楚の別名、もと同意義の字だから通用したのである。岑は峰、故に楚山に同

じ。【三】橘塢　塢は隄。【四】水廟　水邊の祠廟。【五】峽猿吟　峽中に棲む猿が鳴く。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】これは、楚客が、その故郷の山を寫したので、一片の秋雲、浦を隔てて前の方に横はり、此方では、柑橘を栽培してある隄の上に連り、水邊の祠廟は、紅葉の林に映じて居る。畫中の風景は、かくの如くであるが、亂後の事とて、清游を試むるに由なく、愁邊には、遠景が一層ぼんやりして居る。この畫を眺めて、日暮に及んだならば、峽猿が我が心を知つて、悲しげに叫び出すかも知れぬから、いい加減に卷いて收めるが善からう。

夜懷王校書

夜、王校書を懷ふ

燈暗獨吟餘。疏桐月滿除。
燈は暗し獨吟の餘、疏桐、月、除に滿つ。

蟲寒初入戶。鼠餓欲侵書。
蟲寒くして初めて戶に入り、鼠餓ゑて書を侵さむと欲す。

河漢三更望。江湖兩地居。
河漢、三更に望み、江湖、兩地に居る。

相思無去夢。今夜恨何如。
相思、夢を去るなし、今夜恨何如。

【字解】【一】月滿除　除は庭階、劉兼の詩に月移花影過庭除とある。【二】河漢　銀河。

【題義】説明に及ばぬ、校書は官名。

【詩意】ひとり沈吟しつつある間に、油は盡きて、燈火が暗くなり、葉の疏になつた桐の上の月が、光を庭階に投じて居る。蟲は寒氣に恐れて、はじめて戶に入り、鼠は餓ゑて、書物を嚙ぢらうとして居る。銀河は、三更の頃に望むべく、江湖の廣きに、君の一家は兩地に分かれて居る。君を思ふ心は、夢中だに離れず、殊に、今夜の恨は如何ばかりか、どうか察して吳れ玉へ。

答陳則見寄

陳則の寄せらるるに答ふ

何由慰遠思。獨詠寄來詩。
何に由つてか、遠思を慰めむ、獨り詠ず寄來の詩。

行路方難日。淸秋欲盡時。
行路、方に難きの日、淸秋、盡きむと欲するの時。

江多驚雁火。樹少宿鳥枝。
江には雁を驚かすの火多く、樹には鳥を宿せしむる枝少し。

早晚如相見。應憐有鬢絲。
早晚、もし相見なば、應に鬢絲あるを憐むべし。

【字解】【一】遠思　遠き相思の情。【二】寄來詩　陳則より寄せ來りし詩。【三】早晚　その內、いつかの義。【四】鬢絲　白髮。

【題義】説明に及ばぬ。そして、陳則は、前に見えて居た。

【詩意】何に由つて、遠き相思の情を慰むべきか、君から寄せ來りし詩を朗吟するのが、せめてもの心遣りである。今しも、天下爭亂に苦み、愈よ行路難を嘆ずる折から、殊に清秋も將に盡きなむとして居る。江上には、飛雁を驚かす樣な漁火が殊に多く、樹梢には烏鵲を宿せしむる樣な枝も少く、打見るからに、蕭條の至。その內、幸に逢ふことが出來たならば、君は、我が兩鬢に白髮を生じて、形容の痛く枯槁したのを氣の毒に思つて呉れるであらう。

【餘論】前聯は感愴淋漓、殊に餘情の盡きざるを覺える。

煮藥　藥を煮る

葉燥井泉清。山窓藥在鐺。　葉は燥いて井泉淸く、山窓、藥、鐺に在り。

燈前看火候。枕上聽潮聲。　燈前、火候を看、枕上、潮聲を聽く。

味熟吟方就。香來病已輕。　味熟して吟方に就り、香來つて病すでに輕し。

何時采芝朮。養得羽翰成。　何の時か、芝朮を采り、羽翰を養ひ得て成らむ。

【字解】【一】葉燥　落葉を拾ひ集めて燃料にする、それが丁度よく乾いて居る。【二】在鐺　鐺は銅。【三】火候　火の加減。【四】芝朮　芝は靈芝、朮は藥草の名。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】燃料にする落葉は乾き、汲み立ての井水は奇麗に澄んで居る。そこで、藥を鍋に入れて、山窓の下で之を煮立てる。燈前に居て火加減に注意し、やがて煮え上がると、枕上に潮聲を聞く樣な氣がする。藥の味の丁度善く成つた頃に、考へて居た詩が恰も完成し、一種の香氣の漾ふ時、病氣も既に直つた樣な氣がする。何の時か、靈芝草朮の類を采取して服し、そして、羽が生えて登仙する樣にすることが出來やうか。

【餘論】瑣細な事柄を稍や面白く言ひこなしたのは、流石に手腕を見るべきも、題の性質上、格別彼此云ふべき程のものではない。

夜投西寺　夜、西寺に投ず

江月上秋衣。來敲遠寺扉。　江月、秋衣に上り、來つて敲く遠寺の扉。

棲禽驚客至。睡僕訝僧歸。　棲禽は客の至るに驚き、睡僕は僧歸れるかと訝る。

鐘度行廊盡。燈留浴院微。　鐘は行廊を度つて盡き、燈は浴院に留まつて微なり。

非無招旅館。禪寂願相依。　招旅の館なきに非ざるも、禪寂、願はくは相依らむ。

【字解】【一】行廊　通行用の長廊。【二】浴院　風呂場。【三】招旅館　旅客を招き入れる亭館、即ち旅館。

【題義】説明に及ばぬ。但し、西寺の本名は、何と云ふか、分からぬ。

【詩意】江上の月、はじめて上つて秋衣を照らす頃、ここに寺の扉を敲いて、一宿を乞うた。すると、樹上の棲禽は、不意の客來に驚き、廚下に睡つて居た寺男は、僧の歸つたのではないかと思つて居た樣子。寺内に見るところは、夜半の鐘、はるかに響いて長廊を度りて盡きなむとし、風呂場には、燈火が微に殘つて居る。もとより、普通の旅館が無いではないが、禪寂の境に身を寄せたいと思つて、強ひて、此に泊まつたのである。

【餘論】大全集には鐘度行廊盡の盡の字を遠に作り、遠寺の遠と重複して居て、ここに掲げた金檀注本の方が宜しい。

送石明府之崑山

石明府の崑山に之くを送る

茂苑行春罷。攜琴又向東。

茂苑、春を行つて罷み、琴を攜へて又東に向ふ。

潮聲數里外。山色半城中。

潮聲數里の外、山色半ば城中。

帆帶桃花雨。衣翻柳葉風。

帆は帶ぶ桃花の雨、衣は翻る柳葉の風。

島夷聞善政。爲有舶船通。

島夷、善政を聞かば、爲に舶船の通ずるあらむ。

【字解】【一】茂苑　卽ち長洲苑、前に數ば見ゆ。【二】行春　太守が春に方つて領内を巡檢すること。【三】攜琴　宓子賤の故事を暗用したのであらう。【四】桃花雨　桃の花に降りかかる雨。【五】柳葉風　風土記に「河朔春時、疾風數日、一たび作らば三日乃ち止む、吹花擘柳風といふ」とある。【六】舶船通　太倉州志に「太倉は、故と崑山の州治たり、海は州城の東七十里に在り、外、琉球日本等六國に通ず、故に太倉の南關、これを六國馬頭といふ」とある。

【題義】明府は太守の美稱、石某の名字は不詳、崑山は今の上海の附近。この詩は、卽ち石某の崑山太守に赴任するを送つたのである。

【詩意】君は蘇州に居て、この春、巡檢を濟ましたばかりなのに、今度は、例の琴を攜へて、東方に赴任されることになつた。その地は、海の近くで、潮聲は數里の外に聞こえ、一望の平郊で、山の一半は、城中でなければ碌碌見えぬ位。途すがら、征帆は、桃花に降り注ぐ雨を帶び、吟衣は、柳の葉を搖かす軟風に飄つて、時節柄、旅も氣散じなものであらう。島夷どもが、君の善政を聞いたならば、互市貿易を成さうと思ひ、船舶相通じて、頻繁に來往することは、受合である。

【餘論】後聯は明靚の至、濃春の煙景は、まさしく、この十字に盡きて居る。

過城西廢塢

城西の廢塢を過ぐ

亂前游最熟。亂後問都迷。　亂前、游、最も熟す、亂後、問へば、すべて迷ふ。

園散栽花戸。林荒采菊蹊。　園には散ず、花を栽うるの戸、林は荒る、菊を采るの蹊。

廢泉流圃淺。斜日下城低。　廢泉、圃に流れて淺く、斜日、城に下つて低し。

唯有煙中鳥。迎人依舊啼。　唯だ煙中の鳥のみあり、人を迎へ、舊に依つて啼く。

【字解】【一】游最熟　能く游びに來りしこと。【二】栽花戸　園丁の家。【三】采菊蹊　蹊は小徑。

【題義】この詩は、蘇州城西の荒廢した隄を過ぎて作つたのである。

【詩意】亂前には、頻繁に此處に游びに來たが、亂後、今はじめて來り過ぎて、いろいろ問うて見ると、すべて心に迷ふことのみである。園中には、園丁の家が散點して居るが、林下に通じて、かつて菊を采取した小徑は、荒れはてて仕舞つた。灌漑用の泉は、碌碌手入をせぬ爲に、いつしか廢し、畑地に流れて居ても、極めて淺くなり、日は斜にして、城壁の下に低く沈んで行く。唯だ煙中の鳥のみは、人を迎へて、むかしの樣な聲で啼いて居る。

【餘論】廢泉、斜日の一聯は、亂後荒廢の景を道ひ得て、極めて切實である。

送范架閣赴嘉禾兼簡李使君

范架閣の嘉禾に赴くを送り、兼ねて李使君に簡す

陸相祠前路。孤舟欲上時。　陸相祠前の路、孤舟、上らむと欲するの時。

空江難晩別。荒郡易秋悲。　空江、晩に別れ難く、荒郡、秋悲み易し。

月送潮生早。雲隨雁去遲。　月は潮を送つて生ずること早く、雲は雁に隨つて去る「こと遲し。」

幕中知有子。太守只題詩。　幕中、知る、子あり、太守、只だ詩を題するを。

【字解】【一】陸相祠　嘉興府志に「陸宣公祠は、府治の南に在り」と見ゆ。

【題義】架閣は太守の次役、范某の名字は不詳。嘉禾は、一統志に「嘉興府、三國の吳には嘉禾」といふとある。李使君は、卽ち嘉禾の太守。使君は、太守の尊稱。この詩は、范某が架閣となりて嘉禾に赴任するを送り、併せて、手紙に代へて、その地の李太守に寄せたのである。

【詩意】孤舟、愈よ其地に著し、陸宣公祠の前に上陸せむとする時、君の得意、いかばかりぞ。ここに、空江に臨みて、日暮、別を爲すことは、實につらく、殊に亂後の荒郡、秋を悲み易い。やがて、月は潮を送つて、さし上ること早く、雲は雁に隨つて、去ることが遲い。幕中に君が居て、萬事取捌けば、太守は、まことに安心で、暇なるまま、唯だ詩を作つて居られることであらう。

喜呂山人見過江館

呂山人の江館を過ぎらるるを喜ぶ

非君憐夙契。誰肯顧柴門。　君が夙契を憐むに非ずんば、誰か肯て柴門を顧みむ。

日短清江路。風高大樹村。　日は短し清江の路、風は高し大樹村。

交呈新著稿。同發舊藏尊。　交も新著の稿を呈し、同じく舊藏の尊を發す。

莫便尋歸棹。心懷未盡論。　便ち歸棹を尋ぬる莫れ、心懷、未だ盡く論せず。

【字解】【一】夙契　むかしからの交誼。【二】大樹林　地名、青邱の本傳に「沙湖の東に在り、南に遶つて、吳淞江に切す」とある。

【題義】説明に及ばぬ。呂山人は、前に數ば見えて居た。

【詩意】君が舊來の交誼を思うて、態態、來訪されるに非ざれば、誰が敢て、この柴門を顧みるべきか。今しも、清江の路に、日は暮れ易く、名にしおふ大樹村は、風あたりが烈しい。君と對坐する間、引き替へ、取り替へ、頃ろ作つた詩稿を見せ、又一處になつて、貯への酒樽の口を明けた。まだ心中の思を十分に盡さず、話したいことが澤山あるから、さう直ぐに歸棹を尋ねず、マア緩ツくりして居るが善からう。

贈鄰友

鄰友に贈る

同居一塢中。只隔水西東。　同じく一塢の中に居り、只だ隔つ水の西東。

林近書燈露。溪廻酒舫通。　林は近くして、書燈露はれ、溪は廻つて酒舫通ず。

放鳧長合隊。移竹每分叢。　鳧を放てば、長く隊を合し、竹を移せば、每に叢を分つ。

只恐君徵起。難期作兩翁。　只だ恐らくは、君、徵起せられ、兩翁と作るを期し難きを。

【字解】【一】酒舫　酒を載せた游山舟。【二】徵起　朝廷より徵されて廬を出る。

【題義】一本に答丁校理見貽とあるさうだから、鄰友は卽ち丁某、さきに校理に在職したが、頃ろは官を罷めて家居して居るのであらう。

【詩意】君と予とは、同じく一塢の中に住し、水を隔てて東西に居るだけの相違である。林は近くして、君の讀書の燈火が見えるし、溪水は廻流して、游山舟が自由に通ずる。家鴨を放し飼にして置くと、兩家の分が合して、その儘、一隊となることがあるし、竹を移植する時には、毎毎株を分けて贈ることになつて居る。平生の交情、かくの如く、只だ恐るるは、君が朝に徵されて此を去り、兩翁と作るを期し難いと云ふ其事のみである。

【餘論】林近、溪廻の十字は、水上鄰居の實況を寫して、畫筆猶ほ及ばざる底の活趣がある。

雨中就陳卿飲酒醉歸聞丁二臥病客樓賦此寄慰

雨中、陳卿に就き、酒を飲みて醉うて歸り、丁二の病に客樓に臥せるを聞き、これを賦して寄慰す

我醉聽歌後。君愁臥病中。　われは醉ふ、歌を聽くの後、君は愁ふ、臥病の中。

山雲秋郭暗。江雨夜樓空。　山雲、秋郭暗く、江雨、夜樓空し。

短燭知頻剪。清樽恨不同。　短燭、頻りに剪りしを知り、清樽、恨むらくは同じうせず。

題詩非檄手。那得愈頭風。　詩を題する、檄手に非ず、那ぞ頭風を愈やすを得む。

【字解】【一】檄手　檄を草する手腕。【二】愈頭風　三國志に「曹操、頭風を病む、陳琳が作るところの檄を讀んで、翕然として起つて曰く、これ我が病を愈やす」とある。頭風は即ち頭痛。

【題義】陳卿は、前に見えた陳則だらうと思はれるが、確證もないし、又詮議立をする程の必要も無い。丁二は、前に卷八、夜飲丁二侃宅聽琵琶とあつた其人で、名は侃といふ。この詩は、雨中陳卿の宅を訪ひ、酒を飲んで醉うて歸り、丁侃が旅館に病んで居ることを聞いて、慰問の爲に寄せたのである。

【詩意】われ歌を聽いて後に、大醉して歸ると、君が病中、客舍に閉ぢ籠つて居るといふことを傳聞した。山雲、低く地に垂れて、城郭秋暗く、江天雨急にして、夜樓人もなき折から、君は如何にして居るか。燭の短くなつたのは、しきりに之を剪つたからであるし、共に清樽を傾けざりしは、まことに遺憾である。恨むらくは、われ詩を作つても、むかしの陳琳の如く、巧に檄を草する手腕あるに非ず、從つて、これを君に寄せても、頭痛を愈やさしめることが出來ない。

【餘論】山雲、江雨の一聯は、例の如く敍景の妙を極めて居る。

送醫士宋君之江上

醫士宋君の江上に之くを送る

詩瓢與藥囊。此去卽行裝。　詩瓢と藥囊と、ここを去つて、卽ち行裝。

跡隱名猶在。交親意未忘。　跡は隱れて、名、猶ほ在り、交は親しくして、意、未だ忘れず。

剔芸繙舊帙。嘗草試新方。　芸を剔つて舊帙を繙き、草を嘗めて新方を試む。

春水孤舟起。還來問竹房。　春水孤舟起つ、還り來つて竹房を問へ。

【字解】【一】詩瓢　詩稿を入れて置く瓢。唐詩紀事に「唐球、蜀の味江山に隱居す、詩を爲るとき、藁を捻つて圓となし、大瓢中に納る。沒するに臨み、瓢を江に投じて曰く、斯文、苟くも沈沒せずんば、得るもの、吾が苦心を知らむのみと。新渠に至る、識るものあり、曰く、唐山人の瓢なり」とある。【三】剔芸　芸は草の名、續博物志に「芸香、紙魚の蠹を避けしむ、故に藏書の室は芸臺と

稱す」とある。【三】新方　新しい處方。【四】竹房　竹間の書房、劉長卿の詩に竹房遙閉上方幽、苔徑蒼蒼訪昔游とある。

【題義】説明に及ばぬ。但し、宋醫士の名字閲歴等は不詳。

【詩意】君は詩瓢と藥嚢とを大切にして、持つて居るが、ここを去つて居を移す時も、この二物だけが、即ち荷物であつて、その他には、一長物だにない。君は、跡を隱して、あまり、宣傳を務めないが、それでも、評判は自然高いし、われとの交、殊に親しくして、決して忘れない。平生、何をして居るかといへば、芸草を掻き除けて、古い帙に收めた書籍を繙き、又百草を嘗めて、從來知られざりし新しい藥方を試みたりして居る。御都合で、移居されるのは仕方がないが、他日春水方に漲り、孤舟纜を解くに宜しくなつた時など、また此處に來て、竹間なる我が書室を尋ねて呉れ玉へ、その積りで御待して居る。

【餘論】兩聯、ともに精當、斷じて移易すべからざるものである。試新方の試の字を、大全集には識に作つてあるが、或は其方が善いかも知れない。

屛居

屛居

飮（一）水依道（二）者。心清無衆喧。　水を飮んで道者に依り、心、淸くして衆喧なし。

幽花落半樹。疏雨過荒園。　幽花、半樹落ち、疏雨、荒園を過ぐ。

看山易（三）云夕。尋澗偶窮源。　山を看て云に夕なり易く、澗を尋ねて偶ま源を窮む。

欲喩靜中趣。居然忘（四）我言。　喩さむと欲す、靜中の趣、居然としてわが言を忘る。

【字解】【一】飮水　論語に「水を飮み、肱を曲ぐ、樂、その中に在り、不義にして富み且つ貴き、我に於ては浮雲の如し」とある。【二】道者　有道の人。【三】易云夕　云はここにと訓す。【四】忘我言　陶淵明の雜詩に此中有眞意、欲辯已忘言とあるに本づく。

【題義】屛居とは、世事を屛けて閑居すること。この詩は、即ち其間の感慨を敍したのである。

【詩意】われは、貧賤に安んじ、水を飮んで、有道者に親み、專ら修養を爲しつつあるから、一心淸くして衆喧なく、極めて物靜かなる感じがする。眺めやれば、幽花は、木の半面だけ散つて仕舞ひ、疏雨は、荒園を過ぎ、紛華を競ひし春も、名殘少くなりはてて仕舞つた。山を看て居ると、兎角夕なり易く、澗水を尋ねると、料らずも、その源頭を窮めたこともあつた。靜中の趣を、人に諭して見やうと思ふものの、例の通り、言を忘れて、何と云つて善いか分からなく成つて仕舞つた。

立秋日

立秋の日

碧天收夏色。節（一）氣變淸（二）商。　碧天、夏色を收め、節氣、淸商に變ず。

暑自今宵伏。風從此日涼。　暑は今宵より伏し、風は此日より涼し。
(三)金莖初有露。(四)玉氣未成霜。　金莖、初めて露あり、玉氣、未だ霜を成さず。
(五)皛日幷淒雨。潛催草木黃。　皛日と淒雨と、ひそかに草木を催して黃ならしむ。

【字解】【一】節氣　季節に同じ。【二】清商　秋は五聲に配當すると、商聲なるが故に云ふ。【三】金莖　漢の武帝が宮庭に設けたので、その上に盤があつて雲表の露を承ける仕掛になつて居る。【四】玉氣　純潔の氣。【五】皛日　照り輝く日。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】渺渺たる碧天、夏の氣色を收め、季候も、すつかり清商に變じて仕舞つた。そこで、暑熱も今日より勢を失ふべく、風も此日より涼しいであらう。金莖の上には、初めて露が溜まつたが、玉の樣な純潔なる氣は、また結んで霜となるまでに至らぬ。これより、照り輝く日と、さびしげに降る雨とが、草木をして、次第に黃ならしめるのである。

效唐人贈邊將

唐人の邊將に贈るに效ふ

(一)翩翩(二)越騎將。負勇出(三)山西。　翩翩たり越騎の將、勇を負うて山西を出づ。
射虜誇(四)猿臂。封侯賭(五)馬蹄。　虜を射て猿臂に誇り、侯に封せられて馬蹄を賭す。
(六)候(七)烽河外暗。伏幟草中低。　烽を候せば河外に暗く、幟を伏して草中に低し。
欲雪(八)憑陵恥。須禽(九)左谷蠡。　憑陵の恥を雪がむと欲せば、須らく、左谷蠡を禽にすべし。

【字解】【一】翩翩　勢よき貌。【二】越騎　後漢書百官志に「越騎校尉一人、二千石に比す」とあつて、その注に「その才力超越なるを取るなり」とある。【三】出山西　漢書趙辛傳贊に「山東相を出し、山西將を出す」とある。【四】猿臂　臂長くして弓を挽くに便なること。史記李將軍傳に「廣、人と爲り、猿臂長し、その善射は、亦た天性なり」とある。【五】賭馬蹄　これは、格別の典故も無い樣だが、馬を走らして、其遲速を爭つたといふことであらう。蹄の字は、韻を趁うて、止むを得ず點出したものと見える。【六】候烽　烽火の上るを伺つて居る。【七】河外　黃河の塞外より中國に入る處は、急に東南に向つて曲つて居る。ここが卽ち後世の河套で、非常に肥饒である爲に、動もすれば、胡漢の爭ふところとなつた。【八】憑陵恥　胡軍に威張られた恥辱。【九】左谷蠡　史記匈奴列傳に「匈奴、世、官號を傳へ、左右賢王、左右谷蠡を置く、最も大國たり」とある。つまり、匈奴大臣の稱。

【題義】唐人の集には、贈邊將といふ題が屢ば見える、仍つて、青邱は、試みに之に擬して作つたのである。

【詩意】君は、今翩翩たる越騎の將校として知られて居るが、もと勇氣を自負して、山西地方から出仕したものである。賊を射ては、猿臂の長きを誇るべく、封侯の位を得むとしては、馬の遲速を賭して、見事に勝つたこともある。烽火の擧がるのに注意して見て居ると、河外の方は、戰塵暗く立ちこめ、伏兵となつては旗幟を草中に低く偃せて、目につかぬ樣にして居る。しかし、漢兵が賊に威張られた

舊日の恥を雪がむとならば、是非とも、匈奴の大臣たる左谷蠡を生捕にせねばならぬ。

送㆓董湖州㆒

董湖州を送る

(一)五馬貴(二)專㆑城。花兼㆓赤(三)綬㆒明。　五馬、貴くして、城を專にす、花は赤綬と明かなり。
(四)政條民乍識。(五)賦籍吏初呈。　政條、民、乍ち識り、賦籍、吏、初めて呈す。
山籠輸㆑茶至。溪船(六)摘㆑芰行。　山籠、茶を輸して至り、溪船、芰を摘んで行く。
非㆑將㆓苕霅水㆒。誰比㆓使(七)君清㆒。　苕霅の水を將てするに非ざれば、誰か使君の淸に比せむ。

【字解】〔一〕五馬　太守の美稱、前に數ば見ゆ。〔二〕專城　漢の樂府陌上桑に「四十專㆓城居㆒」とある。太守といへば一州の長官で、州城内に大威張りで居る。〔三〕赤綬　後漢書に「諸侯王は赤綬四條」とあつて、太守は諸侯に比すべきが故に云ふ。〔四〕政條　施政の條目。〔五〕賦籍　課税の帳簿。〔六〕摘芰　芰は荷の類。〔七〕使君　太守の尊稱。

【題義】この詩は、董某の湖州太守となつて赴任するのを送つたのである。

【詩意】君は、今、太守となり、出でては五頭立の馬車に乘り、入つては州城を專にすべき大した身分で、赤い印綬は、花に映じて、一きは鮮かに見える。その著任に際して、施政の條目を人民は早くも心得、課税の帳簿を役人が第一に呈出する。湖州の地たるや、山谷の間に茶を產し、それを粗末な籠に盛つて運搬し、又山水の眺も宜しく、船に乘つて溪中に芰荷を摘むことも出來る。君は、元と廉潔を以て知られた人で、苟くも、苕霅の水を以てするに非ざれば、到底、君の心の淸きに比較することは出來ない。

【餘論】大全集には、この首の前に效㆓唐人贈㆓邊將㆒㆒があつて、又その前に、同じく送㆓董湖州㆒と題して、左の一首がある。

五馬貴專㆑城。初勞㆓問㆑俗行㆒。舟車輕㆓客稅㆒。鼓角靜㆓邊聲㆒。晚市煙中集。春畬雪後耕。苕山與㆓苕水㆒。
應㆑比㆓使君淸㆒。

第一第八の兩句は、略ぼ相似て居るが、その他は、餘程違ふ。前聯は、政條民乍識の方が、民衆に切實であるし、後聯も、山籠輸㆑茶至の方が、その地に特殊なるものを列擧したのだから面白い。又使君の淸に比するにしても、水だけで澤山で、苕山を加へては適切でない。要するに、いづれも格別の名作で無いにしても、前に揭げた方が、なほ聊か優れて居て、おもふに、定稿であらう。大全集に、かくの如く接近して、二首ともに采錄したのは、如何なる故か。

晚次㆓西陵館㆒

晚に西陵館に次す

匹馬倦斷風。蕭蕭逐轉蓬。(一)　匹馬、倦んで風に斷き、蕭蕭として轉蓬を逐ふ。

地經兵亂後。歲盡客愁中。　地は兵亂を經たるの後、歲は盡く客愁の中。

晚渡廻潮急。寒山舊驛空。　晚渡、廻潮急、寒山、舊驛空し。

可憐今夜月。相照宿江東。　憐むべし、今夜の月、相照らして江東に宿す。

【字解】【一】轉蓬　蓬の穗の飛び散ること、杜甫の詩に轉蓬行地遠とある。

【題義】西陵館は、前に卷三、夜抵江上候船至曉始行の第一句に夜辭西陵館とあつた其處で、一統志に「蕭山西陵渡、卽ち西興。錢鏐王、陵の字を忌み、名を西興と易ふ」とあつて、錢塘江の岸上である。この詩は、矢張、その時に係るらしく、これを作つた後、夜、江上に抵つて、船の至るを候したのであらう。

【詩意】馬は、長途に倦きはてた爲か、風に向つて長嘶し、身は、蕭蕭として轉蓬を逐ふやうなものである。この地方一帶は、兵亂を經たる後、荒廢の樣は、目もあてられず、客愁凄涼たる中に、今年も、將に盡きむとして居る。日暮、渡口、廻潮方に急に、寒山の下、舊驛殘破して、居民も碌に無い位。幸ひ今夜月があつたから、その光に送られて、江東に來て一宿することが出來た。

【餘論】前聯は、唐賢の口吻。大全集には、廻潮を隨潮に作つてあるが、さうすると、對仗精當を缺いて、甚だ宜しくないと思ふ。

送顧別駕之邊郡　顧別駕の邊郡に之くを送る

故人雖盡別。相去獨君賒。　故人、盡く別ると雖も、相去る、ひとり君のみ賒なり。

緣路雲千堠。(一)臨邊樹一家。　路に緣る雲千堠、邊に臨む樹一家。

渡江船載馬。到館燭驚鴉。　江を渡らば、船、馬を載せ、館に到らば、燭、鴉を驚かす。

莫歎孤城廢。春來尙有花。　歎ずる莫れ、孤城廢すと、春來尙ほ花あり。

【字解】【一】千堠　堠は一里塚、土を稍や高く盛り上げ、樹を植ゑて標としてある。

【題義】說明に及ばぬ。但し、邊郡の何の地たるかは分からぬ。

【詩意】舊知の人人、盡く御別をしたが、中にも、君だけは、一番遠くに行かれる。路に傍うて、一里塚は、數へ切れぬ位で、雲を帶びて相接し、邊界に臨めば、木の茂れる處に一軒の家がある。途すがら、江を渡る時には、馬をも舟に載せ、旅館に入つて燈火を點ずると、宿鴉が驚いて飛び騷ぐ。しかし、亂後孤城の荒廢したことを歎息せずとも宜しいので、春來れば、自然咲き出づる花もあつて、

いくらか、心を慰めることも出來るであらう。

送僧恬歸靈隱

僧恬の靈隱に歸るを送る

(一)游方應未久。柳色變新年。　游方、應に未だ久しからざるべし、柳色、新年を變ず。
在路逢春雪。還山訪(二)冷泉。　路に在つて、春雪に逢ひ、山に還つて冷泉を訪ふ。
鐘催投寺錫。燈照泊江船。　鐘は催す、寺に投ずるの錫、燈は照らす、江に泊するの船。
(三)法意休多問。無言卽是禪。　法意、多く問ふを休めよ、無言、卽ち是れ禪。

【字解】【一】游方　論語に「父母在ます、遠く游ばず、游ぶ必ず方あり」とあるに本づく、然るべき方に遊ぶ。【二】冷泉　亭の名、なほ題義の項を見よ。【三】法意　佛法の極意。

【題義】僧恬といへば、恬上人といふ坊さんであらうか、本名は分からぬ。杭州府志に「景德靈隱寺は、武林山の陰に在り、晉の咸和元年、梵僧慧理建つ、靈隱と名づく。宋の景德四年、景德靈隱禪寺と改む、寺前の冷泉亭は、飛來峰下に在り、唐の白居易記あり」と見え、西湖附近の一名勝である。この詩は、恬上人の靈隱寺に歸るのを送つたのである。

【詩意】上人は、然るべき方に游ぶ積りで出かけ、未だ久しからざるに、新年に際して、柳色青く芽ぐむ頃となり、路すがら、春雪に逢ひ、旅も難儀だといふので、引きかへして、舊山の冷泉亭に歸られる。その間、日暮、鐘聲に促され、宿を野寺に乞うては錫杖を投じ、江上に船を泊すれば、燈火さびしげに照らすことであらう。今、別に臨んで、佛法の極意などは、質問せぬので、無言こそ禪の極致、それ以上の事は、到底、言葉で顯はされぬものである。

江上寄王校書行

江上、王校書行に寄す

(一)寥落舊歡違。江邊獨掩扉。　寥落、舊歡違ふ、江邊、ひとり扉を掩ふ。
鄰家聞暮笛。客舍試春衣。　鄰家、暮笛を聞き、客舍、春衣を試む。
宿鳥歸山亂。行人渡水稀。　宿鳥、山に歸つて亂れ、行人、水を渡ること稀なり。
相思比(二)花絮。斜日繞城飛。　相思、花絮に比す、斜日、城を繞つて飛ぶ。

【字解】【一】寥落　物さびしき貌。【二】花絮　落花飛絮を合せて云ふ。

【題義】王校書行は、卽ち北郭十子の一、前に卷三、春日懷十友詩の中にも見えて居た。校書とは、行が嘗て郡庠の經師となつたから云つたのであらうが、この時は、すでに生徒を謝して閒居した樣で

ある。

【詩意】君は、さびしげに獨りで居て、むかしの友人にも遇はず、江邊に扉を掩うて隱れて居る。時あつては、鄰家に吹き鳴らす暮笛を聞き、時あつては、客舍に在つて春衣に著換へなどし、出入ともに、氣ままである。今しも、宿りを急ぐ鳥は、山に歸らむとして亂れ、旅客の水を渡るものも稀である。この時、君を思ふ我が心は、落花飛絮に比すべく、夕日影の中に在つて、城を繞つて飛び行くを禁ぜられない。

【餘論】鄰家聞ニ暮笛一、斜日繞レ城飛の二句の如きは、極めて不完全な語法で、意象を晦澁ならしめる虞がある。

送ニ越將罷レ鎭

越將の鎭を罷むるを送る

楚客佩ニ吳鴻(一)一臨レ邊最有レ功。
楚客、吳鴻を佩び、邊に臨んで最も功あり。

讀レ書闔(二)壁裏。賭レ酒射(三)堂中。
書を讀む闔壁の裏、酒を賭す射堂の中。

旆出莎(四)城雨。笳吹柳浦風。
旆は出づ莎城の雨、笳は吹く柳浦の風。

越人相感意。應レ與ニ暮潮一東。
越人相感ずるの意、應に暮潮と東すべし。

【字解】【一】吳鴻　李白の結客少年場行に匕首插ニ吳鴻一とあつて、その注に「吳鴻は鉤名」とあるのを金檀は引いて居るが、これだけでは、不十分である。吳越春秋に「闔閭、すでに莫耶を寶とし、復た命じて、金鉤を作らしむ。令して曰く、能く善鉤を爲るものは、これを百金に賞せむと。鉤を作るもの、甚だ衆し。人あり、王の重賞を貪るや、その二子を殺し、血を以て金に釁り、遂に二鉤を成して、以て獻ず。鉤に向つて、子の名を呼んで曰く、吳鴻扈稽、われ此に在り、と。聲、口に絕たず、鉤、ともに飛んで父の胸に著く。王、大に驚き、乃ち百金を賞し、遂に服して身を離さず」とあつて、吳鉤には相違ないが、もと工人の子で、後に鉤の名となつたのである。【二】闔壁　闔城に同じ。【三】射堂　射を習ふ堂。【四】莎城　水邊の城。

【題義】この詩は、越地の鎭將某が官を罷めて歸國するのを送つたのである。

【詩意】君は、楚地の產にして、吳鴻の鉤を佩び、邊境を鎭撫して、最も功績があつた。ある時は、書を闔城の中に讀み、ある時は、酒を射堂の上に賭し、大旆を莎城の雨に濕らしつつ打つて出で、胡笳を柳浦の風に吹かしめて進軍した。越人は、君の功德を感じて居るから、今君の去るに臨み、その意、暮潮と共に東して、長しへに付きまとうて來るであらう。

送ニ王稹赴ニ大都一

王稹の大都に赴くを送る

王(一)郞歌莫レ哀。且酌姑蘇臺。
王郞、歌、哀む莫れ、且つ酌め姑蘇の臺。

獨客自傷別。諸侯誰愛才。　獨客、自ら別を傷み、諸侯、誰か才を愛す。

關河千里去。宮闕五門開。　關河千里去り、宮闕五門開く。

未肯輕齊虜。新從下土來。　未だ肯て齊虜を輕んせず、新に下土より來る。

【字解】【一】王郎歌莫哀　杜甫の短歌行送王郎司直に、王郎酒酣拔劍斫地歌莫哀とあるを轉用す。【二】五門　禮記の注に「天子五門、皐雉庫應路なり」とあり、白居易の詩に一條星宿五門西とある。【三】齊虜　漢書陳平傳に「上怒り、劉敬を罵つて曰く、齊虜、口舌を以て官を得たり、今、乃ち妄言して吾が軍を沮む」とある。【四】下土　上國に對して地方を指す。

【題義】王禎は、名字閲歴、ともに不詳。大都は、今の北市で元の都。袁桷の上都華嚴寺碑に「宗王殊邦、奉貢效秦、咸な開平に會同す、これに由つて定めて上都となし、大興を大都となす。兩京の制、古昔に協ふ」とある。この詩は、王禎が大都に上るを送つたのである。なほ題下の原注に、至正庚子作とあるから、その二十年で、作者が青邱に居た頃である。

【詩意】王君よ、激越なる哀歌を唱ふることなく、しばらく、ここ姑蘇臺で酒を酌まれよ。君は、伴もなき獨客であつて、自然、別を傷むのであらうが、これから、折角上京した處で、諸侯の中、誰か才を愛するものぞ。千里の關河をたどり行けば、やがて、五門の開いた皇城に到達するが、道中は、なかなか容易ではない。もとより、地方から來たものだといつて、直ちに之を輕んじて、齊虜というのは、宜しくないので、ここに、君の材器を認めて、一肌ぬいで與れるもののあらむことを切望する。

送孫主簿之德清　孫主簿の德清に之くを送る

山水匝秋城。君行思已淸。　山水、秋城を匝り、君の行、思、すでに淸し。

道逢迎吏拜。田雜戍人耕。　道に迎吏の拜するに逢ひ、田は戍人を雜へて耕す。

地遠知邊信。家貧稱縣名。　地は遠くして、邊信を知り、家貧にして、縣名に稱ふ。

應攜一琴去。相和長官鳴。　應に一琴を攜へ去り、相和して長官をして鳴らさしむべし。

【字解】【一】迎吏　出迎へに來た僚屬。【二】戍人　征戍の兵士。【三】稱縣名　縣の名を德淸といふと相稱ふ。【四】攜一琴　題下の原注に「孫、琴を善くす」とある。【五】長官鳴　例の宓子賤が琴を彈じて單父治まりしことを暗用す。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】山水、秋城を環つて、風景殊に淸爽、君は德淸に行くに就いて、思、すでに淸く、定めて、愉快なことであらう。やがて、その地に近づくと、道にして、出迎への僚屬の拜を爲すに逢ふべく、その邊一帶の田畑は、征戍の兵士が居民に交つて開墾して居る。地、すでに僻遠なるに因つて、邊界の消息は、却つて知ることが出來、家は淸貧であつて、縣の名を德淸といへるに稱ひ、まことに、名

詮自稱である。君は、琴を彈することが上手ださうだから、宜しく、これを攜へて行き、長官をして、相和して彈せしめ、かの宓子賤が琴を彈じて堂を下らず、そして、單父が善く治まつたといふ樣にならしむべく、つまり、縣令を輔佐して、その職を全うされむことを切望する。

【餘論】後聯は、その時、その人に極めて適切なるものと見える。

留別李侯

李侯に留別す

梅發津亭北。春隨使節廻。　梅は發す津亭の北、春は使節に隨つて廻る。

線多游子服。酒滿故人杯。　線は多し游子の服、酒は滿つ故人の杯。

鐘送橫江雨。車盤出峽雷。　鐘は送る江を橫ぎるの雨、車は盤す峽を出づるの雷。

平生感知己。臨別更徘徊。　平生、知己に感ず、別に臨んで更に徘徊。

【字解】【一】津亭　舟つきの處に在る亭館。【二】線多　孟郊の詩に慈母手中線、游子身上衣とある。【三】車盤　盤はめぐる。

【四】出峽雷　車聲を形容して云ふ、李商隱の詩に車走雷聲語未通とある。

【題義】李侯は、前に數ば見えた海昌の縣令李某。青邱は、吳越の游を爲せし時、大分、世話に成つたと見え、その地を去るに臨み、この詩を賦して、留別の意を表したのである。

【詩意】梅は津亭の北にも咲き、春は今が盛りらしく、使節として來りし君に隨つて、ここに立ち廻つて來たものと見える。游子の著て居る衣服には、母が心を籠めて縫つて吳れた絲の筋が顯はれ、それにつけても、さう何時までも、異鄕に居る譯には行かず、ここ別筵に於て、故人の差された杯に酒の滿つるにつけても、その好意は、感謝に堪へぬ。これより行けば、鐘聲遠く響いて、江天を橫ぎる雨を送り、車は盤行して、その輪聲は、峽を出づる雷かと疑ふばかり。君に對しては、平生知己の感ありしが故に、ここに別を爲すに際し、去りがてにして、しばし、徘徊して居る始末である。

寄熹公

熹公に寄す

禪居紫閣陰。欲去問安心。　禪居紫閣の陰、去つて、安心を問はむと欲す。

野岸隨流曲。山門隱樹深。　野岸、流に隨つて曲り、山門、樹に隱れて深し。

千燈燃雨塔。一磬出風林。　千燈、雨塔に燃え、一磬、風林を出づ。

想見跏趺處。雲多不可尋。　想ひ見る、跏趺の處、雲、多くして尋ぬべからず。

【字解】【一】紫閣　終南の一峰、杜甫の秋興の詩に昆吾御宿自逶迤、紫閣峰陰入渼陂とある。金壇の注に、洛陽伽藍記の景明寺、複殿重房、青臺紫閣とあるのを引いて濟ましたのは誤である。【二】跏趺　兩足を組んで、坐して禪を爲すこと。

【題義】 熹公の本名は不詳、詩で見ると、この僧は、古しへの長安附近の終南山寺に居るものと見える。

【詩意】 上人の禪を爲すところは、紫閣の峰陰であつて、予も其處まで往つて安心の法を問ひたいと思ふ。その近傍なる野岸は流に隨つて幾たびか屈曲し、山門は木に隱れて、なほ其奧に在る。千燈は、雨中の塔に燃えて輝きわたり、一磬聲永く、風に搖れる林から響き出づる。上人の禪を試みて居る處は、定めて、雲多くして、尋ねても分かり兼ねることであらう。

【餘論】 この詩は、兩聯も精當巧警、結末も振つて居て、略ぼ完璧に近いものである。

送王才歸錢塘

王才の錢塘に歸るを送る

南歸猶落魄。北上已蹉跎。　南歸、なほ落魄、北上、すでに蹉跎。

草草官亭酒。勞勞客路歌。　草草たり官亭の酒、勞勞たり客路の歌。

親知今日少。山水故鄉多。　親知、今日少く、山水、故鄉に多し。

匕首空留在。酬恩竟若何。　匕首空しく留めて在り、恩に酬ゆる竟に若何。

【字解】 【一】落魄　落ちぶれる。【二】蹉跎　事、志と違ふ。おもふ樣にならぬ。【三】草草　怱怱と同義。【四】官亭　官設の驛館。【五】勞勞　慇懃に慰める意。【六】親知　親友。【七】匕首　短劍。

【題義】 說明に及ばぬ。但し、王才の字竝に閱歷等は不詳。

【詩意】 君は、今落ちぶれて、南、錢塘に歸らうとして居るが、それは、さきに、北、帝都に赴き、いろいろ運動したが不成功に畢つたからである。ここに、怱怱として、官亭の酒を酌んで別をなし、勞勞として、客路の歌を唱へ、慇懃に慰める次第。たとひ、今日、親友は少くとも、故鄉は、山水の景色が善いから、歸省したならば、鬱懷を散ずることも出來やう。唯だ懷中の短劍は、むなしく留めて、今でも持つて居るが、恩に酬いるには、さて如何したものか。つまり、さういふ人だに無いのである。

送長洲周丞陞吳縣令

長洲周丞の吳縣令に陞るを送る

青山隔苑橋。改邑去非遙。　青山、苑橋を隔て、邑を改めて、去る、遙なるに非ず。

官食新添俸。民傳舊布條。　官は食ます新添俸、民は傳ふ舊布條。

稻花迎午放。荷葉待秋凋。　稻花、午を迎へて放ち、荷葉、秋を待つて凋む。

寂寞長洲路。空聞五袴謠。　寂寞たり、長洲の路、空しく聞く五袴の謠。

【字解】【一】苑橋　苑は長洲苑、前に數ば見ゆ。【二】新添俸　今度增加した俸祿。【三】舊布衣　むかしの弊衣。【四】迴午　午は亭午。【五】五袴謠　後漢書廉范傳に「范、字は叔度、蜀郡の太守たり。成都の舊制、民の夜作を禁じ、以て火災を防ぐ。范、乃ち前令を毀削し、但だ嚴に水を儲へしむるのみ。百姓便となし、乃ち之を歌うて曰く、廉叔度、來何暮、不禁火、民安作、平生無襦今五袴」とある。

【題義】この詩は、周某が長洲縣丞より吳縣令に陞つて、轉任したのを送つたのである。

【詩意】青山は、長洲苑の橋を隔てるのみで、橋の此方が吳縣、君は今回轉任されたけれども、相去ること、格別遠くもない。官よりは、新に增加せる俸祿を給せられ、人民は、むかし弊衣を著て居たことを傳へて、その清儉を讚美して居る。今しも、稻の花は、眞晝に當つて咲き出で、蓮の葉は、秋を待つて落ちる。顧みれば、長洲への通路は、寂寞として、むなしく、君の德を頌する五袴の謠を聞くのみである。

冬至夜、喜逢徐七

冬至の夜、徐七に逢ふを喜ぶ

君來同客館。把酒夜相看。　君、來つて、客館を同じうす、酒を把つて、夜、相看る。

動是經年別。能辭盡夕歡。　動もすれば是れ經年の別、能く盡夕の歡を辭せむや。

雪明窓促曙。陽復座銷寒。　雪明かにして、窓、曙を促し、陽復して、座、寒を銷す。

世路今如此。懸知後會難。　世路今かくの如し、懸に知る後會の難きを。

【字解】【一】夜相看　夜相逢ふ。【二】能辭盡夕歡　これは反語に讀まなければ、意義が通ぜぬが、かういふ語法は許されるものか。【三】陽復　冬至は、一陽來復の節なるが故に云ふ、杜甫の詩に冬至陽生春又囘とある。

【題義】說明に及ばぬ。徐七は、卽ち例の徐賁である。

【詩意】君が此地に來られしに就いて、同じ旅宿に泊まりこみ、酒を把つて、夜、會晤をなした。動もすれば、一年以上も別れて居たので、いろいろ、積る話もあるから、いかで徹宵の歡を辭すべきか。雪は明かにして、どうやら、窓が白みかかり、一陽來復の爲め、座上に寒氣が無いやうになつた。しかし、刻下の爭亂に際し、世路の難きことは、現に見るが如くであるから、後日の再會は、どうやら六つかしい樣に思はれ、それにつけても、ここに、心ゆくまで晤談をしなければならぬ。

送史丞之海門

史丞の海門に之くを送る

黃茅連霧雨。此地久荒涼。　黃茅、霧雨に連り、この地、久しく荒涼。

日出嵎夷邇。江通渤澥長。　日は出でて嵎夷邇く、江は通じて、渤澥長し。

改官非謫宦。到邑是還鄕。　官を改むるは、謫宦に非ず、邑に到らば、是れ鄕に還る。

海上遙聞說。歸人已裹糧。　海上、遙に聞說、歸人、すでに糧を裹む。

【字解】【一】黃茅　枯れて黃ばんだ茅。【二】嵎夷　書經に「分つて羲仲に命じ、嵎夷に宅し、暘谷といひ、寅んで出日を賓す」とある。【三】渤澥　渤海に通じ、元來は遼東の渤海であるが、ここでは、東海の稱に用ひてある。

【題義】題下の原注に「史は淮東の人」とあるが、その名字等は不詳。海門は縣の名、前に甘露寺の詩中にも見えて居たが、一統志に「通州に屬す、今、海に沒す」とある。この詩は、史某の縣丞となつて、海門に赴任するのを送つたのである。

【詩意】海門では、今しも、黃色に枯れかかつた茅が、霧の如き雨に連り、天色陰晦、おもへば、この地方は、荒涼すでに久しいことである。日が出れば、嵎夷も近く見え、江水の注ぐところ、東海は、際涯もない。君が海門に改められしは、もとより、貶謫の爲めではなく、そして、一たび、その地に至らば、故鄕に接近して居るから、歸つたも同然である。はるかに聞くところに據れば、海上の流民どもは、君の來任を待つて、一齊に歸つて來やうとし、すでに、糧食を裹んで支度をして居るとのことで、君にして、任に莅まば、その期待に孤負せぬ樣に心がけて貰ひたい。

夜雨宿東齋

夜雨、東齋に宿す

砌冷一蛩急。窓虛諸葉稀。　砌は冷かにして一蛩急に、窓は虛しくして諸葉稀なり。

蕭條風雨夜。幽臥掩牀幃。　蕭條たり風雨の夜、幽臥、牀幃を掩ふ。

鄰杵聽初歇。齋燈看尙微。　鄰杵、聽いて初めて歇み、齋燈、看て尙ほ微なり。

忽憂歲暮事。聊食故山薇。　忽ち歲暮の事を憂ふ、聊か故山の薇を食はむ。

【字解】【一】砌冷　砌は庭階。【二】諸葉　いろいろの木の葉。【三】牀幃　寢臺の上に吊した帷帳。【四】齋燈　書齋の燈火。

【題義】說明に及ばぬ。但し、東齋は、婁江の寓居にでも在ると思はれる。

【詩意】庭階冷かにして、一蛩啼くこと急、窓はがらりとして、木木の葉は、すでに稀である。風雨蕭條の夜に當り、幽臥して、牀上の幔を下した。鄰家で砧うつ聲は、聽いて居る內に止んで仕舞ひ、齋中の燈火は、看ると、まだ消え殘つて居る。ここに、今年も將に暮れむとすることを思うて、感慨禁せず、遠からず、歸鄕して、故山の薇を食ひたいものである。

【餘論】この詩は、第一第二の兩句が對偶をなして居るから、前聯は、わざと散體を以て之を行つたので、唐人が每每用ふるところの變體の定式である。

師山周君客濠上思歸未得因畫舊隱圖求予賦詩

師山の周君、濠上に客たり、歸を思うて未だ得ず、よつて、舊隱圖を畫きて、予に求めて詩を賦せしむ

幾年留客舍。千里念家山。　幾年か客舍に留まり、千里、家山を念ふ。
得向圖中見。猶勝夢裏還。　圖中に向つて見るを得ば、猶ほ夢裏に還るに勝る。
〔一〕菊畦經雨廢。〔二〕薜屋帶雲關。　菊畦、雨を經て廢し、薜屋、雲を帶びて關す。
〔三〕楚奏無窮意。相忘賴此間。　楚奏、無窮の意、相忘るるは此間に賴る。

【字解】【一】菊畦　菊を植ゑた畦。【二】薜屋　蔦かづらの卷きついて居る山中の舊宅。【三】楚奏　楚聲の歌、王粲の賦に「鐘儀幽而楚奏兮、莊舃顯而越吟」とある。

【題義】師山は、姑蘇志に「吳縣十都村の名」とある。周君は、一に周伯常に作つてあるから、字を伯常といふのであらうが、本名は不詳。濠上は、一統志に「鳳陽府、隋唐宋には濠州といふ」とある。舊隱圖は、むかしの隱宅の圖。すると、この題の意味は——師山の周伯常は、久しく濠州に客となり、歸鄕しやうとしても、その機會を得ず、そこで、むかしの隱宅の圖を畫き、予に乞うて、詩を題せしめた——といふのである。

【詩意】君は、幾年の久しき、濠州の客舍に留まり、そして、千里を隔てたる師山を思つて居る。しかし、故郷の風景を圖中に見ることが出來れば、夢裏に還るよりも、聊かましである。折角、菊を種ゑてあつた畑も、雨を經て荒廢して居るし、蔦かづらの纏うた山中の家は、雲を帶びた儘、戸を鎖してある。本來ならば、鄕音の楚聲を以て無窮の意を歌ひ出づべき處であるが、この畫の御蔭で、すつかり忘れて居るのは、まことに面白いことである。

微恙江館夜作

微恙、江館夜作る

寒燈坐〔一〕江館。愁逼〔二〕歲闌珊。　寒燈、江館に坐し、愁は逼つて歲闌珊。
〔三〕苦恨應催老。微痾似忌閒。　苦恨、應に老を催すべく、微痾、閒を忌むに似たり。
雞前星列屋。雁外月臨灣。　雞前、星、屋に列し、雁外、月、灣に臨む。
明日將〔四〕求藥。身猶懶〔五〕入關。　明日、將に藥を求めむとす、身、猶は關に入るに懶し。

【字解】【一】江館　婁江の寓居であらう。【二】歲闌珊　歲の暮になること。【三】苦恨　にがにがしき客恨。【四】求藥　仙藥を求める。【五】入關　函谷關に入り、それから長安に上るといふのが本義で、功名の爲にあせること。

【題義】この詩は、青邱が一寸とした病に罹り、婁江の寓居に籠つて居て、ある夜、作つたのである。

【詩意】寒燈の下に、この江館に坐し、歳、將に暮れむとして、愁の逼り來るを覺えた。にがにがしい樣な客恨は、やがて、人の老を催すべく、輕い病氣は、わが清閒を忌んで妨害する樣なものである。雞が曉を報ずるに先ち、羣星肅として屋上に列し、雁の鳴く彼方には、殘月が灣に臨んで落ちかかつて居る。明日は、仙藥を求めて、長生不死を學びたいと思ふので、この身は、疏懶にして、到底、功名に志す樣には成れない。

【餘論】第一句は、稍や語を成さぬ嫌ひがある。但し、後聯は、寒曉の景を刻劃して、簡勁切當である。

逢李止氷道人

李止氷道人に逢ふ

吹簫月滿舟。何處昔頻游。

簫を吹いて、月、舟に滿つ、何の處か、むかし頻に游ぶ。

后土瓊花觀。仙人黃鶴樓。

后土の瓊花觀、仙人の黃鶴樓。

別來應未老。道在復何求。

別來、應に未だ老いざるべし、道在り、復た何をか求めむ。

相見俄還去。江城楓葉秋。

相見て、俄に還り去る、江城楓葉の秋。

【字解】【一】后土瓊花觀　后土廟の中の瓊花觀。春明退朝錄に「揚州后土廟の瓊花、或は云ふ、唐より植うるところ、即ち李衞公の謂はゆる玉蕊なり」とある。【二】黃鶴樓　武昌の西南に在る。寰宇記に「むかし、費禕登仙、毎に黃鶴に乘じ、この樓に於て駕を憩ふ、故に名づく」とある。【三】還去　還の字には意味がなく、唯だ立ち去るといふ意。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】君が簫を吹き鳴らせば、江天月忽ち上つて、舟に滿ちた。風流絕世、もとより、人間を超越して居るが、往年一番頻繁に游んだのは、何處かといふと、珍らしい瓊花の咲き匂へる揚州の后土廟、次には、仙人が折折音づれるといふ武昌の黃鶴樓である。一別以來、また老い去つた樣でもなく、道にして存すれば、外に何も求めるには及ばない。ここで、御目にかかると、間もなく立ち去られるが、今しも、江邊の城郭は、紅葉の秋で、いづれ、途すがら奇景を探られるのであらう。

冬至夜雨感懷

冬至夜雨感懷

節序關何事。徒令百感生。

節序、何事にか關す、徒に百感をして生ぜしむ。

升沈當世事。存歿故人情。

升沈當世の事、存歿故人の情。

寒在微陽氣。風疏緩漏聲。

寒在つて陽氣微なり、風疏にして漏聲緩かなり。

他年說今夜。聽雨宿南城。(三)　他年、今夜を說く、雨を聽いて南城に宿す。

【字解】〔一〕升沈　得意と失意、立身と落魄。〔二〕存歿　卽ち生死。〔三〕南城　城南に同じ。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】折節の移り變りは、何事に關係あつて、徒に予をして百感を生ぜしめるか。立身と落魄とは、當世の事であつて、流石に、心を勞せぬ譯には行かぬし、故人の生死に就いては、一しほ、わが情を傷ましめる。つまり、節序、その物よりも、それに聯關して、一身の變や友人の事などを考へるから、自然、かくの如くなるのである。冬至といふものから、寒氣が猶は殘つて居る爲に、陽氣は、甚だ微弱であるし、風は疏にして、漏刻の聲が緩やかに響いて聞こえる。今宵雨を聽いて、城南に宿したことは、思ひ出の種となつて、他年必ず之を言ひ出すであらう。

過戴居士宅　戴居士の宅を過ぐ

江邊戴顒(一)宅。地好愜幽尋。　江邊戴顒の宅、地は好くして幽尋に愜ふ。

高樹藏卑屋。新篁補舊林。　高樹、卑屋を藏し、新篁、舊林を補ふ。

鳥成留客語。雲作護花陰。　鳥は客を留むるの語を成し、雲は花を護るの陰を作す。

不負滄洲約。(二)重來論夙心。(三)　滄洲の約に負かず、重ねて來つて夙心を論ぜむ。

【字解】〔一〕戴顒宅　南史に「顒は安道の子、宅は嵊縣剡山の下に在り、乃ち郗超が千錫を捐てて築くところ。又徙つて吳下に居るや、士人、ともに爲に室を築き、石を疊し、花を栽ゑ、徑を辟き、琴尊造訪するもの、虛日なし」とある。〔二〕滄洲約　滄洲は東海の仙境、ともに其地に游ぶといふ約束。〔三〕夙心　むかしから變ぜぬ心。

【題義】説明に及ばぬ、但し、戴の名字は不詳。

【詩意】古しへの戴顒に比すべき居士の住宅は、江邊であつて、まことに好い處であるから、探勝の游には、特に適して居る。高い木の立ち列ぶ間に、低い茅屋は隱されて仕舞ひ、新に出た竹は、舊林を補つて、隙間なく立ちこめて居る。鳥の聲は、心あつて客を留むる言葉の如く、雲は、花を保護する爲の曇りの樣である。君と一緒に滄洲に游ぶといふ兼ねての約束に違ふことなく、再び尋ねて來たならば、胸中を打明けて、いろいろ御話を致しませう。

歸鴉　歸鴉

啞啞噪夕暉。爭宿不爭飛。　啞啞として夕暉に噪ぐ、宿を爭うて飛ぶを爭はず。

未逐冥鴻去。長先野鶴歸。　未だ冥鴻を逐うて去らず、長しへに、野鶴に先つて歸る。

荒村流水遠。古戍淡煙微。　荒村、流水遠く、古戍、淡煙微なり。

借問寒林樹。何枝最可依。　借問す、寒林の樹、何の枝か最も依るべき。

【字解】【一】夕暉　夕日。【二】冥鴻　空飛ぶ雁。【三】古戍　古くなつた兵營。【四】何枝最可依　曹操の短歌行に月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、何枝可依とあるを轉用す。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】歸鴉は、啞啞といつて、夕日に噪ぎつつ、塒は爭ふも、飛ぶことの先後は爭はない。未だ空飛ぶ雁を追うて、遠くには去らないが、毎毎、野鶴に先つて歸つて來る。その時しも、荒れたる村落に於ては、流水遠く去り、古りたる兵營には、薄い煙が棚引いて居る。試に問ふ、寒林の樹の中で、何の枝が依るに適して居るか、つまり、汝は、それを探して居るであらう。

晩坐南齋寫懷二首

晩に南齋に坐し、懷を寫す　二首

雁過南齋暮。魂消默坐中。　雁は過ぐ南齋の暮、魂は消ゆ默坐の中。

賤貧長作客。愁病欲成翁。　賤貧、長く客と作り、愁病、翁と成らむと欲す。

窓灑侵燈雨。庭翻走葉風。　窓には灑ぐ燈を侵すの雨、庭には翻る葉を走らすの風。

山妻猶解事。未遣酒樽空。　山妻、猶ほ事を解し、未だ酒樽をして空しからしめず。

【字解】【一】南齋　南を向ける書齋。【二】解事　よく理解して居る。

【題義】この詩は、日暮、南齋に坐し、おもつて居ることを寫したので、矢張、婁江寓居中の作であらう。

【詩意】南齋、日將に暮れむとする時、雁は間近く啼いて過ぎ、默坐しつつある身も、覺えず、魂を銷した位。身は、貧賤に居つて、長く客となり、愁と病とに攻められて、老人に成りかかつて仕舞つた。燈火を侵す雨は、容捨なく窓に灑ぎかかり、葉を走らす風は、庭上に翻つて居る。ここに、感心なのは山妻で、よく物事を理解し、樽を空しからしめずして、いつでも、まんまんと酒を滿たして居る。

【餘論】前聯は、遺憾なく窮居の狀を盡し、人をして覺えず嗚嗚と呼ばしめる。

(一)

歲景看垂暮。羇蹤嘆屢遷。　歲景、看る暮に垂んとし、羇蹤、屢ば遷るを嘆す。

有身能去俗。無術但論天。　身あり、能く俗を去る、術なくして、但だ天を論ず。

菊老江城酒。牀寒客舍氈。　菊は老ゆ江城の酒、牀は寒し客舍の氈。

愁中還一笑。兒女滿燈前。　愁中還た一笑、兒女、燈前に滿つ。

【字解】【二】歲景 歲時の風物。【三】覊蹤 客蹤に同じ。

【詩意】看る看る、歲暮に近き景色となり、客蹤の數ば遷るは、まことに嘆かはしいことである。この身は、どうやら、俗を超越して居るが、天命を向けかへる術はなく、唯だかういふものだといつて論ずるに過ぎぬ。江城の酒、將に盡きむとし、菊花すでに老い、客舍の氈は薄くして、吟牀も爲に冷かである。ただ、愁中、一寸笑ましげに覺えることは、兒女どもが燈前に滿ち、一家の眷屬が、殘らず此に打集うて居ることである。

臘月廿四日雨中夜坐二首　臘月廿四日、雨中夜坐　二首

不興貧後歎。每動醉中吟。　貧後の歎を興さず、每に醉中の吟を動かす。

（一）涉難知天意。居閒長道心。（二）　難を涉つて天意を知り、閒に居て道心を長ず。

雁聲隨雨到。鬢色與年侵。　雁聲、雨に隨つて到り、鬢色、年と侵す。

獨想平生事。蕭然坐夜深。　ひとり、平生の事を想ひ、蕭然として夜深に坐す。

【字解】【一】涉歷 艱難を經驗する。【二】道心 人心の對、道義より發する心、書經の大禹謨に「人心惟れ危く、道心惟れ微なり」とある。

【題義】臘月は、臘の祭をする月、即ち十二月、その二十四日、夜、雨に坐して作つたので、官を罷めて後のことと思はれる。

【詩意】貧後の嘆息は起さないが、每每醉中に放歌するを例として居る。艱難な事を經驗して、はじめて天意を知り、清閒に居て、道義の心を長じた。雁聲は、雨に隨つて聞こえ、白髮は、年と共に殖える。ひとり平生の事を追想し、深夜、蕭然として獨坐して居る。

身退惟宜靜。謀疏且任眞。（一）　身退いて惟だ靜に宜し、謀疏にして、且つ眞に任かす。

樓空三日雨。書亂一牀塵。　樓は空し三日の雨、書は亂る一牀の塵。

（二）邱隴多良友。江湖獨放臣。（三）　邱隴、良友多く、江湖、ひとり放臣。

莫嗟年景暮。轉眼是新春。　嗟する莫れ、年景の暮るるを、眼を轉ずれば、是れ新春。

【字解】【一】任眞　性情の眞に任かせる。【二】邱隴　墳墓。【三】放臣　放ち歸らしめた臣下。青邱は、官を罷めて歸里したのである。

【詩意】身、すでに退いた上は、唯だ靜寂に居るが宜しく、生來、事を謀ることが迂疏であつて、しばらく、おのが性情の眞に任かせて居るのみである。樓は空しくして人なく、雨、三日に及び、書物は取り散らした儘で、塵は吟牀に滿ちて居る。顧みれば、良友の墳墓に歸せしもの、次第に多く、われは獨り放逐の臣として、江湖に漂泊して居る。しかし、年が暮れかかつたといつて嗟嘆せずとも善いので、眼を轉ずれば、新玉の春が既に來かかつて居る。

【餘論】樓空の一聯は、あつさりして居るが、一寸面白い。

書曹谷才世訓詩後爲其子季常作

曹谷才の世訓詩の後に書す、其子季常の爲に作る

綠野高人第。清門舊相家。　綠野高人の第、清門舊相の家。

篇章存月露。翰墨走龍蛇。　篇章、月露を存し、翰墨、龍蛇を走らす。

作戒言惟切。詒謀歲已賒。　戒を作つて、言、惟だ切、謀を詒して、歲、すでに賒なり。

過庭雖有訓。得與共傳誇。　過庭、訓ありと雖も、ともに、共に傳誇するを得たり。

【字解】【一】綠野　唐の裴度の別莊の名。舊唐書の本傳に「午橋に於て別墅を創し、花木萬株、中に涼臺暑館を起し、名づけて綠野堂といふ」とある。【二】舊相家　史記に「惠帝二年、曹參入つて相たり」とあつて、曹谷才は、その末裔と見える。【三】月露　隋書李諤傳に「連篇累牘、月露の形を出でず」とある。【四】龍蛇　曹唐の遊仙の詩に大篆龍蛇隨筆札とある。【五】過庭　論語に、孔子の子たる鯉が趨りて庭を過ぎし時、孔子が呼びとめて、詩禮の學ぶべきことを說いたことを指す。

【題義】これは、曹谷才といふ人が子孫に遺した世訓詩といふものがあつた處が、その子の季常に賴まれて、その後に題したのである。

【詩意】君の屋敷は、綠野堂に住まへる彼の裴度と同じく、又現に清門で、舊と宰相を出した家筋である。今見せられた世訓詩の篇章は、月露の形を存して、隨分立派であるし、翰墨は、龍蛇を走らすが如く、大へん見事である。子孫に規戒を與へた言葉は、まことに適切であるし、その謀を貽されてより、大分年も過ぎた。これは、謂ゆる庭訓で、普通よその人は見ることを得ぬものであるが、ともに之を傳へて、他に誇ることの出來たのは、まことに結構なことである。

題山居圖爲僧賦

山居圖に題す、僧の爲に賦す

行負貝多書。青山別舊廬。　行く〳〵貝多の書を負うて、青山、舊廬に別る。

亂尋安土避。貧借破庵居。

吟苦非愁裏。禪癯似病餘。

思歸休看畫。來去盡空虛。

亂には、安土を尋ねて避け、貧には、破庵を借りて居る。

吟の苦なるは愁裏に非ず、禪に癯せて病餘に似たり。

歸るを思うて畫を看るを休めよ、來去、盡く空虛。

【字解】【一】 貝多書 西陽雜俎に「貝多樹、多く摩伽陀國に出づ、西土、以て經を寫すに用ふ」とある、即ち佛經。【二】 安土 安穩な場處。

【題義】 山居圖は、ある僧の舊山住菴の圖と見える。

【詩意】 上人は、御經を脊負ひ、青山の舊廬に別れて出て來られたが、そは爭亂に際し、安土を尋ねて難を避ける爲めであつて、もとより、貧乏である處から、住み古して無住に成つた小菴を借りて、そこに落ち付いた。平生苦吟して居て、必ずしも愁裏ではなく、又禪を試むる爲に瘦せ細つて、丁度病氣をした揚句の樣である。ここに、舊廬に歸らうと思つても、この畫など、あまり見ない方が善いので、もとより、禪家の身、來去皆空虛、此處も、彼處も、格別大差ある譯ではない。

題華氏塋芝檜圖

華氏塋の芝檜の圖に題す

誰指牛眠處。江山地最靈。

氣鍾孤檜碧。祥表五芝青。

影動春雲亂。香敷曉露零。

知君家種德。曾讀墓前銘。

誰か牛眠の處を指す、江山、地最も靈。

氣は孤檜の碧を鍾め、祥は五芝の青を表す。

影は動いて春雲亂れ、香は敷いて曉露零つ。

知る、君が家に德を種ゑたるを、かつて讀む墓前の銘。

【字解】【一】 牛眠處 晉書に「陶侃微なる時、艱に丁り、將に葬らむとす、家中忽ち牛を失ひ、在るところを知らず、一老父に遇ふ。謂つて曰く、前岡に一牛の山阿中に眠るを見る、その地、もし葬らば、位、人臣を極めむ、と。言訖つて見えず。侃、牛を尋ねて之を得、因つて、その地に葬る」とある。【二】 祥表五芝青 神農經に「五色の神芝、皆聖王の休祥」とある。

【題義】 この詩は華氏の先塋に生じたといふ靈芝と檜とを畫いた圖に題したのである。無論、風水の說に依つて、墓邊に、かういふものの生じたのは、極めて目出たい瑞祥だといふので、その家では、態態、畫がかせたのであらう。

【詩意】 さきに、牛の眠つて居る處を指して、墓地を選定せしめたのは、誰であつたか。何は兎もあれ、ここは、江山の勝地で、最も靈異なる處である。孤檜の碧なるは、瑞氣の鍾まつたものであるし、青色の靈芝は、佳祥を表して餘あることと思ふ。檜樹の影動く時、春雲自ら亂れ、靈芝の香敷いて、曉天の露が落ちて來る。かつて、墓前の銘を拜讀して、君の家では、德を種ゑること、すでに久しきを知り、芝檜の祥瑞を呈したのも、無理ならぬことと感じた。

賦得銅人贈醫士　銅人を賦し得て、醫士に贈る

舊鑄明堂像。新圖太史書。　舊と明堂像を鑄り、新に太史の書を圖す。

體成金冶內。穴試石砭餘。　體は成る金冶の內、穴は試む石砭の餘。

摩狄年空老。求仙事亦虛。　狄を摩して年空しく老い、仙を求めて事亦た虛し。

君懷濟人意。爲此竟何如。　君は懷く人を濟ふの意、これを爲す竟に何如。

【字解】【一】明堂像　唐書刑法志に「太宗、かつて明堂針灸圖を覽、人の五臟皆背に近く、針灸所を失へば、死を致すを見、詔して、罪人には、背を鞭つを得ることなからしむ」とある。明堂は、天子が諸侯を會する處で、その內に、種種の圖を懸けてあつたと見える。【二】太史書　元史竇默傳に「默、字は子聲、廣平肥鄉の人。母死す、南走して河を渡り、母黨吳氏に依る。醫者王翁、妻はすに女を以てし、醫を業とせしむ。轉じて、蔡州に客たり。名醫李浩に遇ひ、授くるに銅人の針法を以てす。德安に走る、孝感の令謝憲の子、伊洛性理の書を以て之に授く。乃ち、北、大名に歸り、姚樞・許衡と朝暮講習、寢食を忘るるに至る。世祖卽位、召して翰林侍講學士に拜し、後、累りに太師を贈り、魏國公に封じ、文正と諡す」とある。【三】金冶　左傳、形民之力の注に「言ふ、國の民を用ふるは、當に其力に隨つて任ずべく、金冶の器、器に隨つて制するが如し」とある。【四】穴試　穴は窮處。【五】石砭　石の針、漢書藝文志に「周ねく箴石湯火の施すところを度る」とあつて、その注に「箴は病を刺す所以なり、石は砭石を謂ふ、卽ち石箴なり。古しへ病を攻むるには、石あり、今その術絕ゆ」とある。【六】摩狄　狄は銅狄、卽ち銅人。後漢書薊子訓傳に「人、長安の東霸城に于て子訓を見る、一老翁と共に銅人を摩挲し、相謂つて曰く、適ま此を鑄るを見る、しかも、すでに五百歲に近し」とある。【七】求仙　漢の武帝が承露盤を鑄造したことで、銅人が盤を手にして、雲表の露を承けるといふ仕掛になつて居る。その露は、卽ち仙藥を調合する時に用ふるのである。その詳は、前に卷一、長安道の詩中に述べて置いた。

【題義】これは銅人、卽ち銅製の人の像を賦して、某醫士に贈つたのである。

【詩意】むかしは、明堂の針灸圖を本として、銅人を鑄つたが、近ごろは、翰林侍講竇默の書中に論するところに從つて、これを造つた。その銅人は、金冶の內に成り、そして、石針を打つ窮處なども、これに因つて、確知することが出來る。薊子訓は、かつて銅人を摩挲して、その既に五百年を經て空しく老いたことを嗟嘆し、漢の武帝は、承露盤の銅人を造つて、仙藥を調和させる爲に、雲表の露を承けしめたといふことだが、それも、格別の效果がなかつた。しかし、君は、此等と異にして、專ら人を救濟せむと欲し、醫學硏究の必要上から、銅人を傍に置かれるので、その本志を達するには、なかなか、骨の折れることであらう。

夏景園廬　夏景園廬

門掩一齋空。幽懷獨坐中。　門は掩うて一齋空しく、幽懷獨坐の中。

本同趨府客。偶似灌園翁。　本と趨府の客に同じく、偶ま灌園の翁に似たり。

魚鬪萍溪雨。蟬嘶柳巷風。　魚は鬪す萍溪の雨、蟬は嘶く柳巷の風。

未須論夙志。聊復去樊籠。　未だ須らく夙志を論ずべからず、聊か復た樊籠を去る。

【字解】【一】一齋空　書齋に人の居らぬこと。【二】灌園翁　高士傳に「陳仲子は齊人なり。楚王、その賢を聞き、以て相と爲さむと欲し、使を遣して仲子を聘せしむ、遂に逃れ去り、人の爲に園に灌ぐ」とある。【三】趨府客　漢の樂府、陌上桑に盈盈公府歩、冉冉府中趨とある、役所に出勤する。【四】樊籠　劉緩の詩に、卑窩甲青戀二樊籠一とある、世上の係縛をいふ。

【題義】この題の書き方は、いささか變てこであるが、園中の小廬に於て見たところの夏景を敍したのである。

【詩意】門は閉ぢた儘で、書齋の中には人なく、獨坐して居る間、幽懷に耽つて居る。役所に出勤する人と同じで、勤め先もあるが、ここに閒居すると、偶然にも、庭園の世話をして居る庭男の樣である。流に雨の注ぐ時、魚は浮草の間に闖入し、狹い小路に風吹き度る折から、蟬は柳の木の上で鳴いてゐる。これだけでは、まだ本來の夙志に協つた譯でもないが、聊か世の係縛を脱したのは嬉しい。

【餘論】第二句に本同二趨府客一とある處を見ると、これは、青邱が南京の鍾山里第に居て、翰林に奉職した時だらうと思はれる。後聯十字は、例の敍景の妙語である。

寄二題崇明學宮天心水面軒一

崇明學宮の天心水面軒に寄題す

夜氣虚明際。齋(一)宮息二衆喧一。　夜氣虚明の際、齋宮、衆喧を息む。

(二)詠餘風度レ瑟。坐久月當レ軒。　詠餘、風、瑟を度り、坐久しうして、月、軒に當る。

雲盡無二留(三)翳一。池清有二活(四)源一。　雲盡きて留翳なく、池清くして活源あり。

心知二此時意一。欲レ論竟何言。　心に此時の意を知る、論せむと欲して竟に何をか言はむ。

【字解】【一】齋宮　學宮に同じ。【二】詠餘　詩を朗詠したる後。【三】留翳　殘れる影。【四】活源　朱子の詩に問レ渠那得清如レ許、爲レ有二源頭活水來一とある、絶えず水の湧き出る泉源。

【題義】原注に「崇明は蘇州に屬す、今太倉に屬す」とあつて、揚子江口に在る沖積層の沙洲であらう。この島は、だんだん大きくなつて、島上の住民も增加し、仍つて、學校も、この頃、すでに建設されたことと思ふ。軒の名の天心水面は、邵康節の詩に月到二天心一處、風來二水面一時とあるのを取つたものと見える。

【詩意】夜の氣の淸虚にして徹明なる頃、學堂も至つて物靜かで、かしましき聲は、全く絶えて仕舞つた。詩を朗詠して畢りし頃、風は徐に來つて瑟を度り、坐すること良や久しき折から、月は高くさし上つて、軒に當つて居る。天上には雲晴れて、殘れる影だになく、池の淸きは、絶えず水の湧く泉源があるからである。予が心には、此時の意を十分に知つて居るが、さて之を述べやうとすると、何と言つて善いか分からない。

【餘論】雲盡、池淸の一聯は、敍景の語たるのみならず、修養の結果、全然、虚靈不昧となつた心境を畫き出したもので、つまり、情景融合の妙を極めたものである。結末は、例の此中有二眞意一、欲レ辯已

忘言と同義で、究極は、かういふより外、仕方が無いものと見える。

送柔上人得船字

柔上人を送る、船の字を得たり

(一)叢林初(二)結夏。東去又飄然。
叢林、初めて結夏、東に去つて又飄然。

罷説(三)天台講。行參(四)雪竇禪。
天台の講を説くを罷め、行く〻參す雪竇の禪。

殘經松下几。遠磬月中船。
殘經、松下の几、遠磬、月中の船。

不用空悲別。師今絶妄緣。
用ひず、空しく別を悲むを、師今妄緣を絶つ。

【字解】【一】叢林　寺をいふ。【二】結夏　夏ごもり、前に四明佛舍の詩中に詳說して置いた。【三】天台講　一統志に「天台縣北の國淸寺、奮と天台と名づく、隋の煬帝、智顗禪師の爲に建つ。唐の一行禪師、ここに予て筭を學ぶ　後に異僧寒山拾得あり」と見ゆ、つまり、天台宗の說法。【四】雪竇禪　景德傳燈錄に「明州雪竇山常通禪師は、邢州の人、出家して長沙の岑和尙に參し、後、洞山の石霜に住す、しかも、法に異味なし。光啓中、徒を領して四明に至る、郡守、請うて雪竇に居らしめ、鬱然として盛に起る」とある。

【題義】柔上人の本名は不詳。その行先は、書いて無いが、詩で見ると、四明かと思はれる。得船字は、何かの句を分けて、船の字を得、仍つて、それを韻にして、この詩を作つたのである。

【詩意】上人は、曩に名だたる寺に於て、夏ごもりをしたが、今度は、飄然として東に向ひ、天台の說法を罷めて、雪竇の下に參禪する積りである。松下の几には、讀み殘した御經が置いてあるし、月中の舟に居れば、磬聲が遠く聞こえる。今ここで、別離を悲むは、まことに無用の事であつて、上人は、すでに妄緣を絶ち、世の俗人と全く異なつて居るのである。

中秋琵琶洲宴集得紅字

中秋、琵琶洲の宴集、紅の字を得たり

(一)香霧夕濛濛。(二)孤高桂樹東。
香霧夕に濛濛たり、孤高、桂樹の東。

影疏林際月。涼近水邊風。
影は疏なり林際の月、涼は近し水邊の風。

(三)重露流杯綠。繁星亂燭紅。
重露、杯に流れて綠に、繁星、燭を亂して紅なり。

明年(四)江海上。高會與誰同。
明年江海の上、高會、誰と同じからむ。

【字解】【一】香霧　下に桂樹とあるから、特に香といつたのであらう。【二】孤高　ひとり高く聳し上る。【三】重露　重げにぽとぽと落ちる露。【四】江海　ひろい世間。

【題義】王賓の吳中古蹟詩の序に「琵琶洲あり、舊治通判の西に在り、水淸冽、酒を醸すべし」とある。この詩は、中秋の夜、吳中の琵琶洲に於て宴を催し、席上何かの句を分つて紅の字を得、それを韻にして作つたのである。

【詩意】月は獨り高く桂樹の東に上り、香ばしい霧は、夕に濛濛として居た。その月が林際に至るときは、影極めて疏に、風、水邊に起れば、涼、頗る近きを覺えた。重げなる露は、杯に流れて、酒と同じく綠色を爲し、數かぎりなき星は、燭火を亂して、赤く見える。今夕の宴は、まことに盛であるが、ひろい世間で、明年は誰と共に高會を催すべきか、それを思ふと、まことに感慨に堪へぬ。

【餘論】前聯は、この詩の生命であつて、殊に其上二句、わざと月の字を隱し、第三句に至りて、初めて之を點出したのは、多少の工夫を費したものである。

悼女

女を悼む

（一）保養常多闕。（二）艱難愧我貧。　保養、常に闕多く、艱難、わが貧を愧づ。

悽悽臨歿語。（三）的的在生親。　悽悽たり臨歿の語、的的たり在生の親。

（四）遺佩寒江月。殘燈夜室塵。　遺佩寒江の月、殘燈夜室の塵。

（五）中郎他日藁。留付與何人。　中郎他日の藁、留付、何人にか與へむ。

【字解】【一】保養　保護して養育する。【二】艱難　世事の六つかしいこと。【三】的的　分明の貌。【四】遺佩　かたみの佩玉。【五】中郎他日藁　中郎は蔡邕、後漢書の本傳に「初平元年、左中郎に拜せらる」とある。その女、名は琰、字は文姬、才學あつて、善く父の遺書を誦んじ居たといふことで、後漢書の列女傳に見え、前に卷十一、贈錢文則の詩中にも引いて置いた。

【題意】これは、至正二十七年、青邱が其長女の夭折を悼んで作つたのである。

【詩意】汝を保護養育するに就いて、兎角、十分に行かなかつたのは、世事の艱難に逢ひ、且つ貧乏であつたからで、まことに、慙愧の外はない。汝が臨終の際の言葉は、悽悽として、現在生き殘つて居る親どもは、聞くも痛ましき程であつた。形身の佩玉は、寒江の月に映じ、燈火殘れる部屋の中には、塵が積つて居る。われは汝を見ること、蔡家の文姬の如く、死後は、遺藁を託する積りであつたが、先に死なれては、全くあてが外れたので、その折は、何人に付與すべきかと、今から思ひ惑ふばかりである。

亂後經婁江舊館

亂後、婁江の舊館を經

此地昔相依。重來事已非。　この地、むかし相依る、重來、事、すでに非なり。

（一）新年芳草遍。（二）舊里熟人稀。　新年、芳草遍ねく、舊里、熟人稀なり。

（三）遠燕皆巢樹。閒花自落磯。　遠燕、皆樹に巢ひ、閒花、自ら磯に落つ。

遺蹤竟難覓。愁步夕陽歸。　遺蹤竟に覓め難し、愁へて夕陽に步して歸る。

【字解】【一】相依　住居せしこと。【二】熟人　見知りの人。【三】遠燕皆巢樹　北魏が大擧して南侵せしとき、到る處、ひどく荒らされて、家も無いやうに成つたから、春の燕が林木に巢つたといふことで、南史に見え、前に卷十、次韻楊孟載の詩中に引いて置いた。

【題義】この詩は、兵亂の後、婁江の舊寓を過ぎ、四邊の荒廢した實況を見て作つたのである。

【詩意】ここ婁江の地は、曩に寄寓して居た處であるが、再び來て見ると、有りし昔に似もやらず、事事皆非である。年改まつて、春の若草は、遍ねく生ひ茂つて居るが、もとの村里には、見知りの者も稀である。村民の家など、皆壞れたものだから、遠くから來た燕は、止むなく林樹に巢ひ、花は、しづ心なく江邊の斷礎に散りかかつて居る。遺蹟など、今、求むるに由なく、止むを得ず、愁を含みながら、夕日の中を歩して歸る外はない。

悼故顧宜人

故顧宜人を悼む

避亂應千里。悲離復幾年。
亂を避くる、應に千里なるべし、離を悲む、復た幾年。

塵埃初嫁鏡。雨雪未歸船。
塵埃、初嫁の鏡、雨雪、未歸の船。

有子隨行旐。無人與葬錢。
子あり、行旐に隨ひ、人の葬錢を與ふるなし。

東芻何處弔。衰草暮江邊。
東芻、何處にか弔はむ、衰草暮江の邊。

【字解】【一】悲離　離別を悲む。【二】行旐　葬式の旗、潘岳の寡婦賦に「飛旐翩以啓路」とある。【三】與葬錢　唐書郭元振傳に「郭震、字は元振、魏州貴鄕の人、字を以て顯はる。少にして大志あり。十六、薛稷・趙彥昭と同じく太學生となる。家、かつて資錢四十萬を送る。會ま縗服の者あり、門を叩いて自ら言ふ、五世、未だ葬らず、願はくは、假りに以て喪を治めむ、と。元振、擧げて之を與へ、少しも吝むなく、一も名氏を質さず、稷等歎服す」とある。【四】東芻　詩經に生芻一束、其人如玉とあつて、芻は眞菰、それを束にして墓前に供へる。なほ後漢書徐穉傳に「郭林宗、母の憂あり、穉、往いて之を弔ひ、生芻一束を廬前に置いて去る。衆、怪んで知らず。林宗曰く、これ必ず南州の高士徐孺子ならむ」とある。

【題義】顧宜人は、どういふ人か分からぬが、詩で見ると、亂を避けて吳中に來り、隨分艱苦をした揚句に、病死したものと見える。宜人は人の妻君の尊稱。

【詩意】宜人は、亂を避けて、千里の遠きより來り、夫との離別を悲むこと、ここに幾年。嫁入の時に持參した鏡は、塵埃に塗みれ、雪ふる冬の日に、まだ歸舟を用意するに及ばず、遂に此處で亡くなつて仕舞つた。幸に銘旗に隨つて棺を送る倅はあるが、誰も葬費を與へる人もなく、形ばかりの葬式を出したのは、まことに、氣の毒の至である。さて生芻を用意して、これを弔はむとし、その墓は、何處かと問へば、枯れ草の殘つて居る暮江の邊で、處がら、すでに人の愁思を催さしめる。

過劉山人園

劉山人の園を過ぐ

欲問幽棲處。花蹊逐澗廻。
幽棲の處を問はむと欲すれば、花蹊、澗を逐うて廻る。

夕煙羅幙卷。春雨藥房開。（二）　夕煙、羅幙巻き、春雨、藥房開く。
野鶴知琴意。山蜂給酒材。（三）　野鶴、琴意を知り、山蜂、酒材を給す。
城中少閒客。誰解引車來。　城中、閒客少く、誰か車を引いて來るを解せむ。

【字解】（一）花蹊　史記李將軍傳の論贊に「桃李言はず、その下蹊を成す」とあつて、蹊は小徑。（二）藥房　藥室、藥を調合する部屋。（三）山蜂給酒材　蜂蜜が酒の肴になること。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】山人の幽棲の處を尋ねむとすると、花下の細路は、澗水に隨つて屈曲し、自然に林巒の間に分け入つた。その宅に往つて見ると、夕煙の棚引くあたりに羅幙を巻き上げ、春雨のしとしとと降る中に、藥室は明け放しである。野鶴は、琴の意味を知るが如く、ここに聞きに來るし、山蜂は、蜜を供給して、酒材となさしめる。城中には清閒を樂む人が少いから、誰も此處に車を引いて來やうと思ふ人はない。

【餘論】後聯は、聊か刻劃に過ぎて居るが、なほ名聯たるを失はぬものである。

次韻楊禮曹移疾之作　楊禮曹の疾を移すの作に次韻す

養疾深扉掩。還應謝俗交。　疾を養うて深扉を掩ふ、還た應に俗交を謝すなるべし。
鳥多風和語。葵晩雨緘苞。（一）（二）（三）　鳥は多くして、風、語に和し、葵は晩にして、雨、苞を緘す。
印向閒廳鎖。鐘聞近寺敲。　印は閒廳に向つて鎖し、鐘は近寺に敲くを聞く。
相思愁暮靄。高樹古城坳。（四）　相思、暮靄を愁ふ、高樹古城の坳。

【字解】（一）風和語　風が鳥語に和する。（二）葵晩　葵はあふひ、秋、花を開く。（三）緘苞　苞を封ずる。（四）古城坳　坳は凹、窪地。

【題義】移疾とは轉地療養。この詩は、楊禮曹の轉地療養の作に和したので、禮曹は、卽ち楊基であらう。

【詩意】病氣保養の爲に、深扉を閉ぢ、世の俗交を謝絶して居るであらう。地僻なる爲に、鳥が多く集まり、そして風が鳥語に和し、葵は花開くこと遲く、動もすれば、雨天の寒氣の爲に再び苞が封せられる。腰下の印は、役所に置いた儘であるし、鐘は近處の寺で撞き出すのが聞こえる。君を思へども、暮靄の爲に、その居る處が、はつきりとは分からず、大方、古城の窪地に高樹が林をなして居る其邊であらうと思はれる。

【餘論】大全集には、第七句を相思愁莫過に作つてあるが、第八句との關係から云ふと、矢張、ここ

に掲げた方が宜しい様である。

送周履道入郭

周履道の郭に入るを送る

(一)離羣方(二)感愴。況復與君違。
離羣、方に感愴、況んや、復た君と違ふをや。

花隱歸城旆。風吹渡水衣。
花は隱す城に歸るの旆、風は吹く水を渡るの衣。

須知喧寂異。莫訝往來稀。
須らく知るべし、喧寂の異なるを、訝る莫れ、往來の稀「なるを。」

今夜空齋雨。誰憐獨掩扉。
今夜空齋の雨、誰か憐む獨り扉を掩ふを。

【字解】〔一〕離羣　多くの友人と離れる。〔二〕感愴　感慨愴然たること。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】予は、多くの友人と離れ、さびしく獨り此に居るのに、まして、君と別れては、愈よ堪へられない。送りに來た人は、城に歸らむとし、その押し立てて來た旗は、花に隱れ、君は江水を渡らむとして、浦風さむく衣を吹く。ここに至りて、喧騷と靜寂と、俄然相異なるを知るべく、今日亂後に當りて、旅客の來往少きは、當然の事である。これから、歸つて、今夜、空齋の雨に坐し、われ獨り戸を閉ぢて幽臥するのを、誰も何とも思つて具れぬ。

【餘論】前に城西客舍送周著作砥と題して、

客中寒食後。惆悵送君違。花隱歸城旆。風吹渡水衣。夜窓炊黍散。春苑鬪茶稀。誰念西齋雨。相思獨掩扉。

の一首があつて、第一句と後聯とが違ふだけで、あとは、大抵、ここに在るのと同じである。すると、いづれか改作に相違ないが、もとより格別の者でもなく、さばかり甲乙あるものとも思へぬ。これを兩つながら采錄したのは、疑もなく、編輯者の粗漏である。それから、兩首の詩題に據つて、周著作、名は砥、字は履道といふことが推定される。

雨齋獨坐寫寄友

雨齋獨坐、寫して友に寄す

動與世相妨。(一)端居學坐忘。
動もすれば、世と相妨げられ、端居して坐忘を學ぶ。

雨來池上樹。煙起竹間房。
雨は來る池上の樹、煙は起る竹間の房。

屋鳥非(二)晴弄。(三)蘭花是(四)晩芳。
屋鳥は晴弄に非ず、蘭花は是れ晩芳。

尋山期已阻。遙望奈蒼蒼。
山を尋ねて、期、すでに阻つ、遙望、蒼蒼を奈かむ。

【字解】〔一〕端居　謹愼して家居する。〔二〕晴弄　晴天に鳴く。〔三〕蘭花　蘭は眞盛りを稍や過ごしたること。〔四〕晩芳

晩花に同じ。【五】期已阻　約束して期日が妨害された。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】予は、動もすれば、この世と相妨げられ、止むを得ず、謹愼して蟄居し、專ら坐忘といふことを工夫して居る。折から、雨は池上の樹に注ぎ來り、煙は竹の間なる僧房から緩く立ち上つて居る。屋根の上で鳥が鳴いて居るが、晴天に歌ふのとは、聊か異なつて居る樣であるし、春の名殘の花は、今が眞盛りである。ただ一處に山に游ばうと約束した期日が妨害せられたので、遙に山色の蒼蒼たるを眺めて居るばかりである。

次韻酬西園公

次韻して西園公に酬ゆ

林驚緣樹鼠。池響食萍魚。　林には驚く樹に緣るの鼠、池には響く萍を食ふの魚。

月戸雙砧落。風亭一簟舒。　月戸、雙砧落ち、風亭、一簟舒ぶ。

體便清夏健。髮映早秋疏。　體は便にして清夏に健、髮は早秋に映じて疏なり。

本自無愁事。何煩酒破除。　本と自から愁事なし、何ぞ酒の破除するを煩はさむ。

【字解】【一】緣樹鼠　木を這つて居る栗鼠。【二】雙砧落　二つの砧杵が交互に鳴り響く。【三】體便　からだが自由に働く。【四】酒破除　韓愈の詩に、破除萬事無過酒とある。

【題義】説明に及ばぬ。西園公は張士誠幕下の大官であらうが、名字不詳。

【詩意】林中では、木を這ひ上る栗鼠が驚いて啼いて居るし、池中には、浮草をつついて居る魚が響を爲して居る。月下の人家には、二つの砧が懸け合で鳴り出し、風の吹き入る亭子には、一枚の竹むしろを鋪いてある。體の働きは自由で、清清しき夏、殊に健康であつたが、秋に成ると、髮が拔けて、稍や薄くなつた樣な氣がする。しかし、格別心配すべき事もないから、酒を以て破除するにも及ばない。

【餘論】起首二句は、對偶をなし、そして、前に見える晩步園池の後聯、林爭移樹鳥、池響食萍魚と極めて類似して居ることを、ここに斷つて置く。

聞鄰家琵琶有感

鄰家の琵琶を聞いて感あり

清唱合琵琶。當年碧玉家。　清唱、琵琶に合す、當年碧玉の家。

弄殘催酒急。抱重向燈斜。　弄は殘して酒を催すこと急、抱くこと重く、燈に向つて斜なり。

久別愁江樹。重聽隔院花。　久別、江樹を愁へしめ、重聽、院花を隔つ。

涙多思舊事。不是客天涯。　涙多くして舊事を思ふ、これ天涯に客たるならず。

【字解】〔一〕清唱　清き聲の歌。〔二〕碧玉　古樂府に碧玉小家女とあつて、美人の名。〔三〕弄殘　彈奏が將に終らむとする。〔四〕抱重　琵琶を抱いて重たげに見える、白居易の詩に、千呼萬喚纔出來、猶抱琵琶半遮面となる。〔五〕院花　庭院を飾れる花。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】淸き聲の歌に合はせて、琵琶を搔き鳴らすのは、その昔、世に知られた美人の家である。彈奏、將に畢らむとして、酒を催すこと急に、重げに抱へて居る影は、燈前に向つて斜なるが如く見える。予は、友と別れて、すでに久しく、愁は江上の樹に滿ち、ここに重ねて四絃の音を聞くものの、庭花を隔てて、その席の樣子などはよくは分からぬ。涙の多きは、舊事を思ひ出たからであつて、もとより、天涯の客ではない。

書王生扇

王生の扇に書す

素質粉藤光。蒲葵詎可方。
素質、粉藤の光、蒲葵、詎ぞ方ぶべき。

當懷驚抱月。洒面怯沾霜。
懷に當つて月を抱くに驚き、面に洒いで霜を沾すを怯る。

宜助驅蠅用。羞隨走馬狂。
宜しく蠅を驅るの用を助くべく、走馬の狂に隨ふを羞づ。

過時甘自棄。不怨井梧黃。
時を過ぎ自ら棄てらるるに甘んず、井梧の黃なるを怨みず。

【字解】〔一〕素質　その純白なる本質。〔二〕粉藤　白粉の色なせる藤紙。〔三〕蒲葵　その葉の乾したのを編んで團扇とする。〔四〕走馬狂　漢書に「張敞、京兆たる時、朝を罷め、馬を章臺街に走らし、自ら便面を以て馬を拊つ」とあつて、その注に「便面は、面を障る所以、蓋し扇の類なり」とある。

【題義】この詩は、王某所有の團扇に題したので、詩で見ると、絹製ではなく、紙で造つたものらしい。

【詩意】王君の持つて居る扇は白地で、藤紙を張つて造つたから、光澤があつて、蒲葵扇などは、到底比較に成らない。これを懷に當てると、人が見て、月を抱いて居るかと驚くばかり、顏に持つて行くと、霜がかかりはせぬかと恐れる位。これを以て蠅を驅除する用を助けることが出來るが、章臺に馬を走らした張敞の狂に隨ふことを羞づる。時節を過ぐれば、不用だといつて棄てられるが、固より之に甘んじて、井畔の桐の葉が黃ばみかかつて、秋の來たことを怨まない。

送胡鉉游會稽

胡鉉の會稽に游ぶを送る

山水獨行徧。苕溪仍剡溪。
山水、獨行徧ねし、苕溪と剡溪と。

衣逢新火減。舟渡雜花迷。
衣は新火に逢うて減じ、舟は雜花を渡つて迷ふ。

(三)黄絹尋碑讀。紅(四)裙賭墅攜。 黄絹、碑を尋ねて讀み、紅裙、墅を賭して攜ふ。
清游不能共。腸斷聽猿啼。 清游共にする能はず、腸断えて猿啼を聽く。

【字解】【一】新火　東坡の詩に「三見清明改新火」とある。寒食の後、火を改めることを云ふ。【三】黄絹　一統志に「曹娥碑は、紹興府城東南の江上に在り」とある。その碑文は、邯鄲淳の作で、後に蔡邕が之を賛して、黄絹幼婦外孫齏臼の八字を碑陰に鐫らしめた。それを楊修が見て、直に絶妙好辭の隱語たることを知つたので、その詳は、前に卷二、主客行の小見能讀曹娥碑の句下に述べて置いた。【三】紅裙　晉書謝安傳に「會稽に寓居し、游賞する毎に、必ず妓女を以て從ふ」とある。【四】賭墅　苻堅が大擧南侵せし時、謝安が其姪玄と墅を賭して棊を闘はしたことで、その詳は、前に卷四、燕客の詩中に述べて置いた。

【題義】胡鉉は如何なる人か分からぬ、大全集には、銓に作つてあるが、それでは、宋の胡澹菴と全く同名で、どうも誤らしく思はれる。會稽は、紹興府に屬し、禹が諸侯を會したことを始めとし、むかしから、史實に富んだ地方である。

【詩意】君は、獨行して、遍ねく山水の勝を尋ね、苕溪より剡溪に及び、少しも見殘す處はない。今しも、春の半を過ぎて、新に火を換へた頃、暖氣日に增す爲に、衣を薄くし、到る處、花が咲き亂れ、舟は其間を渡つて、遠近に迷ふ位。黄絹幼婦と稱せらるる曹娥の碑を尋ねて讀み、又當年の謝安を學んで紅裙の妓を攜へ、別墅を賭して棊を闘はす樣な風流もあらう。遺憾ながら、予は君と清游を共にすることが出來ないので、日暮、猿聲を聞くと、自然、斷腸するばかりである。

【餘論】大全集には、結二句を蘭亭舊基在、觴詠付新題に作つてあるが、新題は、前の新火と併せて、新の字が重複するから、後に改竄して、ここに掲げた通りにしたのであらう。なほ前聯は、濃春の煙景を巧に描き出した名聯である。

送陳少府赴嘉定

陳少府の嘉定に赴くを送る

雨歇桑陰路。爭迎紺幰車。 雨は歇む桑陰の路、爭うて迎ふ紺幰車。
湖多田水滿。城小井(二)煙疏。 湖多くして田水滿ち、城小にして井煙疏なり。
夜戸猶聞犬。春濤欲上魚。 夜戸、猶ほ犬を聞き、春濤、魚を上らむと欲す。
期君布新政。去卜海邊居。 期す、君が新政を布き、去つて海邊の居を卜するを。

【字解】【一】紺幰車　紺色の幕を垂れた車で、五品以下の乗用である。隋書儀禮志に「幰車は、三品以上、青幰朱裏。五品以下は紺幰碧裏、皆白銅裝」とある。【三】井煙　むかしは、四辻に共用の井があつた故に、市中の一區劃を井と稱し、市井・井邑などいふ熟語がある。市中の炊煙。

【題義】少府は、縣令の尊稱。陳某は、名字不詳。嘉定は、蘇州府に屬し、後に太倉州に隷した。この詩は、陳某が嘉定の縣令となつて赴任するを送つたのである。

【詩意】桑の若葉の茂れる路に雨が歇み、そこに縣民が大勢出かけて、紺幰を垂れた君の車を迎へるであらう。嘉定地方は、湖沼多き爲に、灌漑の便が善くて、田水は常に滿ちて居るが、何分田舍であるから、城は小さくして、市中の炊煙も稀疏である。夜になると、門を守る犬の吠えるを聞くべく、江邊には、春の濤が魚を打ち上げて來る。君は、著任の後、新政を布いて、務めて人民の爲めを計り、そして、居を海濱に卜して、心のどかに風景を賞したらば宜しからうと思ふ。

報恩寺逢蔣主簿就送還如皐

報恩寺、蔣主簿就に逢ひ、如皐に還るを送る

(一)貪語(二)酒寒頻。新年見故人。
別時煙寺晩。歸路雪江春。
(三)造次燈前面。(四)蒼茫舶上身。
明朝(五)楚花發。莫歎(六)縣廚貧。

語を貪つて、酒寒頻りなり、新年、故人を見る。
別時、煙寺の晩、歸路、雪江の春。
造次、燈前の面、蒼茫、舶上の身。
明朝、楚花發す、歎ずる莫れ縣廚の貧なるを。

【字解】【一】貪語　談話を貪る。【二】酒寒　醉ひ醒めの寒さ。【三】造次　わづかの間、怱卒。【四】蒼茫　あわただしき貌、「杜甫の北征に蒼茫問家室」とある。【五】楚花　楚地の花。【六】縣廚　役宅の臺所。

【題義】姑蘇志に「報恩講寺は、城の北隅に在り、故に北寺と呼ぶ、卽ち通玄寺の舊基。呉越の錢氏、支硎山報恩寺を移し、改めて此に建つ、浮圖十一級、兵燼後、行者金大圓、募つて九級を建つ」とある。主簿は、縣令の下役、姓は蔣、名は就。如皐は、一統志に「揚州に屬す、戰國の楚地」とある。この詩は、報恩寺に於て、如皐の主簿蔣就に逢ひ、歡晤の後、その歸任を送つたのである。

【詩意】話に實が入つて、折角飲んだ酒の氣もなくなり、醉ひ醒めの寒さが、頻りに來り襲ふが、何は兎もあれ、新年に際して、舊友に逢うた嬉しさ。別るる時は、日暮、寺邊に煙たなびき、これより、君の歸り行く路は、江上の雪消えかかつて、追追春景色を催すであらう。何分、燈前で面會して、怱卒なりしは、遺憾であつて、舟で歸る君も、隨分あわただしい。やがて、歸任の時は、楚地の花も咲き出づるであらうから、本來の貧縣で、食ふ物さへ碌に無いといつて、歎息するにも及ばぬことと思ふ。

贈姚東曹

姚東曹に贈る

(一)爐氣拂春衣。(二)分曹直省(三)闈。
相門旄節重。(四)郎舍簡書稀。

爐氣、春衣を拂ひ、分曹、省闈に直す。
相門、旄節重く、郎舍、簡書稀なり。

夜直聽鐘度。晨朝策馬飛。　夜直して、鐘を聽いて度り、晨に朝して、馬に策つて飛ぶ。

共憐王掾少。粉署有光輝。　ともに憐む、王掾の少きを、粉署、光輝あり。

【字解】【一】爐氣　香爐の匂ひ。【二】分曹　組を分ける。【三】省闥　詰め所。【四】郎舍　郎中どもの溜まり所。【五】王掾　王珣を云ふ、晉書の本傳に「珣、謝玄と桓溫の掾となり、ともに溫に敬重せらる。かつて、人に謂つて曰く、謝掾は年四十にして旄仗を擁し、王掾は黑頭公となるべし」とある。【六】粉署　白色に塗りたる官衙、漢官儀に「省中、皆胡粉もて壁を塗る、故に粉署といふ」とある。

【題意】後漢書百官志に「太尉公屬東曹、二千石長吏を主とし、遷除して軍吏に及ぶ」とあつて、東曹といへば、太尉、卽ち陸軍大臣の祕書官といつた樣なものと見える。この詩は、その職に居た姚某に贈つたのである。

【詩意】香爐の匂ひに春衣を拂はせ、組を分つて、省中の詰所に出仕する。その長官は、卽ち太尉で、さすがに相門の旄節仰仰しく、格式も貴いが、祕書どもの居るところは、文書の往復も稀であつて、隨分ひまである。そこで、夜、宿直する時には、鐘を聞いて出かけ、早晨に參朝する折は、馬に鞭つて飛ぶが如く行く。君は、年少にして、才氣煥發、さながら、古しへの王珣の如く、その將來に囑望せられ、粉署も爲に光輝を生ずるばかり、マア折角自重して、しッかり、遣つて貰ひたいものである。

【餘論】この詩中、直の字の重複して居るのは、一寸目障りである。

鍾山雪霽圖

鍾山雪霽るるの圖

山勢識龍蟠。香臺擁翠巒。　山勢、龍蟠を識り、香臺、翠巒を擁す。

草堂猿嘯晩。蕙帳鶴驚寒。　草堂、猿、晩に嘯き、蕙帳、鶴、寒に驚く。

雲擁梁僧塔。苔封宋帝壇。　雲は擁す梁僧の塔、苔は封す宋帝の壇。

昔年游歷處。今向畫中看。　昔年游歷の處、今、畫中に向つて看る。

【字解】【一】龍蟠　諸葛亮が、石頭虎踞、鍾山龍蟠といつたことがあるので、前に卷十一、登雨花臺の詩中にも注して置いた。【二】香臺　寺刹を云ふ。張說の詩に香臺豈是世中情とある。【三】蕙帳　蕙は蘭の一種、一莖一花なるもの、蘭の香を焚きしめたる帳、隱者の居るところを指す、孔稚圭の北山移文、蕙帳空兮夜鶴怨に本づく。【四】梁僧塔　梁僧は寶誌で、その墓がある。前に卷九、游鍾山の詩の梁僧遺墓臥殘碣の句下に注して置いた。【五】宋帝壇　宋の高祖の天を祀りし處、同じ詩の宋帝廢壇埋深管の句下に注して置いた。【六】昔年游歷處　青邱は、南京に居た時、後に鍾山里第に寓し、そこは、山の麓であるから、日夕、游涉したことと思はれる。

【題意】說明に及ばぬ。

【詩意】鍾山は、龍の蟠るが如しといはれて居つて、この畫でも、さういふ山勢が明かに識別せら

れ、そして、多くの寺どもは、翠巒を擁して、處處に點綴して居る。山中には、隱者も大分住んで居るが、雪後の事であるから、草堂に近く、日暮、猿が鳴くであらうし、又蕙帳人なき處に於て、鶴は、その寒げなるに驚くことであらう。梁僧寶誌の墓は、雲が繞つて居るし、宋の高祖の天壇は、苔が封じて居る。この山は、前年、毎に游歷した處であるが、今、畫中に之を見ると、流石に感慨に堪へられぬ。

【餘論】前聯は、全く孔稚圭の北山移文に本づいたものであるが、その痕跡なくして、新意を發したのは、取りも直さず、熟事生用の妙である。第二、第五の兩句に、擁の字の重出して居るのは、粗漏であつて、こんな處は、どうにでも成ることと思ふ。なほ、この詩は、鍾山雪霽といふ題であるのに、前聯だけが、解釋によつては、聊か雪に關係ある樣に見ゆる外、すこしも、題意を發揮して居らぬは、如何したものか、まことに怪訝に堪へぬ。

周興裔墓

周興裔の墓

高宗南渡後。觀察(一)死封疆(二)。　高宗南渡の後、觀察、封疆に死す。

畫策無遺算。禽胡不避强。　畫策、遺算なく、胡を禽にせむとして、强きを避けず。

數窮(三)身遇害。名重骨猶香。　數窮して、身、害に遇ひ、名重くして、骨猶ほ香し。

賜葬虞山勝。恩褒(四)萬古揚。　葬を賜ふ虞山の勝、恩褒、萬古に揚がる。

【字解】【一】觀察　即ち周興裔を指す。【二】封疆　領内。【三】數窮　數は運命。【四】恩褒　死後の褒賞。

【題義】題下の原注に「虞山の東に在り、宋の高宗、公の節に殉せしを憫み、轉字圩山の地十四畝を給して勅葬す」とある。元來、周興裔は如何なる人か、史傳に見えぬから、よく分からぬが、この詩で見ると、金人を禦いで戰死したものらしく、青邱が特に之を追弔したのも、もとより、當然の事である。

【詩意】宋の高宗が、南、江を渡つて臨安に偏安せし後、觀察は、その領内を固守して、遂に戰死して仕舞つた。もとより、その畫策には遺漏なく、胡人を擒にせむとして、その强きを避けず、天晴、智勇兼備の大人物であつたのに、運命の盡くるところ、身、害に遭ひ、名は千載に重くして、骨、猶ほ香ばしきを覺える。さればこそ、虞山の勝地に勅葬せられ、死後の追褒は、萬古に傳はつて居る。

【餘論】後聯十字は、觀察の像贊に當つべく、まことに簡にして盡くして居る。

309
65

終

續國譯漢文大成

文學部 八十四

309
65

始

續國譯漢文大成

文學部 第八十四册（第二十一帙の四）

高靑邱詩集 三の四

吉田祥郎氏 寄贈本

309
65

五言律詩

送吳縣令還松陵

吳縣令の松陵に還るを送る

山縣彈琴罷。江城露冕初。　山縣、琴を彈じて罷み、江城、露冕の初。
夏霖湖更濶。朝日市長虛。　夏霖、湖、更に濶く、朝日、市、長しへに虛し。
柳下催耕鼓。桑間問俗車。　柳下、耕を催すの鼓、桑間、俗を問ふ車。
秋風莫思去。客館有鱸魚。　秋風、去るを思ふ莫れ、客館に鱸魚あり。

【字解】【一】山縣　山邊の縣、何處とも分からぬ。【二】彈琴　宓子賤の故事、前に數ば見ゆ。【三】江城　松陵を指す。【四】露冕　華陽國志に「郭賀、字は喬卿、荊州刺史となつて殊政あり。明帝、南陽に到つて巡狩し、三公の服を賜ひ、敕して部を行り、檐を去り、冕を露はし、百姓をして之を見しめ、以て有德を彰はす」とある。【五】夏霖　雨三日以上を霖といふ。

【題義】說明に及ばぬ、但し、吳某の名字は不詳。

【詩意】君は、これまで山邊の邊鄙な小縣に在つて、琴を彈じて治績頗る擧がり、この度、松陵の令に榮轉し、晃を露はして入部することになつた。松陵の地たるや、夏、長雨が續けば、湖面愈よ濶くなり、その頃は、朝日が上つても、市が開かない。何にしろ、水邊であつて、農桑が非常に發達して居るから、柳の下で鼓を鳴らせば、一齊に耕作に赴き、桑間に車を停めて、風俗を問へば、得るところも多いであらう。やがて、秋風の季節に成つても、かの張翰の如く歸り去らうと思はなくても善いので、客館には、鱸魚があつて、舌鼓を鳴らすに足ることと思ふ。

寄沈達卿校理

沈達卿校理に寄す

風雨清明後。春寒未（一）袷衣。
風雨清明の後、春寒くして未だ袷衣ならず。

閉門聽鳥盡。入寺看花稀。
門を閉ぢて鳥を聽いて盡くし、寺に入るも花を看ること稀なり。

獨酌愁難去。相思夢欲飛。
獨酌、愁、去り難く、相思、夢、飛ばむと欲す。

（三）艱難宜數見。何事却長（四）違。
艱難、宜しく數ば見るべし、何事ぞ、却つて長く違ふ。

【字解】【一】清明　二十四節の一、三月の節。陽曆では四月五六日の頃。【二】袷衣　あはせの著物。【三】艱難　世事の愈よ六つかしいこと。【四】長違　長く相遇はぬこと。

【題義】説明に及ばぬ。但し、校理は官名。

【詩意】風雨の中に清明の節を送りし後、春は寒くして、まだ袷衣を著るやうにも成らぬ。ここに、予は、門を閉ぢて蟄居し、鳥の聲を聽き盡したが、時たま寺に往つても、花はまだ咲き出さぬ。獨りで、いくら酒を酌んでも、愁を除き去ることは出來ず、君を思ふと、夢が其地に飛んで行く位。この世事多難の時に當り、數ば相遇ふならば、いささか慰みにもなるが、如何なれば、打絶えて、御目にかかることが出來ないのであるか。

【餘論】この詩は、自家今日の境遇を敍して、面晤の期あらむことを囑望したので、殊に、後聯は一往情の深きを覺える。

贈呂醫

呂醫に贈る

（一）藥院閉閒朝。煙生積（二）券燒。
藥院、閒朝に閉し、煙生じて積券燒く。

（三）求眞游岳遍。訪病出城遙。
眞を求め岳に游ぶこと遍ねく、病を訪ひ城を出づること遙かなり。

收穀寧煩僕。（四）尋苓或遇樵。
穀を收めて寧ろ僕を煩はさむや、苓を尋ねて或は樵に遇ふ。

世方多內（五）熱。（六）一匕儻能消。
世、方に內熱多し、一匕、もしくは能く消さむ。

【字解】【一】藥院　卽ち藥局。【二】積劵娥　柳宗元の宋淸傳に「疾病疕瘍の者、淸に就いて藥を求む、錢を持せずと雖も、皆善藥を與ふ、積劵山の如し。或は識らざるも、遙に劵を與へて辭を爲さず、歲終れば、輒ち劵を焚く」とある。【三】求眞　眞は仙人。【四】苓苓　苓は茯苓。【五】內熱　莊子に「吾、朝に命を受けて、夕に氷を飲む、我其れ內熱するか」とある。【六】一匕　一さじ、少しばかりの藥。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】藥局は靜かなる朝に閉ぢて、容易に開かない。君は藥を無代價で頒布して、歲の終には、殘りなくその證書を焚き棄てるとのことで、さすがに、仁者たるに負かない。かつて、仙人を尋ねて、五嶽を巡つたこともあるし、患者を見舞ふ爲には、はるかに城外にまで出かける。その間、稻の刈りこみにも、家僕を煩はさずして、自分で田に出かけ、又茯苓を探がす爲に、山に分け入つて樵夫に遇ふこともある。顧みれば、この世に居ると、いろいろの憂き目に遇つて、心中の熱することが多いが、君から一さじの藥を貰つたならば、ひよッと、これを消すことが出來るかも知れない。

次韻陳留公見貽湖上行屯之作

陳留公の貽られし湖上行屯の作に次韻す

湖陰巡壘罷。緩服上仙舟。　湖陰、壘を巡つて罷め、緩服、仙舟に上る。

景好看宜晚。詩淸賦爲秋。　景は好くして、看、晚に宜しく、詩淸くして、賦、秋の爲にす。

葉應隨鳥散。山欲趁波流。　葉は應に鳥に隨つて散ずべく山は波を趁うて流れむと欲す

亦有東游興。空憐未得酬。　亦た東游の興あり、空しく憐む未だ酬ゆるを得ざるを。

【字解】【一】湖陰　湖の北岸。【二】緩服　便服、略服、南史沈慶之傳に「劉湛收めらるるの夕、上、門を開いて慶之を召す。慶之、戎服、鞋を履み、袴を縛して入る。上見て驚いて曰く、卿、何の意ぞ、乃ち爾かく急裝する。慶之曰く、夜半、隊主を喚ぶ、緩服を容るさず」とある。

【題義】陳留公は何人か分からぬが、いづれ、張士誠の大官であらう。行屯の屯は屯田、漢書趙充國傳に「分つて要害に屯す」とあり、又「兵耕すを屯田といふ」とある。この詩は、陳留公が湖上の屯田兵營を巡視した詩を貽られたから、それに次韻したのである。

【詩意】君は、湖北に至りて、屯田の營舍を巡檢し、それが濟むと、便服で舟に乘られた。好い景色は、晚に眺めるが宜しく、秋を賦した爲に、詩も自然淸超である。落葉は、鳥に隨つて散り、山は波を趁うて流るるばかりで、流石に面白い。承はれば、東邊に游ばれるさうであるが、お伴をして、途すがら、詩を酬ゆることの出來ないのは、いかにも殘念である。

【餘論】後聯は、沈重屈折、自然妙處に到達したものである。

雨後飲二西園偶然亭一

雨後、西園の偶然亭に飲む

晩酌二(一)櫻桃下一。歡來不レ奈レ春。　晩に櫻桃の下に酌む、歡來れども、春を奈かむともせず。

那知醉後客。猶是亂中人。　那ぞ知らむや、醉後の客、猶は是れ亂中の人なるを。

雨霽飄還細。花寒破(二)未レ勻。　雨霽れて飄つて還た細、花寒くして破れて未だ勻せず。

(三)江皐舊游處。回レ首莫レ沾レ巾。　江皐舊游の處、首を回らすも、巾を沾す莫れ。

【字解】【一】櫻桃　櫻と桃とではない、和名ゆすらむめ、本草綱目に「櫻桃は桃の類に非ずと雖も、その形、桃に肖たるを以て故に之に名づく。その樹、甚だ高からず、その葉、團にして尖、及び細齒あり、春初、白花を開く、繁英、雪の如く、實を結べば、一枝數十顆」とある。【二】未勻　勻はひとしと訓す、一齊に咲き揃はぬこと。【三】江皐　皐は澤地、江邊に同じ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、西園は、自宅に在つて、偶然亭も、無論、その中に在ることと思はれる。

【詩意】日暮、櫻桃の花の下に酒を酌み、大分上機嫌に成つて來たが、この春を十分に樂むことは出來ない。誰か料らむ、醉後の客とは云ふものの、顧みれば亂中の人で、心ゆくばかり酣歌するは、思ひも寄らぬことである。雨は、一寸霽れたが、又ぞろ、細かいのが降つて來るし、花は寒げに見え、咲き出でたとはいへ、まだ十分に揃はない。江邊なる舊游の處などは、定めて荒蕪に歸せしなるべく、そんな事を思つて、涙に巾を沾しては、まことに果しないことである。

鄰家桃花

鄰家の桃花

春色東家出。相窺似レ有レ心。　春色、東家より出で、相窺ふ、心あるに似たり。

(一)曲垣遮自短。(二)別院閉還深。　曲垣、遮つて自ら短く、別院、閉ぢて還た深し。

影動疑二人折一。香搖妬二蝶尋一。　影、動いて人の折るを疑ひ、香、搖いで蝶の尋ぬるを妬む。

好風時解レ意。(三)吹レ片拂二羅襟一。　好風、時に意を解し、片を吹いて羅襟を拂ふ。

【字解】【一】曲垣　曲つて繞らしたる籬。【二】別院　別に成つて居る一構。【三】吹片　片は花びら。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】春色なまめかしき桃の花は、ぬッと東家より出でて此方を窺ひ、さながら心ありげに見える。曲れる垣は、中を隔てて居るが、丈が低いから、かくの如く遠慮なく出て來たのであるし、そこに近き鄰家の別院は、深く閉ぢて、人ありとも見えず、つまり、この花は、わが玩賞に任かされて居る。その影の動くときは、人が折りに來たのではないかと疑ひ、香氣の搖ぐ時は、蝶の尋ぬるさへ妬ましいと思ふ。しかし、心地よき春の風が、時時花びらを吹き散らして、襟の邊を拂ふのは、流石に我が意を解するものの如く、殊にしほらしい。

【餘論】これは詠物の體であつて、略ぼ其體製を備へて居るが、なほ平淺を免れぬものである。

和王止仲校理夜坐

王止仲校理の夜坐に和す

(一)池暝花如霧。(二)蒼蒼月照開。池は暝して、花、霧の如く、蒼蒼として、月照らし開く。

梁空雙燕宿。簾暗一螢來。梁は空しくして雙燕宿し、簾は暗くして一螢來る。

(三)兵散誰家笛。人違此夜杯。兵は散ず誰が家の笛、人は違ふ此夜の杯。

如何對清景。愁思却相催。如何か清景に對し、愁思、却つて相催す。

【字解】【一】池暝　暝は暮るゝ、黄昏がるの意。【二】蒼蒼　白くして光彩なきを云ふ、ほの白し。【三】兵散誰家笛　晉書劉琨傳に「琨、晉陽に在つて、胡騎に圍まるゝ數重、城中窘迫して計なし。琨、乃ち月に乘じ、樓に登つて清嘯す。賊、これを聞いて、皆悽然として長歎す。中夜、胡笳を奏す、賊又流涕歔欷、懷土の切なるあり。曉に向つて復た之を吹く、賊、竝に圍を棄て走る」とある。これは胡笳であるが、ひとしく吹く物である處から、笛の故事としても適用するので、杜甫の聞笛の詩にも胡騎中宵堪北走とある。

【題義】説明に及ばぬ。王止仲は、例の北郭十友の一人で、青邱の熟友である。

【詩意】池の邊は黄昏れて、花は霧の如く、月は出たけれども、ほの白く照らして居る。並梁は空しくして、唯だ雙燕の宿するあるのみ、簾は暗くして螢が一つ飛んで來た。闔城の賊兵の散じたのは、誰が家の笛を聞いた爲であるか、そして、この夜、君と會飮の期を失つたのは、まことに殘念である。君の詩で見ると、清景に對して、愁思の却つて相催すに堪へぬといふ樣なことを述べてあるが、そは何故であるか、蓋し、時事に感激した爲であらう。

【餘論】前聯は、一寸面白いが、螢は、ちと早過ぎはせぬかと危ぶまれる。

答陳校書客懷

陳校書の客懷に答ふ

(一)同患君尤甚。(二)時難覺意眞。同患、君尤も甚し、時難、意の眞なるを覺ゆ。

愁邊長夜雨。夢裏少年春。愁邊長夜の雨、夢裏少年の春。

游遠荒家業。交疏困(三)路塵。游遠くして家業を荒び、交疏にして路塵に困む。

一杯歌短調。誰聽不沾巾。一杯、短調を歌ふ、誰か聽いて巾を沾さざらむ。

【字解】【一】同患　世に容れられずして、落魄することが同じだといふ意。【二】時難　今の時の多難なること。【三】路塵　行路の塵。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】今の世に容れられずして、落魄して居ることは同じであるが、君の方が特に甚しく、刻下の多難に遇うて、愈よ心意の眞なるを感ずる。愁邊には、長夜の雨降りそそぎ、夢中、空しく少年の春を見て、追憶の念、いや増すのみである。加ふるに、遠游して、家業は愈よ荒み、訂交の人なくし

帝圖

て、異鄉に居ると、行路の塵に惱むを免れない。ここに、一杯の酒を傾けつつ、短調の詩を吟ずると、誰が聽いても、巾を沾さぬものは無い。

【餘論】この詩は、前に卷十二、送二陳則一の五律、

挾レ策去誰親。侯門不レ禮レ賓。愁邊長夜雨。夢裏少年春。樹引離鄉路。花驕失意人。一杯歌二短調一。相送欲レ沾レ巾。

に比較して、前聯は全く同じで、七八兩句は、わづか二字の差異あるだけである。しかし、この詩では、起句に同患とあるから、前後兩聯が、二人に共通なる境涯を述べたことになつて、感愴は、愈よ深い。その孰れが先後なるかは分からぬが、これに據つて、陳則は、かつて、校書に官したことが推定される。何は兎もあれ、頷聯だけは面白いが、その前後の之に副はぬことは、兩首ともに同じである。

酬二余左司一

余左司に酬ゆ

門巷接二垂楊一。同鄰忘二異鄉一。　門巷、垂楊に接し、同鄰、異鄉を忘る。

兒親欣二見熟(一)一。僕立厭二言長一。　兒は親んで見て熟するを欣び、僕立つて言の長きを厭ふ。

讀借二風牀簡(二)一。炊分二雨碓粱(三)一。　讀は風牀の簡を借り、炊は雨碓の粱を分つ。

亂來成二久別一。能(四)不二爲レ情傷一。　亂來、久別を成す、能く情の爲に傷まざらむや。

【字解】【一】見熟　顏を見知る。【二】風牀簡　風の吹き度る吟牀に在る書卷。【三】雨碓粱　雨中石臼で搗いた米。【四】能不爲情傷　前にも見えたが、矢張、反語に讀まぬと意味が通じない。

【題義】詩で見ると、余左司は、作者の鄉家に住して居たが、その內に、他處に移つたものと見える。この時、作者は何處に居たか分からぬが、異鄉とあるから、蘇州ではなく、即ち北郭であつたらうと思はれる。余左司は即ち余堯臣、前に卷三、春日懷二十友一の詩の第一に出て居る。

【詩意】門巷の間、垂楊が相接し、君と鄰を同じうして居る處から、異鄉に在ることを忘れて居る。君の家の子供は、顏を見知つて、馴染になつたことを喜び、下僕は、毎毎立ち話をするが、その長いのが厭になる位。書を讀む時は、君の風牀に載せてある簡冊を借り、飯を炊ぐ折は、雨中石臼で搗いた米を分けて貰つた位。しかし、爭亂以來、別離すでに久しく、いかで情を傷ましめざるべき、まことに懷かしさに堪へぬ次第である。

宿二道王蘭若一

道王蘭若に宿す

借レ榻到二僧扉一。雖レ安未二是歸一。　榻を借りて僧扉に到る、安しと雖も、未だ是れ歸らず。

暝禽愁二雪意(一)一。夜篠助二風威一。　暝禽、雪意を愁へ、夜篠、風威を助く。

燈盡(二)思燃帶。衾寒起覆衣。　燈盡きて帶を燃やさむことを思ひ、衾寒くして起つて衣を覆ふ。

不知孤棹去。明夕更何依。　知らず孤棹去つて、明夕更に何にか依らむ。

【字解】【一】夜篠　篠は竹藪。【二】思燃帶　前に卷七、早發三土橋一の詩に見えて居たが、唐書昌市無逸傳に「無逸、かつて郤を按じて民家に宿し、燈炷盡く、主人將に續いで進めむとす、無逸、佩刀を抽き、帶を斷つて炷となす、その廉介、かくの如し」とある。

【題義】釋氏要覽に「梵言阿蘭若、唐言無諍、一に云ふ閒靜の處」とあつて、蘭若は卽ち寺、この詩は、道王寺に宿して作つたのである。寺の所在は不明であるが、或は吳越游中の事かと思はれる。

【詩意】僧扉を敲いて、一宿を許され、まことに安らかではあるが、家に歸つたのでないから、何となく落ち付かぬ處がある。暮禽は、雪もよひの寒さを愁へて、時時騷ぐことがあるし、夜に入ると、竹藪がざわざわと鳴つて、風威を助ける樣に聞こえる。やがて、燈火が盡きたから、帶をほごして燈心にしやうと思ひ、夜具が薄くして、寒い處から、脫ぎ棄てた衣を其上に掩ひかぶせた。今宵は、これで善いが、孤棹一たび去つて、明夕は何處に宿するか、旅は、まことに寂しいものである。

【餘論】前聯は、冬夜淒寒の神理を刻劃して、極めて新警である。

與詩客七人會飲余司馬園亭

詩客七人と余司馬の園亭に會飮す

情與酒兼和。園亭駐(一)晚珂。　情は酒と兼ねて和らぎ、園亭、晚珂を駐む。

家同(二)榆社近。人比(三)竹林多。　家は同じく榆社に近く、人は竹林に比して多し。

(四)短景催長宴。醒吟雜醉歌。　短景、長宴を催し、醒吟、醉歌に雜る。

亂離歡易失。無厭數相過。　亂離、歡、失ひ易し、厭ふ無かれ、數ば相過ぐるを。

【字解】【一】晚珂　通俗文に「勒の飾を珂といふ」とあつて、馬のくつわ、從つて馬の義に用ひて居る。【二】榆社　史記封禪書に「高祖、はじめて起るとき、豐の枌榆社に禱る。天下、すでに定まるや、御史に敕し、豐をして謹んで枌榆の社を治めしめ、常に四時を以てし、春は羊彘を以て之を祀る」とあつて、その注に「社は豐の東北に在り、或は曰く、枌榆は鄕名、高祖の里社」とある。つまり鎭守の社。【三】竹林　竹林は七人であるが、この會は、主人と靑邱とを加へて九人であるから、竹林よりも多いといつたのである。【四】短景　日の短いこと。

【題義】題下の原注に「居、皆北郭に在り」とあつて、この詩客七人等は、例の北郭十友の人人であらう。

【詩意】日暮、馬を駐め、余司馬の園亭を音なうて會飮をなし、賓主打解けて、情は酒と共に增して和氣藹然として居る。この連中は、いづれも北郭に住んで居て、家は鎭守の社に近く、參同した人の數は、竹林に比して稍や多い。日の短い頃で、長坐の會飮はせき立てられる樣であるが、醒めて吟ずるものと醉うて歌ふものとが、一處に混同して居る。刻下亂離の世の中で、歡會は、兎角失ひ易い

から、折あらば、數ば會を催すが善いので、格別厭だと思ふ人もあるまい。

登西澗小閣

西澗の小閣に登る

層檻構雲牢。清寒灑客袍。　層檻、雲に構へて牢く、清寒、客袍に灑ぐ。

石稜添澗險。閣勢借峰高。　石稜、澗に添うて險、閣勢、峰を借つて高し。

風竹驚棲鳥。霜藤縋飲猱。　風竹、棲鳥を驚かし、霜藤、飲猱を縋す。

欲題因境勝。不敢易揮毫。　題せむと欲するも境の勝れたるに因つて、敢て揮毫を易［しとせず。］

【字解】【一】層檻　層は二階三階と重るをいふ、檻は欄干。【二】構雲牢　雲の上に構へて丈夫である、杜甫の詩に棧雲闌干峻、梯石結構牢とある。【三】石稜　石の稜角。【四】縋飲猱　水を飲む猿が縋り付く。

【題義】西澗は、蘇州郭外の西に在るかと思はれる。

【詩意】幾層にもなつて居る欄干は、雲の上に在つて、結構牢固、これに倚ると、清寒の氣が客袍に注ぐ様である。石は稜角を磨し、澗をして愈よ險ならしめ、閣は峰の上に在るから、一きは高く覺える。風に戰ぐ竹は、林中の宿鳥を驚かしめ、霜を帶びたる藤蔓は、水を飲む猿の縋るに便する。ここに來て詩を題する積りであつたが、境地の勝れたるに因り、うかと筆を揮ひ兼ねて、ひたすら苦吟して居る。

【餘論】前聯は、洗錬の餘に成つたので、添の字、借の字は、ともに苦心の跡が見える。

江上答徐卿見贈

江上、徐卿の贈らるるに答ふ

煙樹近松陵。扁舟晩獨乘。　煙樹、松陵に近く、扁舟、晩に獨り乘ず。

江黃連渚霧。野白滿田氷。　江は黃なり渚に連るの霧、野は白し滿田の氷。

往事愁人問。虛名畏客稱。　往事、人の問ふを愁へ、虛名、客の稱するを畏る。

無才任蕭散。敢望鶴書徵。　才の蕭散に任へたるなし、敢て望まむや鶴書徵さるるを。

【字解】【一】任蕭散　蕭條樗散の境涯に耐へる、つまり不遇を耐へ通す。【二】鶴書　天子よりの詔敕。

【題義】説明に及ばぬ。但し、徐卿は例の徐賁である。

【詩意】煙れる樹色は、松陵に近く、日暮、ひとり扁舟に乘じて、ここまで來た。眺めやれば、霧は洲渚に連つて、江水黃ばみ、氷は田の面一ぱいに張りつめて、野は白く見える。往事淒涼として、人に問はるることを愁へ、虛名を客に稱せらるることは、物とはなしに恥かしい。わが才は、もとよ

り不遇を耐へ通すことが出來ないので、天子より鶴書を以て徵し出さるることは、決して期待して居らぬ。

除夕客中與家兄守歲

　　　　除夕客中、家兄と歲を守る

雨雪遠村中。猿鳴旅館空。
　雨雪遠村の中、猿鳴いて旅館空し。

守爐銷夜漏。停燭待春風。
　爐を守つて、夜漏を銷し、燭を停めて春風を待つ。

有恨能催老。無文解送窮。
　恨あり、能く老を催し、文の送窮を解するなし。

却憐今夜酒。還與弟兄同。
　却つて憐む、今夜の酒、還た弟兄と同じきを。

【字解】〔一〕守爐　圍爐裏の側に坐して居る、范成大に除夕地爐書事の詩がある。〔二〕停燭　燈火を消す。〔三〕送窮　韓愈に送窮文がある。

【題義】説明に及ばぬ。守歲とは、除夜に長く起きて居ること。

【詩意】遠い村里には雪の降る模樣、猿が鳴いて、旅館には外に人も居ない。圍爐裏の側に坐して、水時計の聞こえぬ頃ともなり、燈火を銷して、明朝、春風の吹き來るを待つて居る。客恨自ら堪へねば、自然老を催し、送窮文を書き得ないのは、まことに殘念である。さはれ、今夜、弟兄二人同じく酒を酌んだのは、せめてもの心遣りである。

南溪晚歸

　　　　南溪晚歸

流水出雲根。遙通古寺門。
　流水、雲根を出で、遙に通ず古寺の門。

山深僧少俗。人靜市如村。
　山は深くして、僧、俗少く、人は靜にして、市、村の如し。

馬渡知長淺。魚行見不渾。
　馬は渡つて長く淺きを知り、魚は行いて見て渾らず。

多情溪上月。歸路照黃昏。
　多情溪上の月、歸路、黃昏を照らす。

【字解】〔一〕雲根　巖石を云ふ。〔二〕長淺　いつでも淺い。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】流水は淙淙として、巖石の間より出で、そして、古寺の門に通じて居る。山は深くして、住僧も自然俗を脫し、人は靜にして、市とはいへ、このあたりは村の樣である。馬の渡るのは、いつでも水の淺い其處であるし、魚が通つても、その跡は濁らない。溪上の月は、心ありげに、黃昏の頃、わが歸路を照らして居る。

【餘論】前聯は、あつさりして居るが、棄て難き佳聯である。

丁孝廉惠冠巾

知試山人服。冠巾遠寄重。
佳名因子夏。舊製學林宗。
裹映秋吟鬢。攲宜晚醉容。
朝簪今已解。期上華陽峰。

丁孝廉、冠巾を惠まる

山人の服を試むるを知つて、冠巾、遠く寄重。
佳名、子夏に因り、舊製、林宗を學ぶ。
裹んでは秋吟の鬢に映じ、攲てては晚醉の容に宜し。
朝簪、今すでに解き、期す華陽峰に上るを。

【字解】【一】山人服　無官隱士の服。【二】寄重　寄贈される。【三】子夏　杜欽の字、小冠を常用したといふので、前に卷九、治冠樂生の詩中に注して置いた。【四】林宗　郭泰の字、後漢書の本傳に「泰、かつて陳梁に於て雨に遇ひ、巾の一角墊る、時人、乃ち故らに巾の一角を折り、以て林宗巾となす」とある。【五】朝簪　朝冠を戴く時に、簪を用ひて之を留める、羊士諤の詩に應レ喜脫二朝簪一とある。【六】華陽峰　江寧府志に「茅山中、華陽南洞・華陽西洞の諸勝あり」と見ゆ。

【題義】說明に及ばぬ。但し、冠と巾とは二物である。

【詩意】君は、予が官を罷めて、試みに山人の服を著くることを知り、態態遠くから冠巾を寄贈せられた。元來、小冠の名は、むかし杜子夏に始まり、一角を折つた舊製は、郭林宗を學んだものである。この巾で頭を裹むと、秋に逢うて亂れたる詩鬢とうつりが善いし、その冠を攲てた樣は、日暮、酒に醉つた時の身ぶりである。予は、すでに朝簪を解き去り、これから仙を尋ぬる爲に、華陽峰に登る積りであるから、この冠巾は、まことに相適して居る。

西園閒興二首

看到竹過鄰。園林獨臥身。
鳥聲閒似野。人意倦知春。
殘雨驚池樹。斜陽照隙塵。
如何堂上客。不及燕來頻。

西園閒興　二首

看て到る、竹の鄰を過ぐるを、園林獨臥の身。
鳥聲、閒、野に似たり、人意、倦んで春を知る。
殘雨、池樹を驚かし、斜陽、隙塵を照らす。
如何か、堂上の客、燕の來る頻りなるに及ばず。

【字解】【一】竹過鄰　竹が伸びて鄰家に侵入する。【二】隙塵　戸などの隙間に見える塵埃。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】園林に獨臥する身は、何も知らずに居たが、竹の伸びて鄰家に侵入するを見て、晚春の候、生物の發育盛なるに驚いた。鳥の聲は、靜にして、野外に在るが如く、人の心の倦み勝ちなるも、流石に春である。殘雨は、一しきり、颯として池邊の樹に降りそそぎ、斜陽光明かにして、戸の隙間のほこりも見える。如何なれば、堂上の來客は、燕子の頻繁に來るに及ばず、われを音なふことの稀なのであるか。

（一）當路闕追攀。端居自掩關。　當路、追攀を闕き、端居、自ら關を掩ふ。

聽鐘知近寺。看畫憶登山。　鐘を聽いて、寺の近きを知り、畫を看て、山に登らむことを憶ふ。

曉櫛風林下。宵吟雨閣間。　曉櫛、風林の下、宵吟、雨閣の間。

天應憐我懶。獨與（三）少年閒。　天、應に我が懶を憐むべし、獨り、少年と閒なり。

【字解】【一】當路　朝廷の顯官。【二】追攀　訪問する。【三】與少年閒　少年の如く暢氣である。

【詩意】何分、當路の顯官輩を訪問するのも億劫である處から、獨り門を閉ぢ、謹愼して穩臥して居る。鐘を聞いては、この地の寺に近きことを知り、畫を看ては、山に登りたいと思ふ。曉には、風吹き度る林下に於て髮を梳り、夜は、雨降り注ぐ閣中に於て詩を吟じて居る。わが疏懶にして、丸で少年の如く暢氣なることは、天も憫笑して居るであらう。

送謝恭

謝恭を送る

涼風起江海。萬樹盡秋聲。　涼風、江海に起り、萬樹、盡く秋聲。

（一）搖落豈堪別。躊躇空復情。　搖落、豈に別るるに堪へむや、躊躇、空しく復た情。

帆過（二）京口渡。砧響（三）石頭城。　帆は過ぐ京口の渡、砧は響く石頭城。

爲客歸宜早。（四）高堂白髮生。　客となつて、歸る、宜しく早かるべし、高堂、白髮生ず。

【字解】【一】搖落　木葉の落ちること。【二】京口渡　揚子江の渡しで、南京の對岸に在る。【三】石頭城　南京の西に在る、前に卷十一、登雨花臺の詩中に詳述して置いた。【四】高堂　父母の敬稱。

【題義】姓譜に「謝恭、字は元功、徽之の弟、詩を能くす、著すところ、蕙庭集あり」と見ゆ。これは、謝恭の鄉に歸るを送つたのである。

【詩意】涼風颯として江海の間に起り、それにつれて、あらゆる木木は、秋聲を發して居る。この落葉の頃に當りて、別をなすのは、まことに辛く、躑躅して、空しく情に勝へぬ。やがて、君は、舟に帆かけて京口の渡を過ぐべく、今しも、砧うつ聲は、石頭城に響いて居る。君の御兩親は、白髮頭になつて、しきりに待つて居られるに相違ないから、旅には出たものの、早く歸つて御機嫌を伺ふのが至當であらう。

【餘論】起首、頗る力あつて、破題は殊に妙である。

步至東皋

步して東皋に至る

斜日半川明。幽人每獨行。　斜日、半川明かに、幽人、每に獨行。

愁懷逢(一)暮慘。詩意入秋淸。　愁懷、暮に逢うて慘、詩意、秋に入つて淸し。

鳥啄枯楊(二)碎。蟲懸落葉輕。　鳥は枯楊を啄んで碎け、蟲は落葉を懸けて輕し。

如何得歸後。猶似客中情。　如何か歸るを得たるの後、猶ほ客中の情に似たるを。

【字解】【一】逢暮慘　日暮になると慘然として愈よ甚しいといふ意。【二】枯楊　枯れた柳。

【題義】陶淵明の歸去來辭に登東皐而舒嘯とあり、王績の詩にも東皐薄暮望とある。皐の本義は澤地。この詩は、城外の東なる澤地に散歩して作つたのである。

【詩意】夕日の半川に明かなる頃、幽人は、毎毎、ひとりで出かける。唯ださへ愁に惱む心は、日暮になると、慘然として愈よ堪へず、詩想は、秋に成つてから、自然淸く成つた。鳥は、枯れた楊柳の樹を啄んで碎かしめ、蜘蛛は、絲に落葉を懸けて、輕くぶらぶらして居る。如何なれば、すでに故郷に還るを得たる後、兎角落ち付き兼ねて、客中の樣な思を爲すことであるか。

【餘論】前聯は、幽人の神思を巧に剖析したので、一種雋妙の趣がある。

郊墅雜賦十六首　郊墅雜賦　十六首

江水舍西東。鄰家是釣翁。　江水、舍の西東、鄰家は是れ釣翁。

路痕(一)深草沒。井脈(二)暗潮通。　路痕、深草沒し、井脈、暗潮通ず。

籬隔蔬邊雨。門開竹下風。　籬は隔つ蔬邊の雨、門は開く竹下の風。

不因時賣(三)畚。何事入城中。　時に畚を賣るに因らずんば、何事か城中に入らむ。

【字解】【一】路痕　通行の路のあつた跡。【二】井脈　井中の水脈、潯陽記に「孫權、自ら井地を標して之を掘り、正に故井を得たり。井、甚だ深く、大江中、風浪あるとき、この井、輒ち動く」とある。【三】賣畚　畚はもつこ、土を運ぶもの。晉書に「王猛、少にして、畚を鬻ぐを以て業と爲す。かつて、老人あり、貴く其畚を買うて直なし。猛、その家に至る、深山に、一老父、胡牀に踞して坐するを見る。十倍にして、畚の直を償ひ、人を遣して之を送らしむ。猛、出でて顧視すれば、乃ち嵩高山なり」とある。

【題義】郊墅は郊外の別墅。これは、多分、作者が靑邱に居た頃の作で、見聞するところを手當り次第に賦詠したから、雜賦と題したのであらう。

【詩意】江水は、我が家の西東を繞つて流れ、鄰に居るのは、釣を業とする老翁である。村中の路は、わづかに跡を留めて、深草これを沒し、井中の水脈は、暗潮と通じて居る。籬の外は菜畑で、折しも、雨降りそそぎ、門は竹の下に開いて居て、風が絶えず戰いで居る。時時、畚を賣る爲に、城中に入ることもあるが、さうでなければ、決して、かの紅塵の中には往かぬ積りである。

【餘論】靑邱ともあらうものが、手內職に、畚を造つて賣るなどいふことは、萬萬無いことで、これは、一寸假借したに過ぎぬ。

此郷堪避地。亂後戸翻增。　この鄕、地を避くるに堪へたり、亂後、戸、翻つて增す。

(一)俗美嫌欺客。(二)年豐愛施僧。　俗は美にして客を欺くを嫌ひ、年は豐にして僧に施すを愛す。

帶星(三)耕處輭。照雪紡時燈。　星を帶ぶ耕處の輭、雪を照らす紡時の燈。

且作(四)求田計。(五)元龍豈我能。　且つ求田の計を作す、元龍、豈に我能くせむや。

【字解】【一】俗美　人氣の善いこと。【二】年豐　豐年で收穫が多かつた。【三】耕處輭　輭はくびき、牛馬の頸に駕するもの。【四】求田　三國志に「許氾、劉備と語つて曰く、氾、陳元龍を見る、自ら大牀に上り、客は下牀に臥す。備曰く、天下大に亂る、君、須らく國を憂へ、家を忘るべし、乃ち田を求め、舍を問ひ、言采るべきなし。もし、我、百尺樓に臥せば、君を地下に坐せしめむ、奚ぞ但だ上下牀の間のみならむや」とある。【五】元龍　陳登の字。

【詩意】ここは亂を避くるに最も善い地であつて、その爲に、亂後でも、他とは反對に、戸數が夥しく增加して來た。元來、人氣が善くて、外客を欺くことを嫌ひ、おまけに、豐年であつた爲に、好んで坊主にまで布施をする。尤も住民も勉强するので、耕す時には、星を帶びて野らに出て、馬牛を車につけ、絲を紡ぐ燈火は、夜おそくまで、雪に映つて見える。予には、とても、陳元龍の眞似は出來ぬから、世の人なみに、矢張、田地でも買ひ殖やす計をして居るのである。

(一)幽事向誰誇。孤吟對(二)晚沙。　幽事、誰に向つてか誇らむ、孤吟、晚沙に對す。

浣衣江動月。繫艇岸垂花。　衣を浣へば、江、月を動かし、艇を繫げば、岸、花を垂る。

行蟻如知路。(三)歸凫自識家。　行蟻、路を知るが如く、歸凫、自ら家を識る。

一尊茅屋底。隨意答(四)春華。　一尊、茅屋の底、隨意に春華に答ふ。

【字解】【一】幽事　清幽なる事がら。【二】晚沙　沙は水邊の沙地。【三】歸凫　歸り行く家鴨。【四】春華　春景色。

【詩意】江村淸幽の事どもは、誰に向つて誇るべきか、唯だわれ獨り知るのみで、現に孤吟して、日暮に川の方を眺めて居る。衣を浣へば、漣波が起つて、江心に月を動かし、小舟を繫がうとすると、岸には、花が垂れて居て、何處に致さうかと思ひ惑ふばかり。忙しげに地を這ふ蟻どもは、路を知る樣でもあるし、歸り行く家鴨は、自然、その家を識別して居る。身は茅屋の中に坐して、一樽を開き、春景色を空しうさせじと、ひとりで興がつて居る。

【餘論】後聯は、春江日暮の景色を寫して、詩中に畫ある心持がする。

春泥桑下路。(一)孤策自扶行。　春泥、桑下の路、孤策、自ら扶けて行く。

身賤知農事。心閒見物情。　身賤しくして農事を知り、心閒にして物情を見る。

鳥鳴風欲起。(二)牛飯月初生。　鳥は鳴いて、風起らむと欲す、牛は飯して月はじめて生ず。

漸喜無人識。何煩易姓名。　漸く喜ぶ人の識るなきを、何ぞ姓名を易ふるを煩はさむ。

【字解】〔一〕孤筇　筇は杖。〔三〕牛飯　牛が飼料を食ふ。

【詩意】雨後、桑の下かげの路は、まだぬかるみで、乾かないにも拘はらず、ひとり杖に扶けられて、散歩をする。元來、この身、貧賤なる儘、自然、農事を知つて居るし、ここに居ると、心靜かなるに因つて、萬物の眞情を觀察することが出來る。朝に鳥が鳴くと、風起らむとし、夕に牛が飼ばを食ひ畢る頃には、月がそろそろ上り初める。人に識別されることもなく、尋常百姓の間に交つて居ることの出來るのは、まことに喜ぶべく、特に姓名を改めて韜晦する必要もない。

移家到渚濱。沙鳥便相親。　家を移して渚濱に至り、沙鳥、便ち相親む。

地僻偏容懶。村荒却稱貧。　地は僻にして偏に懶を容れ、村は荒れて却つて貧と稱す。

犬隨春饁女。雞喚曉耕人。　犬は隨ふ春饁の女、雞は喚ぶ曉耕の人。

願得無愁事。閒眠老此身。　願はくは愁事なく、閒眠、この身を老ゆるを得む。

【字解】〔一〕渚濱　江岸。〔二〕沙鳥　水邊を飛ぶ鳥。〔三〕春饁　饁は食を餉る、即ち辨當を運ぶ。〔四〕雞喚　喚は呼び醒ます。

【詩意】わが家を江濱に移し、そこで、自然、水禽と相親む樣になつた。地は幽僻にして、疏懶の此身を容るるに適し、村が荒廢して居る處から、われも、貧民と稱して居る。春の野らに女が辨當を運ぶと、犬が之に隨つて行くし、朝早く耕作に出る人をば、雞が呼び起して呉れる。ここに在つて、格別心配な事もなく、暢氣に横になつた儘、年を取りたいものである。

紛紛謝人役。寂寂戀吾居。　紛紛として人役を謝し、寂寂として吾が居を戀ふ。

細雨春雩後。斜陽社飲餘。　細雨春雩の後、斜陽社飲の餘。

岸花飛趁蝶。池葉墮驚魚。　岸花飛んで蝶を趁はしめ、池葉墮ちて魚を驚かす。

好了公家事。休令吏到廬。　好し、公家の事を了し、吏をして廬に到らしむるを休めよ。

【字解】〔一〕人役　世間竝の仕ぐさ、趨走送迎の事どもを云ふ。〔二〕春雩　雩は雨乞ひ。〔三〕社飲　鎭守の祭禮に就いて會飲すること。〔四〕好了公家事　官に對する責任を果たす、主として納稅の事を云ふ。

【詩意】世間竝の紛紛たる趨走送迎の事は、すつかり御免蒙り、寂寂たる我が幽居を慕うて、ここに移つて來た。春の雨乞は、幸に效果があつて、細雨しとしとと降り、鎭守の祭の宴會は、夕日の傾く頃にも及んだ。岸邊の花が散ると、蝶は之を追うて飛び、池上の葉が一ひら落ちると、魚は驚いて水

底に逃げ入る。平生見るところは、ざつとこんなもので、流石に田舍は暢氣である。そこで、官に差し出す納稅など、滯りなく畢つて、稅吏などが此廬に來ぬ樣にしたいと、それのみを念じて居る。

(一)路迂橋斷處。門靜(二)犢眠時。　路は迂なり橋斷ゆる處、門は靜かなり犢眠るの時。

孤墅藏翠柳。諸田灌(三)一陂。　孤墅、翠柳に藏れ、諸田、一陂に灌せらる。

僮閒(四)春作少。婦懶午炊遲。　僮は閒にして春作少く、婦は懶にして午炊遲し。

誰道(五)花源好。還令(六)太守知。　誰か道ふ、花源好く、還た太守をして知らしむと。

【字解】【一】路迂　まはり路をする。【二】犢眠　犢は子牛。【三】一陂　陂は隄であるが、その隄で圍まれた用水池をも指す。【四】春作　春の野良仕事。【五】花源　桃花源の略。【六】太守知　桃花源に往つた漁人が歸り來し後、ありしことを太守に報知し、仍つて太守が人を遣したが、路に迷うて往かれなかつたといふことが、陶淵明の桃花源記に見えて居る。

【詩意】橋が落ちたから、まはり路をせねばならぬこととなり、門は靜にして、子牛が其處に眠つて居る。ひとつ家は、翠がる柳の中に隱れ、多くの田は、一個處の用水池から灌漑される。家僕は、閑暇であつて、春の野良仕事の少きを喜び、妻君は疏懶で、なかなか起きないから、眞晝に飯を炊ぐことも自然遲くなる。ここは、桃花源に似て、浮世離れをして居る處であつて、まことに好いから、太守などに知らして貰ひたくないと思つて居る。

【餘論】前聯は、田舍の好畫圖と評すべきものである。

(一)虛閣近(二)鳴湍。應宜把一竿。　虛閣、鳴湍に近く、應に一竿を把るに宜しかるべし。

雨傷春麥爛。風折晚蒲乾。　雨は春麥を傷けて爛れしめ、風は晚蒲を折つて乾かしむ。

(三)抱甕臨江汲。攜書入寺看。　甕を抱いて、江に臨んで汲み、書を攜へて寺に入つて看る。

自慙何獨幸。(四)世難此(五)偸安。　自ら慙づ、何ぞ獨り幸なる、世難、ここに偸安。

【字解】【一】虛閣　人なき小閣。【二】鳴湍　湍は早瀨。【三】抱甕　莊子に「子貢、漢陰を過ぎ、一丈人を見る。方に圃畦を爲らむとし、隧を鑿つて井に入り、甕を抱いて出でて灌す。子貢曰く、ここに械あり、一日に百畝を浸す、夫子爲すを欲せざるか。圃を爲るもの曰く、機事あるものは必ず機心あり、吾、爲さざるなり」とある。【四】世難　爭亂の世。【五】偸安　ここに隱れて安きを偸む。

【詩意】小閣は、聲を立てて鳴る早瀨に近くして、人もなく、一竿を把つて鈞を垂れるには、持つて來いといふ處。雨が餘り降つた爲に、春の麥は損害されて腐り、風は、遲くまで殘つて居た蒲の穗を折つて乾かして仕舞つた。畑に水を灌ぐ爲には、甕を抱いて江に汲み、時たま書卷を攜へ、寺の閒靜な處で、閱讀することがある。ここに世の多難に遇ひながら、われ獨り此に來て、安らかに暮らして

行けるのは、まことに有り難いことである。

（一）亂渚（二）交交白。平（三）蕪（四）漫漫青。　亂渚、交交として白く、平蕪、漫漫として靑し。

賣薪（五）沙店遠。祈穀水祠靈。　薪を賣つて沙店遠く、穀を祈つて水祠靈なり。

密雨浸蓑重。微風過網腥。　密雨、蓑を浸して重く、微風、網を過ぎて腥し。

江邊多（六）酒伴。春去不曾醒。　江邊に酒伴多く、春去るも、かつて醒めず。

【字解】【一】亂渚　亂は屈曲出入甚しきを云ふ。【二】交交　交錯せる貌。【三】平蕪　草の生ひ茂れる平郊。【四】漫漫　ひろくして際涯なき貌。【五】沙店　水邊の茅店。【六】酒伴　酒飲み仲間。

【詩意】江の汀岸は、屈曲して、波光白く、岸上の平郊は、漫漫として、草が靑い。薪を賣る田舍店は遠く、水邊の社は、五穀の豐作を祈ると靈驗がある。こまかな雨は、蓑に浸み透つて重く、微風が乾してある網を吹き過ぎると、腥い樣な氣がする。この江邊には、酒飲み仲間が多く居る爲に、春が去つても、依然飮み續けて、かつて醒めたことが無い。

入夜潮侵戶。經秋雨壞垣。　夜に入つて、潮は戶を侵し、秋を經て、雨は垣を壞る。

里人淳（一）少訟。田父醉多言。　里人淳にして訟少く、田夫醉うて言多し。

（二）稻蟹燈前聚。（三）莎蟲機下喧。　稻蟹、燈前に聚まり、莎蟲、機下に喧し。

自應耽野趣。不是戀鄉園。　自ら應に野趣に耽るべく、これ鄉園を戀ふるならず。

【字解】【一】淳少訟　淳樸であるから訴訟沙汰が少い。【二】稻蟹　蟹は稻の熟する頃が味も善く、又一番多く捕れるので、これを稻蟹と稱する。なほ、その詳は、前に卷十二、賦得蟹送人之官の詩中に述べて置いた。【三】莎蟲　きりぎりす、詩經に六月莎雞振羽とある。

【詩意】夜になると、潮の聲が響いて、戶を侵すが如く、秋を經て、雨頻りに至りし爲に、垣根が壞れて仕舞つた。一體、この村の人は、淳樸であるから、訴訟沙汰は極めて少く、田舍老爺は、親切であるが、醉ふと兎角話がくどくて困まる。秋になると、蟹が遠慮なく燈前に這ひ聚まり、きりぎりすは、機の下で、かしましくすだく。予は、野趣に耽つて之を愛すること甚しき爲めでもあらう、最早、鄉園を戀しいとも思はない樣に成つた。

（一）欲沽嗟市遠。煙火隔江波。　沽はむと欲して、市の遠きを嗟す、煙火、江波を隔つ。

客到寒齋少。人歸晚渡多。　客は寒齋に到ること少く、人は晚渡に歸ること多し。

汙書（二）燈燼落。驚枕艣聲過。　書を汙して燈燼落ち、枕を驚かして艣聲過ぐ。
豈敢愁（三）荒寂。時危免（四）負戈。　豈に敢て荒寂を愁へむや、時危くして戈を負ふを免る。

【字解】【一】沽酒　無論酒を買ふこと。【二】燈燼　燈心の燃えかす。【三】荒寂　村家の景色の寂しきを云ふ。【四】負戈　戈を擔いで從軍する。

【詩意】酒を買はうと思ふが、市の遠いのには閉口で、煙火は江波を隔てて、卽ち向ふ岸である。この吝な書齋を音なふ客は、極めて少いが、日暮、渡船場に赴く人は、なかなか多い。燈火の燃え屑が落ちて、書物に斑點を付けることもあるし、艣聲近く過ぎて、眞夜中に枕を驚かすこともある。村里の荒れはてて寂しい位は、何でもないので、ここに居ればこそ、危時に際して、徵集を免れ、戈を擔がずに濟んだ次第である。

野色迴（一）蒼蒼。開門葉（二）滿塘。　野色迴にして蒼蒼たり、門を開けば、葉、塘に滿つ。
僧來雙屐雨。漁臥一船霜。　僧は來る雙屐の雨、漁は臥す一船の霜。
靜裏修（三）香傳。閒中錄（四）酒方。　靜裏、香傳を修し、閒中、酒方を錄す。
平生當（五）世意。到此坐成忘。　平生當世の意、ここに到つて坐に忘を成す。

【字解】【一】蒼蒼　ほの白き貌。【二】葉滿塘　葉は落葉。【三】香傳　宋の洪芻は、香譜を作り、葉廷珪は名香譜を著はした。【四】酒方　酒の醸造法。【五】當世意　當世を救濟せむとする大志。

【詩意】秋、すでに盡きて、一帶の野色、ほの白く、門を開いて、一寸出て見ると、落葉は隄に一ぱいである。僧は足駄を穿いて、雨中に來り、漁人は、霜降る夜、舟の上で寢て居る。身は閒靜なるまま、香の譜を編成したり、酒の醸造法を書き留めたりして居る。むかしは、人竝に獨力で當世を救濟しやうといふ樣な大志もあつたが、かうなると、丸で忘れたるが如く、われながら腑甲斐なきことである。

紅樹南江近。青山北郭遙。　紅樹、南江近く、青山、北郭遙なり。
江清目渺渺。林冷髮蕭蕭。　江は清くして目渺渺、林冷かにして髮蕭蕭。
食鱠知晨釣。聽歌識（一）暮樵。　鱠を食うて晨釣を知り、歌を聽いて暮樵を識る。
（二）尋常送歸客。不過水西樓。　尋常、歸客を送るも、水西の樓を過ぎず。

【字解】【一】暮樵　日暮に歸つて來る樵夫。【二】尋常　普通の場合。

【詩意】紅葉せる木の岸に連れる南江は近けれども、青山の麓なる北郭は、餘程遠い。江水は清くし

て、目も迥かに、林は冷かにして、そこに往くと、髮がそそけ立つ位。鱠を食つて、これは、今朝釣つた魚だといふことを知り、歌を聽くと、その樵夫は、顏を知つて居るものであつた。普通の場合には、客の歸るを送つても、水西の樓より先に往くことはない。

何處可徘徊（一）。林間共水隈（二）。　何の處か徘徊すべき、林間と水隈と。
夜歸家犬識。春睡野禽催。　夜歸、家犬識り、春睡、野禽催す。
有地唯栽藥。無村不見梅。　地あり、唯だ藥を栽ゑ、村として、梅を見ざるはなし。
興來慙（三）獨飮。時喚老農陪。　興來つて獨り飮むを慙ぢ、時に老農を喚んで陪せしむ。

【字解】【一】徘徊　散步。【二】水隈　水邊に同じ。【三】慙獨飮　慙は勿體ないと思ふ意。

【詩意】散步をするには、何處が善いかといへば、林間と水邊とである。夜歸つて來ると、飼犬は、暗がりでも、われを見知つて居るし、春のどけき頃、野禽の聲を聞いて居ると、自然ねむたくなる。あき地があれば、藥草を栽ゑ、このあたり、村として、梅の無い處はない。興來りし時、ひとりで飮むのは、勿體ないから、時時、老農を呼んで來て、御相伴をさせる。

狂（一）多愛出游。日日問江頭。　狂多くして出游を愛し、日日、江頭を問ふ。
小草皆春意。遙山自晚愁。　小草、皆春意、遙山、自ら晚愁。
酒中時有得。物外（二）復何求。　酒中、時に得るあり、物外、復た何をか求めむ。
不詠騷（三）人調。䕷蕪（四）任滿洲。　騷人の調を詠せず、䕷蕪、洲に滿つるに任かす。

【字解】【一】狂多　うかれる氣味。【二】物外　萬物の外に此身を置く。【三】騷人　騷は離騷、もと屈原が作つたもの。漢代以後は、騷と賦とを區別し、前者は主觀的感想、後者は客觀的描寫を旨とする樣になつた。そこで、騷人といへば、屈原一流の主觀的詩人といふ義である。【四】䕷蕪　草の茂み。

【詩意】うかれ氣味の場合が多く、好んで出游を爲し、日日江頭に往つて見る。名もなき小草も、皆春意を含んで咲き出でむとし、遠くの山山は、日暮、愁を帶びた樣である。酒を飮んで居る間、ふと思ひ付くこともあるし、身を物外に置けば、慾望などは絕無である。しかし、屈原一流の騷人の調を以て賦詠することを爲さざるに因り、草の茂みの洲上に滿つるに任かせる外はない。

【餘論】小草の二句は、和平冲澹、自然高尙の趣がある。

居似臨邛（一）宅。耕非鄠（二）杜田。　居は臨邛の宅に似たり、耕は鄠杜の田に非ず。

已償輸稅米。(三)未覺賣文錢。(四)　すでに輸稅の米を償ひ、未だ賣文の錢を覓めず。

把卷憐長日。看花愧少年。　卷を把つて長日を憐み、花を看て少年に愧づ。

翛然(五)閉門處。楊柳桔槔(六)邊。　翛然として門を閉づる處、楊柳、桔槔の邊。

【字解】【一】臨邛宅　漢書司馬相如傳に「文君、長卿に謂つて曰く、ただ倶に臨邛に如け、兄弟に從つて假貸するも、猶ほ以て生を爲すに足る。何ぞ自ら苦むこと、かくの如きに至らむ、と。相如、ともに倶に臨邛に之く」とある。【二】鄠杜　宋書地理志に「陝西路、鄠杜南山、土地膏沃」とあり、一統志に「鄠杜は、右扶風の縣名、今鳳翔に屬す」とあり、杜甫の詩に杜曲今有桑麻田とある。【三】輸稅米　稅として上納する米。【四】賣文錢　原稿料、陸龜蒙の詩に唯我有文無賣處、筆鋒銷盡滕池荒とある。【五】翛然　高踏の貌。【六】桔槔　はね釣瓶。

【詩意】わが居るところは、古しへの司馬相如の臨邛の侘び住居に似て居るが、耕すところは、地味豐沃なる鄠杜あたりの田とは丸で違ふ。租稅として上納する米は、すでに、差し出したが、まだ溜まつて居る原稿料を貰はないから、囊中の寂寞たるを免れない。書卷を手にしては、日の長いのが至極宜しいが、花を看ては、老年の身で浮かれるのも似合はぬ處から、少年輩に對して、愧ち入るばかり。そこで、翛然高踏、ひとり門を閉ぢて蟄居するので、はね釣瓶の高く見える邊には、柳が茂つて居る。

【餘論】前聯は、一寸面白く、青邱當日の境涯も、これに因つて、略ぼ推測される。

采香徑

采香徑

晨妝出采芳。(一)零露溼紅裳。(二)　晨妝、出でて芳を采れば、零露、紅裳を溼す。

種徙山中品。(三)熏傳海外方。(四)　種は山中の品を徙し、熏は海外の方を傳ふ。

抱筐歸蕙徑。(五)焚鼎薦蘭堂。(六)　筐を抱いて蕙徑に歸り、鼎に焚いて蘭堂に薦む。

未足娛君寢。西施體自香。(七)　未だ君の寢を娛ますに足らず、西施、體、自ら香し。

【字解】【一】采芳　花を摘む。【二】紅裳　裳は下衣。【三】山中品　山中の珍品。【四】海外方　外國の奇方。【五】蕙徑　蕙は蘭の一種、一莖一花、卽ち山蘭。【六】蘭堂　木蘭等の香木で造つた堂宇。【七】體自香　飛燕外傳に「帝、樊嫕に語つて曰く、后、異香ありと雖も、婕妤の體、自ら香ばしきに如かず」とあつて、それは、飛燕姉妹の事であるが、ここでは、西施に轉用したのである。

【題義】題下の原注に「香山の旁に在り、吳王、香を此に種ゑ、美人をして之を采らしむ」とある。香は卽ち香草であらう。

【詩意】吳宮の女どもは、曉早く妝をなし、ここに來て花を摘むが、まだ乾かぬ露は、定めて、紅裳を溼したであらう。その花は、山中の珍品を徙したもので、これを焚きしめることは、海外の奇方を傳へたのである。宮女どもは、摘んだ花を入れた箱を抱いて、山蘭の種ゑてある細路より歸り、やがて、それを精選し、鼎に焚く樣にして、御奧の蘭堂に差し出す。しかし、折角ながら、これでは、

君王の御寢を娯ましめるに足らないので、御側に居る西施は、その體、自然に香ばしく、もとより、花の匂ひ以上である。

響屧廊

廊虛應屧鳴。響細識腰輕。
誰道吳强國。唯消擧足傾。
苔間滅古跡。月下歇餘聲。
此夕人空聽。山僧曳履行。

響屧廊

廊は虛しく屧に應じて鳴り、響は細にして腰の輕きを識る。
誰か道ふ、吳の强國、唯だ足を擧げて傾くを消ひむとは。
苔間に古跡を滅し、月下に餘聲を歇む。
この夕、人、むなしく聽く、山僧、履を曳いて行くを。

【字解】【一】應屧　屧は下駄。【二】唯消　この消は用ふの義。

【題義】題下の原注に「靈巖山に在り、吳王、西子をして屧を此に步せしむ。寺中、今、圓照塔前の小斜廊を以て之と爲す」とある。靈巖山は卽ち館娃宮の在りしところ。この廊は、謂はゆる鶯ばりの廊といつた樣なものであつて、人が步くと、自然に鳴るので、吳王の當時は、隨分、珍らしいものであつたらうと思はれる。

【詩意】長廊は、格別の仕掛もなく、下駄で步くと、自然鳴り出し、その響の細きに因つて、步く人の腰の輕いことを識別する。誰か料らむ、吳は一大强國であつたのに、唯だ西子が足を擧げて、此を步いた爲に、傾けられて、滅亡し終らむとは。今は、西施の足跡も、苔の間に無くなり、月下には、餘聲だに無い。そして、山僧が履を曳いて步くのが聞こえるが、丸で似ても付かず、愈よ古しへをしのばしめるのである。

臨頓里十首

聞說橋東地。高人舊隱居。
養生應有道。覓擧絕無書。
愛救黏絲蝶。嗔驚出水魚。
時尋戴顒宅。自駕短轅車。

臨頓里　十首

聞くならく、橋東の地、高人の舊隱居。
生を養ふ、應に道あるべし、擧を覓むる、絕えて書なし。
絲に黏する蝶を救ふを愛し、水を出づる魚を驚かすを嗔る。
時に戴顒の宅を尋ね、自ら駕す短轅の車。

【字解】【一】高人　陸龜蒙を指す。【二】覓擧　擧げらるるを覓む、登庸されむことを願ふ。【三】戴顒宅　前に卷十二、過二戴居士宅一の詩中に見えて居たが、南史に「顒は安道の子、宅は嵊縣剡山の下に在り、乃ち郗超千緡を捐てて築くところ。又徙つて吳下に居る、士人、ともに爲に室を築き、石を聚し、花を栽ゑ、徑を辟き、琴書遺訪するもの、虛日なし」とある。【四】短轅車　妒記に「王丞相導、曹夫人の性甚だ忌なるを以て、乃ち密に別館を營み、衆妾羅列す。曹氏、聞いて大に恚り、自ら出でて尋討す。王、亦た遽に駕を命じ、乃ち麈柄を以て牛を驅り、先づ至るを得たり。蔡司徒謨、聞いて之を笑ひ、ことさらに王公に詣り、謂つて曰く、

朝廷、公に九錫を加へむと欲す、と。王、信に然りと謂ひ、自ら謗志を叙す。蔡曰く、餘物を聞かず、唯だ短轅犢車、長柄麈尾あるを聞くのみ、と。王大に愧づ」とある。つまり、短轅車は、手輕で、且つ快走する車であらう。

【題義】　題下の原注に「城東に在り、舊と吳中の勝地たり、陸魯望の居るところなり。皮陸、詩十首あり、これを詠ず。予、悉く其韻に次す。蓋し、昔賢の高致を彷彿せしむと云ふ」とある。それから、姑蘇志に「吳王の時、かつて東夷を逐うて軍を此に頓し、宴を設けて之を犒す、故に名づく。今臨頓橋あり」と見えて居る。この十首は、すべて陸龜蒙に次韻したので　つまり、龜蒙その人を追慕したるに出で、又時としては、その人に代つて作つた樣な口吻を爲して居る。

【詩意】　臨頓橋の東は、むかし、陸龜蒙といふ高人の隱居した處である。この人は、生を養ふ爲に至道を得たらしく、又登庸を願うた書などは決して作つたことはなく、まことに、高操を以て知られた人であつた。蜘蛛の巢にからまつた蝶を見ると、好んで之を救ひ、水から出た魚を面白半分に驚かす人があると、腹を立てて、叱り飛ばした。それから、時たま、戴顒の如き知名の士を尋ねむとし、ひとりで、短い轅の車に乘つて出かけることがある。

應愛山齋好。秋風不(一)捲茅。　應に山齋の好きを愛すべし、秋風、茅を捲かす。

鑿渠侵螘(二)穴。移樹帶禽巢。　渠を鑿つて、螘穴を侵し、樹を移して、禽巢を帶ぶ。

人世眞浮梗(三)。吾生豈繫匏(四)。　人世、眞に浮梗、吾が生、豈に繫匏ならむや。

不逢皮(五)從事。誰結歲(六)寒交。　皮從事に逢はずんば、誰か歲寒の交を結ばむ。

【字解】【一】不捲茅　茅は屋根に葺いた茅。【二】螘穴　蟻の穴。【三】浮梗　水に浮んで居た小枝、漂泊定めなきを云ふ、萬自の詩に「中生江海間二浮梗一」とある。【四】繫匏　論語に「吾豈に匏瓜ならむや」とある、ぶら下つて居る匏。孫逖の詩に「時清豈繫匏」とある。【五】皮從事　一統志に「皮日休・羅隱・顏蕘・吳融、皆龜蒙の益友たり、而して、皮陸の唱和、尤も多し」とあり、唐書皮日休傳に「咸通八年、進士に第す。崔璞、蘇に守とし、軍事判官に辟す」とある。【六】歲寒交　如何なる患難に遇ふも、決して渝らぬ交際。

【詩意】　陸龜蒙は、山齋の洵に宜しきを愛して居たので、それは、隨分堅固に出來て居て、秋風が吹き暴れても、屋根に葺いた茅を飛ばして仕舞ふ樣なことはなかつた。溝を鑿つては、自然、蟻の穴を侵害し、木を移植する時には、鳥の巢の付いた儘であつた。人の一代は、浮べる小枝の如くであるが、吾が生涯は、ぶら下つて居る匏の樣であつても、詰まらぬことと思ふ。幸に、皮從事に遇つたから善かつたものの、斯人に非ざれば、誰と共に歲寒の至交を結ばうか。

載酒擕(一)山榼。安琴製石牀。　酒を載せて山榼を擕へ、琴を安んじて石牀を製す。

鳧眠皆傍母。蜂去自從(二)王。　鳧は眠つて、皆、母に傍ひ、蜂は去つて、自ら王に從ふ。

（三）穀雨收茶早。梅天曬藥忙。　穀雨、茶を收むる早く、梅天、藥を曬らすこと忙はし。
不扶（四）靈壽杖。筋力老能强。　靈壽杖に扶けられず、筋力老いて能く强なり。

【字解】【一】山榼　粗製の酒檑。【二】從王　爾雅翼に「蜂は千百を以て數ふ、中に大なるものあり、王となす、羣蜂、これを舁し、その往くところに從かす」とある。【三】穀雨　寒食の後、夏の初の季節。【四】靈壽杖　廣志に「九眞、靈壽杖を出す」とあり、その注に「靈壽は木の名、竹に似て枝節あり、長さ八九尺、圍三四寸に過ぎざれども、自然杖制に合し、削治を須ひず」とある。

【詩意】酒を載せて游行する爲に、粗製の榼を攜へ、琴を安置する爲に、石の牀を造つた。家鴨の雛は、眠る時、皆母の榜に聚まり、蜂は飛び去つて、その王に從つて居る。穀雨の頃、大急ぎで茶の芽を摘み、入梅の中、折折晴れたるに乘じて、藥を乾す忙がしさ。しかし、こんな事ばかりして居るから、靈壽の杖の厄介にもならず、筋力は、老いても愈よ丈夫である。

自少圖名意。誰言世不知。　少より名を圖るの意、誰か言ふ、世知らずと。
僧求開寺記。客送買山貲。　僧は求む開寺の記、客は送る山を買ふの貲。
細雨魚生子。斜陽燕哺兒。　細雨、魚、子を生じ、斜陽、燕、兒を哺す。
平然無事迫。辛苦爲尋詩。　平然、事の迫るなく、辛苦、詩を尋ぬるが爲めなり。

【詩意】少壯の頃から、功名に志して居たので、世間の人は、まんざら知らないでもない。今は、此に隱居すると、坊さんが來て、寺の緣起を書いて與れろといふし、又特志の人があつて、賴みもせぬのに、山を買ふ資金を提供して與れた。細雨しとしと降る中に、魚は子を生じ、夕日影の中に在つて、燕は其雛に哺んで居る。平生、事の迫るなく、唯だ詩を作る爲めばかりに辛苦して、しきりと心を惱まして居る。

斬伐憑樵斧。經綸在（一）釣車。　斬伐は樵斧に憑り、經綸は釣車に在り。
薄雲還露月。小雨不妨花。　薄雲、還た月を露はし、小雨、花を妨げず。
酒債應多處。詩名自一家。　酒債、應に多處なるべく、詩名、自ら一家。
虛煩（二）時主召。懶脫（三）故衣麻。　虛しく、時主の召を煩はす、故衣の麻を脫するに懶し。

【字解】【一】釣車　深い處で釣を垂るるときは、竿を用ひずして、絲を小さな車に捲く樣にしてある。東坡の詩に風靜平湖響釣車とある。【二】時主　その當時の太守。【三】故衣麻　故麻衣といふに同じ、古き麻衣。

【詩意】もとより、隱居高臥の身、斬伐といへば、斧で木を切り倒すことであるし、經綸といへば、釣車で絲を扱ふことである。薄雲、時に散じて、月を露はすも宜しく、小雨は、花を散らさぬから、

降つてもかまはぬ。酒代の負債は、方方に在つただらうし、詩名は、自ら一家を成して居た。どうかすると、當時の太守から召し出されたこともあつたが、古い麻衣を著かへるのが面倒臭いといつて、つい其儘に畢つて仕舞つた。

【餘論】薄雲、小雨の一聯は、人好きのする佳聯である。

長物(一)元無有。何勞犬護扉。　長物、元と有るなし、何ぞ勞せむ犬の扉を護るを。
借看高士傳(二)。學製道人(三)衣。　高士傳を借看し、道人の衣を製するを學ぶ。
窓破容螢入。船空載鶴歸。　窓は破れて、螢を容して入れ、船は空しくして鶴を載せて歸る。
定緣幽事繞。不是宦情微。　定めて幽事の繞るに緣る、これ宦情の微なるならず。

【字解】(一) 長物　物を取る樣な邪魔物、晉書王恭傳に「かつて、會稽より都に至る。王忱、これを訪ひ、恭の坐するところの六尺の簟を見、忱、その餘あるを謂ひ、因つて之を求む。恭、輒ち以て之を送り、遂に薦上に坐す。忱、聞いて大に驚く。恭曰く、吾、平生、長物なし、と。その簡率、かくの如し」とある。(二) 高士傳　晉書皇甫謐傳に「謐、高士・逸士・列女等の傳を著す」とあり、唐書藝文志に「習鑿齒、襄陽耆舊傳五卷、又逸人高士傳五卷を著す」とある。それから、唐書の陸龜蒙傳に「人の書を借り、篇帙壞舛すれば、必ず爲に輯綴刊正す」とある。(三) 道人　世捨て人。

【詩意】もとより長物がある譯でもないから、泥棒が來ても取るものはなく、犬をして戶を護らしめるにも及ばない。平生、高士傳などを借りて讀み、又世捨て人の衣服を製することを學んだ。窓は破れた儘であるから、螢は勝手に這入つて來るし、船に餘地あるに因り、鶴を載せて歸つて來る。陸龜蒙が此の如く淸高な生涯をしたのは、その居處を繞つて、幽事頗る多きに起因し、必ずしも、宦情微にして、出仕することが厭であつたといふ譯ではなからう。

【餘論】窓破の一聯も、前の二三の佳聯と略ぼ相若くものである。

澹泊心情在。蕭疏鬢影殘。　澹泊、心情在り、蕭疏、鬢影殘す。
引泉規(一)作沼。留筍待成竿。　泉を引いて沼を作るを規り、筍を留めて竿を成すを待つ。
自洗沾泥屐。誰收挂(二)壁冠。　自ら洗ふ、泥に沾ふの屐、誰か收む、壁に挂けたるの冠。
毛公(三)新有約。月夜禮天壇。　毛公、新に約あり、月夜、天壇に禮す。

【字解】(一) 規作沼　規は規畫の規、はかる、沼は池。(二) 挂壁冠　陸游の詩に「那得重彈挂壁冠」とある。(三) 毛公　前に卷五、毛公壇の題下に注して置いたが、漢の劉根といふ人が道を得、身に綠毛を生じたから、世人がかく呼んだのである。

【詩意】心情澹泊にして、世の汚穢に染まず、年老いては、鬢の毛も蕭疏として薄くなつた。泉を引いて池を作ることを計畫し、筍の中で一番素直なのを殘して、やがて、釣竿にする積り、泥に汚れた

下駄は、自分で洗ふし、壁に挂けて置いた冠は、誰に始末をして貰ふでもない。仙人の毛公と新に約を訂したるに因り、月夜、わざわざ天壇に出かけて、拜を爲すことさへある。

沐罷便輕幘。消搖詠晩天。　沐し罷んで、便ち輕幘、消搖して晩天に詠ず。
清風蘇病鶴。驟雨禁鳴蟬。　清風、病鶴を蘇し、驟雨、鳴蟬を禁む。
舊史堆緗素。新經錄洞玄。　舊史、緗素を堆し、新經、洞玄を錄す。
誰知城郭裏。別自有林泉。　誰か知らむ、城郭の裏、別に自ら林泉あるを。

【字解】【一】沐罷　沐は髮を洗ふ。【二】輕幘　輕い頭巾。【三】消搖　逍遙に同じ。【四】詠晩天　日暮に朗詠する。【五】緗素　白絹をいふ、むかしは、多く紙に代用した。北史高道穆傳に「詔して、祕書、圖籍及び典書、緗素多く零落を致す、道穆をして、帳目を總集し、次第を編比せしむべし」とある。【六】洞玄　道經の名。黄庭内景經に「治生の道、了に煩はしからず、但だ洞玄と玉篇とを修するのみ」とある。

【詩意】髮を洗ひ終ると、輕い頭巾を戴き、日暮、逍遙して朗詠する。清風は、病鶴を蘇らしめ、驟雨は、鳴く蟬をして、はたと止ましめた。古い歷史は、緗素が堆をなして澤山あるし、道家の新しい經典としては、洞玄經が一番手頃である處から、それを寫して所有し、すべて、日夕、硏鑽の資に供して居る。紅塵十丈の城郭の中でありながら、別にかういふ林泉の勝あるは、誰も知らぬことであらう。

汨汨泉通圃。蕭蕭柳映門。　汨汨として、泉、圃に通じ、蕭蕭として、柳、門に映す。
折花搖樹影。踏藕損蓮根。　花を折つて樹影を搖かし、藕を踏んで蓮根を損す。
飢鴨呼歸艦。新蠶試浴盆。　飢鴨は歸艦を呼び、新蠶は浴盆を試む。
屋前高石在。知是鬱林孫。　屋前に高石あり、知る是れ鬱林の孫。

【字解】【一】汨汨　ひたひたと流れる貌。【二】踏藕　藕は蓮根であるが、ここでは唯だ蓮と見れば善い。【三】歸艦　艦は小舟。【四】浴盆　浴は蠶の孵化せしこと、それを初めは盆の上に載せてある、王周の詩に村女浴蠶桑柘綠とある。【五】鬱林　姑蘇志に「鬱林石は婁門に在り、吳の時、鬱林太守陸績、政を罷めて歸る。官廉にして裝なし。舟、輕くして、海を濟する能はず。石を取つて重みと爲す、世、その廉を愛し、鬱林石と號す、績は龜蒙の遠祖」とある。

【詩意】泉はひたひたと流れて畑に通じ、柳は蕭蕭として門に映じて居る。花を折つては、樹影を搖かし、蓮を踏んでは、その根を損せむことを恐れて居る。飢ゑた家鴨は、歸り行く小舟を見ては呼びかけ、新にかへつた蠶は、まだ盆の上に載せてある。家の前には、丈の高い石があるが、それは、先祖の陸績が、重みとして舟に載せて來た名代の鬱林石の孫ででもあらうか。

（一）茶租催未レ得。（二）菊餌服還能。行古時人笑。（三）文工造化憎。
貧留二（四）漁艇一載。老謝二（五）鶴書徵一。
誰識先生樂。悠然臥（六）枕レ肱。

茶租、催して未だ得ず、菊餌、服すること還た能くす。行は古くして時人笑ひ、文、工にして造化憎む。貧、漁艇を留めて載せ、老、鶴書の徵すを謝す。誰か識らむ先生の樂、悠然、臥して肱を枕にす。

【字解】【一】茶租　唐書陸龜蒙の傳に「茶を嗜む、園を顧渚山下に置き、歲ごとに、租茶を取り、自ら品第を判す」とある。茶租も租茶も同じで、上納の茶であるから、精選したものであらう。【二】菊餌　金樓の注には、列仙傳に「文賓、甒を取る、數十年、輒ち之を棄つ。後、甒老いて年九十餘、復た賓を見る、年更に壯。賓、敎へて、菊の地膚桑上の寄生松子を服し、以て氣を益さしむ。甒、亦た更に壯、復た百餘歲」とあるのを引いて居る。これは、菊その物を食つたのではなく、菊の傍に在る桑の木の寄生菌を食つたのである。但し、楚辭に「餐二秋菊之落英一」とあり、又南陽縣に菊水があつて、菊の下を流るる谿水を飮んで村民が長生したといふことがある。【三】文工　陸龜蒙傳に「松江の甫里に居り、論撰するところ多し。文成れば、稿を篋中に寘し、或は年を歷て省みず、好事者に盜み去らる。書を得れば熟誦し、乃ち錄して、讎比勤勤、朱黃手を去らず」とある。【四】漁艇載　陸龜蒙傳に「舟に升り、篷席を設け、束書・茶竈・筆牀・釣具を齎らして往來す」とある。【五】鶴書徵　同傳に「李蔚・盧攜素、ともに善し、國に當るに及びて、召して左拾遺に拜す、詔、方に下つて龜蒙卒す」とある。【六】枕肱　論語に「水を飮み、肱を枕にす、樂、その中に在り」と見えて居る。

【詩意】上納の特製茶は、催促しても、まだ山の方から屆けて來ないが、菊を服することは、怠らず遣つて居る。平生の行爲は、今樣でない處から、時人が笑ふけれども、一向頓著せず、詩文は、追追上達して、造化の憎惡を受ける位。貧なれども、なほ一葉の漁舟を留めて、これに乘り、年老いては、鶴書で召し出されても、御斷りする外はない。誰も知るまいが、先生の樂といつた處で、悠然、肱を枕にして、勝手に橫臥する位のことである。

【餘論】この詩は、原注にも見えた通り、陸龜蒙の韻に次したものであるから、今參考の爲に、原作を下に附記することにする。しかし、龜蒙は、元と皮日休に次韻したので、皮の作は、卽ち左の通りである。

臨頓爲二呉中偏勝之地一、陸魯望居レ之、不レ出二郛郭一、曠若二郊墅一、余每相訪、款然惜レ去、因成二五言十首一、奉レ題二屋壁一

一方蕭灑地。之子獨深居。繞レ屋親栽竹。堆レ牀手寫書。高風翔レ砌鳥。暴雨失レ池魚。暗識歸山計。村邊買二鹿車一。

籬疏從二綠槿一。簷亂任二黃茅一。壓レ酒移二谿石一。煎レ茶拾二野巢一。靜窓懸二雨笠一。閒壁挂二煙匏一。支遁今無レ骨。誰爲二世外交一。

蘚稀初上簇。醅盡未レ乾レ牀。盡日留二蠶母一。移レ時祭二麴王一。趁レ泉澆レ竹急。候レ雨種レ蓮忙。更葺園中景。應レ爲二顧辟疆一。

靜僻無二人到一。幽深每自知。鶴來添二口數一。琴到益二家貲一。壞塹生二魚沫一。頹簷落二燕兒一。空將二綠蕉

葉。來往寄閒詩。

夏過無檐石。日高開板扉。僧雖與筒簟。人不典蕉衣。鶴靜共眠覺。鷺馴同釣歸。生公石上月。何夕約譚微。

經歲岸烏紗。讀書三十車。水痕侵病竹。蛛網上衰花。詩任傳漁客。衣從遞酒家。知君秋晚事。白幘刈胡麻。

寂歷秋懷動。蕭條夏思殘。久貧空酒庫。多病束魚竿。玄想凝鶴扇。淸齋拂鹿冠。夢魂無俗事。夜夜到金壇。

閉門無一事。安穩臥涼天。砌下翹飢鶴。庭陰落病蟬。倚杉閒把易。燒朮靜論玄。賴有包山客。時時寄紫泉。

病起扶靈壽。翛然强到門。與杉除敗葉。爲石整危根。薜蔓任遮壁。蓮莖臥枕盆。明朝有忙事。召客斫桐孫。

殺頰稱無利。低眉號不能。世情都太薄。俗意就中憎。雲態不知驟。鶴情非會徵。晝臣誰奉詔。來此寫姜肱。

次に陸龜蒙の作は、左の如く、相當に心力を盡した佳作である。

襲美見題郊居十首、因次韻酬之、以伸榮謝

近來唯樂靜。移傍故城居。閒打修琴料。時封謝藥書。夜停江上鳥。晴曬篋中魚。出亦圖何事。無勞置棧車。

倩人醫病樹。看僕補衡茅。散髮還同阮。無心敢慕巢。簡便書露竹。尊待破霜匏。日好林間坐。煙蘿近欲交。

倭僧留海紙。山匠製雲牀。嬾外應無敵。貧中直是王。池平鷗思喜。花盡蝶情忙。欲問新秋計。菱絲一畝涼。

故山空自擲。當路竟誰知。祇有經時策。全無養拙資。病深憐灸客。炊晚信樵兒。漫欲陳風俗。周官未採詩。

褊地能容塹。玄關詎有扉。靜思瓊版字。閒洗鐵筇衣。烏破涼煙下。人衝暮雨歸。故園秋草夢。猶記綠微微。

水影沈魚器。鄰聲動緯車。燕輕捎墜葉。蜂懶臥燋花。說史評諸例。論兵到百家。明時如不用。歸去種桑麻。

禹穴奇編缺。雷平異境殘。靜吟對籙檢。歸興削帆竿。白石堪爲飯。靑蘿好作冠。幾時當斗柄。同上步罡壇。

强起披衣坐。徐行處暑天。上階來鬭雀。移樹去驚蟬。莫問鹽車駿。誰看醬瓿玄。黃金如可

化。相近買雲泉。

野入青蕪巷。陂侵白竹門。風高開栗刺。沙淺露芹根。迸鼠緣藤桁。飢烏立石盆。東呉雖不改。誰是武王孫。

疏慵眞有素。時勢盡無能。風月雖爲敵。林泉幸未憎。酒杯經夏闕。詩債待秋徵。祇有君同癖。閒來對曲肱。

春申君廟

春申君の廟

封呉開（一）巨壤。相楚服強鄰。　呉に封せられて巨壤を開き、楚に相として強鄰を服す。

名重（二）三公子。謀疏（三）一婦人。　名は三公子より重く、謀は一婦人に疏なり。

畫幃留古像。（四）珠履絕遺塵。　畫幃、古像を留め、珠履、遺塵を絕つ。

簫鼓時迎祭。還憐舊邑民。　簫鼓、時に迎祭、還た憐む舊邑の民。

【字解】【一】開巨壤　廣大なる地域を開いた。【二】三公子　賈誼の過秦論に「齊に孟嘗あり、趙に平原あり、楚に春申あり、魏に信陵あり」と見ゆ。そして、春申君を除いて、他の三人は、その國王の一族であるから、三公子といつたのである。【三】一婦人　史記春申君傳に「楚の考烈王、子なし、春申君、これを患ふ。趙人李園、春申君に事へむことを求め、その女弟を進む、卽ち春申君に幸せらる。身むあるを知り、園、乃ち其女弟と謀り、間に乗じて春申君に說いて曰く、妾、自ら身むあるを知る、しかも、人知るなし。君、妾を王に進むれば、王、必ず妾を幸せむ。妾、天に賴つて、子男あらば、是れ君の子、王となるなり、と。春申君、これを然りとし、乃ち李園の女弟を出し、謹んで舍して、これを楚王に言ふ。王、召して之を幸し、遂に子男を生み、立つて太子となし、園の女弟を以て后となし、園、事を用ふ。春申君の語洩れむことを恐れ、陰に死士を養ひ、春申君を殺して、以て口を滅す」とある。春申君は、ここに至りて、心術甚だ正しからず、李園の兄妹に欺かれ、他日楚國を袵席の間に奪はうとして、却つて、慘禍に罹つたのである。【四】珠履　春申君傳に「客三千人、その上客は、皆珠履を躡む」とある。

【題義】題下の原注に「子城內の西南に在り、卽ち舊の城隍神廟なり。楚、春申君を呉に封す、故に之を祀る」とあり。一統志に「宋時、祈禱應あるを以て、英濟王に封す、元、城隍廟となす」とある。

【詩意】春申君は、呉に封せられて、廣大なる地域を開き、身は楚國の宰相となつて、兵馬強盛なる諸鄰國をも服さしめた。その名は孟嘗・平原・信陵等の三公子より重かつたが、李園の女弟に對した謀は、あまりに疏漏で、まんまと瞞著せられ、その爲に、暗殺されて仕舞つたのは、まことに氣の毒の至である。ここの廟では、模樣ある幃の中に、その木像を祀つてあるが、當日、上客が珠履を穿いて居たといふものの、遺塵だに其跡を絕つて仕舞つた。ここに、舊邑の人民が、二千年前の昔をしのび、歲時伏臘、簫鼓を鳴らし、その魂魄を招いて、今でも祭をするのは、まことに、感心なことである。

呉女墳

呉女の墳

魚燈（一）照豔魄。夜冷珠（二）衣薄。　魚燈、豔魄を照らし、夜は冷かにして珠衣薄し。

(三)白玉土中埋。紅蘭霜後落。　白玉、土中に埋もれ、紅蘭、霜後に落つ。
不乘(四)臺上鳳。空舞(五)橋邊鶴。　臺上の鳳に乘らず、空しく橋邊の鶴を舞はしむ。
(六)韓重未歸來。(七)泉宮秋寂寞。　韓重、未だ歸り來らず、泉宮、秋寂寞。

【字解】【一】魚燈　皇覽に「秦の始皇、穴内に葬り、人魚膏を以て燭となし、久しきに度つて滅せず」とある。【二】珠衣　寶玉を綴つてある衣。【三】白玉　美人の體軀を形容して云ふ。【四】臺上鳳　前に數ば見えたが、秦の穆公の女、弄玉が其夫簫史と共に臺上より鳳に乘じて昇天せしことを云ふ。【五】橋邊鶴　題義の項に見ゆ。【六】韓重　同上。【七】泉宮　泉は黃泉、墳墓を云ふ。

【題義】題下の原注に「閶門外に在り。闔閭の女なり、童子韓重を悅び、得ざるに因つて死す、王鶴を市に舞はしめて之を送る、今、舞鶴橋あり」とある。しかし、吳越春秋に見ゆるは、これと異にして「闔閭の女を勝玉といふ。王、夫人及び女と會して蒸魚を食ふ。王、前に半を嘗めて女に與ふ。女、怒つて曰く、王、魚を食うて我を辱かしむ、と。乃ち自殺す。闔閭、これを痛み、閶門外に葬り、池を鑿ち、土を積み、文石を椁となし、題湊を中となし、金鼎・玉桮・銀尊・珠襦の寶を以て女に送り、乃ち白鶴を市に舞はし、民をして隨觀せしめ、男女をして鶴と倶に羨門に入らしめ、因つて、機を發して之を掩ふ」とある。その葬を厚うしたのは、さることながら、罪もない市人を羨門内に閉ぢこめて殺したのは、何の積りか、蓋し、殉死させたといふ意味であらうが、關係もない者どもに、如何にも酷く當つたものである。なほ上の舞鶴の故事から、蘇州の別名を鶴市といつて居る。次に錄異傳には「吳王の夫差の小女を玉といふ、韓重と交り、私に妻たるを許す。重、齊魯に學ぶ、父母、昏を王に求む、王、怒つて與へず、玉、氣を結んで死す、閶門に葬る。重歸り、哭泣して往いて弔ひ、玉を墓側に見、明珠を贈らる。重、王を見て之を說く、王、その冢を發いて珠玉を盜みしを怒る。脫して墓所に走り、玉に訴ふ。玉、因つて梳妝して王に見ゆ、王、驚愕悲喜。夫人、これを聞き、出でて之を抱けば、煙の如く然り」とある。そして、閶門の女は、普通瓊姬と稱して居るが、後には、これと紫玉を混じて同一人の如く看做して居る。顧崧齡の姑蘇詠古詩注には、これを辨じて「瓊姬、自來、竝に指して紫玉と作すの說あるなし。余、紫玉の墓、樂府傳ふるところを以て、定めて爲に墓に名づく。而して、志書載せず、甚しきは、紫玉の事を以て、誤つて、闔閭の女の墓に注するものあるに至る、尤も荒悖と爲す。元の高槎軒の女墳の詩、遂に其誤に仍り、後人の訾議を免れざるを致す。今、瓊姬を以て卽ち紫玉となすもの、古書に在つては、原と據るところなし。蓋し、その夫差の女たり、且つ瓊字の義、紫玉と字義略ぼ通ずるを以て、遂に想うて當に然るべきの說を爲す、古を稽ふるもの、泥んで之を議する勿れ」とあつて、頗る妥當の見解である。

【詩意】人魚膏の燈火は、美人の豔魄を照らし、夜冷かなる時、珠衣の薄きを覺えるであらう。白玉の軀は、すでに土中に埋められ、さながら、紅蘭が霜後に凋れたと一般。瓊姬は、彼の弄玉と異にし

て、臺上より鳳凰に跨つて昇仙することもなく、死後、唯だ橋邊に鶴を舞はしめただけである。おまけに、生前に相愛して居た韓重の未だ歸り來らざりし時は、黃泉の下に在つて、寂寞たる秋に堪へられなかつたであらう。

【餘論】この詩は、仄韻を用ひて居るが、元來、近體には仄韻は無い筈、もし有るとすれば、變體である。且つ、この詩は、第五句の末字風が仄字であつて、嚴密に云へば、平仄式に協はぬから、五言古詩と見るのが至當であつて、ここに編入したのは、斷じて不倫である。

眞娘墓

眞娘の墓

金釵葬小墳。楊柳寺前村。　金釵、小墳に葬る、楊柳寺前の村。

已斷花間信。空歸月下魂。　すでに花間の信を斷ち、むなしく月下の魂を歸らしむ。

山鶯留曲韻。草露帶啼痕。　山鶯、曲韻を留め、草露、啼痕を帶ぶ。

車馬逢寒食。還來酹酒樽。　車馬、寒食に逢ひ、還た來つて酒樽を酹す。

【字解】(一) 曲韻　歌曲の餘韻。(二) 啼痕　涙の痕。

【題義】題下の原注に「虎邱寺に在り、西呉の名妓なり」とある。なほ、眞娘の墓に就いては、前に巻六、賦得眞娘墓送蟾上人之虎邱の詩の題下にも引いて置いたが、唐の李紳の詩序に「眞娘は呉の妓人、歌舞名あるもの、死して武邱寺前に葬る、呉中の少年、その志に從ふなり、墓に花草多く、以て其上を蔽ふ」とあつて、これより以上、詳細なる記述は、絶對に無いのである。

【詩意】金釵の名妓は、小さな墓に葬られ、その場處は、虎邱寺前、楊柳茂れる村である。美人、一たび去つて、花間、信すでに絶え、唯だ魂が月下に歸り來ることがある位のものである。山に啼く鶯は、その歌聲の餘韻を留め、草葉の露は、涙の痕かと疑ふばかり。それでも、千古知名の女であるから、今でも、寒食の節に、ここに車馬を駐め、酒を地に灑いで、懇に之を弔ふ人がある。

鱸郷亭

鱸郷亭

獨上鱸郷亭。秋風南浦生。　ひとり上る鱸郷亭、秋風、南浦に生ず。

載誦黃花句。遙思張步兵。　載ち黃花の句を誦し、遙に思ふ張步兵。

天空白水遠。日墮赤楓明。　天は空しくして白水遠く、日墮ちて赤楓明かなり。

我亦東歸客。一壺宜醉傾。　われ亦た東歸の客、一壺、宜しく醉うて傾くべし。

【字解】(一) 鱸郷亭　題後の項に注する。(二) 載　すなはち。(三) 黃花句　張翰の雜詩に、黃花如散金の句がある。この黃

花は、菊でなくて菜の花。この句あるに因つて、菜の花を黃花と稱することが分かる。又晉書藺文傳の論に「季鷹、一時に縱誕、名爵を邀へず、黃花の什、清、紳府に發す」とある。【三】張步兵　張翰を指す、晉書の本傳に「翰、清才あり、善く文を屬し、しかも、縱任拘はらず、時人號して江東步兵と爲す」とある。

【題義】題下の原注に「吳江に在り、陳文憲公の詩語を以て名づくるなり」とある。これは、前に卷十、送張倅之雲間の起首、鱸鄉亭前楓葉稀の句下に詳說して置いたが、姑蘇志に「亭は、吳江に在り、宋の熙寧中、林肇建つ、蓋し、陳瓘、秋風斜日鱸魚鄉の句を取る」とある。なほ張翰が吳中の蓴羹鱸魚の膾を思うて、官を辭して歸里し、その爲に、禍を免れたといふことは、常套の故事で、前にも數ば見えたから、ここに述ぶるまでもない。

【詩意】ひとり鱸鄉亭に上れば、渺渺たる南浦に秋風の生ずる時節であつた。ここに、黃花如散金といふ古句を誦して、その作者の張翰を思ひ出す次第。今しも、晴天空濶、白水遠く開け、夕日は落ちかかつて、紅葉が一きは明るく見える。われも亦た東に歸らうとする途中であるから、ここで、醉ふまで一壺の酒を傾けることに致さう。

堯峰院

堯峰院

堯帝何年到。名猶在此峰。　堯帝、何の年か到る、名は猶ほ此峰に在り。

巖留千尺井。寺廢兩時鐘。　巖は千尺の井を留め、寺は兩時の鐘を廢す。

僧出因尋菌。人來爲看松。　僧の出づるは、菌を尋ぬるに因り、人の來るは、松を看むが爲めなり。

白雲深洞裏。聞有聽經龍。　白雲深洞の裏、聞く經を聽くの龍ありと。

【字解】【一】兩時鐘　金檀の注にも之を缺いて居るから、善くは分からぬが、夜半、即ち五更と四更との鐘を撞かぬことだらうと思はれる。つまり、地僻にして、近傍に居民少く、この必要が無いからである。【二】尋菌　菌は蕈。【三】看松　松は後に見ゆる偃蓋松であらう。【四】聽經龍　幽怪錄に「無言和尙、法華經を講す、老翁あり、立つて聽き畢り、風雲に乘じて去る、衆、驚いて之を問へば、曰く、洱水の龍なり」とある。

【題義】姑蘇志に「橫山府城の西南二十里、姑蘇山東に在り、唐の晃水院あり、今、堯峰寺と稱す。清輝軒・碧玉沼・多境巖・寶雲井・白龍洞・觀音巖・偃蓋松・妙高峰・東齋・西隱の十景あり、今、竝に廢す」とある。

【詩意】ここは、堯帝が何の年にか來られたといふので、今でも峰に其名を負はせて居る。巖の間には、千尺も深い井が掘つてあつて、水には困まらぬし、寺では、夜半以後、ふた時は鐘を撞かぬことになつて居る。坊さんの寺を出て行くのは、林中に蕈を探がすからであるし、人が態態來るのは、名だたる偃蓋松を見むが爲めばかりである。白雲たなびく深洞の中には、讀經を聽聞する龍が居るとのことで、さすがに靈異の淨境である。

慧聚寺、次張祜韻

煙斂城初出。潮來野欲呑。
(一)危樵緣磴角。(二)倦衲憩松根。
(三)剎表藏林寺。鐘聞隔水村。
(四)畫龍飛去久。空掩殿堂門。

慧聚寺、張祜の韻に次す

煙斂まつて、城、初めて出で、潮來つて、野、呑まむと欲す。
危樵は磴角に緣り、倦衲は松根に憩ふ。
剎は表す林に藏るるの寺、鐘は聞こゆ水を隔つるの村。
畫龍、飛び去ること久しく、空しく掩ふ殿堂の門。

【字解】【一】危樵　あぶない處を通る樵夫。【二】倦衲　退屈して居る僧。【三】剎表　剎は伽藍。【四】畫龍　張僧繇が畫た此寺の四柱に畫いたといふことは、前にも見えて居るが、飛び去つたといふことは見えぬ。尤も、僧繇は絕代の名手で、種種神怪の說が傳はつて居るから、或は此の如き軼聞があるのかも知れぬ。

【題義】慧聚寺は、前に卷五に、孟郊の韻に次した五言八句があつたが、もしかすると、これも同時の作で、唐の張祜の韻に次したのである。祜、或は祐に作れるは、字形の相似たるより起つたことで、今に一定しない樣であるが、ここでは祜にして置く。そして、原作は、左の通りである。

寶殿依山險。凌虛勢欲呑。畫簷齊木末。香氣壓雲根。遠景窓中岫。孤煙竹裏村。憑高聊一望。
歸思隔吳門。

慧聚寺の記事は、前に詳述して置いたから、ここには重ねて掲出することを見合はせる。

【詩意】眺めやれば、煙收まつて、城が初めて見え出し、潮が差して來ると、野を呑まむずる勢である。危路に慣れたる樵夫は、石段の角を通り、無聊に困まつて居る坊さんは、松の根元に休憩して居る。伽藍の屋根が見えて、林中に寺の藏れて居ることが分かり、鐘の聲は、水を隔てたる對岸の村までも聞こえる。四柱に畫いた龍は、むかし、飛び去つたことがあるといふので、今では、殿堂の門を嚴重に閉してある。

【餘論】破題の二句は、對仗精當、意象宏濶、頗る面白いが、肝腎の兩聯は平淺にして、殘念ながら、これと釣り合はぬ樣である。

石屋

雙崖立幽關。一洞開(一)深宇。
青嶂近爲鄰。白雲閒作主。
不受(二)杜陵風。可避(三)河朔暑。
(四)華棟幾回新。(五)渠渠獨千古。

石屋

雙崖、幽關を立て、一洞、深宇を開く。
青嶂、近く鄰を爲し、白雲、閒に主となる。
杜陵の風を受けず、河朔の暑を避くべし。
華棟、幾回か新に、渠渠、ひとり千古。

【字解】【一】深宇　奥深い住宅。【二】杜陵風　杜甫に茅屋爲秋風所破歌がある。【三】河朔暑　典略に「袁紹、三伏には、

晝夜酣飮して、以て暑を避く、故に、河朔、避暑の飮あり」とある。【四】華棟　立派な棟木。【五】渠渠　廣大な貌、詩經に於我乎夏屋渠渠とある。

【題義】題下の原注に「天平山に在り」と見え、つまり、山中の一洞窟である。

【詩意】雙崖屹立して相迫まり、さながら幽關を立てたるが如く、一つの洞窟の中に、奧深い住宅を開いて居る。青嶂は、近く鄰を爲し、白雲は、さながら、主人の樣である。ここにさへ居れば、杜甫が秋風の爲に屋根を吹き飛ばされたといふ樣な心配もなく、酒を飮まなくても、河朔の暑さは、容易に避けることが出來る。世間の宮殿などは、幾たびも改築して、棟を新にするが、ここばかりは、渠渠として廣く、ひとり千古に度り、少しも、手入れを爲すにも及ばない。

【餘論】この詩も、仄韻であるが、第一句の平仄が合はぬから、前の吳女墳と同じく、五古に入れる方が至當であらう。

贈竹里子

竹里子に贈る

弭棹望迷林。閒爲淇澳吟。　棹を弭めて迷林を望み、閒に淇澳の吟を爲す。

君家不可見。但聽煙中禽。　君の家、見るべからず、但だ煙中の禽を聽く。

日落浦雲遠。雨餘江水深。　日落ちて浦雲遠く、雨餘、江水深し。

非同抱淸節。歲晏復誰尋。　同じく淸節を抱くに非ざれば、歲晏、復た誰か尋ねむ。

【字解】【一】弭棹　かぢを止める、張協の七命に弭棹截波とある。【二】迷林　蒼茫として望眼迷ひ易き林、つまり、遠林。【三】淇澳　詩經に淇澳の詩があつて、瞻彼淇澳、綠竹猗猗とある。これは、衞の武公の德を贊したのであるが、これを吟するのは、竹里の號に因み、矢張、その人をなつかしく思ふ意を帶びて云ふのであらう。【四】歲晏　歲晚に同じ。

【題義】竹里子は、如何なる人か分からぬ。

【詩意】江上に棹を停めて遠林を望み、君の號に因んで、淇澳の詩を朗吟して、頻りに景慕の意を寄せて居るが、君の家は、何處とも分からず、但だ煙中に鳴く鳥の聲を聞くのみである。日は落ちて、浦頭の雲は遠く、雨あがりで、江水は極めて深い。君と予と、同じく淸節を抱いて居るから、交誼も自然深いので、もし然らざれば、この歲晚に當りて、誰か又相尋ねるものがあらうか。

【餘論】この詩の前聯は對偶ではなくて、平仄も壞れて居るし、第二第六の兩句も、第五字を故らに平にしてある。されば、本當の律體としては、まだ十分に成形せぬもので、五古に入れる方が善い。現に五古の中には、かういふ詩が幾らもあつた。

送金判官之吳江

金判官の吳江に之くを送る

送客常苦愁。送君愁最劇。 客を送つて、常に愁に苦み、君を送つて、愁、最も劇し。
地爲江上縣。近我鄕中宅。 地は江上の縣たり、わが鄕中の宅に近し。
霜晴橘熟秋。水冷楓飄夕。 霜は晴れて、橘、秋に熟し、水は冷かにして、楓、夕に飄る。
難逐去帆東。京華坐微役。 去帆を逐うて東し難し、京華、微役に坐す。

【字解】【一】微役 つまらぬ官職。

【題義】説明に及ばぬ。但し、京華坐微役の句を見れば、青邱が南京に居た時分の作に相違ない。

【詩意】客を送るに際しては、いつでも、愁に堪へられぬが、今日、君を送るに當りては、その愁が最も劇しい。君の赴任せられる呉江は、江上の縣であつて、わが田舍の宅に近い處である。今しも、霜天高く晴れて、柑橘の類は秋に熟し、江水は冷かにして、夕には紅葉が飄つて落ち、まことに景色も好からうと思はれる。しかし、身は都に在つて、つまらぬ官職を帶び、その爲に、君の舟を逐うて、一處に東に行くことの出來ないのは、いかにも殘念で、さればこそ、愁は最も劇しいのである。

【餘論】この詩は、仄韻である上に、前半と後半とは、平仄を異にして、一種の拗體を成し、且つ第三句の末字を平聲にしないから、聲律は、大分崩れて居て、矢張、五古に入るべきものである。

漁

泛泛蒼波裏。全家寄一船。 泛泛たる蒼波の裏、全家、一船に寄す。
曾來屈澤畔。或到杏壇邊。 かつて屈澤の畔に來り、或は杏壇の邊に到る。
蓑帶春江雨。榔鳴晩浦煙。 蓑は帶ぶ春江の雨、榔は鳴る晩浦の煙、
得魚尋水店。換酒不論錢。 魚を得れば、水店を尋ね、酒に換へて、錢を論せず。

【字解】【一】屈澤 屈原の居る澤畔、楚辭の漁父に「屈原、すでに放たれて澤畔に行吟す、漁父見て之に問ふ」とある。【二】杏壇 前に卷九、會宿成均の詩中に引いて置いたが、莊子の漁父に「孔子、緇帷の林に遊び、杏壇の上に休坐す。弟子、書を讀み、孔子、絃歌して琴を鼓す。曲を奏して、未だ半ならず、漁父といふ者あり、船を下つて來り、左手は膝に據り、右手は頤を持して以て聽く」とある。【三】榔鳴 潘岳西征賦に鳴榔厲響とあつて、その注に「鳴榔とは、以て魚を驅つなり」とある。【四】水店 水邊の酒店。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】滄波の裏に泛泛として浮び、家族殘らず一つの船に乘つて居る。かつて、屈原の行吟せる澤畔に來たこともあるし、孔子の休んで居る杏壇の邊に往つたこともある。春江雨降る時、蓑は濡れて、しとどになり、浦上に煙生ずる夕、榔を鳴らして魚を毆つことがある。かくて、魚を捕ふれば、早速、水邊の茅店を尋ね、いくらでも構はぬから酒に換へ、それを飲んで樂んで居る。

【餘論】後聯は、措辭明靚で一寸面白い。

浮生何處好。只在水雲鄕。　浮生、何の處か好き、只だ水雲の鄕に在り。
榔起鳴秋月。綸收向夕陽。　榔は起つて秋月に鳴り、綸は收めて夕陽に向ふ。
(一)箬篷幽夢熟。(二)銅斗醉歌長。　箬篷、幽夢熟し、銅斗、醉歌長し。
不是煙波樂。那能與世忘。　是れ煙波の樂ならずんば、那ぞ能く世と忘れむ。

【字解】〔一〕箬篷　竹の皮で編んだ篷。〔二〕銅斗　銅製の器、酒を汲むに用ふ。孟郊の詩に銅斗飲二江水一手拍二銅斗一歌とある。

【詩意】浮世は何處が好いか知らぬが、漁夫は、只だ水雲の鄕にのみ住んで居る。秋月の下には、榔を鳴らして魚を敺ち、夕陽西に斜なる頃、絲を始末して釣を罷める。竹で編んだ篷の下で、幽夢は穩かに熟すべく、銅斗を拍きつつ、醉中心のどかに歌つて居る。もし煙波の樂を縱にするに非ざれば、どうして、世俗と長しへに相忘れることが出來やうか。

樵　　樵

慣識山中路。(一)崎嶇每獨尋。　慣れて山中の路を識り、崎嶇、每に獨り尋ぬ。
穿雲衝(二)過虎。伐樹起棲禽。　雲を穿つて過虎を衝き、樹を伐つて棲禽を起たしむ。
斧礪溪邊石。衣懸谷口林。　斧は礪ぐ溪邊の石、衣は懸く谷口の林。
(三)逢仙休看奕。(四)甲子易(五)駸駸。　仙に逢ふも奕を看るを休めよ、甲子、駸駸たり易し。

【字解】〔一〕崎嶇　險阻な路。〔二〕過虎　過ぎ行く虎。〔三〕逢仙　前に卷十一、醉樵の詩中にも引いたが、晉の王質といふ樵夫が、山中に於て童子の棊を圍むに遇ひ、これを見て居ると、やがて、斧の柄が腐つて仕舞つたので、驚いて村に歸つて見ると、數十年を經過し、自分の知つて居た人は、大抵死んで居たといふことで、述異記に見えて居る。〔四〕甲子　卽ち干支、歲月といふに同じ。〔五〕駸駸　早く過ぎ行く貌。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】往來に慣れて、山中の路を能く見わけることが出來るので、險阻な路も、每每、ひとりで行く。ある時は、雲に穿ち入つて、通行する虎に衝突せむとし、ある時は、木を伐り倒して、その上に巢を構へて居る鳥を驚き起たしめる。斧は溪邊の石で礪ぎ、衣は谷口の林に懸けて置く。たとひ、仙人に逢つた處で、碁を打つて居るのを見ない方が善いので、世間の歲月は、遠慮なく、駸駸として行き過ぎて仕舞ふ。

【餘論】結二句は、許渾の世間甲子須臾事、逢二著仙人一莫レ見レ棋と同義である。

山中朝佩(一)斧。遠路入煙(二)蘿。山中、朝に斧を佩び、遠路、煙蘿に入る。

伐木驚禽起。穿雲畏虎過。木を伐つて禽の起つに驚き、雲を穿つて虎の過ぐるを畏る。

石(三)根供倦(四)憩。谷口應高歌。石根、倦憩に供し、谷口、應に高歌すべし。

莫看仙人奕。歸來恐爛柯。仙人の奕を看る莫れ、歸り來つて、恐らくは柯を爛せむ。

【字解】【一】佩斧　斧を腰にさす。【二】煙蘿　煙れる蔦かづら。【三】石根　石の根元。【四】倦憩　疲れて休息する。

【詩意】朝に斧を腰にさして山中に分け入り、遠い路をたどつて、煙れる蔦かづらの間に分け入つた。木を伐り倒して、鳥の飛び起つに驚き、雲を穿つて、虎の通過するのに出合つた。石根は、疲れた時に休息すべく、谷口に於ては聲高に歌を唱へて居る。仙人に逢つても、碁を打つて居るのを見ぬが宜しく、歸つて來ると、恐らくは、その柄が腐つて居るであらう。

【餘論】この詩は、後聯以外、前首と全く意象を同じうし、いづれか改本であらうと思はれる。しかし、ともに凡作で、必ずしも優劣すべきものではない。

耕

江(一)皐聞布(二)穀。荷(三)鉏出柴門。江皐に布穀を聞き、鉏を荷うて柴門を出づ。

春暖鳥(四)犍快。朝晴綠樹繁。春は暖にして鳥犍快、朝に晴れて綠樹繁し。

深(五)耕行別隴。待饁(六)望前村。耕を深くして別隴を行き、饁を待つて前村を望む。

自得龐(七)公計。遺安與子孫。自ら龐公の計を得たり、安を遺して子孫に與ふ。

【字解】【一】江皐　江邊の澤地。【二】布穀　鳥の名、前に卷十一、五禽言、脫却破袴の詩中にも見えて居る。【三】荷鉏　鉏は鋤。【四】鳥犍　水牛、東坡の詩に「抑下二關山一入二蔡州一爲買鳥犍三百尾」とあつて、その自注に「黃州、水牛を出す」とある。【五】深耕　深く土を掘り起すこと。【六】待饁　饁は辨當。【七】龐公計　前に卷三、詠二隱逸一の中にも見えたが、後漢書逸民傳に龐公の言を記して「世人、皆子孫に遺すに危きを以てす、今、ひとり之に遺すに安きを以てす。遺すところ、同じからずと雖も、未だ嘗て遺すところなくんばあらざるなり」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】江邊の澤地に布穀の鳴くのが聞こえる頃、鋤を肩にし、柴門を出でて野らに出かける。折から、春は暖にして、水牛も元氣が善いし、朝空は晴れて居て、綠樹は、現に茂つて居る。土を掘り起すこと深くして、序に外の隴にも及び、亭午頃になると、辨當を持つて來るのを待ち兼ねて、前村の方を望んで居る。すでに、安きを以て子孫に遺し、見事、龐公の計を得たものだといつて聊か自負して居る。

春郊起東作。耒耜出柴荊。　春郊、東作を起し、耒耜、柴荊を出づ。

柳下烏鞬健。桑間布穀鳴。　柳下、烏鞬健、桑間、布穀鳴く。

家人供遠餉。刺史勸深耕。　家人、遠餉を供し、刺史、深耕を勸む。

已卜豐年候。朝來好雨晴。　已に豐年の候を卜し、朝來、好雨晴る。

【字解】【一】東作　東の野らで仕事をする。【二】遠餉　遠くから辨當を運ぶ。【三】刺史　太守。

【詩意】時節が善くなつて、春の郊外に農作が始まるといふので、朝早く、鋤鍬を擔いで柴門を出て往つた。柳の下には、水牛が、さも逞しげに見え、桑の間には、布穀の鳥が囀つて居る。家人は、遠路を厭はず、辨當を運び、太守は、態態巡檢して、成るべく土を深く掘り起す樣にといつて、しきりに、世話を燒いて居る。朝來、好雨はじめて晴れ、まことに、手始め宜しく、これでは、豐年を卜することが出來ると云つて喜んで居る。

牧

牧

一笛去茫茫。平郊綠草長。　一笛、去つて茫茫、平郊、綠草長し。

但知牛背穩。應笑馬蹄忙。　但だ牛背の穩なるを知る、應に馬蹄の忙しきを笑ふべし。

度隴銜朝雨。歸村帶夕陽。　隴を度つて朝雨を銜き、村に歸つて夕陽を帶ぶ。

相逢休挾策。回首恐亡羊。　相逢ふ、策を挾むを休めよ、首を回らして、亡羊を恐る。

【字解】【一】度隴　隴は隴。【二】挾策　書物を取り出す、莊子に「臧と穀と、二人相與に羊を牧して、ともに、その羊を亡ふ。臧に奚事かと問へば、策を挾んで書を讀む。穀に奚事かと問へば、博塞して以て游ぶ。二人の者、事業同じからざれども、その羊を亡ふに於ては均しきなり」とある。

【通義】説明に及ばぬ。

【詩意】牧童は、一管の笛を吹き鳴らしつつ、遠くに去つたが、行く手の平野には、青い草が正に長じて居る。彼は、牛背に坐することの安穩なるを知つて、世人が忙がしげに馬を走らして居るのを笑ふであらう。朝の雨を銜いて隄の上を過ぎ、夕日を帶びて村に歸つて來る。牧童は、正直に、牛羊の番をさへして居れば善いので、生意氣に、書物などを讀んで居ると、羊を亡ひ、主人に對して相濟まぬことになるから、篤と注意するが善い。

自矜黃犢健。登隴共揮鞭。　自ら矜る黃犢の健なるを、隴に登つて共に鞭を揮ふ。

笛弄將斜日。蓑披欲斷煙。　笛は弄して、將に斜日ならむとし、蓑は披いて、「斷煙ならむと欲す。」

歸鴉流水外。疏樹舊莊前。　歸鴉流水の外、疏樹舊莊の前。

應笑侯門客。騎驢走歲年。　應に笑ふべし、侯門の客、驢に騎して歲年を走らすを。

【字解】【一】黃犢　犢は子牛、黃は幼稚の形容、必ずしも其色が黃いといふのではない。【二】舊莊　莊は村莊、卽ち田舍屋敷。【三】歲年　唯だ年といふに同じ。

【詩意】子牛の健なるが自慢で、これと共に、隄に登つて、鞭を揮つて居る。笛を弄すれば、日將に斜ならむとし、蓑を著ると、雨中の煙が斷れて飛ぶ樣である。その行く先は、歸鴉の羣れ飛ぶ流水の外か、疏樹に圍まれたる舊莊の前かである。牧童は、かくの如く暢氣であるから、王侯の門に客たるものが、驢馬に跨つて、年中忙がしげに奔走するのを笑つて居るであらう。

夜起觀月

夜起きて月を觀る

一春夜多雨。今宵初月明。　一春、夜、雨多く、今宵、初めて月明。

窓間幽夢覺。起憶故園行。　窓間、幽夢覺め、起つて憶ふ故園の行。

露下花微萎。煙中鳥忽鳴。　露下、花、微に萎み、煙中、鳥、忽ち鳴く。

誰同賞清景。惆悵倚前楹。　誰か同じく清景を賞せむ、惆悵、前楹に倚る。

【字解】【一】故園行　故鄕に還る。【二】前楹　楹は柱。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】この春は、兎角、夜、雨勝であつたが、今宵は、珍らしくも明月であつた。窓間に幽夢醒むるとき、起つて、故鄕に歸りたいと思つた。露の下には、花が少しく萎み、煙の中には、何の鳥か知らぬが鳴き出した。誰も、一處に清絕なる此景色を賞するものがないから、惆悵の餘、ひとり、柱に倚りかかつて、沈吟するのみである。

【餘論】この詩は一種の拗體で、第一句の平仄が合はぬ。そして、前聯は流水の對をなし、わざと散體を以て之を行つたのであるが、窓間の字は、後聯の露下・煙中と同じ語法であるから、甚だ面白くない。もしかすると、失檢の率作であるかも知れない。

贈劉醫師

劉醫師に贈る

君有抱朴意。高齋長晏如。　君、抱朴の意あり、高齋、長しへに晏如。

壺中仙姥酒。案上神農書。　壺中仙姥の酒、案上神農の書。

蒸朮曉煙裏。斸苓春雨餘。　朮を蒸す曉煙の裏、苓を斸す春雨の餘。

起疾多傳妙。慚予才自疏。　疾を起して多く妙を傳ふ、慚づ予が才自ら疏なるを。

【字解】【一】抱朴意　晉書葛洪傳に「自ら抱朴子と號し、因つて以て書に名づく」とある。朴は純朴、老莊の謂はゆる道の本體、それを抱いて居るといふ義。【二】高齋　樓上の書齋。【三】仙姥酒　前に卷九、蔡經宅の題下にも引いたが、姑蘇志に「良や久しくして酒盡く。王遠、左右を遣し、復た千錢を以て、餘杭の姥に與へ、乞うて酒を酤ふ。須臾にして信還る、一油囊を得たり、酒五斗ばかり。使傳ふ、餘杭の姥答へて言ふ、恐らくは、地上の酒、尊飮に中らざるのみ」とある。【四】神農書　神農は赭鞭を以て草木を鞭ち、百草を嘗めて初めて醫藥を造つた人で、醫者の元祖である。そこで、神農に託した醫書なども可なりある。【五】澌朮　朮は藥草の名。【六】斸苓　茯苓を掘る。

【題義】説明に及ばぬ。但し、劉某の名字は不詳。

【詩意】君は、古しへの抱朴子の樣な考を懷き、ひとり樓上の書齋に坐して、いつでも、暢氣で居る。壺中には、餘杭の仙姥から取り寄せたかと思はるる美酒があるし、机の上には、神農氏の名を署した醫書がある。曉煙の裏に朮を蒸し、春雨の晴れた揚句には茯苓を掘りに出かける。病者を療治することは、まことに上手であるが、予が才疏にして之を學ぶことの出來ないのは、まことに慚愧に堪へぬ次第である。

【餘論】起句四字皆仄なるは、古人に例があるから、先づ善いとして、第四句は下三字が平、結二句は平仄を誤つて居る。これは、純粹の五律と見ず、半古半律の者として、矢張、五古に入れる方が或は穩當かも知れぬ。

舟中早行

隆隆(一)津鼓(二)動。江火留餘閃。
人家未起耕。近水寒扉掩。
船開(三)鳧鴨散。樹吐煙霏斂。
東郭去方遙。青山見孤點(四)。

舟中早行

隆隆として津鼓動き、江火、餘閃を留む。
人家、未だ起耕せず、水に近くして寒扉掩ふ。
船は開いて鳧鴨散じ、樹は吐いて煙霏斂まる。
東郭去つて方に遙に、青山、孤點を見る。

【字解】【一】隆隆　太鼓の聲、梅堯臣の詩に漁陽三疊音隆隆とある。【二】津鼓　渡し船の相圖の太鼓、陳孚の詩に、渡頭動二津鼓一とある。【三】船開　舟が漕ぎ出る。【四】孤點　唯だ一つ點在する。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】渡し場の太鼓は、隆隆として鳴り出したが、江上の火は、なほ餘閃を留めて居る。人家では起きて耕作にも赴かず、水邊では、寒扉を掩うた儘、まだ眠つて居る。舟を漕ぎ出すと、鳧の羣が驚いて散じ、木から吐き出した薄煙は、いつしか收まつた。東郭は、すでに遙に隔り、青山の唯だ一つ當面に點在するのが見えて來た。

【餘論】仄韻でありながら、第一句、第五句、ともに末字を平聲にせず、第三第四兩句は對偶を爲さずして、平仄も變であるし、第六句は、一寸首を撚ねる樣で、その上句との對仗は、矢張確當でない。

要するに、これは、體式上、五古に入るべきものであらう。

春日懷諸親舊

春日、諸親舊を懷ふ

楊柳燕差差。(一)鄰家換火時。
楊柳、燕、差差たり、鄰家、火を換ふるの時。

春寒添客思。夜雨減花枝。
春寒、客思を添へ、夜雨、花枝を減す。

涉世悠悠夢。懷人(三)的的思。
世を涉る悠悠の夢、人を懷ふ的的の思。

出游無舊侶。空館獨題詩。
出游、舊侶なく、空館、ひとり詩を題す。

【字解】〔一〕差差　不揃の貌、入れ違ひになる貌。〔二〕換火　寒食の後で、新に火を取ること。〔三〕的的　はつきりして居る貌。

【題義】説明に及ばぬ。但し、以下二三首と共に、晩年婁江に居た時分の作であらう。

【詩意】柳のまはりには、燕子が交互に飛び、今しも、春の終に近く、寒食も過ぎて、鄰家では、丁度、火を換へた時である。春の寒いのにつけて、自然、客愁を添へ、昨夜の雨は、いくらか花を散らした樣である。世を涉つた跡は、夢の悠悠たるが如く、人を懷ふ思は、的的として明かである。出でて游行しやうとしても、舊友なければ、氣も進まず、相變らず、人げなき家に燻つて居て、ひとり詩を題するのみである。

【餘論】前聯は、從容迫らざる名聯である。

江上見逃民家

江上、逃民の家を見る

清時(一)無虐政。何事竟(二)拋家。
清時、虐政なく、何事ぞ、竟に家を拋つ。

鄰叟收飢犬。途人折好花。
鄰叟、飢犬を收め、途人、好花を折る。

林空煙不起。門掩日將斜。
林空しうして煙起らず、門掩うて、日、將に斜ならむとす。

四海今安在。歸來早(三)種麻。
四海今安にか在る、歸り來つて、早く麻を種ゑよ。

【字解】〔一〕清時　太平の御世。〔二〕拋家　家屋を棄つぽかして置く。〔三〕種麻　普通桑麻といふので、田產の義に用ひて居る。

【題義】逃民は、夜逃げをした者。この詩は、江上なる其家を見て作つたのである。

【詩意】今しも、太平の御世であつて、格別の虐政もないのに、何事に因つて、かくは、家屋を棄てたまま、逃亡したのであるか。鄰りの親爺は、置いてきぼりになつて飢ゑて居る犬を氣の毒がつて、連れて行き、途ゆく人は、遠慮なく、好花を折つて居る。林は空しうして、炊煙起らず、門は閉ぢた

儘で、日は斜ならむとして居る。四海の廣き、何處に居るか知らぬが、早く歸り來り、桑麻を種ゑて、田産を謀つては如何か、何といつても、住み慣れた故郷に勝る處は外に無いものである。

曉晴、東皋歩眺

江明片雨收。樹暗一村幽。
籬落疏麻長。田畦曲水流。
禽聲初變夏。麥氣欲成秋。
閒歩看時物。今朝散旅憂。

曉晴、東皋歩眺

江は明かにして、片雨收まり、樹暗くして、一村幽なり。
籬落、疏麻長じ、田畦、曲水流る。
禽聲、初めて夏に變じ、麥氣、秋を成さむと欲す。
閒歩して時物を看る、今朝、旅憂を散す。

【字解】【一】片雨　小雨に同じ、岑參の詩に江上片雨收とある。【二】禽聲　謝靈運の詩に園柳變鳴禽とある。【三】麥氣　月令に「孟夏の月、靡草死し、麥秋至る」とある。【四】時物　時節がらの景色。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】小雨すでに收まつて、江水いとも明かに、樹色なほ暗くして、一村極めて靜幽。籬落の邊には、疏らに植ゑた麻が大きくなり、田畦の間には、曲りくねつて野水が流れて居る。鳥の聲は初めて夏に變じ、麥の秋になつて、一種の匂ひがする。ここに、今朝散歩して、時節がらの景色を眺め、どうやら、旅中の憂を散することが出來た。

【餘論】後聯は、作者得意の筆墨である。

賦得戟門送陳博士

聖廟儼王宮。重關盛衞同。
儒官趨內外。武仗列西東。
乍啓鳴鐘始。將扃撤俎終。
莫言墻九仞。還有此能通。

戟門を賦し得て、陳博士を送る

聖廟は、王宮よりも儼に、重關、盛衞同じ。
儒官、內外に趨り、武仗、西東に列す。
乍ち啓いて鳴鐘に始まり、將に扃ぢむとして、撤俎終る。
言ふ莫れ、墻九仞と、還たこの能く通ずるあり。

【字解】【一】聖廟　孔子を祀つた廟で、國子學の中に在る。【二】盛衞　嚴重に護衞する。【三】武仗　武器を持つて居る隊仗。【四】將扃　扃は門を鎖ぢる。【五】撤俎　俎豆を撤す、御供へ物を撤去する。【六】墻九仞　墻は周圍の塀。

【題義】戟門は、ここでは孔廟の正門。周禮の天官掌舍に「壇を爲る、壝宮、棘門」とあつて、その注に「棘門は、戟を以て門となす」とある。無論、重要なる宮門は、何處でも戟を以て護衞したのである。次に通典に「晉の武帝、初めて國子博士を置く、歷代皆有り」と記し、泳化類編に「洪武の初、國子學と名づけ、博士・助教・學正・學錄・典書・典錄の官を置く」とある。博士は、もとより學位ではな

く、官名で、敎授の義、國子博士は、卽ち大學敎授である。この詩は、戟門、卽ち孔廟の正門を賦して、敎授陳某の上京を送つたのである。

【詩意】孔子廟は、王宮よりも儼然として莊嚴であるし、門は幾重にもなつて居て、いづれも、嚴重に護衞して居る。儒冠を戴ける敎授連中は、その內外に趨走し、武器を持つて居る隊仗は、西東に列して居る。その戟門の開くは、鐘を鳴らすに始まり、その閉づるは、俎豆を撤すると共に終る。孔廟の周圍の塀は高くして、容易に入ることは出來ないが、唯だ敎授の職に居るものは、自由に通行することが出來るので、まことに尊いものである。今、君も、敎授の職に任せられたのであるから、精精勉强して、遣つて貰ひたい。

櫻桃

(一)密綠映(二)圓紅。枝頭(三)的的同。
熟迎梅實雨。落値柳花風。
(四)美女名偏稱。(五)流鶯啄未空。
憶曾(六)春薦後。(七)捧賜出深宮。

櫻桃

密綠、圓紅に映じ、枝頭、的的として同じ。
熟して梅實の雨を迎へ、落ちて柳花の風に値ふ。
美女、名、偏に稱ひ、流鶯、啄んで未だ空しからず。
憶ふ曾て春薦の後、賜を捧げて深宮を出でしことを。

【字解】【一】密綠　櫻桃の葉の密生したるをいふ。【二】圓紅　櫻桃の實の熟したるをいふ。【三】的的　鮮明の貌。【四】美女　十六國春秋に「鄭氏、名は櫻桃、晉の冗僕射鄭世達の家妓なり、中に在つて妓中に擅し、石虎、甚だ寵惑す」とあり、李商隱の詩に何因古樂府、亦有鄭鶯桃」とある。【五】流鶯　高誘の淮南子注に「含桃は櫻桃なり、その鶯に含食せらるるを以て、故に含桃といふ」とある。【六】春薦　禮記に「仲夏の月、羞むるに含桃を以てし、先づ寢廟に薦む」とあり、漢書叔孫通傳に「惠帝、かつて出でて離宮に游ぶ。通曰く、古しへ、春嘗の果あり、方今、櫻桃初めて熟す、願はくは、陛下、取つて宗廟に獻ぜよ、と。上、これを許す。諸果の獻、これより興る」とある。【七】捧賜　拾遺錄に「後漢の明帝、月夜に於て、羣臣を照園に宴す。太官、櫻桃を薦め、赤瑛を以て盤と爲し、羣臣に賜ふ。月下、これを視れば、盤、桃と同色、羣臣皆笑つて曰く、これ空盤」とある。

【題義】櫻桃は、ゆすら梅で、前に數ば見えたから、ここには詳說せぬ。漢より以後、これを宗廟に薦め、それから羣臣にも頒ち賜はつたので、唐人にも、その賜を拜した詩が、頻頻として見えて居る。この詩は、卽ち櫻桃を詠じたのである。

【詩意】櫻桃の樹を見ると、茂れる葉の綠なるが、圓かなる紅實に映じ、殊に枝頭に在るのは、的的として、はつきり見える。その熟するは、梅の實の熟する入梅の雨に先ち、そして、落つるものは、柳花の風に値ひ、つまり、初夏の候である。むかし、鄭櫻桃といふ美妓があつて、さながら其名を負はしたのは、名實相稱うて、まことに、ふさはしく、それから、流鶯は好んで啄むが、未だ食ひ盡さずして殘つて居る。おもへば、さきに京師に在るや、宗廟の春薦、すでに畢りし後、これを頂戴して、深宮より退出したことがあつた。

金進士葵軒

金進士の葵軒

幽園夏雨歇。葵綠乍翻風。　幽園、夏雨歇み、葵綠、乍ち風に翻る。

獨向羣芳後。閒依萱草叢。　ひとり羣芳の後に向ひ、閒に萱草の叢に依る。

敷榮午簟側。流馥夜窗中。　榮を敷く午簟の側、馥を流す夜窓の中。

應有傾陽意。將君心正同。　應に傾陽の意あるべし、君と心正に同じ。

【字解】【一】葵綠　葵の綠なる葉。【二】萱草　わすれぐさ。【三】敷榮　花の咲き出でたるを云ふ。【四】流馥　香氣を流す。【五】傾陽　太陽の方に向く、說文に「黄葵、常に葉を傾けて日に向ひ、その根を照らさしめず」とある。

【題意】この詩は、進士金某の葵軒に題したので、多分、その人は、葵を愛して栽培し、仍つて、軒にも命じたのであらう。

【詩意】物しづかなる庭園に於て、夏の雨の霽れし時、綠なる葵の葉は、風に翻つて居る。葵は、春の花どもの後に在つて、ひとり萱草の叢に依り、そして、竹むしろの側に咲き出でて、晝、その姸を專にし、浮動する香氣は、夜、窓の中に流れ込む。葵の葉は、常に太陽の方に向くといふので、丁度、晨夕、天子に盡さうと念じて居る君の心と同じ樣である。さればこそ、君は、これを以て軒に命じたので、如何さま、これに孤負せぬ樣に有りたきものである。

【餘論】槎軒集には、閒依萱草叢の下に山艾葉映綠、海榴花競紅の一聯があつて、五言古に編入してあるといふが、實は、山艾の句の前に、更に一聯あつて、五言排律となるべき筈である。もしかすると、後者は、作者未完の草稿があつたのを其儘に存し、ここに掲出したのは、平仄の都合上、山艾の一聯を删り去つて、純然たる五律としたのであらう。

次倪雲林韻

倪雲林の韻に次す

雲林已白頭。猶有晉風流。　雲林、すでに白頭、なほ晉の風流あり。

愛寫滄洲趣。閒來玄館游。　滄洲の趣を寫すを愛し、閒來、玄館に游ぶ。

茶煙秋淡淡。竹雨暮修修。　茶煙、秋淡淡、竹雨、暮に修修。

欲向南溪水。長留青翰舟。　南溪水に向つて、長しへに青翰の舟を留めむと欲す。

【字解】【一】晉風流　晉の竹林七賢以下、清談者流の風流。【二】滄洲　海中の仙境。【三】玄館　浮世に遠ざかつた隱宅。【四】青翰舟　說苑に「鄂君の子晳之、舟を新波の中に浮べ、青翰の舟に乘す」とある。ここでは、唯だ字面だけを借り、立派な遊山船といふ義に用ひたのである。

【題義】倪雲林、名は瓚、元末に著名なる畫家で、前にも青邱の次韻があつた。但し、この詩の原作は、雲林の全集を檢しても分からない。

【詩意】倪雲林は一代の名家、白髪頭になつても、依然として昔時の風流を存し、好んで滄洲の趣を畫き出し、閒なる折折は、隱宅に來て游んで居た。茶の煙は、秋に入つて淡く、竹に注ぐ雨は、日暮修修たる聲を爲して居る。時には、南溪の水中に、立派な小舟を繫ぎ留め、詩酒の逸興を縱にせむと思つて居た。

【餘論】前聯は、一寸散體を眞似た處であらう。

登南樓看雨有懷

南樓に登り、雨を看て懷あり

清曉看江雨。獨登江上樓。
清曉、江雨を看、ひとり登る江上の樓。

人煙與草樹。蕭瑟滿城秋。
人煙と草樹と、蕭瑟たり滿城の秋。

砧響寒稍急。鴻聲哀更流。
砧響、寒稍や急、鴻聲、哀更に流る。

故人隔楚塞。西望忽成愁。
故人、楚塞を隔て、西望、忽ち愁を成す。

【字解】【一】蕭瑟　物さびしき貌。【二】楚塞　古しへの楚地の城塞。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】清清しき曉に江天の雨降り注ぎ、まことに心持の善い處から、ひとり、江邊の高樓に登つた。眺めやれば、人煙と草樹とは、わいだめもなく、滿城の秋は、流石に物さびしい。砧うつ響は、寒いにつけて、稍や急なるが如く、雁の聲は、哀しげにして、流れる樣である。わが友は、古しへの楚地に居て、相去ること遠く、西望すれば、忽ち愁を成すばかりである。

晚霽獨酌南樓

晚霽、獨り南樓に酌む

倦客豈遷客。故鄉非異鄉。
倦客、豈に遷客ならむや、故鄉、異鄉に非ず。

鱸肥蓴菜紫。雁到柳條黃。
鱸肥えて蓴菜紫に、雁到つて柳條黃なり。

湖濶已秋雨。樓高猶夕陽。
湖濶くして、已に秋雨、樓高くして、猶ほ夕陽。

登臨何必賦。把酒據胡牀。
登臨、何ぞ必ずしも賦せむや、酒を把つて胡牀に據る。

【字解】【一】倦客　久しく流浪して居る旅客。【二】遷客　左遷された人。【三】登臨何必賦　文選、登樓賦の注に「當陽縣の城樓、王仲宣、これに登つて賦す」とある、仲宣、名は粲。【四】據胡牀　晉書に「庾亮、武昌に在り、南樓に登り、胡牀に據つて詠謔竟夕」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】身は久しい流浪から歸つて來た旅客であるが、幸にして左遷された逐客ではなく、ここは元來生まれ故鄉であつて、異鄉ではない。今しも、鱸魚方に肥えて、蓴菜は紫色をなし、雁が北から

飛んで來て、柳の枝も黄ばんで居る。湖水は濶く、秋雨を經て水嵩の増したことは明かであるし、樓は高くして、まだ夕日の光が殘つて居る。ここに登臨したからといつて、何も必ずしも、賦を作らなくとも善いので、酒を把つて胡牀に據り、談詠して夜を終れば、それで澤山である。

【餘論】後聯は、意を用ひざれども、自然の巧對である。

追挽恭孝先生二首

恭孝先生を追挽す　二首

（一）閩洛遺風在。（二）河汾舊業傳。　閩洛、遺風在り、河汾、舊業傳ふ。

書攻（三）藏簡後。易究（四）出圖先。　書は攻む、簡を藏するの後、易は究む、圖を出すの先。

（五）曉禁辭（六）持槖。（七）寒廳戀坐氈。　曉禁、槖を持するを辭し、寒廳、氈に坐するを戀ふ。

臨危誰復似。身與敕倶全。　危きに臨んで、誰か復た似たる、身、敕と倶に全し。

【字解】【一】閩洛　金檀の按に「學者、濂洛關閩と稱す。濂は周敦頤を謂ふ、字は茂叔、濂溪に居り、濂溪先生と稱す。洛は程顥を謂ふ、字は伯淳、明道先生と稱す。弟頤、字は正叔、伊川先生と稱し、河南に居る。關は張載を謂ふ、字は子厚、關中鳳翔郿縣横渠鎭の南に僑寓す、故に横渠先生と稱す。閩は朱子を謂ふ、字は元晦、父松、延平尤溪の尉たり、熹を生む、崇安に寓居す、晩に建陽の考亭に徙る」とある。閩洛といへば、朱子と程明道とを併稱したので、宋學理學の開祖といふ意味に用ひて居る。【二】河汾　唐書王績傳に「績の兄通は、隋末の大儒なり、徒を河汾の間に聚め、六經を倣作し、又中説を爲つて論語に擬す」とある。【三】藏簡後　孔安國の尚書序に「秦の始皇、先代の典籍を滅し、書を焚き、儒を抗にす。我が先人、用つて其家書を屋壁に藏す、漢興り、濟南の伏生、年九十を過ぎ、その本經を失ひ、口づから以て傳授す、わづかに二十餘篇。その上古の書たるを以て、これを尚書と謂ふ。百篇の義、世、聞くを得るなし。魯の共王に至り、好んで宮室を修め、孔子の舊宅を壞し、以て其居を廣め、壁中に於て、先人藏するところの古文虞夏商周の書、及び論語・孝經を得たり」とある。【四】出圖先　繋辭に「河、圖を出し、洛、書を出す、聖人これに則る」とある。【五】曉禁　禁は宮中。【六】持槖　南史劉杳傳に「博く羣書を綜ぶ、沈約・任昉以下、遺忘する毎に、皆訪問す。周捨、杳に問ふ、尚書は紫荷槖を著け、相傳へて嚢を挈ふと云ふ、竟に何の出づるところ。杳曰く、張安世傳に云ふ、槖を持し、筆を簪す、孝武皇帝に事ふる數十年と。韋昭・張宴の注、幷に曰く、槖は嚢なり、筆を簪して以て顧問を待つ」とある。【七】寒廳　廳は奥座敷。

【語義】恭孝先生は、王彝の父の謚號で、名は允中。彝は、春日懷十友詩にも見え、北郭十友の一人である。婁堅の王常宗小傳に「王彝、字は常宗、その先は蜀人、元末、父恭孝先生崑山縣學訓導となり、因つて東下し、留まつて家す」とあり、姑蘇人物傳に「王彝の父允中、崑山に教授し、遂に崑に居り、又嘉定に徙る。少にして貧、書を天台山中に讀み、孟長文に師事す、長文は金履祥の弟子たり、故に學に端委あり」と見えて居る。この詩は、王允仲を追輓したので、追輓とは、死んだ當座でなく、幾年かの後、これを弔ふことである。

【詩意】先生は、閩洛の遺風を存して、道學の深奥を極め、又河汾の舊業を傳へて、弟子どもを教育された。書經に就いては、孔氏の壁中に簡冊を藏したのを發見した後から研究を爲し、易に就いては、はるかに淵源に溯つて、まだ河水から圖を出さぬ前にも及んだ。はじめは、宮中に出仕し、槖を持して諮問に應じて居たが、やがて之を辭して田舎の訓導となり、寒げなる奥座敷に青氈を敷いて、その

上に坐し、却つて、その方を心易いと思つて居た位。騷亂に際して數ば危きに臨んだが、天子から、詔勅を下されて、その身を全うしたのは、他に比類なきことであつて、これを見ても、その學問德望の度越して居たことが分かる。

北闕書空上。東川敎自陳。　北闕、書、空しく上り、東川、敎、自ら陳ぶ。

可當衰亂日。復喪老成人。　衰亂の日に當つて、復た老成の人を喪ふべけむや。

堂靜懸魚絕。墳荒下馬頻。　堂は靜にして懸魚絕え、墳は荒れて馬を下ること頻りなり。

傳家欣有子。執筆際昌辰。　家を傳ふ、子あるを欣ぶ、筆を執つて昌辰に際す。

【字解】【一】北闕　宮中の正殿。孟浩然の詩に北闕休上書とある。【二】東川　蜀の東邊、王允中の故郷であらう。【三】懸魚　漢記に「羊續、廬江太守となる。丞、魚を饋る、受けて食はず、これを懸く。後、復た饋る、續、前の懸魚を出して之を示す。丞、慚ぢて止む」とある。【四】有子　子は後を嗣ぐに堪へたる子。書堅の王常宗小傳に「洪武二年、海內文學の士を徵して、元史を纂修す。先生、高太史啓と同じく召に應ず。史成つて、當に翰林に官するを得べし、疾を以て乞うて歸る」とある。【五】執筆　北史李彪傳の贊に「筆を執り、言を立て、遂に良史を成す」とある。【六】昌辰　太平の世。

【詩意】先生は、屢ば北闕に上書されたが、效果なかりしに因り、東川に在つて敎授された。國家の衰亂は、仕方がないとして、その上に、かういふ老成人を無くすのは、いかにも殘念の事であるが、先生は、遂に崑山に來つて、そこで逝去された。堂は靜にして、貰つた儘で懸けて置いた魚も、最早絕えて仕舞ひ、墓は荒廢甚しけれども、その遺德を慕ひ、馬を下つて、態態拜禮をする人は、頻頻として多かつた。唯だ幸なのは、跡を嗣いだのが、立派な息子であつて、明初太平の世に召し出され、筆を執つて史を修し、從つて、大に家名を揚げたことである。

題宋迪晚煙歸舍圖

宋迪の晚煙歸舍の圖に題す

落日下嵐嶺。行人逢已稀。　落日、嵐嶺を下り、行人逢ふこと、すでに稀なり。

隔煙望田舍。映水掩荆扉。　煙を隔てて田舍を望めば、水に映じて、荆扉を掩ふ。

鳥亂夕林暗。草多秋徑微。　鳥は亂れて夕林暗く、草は多くして秋徑微なり。

家人應候我。賣酒郭中歸。　家人、應に我を候すべし、酒を賣つて郭中に歸る。

【字解】【一】嵐嶺　地名ではなく、嵐は山氣、即ち山氣立ちこめたる峠の路であらう。【二】荆扉　いばらで編つた木戸。【三】候我　わが歸るを待つて伺ふ。【四】賣酒　酒はもつこ、王猛が酒を賣つたことは、前に郊墅雜賦に見えて居る。

【題義】圖繪寶鑑に「宋の宋迪、字は復古、進士を以て第に擢んでられて郞となる。李成を師とし、山水を畫くに、運思高妙、筆墨淸潤」とある。この詩は、宋迪の筆に成れる晚煙歸舍の圖に題したの

である。

【詩意】夕日の斜なる頃、山氣立ちこむる峠を下つて行くと、路ゆく人に遇ふことも、最早稀である。煙を隔てて、わが草小屋を望むと、ありありと水に映つて、荊扉を掩うて居る。歸鳥は亂れ飛んで、夕の林、ほの暗く、草は生ひ茂つて、秋の小徑は、かすかで分からぬ位。家人どもは、春を賣つて、わが城中から歸つて來るのを待つて居るであらう。

【餘論】畫中に寫されて居た人に代つて作つた樣な工合で、すべてが、動的に且つ時間的に出來て居るから、畫の靜的に且つ空間的なるに對して、自然重複せず、兩兩相待つて、愈よ其趣を發揮するのである。

贈東菴道者

東菴道者に贈る

(一)雙樹夾成戸。一溪流繞家。
雙樹、夾んで戸を成し、一溪、流れて家を繞る。

(二)掃林留(三)迸筍。汲水帶浮花。
林を掃うて迸筍を留め、水を汲めば浮花を帶ぶ。

經勸里人讀。(四)藥從山客賒。
經は里人に勸めて讀ましめ、藥は山客より賒る。

已無喧寂念。默坐對鳴蛙。
すでに喧寂の念なく、默坐して鳴蛙に對す。

【字解】【一】雙樹　翻譯名義集に「娑羅樹、東西南北、四方各雙、故に雙樹といふ」とある。【二】掃林　林を掃除する。【三】迸筍　地から勢よく出た筍、張詁の詩に迸筍斜穿戸とある。【四】藥從山客賒　山中の人から藥材を買つて貯へて置く。

【題義】説明に及ばぬ、但し、道者は如何なる人か分からぬ。

【詩意】娑羅樹は、相竝んで自然に門戸をなし、一溪淙淙、家を繞つて流れて居る。林を掃除しても、勢よき筍だけは殘して置き、水を汲むと、桶の中に落花が浮んで居る。平生、敎化を務め、里人に勸めて聖經を讀誦せしめ、山中の人から、藥材を買つて、貯へて置く。道者は、ひたすら修養を積んで、喧寂を超越して居る處から、蛙の聲の騷がしきを聞いても、默坐して打澄まして居る。

樂圃三首

樂圃　三首

(一)林塢通(二)幽閴。山明雲出溪。
林塢、幽閴に通じ、山は明かにして、雲、溪を出づ。

門無俗客至。池有水禽啼。
門に俗客の至るなく、池に水禽の啼くあり。

(三)對酌山花下。行吟野竹西。
對酌す山花の下、行吟す野竹の西。

石牀春寂寂。苔色映(四)青藜。
石牀春寂寂、苔色、青藜に映す。

【字解】【一】林塢　塢は隄。【二】幽閴　二字ともに靜かなる貌。【三】對酌山花下　李白の詩に兩人對酌山花開とある。【四】

青藜　あかざの杖。

【題義】姑蘇志に「樂圃は、清嘉坊北に在り、朱長文の居るところ、中に高岡・淸池・喬松・壽檜あり。この地、錢氏に在つては金谷園たり。その父光祿卿、はじめて之を得たり。長文、營んで以て圃となし、幷せて、自ら記を作る。鄕人、その名德を尙び、知州章岵、表して樂圃坊となす。邃經堂・華嚴菴・招隱橋・見山岡・琴臺・鶴室・墨池・筆溪、及び西圃草堂、共に二十景あり。元末、張適、室を上に築き、題して樂圃林館といひ、高季迪・倪元鎭・陳麟・謝恭・姚廣孝と賡和して、十詠を爲す」とあつて、この詩は、取りも直さず、その當時唱酬の作であらう。

【詩意】林や塢は、靜幽なる處に通じ、四邊の山は、はつきりして、雲が溪谷を出るのも、よく見える。門には俗客の至るなく、池には水禽が啼いて居る。或は山花の下に對酌し、或は野竹の邊を行吟し、幽興は殊に多い。石牀の上、落花跡だになく、春の寂寂たる頃は、苔色靑靑として、あかざの杖に映ずるのみである。

【餘論】篇中、山の字の重複が第一に目に付く樣である。

開軒時野眺(一)。山色翠迢遙。　軒を開いて、時に野眺すれば、山色、翠迢遙たり。
屛結(二)霜中檜。圖開(三)雪裏蕉(四)。　屛は霜中の檜を結び、圖は雪裏の蕉を開く。
煖煙初扇(五)圃。野水欲平橋(六)。　煖煙、初めて圃を扇り、野水、橋に平かならむと欲す。
曳杖閒來往。時挑(七)酒一瓢。　杖を曳いて閒に來往、時に挑ぐ酒一瓢。

【字解】【一】野眺　野を眺める。【二】屛結　屛は屛風で、その上に畫いてある。【三】圖開　かけ物を掛ける。【四】雪裏蕉　夢溪筆談に「予が家藏するところ、摩詰の畫、袁安臥雪の圖、雪中の芭蕉あり」と見え、もと王維の創意である。【五】扇圃　扇はあふる、陶淵明の春風扇微和の扇と同義。【六】欲平橋　橋と水平になる。【七】時挑　挑はかかげる。

【詩意】軒窓を開いて、野もせを眺むれば、山色翠遙に、ぼうッと霞んで居る。屛風には、霜を帶びた檜が畫いてあるし、かけ物を廣げると、雪中芭蕉の幅であつた。暖かなる煙は、畑地を扇るが如く、野水は漲つて、橋と平になつて居る。そこで、杖を曳いて來往し、時たま、酒の入れてある一瓢を杖頭に挂けることがある。

幽居無灑掃(一)。風景自翛然(二)。　幽居、灑掃なく、風景、自ら翛然。
紅溼花間雨。靑分柳外煙。　紅は溼ふ花間の雨、靑は分かる柳外の煙。
山窓捫(三)蝨坐。石榻枕書眠。　山窓、蝨を捫つて坐し、石榻、書を枕して眠る。
自得閒中趣。栽花疊(四)錦川。　自ら閒中の趣を得たり、花を栽ゑて錦川を疊む。

【字解】【一】灑掃　水を打つたり掃除したりする。【二】翛然　自然俗を超えたる貌。【三】捫蝨　しらみを撚れる、晉書に「桓温、關に入る。猛、褐を被つて之に詣し、蝨を捫つて當世の事を談じ、旁に人なきが若し」とある。【四】疊錦川　川は平地の義、錦を敷き詰めた地の樣にする。

【詩意】幽居は、格別、掃除もしないが、天然の風景は、翛然として俗を離れて居る。花間の雨は、紅に溼ひ、柳外の煙は青色分明。山に對する窓に倚つては、蝨を撚りつつ坐し、石造の榻に臥しては、書を枕しつつ眠ることがある。すでに、閒中の幽趣を得たから、この上は、花を栽ゑて、錦を敷き詰めた地の樣にしたいと思つて居る。

送人戍梁谿

人の梁谿に戍するを送る

沙寒馬屢嘶。曉度錫山西。　沙寒くして、馬、屢ば嘶き、曉に度る錫山の西。

古壘殘兵衞。荒田健婦犂。　古壘、殘兵衞り、荒田、健婦犂く。

雨多弓力軟。霜重鼓聲低。　雨多くして弓力軟、霜重くして鼓聲低し。

路近非邊塞。香閨莫夜啼。　路近くして邊塞に非ず、香閨、夜、啼く莫れ。

【字解】【一】健婦犂　留守をして居る壯健なる妻婢などが代つて田畑を耕す。杜甫の兵車行に、「縱有健婦把鋤犂、禾生隴畝無東西」とある。【二】雨多弓力軟　雨が多いと膠が融けて弓が弛むから、その力が弱くなる。【三】霜重鼓聲低　霜が澤山降つて寒いと、手がかぢかんで、太鼓を敲いても力が入らぬから、その響が自然低い。

【題意】梁谿は前に卷四、贈惠山醫僧の詩中に注して置いたが、無錫の附近である。明史藁張士誠傳に「元の至正十六年九月、太祖、徐達等を遣して、常州を攻む、士誠、兵を遣して來り援けしむ」とあつて、この詩は、その時、常州方面に派遣された兵士を送つたのである。

【詩意】曉早く錫山の西を通過すると、滿地、沙寒くして、馬が屢ば嘶く。古壘には、殘兵が守つて居るだけで、餘程、手薄であるから、早く赴いて援けねばならぬし、不在になつても、丈夫な下婢などが居て、荒田を鋤くから、格別、心配には及ばない。雨が降り續く爲に、弓の力は自然弱くなり、霜が重くして、鼓の聲だに高く響かぬ折折は、流石に、征戍の苦を覺えるであらう。しかし、君の行くところは、つい近國で、邊塞ではないから、香閨に獨り寢を爲す妻女は、夜半に泣かずとも善からうと思ふ。

五言排律

月夜游太湖

月夜、太湖に游ぶ

欲尋林屋隱。還過洞庭游。　林屋の隱を尋ねむと欲し、還た洞庭を過ぎて游ぶ。

遠水初涵夜。長天盡作秋。　遠水、はじめて夜を涵し、長天、盡く秋を作す。

湖如青草濶。月似白蓮浮。　湖は青草の如く濶く、月は白蓮の浮ぶに似たり。

萬壑風傳笛。三更斗挂舟。　萬壑、風に笛を傳へ、三更、斗、舟に挂かる。

葉應隨鳥散。山欲趁波流。　葉は應に鳥に隨つて散ずべし、山は波を趁うて流れむと欲す。

浩蕩吾何適。鴟夷不可求。　浩蕩、吾、何にか適かむ、鴟夷、求むべからず。

【字解】【一】林屋　洞名、前に卷五、太湖の詩中に見ゆ。【二】洞庭　卽ち太湖、普通に謂ふ洞庭ではない。【三】青草　湖名、荊州記に「巴陵に青草湖あり」と見ゆ。【四】白蓮　盧仝月蝕の詩に初疑白蓮花、浮出龍王宮とある。【五】風傳笛　李中の詩に風笛起漁舟とある。【六】斗挂舟　斗は北斗。【七】浩蕩　水の廣き貌。【八】鴟夷　范蠡すでに吳を滅ぜし後、越を去り、鴟夷子皮と變して、五湖に浮んだといふことで、前に卷五、太湖の詩中に詳說して置いた。

【題意】説明に及ばぬ。太湖は、前に卷五、太湖の題下に注して置いた。

【詩意】林屋洞中に住む隱者を尋ねむが爲に、又立ち戻つて、太湖に浮んだ。遠水漫漫として、夜色を涵し、長天漠漠として、秋ならぬ隈もない。この湖は、青草湖と同じ樣に濶く、冴えた月は、白蓮花の浮び出でた如く見える。萬壑、靜にして、風は笛の音を傳へ、三更に及ぶと、北斗が舟に當つて輝いて居る。落葉は、鳥に隨つて飛ぶであらうし、山は、波を趁うて流るるばかり、鴟夷子、すでに去つて、その跡、尋ぬべからず、この廣い湖水の中で、われは、何方に往くべきかと、低徊して思ひ惑ふばかりである。

【餘論】葉應隨鳥散の五字は、前に次韻陳留公の詩中に見えて居たのみならず、斷じて、晝景であつて、この場合には相應しくない。一時の間に合せに、舊句を塡めて置いた儘、他日更に再思するを忘れると、往往かういふ事になるので、後生小子の宜しく注意すべきことである。

詠夏氷

夏氷を詠ず

寒收凝凍井。晩薦納涼宮。　寒、收まつて凍井を凝らし、晩に薦めて涼宮に納る。

抱潔存天質。銷炎奪化工。　潔を抱いて天質を存し、炎を銷して化工を奪ふ。

氣蒸金盌潤。色映玉盤空。　氣は金盌を蒸して潤ひ、色は玉盤に映じて空し。

弱藻含猶在。纖塵隔未通。　弱藻、含んで猶ほ在り、纖塵、隔てて未だ通せず。

非山寧可倚。是水復當融。　山に非ず、寧ろ倚るべけむや、これ水、復た當に融くべし。

照夜何須月。驚秋詎待風。　夜を照らす何ぞ月を須ひむ、秋を驚かす詎ぞ風を待たむ。

製屏應不隱。作珮定難攻。　屏を製せば應に隱れざるべし、珮を作す定めて攻め難し。

(五)容貌清誰竝。(六)仙肌瑩自同。　容貌、清、誰か竝ぶ、仙肌、瑩、自ら同じ。

宜涵(七)筠簟素。愁逼(八)桂爐紅。　宜しく筠簟の素を涵すべく、桂爐の紅に逼らむことを愁ふ。

願解行人渴。分貽道路中。　願はくは、行人の渴を解き、分つて道路の中に貽らむ。

【字解】〔一〕金盤　銅製の鉢。〔二〕弱藻　しなやかな藻。〔三〕非山寧可倚　通鑑に「或は陝郡の進士張彖に勸めて、楊國忠に謁せしむ。彖曰く、君が輩、楊右相に倚る、泰山の如し、吾は以て氷山となすのみ。もし、皎日、すでに出づれば、君が輩、恃むところを失ふなきを得むや、と。遂に嵩山に隱る」とある。〔四〕作珮　珮は佩玉、腰下の飾り。〔五〕容貌清誰竝　晉書衞玠傳に「玠、風神秀異、妻父樂廣、海内の重名あり、議者以爲へらく、婦翁氷清女壻玉潤と」とある。〔六〕仙肌　莊子に「藐姑射の山に神人あり、肌膚、氷雪の如し」とある。〔七〕筠簟　竹で編んだ涼簟、即ちたかむしろ。〔八〕桂爐　肉桂等の香木を焚く香爐。

【題意】說明に及ばぬ。

【詩意】今は夏で、寒氣すでに收まりしに、これは、凍れる井の中で凝結したものらしく、晩に之を獻上して、お涼みの御殿に差し上げる。その純潔を抱けるは、天然の性質であるし、暑さを銷すことは、造化の工をも奪はむばかり。冷氣は、銅の鉢を蒸して、表面までも潤ひが廻はり、純色が玉盤に映ずると、透明なる爲に、有れども無きが如くである。よく見ると、中には水中の藻を含んで居るが、こまかい塵埃でも、隔つて、その內部に入ることはない。これは、楊國忠を氷山に譬へたのと異にして、もとより山で無いから、倚ることも出來ず、本來、氷であるから、再び融けて仕舞ふ。夜を照らすには、何も月を借りるに及ばず、秋を驚かすにも、風を待つ必要なく、その明瑩なるは、さながら、月の如く、その淸涼なるは、風にも勝つて居る。それで屛風を造つた處で、透明であるから、隱れることは出來ないであらうし、珮玉に造らうとしても、細工が六つかしい。誰か容貌の淸げなること、これと相竝ぶべき、ただ藐姑射仙人の肌膚のみは、瑩くことが、自然、同じ樣である。竹むしろの純素なるを涵すには宜しいが、名木を焚いて赤くなつて居る香爐の傍に置けば、やがて、自然解かされるであらう。それよりも、願はくは、旅人の喉の乾いたのを醫せしめむが爲に、隨處の道路に分贈したいものである。

【餘論】元來、詠物の詩は、その巧妙なものでさへ、謎語に類して居るのに、これは、對偶を以て行つたのだから、一しほ、六つかしく、且つ、これだけ篇幅を長くするだけの材料もないのである。青邱の才を以てしても、精精、こんなもので、格別取り立てて論ふべき價値もない。唯だ非山寧可倚の四句だけは、刻劃に過ぎて居るが、新警工緻、篇中の警策である。

題黃鶴山人畫

黃鶴山人の畫に題す

何處畫相同。(一)湘南與(二)峽東。　何の處か、畫と相同じ、湘南と峽東と。

江來落日外。山出杪（三）秋中。　江は來る落日の外、山は出づ杪秋の中。
綠（四）桂騷（五）人宅。青（六）蓮釋（七）子宮。　綠桂、騷人の宅、青蓮、釋子の宮。
鐘鳴樵（八）谷暗。船散市（九）橋空。　鐘は鳴つて樵谷暗く、船は散じて市橋空し。
風樹驚猿落。煙（一〇）蕪去鳥通。　風樹、驚猿落ち、煙蕪、去鳥通ず。
平生游楚興。對此轉無窮。　平生、楚に游ぶの興、これに對して、轉た窮まりなし。

【字解】【一】湘南　湘水の南、長沙一帶の地。【二】峽東　峽は宜昌以上に於ける揚子江の上流。【三】杪秋　杪は樹枝の末梢、從つて、季の義に用ふ。季秋、卽ち晚秋。【四】綠桂　楚辭の招隱士に桂樹生兮山之幽とある。【五】騷人　前に屢說して置いたが、屈原竝に其末派。【六】青蓮　白蓮に同じ。【七】釋子宮　僧寺、禪菴に同じ。【八】樵谷　樵夫の入る深谷。【九】市橋　その近くに市場が開かれる橋。【一〇】煙蕪　煙こめたる草原。

【叢談】圖繪寶鑑に「王蒙、字は叔明、吳興の人、趙文敏の甥なり。山に館す、故に黃鶴山樵と號す。山水を善くし、甚だ巨然の用墨法を得たり」とある。この詩は、卽ち王叔明の畫山水に題したのである。

【詩意】この畫と同じ樣な風景は何處かと云ふと、湘南に非ざれば峽東であつて、大江の水が、落日の外より來り、幾多の山が、晚秋の晴れ空の中に出て居るのは、全くさうである。桂樹の茂れるは、騷人の居宅なるべく、白蓮の花咲き匂ふは、いづれ庵室であらう。夕ぐれ鐘が鳴ると、木こりの往來する深谷も暗くなり、商船の散する頃には、今まで市の開いて居た橋畔に、人も居ない樣になる。風に搖れる木からは、驚いた猿がころげ落ち、煙を罩めたる草原には、歸り去る鳥が自由に飛んで行く。予は、平生、湘南より峽東にかけて、古しへの楚地に游びたいと思つて居たので、今、この圖に對すると、無窮の興味を覺える。

【餘論】起結各二句を除いて、中間八句は、專ら畫中の景を敍述したのであるが、遠近を兼ね、有無を併せ、無論、畫に無いものまでも倩ひ來つて說明して居るので、これならば、題畫の本旨にも叶ふべく、且つ起結も、これが爲に、自然振ふを覺える。

賦得履送衍上人

履を賦し得て、衍上人を送る

穩稱游方脚。新編（二）楚岸蒲。　穩に游方の脚に稱ひ、新に楚岸の蒲を編む。
滑（三）欺峰頭石。危怯世間途。　滑は峰頭の石を欺き、危きは世間の途を怯る。
輕曳愁妨（四）蟻。高飛笑化（五）鳧。　輕曳、蟻を妨げむことを愁へ、高飛、鳧に化せむことを笑ふ。
上堂聲每衆。度嶺影還孤。　堂に上つて、聲、每に衆く、嶺を度つて、影、還た孤なり。
著處朝行道。抛時夜結（六）趺。　著くる處、朝に道を行き、抛つ時、夜、趺を結ぶ。

空山欲相訪。落葉去蹤無。　空山相訪はむと欲す、落葉、去蹤なし。

【字解】〔一〕游方歸　然るべき處に出かける、行脚。〔二〕楚岸蒲　揚子江岸に生ずる蒲。南史張孝秀傳に「匡山に入り、行を修し、道を學び、常に穀皮巾を冠し、蒲履を躡む」とある。〔三〕滑欺峰頂石　滑の字は履に就いて云ふのではなく、下の石に就いてゐるので、即ち滑り易き峰頂の石をも壓倒して、何の害もないといふ意にせればならぬ。從つて、下の危怯世間途も、世間の途の危きを怯れるといふ義。〔四〕妨蟻　蟻を踏み潰す、宋史程頤傳に「頤進講、色太だ莊、繼ぐに諷諫を以てす。帝が宮中に在つて、盥して蟻を避くるを聞き、問ふ、是ありや。曰く、然り、誠に之を傷けむことを恐るるのみ。頤曰く、この心を推して、以て四海に及ぼすは、帝王の要道なり」とある。〔五〕化鳧　王喬が雙鳧に化したのを網を擧げて捕へて見た處が、履であつたといふこと、前に卷九、洞庭山の詩中に見ゆ。〔六〕結趺　兩足を組んで坐禪をする。〔七〕落葉去蹤無　韋應物の詩に、落葉滿空山、何處尋行跡とある。

【題義】衍上人は、前に數ば見えて居た。この詩は、何處か知らぬが、上人の飛錫するを送る爲め、わざと變つた趣向を著け、履を詠じて、餞行の意を寓したのである。

【詩意】然るべき方に行脚する其足に最も善く適合する樣に、新に江岸の蒲を編んで造つたのが、即ちこの履である。これさへあれば、峰頂の石の滑り易きも、何の苦もないが、浮世の危き行路には、矢張、辟易する。これを輕く曳きずるのは、蟻を踏み潰さない用心であるし、勢よく高く飛ぶ時には、王喬の履が鳧に化したといふ傳説も、物の數ならじと覺える。これを穿いて、しづしづと僧堂に參入する時には、善男善女、歡迎の聲、賑はしく、峠の路を過ぎ行く時は、伴もなくて、影だに寂しい樣である。この履を穿けば、朝に道を行き、これを抛てば、夜、兩足を組んで坐禪をする。そこで、空山の中に分け入つて、君を訪はうと思つても、落葉は履の跡を埋め、何處といつて尋ねることが出來ぬであらう。

聞蛙

蛙を聞く

何處多(一)啼蛤。荒園(二)暑潦天。　何の處か啼蛤多き、荒園暑潦の天。

股(三)跳泥活活。形蔽草芊芊。　股は跳つて泥活活、形は蔽うて草芊芊。

野遠呼相應。(四)窪深樂自專。　野遠くして、呼べば相應じ、窪深くして、樂、自ら專にす。

斜陽漁(五)罩外。細雨客燈前。　斜陽漁罩の外、細雨客燈の前。

莫問(六)官私地。聊占水(七)旱年。　官私の地を問ふ莫れ、聊か占む水旱の年。

晴思蒲(八)葉渚。涼憶稻花田。　晴には思ふ蒲葉の渚、涼には憶ふ稻花の田。

高士(九)聽空愛。(一〇)遷人食未便。　高士聽いて空しく愛し、遷人食うて未だ便ならず。

(一一)灑灰誰解去。安我夜窻眠。　灰を灑いで誰か去るを解し、わが夜窻の眠を安んせむ。

【字解】【一】喞蛤　東坡の詩に稻涼初喞ㇾ蛤とあつて、その注に「嶺南、蝦蟇を呼んで蛤となす」とある。又本草に「その聲を大にすれば蛙といひ、その聲を小にすれば、蛤といふ」とある。【二】晏滄天　夏、雨が降つて出水する頃。【三】跂跣　白居易の詩に泥蛙入ㇾ戶跳とある。【四】罨深　罨はくぼみ。【五】漁罩　罩はかご、魚を捕ふるに用ふる竹又は荊の籠。【六】官私地　晉書に「惠帝、華林園に在り、蛙聲を聞き、左右に問うて曰く、この鳴くものは官の爲めにするか、私の爲めにするか。賈胤對へて曰く、官地に在るものは官の爲めにし、私地に在るものは私の爲めにす」とある。【七】水旱年　吳中田家五行に「三月三日、蛙聲を聽く、午前鳴くものは高田熟し、午後鳴くものは低田熟す」とあり、章孝標の詩に田家無ニ五行一、水旱卜ニ蛙聲一とある。【八】蒲葉渚　王建の詩に蛙鳴蒲葉下とある。【九】高士聽空愛　南齊書に「孔稚珪、字は德彰、風韻淸疎、世務を樂まず、門庭の內、草萊剪らず、南に山池あり、春日蛙鳴く。或は之に問うて曰く、陳蕃たらむと欲するか。稚珪笑つて曰く、われ此を以て兩部の鼓吹に當つ、何ぞ必ずしも陳仲擧に效ふを覬せむ」とあつて、陳蕃に怒蛙說ありしが故に云ふ。【一〇】遷人食未便　南方では蛙を食用に供したが、左遷された北人は、なかなか食へないといふ義。遷人は韓愈、愈の柳柳州の食蝦蟇に答ふる詩に、余初不ㇾ下ㇾ咽、近亦能稍稍、常恐染ニ蠻夷一、失ニ平生好樂一とある。【一一】蟈氏　周禮の蟈氏に「蠅黽を去るを掌る、牡鞠を焚き、灰を以て之に灑げば死す」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】何處が一番多く蛙が鳴くかといへば、荒れた庭園で、就中、夏、雨が降つて水が溜まる其頃である。蛙は股を働かして活活たる泥中を跳り、芊芊たる草の茂みの中に其軀を隱して仕舞ふ。野の遠きも、呼んで相答へ、さながら掛け合を爲す樣であるし、窪みの深い處に引ッ込んで、ひとり、その樂を專にして居る。魚を捕ふる籠に夕日の映ずる時、客舍に在つて細雨に坐する折からなど、聊か風情ある樣にも覺える。その鳴くのは、何も地に因つて官私の別があるのでもないが、三月三日の午前午後とに因つて、高下の田の成熟を卜する位のことは出來る。天晴れた時ならば蒲の葉生ふる汀、涼しき夕ならば稻の花咲く青田など、いづれも、ふさはしい樣に思はれる。孔稚珪の如き高士は、兩部の鼓吹に代用するといつて、これを聞くことを愛したが、韓退之の樣な遷客は、なかなか之を食ふ氣になれぬといつて喞ちて居た。誰か灰を灑いで之を追ひ去らしめ、わが夜窓の眠を安らかにすることが出來るか。何分、夜中に鳴き立てるのは、安眠の妨害となつて、閉口の外はない。

聖壽節早朝

天啓聖圖昌。流虹叶夢祥。
飛龍起江左。戰馬放山陽。
御柳垂閶闔。仙桃熟建章。
遠人陳貢篚。近侍浥爐香。
金鏡千秋錄。瑤池萬歲觴。
小臣歌拜手。堯日正舒長。

聖壽節早朝

天は聖圖を啓いて昌ならしめ、流虹、夢祥に叶ふ。
飛龍、江左に起り、戰馬、山陽に放つ。
御柳、閶闔に垂れ、仙桃、建章に熟す。
遠人、貢篚を陳し、近侍、爐香に浥ふ。
金鏡千秋の錄、瑤池萬歲の觴。
小臣、歌うて拜手す、堯日、正に舒長。

【字解】【一】聖圖　聖主の遠圖、杜甫の詩に、聖圖天廣大、宗祀日光輝とある。【二】流虹　帝王世紀に「少旲の母を女節といふ。

黄帝の時、大星あり、虹の如く、下つて華渚に流る、女節、夢に之に接し、意感じて少昊を生む」とある。【三】飛龍　易の乾卦九五に飛龍在天とあつて天子になること。【四】江左　江南。【五】放山陽　書經に「馬を華山の陽に歸らしむ」とあつて、山陽は卽ち華山の陽の晧。【六】閶闔　宮門。【七】仙桃　漢武内傳に「七月七日、王母至る、自ら天廚を設け、又侍女に命じて、更に桃果を索む。須臾にして玉盤を以て、仙桃七顆を盛つて王母に呈す。母、四顆を以て帝に與へ、三顆は自ら食ふ。帝、その核を收めて、これを種ゑむと欲す。母曰く、この桃、三千年にして一たび實を生ず、中夏土薄し、これを種うるも生ぜず」とある。【八】建章　漢宮の名。【九】貢篚　篚は箱。【一〇】爐香　香爐の煙。【一一】金鑑千秋錄　唐書張九齡傳に「千秋節、公卿、竝に寶鑑を獻ず。九齡、事鑒十章を上り、千秋金鑑錄と號し、以て諷諭を伸ぶ」とある。【一二】瑤池　穆天子傳に「西王母を瑤池の上に觴す」とある。【一三】萬歲觴　後漢書班超傳に「超上疏して曰く、目に西域の平定を見る、陛下、萬年の觴を擧げ、勳を祖廟に薦め、大喜を天下に布かむ」とある。【一四】拜手　手をついて拜を爲す。【一五】堯日　堯の時代の如き長閑な日。

【題義】聖壽節は卽ち天子の誕辰、今で云へば天長節。明典彙に「洪武二年九月十八日、聖壽節前一日、丞相汪廣洋、百官を率ゐて、慶賀の禮を行はむことを請ふ」とあつて、それが愈よ實施せられ、その當日、百官は、朝早く參入したので、青邱は、その頃、史官であつたから、矢張、末班に參するを得、因つて、この詩を作つたのである。

【詩意】天は、聖主の遠圖を啓いて昌ならしめむと欲し、因つて、わが天子をして、この土に生まれしめ、大星が虹の如く流れるといふ佳兆は、母儀の夢を感動せしめた。やがて、飛龍天に在るが如く、江南の地に勃興して、帝位に卽かれ、四海の羣兒、盡く平定したるに因つて、戰馬を華山の南に放たれた。今しも、太平の世に當り、御柳は宮門に垂れ、仙桃は殿庭に熟し、遠方の蠻夷どもは、貢物を納れた箱を列べて差し出し、近侍の朝臣は、殿上に趨走して、香爐の煙を衣に焚きしめて居る。今日の佳節に當りては、宜しく、古しへの張九齡に倣うて、千秋金鑑錄の如きものを呈上すべく、そして、瑤池に於ては、萬歲を壽ぐ杯を薦められることであらう。唯だ微賤の小臣たる私は、歌ひつつ、謹んで拜を爲し、堯の時代の樣に長閑に永き此日に遇うたことを特に感喜する次第で御座ります。

【餘論】これより以下數首、ともに朝廷の典儀に關した詩であつて、青邱の才を以て、新興の朝に當つたのであるから、その作あるは、もとより當然である。篇篇、ともに、流石に博大昌明の氣象に滿ちて居るが、往往、形式的に流れ、性靈の流動を缺いて居るのは、設題の性質上、亦た已むを得ぬことと思ふ。

洪武二年十月、甘露降後庭柏樹、上出示侍從臣、啓獲預觀嘉瑞、因賦詩頌之

洪武二年十月、甘露、後庭の柏樹に降る。上、出して侍從に示す。臣啓、嘉瑞を觀るに預かるを獲たり、因つて詩を賦して之を頌す

【一】和氣融爲液。中宵墜碧天。　和氣、融けて液と爲り、中宵、碧天より墜つ。

光溥高柏上。瑞發內庭前。　光は溥たり高柏の上、瑞は發す內庭の前。
見日朝還泫。經風晚盡堅。　日を見て、朝、還た泫たり、風を經て、晚、盡く堅し。
芳穠蜂蜜滑。的皪蚌珠圓。　芳穠、蜂蜜滑かに、的皪、蚌珠圓かなり。
厚澤歌難喩。沈痾飲易痊。　厚澤、歌うて喩し難く、沈痾、飲んで痊え易し。
願言同聖德。濡沃遍周埏。　願はくは言に聖德を同じうし、濡沃周埏に遍からむことを。

【字解】【一】和氣　陽和の氣、五經通義に「和氣精液、凝つて露となる」とある。【二】光溥　何法盛の晉中興書に「甘露は仁澤なり、その凝ること脂の如く、その甘きこと飴の如く、耆老敬を得れば、松柏、これを受く」とある。【三】朝還泫　泫は露の潤ふ貌。【四】芳穠　香氣あつて、どろどろして居ること。【五】蚌珠　眞珠を云ふ。【六】歌難喩　歌うても十分に言ひ盡せない。【七】沈痾　不治の痼疾。【八】飲易痊　洞冥記に「東方朔、玄露青露を得、青琉璃器に盛り、各五合を承け、以て武帝に獻ず。帝、徧ねく羣臣に賜ふ。嘗むるを得るもの、老者皆少く、疾者皆瘉ゆ」とある。【九】周埏　正韻に「埏は地際なり、八埏は地の八際」とある。世界中殘る隈なくといふ義。

【題義】洪武二年十月、甘露が皇宮後庭の柏樹の上に降つたといふので、主上は、それを取つて、侍從に示された。予高啓も、亦たこの嘉瑞を拜見することが出來たから、この詩を賦して、それを頌したといふ意。宋濂の甘露頌の序に「洪武二年十月十三日、膏露、乾淸宮後苑の蒼松に降る。上、特に中官に敕し、折つて禁林の諸臣に示さる」とあるのと併せ觀ると、後庭は乾淸宮、卽ち天子正殿の後苑、青邱は柏樹といひ、宋濂は蒼松といひ、これは何れが正しいか、一寸分からぬ。

【詩意】乾坤に磅礴したる陽和の氣は、融けて液となり、夜中に碧天から降り注いだ、それが卽ち甘露であつて、その光は、溥溥として、高い柏樹の上に止まり、かばかり、奇しき絕代の祥瑞が、內庭の前に現はれたのは、御目出たいことである。甘露は、日光に逢つても、朝の中は、猶ほ溼うて居たが、やがて、風に當つた爲に、晚には、すつかり堅く成つて居た。その香ばしくして、どろどろして居ることは、蜂蜜の滑かなるに比すべく、かたまつて的皪たるは、眞珠の圓かなるに似て居る。その厚澤は、とても歌つた處で、十分に盡し難く、不治の痼疾も、これを飲めば、全癒する。願はくは、ここに、天子の聖德と同じく、萬物を霑して、世界中、到らぬ隈も無い樣にしたいものである。

冬至車駕南郊

冬至、車駕南郊

駕動百靈訶。齋宮午夜過。　駕動いて、百靈訶し、齋宮、午夜過ぐ。
禮行因日至。樂奏合雲和。　禮の行はるるは、日至に因り、樂は奏して、雲和に合す。
配祖崇周典。祈年陋漢歌。　祖を配して周典を崇び、年を祈つて漢歌を陋とす。
璧陳孤月滿。燎發衆星羅。　璧は陳して孤月滿ち、燎は發して衆星羅す。

（一三）秩秩威儀盛。（一四）穰穰福祉多。　秩秩として威儀盛に、穰穰として福祉多し。
慶成應預喜。四海沐恩波。　慶成つて、應に預かり喜ぶべし、四海、恩波に沐す。

【字解】【一】駕動　天子の御車が御出かけになる。【二】百靈訶　多くの神神が護衞して居る、哀栁の七韻に五嶽賁眞、百靈護訶とある。【三】齋宮　お祭をする宮殿。【四】午夜　夜半。【五】日至　太陽が冬至線に來る、卽ち冬至。【六】雲和　琴の名、周禮春官大司樂に「雷鼓、雷鼗、孤竹の管、雲和の琴瑟、雲門の舞、冬日、地上の圜邱に於て之を奏す」とある。【七】配祖　主として天を祀り、且つ先祖を合祀する。【八】周典　禮記の祭法に「后稷を郊祀して、以て天に配し、文王を明堂に宗祀して、以て上帝に配す」とある。【九】祈年　年の豐ならむことを祈る。【一〇】漢歌　漢書禮樂志に「武帝、郊祀の禮を定め、乃ち樂府を立て、十九章の歌を作り、正月上辛を以て、事を甘泉圜丘に用ひ、童男女七十人をして倶に歌はしむ」とある。【一一】璧陳　周禮大宗伯に「蒼璧を以て天に禮し、黃琮地に禮す」とある。【一二】燎煙　周禮大宗伯に實柴槱燎とあつて、その注に「實柴とは、牲を柴に實たして之を燔くなり、槱燎とは、柴を燔き、煙を升らしめ、以て其誠を達するなり」とある。【一三】秩秩　順序立つて居る貌。【一四】穰穰　繁多にして盡きざる貌。

【題義】この詩は、冬至の日、天子、南郊に幸して、天を祀られた盛儀を記したのである。明典彙に「洪武二年冬至、昊天・上帝を圜丘に祀り、仁祖を奉じて、位に配す」とある。

【詩意】鳳輦が一たび出ると、百神、これを呵護し、その齋宮に到著されたのは、夜半を過ぐる頃であつた。ここに、郊祀の禮を行はれるのは、丁度、冬至に當つたからであるし、樂を奏して、雲和の琴瑟に合はせる。その祖先を配祀されたのは、周家の典禮を重んじて、これに準據されたのであるし、來年の豐穰を祈ることに就いて、漢の郊祀歌などは、取るにも足らぬものと成つて仕舞つた。その蒼璧を供へた時は、一輪の月が正に滿ちたるが如く、燎火を焚くのを見ると、多くの星が羅列して居る樣である。これを一概すると、威儀秩秩として盛に、福祉穰穰として多く、まことに莊嚴の極、そこで、さしもの御祭が、滯りなく濟むと、いづれも、これに參與したことを喜悅せざるなく、四海の際涯までも、恩波に沐浴することであらう。

禁中雪

君王元尙儉。臺殿忽瓊瑤。
（一）環素凝宮沼。飛花綴苑條。
（二）坊雞驚曙早。（三）仗馬喜寒驕。
（四）金扇開時看。（五）丹墀掃後朝。
（六）台司呈賀表。（七）樂部奏仙謠。
（八）須信陽光近。都先別處消。

禁中の雪

君王、元と儉を尙ぶ、臺殿、忽ち瓊瑤。
環素、宮沼に凝り、飛花、苑條を綴る。
坊雞、曙の早きに驚き、仗馬、寒に驕るを喜ぶ。
金扇開く時に看、丹墀掃うて後に朝す。
台司、賀表を呈し、樂部、仙謠を奏す。
須らく信ずべし陽光近づき、すべて先づ別處より消ゆるを。

【字解】【一】環素 純白色の圓環。【二】坊雞 宮中に飼はれて居る雞。【三】仗馬 儀仗の用馬。【四】金扉 黃金製の殿扉、韋都剣の製二賀春游一詩に雙鳳曉開金鎖扉とある。【五】丹墀 赤い數瓦を張り詰めた階下の地。【六】台司 韋莊の詩に玉函瑤檢下二台司一とある。漢では、司徒・司空・太尉を三司となし、これを天上の台星に比して台司といつたので、今でいへば內閣。【七】樂部 今の雅樂部。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】君王は、元來、節儉を旨とせられるが、上天は之に感じ、瓊瑤を以て臺殿を飾つて見せられた。宮內の池沼は、寒に凝つて、圓環の如く、苑中の枝條は、花を綴つて、觸るれば飛ばむとして居る。宮中の雞は、夜の早く明けたことに驚き、儀仗の用馬は、却つて元氣よく寒氣に驕る樣である。宮人は、金扉を開いた時に、初めて此景色を見たであらうし、やがて、丹墀の雪を掃ひ除けてから、早朝の儀式を行はれる。台司よりは、逸早く、諸方から差し出した賀表を一まとめにして捧呈し、樂部に於ては、特に目出たい歌に合せて、音樂を奏する。しかし、太陽が出かけると、この宮中を除いて、外の處から消えて行くに相違ないので、禁中の雪景は、もとより、この世の物ならず、天も心あつて、成るべく長く留めて置きたいと思ふからであらう。

封建親王賜百官宴

親王を封建し、百官に宴を賜ふ

漢運初興日。周藩竝建年。（一） 漢運、はじめて興るの日、周藩、竝び建つの年。

辨（二）方分（三）社土。當陛列宮縣（四）。 方を辨じて社土を分ち、陛に當つて宮縣を列す。

上相（五）傳金册（六）。中官（七）闢綺筵。 上相、金册を傳へ、中官、綺筵を闢く。

誓期山作（八）礪。恩瀉酒如川。 誓は期す、山の礪と作るを、恩は瀉いて、酒、川の如し。

仙李（九）千枝茂。天潢（一〇）幾派連。 仙李、千枝茂り、天潢、幾派か連る。

百僚咸醉喜。拜舞赤墀（一一）前。 百僚、咸な醉喜、拜舞す赤墀の前。

【字解】【一】周藩竝建年 史記周本紀に「功臣謀士を封じ、師尙父を首封となし、營丘に封じて齊といひ、弟周公旦を曲阜に封じて魯といひ、召公奭を燕に封じ、弟叔鮮を管に、叔度を蔡に封じ、餘皆次を以て封を受く」とあり、左傳に「竝に宗室を建て、以て周を藩屏す」とある。【二】辨方 方角を辨別する。周禮に「惟れ王、國を建て、方を辨じ、位を正す」とある。【三】分社土 社は土神、その廟の處の土に代へて分つ。漢舊制に「天子、大社、五色の土を以て壇となし、諸侯に封ずるものは、方面の土を取り、苴むに白茅を以てして之を授く、故に之を茅土を授くといふ」とある。【四】宮縣 樂をいふ、周禮地官小胥に「王は宮縣、諸侯は軒縣、卿大夫は判縣、士は特縣」とあつて、その注に「宮縣は、四面皆縣、宮に牆あるが如きなり」とある。【五】上相 宰相。【六】金册 卽ち印券。【七】中官 宮內官。【八】山作礪 漢書功臣表に「黃河をして帶の如く、泰山礪の若く、國、以て永く存し、こゝに苗裔に及ばしむ」とある。【九】仙李 韓偓の詩に仙李濃陰潤、皇枝密葉敷とある。【一〇】天潢 銀河、天上の河、張衡の賦に「乘二天潢之汎汎一兮」とあつて、その注に「天潢は天津なり」とあり、唐の太宗の詩に疎派引二天潢一とある。【一一】赤墀 丹墀に同じ。

【題義】諸親王に地を與へて、各、王に封せられたるに就いて、百官に宴を賜はり、青邱も、その宴に陪席して、この詩を作つたのである。泳化類編に「洪武三年四月、子樉等十人、及び姪守謙を封じ

て王と爲し、禮成つて廟に告げ、羣臣を奉天門文華殿に宴す」とあるのは、卽ち此時の事に係るのである。

【詩意】大明の天子が天下を統一されたのは、漢室の運、初めて勃興したる當日に同じく、今次、大に子姪を封ぜられたのは、周の羣藩が竝び建つた其時に似て居る。そこで方角を辨別して、これに應じたる社土を分ち賜はり、又殿陛の前に當つて、特用の旂を列立した。宰相は、恭しく印劵を傳達し、中官は、ここに御祝の宴を催した。その誓の言葉は、泰山も礪となるまでといふので、悠久に渝はらざるを期し、聖恩と共に瀉がる酒は、川の如くである。これより、仙李は、愈よ枝を增して茂盛すべく、天上の流は、幾派も相連つて、決して絕ゆることなく、まことに、目出たいことである。そこで、百僚は、皆快く醉うて、喜悅の情に堪へず、丹墀の前に於て、一齊に拜舞した。

【餘論】鳧藻集を見ると、封建親王賀東宮牋といふ一文がある。青邱は、この頃、太子竝に諸王の講經に侍して居たから、特に賀箋を太子に上つたので、もとより、同時の作であるから、念の爲め、左に全文を引抄して、參照に供することにする。

恭惟皇太子殿下、監國撫軍、久繫兆民之望、建邦作輔、大頒同姓之封、隆典式修、輿情均慶、地居震長、道合乾剛、孝奉兩宮、每問安於曉寢、友懷諸弟、共講學於春坊、既膺主鬯之崇、復擧分茅之盛、本支茂衍、宗社奠安、某等忝預台司、敢伸賀悃、河如帶、山如礪、永存萬世之傳、日重光、月重輪、敬上千秋之祝、

送安南使者杜舜卿還國、應制、幷序、

安南の使者杜舜卿の國に還るを送る、應制、幷に序

安南初入貢、朝廷遣翰林學士張以寧、賚詔冊其主爲王、及境而薨、其世子遣舜卿來告哀、且請命、及還命朝臣賦詩送之、

【訓讀】安南、はじめて入貢す、朝廷、翰林學士張以寧を遣し、詔を賚らし、その主を冊して王と爲す。境に及んで薨ず。その世子、舜卿を遣し、來つて哀を告げ、且つ命を請はしむ。還るに及び、朝臣に命じ、詩を賦して之を送る。

(一)南粤知文化。(二)來庭喜(三)最先。　南粤、文化を知り、來庭、最も先なるを喜ぶ。
地書通(四)漢日。貢紀(五)入周年。　地は書す漢に通ずるの日、貢は紀す周に入るの年。
(六)號冊纔臨境。(七)容衣忽掩泉。　號冊、わづかに境に臨み、容衣、忽ち泉を掩ふ。
使蒙(八)天語唁。嗣許(九)國封傳。　使は天語の唁を蒙り、嗣は國封の傳ふるを許さる。

(一〇)曉闕晴飛鳳。炎溪晚墜鳶。(一一) 曉闕、晴、鳳を飛ばしめ、炎溪、晩に鳶を墜す。

往來時物異。(一二)存歿聖恩全。 往來、時物異に、存歿、聖恩全し。

詔去開蠻霧。帆歸望海天。 詔去つて蠻霧を開き、帆歸つて海天を望む。

但修忠順節。世業自綿延。(一三) 但だ忠順の節を修めよ、世業、自ら綿延。

【字解】【一】南夢 卽ち安南。【二】來庭 入朝すること、詩經に徐方來庭とある。【三】最先 泳化類編に「この時、安南、首として先づ款を納る。太祖喜び、因つて著して訓と爲し、後人の其國を伐つを許さず」とある。【四】迺携日 南越王趙佗が漢に服屬したこと、史記南越列傳に見ゆ。【五】入周年 越裳氏が白雉を周に獻ぜしこと、尚書大傳に見ゆ。越裳は、卽ち後の南越。【六】俟册 王號を賜はつた封册。【七】容衣 遺骸に著せる衣、卽ち今云ふ經かたびら、韓愈の挽辭に容衣入夜臺とある。【八】天語 天語は天子の言葉、時は生者に對して悔みをいふ。宋濂の送杜舜卿序に「舜卿、哀を朝に告ぐ、帝、羣臣を帥ゐ、素服して西苑に受見し、默間良や久しく、惻然傷悼、遂に親ら文を爲つて以て祭る」とある。【九】國封傳 封ぜられた國土を相傳する。泳化類編に「安南國王陳日煃、陪臣同時敏等を遣して朝貢せしめ、遂に封爵を請ふ。洪武己酉六月、侍讀學士張以寧・典簿牛諒を遣し、日煃を封じて安南王となす。至る比、日煃卒す。弟日熞詔印を迎へて嗣を乞はしむ。以寧、許さずして曰く、詔を奉じて、爾の先君を封ず、世子に非ざるなり、當に再び請ふべし、と。日熞、又少中大夫杜舜卿等を遣して、朝に請はしむ。遂に日熞を封じて、王となす」とある。【一〇】曉闕晴飛鳳 王維の詩に雲裏帝城雙鳳闕とあるを翻用す。【一一】炎溪晚墜鳶 元稹の詩に炎溪暑不徂とあり、後漢書馬援傳に「援曰く、吾が浪泊西里の間に在るに當つて、下潦上霧、毒氣熏蒸、仰いで飛鳶を視れば、跕跕として水中に墮つ」とある。【一二】時物 季節の景色。【一三】綿延 長く引き續く。

【題意】序の意は――安南國が初めて入貢したから、朝廷では、翰林學士張以寧を遣し、詔敕を齎らし、その主陳日煃を册封して國王と爲す積りであつたが、以寧が、やつと國境に到著した頃、日煃は病死し、その後嗣の日熞は、杜舜卿を遣して其訃を報せしめ、且つ指圖を乞うた。その舜卿が將に還らむとする時、天子は特に朝臣に命じ、詩を賦して之を送らしめられたから、予も此詩を作つた――といふのである。一統志に「安南は、廣西・雲南の界、海に濱す、古しへの南交の地、秦には象郡に屬す。漢の武帝、南越を平らげて、交趾、九眞、日南の三郡を置く。唐には、交州と改む。明の洪武の初、歸附す、安南國王の印、姓陳氏を賜ふ」とある。次に張以寧は、列朝詩集に「字は志道、古田の人、秦定丁卯の進士に登り、至正中、翰林學士承旨に官し、祭酒に拜せらる。國初歸附して侍讀學士となり、三たび安南に使して卒す。著すところ、翠屏集あり」と記してある。

【詩意】安南國は文化に向ふを知り、そして、來朝歸服したのは、第一番であつた。その地は、むかし、漢に通じたこともあるし、又遠き昔、周に入貢したことがあつて、いづれも史乘に明記してある。纔に號册を齎らして、天使が纔に其境に臨んだ時、國王は俄に薨じ、容衣に著換へさせられて、墳墓は黃泉を掩うたといふことで、まことに、氣の毒の至。そこで、態態杜舜卿といふ者を使として上京せしめた。處が、その使は、辱くも、天子から直直に御悔みの言葉を賜はり、その後嗣は、國土を其儘承け傳へることを許された。その地に於ては、宮闕嵯峨、晴れた朝には鳳凰の飛ぶのが見えるが、炎熱に滿ちたる溪谷には、日暮に、鳶までが、毒氣に中てられて水に落ちるといふ話。今、君は往

來の途すがら、季節の景色を見、中國は流石に異なつて居るのに感せしなるべく、又國王の生死ともに、聖恩を全うせられたことを感謝するであらう。そこで、下し賜はつた詔書は、遙に其國に向ひ、蠻霧を推し開いて運ばれることであるし、君の乘る歸舟は、海天蒼茫の間を望んで行くことと思ふ。何は兎もあれ、天朝に對しては、あくまで忠順の節を守るが宜しく、さうすれば、その業を世〻にして、子孫の末までも綿綿として續くことであらう。

送高麗賀正旦使張子溫還國

高麗の賀正旦使張子溫の國に還るを送る

(一)丹鳳雲中闕。(二)玄菟海外城。　丹鳳雲中の闕、玄菟海外の城。

新陽初(三)獻歲。遠使盡朝京。　新陽、はじめて歲を獻じ、遠使、盡く京に朝す。

(四)卉服充王貢。(五)珠旒仰聖明。　卉服、王貢に充て、珠旒、聖明を仰ぐ。

花飛辭上國。日出指歸程。　花は飛んで上國を辭し、日は出でて歸程を指す。

車餞(六)都亭曉。帆開島嶼晴。　車は餞す都亭の曉、帆は開いて、島嶼晴る。

莫辭頻入賀。(七)寶曆萬年盈。　辭する莫れ、頻りに入つて賀するを、寶曆萬年盈つ。

【字解】【一】丹鳳雲中闕　南京なる宮闕を指して云ふ、丹鳳が常に翔舞して居るといふので、祥瑞の意を含めて云つたのであらう。【二】玄菟海外城　漢の武帝の時に、朝鮮を平定して、眞番・臨屯・樂浪・玄菟の四郡を置いたことが史記朝鮮列傳に見えて居る。高麗の都は開城で、卽ち古しへの玄菟の城内である。【三】獻歲　年始に就いて壽を獻ずる。唐の德宗の詩に、獻歲視元輔、萬方咸在庭とある。【四】卉服　書經に島夷卉服とあつて、草の葉を綴つて衣となすといふ義。【五】珠旒　旒は冠の兩端から幾筋も垂れて居る玉の飾り。後漢書輿服志に「冕は白玉珠を懸けて十二旒となし、其の綬の采色を以て組纓となす」とある。【六】都亭曉　漢書疏廣傳に「故人邑子、祖道を設け、東都門外に供帳す、送るもの車數百兩」とあつて、送別の宴は、都門の外で開くことになつて居る。丁度、むかし、江戸から出立する人を品川或は千住まで送つて、そこで、別れの酒を酌む樣なものである。【七】寶曆　今上の御宇、徐陵の徵周文に、主上恭膺寶曆、嗣奉瑤圖とある。

【題義】金檀注には、泳化類編に「壬子、高麗王顓、禮部尙書吳季南・工部尙書張子溫を遣し、來つて朝貢せしむ」とあるのを引いてある。壬子は洪武五年、青邱の死ぬる三年前で、すでに、都に居なかつたが、或は其事を傳聞して、態態詩だけを贈つたのかも知れない。しかし、年譜には、洪武三年に係けてあるので、張子溫は、その時、矢張、來朝したのを、類編には之を落して居るのであらうか。

【詩意】天子の在ますところは、雲中に雙闕巍峩として、丹鳳が每に飛舞して居るし、君は、海外の玄菟城から、はるばる來朝したのである。新年に當つて、御喜びを申し上げむが爲に、他の外國の使と共に、すつかり、ここに著京した。島夷の卉服は、以て王庭の貢物に當つべく、聖明の天子が冕冠に珠旒を垂れて居られるのを仰ぎ瞻て、その誠意を表した。やがて、春の末、花の散る頃、はじめ

て、上國を辭し、日の出づる方に向つて、歸程を指して出發する。都亭の曉早く、朝臣輩は、車から下つて餞を爲し、帆が開けば、遠くに島嶼晴れわたつて見え、これならば、海路の障りも無い樣である。天子の盛德は、古今に稀で、しろし召す御代は、萬年の久しきに亙るであらうから、君は、猶は引き續いて、入賀されるに相違ない。

送鮑修撰出官關中

鮑修撰の出でて關中に官たるを送る

辭朝西入陝(一)。車發動征塵。　朝を辭して、西、陝に入り、車發して、征塵を動かす。

小麥行時熟。啼鶯別處頻。　小麥、行く時に熟し、啼鶯、別るる處に頻りなり。

關前周故尹(二)。灞(三)上漢(四)遺民。　關前、周の故尹、灞上、漢の遺民。

直(五)院青(六)綾舊。臨川赤(七)組新。　院に直して青綾舊く、川に臨んで赤組新なり。

山連樂(八)游苑。樹繞富(九)平津。　山は連る樂游苑、樹は繞る富平津。

君去方年少。還能論過(一〇)秦。　君、去つて方に年少、還た能く過秦を論ず。

【字解】【一】陝　陝西、即ち長安附近。【二】周故尹　史記老子傳に「老子周に居ること、これに久しうし、廼ち遂に去つて關に至る。關令尹喜曰く、子、將に隱れむとす、わが爲に書を著はせ」とあつて、その註に「關令尹喜は、周の大夫なり、老子と倶に流沙に之き、その終るところを知るなし、亦た書九篇を著して關尹子と名づく」とある。【三】灞上　灞水の邊、即ち霸陵。【四】漢遺民　韓康は霸陵の人、藥を長安の市中に賣り、後に遯れて霸陵山中に入つた。その詳は、前に卷三、「詠隱逸」の第六首、題韓の作に見えて居る。【五】直院　翰林に宿直する。【六】青綾　漢官典職に「漢の尙書郎、入つて直するとき、青綾被、白綾被、或は錦被を供す」とある。【七】赤組　赤綬に同じ、地方官の印綬。【八】樂游苑　一統志に「西安府南に在り、樂游廟は曲江の北に在り、亦た樂游苑といふ」とある。【九】富平津　晉書杜預傳に「預、孟津、渡險なるを以て、請うて橋を富平津に建つ。成帝に及び、百寮を從へて、會に臨み、觴を擧げて、預に屬して曰く、君に非ざれば、この橋立たざるなり」とある。【一〇】過秦　賈誼は過秦論を著した。秦を咎むる、責むるといふ義で、秦の失政を攻擊したのである。

【題義】一統志に「西安府、秦には關中といふ」とあつて、即ち古しへの長安である。この詩は、翰林修撰たりし鮑某が地方官に轉じて、長安に赴任するを送つたのである。但し、某の名字は不詳。

【詩意】君は、今次、朝廷を辭して、西、陝西に赴かむとし、車が發すると、征塵を動かさむとして居る。今しも、春の末、途すがら、小麥は、追追熟すべく、ここに別宴に臨めば、鶯が頻りに鳴いて居る。函谷關の前には、むかしの尹喜の舊宅があるし、霸陵を過ぎては、韓康といふ漢代の隱逸の事を思ひ出すであらう。これまで、翰林院に當直された時は、青綾被を擁して眠つたが、この度は、地方官の赤綬を賜はり、川に臨めば、その新らしいのが水に映つて見える。長安の附近、山は樂游苑に連り、樹は黃河なる富平津を繞つて居る。君は此を去つて、まだ年が若いから、かの賈誼の如く、古しへの歷史を研究して、過秦論をも著されるであらう。

送恩公還江心寺

恩公の江心寺に還るを送る

上人居寶地。勝處似金山。　上人、寶地に居り、勝處、金山に似たり。
樓閣開天界。波濤隔世寰。　樓閣、天界を開き、波濤、世寰を隔つ。
鐘聞孤嶼外。刹出亂雲間。　鐘は聞こゆ孤嶼の外、刹は出づ亂雲の間。
螺女晨修饌。龍君夜叩關。　螺女、晨に饌を修し、龍君、夜、關を叩く。
游方來暫會。辭闕去難攀。　游方、來つて暫らく會し、闕を辭すれば、去つて攀ぢ難し。
舊業菱生沼。離程柳映灣。　舊業、菱、沼に生じ、離程、柳、灣に映す。
衣霑爐氣出。船載磬聲還。　衣は爐氣に霑うて出で、船は磬聲を載せて還る。
施貝來江估。持經化島蠻。　貝を施して江估を來らしめ、經を持して島蠻を化す。
諸緣除未早。半偈悟猶艱。　諸緣、除くこと未だ早からず、半偈、悟ること猶ほ艱なり。
安得如康樂。登臨此共閒。　安んぞ康樂の如く、登臨、此に共に閒なるを得む。

【字解】【一】寶地　寺の在るところを云ふ、淨域・靈境などに同じ。王勃の龍懷寺碑に、香城寶地、左右林泉とある。【二】勝處　風景勝絕の處。【三】金山　一統志に「金山は、鎭江府城西北江中に在り」と記し、周必大の雜錄に「この山、大江環繞、大風四に起る毎に、勢浮動するが若し、浮玉山と名づく。唐に裴頭陀あり、ここに山を開いて、金を得、名を金山と賜ふ」とある。【四】天界　天上の仙界。【五】螺女晨修饌　前に卷九、聖姑廟の詩中にも引いて置いたが、搜神記に「閩人謝端、一大螺を得、斗の如し、これを家に畜ふ。歸る毎に、盤餐必ず具はる。因つて、密に伺へば、乃ち一姝麗甚し。これを問へば曰く、われは、天漢中、白水の素女、天帝、われを遣し、君の爲に食を具へしむ。今當に去るべし、殼を留めて君に與へむと。端、用ひて以て糧を居く、その米、常に滿つ」とある。【六】龍君夜叩關　前に卷四、贈惠山醫僧東山の詩中にも引いて置いたが、仙傳拾遺に「開元中、孫思邈、終南山に隱れ、宣律師と相接す。時に大旱、西域の僧、昆明池に於て壇を結び、雨を祈らむことを請ふ。凡そ七日、水を縮むる數尺。忽ち老人あり、夜、宣律師に詣つて救を求めて曰く、弟子は昆明池の龍なり、雨なき時久し、弟子に由るに匪ず、胡僧、弟子の腦を利し、將に藥と爲さむとし、天子を欺き、雨を祈るといふ。命、旦夕に在り、乞ふ、和尚、法力救護せよと。宣公辭して曰く、貧道、律を持するのみ、孫先生に求むべしと。老人因つて至る。思邈謂うて曰く、われ昆明龍宮に仙方三十首あるを知る。もし能く予に示さば、予、將に汝を救はむとす。老人曰く、この方、上帝妄りに傳ふるを許さず、今急なり、もとより悋むところなし、と。頃らくあつて、方を捧げて至る。思邈曰く、爾、但だ還れ、胡僧を慮るなかれと。これより、池水忽ち漲り、數日にして岸に溢る、胡僧、羞恚して死す」とある。【七】去難攀　一たび去れば追跡することが出來ない。【八】舊業　むかし住んで居た處。【九】離程　旅路。【一〇】施貝　貝を喜捨する、貝は眞珠の如き珍貝。【一一】江估　江上の商估。【一二】半偈　詩を云ふ、李端の贈隱禪師の詩に半偈傳初盡、羣生意未題とある。【一三】康樂　南史謝靈運傳に「靈運性豪侈、衣服多く舊制を改む、世、ともに之を宗とし、咸な謝康樂と稱するなり」とある。はじめ、謝玄、康樂侯に封ぜられ、靈運は、その孫を以て封を襲ぎ、亦た康樂と稱した。山に游ぶを好み、永初三年、出でて永嘉郡守となり、登江中孤嶼の詩等がある。

【題義】江心寺は、浙江通志に「寺は溫州府城北江の中に在り、東西二塔あり、一に龍翔・興慶院と名づく。宋の建炎の初、高宗、海を航して、蹕を此に駐め、御書、淸暉・浴光二軒の扁、石に刻す」

とある。恩公の本名は不詳。

【詩意】上人は、淸淨の靈地に居り、その風景勝絕の處は、江中の金山に似て居る。樓閣高下、さながら、天上の仙界を現出し、波濤浩渺、遠く俗界を隔て、鐘は孤嶼の外に聞こえ、伽藍は亂雲の間から湧き出づる。處がら、螺女は朝ごとに來つて食事の世話を爲し、龍王は、夜、ひそかに門を敲くことがある。上人は、四方に飛錫した序を以て、都に居られたから、しばらく、相遇ふことが出來たが、今次、闕を辭して歸り去つた上は、容易に追跡することが出來ない。今まで居た處は、追追、荒廢して、菱が池に茂り、旅路は春に入つて、柳が入江に映じて居る。衣には、宮中の爐氣を帶びた儘で退出し、船には磬聲を載せて還つて行く。すると、江中の商人は、眞珠などの珍貝を喜捨するであらうし、上人は、又有り難い御經を持ち出して、島上の蠻夷どもを敎化される。ここに、予は諸の俗緣を早く除き去ることが出來ず、詩にばかり耽つて居て、悟ることは、なかなか六つかしい。出來るならば、古しへの謝康樂の如く、山水の游に耽り、江山寺にも一度登臨して、上人と共に、淸閒を樂みたいと思ふばかりである。

喜楊榮陽赴召至京過宿寓館

楊榮陽が召に赴き、京に至りて、寓館に過宿するを喜ぶ

忽作天涯會。渾銷歲暮哀。
忽ち天涯の會を作し、すべて、歲暮の哀を銷す。

高城(一)三鼓(二)動。虛館(三)一尊開。
高城、三鼓動き、虛館、一尊開く。

鄰馬嘶空櫪。江鴻過廢臺。
鄰馬、空櫪に嘶き、江鴻、廢臺を過ぐ。

飮餘寒色(四)退。談絕雨聲來。
飮餘、寒色退き、談絕えて、雨聲來る。

涉患功名倦。忘歸故舊猜。
患に涉つて、功名倦み、歸るを忘れて、故舊猜む。

闕前新應召。須讓子雲(五)才。
闕前、新に召に應ず、須らく讓るべし、子雲の才。

【字解】【一】高城　高い城樓・鼓樓を指す。【二】三鼓　三更を報ずる鼓聲。【三】虛館　人もなき空館。【四】寒色　寒さうな顏色。【五】子雲才　子雲は揚雄の字。

【題義】楊榮陽は楊基、曩に榮陽の知縣たりしが故に云つたので、前に之に寄せた五古の長篇があつた。列朝詩集の小傳を見ると「王師の姑蘇を下すや、饒氏の客たるを以て、臨濠に安置し、旋つて、河南に徙さる。洪武二年、放ち歸され、尋いで起して榮陽に知とし、鍾離の間に謫居し、秣陵に居る。これに久しうして、薦を用つて、江西行省の幕官となる」とあるが、この詩題で見ると、朝廷から召し出されて、榮陽から上京したので、その時、靑邱の寓居を過ぎて一宿したから、この詩を作つて示したのである。

【詩意】君とは、蘇州の北郭に於て、日夕往來したのだが、ここに、天涯に於て偶然相會し、折から、歲晚の悲哀なる思を消すことが出來た。高い鼓樓に於て、三更を報ずる頃、人もなき空館に於ては、一尊を開いて獻酬する始末。鄰家では、馬が廐に嘶いて居るし、江天の雁は、廢臺を過ぎて叫んで居る。やがて、飲んだ揚句には、不景氣な顏色も、どうやら直り、話が絕えた時、雨の音が初めて聞こえた。憂患に涉るに至つては、功名を求むることも厭になり、歸るを忘れて居ると、鄉里の故舊どもが氣にして、頻りに呼び寄せたがつて居る。しかし、君は、今次新に召に應じて闕下に朝するとのことで、古しへの揚子雲に比すべき宏才は、到底、予の及ぶところではない。

戲嬰圖

芍藥風欄(一)側。梧桐露井(二)傍。
嬌嬰(三)爭晚戲(四)。少婦鬪春妝。
共詑珠生蚌(五)。還憐玉產岡(六)。
半披文錦裓(七)。斜佩紫羅囊(八)。
額髮葳蕤(九)短。胸胞(一〇)細膩(一一)光。
庭前王氏子(一二)。陌上衞家郎(一三)。
弱草(一四)身眠軟。芳英手弄香。
隨人貪作劇(一五)。避伴學迷藏(一六)。
莫撲花蝴蝶。宜爲蠟鳳凰(一七)。
塗添雲母粉(一八)。浴試水沈湯(一九)。
麟送(二〇)徐卿宅。蘭生(二一)謝傅堂。
愛均看總好。年竝比誰長。
驥種(二二)雖難匹。鵷雛(二三)已作行。
欣君得此畫。眞是夢熊(二四)祥。

戲嬰の圖

芍藥風欄の側、梧桐露井の傍。
嬌嬰、晚戲を爭ひ、少婦、春妝を鬪はす。
共に詑る珠の蚌に生ずるを、還た憐む玉の岡に產するを。
半は、文錦の裓を披き、斜に紫羅の囊を佩ぶ。
額髮、葳蕤短く、胸胞、細膩光る。
庭前王氏の子、陌上衞家の郎。
弱草、身、軟に眠り、芳英、手、香を弄す。
人に隨つて劇を爲すを貪り、伴を避けて迷藏を學ぶ。
撲つ莫れ花の蝴蝶、宜しく爲るべし蠟鳳凰。
塗つては雲母の粉を添へ、浴しては水沈の湯を試む。
麟は送る徐卿の宅、蘭は生ず謝傅の堂。
愛均しく、看て總べて好し、年竝び、誰に比して長し。
驥種、匹し難しと雖も、鵷雛、すでに行を作す。
欣ぶ君が此畫を得たるは、眞に是れ熊を夢むるの祥。

【字解】【一】風欄　風の吹き度る欄干。【二】露井　屋根なき井戸、上の風欄とは文字だけの對である。【三】嬌嬰　愛すべき嬰兒。【四】晚戲　日暮まで遊び戲れる。【五】珠生蚌　前に卷十一、張仙畫像の詩中にも引いて置いたが、北齊書陸卬傳に「卬少にして善く文を屬し、甚だ河間の邢邵に賞せらる。邵、又卬の父子彰と交游す。かつて、子彰に謂つて曰く、吾以ふ、卿、老蚌、遂に明珠を出す」とある。【六】玉產岡　王安石の崑山の詩に玉人生此山、山亦傳此名とあつて、その自注に「世傳ふ、陸氏の家、機雲を生ず、故に崑山と名づく、玉を生ずるを言ふなり」とある。【七】文錦裓　模樣ある錦で造つた襁褓、卽ち兒衣、戴表元の和得子詩

に錦羅香爭羨とある。【八】紫羅囊 晉書謝幼度傳に「少にして、好んで紫羅の香囊を佩ぶ。叔父安、これを患へ、しかも、その意を傷くるを欲せず、因つて、戲に賭して、取つて卽ち之を焚く」とある。【九】鬅鬆 ふさふさしたる貌。【一〇】胸膩 胸の肉。【一一】細膩 肌理が細かで膩ぎつて居る。【一二】王氏子 南史王僧虔傳に「父曇首、兄弟と子孫を集會して、その戲適に任かす。僧達、跳つて地に下り、彪子と作る。時に、僧虔、十二博奕を累ね、すでに墜落せず、亦た重ねて作さず。僧綽は、蠟燭の珠を採つて鳳凰を爲る。僧達、奪ひ取つて打壞し、亦た復た惜まず。伯父弘、歎じて曰く、僧達は俊爽、當に人に減ぜざるべし、然れども、吾が家を亡ぼすものは、必ず此子ならむ。僧虔は、必ず公に至らむ。僧綽は、當に名義を以て美を見はすべし」とある。【一三】衞家郞 晉書衞玠傳に「少時、羊車に乘り洛陽の市に乘ず、見るもの、以て玉人と爲す」とある。【一四】鬪草 若草。【一五】作劇 劇は游戲、李白の詩に采花門前劇とある。【一六】迷藏 かくれんぼ、致虛雜俎に「明皇、玉眞と恆に皎月の下に於て、錦帕を以て目を蒙み、方丈の間に在つて、互に相捉へて戲れ、これを捉迷藏といふ」とある。【一七】繡鳳凰 上の王氏子の項に見ゆ。【一八】雲母粉 列仙傳に「方回は、堯時の隱人なり。堯、聘して以て閭士となす、鍊つて雲母粉を食ふ」とあり、顏氏家訓に「梁朝、全盛の時、貴游の子弟、多く學術なく、衣を薰し、面を剃り、粉を傅け、朱を施さざるなし」とある。【一九】水沈湯 本草に「木の心節、水に置けば沈む、故に沈木と名づけ、亦た水沈といふ」とある。水沈は香木の名、この香木を交ぜて沸かした湯。【二〇】麟從徐卿宅 南史徐陵傳に「陵、字は孝穆、年數歲、釋寶誌、その頂を摩して曰く、天上の石麒麟なり」とあり、杜甫の徐卿二子歌に孔子釋氏親抱送、並是天上麒麟兒とある。【二一】蘭生謝傅堂 謝傅は謝安。晉書謝玄傳に「從兄朗と叔父に器とせらる。曰く、子弟、亦た何ぞ人事に預からむ、しかも、これをして佳ならしめむと欲す。玄曰く、芝蘭玉樹の如きは、階庭に生ぜしめむと欲するのみ」とある。【二二】驥種 名馬の種、東坡の詩に象賢眞驥種とある。【二三】鳳雛 鳳凰の別名、莊子の秋水に見ゆ。楊巨源の詩に桂林枝上得鵷雛とある。【二四】夢熊祥 男子を擧ぐべき瑞祥、詩經に其夢維何、維熊維羆とある。

【題義】この詩は、子供の游んで居る處を畫いた圖に題したのである。

【詩意】芍藥の風吹き度る欄干の邊、梧桐の立てる屋根なし井の傍に於て、愛らしき幼兒どもは、日暮まで游び戲れ、その世話を燒いて居る少婦は、春粧を鬪はして、いかにも見よげである。幼兒どもは、いづれも將來に囑望される樣な賴母しき者どもで、或は老蚌の明珠を生みしを誇り、或は崑山に玉を產せしを得意とする程のものばかり。その支度はといへば、半ば模樣ある錦で造つた襁褓を著流し、御守りとして斜に紫羅の香囊を佩びて居る。額の髮は、ふさふさとして短く、胸の肉は、肌理こまかに膩ぎつて光つて居る。たとへば、王氏の子供等が庭前に羣れ集ふが如く、衞玠が陌上を行く樣な工合。ある者は、若草の上に身を橫へて眠つて居るし、ある者は、手に花を摘んで、その香を弄んで居るし、ある者は、人にくツ付いて何かいたづらを爲さうとして居るし、ある者は、かくれんぼの游戲に際し、仲間を避けて、容易に見つからぬ處に匿れやうとして居る。その顏には、雲母の粉を塗り、浴する時は、水沈の香木を交せて沸かした溫湯に限られて居る。徐氏の家に天上の石麒麟が送られ、謝安の堂上に芝蘭玉樹が生じたといふのも、かくやと疑ふばかり。どれを見ても、愛らしくて、すべて宜しく、年配も大抵似たか寄つたかで、誰に比して身の丈が高いといふのも無い。名馬の種は、まことに世に類なきものであるが、ここには、鳳凰の雛が行を爲して羣れ集まつて居る。君が此畫を得られたのは、まことに、お目出たいことで、かの熊を夢むといつたと同じく、やがて、男子を擧げられる瑞祥であらうと思はれる。

翫花池

桃枝兼杏枝。春色繞宮池。正愛紅繁處。還憐綠淨時。花香泛幽沚。媚影照淸漪。垂條看妓折。墮蕚見魚吹。杯涵明月瀉。舟逐彩霞移。水流花落盡。君王醉不知。

翫花池

桃枝と杏枝と、春色、宮池を繞る。
正に愛す紅繁きの處、還た憐む綠淨の時。
花香、幽沚に泛び、媚影、淸漪を照らす。
垂條、妓の折るを看、墮蕚、魚の吹くを見る。
杯は明月を涵して瀉ぎ、舟は彩霞を逐うて移る。
水流れて花落ち盡すも、君王醉うて知らず。

【字解】【一】紅繁　花が一ぱいに咲いたこと。【二】綠淨　新綠のさつぱりして居る貌。【三】幽沚　沚は汀岸。【四】媚影　なまめかしき花の影。【五】垂條　垂れた枝。【六】妓折　妓は宮女。【七】墮蕚　落花に同じ。

【題義】翫花池は、姑蘇志に「靈巖山に在り」としてある。すると、矢張、古しへの館娃宮の一名勝であつて、この詩も、矢張、懷古の意を寓してある。

【詩意】桃と杏と、一齊に咲き出で、賑はしき春色は、宮中の池を繞つて居る。紅繁き花の盛りは、もとより愛すべきも、さつぱりした新綠の時も、亦た可憐の趣がある。花の盛りの時は、その香が幽汀に浮び、なまめかしき影は、淸き漣波に映つて居る。やや末になると、垂れた枝は、宮女でも折つたものと思はれ、落花は、水に漾うて、魚が口で吹いて居る。游賞時を移し、杯には明月の影を涵しつつ酒をつぎ、舟は夕やけを逐うて移つて行く。榮華は、ひと時の眺めであるが、やがて水流れ花落ち盡すに至るも、君王は、醉うて知らず、春は長しへに在るものと思つて居られたらうが、それが、抑も間違つた了見であつた。

送高麗貢使還國

鳳闕層霄上。菟城積水東。大君方啓運。絕域盡朝宗。錫命分青土。趨班列紫宮。船歸瞻出日。帆挂候西風。雨露何沾渥。華夷已混同。聖心非悅貢。惟念遠人忠。

高麗貢使の國に還るを送る

鳳闕、層霄の上、菟城、積水の東。
大君、方に運を啓き、絕域、盡く朝宗。
命を錫うて青土を分ち、班に趨つて紫宮に列す。
船は歸つて出日を瞻、帆は挂つて西風を候す。
雨露、何ぞ沾渥、華夷、すでに混同。
聖心、貢を悅ぶに非ず、惟だ遠人の忠を念ふのみ。

【字解】【一】鳳闕　宮城を云ふ。【二】菟城　玄菟城の略、前に送二張子溫還一レ國の詩中に注して置いた。【三】積水　大海。【四】大君　大明の天子。【五】啓運　新に帝位に登りしこと。【六】分青土　前に封建親王の詩中に辨レ方分二社土一とあつた通り、

方角を辨別して、これに應ずる社土を賜はるので、高麗は東に當り、東は青色なるが故に、青土を賜はつたのである。【七】鵷班　百官の班列を追ふ。【八】紫宮　紫宸に同じ。【九】非悅貢　泳化類編に「上、中書省臣に諭して曰く、高麗の貢使煩數、一歲造に至る。宜しく三歲一聘、或は比年一聘せしむべし。貢物は、產布十疋にして足れり、丞相其れ朕の意を以て王に諭せ」とある。

【題義】この高麗貢使は、何といふ人か、又何年の事か分からないので、年譜にも書いてない。しかし、靑邱が都に居たのは、洪武二三年の間であるから、いづれ、その時分の事であらう。

【詩意】鳳闕は、巍峩として、層霄の上に聳え、玄菟城は、遙に隔つて、大海の東に在る。今しも、聖主は運を啓いて、新に卽位せられ、絕域の果までも、盡く朝宗した。そこで、高麗には、詔敕を賜はり、更めて王に封じ、東に當る處から、靑土を分ち賜はり、その使臣は、班を趁うて紫宸の朝見に參列した。やがて、船歸れば、出日を瞻るべく、帆は追手の西風を伺うて挂けることに成つて居る。聖恩は雨露の如くして、物を霑すこと厚く、華夷、すでに混同し、世界中、帝命に服さないものは無い。且つ天子の御心では、貢物を喜ばれるのではなく、唯だ遠人の忠順を奇特に思はれるのであるから、使臣も、宜しく此意を體して、國王に篤と傳へるが善からう。

【餘論】この詩の起首は、前の送張子溫還國の破題、丹鳳雲中闕、玄菟海外城と意象全く同じく、讀んで此に至ると、汁粉の後で、又牡丹餅を薦められる樣な氣がする。

韓蘄王墓

韓蘄王の墓

(一)宋室中興日。將軍武略(二)優。
宋室中興の日、將軍、武略優なり。

功宜超(三)賈鄧。名恥竝(四)張劉。
功は宜しく賈鄧に超ゆべく、名は張劉に竝ぶを恥づ。

(五)白馬空南渡。(六)黃龍竟北游。
白馬、空しく南渡、黃龍、竟に北游。

誓擒諸(七)部種。還報(八)兩宮讎。
誓つて諸部種を擒にし、還た兩宮の讎を報せむ。

朝使(九)頒金册。邊人識(一〇)錦裘。
朝使、金册を頒ち、邊人、錦裘を識る。

(一一)躍戈衝野陣。橫棹截(一二)江流。
戈を躍らして、野陣を衝き、棹を横へて、江流を截る。

(一三)殘虜亡魂走。中(一四)原指掌收。
殘虜、魂を亡うて走り、中原、掌を指して收む。

未終(一五)藩閫寄。已惑廟堂謀。
未だ藩閫の寄を終らず、すでに廟堂の謀を惑はしむ。

坐散(一六)熊羆士。甘臣(一七)犬豕酋。
坐ろに熊羆の士を散じ、甘んじて犬豕の酋に臣たり。

(一八)和戎詞易屈。(一九)復漢志難酬。
戎に和して、詞、屈し易く、漢を復す、志、酬い難し。

闕聳(二〇)吳山曉。陵荒(二一)鞏樹秋。
闕は聳ゆ吳山の曉、陵は荒る鞏樹の秋。

(二二)廉頗歸未老。(二三)郭令罷誰留。
廉頗、歸つて未だ老いず、郭令、罷めて誰か留めむ。

(二四)折檻言徒切。(二五)藏弓勢可憂。　檻を折つて、言、徒に切、弓を藏して、勢、憂ふべし。
俄看星(二六)隕壘。永使陸(二七)沈州。　俄に看る星の壘に隕つるを、永く陸をして州を沈めしむ。
感慨思前代。淒涼弔古丘。　感慨、前代を思ひ、淒涼、古丘を弔ふ。
劍花埋虎(二八)氣。碑蘚剝螭(二九)頭。　劍花、虎氣を埋め、碑蘚、螭頭を剝ぐ。
(三〇)石騎嘶風雨。山僧護檟(三一)楸。　石騎、風雨に嘶き、山僧、檟楸を護す。
鼓旗何寂寂。簡册漫悠悠。　鼓旗何ぞ寂寂たる、簡册漫に悠悠。
父老悲猶在。英雄事已休。　父老、悲、なほ在り、英雄、事、すでに休む。
(三二)棲霞嶺前墓。聞說更堪愁。　棲霞嶺前の墓、聞くならく、更に愁ふるに堪へたりと。

【字解】【一】宋室中興日　宋の高宗が南遷して臨安に都せしこと。【二】武略優　宋史韓世忠傳に「金人、劉豫と兵を合せて入侵す。世忠、親ら兵を提げて大儀に至り、遂に趙宇也を擒にし、復た親ら追うて淮に至る。金人、驚いて潰え、溺死甚だ衆し。捷聞す。論者、この擧を以て、中興の武功第一と爲す」とある。【三】超賈鄧　後漢書に「永平中、顯宗、前世の功臣を追感し、乃ち鄧禹・賈復等二十八將を南宮の雲臺に圖畫す」とある。【四】竝張劉　宋史に「南渡の名將、張俊・韓世忠・劉錡・岳飛、四人竝び稱す」とある。【五】白馬空南渡　晉書元帝紀に「太安の際の童謠に云ふ、五馬浮渡江、一馬化爲龍と。永嘉中に及び、帝、西陽・汝南・南頓・彭城と、五王濟るを得たり。而して、帝、竟に大位に登る」とあり、稗史に「康王、金に質たり、太子と同じく射り、三矢皆中つ。金の太子、宗室、武藝に長ずるものを選んで質となし、これを留むること益なきを意ふ。故に、高宗、これに由つて逸するを得、間道より奔竄し、崔府君の廟に假寐す。夢に神人曰く、金人、追うて且さに至らむとす、馬を門首に備ふ、王、宜しく亟に行くべしと。康王驚いて覺め、躍して南に馳すること七百里、すでに河を渡つて、馬前まず、これを視れば泥馬なり」とあり、張書の行宮の詩に登知白馬興王日、又到紅羊換劫年とある。【六】黄龍寛北游　金人は徽欽二帝を挾んで北に之き、はじめ、これを黄龍府に置いた。後に、岳飛が直に黄龍府に抵つて、諸君と痛飲せむのみといつたのも、この地であつて、宋史の注には、遼東開元城外とある。この開元は即ち今の開原、又吉林附近だらうといふ說もある。楊子承の詩に玉簫吹暖錢塘月、誰念黄龍憶暮笳とある。【七】諸部種　金人は、元と滿洲のツングス族で、はじめ諸部落が聚まつて、それから盛大になつた。【八】兩宮讐　徽欽二帝の讐。宋史韓世忠傳に「兀朮、窮蹙して會語を求む。世忠曰く、わが兩宮を還し、わが疆土を復さば、庶はくは相全うすべし」とある。【九】頌金册　その功を賞して、大官に拜せられしこと。韓世忠傳に「世忠の兵、わづかに八千餘、金人十萬を拒ぐ、帝、凡そ六たび札を賜ひ、褒奬して檢校少保に拜す」とある。【一〇】識錦衣　韓世忠傳に「世忠、淮陽を圍む、堅守して下らず。はじめ、金人約するに圍を受くること一日なれば、一烽を擧ぐるを以てす。ここに至つて、六烽、ともに擧がる。兀朮、劉猊と皆至る。世忠、援を張俊に求む。俊、從はず、乃ち陣を勒して、敵に向ひ、人を遣して語らしめて曰く、錦衣驄馬、陣前に立つものは韓相公なり、と。或は之を危む。對へて曰く、かくの如くならざれば、以て敵を致すに足らずと。敵、果して至る。その驍騎二人を殺して、遂に引き去る」とある。【一一】躍戈　韓世忠傳に「賊將苗翊・馬柔吉、山を負ひ、河を阻つて陣す。軍、すこしく却く。世忠、馬を捨て、戈を操つて前み、目を瞋らして大呼し、刃を挺して突き前む、賊、辟易して遂に敗る」とある。【一二】截江流　韓世忠傳に「金、すでに建康を得、廣德より臨安を破らむとす。世忠、金人の歸師を截らむことを謀り、前軍を以て青龍鎭に駐め、中軍は江灣に駐まり、後軍は海口に駐まる。金兵、至れば、世忠、すでに焦山寺に屯す。兀朮、日を約して、大に戰ふ。梁夫人、親ら桴鼓を執り、數十合に至る。金兵、終に渡るを得ず。盡く掠むるところを歸して、道を假らむことを請ふ、許さず。名馬を獻ぜむことを請ふ、又許さず。撻辣、濰州に在り、孛菫、太一を遣して來り援けしめ、黄天蕩に相持すること四十八日。孛菫、江北に軍し、兀朮、江南に軍す。世忠、海艦を以て進んで金山に泊し、健卒に授くるに鐵綆を以てし、大鉤を貫く、敵舟譟いで前む。海舟、兩道に分れて、その背に出で、一綆を縋する

毎に、すなはち一舟を曳いて之を沈む」とある。【一三】殘虜亡魂走　韓世忠傳に「兀朮、世忠の上流に在り、ひそかに半夜に於て媽を鑿つこと三十里。次日風止み、小舟に乘じ、江を絶つて遁れ去るを得たり。これより先、世忠、敵至らば、必ず金山廟に登つて、わが虛實を覘むことを料り、預め百兵を遣して廟中に伏し、百兵は岸側に伏し、鼓聲を聞いて內外合擊するを約す。果して、五騎あり、闖入す、伏發す、わづかに二人を得、その三を逸す、中に綈袍玉帶、馬より墜ちて復た騎するものあり、これを詰れば卽ち兀朮なり」とある。【一四】中原指掌收　中原を回復することは、掌を指すが如く確實である。【一五】落閫寄　落は落屛、閫は閫外。寄は寄託。つまり兵權を授かつて外敵を防ぐといふ重任。韓世忠傳に「秦檜、三大將を收め、權りに樞密使に拜す。公、進疏して兵柄を解かむことを乞ひ、罷めて、醴泉觀察使となる」とある。【一六】熊羆士　書經に「熊の如く、羆の如し」とあつて、部下の猛士を云ふ。【一七】犬豕爺　犬豕に比すべき變爺、卽ち金主を云ふ。【一八】和戎　杜甫の詩に魏絳已和ν戎とある。金人と和を講ずること。【一九】復漢　曾鞏の隆中の詩に垂ν成中興餘、復ν漢臨ニ秦川一とある。【二〇】吳山　方輿勝覽に「吳山は、錢塘縣南に在り、上に伍子胥の廟あり、命じて胥山といふ」とあつて、金の海陵王が移ν兵百萬西湖上、立ν馬吳山第一峰といつたのも、この地を臆想したのである。【二一】寒樹　一統志に「寒縣は、河南府に屬す、周の寒伯の邑、宋の太祖の昌陵・太宗の熙陵・眞宗の定陵・仁宗の昭陵、皆在り」と見ゆ。【二二】廉頗　史記廉頗傳に「趙の使者、すでに廉頗を見る、頗、これが爲に一飯に斗米肉十斤、甲を被り、馬に上り、以て尙ほ用ふべきを示す。趙の使、還つて王に報じて曰く、廉將軍、老いたりと雖も、尙ほ善く飯す」とある。令檜の按に「蘄王、紹興二十一年八月に薨ず、年六十三。紹興十一年に罷め、年五十三。これより、門を杜ぢ、客を謝して口を絕つて兵を言はず。時に驢に跨り、酒を攜へ、一二の奚童を從へ、西湖に縱遊して、以て自ら樂み、澹然未だ權位あらざるものの若く、平時は、將佐その面を見ること罕なり」とある。【二三】郭令　通鑑に「肅宗乾元二年、郭子儀、東畿等道元帥となる。魚朝恩、子儀を惡み、相州の潰に因つて、これを上に短す。召し還し、李光弼を以て之に代はらしむ。はじめ、子儀の召さるるや、士卒涕泣、中使を遮つて留まらむことを請ふ。子儀、これを紿いて曰く、われ中使を餞するのみ、と。因つて、馬を躍らして去る」とある。【二四】折檻　漢書朱雲傳に「雲曰く、願はくは、尙方の斬馬劍を賜はり、佞臣一人の頭を斷ち、以て其餘を厲まさむと。上問ふ、誰ぞ。對へて曰く、張禹と。上怒る。御史雲を將ゐて下る。雲、殿檻を攀づ、檻折る、曰く、臣、龍逢比干に從つて地下に游ぶことを得れば足れり」とあり、宋名臣言行錄に「王、すでに和議を主とせず、又切諫して以へらく、中原の豪傑、頸を延べて以て弔伐を待たざるなし、もし、これより與に和すれば、人情解弛、國勢委靡、誰か復た之を振はむと。再び上章して、秦檜の國を誤るを陳し、辭意剴切」とあり、韓世忠傳に「會ま、檜命じて、山陽を棄てて屯を鎭江に移さしむ。世忠奏す、金人詭詐、恐らくは計を以て我が師を緩うせむ、乞ふ、この軍を留めて江淮を遮蔽せむと。又言ふ、王倫・藍公佐、河南北界を交割す、乞ふ、明かに反覆なきの文狀を具せしめ、以て後證と爲さむと。章凡そ十數上る、皆慷慨激切、帝率ね優詔褒荅、然れども、用ふる能はず、後、果して其言の如し」とある。【二五】藏弓　史記淮陰侯傳に「狡兎死して走狗烹られ、高鳥盡きて良弓藏し、敵國破れて謀臣亡ぶ」とある。【二六】星隕營　晉書陽秋に諸葛亮の死を記して「星あり、赤くして芒角、東北より西南に流れ、亮の營に投じ、三投三還、往いて大、還つて小、俄にして亮卒す」とある。【二七】陸沈州　晉書桓溫傳に「溫、淮泗を過ぎ、北境を踐み、諸僚屬と平乘樓に登り、中原を望んで嘆じて曰く、遂に神州をして陸沈し、百年邱墟たらしむ、王夷甫諸人、その責に任ぜざるを得ず」とある。陸沈は、本と莊子の則陽に見え、是陸沈者也とあつて、その注に「水なくして沈むが如きなり」とある。【二八】虎氣　吳越春秋に虎邱を記して「闔閭、ここに葬り、扁諸魚腸の劍各三千を以て殉と爲す、葬えて三日、金精結んで白虎となり、その上に踞す」とある。【二九】螭頭　螭は龍の屬、石碑に龍の頭を彫刻してある。【三〇】石騎　卽ち石馬。【三一】檟楸　檟は邦訓ひさぎ、楸の類、墓上に植ゑる木。【三二】棲霞嶺前墓　一統志に「岳武穆の墓は、杭州棲霞嶺下に在り。宋の高宗の時、飛、慨然として中原を恢復するの志あり、卒に秦檜に中てられ、死して此に葬る、今、その墓上の木枝、皆南向す、識者、その忠義の感ずるところといふ」とある。

【題義】韓蘄王は卽ち韓世忠、岳飛と竝び稱せられた南宋の名臣である。飛は、秦檜に中てられて獄死したが、世忠は早く禍を避け、幸に其生を全うした。世忠の傳は、字解に分說してあるから、ここに、述べる必要は無からう。なほ題下の原注に「靈巖山の西麓に在り、穹碑在るあり」と見え、姑

蘄志に「紹興二十一年、王薨ず、賻祭極めて優渥、徐伸をして葬を護し、縣令をして役を執らしむ、御題神道碑に云ふ、中興佐命定國元勳之碑と。碑の高さ十餘丈」とある。靈巖山は、例の館娃宮址で、青邱の數ば游んだ處であるから、ある時、序に此墓を弔つたものと見える。

【詩意】宋室、南に遷り、高宗が中興の業を爲せし時に當つて、將軍は、武略の優絶なるを以て、特に世に知られ、その功は、古しへの買復・鄧禹に超ゆべく、その名は、同時の張俊・劉錡と竝び稱せらるるを恥とする位。おもへば、高宗の南遷は、丁度、むかし東晉の元帝が、五馬渡江の童謠に應じたと同じであるか、徽欽二帝は、遠く、北、黃龍府に移されて仕舞つて、まことに、憤慨に堪へられぬ始末であつた。そこで、將軍は、諸部の蕃族より成れる金人を擒にし、併せて、二帝の讎を報せむことを心に誓ひ、數ば大功を建てしに因り、朝使來り臨んで、金冊を頒ち賜はり、邊人は、錦衣驄馬、陣頭に立てる其英姿を見知つて居た。ある時は、陣前に戈を揮つて、野を狹しと構へたる敵陣を衝き、ある時は、小舟に乘つて、江流を斷ち切り、兀朮といふ敵將などは、命からがら魂を失つて逃げ走り、この分では、中原を囘復することも、掌を指して、屹度間違もないといふ位であつた。しかし、不幸にも、將軍は兵權を託せられた重任を未だ果さないのに、廟堂の上に於ては、和議に惑ひ、その極、遺憾ながら、熊羆の如き猛卒を解散し、そして、犬豕の樣な蠻族の酋長に臣たることを甘んずる樣に成つた。本來、戎に和する上は、その辭令が兎角卑屈になり易く、かう成つては、前朝の社稷を克復するといふ夙志も、到底酬いられない。高宗、すでに蹕を臨安に駐め、宮闕巍峨として、吳山の曉に聳ゆる景色は、いかにも見事であるが、鞏縣に在る祖宗の陵墓は荒廢して、樹聲秋にさびしく、まことに情ない始末。將軍は、廉頗の如く、歸臥しても、身、未だ老いず、その晩年は、郭子儀が職を罷めた時の如くであつたが、さて、誰が引き留めやうとしたか。時には、古しへの朱雲の如く、檻を折つて切諫したけれども、格別の效果もなく、高鳥盡きて良弓藏すといふ樣な形勢に成つたのは、まことに、憂ふべきことであつた。俄にして、大星、營中に落ちて、將軍、遂に病死し、長しへに、神州をして陸沈するに至らしめた。ここに、前代の事を囘想すれば、感慨自ら堪へず、古邱を弔へば、淒涼いや增すを覺える。劍を埋めて、虎氣わづかに存し、碑面の龍の彫刻は、苔を剝いで、やつと分かる位、石馬は、風雨に嘶き、山僧は、殊勝にも墓の御守りをして居る。鼓旗寂寂として、その跡、すでに遠く、事蹟は、簡冊に載せてあるが、歲月悠悠として、兎角、湮滅を免れない。父老の悲は、なほ依然たれども、英雄、事、すでに休み、この人は、復た起すことが出來ない。聞けば、棲霞嶺なる岳飛の墓は、一しほ愁恨を催すといふが、それに較べると、將軍は、兎に角、身を全うして死んだのであるから、聊か慰むるところもあらうと思はれる。

【餘論】この詩は、青邱の排律中、第一の傑作であつて、その內容が既に面白いのみならず、文字も亦た洗鍊を經て居る。起首より還報二兩宮讎一に至る八句は、蘄王の出身、朝使頒二金冊一より中原指レ掌

收に至る六句は、その戰功、未レ終二落圖寄一より永使二陸沈レ州に至る十四句は、その隱退及び晩年、感慨思二前代一より結尾に至る十二句は、墓上の光景、竝に感想を寫し、段落整然として、層層遞下し、讀者をして、その人と爲りを冥想せしめるのは、取りも直さず、描寫の妙で、青邱の長所は、實に此に在ることと思はれる。

石井泉

清泉生二石脈一(一)。冷逼(二)煮レ茶亭。
淨映二銀牀色一。明開二玉鑑(三)形一。
分レ秋歸二客鼎一。汲レ月貯二僧缾一。
樹影沈レ泓碧(四)。苔文漬レ壁清。
熱中嘗可レ滌。醉後漱堪レ醒。
品第宜レ居レ首。誰修舊水經(五)。

石井泉

清泉、石脈に生じ、冷は逼る茶を煮るの亭。
淨は銀牀の色に映じ、明は玉鑑の形を開く。
秋を分つて客鼎に歸し、月を汲んで僧缾に貯ふ。
樹影、泓に沈んで碧に、苔文、壁を漬して淸し。
熱中、かつて滌ふべく、醉後、漱いで醒むるに堪へたり。
品第、宜しく首に居るべし、誰か修せむ舊水經。

【字解】【一】石脈　石の割れ目。【二】冷逼　冷氣が來り逼る。【三】玉鑑　鏡を云ふ、路鐸の詩に平分玉鑑漁村晩とある。【四】沈泓碧　泓は池。【五】舊水經　水經は桑欽の撰で、後に酈道元が其註を作つた。

【題義】題下の原注に「虎邱山に在り、四面石壁天成、張又新、品して第三泉と爲す」とあり、蘇州府志に「石井泉は、俗に觀音泉と名づく」とあり、虎邱志に「陸羽の石井は、劍池の旁、經藏の後に在り。大石井、面の濶さ丈餘、嵌巖自然、上に石轆轤あり、泉、石脈中より出で、甘冷、劍池に勝れり、屋を作つて之を覆ひ、別に亭を井旁に爲り、茶を烹て宴坐するの所となす」とある。

【詩意】淸泉は、石の割れ目から湧き出で、冷氣は、茶を煮る亭子に逼る位。その泉の淸澈なるは、亭中なる銀牀の色に映じ、その明瑩なるは、鏡の形を開いた樣である。秋の滋味を分つて客鼎に歸せしめ、うつる月影を併せ汲んで、僧缾に貯へる。木の影は、池に沈んで愈よ碧であるし、苔の斑紋は、壁に沁み込んで、更に淸きを覺える。心中熱する時、これを嘗むれば、塵俗を洗ふべく、醉後、これで口を漱ぐと、酒を醒ますことが出來る。これを品第すれば、第三位どころか、宜しく第一位に置くべきもので、誰が、古しへの水經を增修して、その事を書き入れるであらうか。

焚レ香

艾蒳(一)山中品。都夷(二)海外芬。
龍洲(三)傳二舊採一。燕室(四)試二初焚一。

香を焚く

艾蒳、山中の品、都夷、海外の芬。
龍洲、舊採を傳へ、燕室、初焚を試む。

(五)奩印灰縈字。(六)爐呈玉鏤文。
(七)乍飄猶奄冉。將斷更(八)氤氳。
薄散春江霧。輕飛曉峽雲。
銷遲(九)憑宿火。度遠託微薰。
著物元無跡。游空忽有紋。
(一〇)天絲垂裊裊。池浪動沄沄。
異馥(一一)來千和。(一二)祥霏却(一三)衆葷。
(一四)燈灺宵同歇。茶煙午共紛。
嵐光風卷碎。花氣日蒸醺。
褰帷嫌(一五)放早。引(一六)匕記添勤。
梧影吟成見。(一七)鳩聲夢覺聞。
方傳(一八)媚寢法。靈著(一九)辟邪勳。
小閣清秋雨。低簾薄(二〇)晚曛。

奩は印す灰縈の字、爐は呈す玉鏤の文。
乍ち飄つて、猶ほ奄冉、將に斷えむとして、更に氤氳。
薄く散す春江の霧、輕く飛ぶ曉峽の雲。
銷ゆること遲くして宿火に憑り、度ること遠くして微薰に託す。
物に著いて元と跡なく、空に游んで忽ち紋あり。
天絲垂れて裊裊、池浪動いて沄沄。
異馥、千和を來たし、祥霏、衆葷を却く。
燈灺、宵、同じく歇み、茶煙、午、共に紛たり。
嵐光、風、卷き碎き、花氣、日、蒸して醺ず。
帷を褰げて放つこと早きを嫌ひ、匕を引いて添ふの勤めたるを記す。
梧影、吟成つて見え、鳩聲、夢覺めて聞く。
方は傳ふ媚寢の法、靈は著く辟邪の勳。
小閣清秋の雨、低簾薄晚の曛。

情慙(二一)韓掾染。恩記(二二)魏王分。
宴客留(二三)鴛侶。招(二四)仙降(二五)鶴羣。
曾攜(二六)朝罷袖。尙浥舞時裙。
囊稱(二七)縫羅佩。(二八)篝宜覆錦熏。
畫堂空(二九)擣桂。素壁漫(三〇)塗芸。
本欲參(三一)童子。何須學(三二)令君。
忘言深坐處。(三三)端此謝塵氛。

情は慙づ韓掾の染むるを、恩は記す魏王の分つを。
客を宴して鴛侶を留め、仙を招いて鶴羣を降す。
かつて朝罷の袖を攜へ、尙ほ舞時の裙を浥す。
囊は羅佩を縫ふに稱ひ、篝は錦熏を覆ふに宜し。
畫堂、空しく桂を擣き、素壁、漫に芸を塗る。
本と童子に參せむと欲す、何ぞ令君を學ぶを須ひむ。
言を忘れて深坐する處、端に此に塵氛を謝す。

【字解】【一】艾蒳　法苑珠林に三種香として、一都梁、二霍香、三艾蒳香を擧げてある。艾は和訓よもぎ、山に自生する一種の草、葉は菊に似て、五つに裂け、裏は白くして毛を生ず。蒳は花粉。よもぎの花粉で香を造ると見える。【二】都夷　洞冥記に「都夷香は、棗核の如し、一片を食へば、月を歷るも飢ゑず」とある。【三】龍洲　香譜に「龍涎、香品の中に于て最も貴重、大食國の海傍に出づ、龍氣あり、山間を蟠むれば、その下、龍の蟠臥するあり、土人更る〻相守り、雲散じ龍去るを覗て、往いて採れば、その遺蕊を得べし、多きも百兩に過ぎず」とある。【四】燕室　晏居の室。【五】奩印　奩は香箱、その箱の蓋に灰が落ちて字の形をなす。【六】爐呈　爐は香爐。【七】奄冉　陸游の詩に藤花奄冉香とあつて、匂ひの細い貌。【八】氤氳　匂ひの斷えざる貌。【九】宿火　持ち越しの火。【一〇】天絲　かげろふ。【一一】千和　香譜に「峨嵋山の孫眞人、千和の香を然やす」とあつて、さまざまの料を混和すること。【一二】祥霏　目出たき煙。【一三】衆葷　留雅翼に「西方は大蒜・小蒜・興渠・慈葱・茖葱を以て五葷となし、道家は韭・蒜・芸薹・胡荽・薤を以て五葷となす」とある。【一四】燈灺　燈火の燃えかす。【一五】放早　放は外面に散ぜしむること、香譜に「吳行止仲、

從官となり、蔡京に見ゆ。京、女童に諭して、香を焚かしむ。これに久しうして、至らず。すでにして、香滿つるを報ず。蔡、はじめて簾を捲けば、香氣他室より出づるを見る、藹藹として雲霧の若し、座客幾んど相覩ず、しかも、煙火の烈なし、すでに歸れば、衣冠芬馥」とある。【二六】添勤　怠らず香を爐中に添へる。【二七】鳩翠　陸游の詩に扇墮巾敧午夢回、鳴鳩又喚雨蘇來とある。【二八】鈿簾　拾遺記に「吳の孫亮、寵姬四人あり、四氣香を合す、皆殊方獻ずるところ、凡そ踐履安息の處を經れば、香氣衣を霑し、年を經るも歇まず、名づけて百濯といひ、復た其室を目して思香媚寢といふ」とある。【二九】辟邪　瑞應圖に「天漢二年、月支國、神香を貢す、凡そ三枚、狀、燕卵の如く、大さ棗の如し。帝、以て外庫に付す。後、長安大疫、宮人病を得るもの多し、使者、請うて香一枚を燒き、以て疫氣を辟く、帝、これを然りとす、宮中の病者、皆起ち、香百里に聞こゆ」とあり、杜陽雜編に「同昌公主、出でて降るや、七寶步輦に乘じ、四面に五色の香囊を綴る。囊中の辟寒香・辟邪香・瑞麟香・金鳳香は、異國獻ずるところなり」とある。【三〇】薄晚曛　薄晚は薄暮、曛は夕日。【三一】韓掾染　晉書賈充傳に「韓壽、姿貌に美なり、充の女、見て悅び、ひそかに香好を通ず。時に、西域、奇香を貢す、一たび人に著けば、月を經るも歇まず、帝、惟だ充に賜ふ、充の女、密に盜んで、以て壽に遺る」とある。【三二】魏王分　陸機の弔魏武帝文の序に「魏の武帝、遺令して云ふ、餘香は分つて諸夫人に與へよ、諸舍中、爲すところなければ、履組を作るを學んで賣れ」とある。【三三】鵷侶　鵷は鶯、朝官の行列、その整然たることが、鴛鴦や鷺の行列に似たるより云ふ。【三四】招仙　洞冥記に「武帝、招仙閣を起し、上に荼蘼香を燒く、燒くこと、粟ばかり、その氣、三月絕えず」とある。【三五】降鶴羣　同じく洞冥記に「降眞香は、黔南に出づ、その煙、直上、能く仙靈を感ず、鶴を召して來り降らしむ」とある。【三六】朝裾袖　杜甫の詩に朝罷香煙攜滿袖とある。【三七】藏羅佩　前に戲嬰圖の中にも引いて置いたが、謝幼度が少にして紫羅の香囊を佩びしことをいふ。【三八】篝宣覆錦濕　篝は竹籠の如きもので、これに錦の衣を被せて、中から燻ずると、すつかり香を焚きこめることが出來るといふ意。楊維楨の詩に幾團錦被熨香篝とある。【三九】擣桂　肉桂を擣く、東坡の詩に擣殘椒桂有餘辛とある。【四〇】薝芸　芸は草の名、初夏の頃、黃花を著く。普通書物の中に入れて蟲を防ぐ。杜陽雜編に「元載、芸輝堂を私第に造る。芸輝は、香草の名なり、于闐に出づ、その香、潔白玉の如し、土に入つて朽爛せず、これを舂いて屑となし、以て其壁に塗る、故に芸輝堂と號す」とある。【四一】童子　洞仙傳に「童子先生は、狄山に于て道を學び、契鈴經を修治して仙を得たり」とある。【四二】令君　襄陽記に「劉季和、性、香を愛す。かつて、廁に如き、還つて輒ち香爐の上を過ぐ。主簿張坦曰く、人、公を名づけて俗人と作す、虛しからざるなり。季和曰く、荀令君、人家に至れば、坐席、三日香し。われ、令君に如何と謂ふ。坦曰く、醜婦、顰に效ふ、見るもの必ず走る、公、坦をして遁れ去らしめむと欲するかと。季和、大に笑ふ」とある。【四三】端此　端は正にの意。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】均しく香といふものの、さまざまの品目があつて、艾の花粉を固めたものは山中の佳品、都夷と稱するは海外の名香である。むかし、龍洲に於て、龍涎を采取して造つたものもあつたといふが、いづれも、閒居の小室に於て、これを焚くと、その妙味が分かる。その燃えた跡には、灰が殘つて、香箱の中に於ては、字の形をなし、爐中に於ては、かてて加へて玉を鏤めた樣に見える。その煙の乍ち飄る時は、奄冉として匂が細く、將に盡きむとする頃は、一しほ高くかをる。その薄きは、春、江上の霧を散じたるが如く、その輕きは、曉、峽中の雲を飛ばした樣である。消ゆることの遲きは、爐中に火が殘つて居たからであるし、度ること遠くして、かすかなる匂を送るのは、一しほ風情がある。その煙は、物に附著した處で、もとより跡なく、空中に舞ひ上つても、なほ紋を畫き、たとへば、かげろふの裊裊として垂るるが如く、池の小波の沄沄として動くが如くである。えならぬ香は、さまざまの物を混ぜたに因つて著しく、目出たき煙は、多くの葷氣を退けることが出來る。たとへば、嵐光の風に卷かれて碎くるが如く、花氣の日に蒸されて匂ふが如く、宵には、燈火の燃えかすと共に斷え、晝

には、茶煙と共に紛飛して居る。戸ばりを褰げては、これを外に放ち去らしむることの早きを嫌ひ、匕を手にしては、怠らず爐中に添へる。その香を焚く室中に在つて、吟成れば、梧桐の影が見はれ、夢覺めては、鳩の聲が聞こえる。その調合の處方の一としては、媚寢の術があるし、最も靈驗あるは、名にしおふ辟邪の效果である。清秋、小閣に雨ふるとき、日暮、低簾に夕日うつろふ折から、この香てふ物があれば、一しほ趣を添へる。それから、韓壽は、賈充の女からの移り香を有り難がり、銅臺の宮女は、武帝の形見として分ち賜はつた其恩を記憶して居る。これさへあれば、客を宴する時にも、鵷侶の朝臣を引き留めることも出來るし、仙を招いては、鶴の羣をして來り降らしめることも、何の造作もない。退朝する時に、自然、その煙が袖の中に入ることもあるし、筵上に舞を爲せし女の裙を溼して、その香を留めて居ることもある。これを嚢にするには、紫の羅で縫つて腰佩が相應しく、竹籠の下で焚けば、上に被せた錦の衣に焚き込めることが出來る。畫堂に於て肉桂を擣くのは、辛味を添へる爲であるし、白壁に芸草を塗り込むのは、蟲を防ぐ爲であつて、すべて實用の意味に本づいたのであるから、格別、趣味がある譯ではなく、とても、香と比較することは出來ぬ。もと之を焚くのは、童子先生の如き有德の仙人の處に參入したいからであつて、荀令君が坐れば坐席が三日も香ばしいといふ樣な洒落の爲めではない。そこで、香の煙の匂ふ處に、おつちりと坐して、言を忘るる位になると、まさしく、浮世の塵氛に遠ざかつて、心に何の屈託もない樣であつて、これこそ、焚香の最も著しき功能である。

【餘論】これを文章にすれば、香譜といつた樣なもので、香に關する古來の典故を雜陳し、且つ剪裁したので、一貫した特殊の構想に本づいたものではない。大家集中、宜しく一あるべく、決して、二あるべからざるものと考へるが如何か。

詠夢

夢を詠ず

（一）的的緣愁得。（二）濛濛與醉和。
的的、愁に緣つて得、濛濛、醉と和す。

輕隨雲（三）浩蕩。暗越嶺嵯峨。
輕く雲の浩蕩たるに隨ひ、暗に嶺の嵯峨たるを越ゆ。

夜店嗟偏短。春閨想最多。
夜店、偏に短きを嗟し、春閨、最も多きを想ふ。

關山歸（四）識路。江渚去（五）淩波。
關山、歸つて路を識り、江渚、去つて波を淩ぐ。

梁落（六）中宵月。樓橫（七）欲曙河。
梁には落つ中宵の月、樓には橫ふ曙ならむと欲するの河。

隔簾休（八）警鶴。近燭任（九）飛蛾。
簾を隔てて警鶴を休ましめ、燭に近くして飛蛾に任かす。

游遠寧煩載。穿深豈畏訶。
游遠くして、寧ろ載するを煩はさむや、穿つこと深くして豈に訶を畏れむや。

寒驚瑤作障。暖戀錦(一〇)成窩。　寒驚いて、瑤、障を作し、暖戀うて、錦、窩を成す。

(一一)蝴蝶誰家信。(一二)鴛鴦別浦歌。　蝴蝶、誰が家の信、鴛鴦、別浦の歌。

靜嫌風動竹。鬧怯雨鳴荷。　靜は嫌ふ風の竹を動かすを、鬧は怯る雨の荷を鳴らすを。

寂歷(一三)窓扃紙。低遲帳捲羅。　寂歷、窓、紙を扃ぢ、低遲、帳、羅を捲く。

知情(一四)唯枕共。送恨(一五)忽鐘過。　情を知つて唯だ枕と共にし、恨を送つて忽ち鐘過ぐ。

(一六)縞袂香猶在。(一七)朱絃字不磨。　縞袂、香、猶ほ在り、朱絃、字、磨せず。

記來還彷彿。尋去已蹉跎。　記し來つて、還た彷彿、尋ね去つて、已に蹉跎たり。

宿燼芬餘爵。殘妝暈(一八)淺螺。　宿燼、餘爵芬たり、殘妝、淺螺を暈す。

憂歡情(一九)總幻。離合事皆訛。　憂歡、情、すべて幻、離合、事皆訛。

(二〇)池上吟芳草。(二一)庭前覓舊柯。　池上、芳草を吟じ、庭前、舊柯を覓む。

既因(二二)思是種。復念(二三)睡爲魔。　すでに思は是れ種なるに因る、復た念ふ睡は魔たるを。

易斷俄如此。難憑竟若何。　斷え易くして俄に此の如し、憑り難くして竟に若何。

(二四)陽臺莫重問。千古笑(二五)巫娥。　陽臺重ねて問ふ莫れ、千古、巫娥を笑ふ。

【字解】【一】的的　分明の貌。【二】濛濛　ほの暗き貌。【三】浩蕩　のび廣がる貌。【四】識路　路を見分ける。【五】凌波　曹植の洛神賦に凌波微歩、羅襪生塵とある。【六】中宵月　杜甫の夢李白の詩に屋梁看落月、猶疑照顏色とある。【七】欲曙河　河は銀河、白居易の長恨歌に耿耿星河欲曙天とある。【八】警鶴　風土記に「白鶴、善く警む。八月、白露降つて、草葉に流れ、滴滴聲あれば、卽ち鳴く」とある。【九】飛蛾　古今注に「飛蛾、善く燈を拂ふ、一名火化、一名慕光」とある。【一〇】錦成窩　窩は、穴が本義であるが、ここでは夜具、その穴の樣になつて居る處から云つたものと見える。【一一】蝴蝶　莊子に「昔者、莊周、夢に蝴蝶となる、栩栩然として蝶なり」とある。【一二】鴛鴦　李賀の詩に好作鴛鴦夢、南城罷擣砧とある。【一三】窓扃紙　紙窓を鎖す。【一四】唯枕共　枕中記に「道士呂翁、神仙の術を得たり、邯鄲に遊ぶ。道中、少年盧生に遇ひ、囊中の枕を以て之に授く。生、枕して夢む、一生の榮辱、備さに歷、欠伸して寤むれば、黃粱尙ほ未だ熟さざるなり」とある。【一五】忽鐘過　元稹の詩に、娃見總起鐘聲動、二十年前曉寺情とある。【一六】縞袂　趙師雄が羅浮に於て梅花の精と思はるる美人に遇ひしこと、前に卷九、梅雪軒の詩中に見ゆ。【一七】朱絃字不磨　太平廣記に「李生といふもの、その男は盧、道術あり、李生に謂つて曰く、箜篌を善くするものを求め得て、飲に侍せしめむ、と。生、箜篌を見る、上に朱字あり、云ふ、雲中辨江樹、天際識歸舟と。後、李生、陸長源の女を娶る、乃ち舅家に見たるところのもの。問ふ、何の能かある。曰く、箜篌を善くすと。取つて之を視れば、朱字、宛然たり」とあり、東坡の聽琵琶の詩に夢回只記歸舟字、賦罷雙垂紫錦條とある。【一八】暈淺螺　螺は、その甲殼を潰して眉黛とするので、その痕が薄くぼかしに成つて殘つて居る。【一九】情總幻　金剛經に一切有爲法、如夢幻泡影とある。【二〇】池上吟芳草　前に卷十二、答宗人廉の詩中にも引いて置いたが、南史謝惠連傳に「惠連十歲、能く文を屬す、族兄靈運、これを嘉賞して云ふ、篇章ある每に、惠連に對すれば、輒ち佳句を得と。かつて、永嘉の西堂に於て、詩を思ふ、竟日就らず、忽ち夢に惠連を見、すなはち池塘生春草の句を得、大に以て工と爲す」とある。【二一】庭前覓舊柯　異聞錄に「淳于棼、槐下に飲み、醉うて歸り、臥して夢む。二使曰く、槐安國、邀へ奉ると。古槐を指して穴中に入る、大槐安國といふ。王曰く、南柯郡、理まらず、卿を屈して守となす、と。累日郡に涖す。寤むるに及びて、大槐下の穴を尋ぬれば、明朗にして一榻を容るべし、一大蟻あり、乃ち王なり、一穴、直に南枝に入る、卽ち

南柯郡」とある。【三一】思是種　周禮に「蟹人夢を掌る、三に曰く思夢」とあり、張泌の詩に幽窓殘結相思夢、欲レ化ニ西園蝶ニ未レ成とある。【三二】睡鴛帳　傳燈錄に「秀師曰く、ここに山林木怪なし、睡、翻つて魔と作るなり」とある。【三三】陽臺　前に卷一、巫山高の詩中にも引いて置いたが、宋玉の高唐賦に「昔者、先王、かつて高唐に游び、怠つて晝寢ぬ。夢に一婦人を見る。曰く、妾は巫山の女なり、高唐の客となる、君が高唐に游ぶを聞く、願はくは、枕席を薦めむ、と。王、因つて之を幸す。去つて辭して曰く、妾は、巫山の陽、高丘の岨に在り、且に朝雲となり、暮に行雨となる、朝朝暮暮、陽臺の下と。且朝、これを視るに言の如し、故に爲に廟を立て、號して朝雲といふ」とあり、襄陽耆舊傳に「赤帝の女姚姫、未だ行かずして卒す、巫山の陽に葬る、故に巫山の女といふ。楚の懷王、高唐に游んで、晝、寢ね、夢に神と遇ふを見る、自ら是れ巫山の女なりと稱す。王、因つて之を幸し、遂に觀を巫山の南に置き、號して朝雲といふ」とある。【三四】巫娥　即ち巫山の女。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】的的とはつきりした夢は、愁に由つて得たのであるし、濛濛とぼんやりした夢は、醉つた揚句に見たものである。輕きは、雲の浩蕩たるに隨つて飛び、暗きは、嵯峨たる山を幾つ越えても知らずに居る。夜、客舍に於て見る夢は、偏に短くして醒め易く、春、閨中に於て見る夢は、最も多い樣に想はれる。夢の中では、關山を過ぎて故鄕に還るに當り、容易に其路を識別し、江岸に至つて波を凌ぐことも、何の造作もない。夢の醒むるに際して、屋梁の上には、夜半の月が落ちかかり、樓頭には、銀河さえざえとして曉近く成りかけて居る。簾を隔てて、白鶴の寒を警むるは止めて貰ひたく、燈火の邊に飛蛾の來り聚まるのは勝手である。夢中、遠くに游んだ處で、車に載せられる世話もないし、人家の奧深く入つた處で、叱られる氣遣もない。寒氣に驚いては、見事な屛障を匝らし、暖か味を戀うては、錦の夜具の中に潛り込む。夢に蝴蝶となつたのは、誰の事とも知らず、鴛鴦となつては、別浦の歌その儘である。折角夢を見て居る時は、風が靜に竹を動かすをも嫌ひ、雨が閙がしく蓮葉を打つて響くのは、猶更の事である。その醒めた時は、寂歷として、はたと紙窓を閉ぢ、低遲して羅帳を捲くことがある。夢中の情を知るは、唯だ枕ばかりであるし、つきに恨を送つて撞き出すは、寺の鐘である。夢中に逢つた美人の白い袂には、香氣なほ殘り、箜篌に書いてあつた文字は、決して消えない。夢に見た事は、彷彿として覺えて居るが、さて其跡を尋ね樣とすれば、もとより、取り留めもなく、失望することが多い。夢醒めて起き出づれば、香爐の中に焚えさしがあつて、蘭麝の匂なほ殘り、夢を見た女は、殘粧なほ存して、眉墨の痕が、ほんのりして居る。夢中に見たる悲喜の情は、すべて泡影の如く幻であるし、離合の事は、皆實在なき訛誤に過ぎぬ。夢中に於て、謝靈運は、池塘生ニ春草ニといふ名句を得たといふし、淳于棼は、槐安國に往つて、大官と成つたといふ話。元來、夢は物思ひが種となつて、散散惱んだ揚句に見るものであるし、加ふるに、睡といふ魔に誘はれた結果である。夢は、醒め易くして、俄然中斷することがあるし、もとより、何等の憑據なきもので、これを信ずるのは、愚の骨頂である。陽臺の神女の事にしても、重ねて問ふ必要もなく、千歲後の今日から見れば、もとより、笑ふべきことである。

答胡博士留別二十韻

胡博士の留別に答ふ、二十韻

(一)世緒名臣(二)後。聲華(三)俊士前。
世緒、名臣の後、聲華、俊士の前。

(四)棘場曾中的。(五)芹水舊鳴絃。
棘場、かつて的に中り、芹水、舊と絃を鳴らす。

遠道秋風褐。空齋(六)夜雨氈。
遠道、秋風の褐、空齋、夜雨の氈。

倦游驚(七)齒暮。多難喜身全。
倦游、齒の暮るるに驚き、多難、身の全きを喜ぶ。

孤客愁(八)王粲。諸生老(九)鄭玄。
孤客、王粲を愁へしめ、諸生、鄭玄を老ゆ。

未應心戚戚。還是(一〇)腹便便。
未だ應に心戚戚たるべからず、還た是れ腹便便。

(一一)杜曲無歸業。成都有(一二)卜錢。
杜曲、歸業なく、成都、卜錢あり。

我方辭闕下。君尚隱江邊。
われ方に闕下を辭し、君、尙ほ江邊に隱る。

久話燈催剪。頻過(一三)榻解懸。
久しく話して、燈、剪るを催し、頻りに過ぎて、榻、懸を解く。

(一四)擇鄰欣得地。結友愧(一四)忘年。
鄰を擇んで地を得たるを欣び、友を結んで、忘年を愧づ。

(一五)牧徑依門轉。(一六)漁梁近渡連。
牧徑、門に依つて轉じ、漁梁、渡に近くして連る。

舊盟尋(一七)白鳥。餘俸買(一八)烏犍。
舊盟、白鳥を尋ね、餘俸、烏犍を買ふ。

流水空塘樹。疏林破屋煙。
流水、空塘の樹、疏林、破屋の煙。

詎憂窮作祟。但欲醉成仙。
詎ぞ憂へむ窮の祟を作すを、但だ醉うて仙と成らむと欲す。

政爾交歡密。俄然別恨牽。
政に爾かく交歡密、俄然として別恨牽く。

湖山入(一九)苑路。雞犬載家船。
湖山、苑に入るの路、雞犬、家を載するの船。

(二〇)離索方堪歎。(二一)分攜益可憐。
離索、方に歎ずるに堪へたり、分攜、益す憐むべし。

殊鄉難託主。薄俗易輕賢。
殊鄉、主に託し難く、薄俗、賢を輕んじ易し。

寒浦通潮處。春城罷雪天。
寒浦、潮に通ずる處、春城、雪を罷むるの天。

(二二)梅花未宜折。持送只詩篇。
梅花、未だ折るに宜しからず、持送、只だ詩篇。

【字解】【一】 世緒　代代承け嗣ぐ家業。【二】 名臣後　この人は、宋の胡瑗の後と見える。【三】 俊士　禮記に「司徒は、選士の秀なるものを論じて、これを學に升す、俊士といふ」とあり、唐書選擧志に「唐制、士を取るの科、その目、秀才あり、明經あり、俊士あり、進士あり」と見ゆ。【四】 棘場　五代史和凝傳に「天成中、貢擧に知たり、時に進士浮薄、喜んで諠譁を爲し、以て主司を動かす。主司、牓を放つ毎に、これを圍むに棘を以てし、省門を閉ぢ、人の出入を絶ち、以て常と爲す。凝、棘を撤して門を開く、しかも、士、肅然として譁なし、取るところ、皆一時の秀」とある。唐では、禮部に於いて試驗を行ふ時、棘を以て之を圍み、仍つて、棘圍といひ、棘場といつたのである。【五】 芹水　大學を云ふ。詩經に思樂泮水、薄采其芹とある。【六】 夜雨氈　唐書鄭虔傳に「虔、廣文館博士となる、時に鄭廣文と號す、官に在つて貧約甚しく、澹如たり。杜甫贈るに詩を以てして曰く、才名四十年、坐

客寒無レ氈」とある。【七】齒暮 齒は年齡、年が寄る、暮年に同じ。【八】王粲 魏志王粲傳に「粲、字は仲宣、徙つて長安に居る。蔡邕、見て之を奇とす、時に、邕、才學顯著、朝廷に貴重せられ、常に車騎巷を塡む。粲の門に在るを聞き、屣を倒にして之を迎ふ。司徒、辟召して黃門侍郎に除す、就かず、乃ち荊州に之いて劉表に依る、表、粲の貌寢にして體弱きを以て、甚だ重んぜざるなり。後、太祖辟して丞相掾となし、侍郎に拜す」とある。【九】鄭玄 後漢書鄭玄傳の論に「鄭玄、舊典を括囊し、衆家を網羅し、繁蕪を刪裁し、漏失を刊改す、これより、學者、略ぼ歸するところを知る」とある。【一〇】腹便便 前に卷四、始還二西齋一の詩中にも見えたが、後漢書文苑傳に「邊韶、字は孝先、教授數百人、かつて晝日假寐す。弟子、私に之を嘲つて曰く、邊孝先、腹便便、懶レ讀レ書、但欲レ眠、と。韶、ひそかに之を聞き、應へて曰く、邊爲レ姓、孝爲レ字、腹便便、五經笥、但欲二眠思一經事一、寐與二周公一通レ夢、靜與二孔子一同レ意、師而可レ嘲、出二何典故一」とある。【一一】杜曲 杜甫の詩に杜曲仍有桑麻田とある。【一二】有卜錢 高士傳に「嚴遵、字は君平、成都の市に賣卜し、日に百錢を得て、自ら給す」とある。【一三】榻解懸 陳蕃、守たりし時、徐穉の爲に特に一榻を備へて待ち、去れば之を解く、後漢書の徐穉傳に見ゆ。【一四】忘年 南史何遜傳に「遜、弱冠にして秀才に擧げらる。范雲、その對策を見て大に相稱賞し、因つて、忘年の交を結ぶ」とある。【一五】牧徑 牧童の邇過する小徑。【一六】漁梁 魚を取るやな。【一七】白鳥 卽ち白鷗、黃庭堅の詩に此心期與二白鷗一盟とある。【一八】烏犍 水牛。【一九】入苑路 苑は長洲苑を指す。【二〇】離索 離羣索居の略、朋友の羣を離れて獨居すること、禮記檀弓に「子夏曰く、吾、離羣して索居すること、亦た已に久し」とある。【二一】分攜 離別する。【二二】梅花 荊州記に「陸凱、江南より梅花一枝を以て、長安に寄せて范曄に與へ、贈るに詩を以てして曰く、折レ梅逢二驛使一、寄與隴頭人、江南何所レ有、聊贈一枝春」とある。

【題義】分省人物考に「胡翰、字は仲申、金華の人、幼より聰睿、浦陽に游學し、經史を博覽す。許文懿公の門に登る。南北の士、皆與に交らむことを願ふ。著すところの文を以て、これを文獻黃公・待制柳公に進む、皆稱許して口を容れず。洪武の初、聘せられて金陵に至り、衢州教授を授けられ、元史を纂修し、白金文幣を賜うて以て歸る。もとより、山水泉石を嗜み、晩歲、居を三洞の上に卜し、幅巾短杖、徜徉日を終ふ」とある。この詩は、靑邱が鄕里に還らむとする時、胡翰が詩を寄せたから、それに次韻して、留別の意を表したのである。

【詩意】君の世業は、名臣の後裔として知られ、聲譽は、俊士の最も前に在る。かつて、禮部の試場に入つて、見事に及第し、それから、大學に敎授して居たことがある。故鄕とは、遠道を隔てて居て、秋風に短褐を著け、空齋に籠つて居ては、雨の夜でも靑氈の上に危坐して勉强して居る。客游、すでに久しくして、だんだん年も寄つて來たが、多難の世に身を全うしたのは、まことに喜ぶべきである。孤客として、王粲の如く、常に愁を離れず、諸生として、鄭玄の如く、力學刻苦、しかも、今や老いむとして居る。決して心中に戚戚たることは無い筈で、五經に滿たされた腹は、便便として膨れて居る。杜曲に比すべき鄕里には、歸つても爲すべき家業がなく、成都に較ぶべき此都に於ては、賣卜をしても、隨分收入がある。われは、今しも、闕下を辭して鄕里に還らむとし、君は尙ほ江邊に隱棲して居る。會談久しきに互つては、數ば燈火を剪り、頻繁に訪問して、懸けてあつた榻を卸して貰つた。鄕を擇んで、君と一緒に居ることが出來たから、地を得たることを喜び、友誼を結んで、この弱輩を棄てられざりしを感謝する位。牧童の通る細徑は、門に傍うて曲がり、魚を捕ふる梁は、渡し場に近い處まで連接して居て、田舍めいた景色は、まことに面白い。そこで、舊盟を訂して白鷗を尋

ね、俸給の殘りで水牛を買ひ、暇だにあれば耕漁を事とし、流水を挾んで、空塘の上には、木が生ひ茂り、疏林の中なるあばら家からは、炊煙が徐に上る。何も貧窮に祟られることは、心配せずとも善く、唯だ醉うて、仙と成らむことを願ふだけである。かくて、交際上の歡情は、日に增して、親密に成つて來たが、俄然、予は歸國することになつて、離別の恨に堪へられない。行く手の湖山は長洲苑に通じて路を開き、家族は勿論、雞犬までも船に載せて漕ぎ出す。從來、予が朋友に離れて獨居せしことは、歎息すべく、今日、君と別れるのは、愈よ以てつらいことである。さはれ、異鄉に居りながら、誰を主人として僑居することも出來ず、都下風俗の浮薄なる、ややもすれば、賢を輕んずるから、予の如きものは、とても、ここに留まつて居ることは出來ない。やがて、故鄉に近づくと、入江に潮が通じ、城郭は春に入つて、雪も止み、どうやら、長閑けくなることであらう。例の江南の梅花は、まだ折る譯にも行くまいから、唯だ詩篇を持贈する外あるまいと思ふ。

【餘論】　流水空塘樹の四句は、一景一情、相配して極めて秀儁である。

送高郎中

高郎中を送る

雙騎出前驅。爭看璧在車。　雙騎、出でて前驅し、爭ひ看る、璧の車に在るを。

初離中侍幞。復接舍人廬。　初めて中侍の幞を離れ、復た舍人の廬に接す。

綬色春宜酒。爐氛夕戀裾。　綬色、春、酒に宜しく、爐氛、夕に裾を戀ふ。

同官聯劍佩。侍史直圖書。　同官、劍佩を聯ね、侍史、圖書に直す。

雲氣通高閣。花陰宿廣除。　雲氣、高閣に通じ、花陰、廣除に宿す。

省中詩滿篋。知是秉綸餘。　省中、詩、篋に滿つ、知る是れ秉綸の餘。

【字解】【一】璧在車　その容貌の美、玉の如きを云ふ。前に卷一、洛陽陌の詩中にも引いて置いたが、晉書衞玠傳に「少時、羊車に乘り洛陽の市に乘す、見るもの以て玉人と爲す」とある。【二】中侍　宋史職官志に「政和二年、中侍大夫を以て景福殿使に易ふ」とある。【三】舍人　唐書百官志に「中書省舍人六人、起居舍人二人、通事舍人十六人」とある。【四】綬色　この人は、郎中の高官に居たから、綠綬を帶び、それで酒に宜しいといつたのであらう。【五】侍史　側に侍する小役人、給仕の類。【六】廣除　除は庭階。

【題義】　この詩は、高某が禮部郎中に轉じ、他の役所に出勤する樣に成つたのを賀したので、そこで送といつたのである。

【詩意】　君が參朝する時には、兩騎を前驅として、まことに堂堂たる勢、そして、路上の人は、車中に白玉を載せて居ると思ひ、爭つて看て居ることであらう。君は、今まで中侍の職に居て、天子に近侍する爲め、宮中に詰めて居たが、今度は、古しへの舍人に轉任して、その役所に出仕される。印綬の色は綠にして、春は酒に似つかはしく、御爐の香氣は、夕に退朝する時も、裾に殘つて居るであら

う。同官の人人は、劍佩を聯ね、側に侍する給仕は、圖書を預つて居る。その役所は、宮禁に近い爲め、雲氣は高閣に通じ、御苑の花の影は、廣い庭階の上に映つて居る。君は省中に居て、詔敕を起草する暇には、詩が澤山に出來て、やがて、篋中に一ぱいに成ることであらう。

【餘論】　綵色の一聯は、明靚愛すべきを覺える。

送周檢校使高麗

周檢校の高麗に使するを送る

東望玄菟境。孤帆有去人。　東に望む玄菟の境、孤帆、去人あり。

未容辭遠使。方要接殊鄰。　未だ遠使を辭するを容るさず、方に殊鄰に接するを要す。

乞水從山媼。占風問海神。　水を乞うて山媼に從ひ、風を占して海神に問ふ。

王庭依舊障。估市集遙津。　王庭、舊障に依り、估市、遙津に集まる。

地作先朝俗。花同內域春。　地は、先朝の俗を作し、花は同じ、內域の春。

煩君修誓好。玉帛自茲頻。　君を煩はす、誓を修する好し、玉帛、これより頻りなり。

【字解】【一】玄菟　前に數ば見ゆ、漢の武帝が置いた朝鮮四郡の一。【二】殊鄰　風俗の異なる鄰國。【三】王庭　高麗の王宮を云ふ。【四】舊障　むかしながらの保障、卽ち要害。【五】估市　商估の集まる市場。【六】遙津　津は舟つきの港。【七】先朝俗　唐宋時代の風俗。【八】內域　城內に同じ、支那本土。【九】玉帛　玉ときぬとの幣物、書の舜典に五玉三帛とあり、左傳に「禹、諸公を塗山に會す、玉帛を執るもの萬國」とある。

【題義】　說明に及ばぬ。但し、周某の名字は不詳。

【詩意】　東、玄菟の境を望めば、今しも、孤帆を挂けて、その地に赴く人がある。君は、その職として、遠方に往く使を辭する譯には行かず、且つ、今の時に方りては、風俗異なる鄰國と交際する必要がある。その途中、水が入用の時には、舟を島に寄せ、山媼に從つて之を乞ひ、風を占ふ爲には、海神に問ふであらう。高麗の王宮は、むかしながらの要害に依り、商估の開く市場は、遙かなる舟つきの港である。その地は、今でも唐宋時代の風俗を存し、花は、わが內地と少しも換はらない。御苦勞ではあるが、君を煩はし、中國に服屬して決して叛かないといふ誓約を修することは、まことに然るべく、さうすると、玉帛を以て來往することも、これから頻繁に成るであらう。

【餘論】　周檢校は、使して歸る時、高麗の小兒二人を連れて來たといふので、前に卷二に、朝鮮兒歌といふのがあつた。すると、この詩は、元末の事に係り、まだ明の世にならぬ時分である。檢校は、もとより北京に在官して居たのであるが、もと蘇州の人で、往返の際、或は鄉里に立ちもどつて、そこから海を航したものかも知れぬ。

高青邱集　卷十四

聯句

舞劍聯句　舞劍聯句

與會稽張憲夜飲觀銅臺李壯士舞劍而作
會稽の張憲と夜飲し、銅臺李壯士の舞劍を觀て作る

(一)晩陌息(二)鳴鑣。憲秋城起(三)巖柝。　晩陌、鳴鑣を息ひ、秋城、巖柝を起す。
(四)登堂欣有會。啓顧座歎無樂。　堂に登つて會あるを欣び、座を顧みて樂なきを歎す。
(五)豪賓奉觴壽。憲壯士(六)掉鞘作。　豪賓、觴を奉じて壽し、壯士、鞘を掉つて作る。
韻生颷(七)拂鐔。啓文綴星(八)輝鍔。　韻は生じて、颷、鐔を拂ひ、文は綴つて、星、鍔に輝く。
(九)拭土色纔動。憲(一〇)映火光轉爍。　土を拭うて色わづかに動き、火に映じて光轉た爍なり。
(一一)寒瀉走澗泉。啓明懸(一二)溜簷澤。　寒は瀉ぐ澗に走るの泉、明は懸く簷に溜するの澤。

徒誇刀(一三)瑩膏。憲　漫詫匕(一四)淬藥。
徒に刀の膏に瑩くを誇り、漫に匕の藥に淬するを詫る。

腥疑人(一五)血乾。啓　威攝鬼(一六)踪鑠。
腥は疑ふ人血の乾くを、威は攝す鬼踪の鑠たるを。

雄聞莊(一七)子說。憲　醉想王(一八)郎斫。
雄は聞く莊子の說くを、醉は想ふ王郎の斫るを。

聯翩倏鴻(一九)騫。啓　奮迅仍雀(二〇)躍。
聯翩として倏ち鴻騫、奮迅仍ち雀躍。

來如龍出淵。憲　去若蛇(二一)赴壑。
來つて龍の淵を出るが如く、去つて蛇の壑に赴くが若し。

疾驚雷(二二)破山。啓　怒訝風(二三)捲漠。
疾は雷の山を破るかと驚き、怒は風の漠を捲くを訝る。

初馳帆(二四)縱張。憲　忽注弩(二五)弛彍。
初め馳せて、帆、縱に張り、忽ち注いで弩弛めて彍る。

陰陽變開闔。啓　潮汐隨進却。
陰陽、開闔を變じ、潮汐、進却に隨ふ。

高步赴節同。憲　奇形分狀各。
高步、節に赴くこと同じ、奇形、狀を分つて各。

斜廻象翼(二六)蔽。啓　曲踊(二七)肖挐攫。
斜に廻つて翼蔽に象り、曲踊して挐攫に肖たり。

欻驚西(二八)方帝。憲　凜怖東(二九)海若。
欻ち西方の帝を驚かし、凜として東海若を怖れしむ。

屋(三〇)翻影紛綸。啓　地殷(三一)勢揮(三二)霍。
屋は翻つて影紛綸、地殷にして勢揮霍。

亂思突(三三)騎奔。憲　低見飢隼掠。
亂れては突騎の奔るを思ひ、低くしては飢隼の掠むるを見る。

旁分萬矢斷。啓　前拉千槍拓。
旁に萬矢を分つて斷ち、前に千槍を拉して拓く。

出堪(三四)刼齊壇。憲　立可當蜀(三五)閣。
出でては齊壇を刼かすに堪へ、立つては蜀閣に當るべし。

澤聞蛇(三六)嘔啼。啓　路遇猿(三七)翁搏。
澤には蛇嘔の啼くを聞き、路には猿翁の搏つに遇ふ。

(三八)斬鬬豁然判。憲　擊柱(三九)鏗爾著。
鬬を斬つて豁然として判れ、柱を擊つて鏗爾として著る。

陸疑濤(四〇)涌沐。啓　霄駭虹(四一)鬪幕。
陸には濤の沐に涌くを疑ひ、霄には虹の幕に鬪するに駭く。

(四二)警棲已翻翻。憲　墜橋(四三)俄索索。
棲を警めて已に翻翻、橋を墜して俄に索索。

(四四)顚旭曾悟(四五)書。啓　佽輌(四六)記爭博。
顚旭、かつて書を悟り、佽輌、博を爭ふを記す。

(四七)目花匪酒(四八)涵。憲　膚粟(四九)似裘薄。
目、花するも、酒の涵するに匪ず、膚、粟して、裘の薄きに似たり。

忠義氣盡張。啓　姦邪膽(五〇)俱落。
忠義、氣、盡く張り、姦邪、膽、倶に落つ。

不從玉(五一)玦計。憲　欲定銅(五二)槃約。
玉玦の計に從はず、銅槃の約を定めむと欲す。

未數大(五三)娘强。啓　終勝處(五四)女弱。
未だ大娘の强を數へず、終に處女の弱に勝れり。

(五五)季路袖手欽。憲　裴旻(五六)汗(五七)顏怍。
季路、手を袖して欽し、裴旻、顏に汗して怍づ。

疾視誰敢當。啓　不(五八)成我慙學。
疾視、誰か敢て當らむ、成らず、我、學ぶを慙づ。

勇夫怒(五九)生瘦。恚恐僕戰(六〇)成瘧。　勇夫、怒つて瘿を生じ、恐僕、戰いて瘧を成す。

功收刺(六一)虎奇。啓志感闢(六二)雞惡。　功は收む虎を刺すの奇、志は感ず雞を開くこと惡しきを。

暫停月(六三)徘徊。恚既罷天寂寞。　暫く停まつて月徘徊、すでに罷んで天寂寞。

崆(六四)峒詎必倚。啓氛(六五)祲行(六六)可廓。　崆峒、詎ぞ必ずしも倚らむや、氛祲、行く〻廓くべし。

馘(六七)妖正思今。恚斷(六八)佞猶慕昨。　妖を馘して、正に今を思ふ、佞を斷つて、猶は昨を慕ふ。

會(六九)合固有期。啓死(七〇)生良欲託。　會合、もとより期あり、死生、良に託せむと欲す。

寧憂武(七一)庫災。恚但俟凶(七二)門鑿。　寧ろ武庫の災を憂へむや、但だ凶門の鑿つを俟つ。

慷慨勿悲歌。啓淋(七三)漓且酣酌。恚　慷慨、悲歌する勿れ、淋漓、且つ酣酌せよ。

【字解】【一】晩陌　日暮の大道。【二】鳴韃　韃はくつわ。【三】嚴柝　寒げに響く拍子木。【四】登堂　堂に上つて宴を催す。【五】豪賓　豪客に同じ。【六】捽術　術は舞曲の名、竿を揮つて起つて舞ふこと、李賀の公莫舞歌に「腰下三看寶玦光、項莊掉レ箭欄前起」とある。【七】拂鐔　莊子に「周宋を鐔となす」とあつて、その注に「鐔は劍鼻なり」とある、ふちがしら。【八】星輝鍔　吳越春秋に「伍子胥、江を過ぎ、その劍を解いて漁父に與へて曰く、この劍中、七星北斗あり」と見ゆ。廣韻に「鍔は劍端」とある、つば。【九】拭土　土で磨き上げる。晉煥外傳に「煥、豐城の獄に劍を得たり、南昌西山の黃白土を以て之を拭ふ、光艷照耀、張華、更に華陰の赤土を以て之を磨し、鮮光愈〻亮」とある。【一〇】光韡燁　異聞集に「薛俠者、一銅劍を得たり、長さ四尺、劍、靶に連る、靶に龍鳳の狀を盤し、左文火の如く、光彩灼爍」とある。【一一】寒淄　衞象の詩に「欄鶴新淬劍光寒」とある。【一二】淸蒼浮　檐から下つた氷柱、劉峻の金華山栖志に「懸溜、軒甍より瀉ぐ」とあり、王逸の九思に氷凍兮洛澤とあつて、その注に「水、結ぶなり」とある。【一三】刀蔓膏　本草に「鷿鷉は水鳥なり、大、鳩の如く、その膏、刀に塗れば鏽せず」とある。【一四】匕淬藥　前に數ば見えたが、史記荊軻傳に「太子、豫め天下の利匕首を求め、趙人徐夫人の匕首を得たり。これを百金に取り、工をして、藥を以て之を焠せしむ、以て人を試む、血、縷を濡し、人、立どころに死せざるはなし」とある。【一五】人血乾　錢太初の劍の詩に得レ自二猿公手一、屠レ蠶血未レ乾とある。【一六】鬼踪鏁　鏁は消える。【一七】莊子說　莊子に說劍の一篇がある。【一八】王郎斫　杜甫の短歌行、贈二王郎司直一に王郎酒酣拔レ劍斫レ地歌莫レ哀とある。【一九】鴻騫　雁が飛び上る、樂府雜記に「舞は樂の容なり、或は驚鴻に象り、或は飛燕の如し」とある。【二〇】雀躍　莊子に「鴻濛、方に髀を拊ち、雀躍して遊ばむとす」とある。【二一】蛇赴壑　王屋の詩に冉冉年光赴レ壑蛇とある。【二二】雷破山　莊子に「疾雷、山を破り、風、海を振ふも、驚かす能はず」とあり「この劍、一たび用ふれば、雷霆の震ふが如きなり」とあり、廣異記に「農夫、地を耕して劍を得たり、賈胡、これを百萬に售る、農夫故を問ふ、曰く、これ破山劍と名づく」とある。【二三】風捲濮　澤錄碎事に胡風似レ劍鍛二人骨一とある。【二四】帆縱張　柳貫の詩に張レ帆得二順風一、飛鴻與爭レ疾とある。【二五】弩弛彍　文同の詩に破若二勁弩彍一とある。【二六】翼蔽　史記項羽本紀に「項莊、劍を拔いて、起つて舞ふ。項伯、亦た劍を拔いて起つて舞ひ、常に身を以て沛公を翼蔽す、莊、擊つ能はず」とある。【二七】曲踊　左傳に「魏犨、胸を束れ、使者を見て曰く、君の靈を以て寧あらざるなりと。距躍三百、曲踊三百」とあつて、その注に「距躍は超越なり、曲踊は跳踊なり」とある。【二八】西方帝　秋の神、即ち白帝、李賀の劍歌に提出西方白帝靈とある。【二九】東海若　六帖に「海若は海神、天吳と名づく」とある。【三〇】屋翻　杜甫の詩に高浪垂翻レ屋とある。【三一】地股　正韻に「股音鏖、雷、擊を發するなり」とある。【三二】揮霍　張衡の西京賦に跳丸劍之揮霍とあつて、西陽雜俎に「老人、紫衣朱鬟、劍七口を擲して中庭に舞ふ、迭に躍つて揮霍す」とある。【三三】突騎奔　後漢書耿弇傳に「弇、劍を按じて曰く、歸つて、突騎を發し、以て烏合の衆を轔せよ、枯を摧き腐を折くが如きのみ」とある。【三四】刼齊壇　史記刺客列傳に「曹沫、魯の將となり、齊と戰つて三たび敗北す。魯の莊公懼れ、乃ち遂邑の地を獻じて以て和す。猶ほ復た以て將となす。齊の桓公、魯と柯に會して盟ふを許す。桓公、莊公と既に壇上に盟ふ。曹沫、匕首を執つて齊の桓公を刼す。桓公の左右、敢て

動くなし、而して問うて曰く、子、將に何をか欲す。曹沫曰く、齊は強くして魯は弱し、而して、大國、魯を侵す。亦た以て甚し。今、魯城壞る、卽ち齊の境を壓せむ。君、其れ之を圖れ、と。桓公、乃ち盡く魯の侵地を歸すを許す、曹沫三戰亡ふところ、盡く魯に復す」とある。【三五】蜀閣　蜀の劍閣、李白の蜀道難に劍閣崢嶸而崔嵬、一夫當㆑關、萬夫莫㆑開とある。【三六】蛇嫗啼　前に卷十一、贈㆓劉生㆒歌の詩中にも引いて置いたが、史記高祖本紀に「高祖、酒を被つて、夜、澤中を徑、大蛇徑に當る、高祖、劍を拔いて蛇を斬る。後に一老嫗あり、夜哭して曰く、吾が子は白帝の子なり、化して蛇と爲つて道に當る、今、赤帝の子に之を斬らる」とあつて、その注に「秦は西戎に居り、少昊の神を主とし、西畤を作つて白帝を祠る」とある。【三七】猿翁擲　吳越春秋に「范蠡、越王に謂つて曰く、楚に處女あり、南林の中に出づ、願はくは、君、問ふに手戰の道を以てせよ、と。女、將に見えむとし、道にして老人に逢ふ。自ら猿公と稱して曰く、聞く、子善く劍を爲すと。願はくは、一たび之を觀む、と。因つて、竹枝を拔く、女、卽ちその末を接し、公、その本を操る。而して、女、因つて杖を擧げて之を擊つ、猿公飛んで樹に上り、變じて白猿となる。女、去つて越王に見ゆ。王、五校の高才に命じて、これを習はしむ、この時に當つて、皆越女の劍と稱す」とあり、江總の白猿傳に「或は、雙劍を舞はし、環身電飛、圓光月の若し」とある。【三八】斬闇　抱朴子に「沈閭巨闕は闇を斬るの良なり」とある。【三九】擊柱　漢書叔孫通傳に「高帝、悉く秦の儀法を去つて簡易と爲す、羣臣、飲んで功を爭ひ、醉へば或は妄呼し、劍を拔いて柱を擊つ」とある。【四〇】瀟湘秋　曹唐の買劍の詩に略抛㆓牀下㆒怕㆓泉流㆒とある。【四一】虹闇暮　詳驗集に「登阜、蜀を儀し、賓客と宴す。忽ち、虹蜺、空よりして下り、首を庭に垂れ、靜然として晴霞の狀の如し、久しうして、方に去る」とある。【四二】暗樓　塒に宿する鳥を警戒して起たしめる。【四三】墜橋　枯れた葉を吹き落す。【四四】顚旭　旭は狂、酒に醉うて狂すること、張旭を云ふ。前に卷十一、草書歌の詩中にも引いて置いたが、唐書李白傳に「旭は蘇州吳人、酒を嗜む、大醉する每に、呼叫狂走、乃ち筆を下し、或は頭を以て墨に濡して書し、すでに醒め、自ら視て以て神と爲す、世、張顚と呼ぶ」とあり、杜甫の飲中八仙歌に張旭三杯草聖傳、脫㆑帽露㆑頂王公前とある。【四五】悟書　唐書李白傳に「倡公孫の劍器を舞はすを觀て、その神を得たり」とあり、同じ事が杜甫の觀㆓公孫大娘弟子舞㆒劍器㆒引に見えて居る。【四六】俠輌記爭傳　史記荆軻傳に「荆軻、かつて游んで楡次を過ぎ、蓋聶と劍を論ず。蓋聶、怒つて之を目す。楡次を去つて邯鄲に游ぶ。魯句踐、荆軻と博して道を爭ふ、魯句踐、怒つて之を叱す、荆軻、默して逃れ去る」とある。【四七】目花　目がかすむ、杜甫飲中八仙歌に知章乘㆑馬似㆑乘㆑船、眼花落㆑井水底眠とある。【四八】酒湎　酒に沈湎する。【四九】膚粟　肌膚が粟だつ、東坡の詩に凍合㆓玉樓㆒寒起㆑粟、光搖㆓銀海㆒眩生㆑花とある。【五〇】膽倶落　唐書に「李祐、入朝し、詔に違うて進奉す。侍御史溫造、これを彈ず。祐、罪を待ち、股戰して曰く、吾、夜、蔡州城を踰え、吳元濟を擒にす、未だ嘗て心動かず。今日、膽、溫御史に落つ」とあり、歐陽修の劍の詩に姦邪與㆓佞倖㆒膽破骨亦驚とある。【五一】玉玦計　史記項羽本紀に「項王、卽日、沛公を留めて與に飲む。范增、數ば項王を目して佩ぶるところの玉玦を擧げ、以て之に示すもの三たび。項王、默然として應ぜず。范增、起つて出で、項莊を召して、謂つて曰く、君王人と爲り忍びず、若入つて、前んで壽を爲し、壽畢らば、請うて劍を以て舞ひ、因つて、沛公を坐に擊つて之を殺せ。しからざれば、若の屬、皆且つ虜にせられむ」とある。【五二】銅槃約　史記平原君列傳に「毛遂、劍を按じて前む、楚王唯唯す。毛遂、楚王の左右に謂つて曰く、雞狗馬の血を取り來れ、と。毛遂、銅盤を捧げて跪き、これを楚王に進めて曰く、王、當に血を歃つて、從を定むべし、次は吾が君、次は遂と。遂に從を殿上に定む」とある。【五三】大娘強　前に悟書の項にも見えたが、卽ち公孫大娘、明皇雜錄に「時に公孫大娘といふものあり、善く劍を舞はし、能く鄰里曲、及び裴將軍の滿堂勢、西河劍器渾脫を爲し、妍妙、皆時に冠絕す」とある。【五四】處女弱　前の猿翁の項に見ゆ。【五五】季路　仲由、字は子路、家語に「子路、戎服して孔子に見え、劍を拔いて之を舞はして曰く、古しへの君子、劍を以て自ら衞る。子曰く、古しへの君子は、忠、以て質と爲し、仁、以て衞となし、不善なれば忠を以て之を化し、寇暴なれば仁を以て之を禦ぐ、何ぞ必ずしも劍を恃まむや、と。子路、摳齊して敎を受く」とある。【五六】斐旻　名畫記に「開元中、斐旻、善く劍を舞はす。吳道玄、旻の舞を觀て筆を揮ふこと、益す進む」とある。【五七】汗顏怍　顏に汗を流して怍ぢ恐れる。【五八】不成我甄學　史記項羽本紀に「項籍少時、書を學んで成らず、去つて劍を學んで又成らず。項梁、これを怒る。籍曰く、書は以て姓名を記するに足るのみ、劍は一人の敵、學ぶに足らず、願はくは、萬人の敵を學ばむ、と。ここに于て、項梁、乃ち籍に兵法を敎ふ、籍、大に喜び、略ぼ其意を知る」とある。【五九】怒生癭　癭は瘤、魏志賈逵傳の注に「逵、弘農に在り、典農校尉と公事を爭ひ、理むるを得ず、乃ち憤を發して癭を生ず」とあり、韓愈の聯句に怒癭爭㆓碨磊㆒とある。【六〇】戰成

鐺　戰栗して、おこりを煩つて居る樣である。【六一】刺虎奇　史記陳軫傳に「卞莊子、虎を刺さむと欲す。管豎子、これを止めて曰く、兩虎方に共に牛を食ふ。牛甘ければ、必ず鬪はむ、鬪へば、大なるもの傷つき、小なるもの亡びむ、從つて、これを刺せば、一擧必ず雙虎の名あらむ」とある。【六二】聞雞惡　晉書祖逖傳に「司空劉琨と倶に司州主簿となり、被を共にして同じく寢ぬ。中夜、荒雞の鳴くを聞き、琨を蹴つて覺まして曰く、これ惡聲に非ざるなりと。因つて起つて舞ふ」とある。【六三】月徘徊　月がいざよふ、庾肩吾の詩に樓上徘徊月とあり、賈餗の太阿賦に環分二四月一、綵疑二映レ月之流一とある。【六四】崆峒　西方の山の名。但し、險絕なる山の義にも用ひる。杜甫の詩に防身一長劍、將欲レ倚二崆峒一とある。【六五】行可廓　廓は廓然として開く、魏の文帝の書に「僕に劍一枚あり、因つて左右に給し、以て妖氣を除かむ」とある。【六六】氛祲　妖氣に同じ。【六七】誅妖　妖怪の首を斬る。松窓雜記に「進士趙顏、一軟障を得たり、婦人を圖して甚だ麗なり。畫工曰く、これ眞眞と名づく、これを呼ぶ百日、すなはち應に百彩の灰を以て之に灌ぐべし、即ち活きむと。顏、その言の如くす、果して活く。友人曰く、これ妖なり、余に神劍あり、これを斬るべし」とある。【六八】斷佞　朱雲の故事、前に數ば見ゆ。漢書の本傳に「願はくは、尙方の斬馬劍を賜はり、佞臣一人の頭を斷ち、以て其餘を厲まさむと。上問ふ、誰ぞ、對へて曰く張禹」とある。【六九】會合固有期　前に卷五、劍池の詩中にも引いて說いたが、晉書に「雷煥、豐城の雙劍を得、一を送つて張華に與へ、一を留めて自ら佩ぶ。華、劍を得、報じて曰く、詳に劍文を觀るに、乃ち干將なり、莫耶、何すれぞ至らざる。然りと雖も、神物、終に當に合ふべきのみと。後、煥の子華、延平津を過ぐ、劍、忽ち躍つて水に入る、華、人をして水に沒して之を求めしむ、兩龍を見、恐れて返る」とある。【七〇】死生良欽託　前に卷四、魏使君見レ示二舊贈詩一の詩中にも引いて置いたが、史記吳世家に「季札の初めて使するや、北、徐君を過ぐ。徐君、季札の劍を好む、口敢て言はず。季札、心に之を知るも、上國に使するが爲に、未だ獻ぜず、還つて徐に至れば、徐君、すでに死す、札、乃ちその寶劍を解き、これを徐君の冢樹に繫いで去る」とある。【七一】武庫災　晉書に「太康三年、武庫火あり、中書監張華、兵を列して防衞す、高祖の斬蛇劍、屋を穿つて飛び去るを見る、向ふところを知るなし」とある。【七二】凶門鑿　淮南子に「將、すでに斧鉞を受く、乃ち凶門を鑿つて出づ」とあつて、その注に「凶門は、北出の門、將軍の出づる、喪禮を以て之を處す、その必死を以てなり」とある。【七三】淋漓　酒にひたる貌。

【題義】 聯句は、韓退之集に十首位も見えて居て、その處で、その起原等に就いて說明して置いたから、ここには省略するが、ここに在る聯句は、いづれも、かの城南聯句などと同一の形式に於て試みられたものである。張憲は、前に卷四、答二張山人憲一の題義の處に注して置いたが、列朝詩集に「字は思廉、山陰の人、才を負うて不羈、四方に薄游し、誓つて娶らず、鄉里に歸らず。かつて、京師に走り、天下の事を創言す。衆、その狂に驚く。還つて、富春山中に入り、緇黃に混じて、自ら放にす。淮張、吳に據るや、禮致して樞密院都事となす。吳亡ぶるや、姓名を變じて杭州に走り、報國寺に寄食す」とあつて、その青邱と應酬したのは、張士誠に事へて蘇州に居た時である。銅臺李壯士は、前に卷四に贈二銅臺李壯士一の五古があつて、略ぼ其人物を記してあるが、その名字閱歷等は分からず、銅臺は即ち魏の銅雀臺、今の河南彰德府臨漳縣で、李は、即ち其地の產である。この聯句は、張憲と共に夜飮を爲し、席上、李壯士の劍舞を觀たるに因つて試作したのである。

【詩意】 日暮の陌上、くつわの鳴る音も止み、秋城の中には、夜を警むる拍子木が、寒げに響いた。ここに、堂に上つて會飮を爲したのは喜ばしいが、座上を顧みて、音樂の無いのは、まことに飽ッ氣ない。すると、豪客とも稱すべき李壯士は、杯を捧げて、われ等の爲に壽をなし、それから、長い物を揮り廻はして舞を試みた。忽ちにして、旋風、劍鼻を拂うて、うなりを生じ、七星の文は、鍔文に輝いて見える。その劍は、土で拭つたばかりで、冷かなる色、わづかに動き、火に映ずれば、光彩灼

爍として居る。それを打ち揮ると、寒げなることは、澗中を走る奔泉の如く、明かなることは、軒からぶら下つて居る氷柱の如く、鸊鵜の膏で刀を磨いたとか、毒藥を匕首に塗りこめたとかいふ昔がたりも、物の數とも覺えぬ位。物とはなしに腥きは、人の血潮が乾いて、こびり付いて居る爲では無いかと疑はれ、その神威は、鬼神を攝伏して、その跡を消さしめ、その雄なることは、莊子の說劍を思ひ合はさしめ、醉つて揮り廻すことは、王郎が地を斫つたことを聯想せしめ、その聯翩たるは、忽然として雁が飛び起つが如く、奮迅する貌は、雀の如く舞を拊つて躍る樣であるし、來つては、龍の淵より出づるが如く、去つては、蛇の壑に走るが如く、その疾きことは、雷が山を破るかと驚かれ、その氣力壯なるは、風が大漠の沙を捲くかと訝り、初めて馳せては、帆を十分に張つた如く、忽ち注ぎ畢つては、弩を放つて弛めた樣である。この勢では、陰陽、爲に開闔を變じ、潮汐も亦た之に隨つて進退するであらう。高く步を移しては、節に赴くと同じく、形態の珍らしきは、狀を分つて、とりどりに面白い。斜に廻つては、他を翼蔽する樣であるし、曲踊を爲せば、さながら人に拏みかかるに似て居る。欻として、西方なる秋の神を驚かし、凜として、東海の天吳をも怖れしめる。やがて、屋根がひツくりかへるばかりに、その影、紛綸して亂れ、地が鳴り轟く樣に、その勢は、揮霍して振つて居る。その亂るるに當つては、突騎の奔るを思ひ、その低くなる時は、餓ゑた隼が地面にのして物を掠める樣であるし、旁には、萬條の箭の飛び來るを薙ぎ拂つて、切り落すべく、前には、千本の槍の簇がるを取り拉いで、路を開いて進むことが出來る。出でては、盟を爲す壇の上に於て、齊侯を脅すべく、立つては、蜀の劍閣に於て、一夫、以て萬夫に當り得べきと一般、これを澤にしては、蛇の母たる老嫗の啼くを聞くべく、これを路にしては、老人に化けた白猿に遇つて、一勝負試むることが出來る。關を斬つては、豁然として左右に分れ、柱を撃つては、鏗爾として打ち當つた音がする。陸に在つては、波濤の牀邊に湧くを疑ひ、夜に於ては、虹蜺の幕中に闖入するに駭くばかり。塒に宿れる鳥は、これが爲に驚きつつ翻翻として地に落ち、枯れた木の葉は、これが爲に拂はれつつ、索索として聲を爲して居る。酒に醉ひ狂ふ張旭は、公孫大娘の劍舞の巧妙なるを見て、自然、草書の筆法を悟つたといふし、俠氣ある荊軻は、魯句踐の劍法に達するを知るが故に、博奕を爭つて逃げ出して仕舞つた。ここに見て居ると、目の霞むのは、酒に沈湎したからでもなく、肌膚の粟だつことは、著て居る裘の薄い爲であるらしい。忠義の氣は盡く張り、姦邪の膽は共に落つるを疑はず。むかし、項羽は、范增が玉玦を擧げて、その決心を促したが、それに從はず、仍つて、項莊をして劍舞せしめたが、今觀て居ると、さながら、その時の如く、さては、毛遂が楚王に詰め寄せて、銅盤の血を歃つて盟約を爲すに至らしめた其日の事を思ひ出さしめる。公孫大娘の上手なるも、決して算へ立てるに足らず、もとより、纖弱なる越の處女にも勝つて居る。もし之を見たならば、子路は手を袖にして感服するであらうし、裴旻は、顏に汗して、怍ぢ恐れるであらう。一寸見てだに、誰も敢て當り得べし

とは思はれず、いくら稽古した處で、愧かしながら、自分には到底出來さうもない。勇夫は、その眞似も出來ないのを怒つて瘤を生ずべく、臆病な下僕は、戰きつつ、おこりを煩つて居る樣になる。やがて、しばらく舞の手を停めると、月の影いざよひ、すでに一曲を舞ひ畢れば、天も寂寂として、すべて靜まりかへつて居る。この長劍だにあらば、必ずしも崆峒に倚るを要せず、そして、滿目の氛祲も、やがて、廓然として掃ひ清めることが出來る。妖を馘るのは、丁度今であるし、佞臣を退治せむとしては、昔人の忠烈を慕はしく思ふ。雷煥の得た兩劍の會合は、もとより期あるべく、季札が劍を懸けたのは、死生ともに、その至情を託すべきである。武庫に災あつた處で、劍にして靈あらば、逃れ去るべきが故に、格別心配するにも當らぬし、どうか、これを佩びて出征して見たいと思ふが故に、凶門を鑿たむことを待つて居る。さはれ、慷慨の餘り、悲歌するは宜しくないので、それよりも、十分に酒を飲むが宜しからうと思ふ。

【餘論】もと劍舞を詠じたのであるが、これに關する材料は、いくらも無い處から、主として劍に關する典故を蒐集して臚列した。中には、多少無理と思はれるのもあるが、運旋の結果、略ぼ落ち付いて、先づ大抵には出來て居る。そして、二人、才力相敵することは、さながら當日の韓孟の如く、又これだけの聯句は、城南以後、あまり見ないと云つても善からう。

劍池聯句

與張憲・金起・王隅同賦

(一)飛梁上當空。憲直(二)壁下插水。
兩樹交古陰。啓孤亭倒(三)清泚。
初至意已愜。憲再陟神亦靡。
氣消淵龍藏。起骨朽(四)山虎死。
蒼崖出(五)仙詩。隅(六)金藏閟僧史。
伯圖渺何在。憲世事倏如此。
佳游信難遭。啓壯志良未已。
凭欄瞰(七)神州。起(八)樹羽訏軍壘。
未覩煙塵清。隅且耽林壑美。
臨風揮一觥。憲憩石脫雙履。
鶯啄朱果殘。啓蜂抱黃英委。

劍池聯句
張憲・金起・王隅と同じく賦す

飛梁、上、空に當り、直壁、下、水に插む。
兩樹、古陰を交へ、孤亭、清泚に倒る。
初め至つて、意、已に愜ひ、再び陟つて、神亦た靡く。
氣消えて淵龍藏し、骨朽ちて山虎死す。
蒼崖、仙詩を出し、金藏、僧史を閟づ。
伯圖、渺として何にか在る、世事、倏ち此の如し。
佳游、信に遭ひ難く、壯志、良に未だ已まず。
欄に凭つて神州を瞰、羽を樹てて軍壘と訏る。
未だ煙塵の清むを覩ず、且つ林壑の美に耽る。
風に臨んで一觥を揮ひ、石に憩うて雙履を脫す。
鶯は啄んで朱果殘し、蜂は抱いて黃英委す。

琴咽斜陽蟬。憲 棋戰欲(九)雨蟻。　琴は咽ぶ斜陽の蟬、棋は戰ふ雨ふらむと欲するの蟻。

(一〇)溽暑避松篷(一一)。啓 輕涼透藤椅(一二)。　溽暑、松篷に避け、輕涼、藤椅に透る。

瞑目思黑甜(一三)。憲 潛心翫玄旨(一四)。　瞑目、黑甜を思ひ、潛心、玄旨を翫ぶ。

(一五)籟響破虛寂。啓 香飄聞旖旎(一六)。　籟響いて虛寂を破り、香飄つて、旖旎を聞く。

(一七)飯鐘隔煙來。憲 樵笛(一八)呼月起。　飯鐘、煙を隔てて來り、樵笛、月を呼んで起る。

(一九)整轡戒僕夫。啓 揖鞭謝釋子。　轡を整へて僕夫を戒め、鞭を揖して釋子に謝す。

(二〇)厖聲吠喧呵。起 騎影歸迤邐(二一)。　厖聲、吠えて喧呵、騎影、歸つて迤邐。

餘戀尙眷然。隅 重來那復爾。　餘戀、尙ほ眷然、重來、那ぞ復た爾る。

(二二)明發抗(二三)塵容。何由繼芳趾(二四)。憲　明發、塵容を抗ぐ、何に由つて芳趾を繼がむ。

【字解】【一】飛梁　橋を云ふ。【二】直壁　絶壁に同じ。【三】清泚　清き流。【四】山虎　呉越春秋に「闔閭、ここに葬り、扁諸魚腸の劍、各三千を以て殉と爲す。越えて三日、金精、結んで白虎となり、その上に踞す」とある。【五】仙詩　前に卷五、弔幽獨君の題下に、引いて置いたが、姑蘇志に「大曆十二年、虎邱寺に鬼あり、詩二章を題す、云云、姓氏を詳にするなし、故に稱して幽獨君となす」とある。【六】金藏　銅を張つた經藏、陸游の詩に補成僧史可藏山とある。【七】神州　中原の地。【八】樹羽　羽旗を建てる、杜甫の詩に樹羽臨九州とある。【九】欲雨蟻　雨降る前の蟻、李商隱の詩に閣若雨前蟻とある。【一〇】溽暑　蒸し暑いこと。【一一】松篷　松の樹皮で編んだ扇、揚子方言に「扇、關より東、これを篷といひ、關より西、これを扇といふ」とある。【一二】藤椅　藤蔓で編んだ椅子。【一三】黑甜　闇黑で味が甘いといふ義で、卽ち睡眠を云ふ。東坡の詩に一枕黑甜餘とある。【一四】玄旨　老莊の深旨。【一五】籟響　籟は風の吹き入る竅穴。【一六】旖旎　漢書司馬相如傳に旖旎從風とあつて、その注に「旖旎は阿那なり」とあつて、たをやかなる貌。【一七】飯鐘　飯を報ずる鐘。【一八】樵笛　樵夫の吹く笛。【一九】整轡　手綱を整へる。【二〇】厖聲　犬の聲。【二一】迤邐　路の曲がること。【二二】明發　明日に同じ。【二三】抗塵容　塵にまみれたる顏をあげる。【二四】芳趾　趾は足跡。

【題義】劍池は、前に卷五、虎邱の題下に注して置いたが、姑蘇志に「その最も著はるるものを劍池と爲す、兩崖劃開、中に石泉を涵し、深さ測るべからず。相傳ふ、秦の始皇、闔閭の墓を發き、山を鑿つて劍を求む、得るところなし。その鑿つ處、遂に深澗を成す、今劍池と名づく。顏眞卿、虎邱劍池の四字を書し、石刻、猶ほ存す」とある。青邱は、ある時、張憲等、兩三輩と其地に游び、仍つて聯句を試みたのである。張憲は、前詩の題下にも詳述して置いたし、王隅は、前に卷六に其死を哭する詩があつて、その題下に詳述して置いたが、金起だけは、不詳である。

【詩意】橋は高く上に在つて、大空に當り、絶壁の脚部は、下、水に插んで居る。二本の木は、古りたる樹陰を交へ、一つの亭子は、清流に其影を倒映して居る。はじめ往つたばかりで、すでに氣に入つたが、再び登れば、精神も亦た靡くばかり。龍は深く淵底に匿れて、その氣、すでに銷えむとし、虎は山中に死して、その骨さへ、腐つて仕舞つた。蒼崖は、むかし、幽獨君が詩を記した處であるし、銅で張つた經藏には、僧史の原稿が入れてある。闔閭の霸圖は、渺として何處に在るか、人世の事は、

盛衰遞變、大抵さうしたものである。佳游は、滅多に出合ひ惡いものであつて、わが壯心は、良に未だ已ます。そこで、欄に凭つて中原の地を眺め下し、羽旗の建てるを見ると、軍壘かと訝つた。今しも、煙塵の消えたるを覩ざれども、ここに來つて林壑の美に耽るを得たるは、知らず是れ何の幸ぞ。そこで、風に臨んで、一杯を傾け、石上で坐憩して、兩方の靴を脫ぎ棄てた。鶯が啄む爲に、朱果は無くなり、蜂が抱いて、黃花は凋んで仕舞つた。琴の音は咽んで、夕日に嘶く蟬の如く、闍巷の闇がしきは、雨の前の蟻の樣である。蒸し暑いのを防ぐ爲に、松皮の團扇を揮ひ、そよ吹く涼氣は、藤製の椅子に透るを覺えた。目を閉ぢては、黑甜の滋味を思ひ、心を潛めては、老莊の深旨を翫んで居る。樹の竅は響を發して、虛寂を破り、香は飄つて、たをやかに聞こえる。兎角する內に、飯時を報ずる鐘は、暮煙を隔てて來り、樵夫の笛は、月を呼んで吹き起つた。そこで、手綱を整へて、僕夫に出發を注意し、鞭を擧げて、仕僧どもに會釋した。犬の聲は、やかましく、騎馬の影は、曲れる小路をたどつて行く。流石に名殘の惜まれて、眷戀の情、禁じ難く、再び來游するのは、何日とも豫期することが出來ない。これから、城內に歸れば、明日又ぞろ塵にまみれた顏を上げる外なく、如何にして游跡を繼ぐべきか、まことに、殘り惜しいことである。

病柏聯句

病柏聯句

與青城杜寅・鄭郡徐賁游白蓮寺見病柏而作

青城の杜寅・鄭郡の徐賁と白蓮寺に游び、病柏を見て作る

抱質雖輪困(一)。託根何坎坷(二)。寅　質を抱く、輪困と雖も、根を託す、何ぞ坎坷。

死(三)色見已深。生意存猶頗(四)。啓　死色、見て已に深し、生意、存するも猶ほ頗。

老(五)枿焦半身。餘葉禿偏(六)髻。賁　老枿、半身を焦し、餘葉、偏髻を禿にす。

恩謝漢(七)陵春。災非陸渾(八)火。寅　恩は謝す漢陵の春、災は陸渾の火に非す。

柯(九)傾痒(一〇)待扶。節(一一)漏瘡思裹。啓　柯傾いて、痒、扶を待ち、節漏れて、瘡、裹まむを思ふ。

下(一二)窾封蚍(一三)蜉。上穴綴蜾(一四)蠃。賁　下窾、蚍蜉を封じ、上穴、蜾蠃を綴る。

風欺聲告哀。雨冒汗憎顆(一五)。寅　風欺いて、聲、哀を告げ、雨冒して、汗、顆を憎む。

蟄空颭(一六)喜容。攀脆猿愁墮。啓　空に蟄して颭容るるを喜び、脆を攀ぢ猿墮つるを愁ふ。

將斲豈中(一七)梁。欲刳(一八)詎宜舸。賁　將に斲らむとす豈に梁に中らむや、刳らむと欲す詎ぞ舸に宜しからむや。

蓋(一九)瘁缺青蔥。梢枯辭猗(二〇)儺。寅　蓋は瘁して青蔥を缺き、梢は枯れて猗儺を辭す。

乏(二一)子供爐焚。無陰庇牀坐。啓　子の爐焚に供するに乏しく、陰の牀坐を庇するなし。

蠹盡啄鳥飢。巢傾躓雛跛。貢　蠹盡き鳥の飢ゑたるを啄ましめ、巢傾き雛の跛なるを躓かしむ。

臞形慘(二二)若尫。突腹腫(二三)如果。寅　臞形慘として尫の若く、突腹腫れて果の如し。

藤纏偶假妝。蘚剝每慙裸。啓　藤纏うて偶ま妝を假り、蘚剝げて每に裸を慙づ。

主惜覬(二四)匠顧。樵窺避(二五)僧邏。貢　主は惜んで匠の顧るを覬ひ、樵は窺うて僧の邏するを避く。

土瘠力易衰。巖危勢難(二六)妥。寅　土瘠せて力衰へ易く、巖危くして勢妥なり難し。

殺懼苦(二七)霜仍。醫期甘(二八)露可。啓　殺は苦霜に仍るを懼れ、醫は甘露の可なるを期す。

成器未爲福。不(二九)材反逃禍。貢　器を成す、未だ福と爲さず、不材、反つて禍を逃る。

依林尚支(三〇)撐。亞石猶磊(三一)砢。寅　林に依つて尚ほ支撐、石に亞れて猶ほ磊砢。

閱歲失貞(三二)姿。承(三三)陽愧纖(三四)朶。啓　歲を閱して貞姿を失ひ、陽を承けて纖朶を愧づ。

操辜孔(三五)語稱。名負杜(三六)吟播。貢　操は孔語の稱するに辜き、名は杜吟の播くを負ふ。

敢要泰(三七)樹封。孰效禹(三八)梅鎖。寅　敢て泰樹の封を要せむや、孰れか禹梅の鎖に效はむ。

蟠深漫欲踞。架重寧堪荷。啓　蟠深く漫に踞せむと欲す、架重く寧ろ荷ふに堪へむや。

氣同生固均。數異測誠叵。貢　氣同じくして生固より均しく、數異にして測る誠に叵し。

膏乾燃不明。屑墜掃還夥。寅　膏乾いて燃ゆること明かならず、屑墜ちて掃ふ還た夥し。

客憐弔賦悲。童棄培功惰。啓　客は憐んで弔賦悲み、童は棄てて、培功惰る。

終護竟煩誰。今看幸遭我。貢　終護、竟に誰をか煩はす、今看る、幸にして我に遭ふを。

【字解】【一】輪囷　節くれ立つて居る貌、鄒陽の上梁王書に蟠木根柢、輪囷離奇とある。【二】坎坷　坎軻に同じ、不遇の貌、揚雄の河東賦に瀕南巢之坎坷兮とある。【三】死色　枯死せむとする氣色。【四】存猶顚　餘程殘つて居る。【五】老枿　枿は切り株、伐木の殘餘。【六】偏髻　髻はきりがみ、小兒の剪髮、禮記內則に「髮を翦つて髻となす」とあつて、その注に「髻は小兒遺すところの髮なり」とある。【七】漢陵春　後漢書光武帝紀の注に、高祖の長陵より平帝の康陵に至るまで、凡そ十一陵を算してあつて、これ等の諸陵には、柏樹を植ゑたのであらう。【八】陸渾火　韓愈に陸渾山火詩がある。【九】柯傾　柯は幹。【一〇】痺將扶　痺はしびれる、感覺作用を失ふ。【一一】節漏　節はふし、漏は穴があく。【一二】下竅　竅は穴。【一三】蚍蜉　爾雅に「蚍蜉は大螘」とあつて、その注に「俗呼んで馬蚍蜉となす」とある、卽ち大蟻。【一四】螟蠃　詩經に螟蛉有子、蜾蠃負之とあり、爾雅注に細腰蜂とある、卽ち似我蜂。【一五】憎顆　說文に「顆は小頭なり」とあつて、粒をなすこと。【一六】虺喜容　虺は蝮蛇、まむし。【一七】嶽中梁　莊子に「大木を見る、仰いで、その細枝を視れば、拳曲にして以て棟梁と爲すべからず」とあり、三輔黃圖に「漢の武帝、柏梁臺を建つ、香柏を以て梁となすなり」とある。【一八】欲刳　刳はゑぐる、けづる。易に「木を刳つて舟となす」とあり、又柏で造つた舟は、詩經に汎彼柏舟とある。【一九】蓋瘁　天蓋の樣になつて居た葉が凋む。【二〇】猗儺　光澤ある貌、詩經に隰有萇楚、猗儺其枝とある。【二一】乞子　子は柏の實。【二二】慘若尫　尫は弱弱しきこと。【二三】腫如果　莊子に「腹、猶ほ果然たり」とあつて、膨れて居ること。【二四】覬匠顧　莊子に匠石が櫟社の樹を見て、不材の木として顧みなかつたといふことがあるし、陸龜蒙の詩に從遭匠石顧とある。【二五】僧邏　邏は說文に「巡なり」とあつて、見廻はること。【二六】難妥　妥は安穩。【二七】苦霜　ひどい霜、春秋に「定

公元年冬十月、隕霜、菽を殺す」とある。【二八】甘露　昭明太子の啓に甘露入レ頂、醴水灌レ心とある。【二九】不材　莊子に「山中の木、不材を以て、その天年を終るを得たり」とある。【三〇】支撑　二字ともに支へる、范成大の詩に檐楣共突兀、鬼神相支撑とある。【三一】磊砢　節くれ立つ、世說に「和嶠、少にして風格あり。庾顗、見て歎じて曰く、嶠は森森として、千丈の松の若く、磊砢、節目多しと雖も、これを大厦に施さば、棟梁の用あり」と見ゆ。【三二】貞姿　冬も凋まぬ姿。【三三】承陽　太陽の光を受ける。【三四】纖柔　こまかい小枝。【三五】孔語稱　論語に「歲寒うして松柏の凋むに後るるを知る」とあり、杜甫の病柏に歲寒忽無レ憑、日夜柯葉改とある。【三六】杜吟播　杜甫の詩が世に播布する、杜甫の古柏行に孔明廟前有二老柏一、柯如二青銅一根似レ石、霜皮溜レ雨四十圍、黛色參レ天二千尺とある。【三七】秦樹封　史記始皇本紀に「秦山に上つて、封祀す、風雨暴に至る、樹下に休ひ、因つて、その樹を封じて五大夫と爲す」とある。【三八】禹梅餘　四明圖經に「鄞縣大梅山頂に梅木あり、伐つて、會稽禹廟の梁となす。張僧繇、龍を其上に畫く、夜、或は風雨、飛んで鏡湖に入り、龍と闘ふ。後、人、梁上水淋漓たるを見、はじめて之を駭異し、鐵索を以て柱に鎖す、然れども、今存するところは、乃ち他木、猶ほ絆するに鐵索を以てするは、故事を存するのみ」とある。

【題義】白蓮寺は、前に卷六、次二韻內弟周思敬、秋夜同飲二白蓮寺池上一の題下に注して置いたが、姑蘇志に「白蓮講寺は、長洲縣二十都甫里に在り、卽ち陸龜蒙の別業、祠堂あり」と記して居た。柏は、前にも述べたことがあつたが、邦名かしはといふのは、太だ相當らず、かやといふのが、稍や近いと思はれる。その病柏は、火難の爲に痛められて、弱つて居るものと見える。この首は、杜寅・徐賁の二人とともに、長洲の白蓮寺に游び、病柏を見て作つたのである。この中、徐賁は、數ば前に見えたが、杜寅は、如何なる人か、分からぬ。

【詩意】この柏樹は、本來の特質として、節くれ立つて、輪囷として居るが、根を託す處が宜しくなかつたので、何分不遇である。されば、瀕死の氣色は、十分に見えて居るが、流石に、生意は餘程殘つて居る。その物古りたる切り株は、半身焦げて仕舞ひ、殘れる葉は、小兒の切り髮の片方が禿げた樣に見える。漢の諸陵に植ゑられたのは、まことに有り難いことであつて、火災に遭つたのも、陸渾の山火事ではなかつた。今見るところ、幹は傾いて、その麻痺したる樣は、扶けを待つが如く、節には、穴が明いて居て、その創は繃帶でもして貰はなければならぬ樣である。下の穴には、大蟻が巢を構へて居るし、上の孔には、似我蜂が行列をなして居る。風に壓倒されると、その聲、哀を告ぐるが如く、雨に冒されると、汗が粒をなして見える。その空洞に蟄居して、蝮蛇は其身を容れられしを喜び、脆い枝を攀ぢて、猿は落ちむことを心配して居る。これを削つた處で、棟梁の用には中らず、ゑぐつて見ても、到底舟にはならない。天蓋の如き葉は萎んで、青葱の色を缺き、梢は枯れて、光澤が無くなつて仕舞つた。拾つて圍爐裏で燒く樣な實も結ばず、人の坐する時、牀を庇護する樣な木かげもない。それに寄生して居る蟲を食ひ盡しても、飢ゑた鳥は、なほ之を啄み、巢が傾くと、跛足の雛鳥は、氣の毒にも、躓いて轉げ落ちさうである。瘦せたる形は、慘然として、如何にも弱弱しく、突き出た腹は、腫れ上つて、膨れて居る。藤蔓が卷き付いて居るから、それを假りて、粧を爲して居るものの、苔が剝げると、樹身を露はして、全く裸である。この木の持主は、なほ惜んで、大工が顧みて欲しいと云ひはせぬかと思ひ煩ひ、木こりは、伐らうとしても、傍から窺つて、寺僧の見巡り

を避けて居る。何分土は瘠せて居て、力衰へ易く、巖は危くして、勢落ち付いて居られない。嚴しい霜に遭つて殺されるのは、心配であるが、甘露が下れば、なほ醫することが出來る。伐つて器具に造られた處で、幸福といふ譯でもなく、不材の爲に却つて禍を逃れた方が、善いに違ひない。今も相變らず、林に依つて支へられ、石に垂れかかつて、磊砢の態を爲して居る。だんだん年を閲した爲に、貞固の姿を失ひ、太陽の光を受けては、小枝の餘り細かいことを愧づるばかり。その後凋の節操は、孔子の御言葉に褒められたのに反く樣であるが、古柏の名は、杜甫の詩に見えて、世に播布して居る。敢て泰山の松の如く、秦の始皇から大夫に封せられることを望んでも居ないが、禹廟の梁とせられた梅樹の如く、自然靈異があつて、鐵の鎖で嚴重に繫がれることもあらう。根は深く蟠まつて、踞み氣味であるし、枝幹は重く架せられて、なかなか脊負ひ切れぬ樣である。天地の氣を受けたことは同じであつて、生は固より均しきも、命數は異にして、豫め測ることは六つかしい。大分古くなつて、膏が抜けて居るから、伐つて燃やした處で、明るくはなく、枝葉の屑は、常に落ちて居こ、掃ふと隨分夥しい。今、われ等は、まことに氣の毒に思つて、これを弔うて詩を作つた位であるが、寺童は、棄てて顧みず、これを培植することも怠り勝である。永久に保護することは、遂に何人を煩はすか知らぬが、今日、吾等に遭つたのは、まことに、汝の爲に幸福である。

風雨聯句

風雨聯句

與會稽張憲在報恩佛寺遇風雨而作

會稽の張憲と報恩佛寺に在り、風雨に遇うて作る

(一)盲風鏃天興。憲(二)凍雨翻海瀉。
盲風、天を鏃つて興り、凍雨、海を翻して瀉ぐ。

(三)魚蝦落半空。啓(四)蛟龍鬬中野。
魚蝦、半空より落ち、蛟龍、中野に鬬ふ。

勢呑(五)九河黃。憲功潤千里赭。
勢は九河の黃なるを呑み、功は千里の赭なるを潤す。

怒疑(六)決沙囊。啓振訝(七)摧屋瓦。
怒つては、沙囊を決するを疑ひ、振つては、屋瓦を摧くかと訝る。

橫行天兵駃。憲大笑(八)電母哆。
橫行、天兵駃せ、大笑、電母哆る。

乾坤發生多。啓道路(九)喝死寡。
乾坤、發生多く、道路、喝死寡し。

(一〇)潦漲濤涌川。憲旱去(一一)煙滅冶。
潦漲つて、濤、川に涌き、旱去つて、煙、冶を滅す。

谷號竟誰噓。啓木撼不自把。
谷は號んで竟に誰か噓く、木撼いて自ら把らず。

神靈眞恍惚。憲造化非苟且。
神靈、眞に恍惚、造化、苟且に非ず。

初占月(一二)離畢。啓又駭(一三)泗沒社。
初め占して、月、畢に離り、又駭く、泗の社を沒するを。

(一四)必變其聖乎。憲(一五)弗迷唯舜也。　必ず變ずるは其れ聖か、迷はざるは唯だ舜なり。

(一六)陰岑氣如炊。啓(一七)高葉聲若打。　陰岑、氣、炊ぐが如く、高葉、聲、打つが若し。

(一八)陽烏韜不見。憲(一九)乾鵲噤皆啞。　陽烏、韜んで見えず、乾鵲、噤皆啞す。

重翳晦復明。啓餘點歇還灑。　重翳、晦復た明、餘點、歇んで還た灑ぐ。

雖悅(二〇)灌園人。憲應愁(二一)渡江者。　灌園の人を悅ばすと雖も、應に渡江の者を愁へしむべし。

(二二)侍王笑楚賦。啓(二三)及我慙周雅。　王に侍して楚賦を笑ひ、我に及びて周雅を慙づ。

(二四)避思泰山巔。憲(二五)戰憶昆陽下。　避は泰山の巔を思ひ、戰は昆陽の下を憶ふ。

雄夫(二六)匕易失。啓客士(二七)蓋難假。　雄夫、匕、失ひ易く、客士、蓋、假し難し。

(二八)旣霑想大田。憲(二九)廣庇思巨廈。　すでに霑うて大田を想ひ、廣く庇して巨廈を思ふ。

桔槔向晚停。啓紈扇未秋捨。　桔槔、晩に向つて停まり、紈扇、未だ秋ならざるに捨つ。

亂號(三〇)官私蛙。憲莫辨(三一)去來馬。　亂號す官私の蛙、辨ずるなし去來の馬。

臥驚浪喧耳。啓歸恐泥(三二)沒踝。　臥して驚く、浪の耳に喧しきを、歸つて恐る、泥の踝を沒するを。

勿憂卷(三三)茅屋。憲且喜憩蘭若。　憂ふる勿れ、茅屋を卷くを、且つ喜ぶ蘭若に憩ふを。

民期歲(三四)有登。啓國荷天錫(三五)嘏。　民は期す歲に登あるを、國は荷ふ天の嘏を錫ふを。

(三六)沛澤宜載歌。憲新篇試姑寫。啓　沛澤、宜しく載ち歌ふべし、新篇、試みに姑く寫す。

【字解】【一】盲風　晴き空を吹く風。禮記に「仲秋、盲風至る」とある。【二】涷雨　强い雨。爾雅に「暴雨、これを涷といふ」とあつて、その注に「今江東、夏月の暴雨を呼んで涷雨となす、離騷に云ふ、令飄風兮先驅、使涷雨兮灑塵と、是れなり」とある。【三】魚蝦落半空　東坡の詩に龍卷魚蝦幷雨落とある。【四】蛟龍鬪中野　杜甫の雨の詩に牛馬行無色、蛟龍鬪不開とある。【五】九河黃　九は大數で多くの河。但し、河は黃河に注ぐものをいふ。【六】決沙囊　史記淮陰侯傳に「龍且、信と濰水を挾んで陣す。韓信、乃ち、夜、人をして萬餘の囊を爲つて、沙を滿盛せしめ、水の上流を壅ぎ、軍を引いて半ば渡るとき、龍且を擊つ」とある。【七】撼屋瓦　史記趙奢傳に「秦軍、鼓噪して兵を勒す、武安の屋瓦、盡く振ふ」とある。【八】電母哆　神異經に「東荒山中、大石室あり、東王公居る、玉女と投壺す。もし入つて、出でざるものあらば、天、これが爲に笑ひ、口を開いて光を流す、今の電是れなり」とあり、東坡の詩に揮雷車、呵電母とあり、廣韻に「哆は、脣の下垂の貌」とあつて、口を開くこと。【九】暍死　日射病に罹つて死ぬこと。【一〇】潦漲　潦は雨後の出水、にはたずみ。【一一】煙滅冶　冶は鍛冶。【一二】月離畢　月が畢といふ宿にかかると雨が降る。詩經に月離于畢、俾滂沱矣とある。離はかかる。【一三】泗沒社　史記封禪書に「宋の太邱の社、亡びて、鼎、泗水彭城の下に沒す」とある。【一四】必變其聖乎　論語に「迅雷風烈、必ず變ず」とある。【一五】弗迷唯舜也　書經に「これを大澤に入る、烈風雷雨にも迷はず」とある。【一六】陰岑　くもりたる山。【一七】高葉聲若打　詩話に「王禹偁の賀春雨の詩に云ふ、打葉雨拳隨手重」とある。【一八】陽烏　太陽を云ふ。【一九】乾鵲　本草釋名に「鵲、性、溼を惡む、故に之を乾といふ」とある。【二〇】灌園人　高士傳に「於陵仲子、人の爲に園に灌す」とある。【二一】渡江者　世說に「衛洗馬、初め江を渡らむと欲す、左右に語つて曰く、この茫茫に對して、覺えず百端交も集まる」とあり、郭狂の復愁の詩に江雨舟無渡とある。【二二】侍王笑楚賦　宋玉が楚の襄王に侍し、巫山神女の事を聞いて、高唐の賦を作りしこと、前に卷十三、詠夢の結末、陽臺莫重問、千古笑巫娥の項にも見ゆ。【二三】及我慙周雅　詩經の大雅に

雨㆓我公田㆒、遂及㆓我私㆒とある。【二四】避思泰山巓　秦の始皇が泰山に登りし時、雨を松樹の下に避け、仍つて、これを大夫に封ぜしこと、前の病柏聯句の中にも見ゆ。【二五】戦愴昆陽下　後漢書光武本紀に「光武、莽と昆陽に戦ひ、莽の兵、大に敗る。會ま大雷風、屋瓦皆飛び、雨下ること注ぐが如し」とある。【二六】匕鳥失　蜀志先主傳に「曹公、從容として、先主に謂つて曰く、今、天下の英雄、惟だ使君と操とのみ、と。先主、方に食うて、匕箸を失ふ」とある。【二七】蓋蘇假　家語に「孔子、將に出でむとして、天雨ふる。門人曰く、商に蓋あり、請ふ假らむ、と。孔子曰く、商、人と爲り財に短。吾聞く、人と交はるものは、長を推して短に違ふ、故に久し。吾、商に蓋あるを知らざるに非ず、借さずして、その過を彰はすを恐るるなり」とある。【二八】旣霑想大田　詩經の大田に旣霑旣足とある。【二九】廣庇思巨厦　杜甫の茅屋爲㆓秋風所㆑破歌に安得廣厦千萬間、大庇㆓天下寒士㆒俱歡顏とある。【三〇】官私蛙　前に卷十三、聞蛙の中にも引いて置いたが、晉書に「惠帝、華林園に在つて、蛙聲を聞き、左右に問うて曰く、この鳴くもの、官の爲めか、私の爲めか。賈胤對へて曰く、官地に在るものは官の爲めにし、私地に在るものは私の爲にす」とある。【三一】去來馬　杜甫の秋雨歎に去馬來牛不㆓復辨㆒とある。【三二】泥沒膝　膝はくるぶし、脛の下部の内外に骨の高く露はれたる處。宣柄の行路難に重車沒㆑膝路莫㆑等とある。【三三】卷茅屋　杜甫の茅屋爲㆓秋風所㆑破歌に八月秋高風怒號、卷㆓我屋上三重茅㆒とある。【三四】歳有登　この秋の豐年なること。【三五】鍋蝦　蝦は稲蝗。【三六】沛澤　雨の潤澤を云ふ。

【題義】 報恩寺は、前に卷十二、報恩寺逢㆓蔣主簿就㆒、送㆑還㆓如皐㆒の題下に注して置いた。蘇州城の北隅に在つて、俗に北寺と稱するので、今も、十一級の高塔が依然として殘つて居る。この首は、張憲と共に、報恩寺に遊び、そこで、風雨に遇つて作つたのである。

【詩意】 黒風は、天を鼓つて吹き起り、暴雨は、丸で海水を翻して注ぐ樣であつて、魚蝦は半空より落ち、蛟龍は野中に鬪ふを疑ふばかり。雨の勢は、九河の黄なるを呑み盡すが如く、その功は、連日天旱、丸で赤くなつた千里の土を潤すに足る位。怒つては、濰水の戰に、川を塞いだ沙嚢を切つて落すが如く、その振動の劇しきは、屋根の瓦を推くかと疑ふばかり。橫行しては、天兵の疾驅する如く、大笑しては電母が口を明く樣である。風雨一たび到りし後は、天地の間、萬物新に發生し、道路にのたれ死にをするものも、少く成らう。行潦は漲つて、波濤川に涌くが如く、旱も忽ち去つて、鍛冶屋の煙が消えた樣である。谷の叫ぶのは、誰が氣を吹くのか、木の撼くのは、自分で把住して居ることも出來ず、恍惚として、神靈の出現を疑ひ、そして、造化の決して苟且ならぬことが分かつた。月が畢の宿に掛つたのを見て、さては雨かと占つたのは、見ん事的中したが、泗水が社を沒するばかりなるは、全く豫想外で、大に駭かされた。かかる迅雷風烈に際して、色を變ずるは、孔子の聖人たる所以、そして、大澤に入つても道に迷はなかつたのは、唯だ舜のみで、何は兎もあれ、聖人は違つたものである。曇れる山山は、雲が涌き出でて、さながら炊ぐが如く、高處の木葉の鳴るは、丸で打鼜がれた樣である。太陽は匿れて見えず、乾を喜ぶ鵲は、默して啞の樣である。重れる雲翳は、晦かつたのが、どうやら、再び明かならむとし、殘れる雨は、一たび歇んで又注いで來る。園に灌ぐ人は、大たすかりで、喜んで居るであらうが、江を渡る人は、舟が出ないので、困まつて居るに相違ない。宋玉が楚王に侍して、朝雲暮雨、巫山の神女を賦したといふのは、取り立てて言ふべき程の事でもなく、初めに公田に雨らし、遂に我が私田にも及ぶといふ小雅の詩の意味は、まことに有り難い。

雨を避けたことに就いては、秦の始皇が泰山の巓に於けるを思ひ、風雨に乘じて戰つたことに關しては、後漢の光武が昆陽の下に於て、王莽の大軍を破りしを憶はしめる。風雨の甚しきに當つては、劉玄德の如き雄夫でも、匕箸を失つたといふし、吝嗇な者から、車蓋を借りるのは、その人の過を彰はす樣なものだといつて、孔子は、わざと差し控へられた。すでに、我が田の霑ひたるに就いては、大田の詩を想ひ、廣く天下の窮士を庇護する爲には、かういふ場合に、大きな家の必要をつくづく感じた。はね釣瓶も、この日暮には、全く用なく、素紈で張つた團扇も、未だ秋ならざるに棄てる位。官私を問はず、隨處の青田には、蛙が亂れ叫び、漲れる水の彼方に去來するものは、馬か、何か、一寸分からない。臥しては、浪聲の耳に喧しきに驚き、歸らむとしては、泥の踝を沒するを恐れる。わが茅屋を吹き飛ばした位は、何でもないことで、今しも、御寺に休憩して居るから、先づ安心である。ただ一雨の爲に、民は今秋の豐年を豫期すべく、國を擧げて、天より福祉を賜はつたことを感謝して居る。この潤澤は、宜しく歌ふべきもので、そこで、新篇を草して、試みに之を寫して見たのである。

虎邱聯句

虎邱聯句

與潯陽張羽・太原王行・鄞郡徐賁游虎阜、用壁間顏魯公韻作

潯陽の張羽・太原の王行・鄞郡の徐賁と虎阜に游び、壁間顏魯公の韻を用ひて作る

(一)山游期屢阻。風雨過今春。羽　山游、期、屢ば阻み、風雨、今春を過ぐ。

偶遂林泉賞。仍同(二)里閈親。行　偶ま林泉の賞を遂げ、仍ほ里閈の親を同じうす。

樹重迷(三)卓午。花盡謝(四)芳辰。啓　樹重つて卓午に迷ひ、花盡きて芳辰を謝す。

事往非前代。僧逢是故人。貢　事往いて、前代に非ず、僧逢ふ、是れ故人。

金精銷(五)虎氣。(六)寶藏衞龍神。羽　金精、虎氣を銷し、寶藏、龍神を衞る。

(七)妖魄憐埋玉。(八)仙詩看勒珉。行　妖魄、埋玉を憐み、仙詩、勒珉を看る。

(九)年登廚有供。村遠寺無鄰。啓　年登つて廚に供あり、村遠くして寺に鄰なし。

池古寒泉定。林喧夏果新。貢　池は古くして寒泉定まり、林喧にして夏果新なり。

(一〇)井名猶記羽。(一一)樓姓尙題陳。羽　井名、猶ほ羽を記し、樓姓、尙ほ陳を題す。

(一二)步策方循澗。廻橈已待津。行　策に步して、方に澗に循ひ、橈を廻して、已に津を待つ。

緣雖喧寂異。妄本去來均。啓　緣は喧寂異なりと雖も、妄、本と去來均し。

摩レ壁追二高韻一。應レ慙レ繼二後塵一。貢　壁を摩して高韻を追ひ、應に後塵を繼ぐを慙づなるべし。

【字解】【一】山游　游山に同じ。【二】里閈親　閈は里門、閭に同じ、同里に居る親友。【三】卓午　亭午、眞晝、李白の詩に「飯顆山頭逢二杜甫一、頭戴二笠子一日卓午」とある。【四】芳辰　春を云ふ。【五】虎氣　前に數ば見ゆ、吳越春秋に「闔閭、ここに葬る、越えて三日、金精、結んで白虎となつて、その上に踞す、故に名づく」とある。【六】寶藏奮龍神　幽怪錄に「開元中、葉天師、標を明州奉化縣に謫す、忽ち一老翁來り謁す、自ら云ふ、守藏の龍、ここを守る千歲、方に炎河の罰を免る、今胡僧の呪水に殺されむと欲す、天師、符を以て之を救へ」とある。【七】妖魄　美人の魂魄、卽ち眞娘を云ふ。その辭は、前に卷六、眞娘墓の題下に注して置いた。【八】仙詩看勒珉　仙詩は淸遠道士の詩、前に卷五、虎邱の題下に注して置いた。勒珉とは、石に刻すること。【九】年登　豐年を云ふ。【一〇】井名猶記羽　前に卷十三、石井泉の題下に注して置いた、虎邱志に「陸羽の石井は、劍池の旁、經藏の後に在り」と記してある。【一一】樓姓尙題陳　虎邱志に「はじめ、寺僧、水を劍池に取り、登降甚だ勞す。宋の隆興二年、陳數文、錢二十萬を出し、兩崖に跨つて樓を建て、その上に井幹を爲り、以て汲むに便す、因つて、陳公樓と名づく」とある。【一二】步屧　杖に縋つて步く。

【題意】張羽・王行・徐賁、ともに北郭十才子に列した人人で、前に春日懷二十友一詩にも見えて居た。虎阜は虎邱。顏魯公、名は眞卿。その詩は、刻二淸遠道士詩一、因而繼作と題して、全篇は左の通りである。

不レ到二東西寺一。于レ今五十春。竭來從二舊賞一。林壑宛相親。吳子多二藏日一。秦皇厭二勝辰一。劍池穿二萬仞一。盤石坐二千人一。金氣騰爲レ虎。琴臺化若レ神。登レ壇仰二生壹一。捨レ宅歎二珣珉一。中嶺分二雙樹一。廻巒絕二四鄰一。窺臨江海接。崇飾歲時新。客有二神仙者一。於レ玆雅麗陳。名高淸遠峽。文聚斗牛津。跡異心寧間。聲同質豈均。悠然千載後。知我挹二光塵一。

この首は、靑邱が張羽・王行・徐賁の三詩友とともに、虎邱に游び、壁間に掲げたる顏眞卿の詩の韻を用ひて、聯句を試みたのである。

【詩意】虎邱に游ばうと約束したものの、今春は、風雨の中に過ぎて、數ば其期を妨げられたが、今日は、偶然にも、林泉の勝賞を遂げ、そして、同里の親友と一處に遣つて來た。木木は重なり合つて、その影は、眞晝に迷ひ、花は落ち盡して、最早、春を送つて仕舞つた。事往いて、すでに前代に非ず、逢つた坊さんは、舊知の者であつた。山頭なる金鐵の精は、かつて化して白虎と爲つたといふが、その氣、すでに銷え、寶藏は、龍神が猶ほ守護して居るとのことである。眞娘は、此に葬つて、さながら玉を埋めたると一般、淸遠道士の詩は、石に刻されて、今でも殘つて居る。豐年の後とて、寺でも、なかなか御馳走があるし、ここは、村にも遠くて、鄰家といふものがない。劍池は古くして、寒泉流れ靜に、林には、風日暖にして、夏の木の實が熟しかかつて居る。井は、陸羽の石井と稱し、樓は、人の姓を其儘、陳公樓と號して居る。杖に縋つて步を移しつつ、溪澗に循ひ、歸途は、舟を移さしめて、渡しを待つて居る。身は猶ほ俗界に在つて、喧寂、緣各異なれども、妄念は、もとより去來ともに均しく消えて居る。されば、寺壁を撫でて、顏魯公の高韻を追ひ、この聯句を物したのであるが、到底、後塵を繼ぐに足らぬのは、まことに愧ぢ入る外はない。

蓮房聯句

與金華宋璲・張孟兼作

蓮房聯句
金華の宋璲・張孟兼と作る

露冷鏡(一)湖秋。璲 波涼練(二)塘曉。
露は冷かに鏡湖の秋、波は涼し練塘の曉。

(三)盤翻綠雲稠。兼 (四)錦破朱霞少。
盤は翻つて綠雲稠く、錦は破れて朱霞少し。

(五)新苞顆(六)微綻。啓 (七)餘葩(八)莖尚嫋。
新苞、顆、微に綻び、餘葩、莖、尚ほ嫋。

(九)瘦繭綴(一〇)寒蠶。璲 尖喙啄(一一)青鳥。
瘦繭、寒蠶を綴り、尖喙、青鳥を啄ましむ。

下惟(一二)玉龍眠。兼 中有(一三)瓊絲裊。
下、惟だ玉龍眠り、中に瓊絲の裊たるあり。

擎重柄欲折。啓 含深(一四)晴尚窅。璲
重きを擎げて柄折れむと欲す、深きを含んで晴尚ほ窅。

孤懸類覆杯。兼 雙立疑(一五)擢表。啓
孤懸、覆杯に類し、雙立、擢表を疑ふ。

初成欣雨滋。兼 漸老怯風掉。啓
初め成つて雨の滋ふを欣び、漸く老いて風の掉ふを怯る。

(一六)多子同根榮。啓 獨婦專房悄。璲
多子、同根榮え、獨婦、專房悄たり。

(一七)妝卸失娉婷。啓 歌來逢窈窕。璲
妝卸して娉婷を失ひ、歌、來つて窈窕に逢ふ。

(一八)剖心效諫忠。兼 泣(一九)頭呈瑞兆。啓
剖心、諫忠に效ひ、泣頭、瑞兆を呈す。

(二〇)裏跡密竅剜。璲 魚目微光皎。啓
裏跡、密竅剜り、魚目、微光皎たり。

(二一)珠珥落(二二)槃多。啓 瑤(二三)軫貯囊小。璲
珠珥、槃に落つること多く、瑤軫、囊に貯へて小なり。

空實外莫辨。 甘苦中自了。
空實、外、辨ずるなし、甘苦、中に自ら了る。

剝殘星滿地。 采盡香餘沼。啓
剝殘して、星、地に滿ち、采り盡して、香、沼に餘る。

(二四)雕筵(二五)飣戢戢。 (二六)玉蟲攢擾擾。
雕筵、飣へて戢戢たり、玉蟲、攢まつて擾擾たり。

送看出小艇。 薦喜對(二七)清醥。兼
看るを送つて、小艇を出し、喜を薦めて、清醥に對す。

新嘗勝(二八)江芡。 遠覓迷(二九)水蓼。
新に嘗めては江芡に勝れり、遠く覓めては水蓼に迷ふ。

(三〇)褰芳想夏初。啓 感物傷秋杪。
芳を褰げて夏初を想ひ、物に感じて秋杪を傷む。

聊茲發(三一)吳詠。啓 一覽煙水渺。璲
聊か茲に吳詠を發し、一覽す煙水の渺たるを。

【字解】【一】鏡湖　浙江紹興縣の南に在つて、一名鑑湖、又の名長湖、唐の玄宗が祕書監賀知章に鏡湖一曲を賜はつたから、又賀監湖とも名づける。宋の熙寧の後、次第に廢して田となつて仕舞つた。【二】練塘　前に卷五、練瀆の題下に注して置いたが、その原注に「太湖に在り、舊傳、吳王開いて以て兵を練るところ」とある。【三】盤翻　蓮の葉の形、盤に似たるより云ふ。【四】錦破　蓮の花の斷え間を云ふ。【五】新苞　苞はつと、つつみ、蓮の實の新に出來たのを云ふ。【六】顆　蓮の實の塊まり。【七】餘葩　殘れる花。【八】莖尚嫋　嫋はしなやかなる貌。【九】瘦繭　陳高の詩に「結實吐秋繭」とある。【一〇】寒蠶　齊民要術に「永嘉に八蠶繭あり、九月、寒蠶を績む」とある。【一一】青鳥　漢武故事に「七月七日、忽ち青鳥あり、殿前に飛集す。東方朔曰く、これ西王母

來らむと欲す、と。しばらくあつて、王母至る、三青鳥、王母の旁に夾侍す」とある。【一二】 玉龍眠　清異錄に「崔遠の家墅、長安城南に在り、就中、藕池に巨藕を産し、一時に貴重せられ、相傳へて藕寶となし、又玉臂龍といふ」とある。【一三】 瓊蘇臭　朱超道の詩に摘蓮上葉拖出藕中絲」とある。【一四】 瞎倒實　蓮の實の穴が人の目に似て居て、目玉は、まだ暗く、はつきりとせぬといふ意。【一五】 晷表　日かげ柱、時を計る爲に目を盛りし柱。史記司馬穰苴傳に「表を立て、漏を下す」とある。【一六】 多子　實の粒の多いこと、張籍の采蓮曲に秋江岸邊蓮子多とある。【一七】 散卸　紅妝を取り去る。【一八】 剖心效諫忠　史記殷本紀に「紂、淫亂甚し。庶兄微子、數ば諫むれども從はず、これを去る。比干諫む、三日去らず、紂、怒つて曰く、吾聞く、聖人の心に七竅あり、と。剖いて其心を觀る」とある。【一九】 竝頭　蓮の花は一莖に一花が普通であるが、二花を生ぜしものを竝頭といひ、祥瑞として珍重する。鄧堯夫の雙頭蓮の詩に、漢殿嬋娟雙姊妹、天台縹緲兩神仙、當時儘有風流格、誰向人間作瑞蓮」とある。【二〇】 褭蹄　馬蹄に金を當てること、卽ち蹄鐵、韻會に「褭蹄は金の名」とあり、漢書武帝紀に「太始二年、白麟を獲、以て宗廟に饋る、渥洼水、天馬を出し、泰山、黃金を見る、故に黃金を名づけて麟趾褭蹄となし、以て瑞に協ふ」とある。【二一】 珠珥　珥は耳飾り。【二二】 落槃　槃は盤に同じ。【二三】 琢軫　軫は、琴の下に在つて絃を轉ずる用を爲すもの、卽ちこま。【二四】 雕筵　立派な宴席。【二五】 飣餖盤　用意して浮山あること。【二六】 玉蟲　蓮の實を形容して云ふ。【二七】 清醥　醥は澄み酒。【二八】 江芡　芡は水ふき、本草に「花は莖頂に在り、亦た雞喙及び蝟喙の如し、剝開すれば、內に斑駁の軟肉あり、裹の子、果累として珠璣の如く、殼內の白米、狀、魚目の如く、取收して食ふ」とある。【二九】 水蓼　水たで。【三〇】 褰芳　蓮の花を采る。【三一】 吳詠　吳地の歌。

【題義】 蓮房は蓮の實、杜甫の秋興に露冷蓮房墜粉紅とあり、本草に「花褪せて、蓮房、菂を成す、菂房に在つて、蜂子、窠に在るの狀の如し、六七月、嫩なるものを采つて生食すれば脆美なり、秋に至つて、房枯る、子黑くして、その堅きこと石の如し、八九月、これを收め、黑殼を斫り去る、これを蓮肉といふ」とある。宋璲・張孟兼の二人、ともに金華の人、金檀の按に「璲は學士濂の子、中書舍人、孟兼は禮部主事」とある。この詩は、宋・張二人と共に、蓮の實を詠ずる爲に、聯句を試みたので、多分、青邱の滯京中に係るだらうと思はれる。

【詩意】 鏡湖秋至つて、白露冷かに、練塘曉早く、碧波涼しく、兩地、ともに蓮の名所である。眺むれば、盤の如き葉は、翻つて、綠雲稠きが如く、錦の如き花は中斷して、朱霞も少げに見える。その間には、蓮の實もちらほら見え、新に苞を爲せしものは、その塊が、心持綻び裂けむとし、殘れる花の莖は、尙ほたをやかである。時とすると、寒蠶が、その處に痩せた繭を結んで、ぶら下つて居ることもあるし、青鳥は、尖つた嘴を以て、これを啄んで居る。下には、玉龍と稱せらるる蓮根が、泥中に潛んで居るし、中には、莖を通じて、奇麗な絲が裊裊として居る。その實は、隨分重いから、これを擎げて居る柄は、折れさうであるし、一寸見ると、人の目の如く、深く窪んで居て、睛に相當する處は暗くて、はつきりとは分からぬ。その實が一つ懸つて居る處は、杯を覆した樣であるし、竝び立つて居る時は、日かげ柱を衝き立てたかと疑ふばかり。はじめて實を成した時は、雨に滋ふを喜び、次第に成熟しかかると、風に搖すられることを怯れる。その粒は多くして、同根の繁殖を期すべく、そして、各粒は、一人の女が悄然として閨房を專有して居る樣である。蓮の花は落ちて、すでに紅妝を卸したから、娉婷の姿、復た見るべからず、そして、相襲らず、歌を唱へつつ來る少女は、窈窕にして、なまめかしい。その實を取つて、中心から剖くと、丁度、比干が極諫して胸を裂かれた

樣であるし、二つ一處に在るのは、謂はゆる竝頭で、瑞祥として珍重される。仔細に見ると、馬の蹄鐵に小さな穴を幾つも剜つた樣で、中なる粒は、魚の目が皎皎として微光を放つて居るが如くであるその粒を取り出すと、多きことは、珠の耳飾りを盤上に落せしが如く、その小なることは奇麗な琴のこまを囊中に貯へた樣である。その粒は、しひなか、實があるか、外からは辨別することが出來ないので、甘いも、苦いも、食つた上の事である。殼を剝いで棄てると、恰も星が池上に散布して居る樣であるし、これを采り盡すと、餘香が池に殘つて居るだけである。やがて、立派な筵席に持ち出して澤山に用意してあると、玉蟲が擾擾として攢集して居る樣である。さきには、これを采りに出る小舟を看送つたが、今は、肴核の一として卓上に列べられて、淸醥に對して居る。これを食へば、その味は、水ぶきの實に勝つて居るし、遠くから探がしに出る時は、蓼の花咲く汀岸の間に迷ふことがある。蓮の花を採つたのは、夏の初であつたが、實を食ふのは、秋の末で、物に感じては、自然、傷心を禁じられない。ここに、吳地の歌の節を以て、聊か蓮の實を詠じたが、一望すれば、煙水渺渺として、ゆくりなくも、わが愁を催すことである。

【餘論】通篇、唯だ形容刻劃を旨とし、內容よりは、修辭の技工を重んずることは、題の性質上、然らしむるところである。區區たる蓮の實を、これ程までに言ひこなしたのは、兎に角、作者の才力を觀るべきものであらう。

六言律詩

瓊姫墓

瓊姫の墓

夢別芙蓉殿頭。　夢に別る芙蓉の殿頭、
墮釵零落誰收。　墮釵零落、誰か收めむ。
土昏淸鏡忘曉。　土は昏くして、淸鏡、曉を忘れ。
月冷珠襦恨秋。　月冷かにして、珠襦、秋を恨む。
麋鹿昔來廢苑。　麋鹿、むかし、廢苑に來り、
牛羊今上荒邱。　牛羊、今、荒邱に上る。
香魂若怨亡國。　香魂、もし亡國を怨まば、
莫與西施共游。　西施と共に游ぶ莫れ。

【字解】【一】芙蓉殿　固有名詞ではなく、蓮の花の匂ふ水殿の義。
【二】珠襦　處處に玉の飾を施したる下著、殉葬に用ひて棺中に入れる。

【題義】先秦時代の詩は、主として四言、次いで、兩漢の間に、五言・七言が發生し、後には詩の聲律を吟味した結果、唐になつて、律絕等、謂はゆる近體が出來たが、矢張、五言七言に限られて居た。元來、六言といふものは、漢語の特質かも知れぬが、妙に間が抜けて居て、作り惡く、又讀んでも面

白くない。理論上からいへば、五言七言と同じく、六言の律絕、卽ち近體も、古體も、ともに有り得べき筈であつて、現に唐人には、六言絕句の作を試みたものもあるが、萬首絕句を檢しても、三唐を通じて、三四十首しか無く、六言律は、未だ其作を見ず、これは、もつと後に成つて出來たものであらう。六言ばかりの古詩は、六朝の頃に見えるが、もとより少い。靑邱には、六言の律絕が若干首づつあるが、おもふに、少壯の頃、專ら試作を事とした時に係るだらうと思ふ。瓊姬は、題下の原注に「夫差の女なり」とあつて、その詳は、前に卷十三、吳女墳の題下に注して置いたから、それを參照して貰ひたい。

【詩意】瓊姬は、夢に蓮の花匂ふ水殿に別れし儘、料らずも、死んで仕舞つたので、遺棄された金釵は、誰が拾ひ收めたか。一たび葬を送られし後は、土皆くして、棺中に入れた鏡も曇つた儘、曉を忘れたるが如く、月冷かなる處、殉葬せし珠襦は、秋の寂しさを恨んで居るであらう。間もなく、吳國は滅びて仕舞ひ、むかしは、麋鹿が廢苑を徘徊したが、今でも、牛羊は荒邱に上つて居る。瓊姬にして、若し靈あつて、亡國の遺恨に堪へぬならば、地下に於て、西施と一處に遊ばぬが善いので、その西施こそ、汝の父の夫差を惑はし、遂に吳を亡ぼさしめた張本である。

甫里卽事、四首　　甫里卽事　四首

長橋短橋楊柳。　　長橋短橋の楊柳、
前浦後浦荷花。　　前浦後浦の荷花。
人看旗出酒市。　　人は旗を看て酒市を出で、
鷗送船歸釣家。　　鷗は船を送つて釣家に歸らしむ。
風波欲起不起。　　風波、起らむと欲して起らず、
煙日將斜未斜。　　煙日、將に斜ならむとして未だ斜ならず。
絕勝霅(一)中剡(二)曲。　　絕えて勝る霅中剡曲、
(三)金盞玉舲堪誇。　　金盞玉舲、誇るに堪へたり。

【字解】【一】霅中　卽ち霅谿、一名霅水。二源あつて、一を東霅といひ、天目山の陽に出で、東流して臨安・餘杭を經、又東北し、德清を經て、餘不谿となり、北、吳興に至つて、霅谿となる。一を西霅といひ、天目山の陰に出で、東北流して孝豐を經、又北して安吉を經、又東して長興を經、吳興に至つて兩谿合流し、小梅・大滃、兩湖口より太湖に入る。岸を夾んで、霅花多く、秋時、水上に飛散して雪の如きが故に名づけたといふことである。【二】剡曲　前に卷五、剡源九曲に詳述して置いた。【三】金盞玉舲　南部煙花錄に「南人魚舲、金桴を細鏤にして之を拚し、號して、金盞玉舲といふ」とある。

【題義】題下の原注に「甫里は松江の上に在り、陸魯望の居るところなり。余、その北渚に寓し、頗る煙波の勝を擅にす、爲に六言四首を賦す」とあり、甫里志に「今の崑山縣六直鎭」とある。

【詩意】長橋短橋、いづれの橋でも、その近くには、柳が枝垂れて居るし、前浦後浦、どこの入江でも、その中には蓮の花が今を盛りと咲き出でて居る。人は酒旗を眺めつつ、酒市より出でて去り、鷗は

釣船を送りつつ、釣家に歸らしめる。風波は起りさうで起らず、煙は斜に成りかけて、まだ斜にならぬ。この地は、苕中剡曲に比して、勝れりと爲すべく、中にも、金齏玉膾は、殊に自慢の珍味である。

(一)唼唼綠頭鴨鬬。　唼唼として、綠頭の鴨鬬ひ、
(二)翻翻紅尾魚跳。　翻翻として、紅尾の魚跳る。
沙寬水狹江穩。　沙寬く、水狹くして、江は穩に、
柳短(三)莎長路遙。　柳短く、莎長くして、路遙かなり。
人爭渡處斜日。　人、渡を爭ふ處、斜日、
月欲圓時大(四)潮。　月圓ならむと欲する時、大潮。
我比(五)天隨似否。　われ、天隨に比して似たるや否や、
扁舟醉臥吹簫。　扁舟、醉臥して、簫を吹く。

【字解】【一】唼唼　口を動かす貌。【二】翻翻　身を翻す貌。【三】莎長　莎は溼地に生える草。【四】大潮　宋の姚寬の論に「日は衆陽の母、陰は陽に生ず、故に、潮は日に附く、月は太陰の精、水は陰類、故に潮は月に依り、日に隨つて應ず。月は陰に依つて陽に附き、朔望に盈ち、朏魄に消え、上下弦に虛、輝朒に息む、故に潮に大小あり」と見ゆ。【五】天隨　甫里志に「陸龜蒙の宅は、卽ち白蓮寺西邊一帶、龜蒙、一に天隨子と號す。高翰林啓の宅は、甫里に在り」と見ゆ。

【詩意】綠頭の鴨は、唼唼と口を動かして相鬬ひ、紅尾の魚は、翻翻と身を飄して獨り跳つて居る。沙は廣く、水は狹くして、江流は極めて緩かであるし、柳は長く、溼草は短くして、村路は遙に通じて居る。われは、天隨子に比べて、似たるや否やを知らざれども、醉うて、扁舟に臥して、簫を吹きすさんで居る。

(一)江廟漁郎晚祭。　江廟、漁郎晚に祭り、
(二)津亭(三)估客朝過。　津亭、估客朝に過ぐ。
鐘邊山遠水遠。　鐘邊、山遠く水遠く、
篷底風多雨多。　篷底、風多く雨多し。
饑蟹銜沙落(四)籪。　饑蟹沙を銜んで籪に落ち、
(五)黠禽映竹窺羅。　黠禽竹に映じて羅を窺ふ。
(六)丫頭兩(七)槳休去。　丫頭兩槳、去るを休めよ。
爲唱吳(八)儂櫂歌。　爲に唱へよ吳儂の櫂歌。

【字解】【一】江廟　江邊の祠廟。【二】津亭　舟つきの處に在る亭子。【三】估客　行商人。【四】落籪　籪は竹で造つて蟹を捕ふる器。【五】黠禽　わるずるい小鳥。【六】丫頭　髮を結んで居る少婦。【七】兩槳　二つの櫂、丁度ボートを漕ぐ樣に兩手に櫂を扱つて居るのであらう、劉禹錫の詩に「丫頭小兒蕩二畫槳一」とある。【八】吳儂　儂は吳地の方言にて吾といふ意。吳儂は吳人に同じ。東坡の詩に「語音猶是帶二吳儂一」とある。

【詩意】漁郎は、晚に歸つて來て、江邊の廟宇に祭を爲し、商估は朝に出かけて、津頭の亭子に立ち寄りなどして居る。鐘の鳴り出づるあたりは、山も遠く、水も遠く、篷を掩うて居る其下には、風も

多く、雨も多い。饑ゑた蟹は、沙を銜んで罭の中に落ち、わるずるい小鳥は、竹に映じて網を窺ひ、容易にかからない。髮を結べる少婦よ、兩手に櫂を操つて漕ぎ去らず、わが爲に、吳地の舟歌でも歌つて聞かせて吳れろ。

横網不遮過客。　網を横ふるも、過客を遮らず、
渡船時載歸僧。　船を渡して、時に歸僧を載す。
炊菰飯勝炊稻。　菰を炊ぐの飯は、稻を炊ぐに勝り、
采蓮歌似采菱。　蓮を采るの歌は、菱を采るに似たり。
煙外晚村弄笛。　煙外晚村、笛を弄し、
沙邊夜店停燈。　沙邊夜店、燈を停む。
短蓑醉拍銅斗。　短蓑醉うて銅斗を拍つ、
我亦年來稍能。　われ亦た年來稍や能くす。

【字解】〔一〕炊菰飯　眞菰の實は米粒の如く、矢張、炊いで飯とすることが出來る、杜甫の秋興に波漂菰米沈雲黑とある。〔二〕停燈　燈火を消す。〔三〕拍銅斗　酒を汲む銅製の長柄杓を敲く、前に卷八、劉松年蠶の詩中に注して置いた。

【詩意】網を張つた處で、通行の人の邪魔には成らず、渡し船は、時たま、托鉢して歸る坊さんを載せて行く。菰の實を炊いた飯は、米の飯よりも珍味であるし、蓮の花を采る歌は、菱を采る歌に似て居る。夕煙の彼方なる村里では、笛を吹いて居るし、江邊夜深き時、茅店では燈火を消して寢しづまつて居る。漁父は、短い蓑を著た儘、醉ふと銅斗を拍つて濁聲高く歌ふが、われも亦た年ごろ遣つて居る爲に、どうやら、出來る樣になつた。

【餘論】この四首は、六言絶句としては、可なりに出來て居るので、第一首の後聯、第二首の兩聯、第三首の前聯、第四首の後聯など、いづれも、新警諧婉を以て推稱すべきものである。但し、第一第四兩首の前聯の如きは、その各句が、三言二句とも看られ得るので、六言として正格なる語法ではない。わが邦人の擬作などは、大抵、かういふ句ばかりで、その六言は、全然成つて居ないといつても善い。

七言律詩

大駕親祀方邱選射齋宮奉次御製韻

大駕、親ら方邱を祀り、齋宮に選射す、御製の韻に次し奉る

奠璧方壇曉祝釐。　璧を方壇に奠して、曉に釐を祝し、
豹竿風動從靈祇。　豹竿、風は動いて靈祇よりす。

【字解】〔一〕奠璧　玉を供へる、前に卷十三、車駕南郊の詩中、璧廂孤月滿の句下の注に見ゆ。〔二〕方

(六)獻符多士歌昌運。符を獻じて、多士、昌運を歌ひ、
(七)扈蹕諸蕃覲盛儀。蹕に扈して、諸蕃、盛儀を覲る。
(八)郊射(九)貫侯初復古。郊射、侯を貫き、はじめて古しへに復り、
(一〇)汾祠獲鼎未云奇。汾祠、鼎を獲るも、未だ奇と云はず。
山川(一一)效順年(一二)多穀。山川、順を效して、年に穀多し、
神答皇心定有期。神の皇心に答ふる定めて期あり。

壇 地祇を祀る壇。天を祀るには壇を圓くするに對して、これは四角にする。【三】覲釐 釐は將來の福祉を祈ること。わが邦人が慶賀と同じ意味に漫然用ひて居るのは、恕すべからざる誤である。釐は幸福。【四】豹竿 豹を畫いた旗、前に卷一、上之回の詩中に見ゆ。【五】靈祇 祇は地祇。【六】獻符 漢書天文志に「漢の元年十月、五星、東井に聚まる、これ高皇帝受命の符なり」とあり。後漢書光武紀に「光武、先に長安に在りし時、同舍生彊華、關中より赤伏符を奉じて曰く、劉秀、兵を起して不道を捕へ、四夷雲集、龍、野に鬪ひ、四七の際、火、主とならむ」とある。天位に上る符命を獻ずる。【七】扈蹕 上林賦の注に「後從を扈といふ」とあり、夏官隷僕の注に「蹕とは、行者を止めて道を淸うするを謂ふなり」とあつて、行幸に陪從すること。【八】郊射 郊外に於て射禮を行ふ。【九】貫侯 侯は的、的に射中てる。儀禮の鄕射禮に「凡そ侯、天子は熊侯白質、諸侯は麋侯赤質、大夫は布侯、畫くに虎豹を以てし、士は布侯、畫くに鹿豕を以てす」とあり、詩經に射則貫兮とある。【一〇】汾祠獲鼎 漢書に「武帝、汾陰に寶鼎を得て、甘泉に藏す。羣臣、壽を上り、陛下の周鼎を得るを賀す。吾丘壽王曰く、周鼎に非ず、と。上怒る。對へて曰く、天、有德に祚し、寶、自ら出づ。これ、天、以て漢に與ふ、これ漢鼎、周鼎に非ざるなり、と。上曰く、善し」とある。【一一】效順 順氣を致し、地變など絕無なること。【一二】多穀 穀物が善く出來る、卽ち豐年。

【題義】明法傳錄に「洪武三年六月、親ら地祇を方邱に祀る」とある。選射は、禮記の射義に「天子、射を以て諸侯卿大夫士を選ぶ」とあつて、專ら射藝を較べること。齋宮は、親祀の際に於ける控所。この詩は、天子が親ら方邱に於て地祇を祀り、その儀畢りし後、齋宮に於て選射を爲し、そして御製の詩があつたから、謹んで、その韻に次し奉つたといふのである。

【詩意】玉を方壇に供へて、曉に將來の福祉を禱ると、豹を畫いた旗の竿を風が吹き動かして、さながら、地祇が感應された樣である。今しも、多くの卿大夫士は、祥瑞の符命を獻じて、帝室の昌運を謳歌し、疆外の諸蠻族は、大駕に陪從して、この盛儀を拜見した。次いで、郊射を行はれ、見事に的に射中てるものもあつて、儀禮の復古、初めて此に全く、漢の武帝が汾陰で鼎を獲たことなどは、決して、奇とするに足らぬ。今後は、山川、順氣を致して、豐年が打續くに相違なく、神樣が天子敬虔の誠心に報答されることは、もとより期あつて、何等の疑を挾むにも及ばない。

奉迎車駕享太廟還宮　車駕、太廟に享して宮に還るを迎へ奉る

(一)鳴蹕聲中(二)曉仗廻。鳴蹕聲中、曉仗廻る、
(三)錦裝(四)馴象踏紅埃。錦裝馴象、紅埃を踏む。
半空雲影看旗動。半空の雲影、旗の動くを看、

【字解】【一】鳴蹕 警蹕に同じ、行幸を豫告して道を淸めしめる。【二】曉仗 曉に成つて還幸せられる儀仗。【三】錦裝 にしきの衣を

滿道天香(五)識駕來。　滿道の天香、駕の來るを識る。
漢(六)酎祭餘清廟閉。　漢酎、祭餘、清廟閉ぢ、
舜(七)衣垂處紫(八)宮開。　舜衣、垂るる處、紫宮開く。
禮成海内人皆慶。　禮成つて、海内人皆慶す、
獻頌應慙自乏才。　頌を獻ず應に自ら才の乏しきを慙づなるべし。

署せてある。【四】馴象　漢書武帝紀に「南越馴象を獻ず」とある。【五】天香　御氣に同じ、一種の尊い匂ひ。【六】漢酎　史記平準書に「漢儀注、王子、侯となる。侯は、歳ごとに戸口を以て、黄金を漢廟に酎す、皇帝、臨んで獻金を受け、以て祭を助く」とある。【七】舜衣　易に「黄帝堯舜、衣裳を垂れて天下治まる」とある。【八】紫宮　七略に「王者は、天を體して行ふ。明堂の制、内に太室あり、紫微宮に象る」とあり、春秋合誠圖に「紫宮は大帝室なり」とある。

【題義】　この詩は、天子が、夜、太廟に於て祖宗を祀り、儀畢つて、還幸に成るのを迎へて作つたのである。

【詩意】　太廟の祭祀すでに畢り、曉早く、警蹕の聲の中に、天子は、儀仗を整へて、還幸になり、錦の衣を著せた馴象までが、御供をして、しづしづと、紅塵を踏みつつ行く。半空の雲影は、旗の動くのであるし、滿道の尊ひ匂は、龍駕の近づくことを識別することが出來る。漢代の制に倣ひ、諸侯の酎金を得て祭儀を行ひし後は、清廟の戸を閉し、やがて、紫宸に還幸になると、堯舜の如く、衣裳を垂れて、御座に就かれる。すでに、大禮が畢れば、海内の人が、競うて御喜びを申し上げるのに、頌を獻せむとして、その才に乏しきは、まことに、慙愧に堪へぬ次第である。

晩登南岡望都邑宮闕二首

晩に南岡に登りて都邑の宮闕を望む　二首

落日登高望帝畿(一)。　落日、高きに登つて、帝畿を望む、
龍(二)蟠山下見龍飛。　龍蟠山下、龍の飛ぶを見る。
雲霄雙闕開黃道(三)。　雲霄雙闕、黃道を開き、
煙樹三宮(四)接翠微。　煙樹三宮、翠微に接す。
沙(五)苑馬閒秋獵罷。　沙苑、馬は閒にして、秋獵罷み、
天街車鬪(六)晩朝(七)歸。　天街、車鬪うて、晩朝歸る。
明朝欲獻昇平頌。　明朝獻せむと欲す昇平の頌、
還逐仙班(八)入瑣(九)闈。　還た仙班を逐うて瑣闈に入る。

【字解】【一】帝畿　王畿、即ち御膝元の地、詩經に王畿千里、維民攸宅とある。【二】龍蟠山下　前に卷七、寓天界寺の詩中に引いて置いたが、鍾山龍蟠、石城虎踞とあつて、龍蟠山は即ち鍾山。【三】黃道　漢書天文志に「日に中道あり、中道とは黃道なり」とあり、沈佺期の詩に、池開天漢分黃道とある。太陽の通過する道、轉じて天子御幸の道、即ち御成り道。【四】三宮　東京賦に乃營三宮、布政頒常とあるに本づく、ここでは、南京宮城の正殿を指して云ふ。明紀事に「吳の元年九月癸卯、新内三殿成り、後に宮を爲り、乾清・坤寧といふ」とあつて、三宮は、正殿と天子・皇后の宮とを併稱す。【五】沙苑　唐書高祖紀に「武德六年、華陰に如いて、沙苑に獵す」とある。【六】車闘　元稹の連昌宮詞に揚家諸姨車闘風とあつて、車が競爭する樣に疾走すること。【七】晩朝　遲く參内すること。【八】

仙班　大官の班列。【九】宮中の控所、ここでは翰林を云ふ。

【題義】南岡は地名か、それとも、南京の南なる岡陵か、よく分からぬ。この詩は、日暮に南岡に上り、京中の皇城を望んで作つたものである。

【詩意】夕日の西に斜なる時、高岡に登つて、帝畿の地を望んだ。鍾山は龍の蟠るが如く、その麓には、新に卽位された天子の皇城がある。雙闕は、高く雲霄に聳えて、その間に御成り路を開き、三宮は煙樹を帶びて、遠く山邱の翠微に連接して居る。秋獵、方に罷んで、沙苑の馬も閒暇であるし、遲く參朝を濟まして歸る人人は、都大路に車を急がせて、さながら競爭でもして居る樣である。予は、明朝、昇平の頌を獻する積りで、その時は、大官の班列を追うて、宮中の控所に參内するであらう。

(一)秦金不厭氣佳哉。　秦金厭せず、氣佳なるかな、

(二)紫蓋黄旗此日開。　紫蓋黄旗、この日開く。

殘雪已銷(三)鳷鵲觀。　殘雪すでに銷ゆ鳷鵲觀、

浮雲不隱(四)鳳凰臺。　浮雲隱さず鳳凰臺。

山如(五)洛下層層出。　山は洛下の如く層層として出で、

江自(六)巴中渺渺來。　江は巴中より渺渺として來る。

(七)六代衣冠總塵土。　六代の衣冠、總て塵土、

幸逢(八)昌運莫興哀。　幸に昌運に逢うて哀を興す莫れ。

【字解】【一】秦金不厭　厭は壓、秦の始皇の時、この地に天子の氣があるといつたので、金玉雜寶を埋めて之を鎮壓した、その詳は、前に卷十一、金陵雨花臺の詩中に注して置いた。【二】紫蓋黄旗　紫の車蓋、黄色の旗。ともに天子の御用になるものである。【三】鳷鵲觀　輔黄圖に「武帝の建元中、鳷鵲觀を甘泉宮の苑垣内に作る」とあり、杜甫の詩にも雪殘鳷鵲亦多時とある。もとより、南京の宮城には無いが、宮内の高樓を指し、假りに比擬して云つたのであらう。【四】鳳凰臺　前に卷六、送袁憲史の詩中にも詳述したが、この臺は、南京の南に在つて、宋の元嘉中、王顗が異鳥の山に集まるを見て鳳凰となし、遂に臺を山に起して、かく名づけたのである。駱賓王の帝京篇に複道斜通鳷鵲觀、交衢直指鳳凰臺とあつて、青邱の鳷鵲鳳凰の對は、無論、これから轉化したのである。この中、鳷鵲觀は前に云ふ通り假設であるが、鳳凰臺は、實際、南京にも在るのである。【五】洛下　洛陽。【六】巴中　一統志に「大江の源は、巴蜀の岷山より出で、湘漢豫章の諸水を合せて來り、都城の西南より西北を經、儀江を過ぎ、東流して海に入る」とある。【七】六代　卽ち六朝、吳晉宋齊梁陳。この句は、李白の晉代衣冠成古丘より轉化したものであらう。【八】昌運　盛なる氣運。

【詩意】秦の始皇が黄金を埋めても鎭壓し切れず、この地に於ては、王氣長しへに盛に、現に天子が都を奠められて、紫蓋黄旗の開くを見た次第。鳷鵲觀に比すべき宮中の高樓の屋根には、殘雪消えて痕だに留めず、眼前には、名だたる鳳凰臺が聳えて居て、浮雲も之を隱さない。山は洛陽と同じく、近く層層として出で、江は巴蜀の方から渺渺として流れ來り、さすがに、形勝の固を成して居る。顧みれば、六代の衣冠は、すべて塵土に歸して仕舞つたが、今日幸にも興國の昌運に逢つたのであるから、決して悲哀の感を起してはならぬ。

【餘論】　このあたりの七律數首は、いづれも、靑邱が南京に居る時、作つたので、專ら昭代新興の氣運を謳歌して、務めて博大昌明の致を得やうとして居るが、これを唐人の早朝諸作等に比すると、夐然たる徑庭があつて、時勢遞降の影響は、斷じて否定することが出來ない。但し、この首の兩聯の如きは、氣象壯濶、且つ對仗精當で、勝を王賈岑杜に爭はむとし、まことに必傳の名作である。

奉天殿進元史

奉天殿、元史を進む

詔預（一）編摩辱（二）主知。　詔して編摩に預つて、主の知を辱うす、
（三）布衣亦得拜（四）龍墀。　布衣、亦た龍墀を拜するを得たり。
（五）書成一代存（六）殷鑒。　書は一代を成して、殷鑒を存し、
朝列千官備（七）漢儀。　朝に千官を列して、漢儀に備ふ。
（八）漏盡秋城（九）催仗早。　漏は盡きて、秋城、仗を催すこと早く、
燭光曉殿（一〇）卷簾遲。　燭は光つて、曉殿、簾を卷くこと遲し。
時淸（一一）機務應多暇。　時は淸くして、機務應に暇多かるべし、
（一二）閣下從容幸一披。　閣下從容、幸に一たび披け。

【字解】【一】編摩　編輯して整理する。眞德秀の大學衍義表に「菲薄を揆らず。編摩に效はむと欲す」とある。【二】主知　聖主の知遇。【三】布衣　無官の身。【四】龍墀　宮中の丹墀。殿階の下で、しき瓦を鋪き詰めた處。【五】書成一代　元の一代の事實を書き上げる。從信錄に、「洪武二年二月、詔して元史を修し、李善長等に詔して監修せしめ、宋濂、王禕を召して總裁となし、汪克寬等十六人を徵して、同じく纂修せしめ、局を天界寺に開く。克寬等至る。上、これに諭して曰く、今、爾等に命じて纂修せしめ、以て一代の史に備ふ。務めて、その事を直述し、溢美する毋れ、惡を隱す毋れ、庶はくは、公論に合し、以て鑒戒を垂れよ」とある。【六】殷鑒　他人の失敗の跡を見て、自ら戒と爲すこと。殷人の鑑戒とすべきは、近く其前なる夏の滅亡が善き手本なりとの意。詩經に殷鑒不遠、在夏后之世と見ゆ。因に、胡澹菴の上高宗封事には、商鑒不遠に作つてあるが、商は卽ち殷の別名だからである。【七】漢儀　後漢書光武紀に「光武、司隸校尉を行ひ、僚屬を置く。時に三輔の吏士、皆これを見て歡喜して自ら勝へず、老吏、或は涕を垂れて曰く、圖らざりき、今日、復た漢官の威儀を見むとは」とある。元は、宋の後を承けたが、もと塞外の蠻族であるから、古制を破壞する傾向があつたのを、明の太祖に至つて、再び之を古しへに復したのである。【八】漏盡　水時計の香が盡きて、追追夜明けになる。【九】催仗　唐制に「殿下の兵衞を仗といふ」とあり、儀衞志に「朝會の仗、三衞番上、分つて五仗となし、皆刀を帶び、仗を捉へ、東西廊下に列し、每日、四十六人を以て內廊閤外に立たしめ、號して內仗といふ。朝罷めば、仗を放つ。天子出づれば、細仗黃麾仗あり」と見ゆ。【一〇】卷簾　天子が殿上に出御に成つた時に、簾を卷き上げる。宋史呂端傳に「眞宗、すでに立ち、簾を垂れて舊臣を引見す。端、殿下に平立して拜せず、簾を卷かむことを請ひ、殿に升つて審視し、然る後、階を降り、羣臣を率ゐて拜し、萬歲と呼ぶ」とある。【一一】機務　萬機の御務め。【一二】閣下　高閣の下、閣は文書等を入れて置く小座敷。

【通義】　明紀事に「吳の元年九月甲戌朔、太廟成る。癸卯、新內の三殿成り、奉天・華蓋・謹身といひ、左右の樓を文樓・武樓といひ、後に宮を爲り、前を乾淸といひ、後を坤寧といふ」とあり、從信錄に「洪武二年八月、元史成る。李善長等、表を奉じて進む」とある。この詩は、靑邱等の編修した元史が愈よ脫稿したから、奉天殿に於て天子に呈進したことを賦したのである。

【詩意】予は、天子の知遇を辱うし、詔を受けて、元史の編修竝に整理に參與することとなり、布衣無官の身を以て、宮中の丹墀を拜することの出來たのは、おもひ設けぬ幸であつた。元の一代を書きしるした歷史は、ここに脫稿し、聖旨に從つて、本朝の殷鑒となし、やがて、朝廷に千官班列し、古しへの典儀を備へて、愈よ呈進することと成つた。そこで、水時計の音も絕え、秋城、天明け易くして、殿下の兵衞を促し、曉早く、殿上には燭光なほ輝く時しも、天子は出御になり、初めて御簾を卷き上げて、拜謁を賜はり、史稿呈上の事も、すつかり畢つた。今しも、太平の御世で、萬機の政務も、隨分御暇があらうから、小閣の下に於て、心しづかに、是非一閲を賜はりたいので、さうすれば、史臣等の苦心も、御分かりに成ることと思はれる。

九日陪諸閣老食賜糕次謝授經韻

九日、諸閣老に陪して賜糕を食し、謝授經の韻に次す

叨陪講席（一）接詞曹（二）。　叨りに講席に陪して、詞曹に接す、
曉禁（三）霜花點素袍。　曉禁、霜花、素袍に點ず。
院貯圖書西掖（四）靜。　院には圖書を貯へて、西掖靜に、
雲連宮殿北山高。　雲は宮殿に連つて、北山高し。
故園莫憶黃花酒。　故園、憶ふ莫れ黃花の酒、
內府初嘗赤棗糕（五）。　內府、初めて嘗む赤棗糕。
最愛鳳毛（六）今復見。　最も愛す、鳳毛今復た見るを、
便令池上（七）一揮毫（八）。　便ち地上に一たび毫を揮はしめむ。

【字解】【一】講席　青邱が太子諸王に敎授せしことを云ふ。【二】詞曹　文詞を以て仕ふる臣僚。【三】曉禁　禁は宮中。【四】西掖　中書を云ふ、前に卷七、送禮部傅侍郎の詩中に見ゆ。【五】赤棗糕　歲時雜記に「二社重陽、尙ほ糕を食ふ、而して、重陽を盛なりとし、大率、棗を以て之を爲る」とある。【六】鳳毛　南史に「謝靈運の子鳳、鳳の子超宗、文詞あり、帝、大に嗟賞し、謝莊に謂つて曰く、超宗、殊に鳳毛あり、靈運、復た出づ」とある。【七】池上　池は鳳凰池の略、即ち中書省。魏晉以來、中書監令が詔書を草し、その地、樞近に在るを以て、多く寵任を受け、仍つて、これを鳳凰池といつた。晉の荀勗が中書監より尙書令に轉任した時、わが鳳凰池を奪ふといつたことがある。【八】揮毫　杜甫の詩に詩成珠玉在揮毫と見ゆ。

【題義】九日は九月九日、即ち重陽。閣老は、內閣の諸老臣。糕は粉餠。謝授經、名は徽、前に數ば見えて居て、靑邱と同じ經歷の人である。この詩は、重陽の日に、內閣諸老臣に陪し、宮中の御內儀より粉餠を賜はりしに因つて、これを頂戴し、翰林謝徽が第一に詩を作つたから、それに次韻したのである。

【詩意】叨りに太子諸王などの御講書に陪席して、詞臣輩に接することの出來たのは、まことに名譽の事で、曉早く參內すると、霜が白い官服に點じた。翰林は院中に圖書を貯へ、その處は、中書省中

に在つて極めて靜かであるし、雲は、宮殿に連り、秋の空は晴れて、北山が高く聳えて居る。今日は、重陽の佳節であるが、恩榮を荷ふ身は、格別、故園に於て菊を摘んで飮む酒など思ふ暇もなく、その上、御內儀から、赤棗を搗き込んだ粉餅を頂戴した。謝君は、丁度、同姓の古人謝超宗が再來した樣なもので、殊に鳳毛ありと稱すべく、もし、中書省に出仕して、一たび筆を揮つて詔敕を起草したならば、まことに、適任だらうと思はれる。

送沈左司從汪參政分省陝西汪由御史中丞出

沈左司が汪參政に從ひ、陝西に分省するを送る、汪は御史中丞より出づ

(一)重臣分(二)陝去臺端。　重臣、陝を分つて臺端を去る、

(三)賓從威儀盡漢官。　賓從威儀、盡く漢官。

(四)四塞河山歸(五)版籍。　四塞の河山、版籍に歸し、

百年父老見衣冠。　百年の父老、衣冠を見る。

函關月落聽(六)雞度。　函關月落ちて、雞を聽いて度り、

(七)華嶽雲開立馬看。　華嶽雲開いて、馬を立てて看る。

(八)知爾西行定回首。　知る爾が西行、定めて首を回らすを、

如今江左是長安。　今の如き、江左、是れ長安。

【字解】【一】重臣　汪參政を云ふ、名は廣洋。【二】分陝　公羊傳に「陝よりして東は、周公、これを主り、陝よりして西は、召公、これを主る」とある。【三】賓從　幕僚及び從者。【四】四塞河山　漢書項籍傳に「關中は山河を阻てて四塞」とある。關中は、函谷關內の地。【五】版籍　周禮天官小宰に「閭里に聽すに版圖を以てす」とあつて、その注に「版は戶籍」とある。【六】聽雞度　史記孟嘗傳に「夜半、函谷關に至る、關法、雞鳴いて客を出す、客に雞鳴を善くするものあり、雞皆鳴く、遂に關を出づ」とある。【七】華嶽　五嶽の一。【八】知爾　爾は沈左司を指す。

【題義】唐書百官志に「尙書省に左右司郎中あり」と見ゆ。分省とは、地を分つて巡察すること。この詩は、左司郎中沈某が參政汪廣洋に隨つて、陝西地方を巡察に出かけるのを送つたので、汪は、御史中丞から轉任したのである。

【詩意】汪參政は、陝を中分して、その西を主ることに成り、今次、臺閣から出で赴任されるので、幕僚從臣、皆威儀を正し、さながら、漢官の典禮を見る樣である。關中は、山河四塞の地であるが、今や帝室の版圖に入り、父老は百年を隔てて、再び衣冠を見るを得た始末。函谷に月の落つる頃、雞の聲を聞いて關を過ぎ、華嶽雲開いて、萬仞の奇峰湧き出づる處、馬を立てて、ぢつと眺めて居られることであらう。沈君は、參政の御供をして西行するが、今は、この南京が帝都であつて、江左が長安であるから、途すがら、必ず首を回らして顧望されるに相違ない。

【餘論】この首は、靑邱七律中、屈指の名作であつて、兩聯は、虛實相配し、情景相得て、極めて巧

妙であるし、結末も振つて居る處から、完璧を以て稱すべきものである。

吳僧日章講師、赴召修蔣山普度佛事、既罷東歸、送別二首

吳僧、日章講師、召に赴いて、蔣山普度の佛事を修し、既に罷んで東歸す、送別二首

萬人擁座（一）聽潮音。　萬人、座を擁して潮音を聽く、
（二）寶刹曾迂玉駕臨。　寶刹、曾て玉駕を迂げて臨む。
佛法曉敷（三）三藏祕。　佛法、曉に敷く三藏の祕、
帝恩春及（四）九原深。　帝恩、春に及んで九原深し。
鍾山坐處（五）花頻雨。　鍾山坐する處、花、頻りに雨ふり、
（六）練浦歸時樹欲陰。　練浦歸る時、樹、陰らむと欲す。
擬問（七）楞伽嗟已別。　楞伽を問ふを擬し、すでに別るるを嗟す、
楚江（八）飛錫暮沈沈。　楚江、錫を飛ばして暮に沈沈。

【字解】【一】聽潮音　首楞嚴經に「發海潮音、遍告同會」とある。ここでは日章の說教を云ふ。【二】寶刹　岑參の「題護經堂」の詩に「結宇題三藏」とある。三藏は、經論律の三。祕は、その祕奧といふ義。經は修多羅藏、論は阿毘曇藏、律は毘尼藏、藏とは諸篇を包藏する義。又佛說を經といひ、菩薩の說を論といひ、佛の威儀を戒律といふので、その詳は、釋氏要覽等に見えて居る。【四】九原　禮記に「趙文子、叔譽と九原に觀る」とある。ここの九原は、九泉、卽ち黃泉ではなく、郭外を汎稱したのである。【五】花頻雨　前に卷一、「登雨花臺」の詩中に引いて置いたが、梁の雲光禪師が經を講じた時、天、これが爲に花を雨ふらし、因つて、臺を雨花と名づけた。【六】練浦　唐書地理志に「潤州丹陽に練湖あり」と記してある。【七】楞伽　佛經の名、前に卷五、楞伽寺の詩中に見えて居る。【八】飛錫　錫杖を飛ばして行脚する。

【題義】日章は吳人、釋鑑稽古續集に「用拙法師、諱は祖僴、字は日章、常熟張氏の子。法を竹屋淨法師に嗣ぎ、永定敎寺に出世し、繼いで崑山の廣孝・嘉定の淨信に遷り、吳中に主敎たること五十年に垂んとす。洪武の初、高行を選ぶに預かり、旨あり、天界寺に就いて法を說かしめ、上、數ば召して、禁中に入る。奏對して稱允せられ、慈忍法師の號を加賜せらる。後、賜うて故里に歸る」とある。蔣山は卽ち鍾山、一統志に「蔣山は、應天府の東北に在り、漢の秣陵尉蔣子文、盜を逐うて此に死す。吳の大帝、爲に廟を立つ。子文祖、諱は鍾、因つて蔣山と改む」とある。普度佛事は、字面の如く、普ねく衆生を濟度する佛事、卽ち大施餓鬼であらう。この詩は、吳の僧用拙が講師となり、天子から御招きに預つて上京し、鍾山の某寺に於ける大施餓鬼を行ひ、その事畢りし後、東に歸るを送つたのである。

【詩意】多くの人が法師の座を擁して、海潮音の如き聲を爲せる其說敎を謹聽して居る。それのみか、天子も、ある時、駕を枉げて、御寺に行幸されたことがある。佛法の有り難さは、曉に御經の祕旨を

世に敷かしめ、帝恩は、春に乘じて、深く郊外の地に及んだ。そこで、この法師が鍾山に坐せば、諸天より花の雨を降らし、これから、棟湖に歸られると、木木の色さへ曇つて見える。予は、楞伽の深旨を質問したいと思つて居た處が、すでに御別れとなり、法師が江上に錫杖を飛ばす其聲も、暮に沈沈として、次第に遠くなるのは、いかにも、嗟歎に堪へぬ次第である。

故郷未解識清容。　故郷、未だ清容を識るを解せず、
却在金陵闕下逢。　却つて、金陵闕下に在つて逢ふ。
（一）中禁曾分齋鉢飯。　中禁、かつて分つ齋鉢の飯、
（二）上方時叩講筵鐘。　上方、時に叩く講筵の鐘。
一帆細雨迢迢浦。　一帆の細雨、迢迢の浦、
半塔斜陽靄靄峰。　半塔の斜陽、靄靄の峰。
相送師歸忽多感。　師の歸るを相送つて、忽ち感多し、
飛雲亦戀（三）舊依松。　飛雲、亦た戀ふ舊依松。

【字解】【一】中禁　禁中に同じ。【二】上方　寺の本堂の在る處、許渾の詩に上方有路應知處、疎磬寒蟬樹幾重とある。【三】舊依松　もと依り添うて居た松樹。

【詩意】故郷に居る時分は、法師の清容を識らうと思はなかつたのに、却つて、金陵なる皇城の下に於て逢つたのは、まことに、不思議な因緣である。禁中に於て、法師に齋鉢の飯を賜はる時、お相伴をしたこともあるし、寺の本堂に於て、講筵を催さるる鐘の聲を聞いて、自分も參入したことがある。これより行く手には、一帆の細雨、迢迢たる浦波を度り、半塔の斜陽、靄靄たる峰頂に隱見するであらう。法師の歸り去るを送つて、何分、感慨に堪へぬのは、心なき飛雲だに、もと依り添うて居た松の木を慕はしく思ふからのことで、予も亦た早く故郷に歸りたいといふ心のみして居る。

清明呈館中諸公　清明、館中の諸公に呈す

（一）新煙著柳禁垣斜。　新煙、柳に著いて禁垣斜なり、
（二）杏酪分香俗共誇。　杏酪、香を分つて、俗、共に誇る。
（三）白下有山皆繞郭。　白下、山あり、皆郭を繞り、
清明無客不思家。　清明、客として家を思はざるなし。
（四）卞侯墓上迷芳草。　卞侯墓上、芳草に迷ひ、
（五）盧女門前映落花。　盧女門前、落花に映す。
喜得故人同待（六）詔。　喜ぶ、故人の同じく待詔するを得、

【字解】【一】新煙　寒食の後、新に焚き出した火の煙。劉長卿の清明の詩に萬井出新煙とある。【二】杏酪　杏仁湯。杏の仁を摺り潰した汁、その色白く、どろどろして極めて甘い。玉燭寶典に「今人、寒食の日、麥粥を煮、杏仁を研して酪となし、以て之に餳沃す」とある。【三】白下　門の名、普通略して白門といふ。【四】卞侯墓　前に卷六、

擬沽春酒醉京華。　春酒を沽うて、京華に醉はむと擬す。

卞將軍墓の條に詳説して置いたが、晉の卞壼の墓で、冶城に在る。【五】 盧女 江寧府志に「三山門外、むかし、妓盧莫愁の家あり、ここに、莫愁湖あり」と見ゆ。梁の武帝の河中之水歌に、河中之水向東流、洛陽女兒名莫愁、莫愁十三能織綺、十四采桑南陌頭、十五嫁爲盧家婦、十六生兒字阿侯とある。【六】 待詔 翰林に出仕すること。

【題意】 この詩は、洪武三年三月、淸明の節に賦して、同じ翰林の諸公に呈したのである。

【詩意】 新に焚き出した火の煙は、柳にまとひつきつつ、斜に皇城の御垣に棚引いて居る。今日は、杏仁湯の香を分つて、麥の粥にかけるといふので、俗間に於ては、これを誇りとして居る。見わたせば、白下門の外は、山丘亂峙して、城郭をめぐり、この淸明の節に當つて、故鄕を思はぬ人はない。卞將軍の墓上には、芳草叢生して人を迷はしめ、盧女の門前には、落花が相映じて居る。舊知の諸君と、一處に翰林に待詔たることは、まことに喜ばしく、そこで、春酒を沽うて大振舞を爲し、ともに都の春に醉殺したいと思つて居る。

【餘論】 白下、淸明の十四字は、靑邱集中の第一の名聯で、兩句相承けて一意を爲し、流水の對に似て居る處が愈よ面白い。但し、他の數句、殊に後半が、案外詰まらぬ爲に、前後斤兩相稱はず、從つて、完璧と稱することの出來ないのは、まことに遺憾の至である。

金陵喜逢董卿併送還武昌

金陵、董卿に逢ふを喜び、併せて武昌に還るを送る

兵後怱怱記別離。　兵後怱怱、別離を記す、

兩年音問(一)不相知。　兩年音問、相知らず。

武昌(二)樓下初來日。　武昌樓下、初めて來るの日、

幙(三)府門前忽見時。　幙府門前、忽ち見るの時。

上國花開同醉少。　上國花開いて、同醉少く、

大江潮落獨歸遲。　大江潮落ちて、獨り歸ること遲し。

莫嗟握手還分手。　嗟する莫れ、手を握り、還た手を分つを、

此會從前豈有期。　この會、從前、豈に期あらむや。

【字解】【一】 音問 音信を通じて互に起居を問ふ。【二】 武昌樓 庾亮の南樓、前に卷四、始遷西齋の詩中にも見えて居た。【三】 幙府山 江寧府志に「江寧府西に在り、晉の元帝、はじめて江を渡る、丞相王導、幙府を其上に建つ」とある。

【題意】 この詩は、金陵に於て、董卿に邂逅し、又その武昌に歸ることを聞いて作つたので、悲喜相半する樣な感情を抒べたのである。董卿の名字等は不詳。

【詩意】 兵亂の後、怱怱として、君と別離を爲したことだけは覺えて居るが、その後、二年の久しき

に亙つて、音信全く絕え、お互に少しも近況を知らなかつた。君は、頃ろ武昌樓下から御出でになつたさうで、ここに、幙府門前に於て、偶然御目にかかつたのは、まことに喜ばしい。しかし、上國の花、方に酣なるに際して、同醉する機會少きは憾むべく、大江潮落つる時、君は獨り歸られるが、隨分、ひま取ることであらう。しかし、手を握つたかと思ふと、又ぞろ、手を分つといふ今日の俄ッ氣なきことを歎息するにも及ばないので、ここに逢ふといふのは、從前、豫期して居なかつたことである。

送易左司分省廣西

易左司の廣西に分省するを送る

朝廷特念遠氓深。朝廷、特に遠氓を念ふこと深く、
畫省分官出桂林。畫省 分官 桂林に出づ。
油幕乍開依漢節。油幕、乍ち開いて、漢節に依り、
卉衣時到貢蠻金。卉衣時に到つて、蠻金を貢す。
四時花發山多暖。四時花發して山多く暖に、
半日嵐開市尙陰。半日嵐開いて市尙ほ陰る。
虞帝祠前黃竹裏。虞帝の祠前、黃竹の裏、
相思莫聽鷓鴣吟。相思、聽く莫れ鷓鴣の吟ずるを。

【字解】【一】遠氓　氓は民、詩經に氓之蚩蚩とある。【二】畫省　漢官典職に「尙書省、皆粉壁を以て古賢列士を畫く、畫省といひ、亦た粉署といふ」とある。【三】桂林　賈誼の過秦論に「南、百越の地を取り、以て桂林象郡となす」とあつて、桂林は卽ち後の廣西。【四】油幕　油布で頒つた天幕、韓愈の詩に從軍圖云レ槩、談笑青油幕とある。【五】漢節　軍帥たる證符。むかしは、節旄といつて、牛毛を以て飾つてあつた。漢書張騫傳に「匈奴、騫を留むること十餘歲、妻を與へて子あり、騫、漢節を持して失はず」とある。【六】卉衣　卽ち卉服、草木の葉を衣とする。後漢書南蠻傳賛に「鏤體卉衣」とある。【七】虞帝祠　一統志に「虞帝の祠は、桂林府城の北に在り」と見ゆ。【八】黃竹　李嘉祐の詩に「青楓黃竹入寰江」とある。【九】鷓鴣　前に卷二、春江行に見ゆ、南方特有の鳥。

【題義】左司分省等は、前に送沈左司の題義に說明して置いた。この詩は、易某が左司郎中となつて、廣西を巡檢に行くのを送つたのである。但し、某の名字等は不詳。

【詩意】朝廷に於ては、遠方の人民を氣にかけられること、特別に深く、仍つて、尙書省より君を派遣して、巡檢の爲に、廣西に之かしめることとなつた。彼地に至らば、油幕忽ち開いた中に入りて、朝廷から授けられた節旄に倚るべく、又卉服の民が時時來て、蠻地に產する黃金を獻上するであらう。地は南邊に位して居る處から、四時花開いて、山も暖げに見え、天は雨勝ちであつて、半日山氣が開いても、市の方は、まだ曇つて居る。君は黃竹の中なる虞舜の祠に詣で、その前に立つて、此方を思うて居られるだらうが、鷓鴣の聲を聞けば、定めて傷心に堪へぬであらう。

【餘論】四時花發の十四字は、南方炎瘴の風土を巧に描き出した佳聯である。

送王檢校錡赴北平

王檢校錡の北平に赴くを送る

半年同舍客京華。　半年同舍、京華に客たり、
看遍龍河寺裏花。　看、遍ねし、龍河寺裏の花。
纔進史書朝日下。　纔に史書を進めて日下に朝し、
便紆官綬去天涯。　便ち官綬を紆うて天涯に去る。
平蕪遠塞秋驅騎。　平蕪遠塞、秋、騎を驅り、
衰柳遺宮晩噪鴉。　衰柳遺宮、晩、鴉を噪がす。
莫道窮邊成久別。　道ふ莫れ、窮邊、久別を成すと、
待君歸草玉堂麻。　待つ、君が歸つて草す、玉堂の麻。

【字解】【一】同舍　共に史官として天界寺に寄寓せしことをいふ。【二】龍河　江寧府志に「護龍河は、宋鑿つ、即ち舊城外三面の濠なり。今、昇平橋より上元縣に達し、後は虹橋の南に至り、大市橋を出でて止む」とある。【三】史書　即ち元史。【四】日下　日は人君の象、御前に同じ。【五】紆官綬　紆はまとふ、官綬は檢校の印綬。【六】平蕪　平原に草の茂れるをいふ。【七】窮邊　邊境のはて、北平を指す。【八】玉堂麻　玉堂は立派なる堂宇、宋の頃より主として翰林を指して云ふ。麻は黄麻、即ち詔書。

【題義】王檢校、名は錡、靑邱と同じく元史の編修に參與した人、その詳は、前に卷七、天界玩月の詩中に見えて居た。北平は、一統志に「保定府蒲城縣、漢の北平の地」とあつて、即ち後の北京附近一帶の地である。王錡は、元史編纂終了の後、檢校に任せられ、北平に赴任したから、靑邱は、乃ち此詩を作つて、その行を送つたのである。

【詩意】君とは、半年の間、京華の客として同舍に寄寓し、龍河に近き天界寺の花を眺め過ぐした。その後、君は間もなく檢校に任せられ、その官綬をまとうて、天涯に向つて旅だつことに成つた。かの地に至らば、平郊草茂つて遠塞に續く間を、秋、馬を驅ることもあらうし、衰柳、わづかに殘れる故宮を弔うて、晩に鴉の噪ぐのを聞くこともあらう。しかし、窮邊に往つた儘、久別を成す譯でもあるまじく、君の才は、到底棄て置かれるものでないから、やがて、召し出され、翰林に入つて、詔敕を起草することに成るに相違なく、予は、刮目して、その日を待つて居る。

京師秋興次謝太史韻

京師秋興、謝太史の韻に次す

柳外秋風起御河。　柳外の秋風、御河に起る、
京華客子意如何。　京華の客子、意如何。
伎同南郭知應濫。　伎は南郭に同じく、知る應に濫なるべし、
俸比東方愧已多。　俸は、東方に比して、愧、すでに多し。

【字解】【一】御河　前首に見えた護龍河、宮城の外濠である。【二】南郭　韓非子に「齊の宣王、竽を好む、必す三百人合吹す。南郭先生、竽を知らざるもの、しかも、三百人の中に之き、竽を吹くを以て祿を食む。宜

(四)梁寺鐘來殘月落。　梁寺、鐘來つて、殘月落ち、

(五)漢宮砧斷早鴻過。　漢宮、砧斷えて、早鴻過ぐ。

不材幸得同趨闕。　不材、幸に同じく闕に趨るを得たり、

幾度珊珊候曉(六)珂。　幾度か、珊珊、曉珂を候す。

王儀す、後王曰く、寡人竽を好む、一一これを吹かしめむと欲す、と。南郭、乃ち逃る」とあり、錢瑚の表に試吹必濫、比南郭之先生」とある。【三】東方　即ち東方朔、漢書本傳に其言を記して「侏儒、飽いて死せむと欲し、臣朔、飢ゑて死せむと欲す」とあつて、その詳は、前に卷一、東門行の詩中に見えて居る。【四】梁寺　梁の武帝の時に建てた寺。前に卷七、贈楊滎陽の詩中、蕭寺の項に見ゆ。【五】漢宮　南京の宮闕、漢代に比擬して云ふ。【六】曉珂　曉に聞こゆる珂聲、即ち早朝する人の佩玉の響。

【題義】潘岳に秋興賦があつたので、後に秋興の二字を切り離して詩題となし、杜甫には、秋興八首がある。興は六義の興で、眼前見るところの風景に依つて、構想の端緒を得、後に自己の身生に繳到したので、唯だ漫然、風物に對して打興するのではない。この詩は、例の謝徽が京師秋興の作を見せたから、乃ち次韻を試みたのである。

【詩意】葉の黃ばんだ柳の外を吹く西風は、宮城の御溝より起り、滿目、すでに秋、都に客たるものは、如何なる感を爲すか。わが技能は、南郭先生の竽に於けると同じく、全く何も知らないのに、さも出來る顏をして居るのであつて、俸祿は、辱くも、東方朔に比して一層多く頂戴して居る。古寺の鐘が鳴り出すと、殘月いつしか落ち、宮邊に砧うつ聲が止むと、雁が逸早く飛び過ぐる。わが不材を以て、君と一處に朝臣に列して參朝することの出來るのは、まことに有り難き仕合、せめては、參朝に後れぬ樣にと念じつつ、曉早く出かける人の佩玉の珊珊たる響を、幾度も注意して待つて居る。

【餘論】後聯は青邱慣用の語法であつて、屢ば見ても厭かざる敍景の佳句である。

送祠江瀆使者　祠江瀆使者を送る

(一)源發岷峨萬里通。　源は岷峨に發して萬里通じ、

(二)函香迢遞問齋(三)宮。　函香迢遞、齋宮を問ふ。

神馳白(四)馬靈光近。　神は白馬に馳せて、靈光近く、

(五)祝奉玄(六)牲禮秩崇。　祝は玄牲を奉じて禮秩崇し。

驛下換船潮湧日。　驛下、船を換へて、潮、日に湧き、

廟前沈璧水廻風。　廟前、璧を沈めて、水、風を廻す。

重煩使者徼(七)多福。　重ねて使者を煩はして多福を徼む、

南國無(八)疵黍(九)稌豐。　南國疵なく、黍稌豐なり。

【字解】【一】源發岷峨　岷山と峨眉。揚子江は、源を此二山より發するといふ義。今日は地理が大分明かになつて、江源は、もつと遠隔の地なることが確められたが、青邱の頃は、普通かく信ぜられて居たのである。【二】函香　香を函に入れて捧げて行く。【三】齋宮　お祭の時の控所。【四】白馬　史記に「武帝、瓠子の河決に臨み、白馬玉璧を沈む」とある。【五】祝　巫祝、即ち祭官。【六】玄牲　黑色の牛を犧牲とする。

周禮牧人に「望祀、各ゝその方の色を以て、これを牲毛にす」とあつて、その注に「望は岳瀆を祭るなり」とあり、又閩甌侯の西嶽望幸賦に於レ是牲用レ特、酒傳レ玄、とある。【七】徵　求む。【八】無疵　疵は災害。【九】黍稌　稌は粳稻、酒を醸すに用ひ、詩經の周頌に豐年多レ黍多レ稌とある。

【題義】明典彙に「洪武二年正月、都督孫遇仙等十八人に命じて、天下の嶽鎭海瀆の神を祭らしむ。三年六月、躬づから祝文を署し、官を遣し、嶽鎭海瀆に至り、神號を更定するを以て告祭す」とある。江瀆の瀆は、說文に溝也とあり、爾雅に「滄に注ぐを瀆といふ」とあるが、大川の義にも用ひ、江湖淮濟を四瀆と稱して居る。すると、江瀆は、揚子江及び其支流の淮濟を併稱したので、それを祀る爲に、使者を派遣せられ、この詩は、卽ち之を送つたのである。但し、靑邱は、洪武三年には、都に居なかつたから、これは、二年、孫遇仙等を遣された其時であらう。

【詩意】揚子江の水源は、岷山・峨眉の兩處より發して、萬里に通じて居る。今、これを祀る爲に、香を函して、はるばる使者を遣され、一先づ齋宮に入ることになる。やがて、白馬を沈めると、江神は馳せ寄つて、靈光近きに顯はるべく、次に、祭官は黑牛を捧げて、その禮秩は、まことに尊貴である。水驛の下に船を換へて乘り出さうとすると、潮頭に曉日湧き出で、廟前に璧を投げ込むと、水上に風が吹き廻り、その感應は、まことに、あらたかである。されば、重ねて使者を煩はし、人民の爲に、多福を求め、この江の浸潤する處、南國一帶、何等の災害なく、黍や粳稻の十分に實のる樣に致したいものである。

送葉判官赴高唐時使安南還

葉判官の高唐に赴くを送る、時に安南に使して還る

(一)銅柱崖前使節過。　銅柱崖前、使節過ぐ、
貢隨歸騎入京多。　貢は歸騎に隨つて、京に入ること多し。
一官暫遣陪(二)成瑨。　一官、暫く遣して成瑨に陪し、
片語曾煩(三)下趙佗。　片語、かつて煩はして趙佗を下す。
曉拜賜衣辭(四)絳闕。　曉に賜衣を拜して絳闕を辭し、
秋催征棹渡黃河。　秋は征棹を催して黃河を渡る。
(五)政餘好賦(六)登臨詠。　政餘、好し賦す登臨の詠、
聞說州人最(七)善歌。　聞くならく、州人、最も善く歌ふと。

【字解】【一】銅柱　後漢書馬援傳に「援、交趾に到りて銅柱を立て、漢の極界となす」とある。【二】陪成瑨　後漢書黨錮傳に「汝南太守宗資は、功曹范滂に任かせ、南陽太守成瑨、亦た功曹岑晊に任かす。二郡謠を爲つて曰く、汝南太守范孟博、南陽宗資主二畫諾一、南陽太守岑公孝、弘農成瑨但坐嘯」とある。【三】下趙佗　漢書陸賈傳に「高祖、賈をして趙佗に印を賜うて、南越王と爲さしむ。佗、留めて與に飮むこと數月、曰く、越中、與に語るに足るものなし、生の來るに至つて、われをして日に聞かざるところを聞かしむ、と。賈、卒に佗を拜して南越王となし、臣と稱して、漢約を奉ぜしむ。高帝、大に悅び、賈を拜して大中大夫となす」とある。【四】絳闕　絳は赤色、皇宮の正門。

【五】政餘　政務の餘暇。【六】登臨詠　高い處に登つた歌詠。【七】善歌　孟子に「緜駒、高唐に處つて、齊右善く歌ふ」とある。

【題義】高唐は、山東東昌府に屬して居る。安南は、前に卷十三、送安南使者杜舜卿還國の題下に詳述して置いた。この詩は、葉某が安南に使して歸り、それから、判官として山東の高唐に赴任するのを送つたのである。

【詩意】むかし、馬援が銅柱を立てて中國の極界とした其崖前を、使節は往復し、歸る時は、貢物を澤山受け取つて入京した。君は使節の下役として派遣されたが、丁度、岑晊が成瑨から一切委任された如く、萬事を取計つて、使命を全うし、又區區たる片言を以て、當年の趙佗に比すべき安南の國王をして屈伏せしめ、その功績は、まことに、素張らしいものである。そこで、歸つて來ると、曉早く參内して、衣服を賜はり、この度は、高唐に赴任するに就いて、秋の景色を眺めつつ、舟で黃河を渡られる。かの地に著任した後、政務の餘暇、登臨の歌詠を物されること、然るべく、元來、高唐は、むかしから、善歌を以て世に知られた土地である。

衍師見訪鍾山里第

衍師、鍾山里の第を訪はる

風雨孤舟寄一僧。　風雨孤舟、一僧を寄す、
遠煩相覓到金陵。　遠く煩はし、相覓めて金陵に到る。
青衫愧逐塵中馬。　青衫、逐ふを愧づ塵中の馬、
白拂看麾座上蠅。　白拂、看る、麾く座上の蠅。
事去南朝猶有恨。　事去つて、南朝、猶ほ恨あり、
夢歸北郭已無憑。　夢は北郭に歸つて、すでに憑るなし。
文章何用虛叨祿。　文章何ぞ用ひむ虛しく祿を叨にするを、
只合從師問上乘。　只だ合に師に從つて上乘を問ふべし。

【字解】【一】寄一僧　一人の坊さんが乗り合せる。【二】白拂　白い毛の拂子、盧綸の白蠅拂歌に、華堂多衆珍、白拂稱殊異、とある。【三】北郭　道衍も、矢張、蘇州の北郭に居たので、前に卷三、春日憶十友の詩中に見えて居る。【四】上乘　傳燈錄に「自心を頓悟すれば本來清淨、元と煩惱なく、無漏智、自ら具足せず、この心、即ち佛、これに依つて修するもの、是れ上乘禪」とある。

【題義】衍師は即ち道衍。この詩は、青邱の滯京中、道衍が上京して、鍾山里の第を訪問せしを喜んで作つたのである。

【詩意】風雨の中を漕ぎ上る孤舟には、唯だ一人の坊さんを寄せ、態態、私を尋ねる爲に、金陵まで御出に成つたのは、何とも感謝に堪へぬ次第。予は、相變らず、青袍を著け、萬丈の紅塵の中に在つて、大官輩の乘馬の後を逐ふ意氣地なさ。師は、白い拂子で、物の見事に、席上の蠅を追ひ退けらる心地よさ。むかしの南朝は、事、すでに去れども、追憶すれば、恨なほ勝へず、夢に蘇州の北郭に

歸つた處で、まことに便りない始末。區區たる文章を以て、俸祿を頂戴して居るのは、相濟まぬことで、それよりも、師に從つて、上乘の禪を質問したいと常常心に思つて居る。

寄題安慶城樓

安慶城樓に寄題す

(一)層構初成(二)百戰終。　層構、はじめて成つて百戰終る、
(三)憑高應喜(四)楚氛空。　高きに憑つて應に喜ぶべし楚氛の空しきを。
山隨(五)粉堞連雲起。　山は粉堞に隨ひ、雲に連つて起り、
(六)江引清淮與海通。　江は清淮を引いて、海と通ず。
遠客帆檣秋水外。　遠客の帆檣、秋水の外、
殘兵鼓角夕陽中。　殘兵の鼓角、夕陽の中。
時清莫問英雄事。　時清く、問ふ莫れ英雄の事、
回首長煙滅去鴻。　首を回らせば、長煙、去鴻を滅す。

【字解】【一】層構　城樓の層を爲して結構せられしを云ふ。【二】百戰終　明紀に「元の至正十八年正月、陳友諒、安慶を陷る。元の守將、淮南行省右丞余闕、これに死す。十九年八月、明、徐達を遣し、安慶を攻めて友諒を斬らしむ。參政郭泰、潛山に克つ。友諒、潛山の敗を憤り、乃ち詐つて會軍を以て期となし、自ら安慶に至る。趙普勝、出でて迎ふ。友諒、これを殺す。時に、安慶は、長江上流の要地たり。これより先、普勝、これを守り、屢る攻取し難し。友諒、普勝を殺し、別將を用つて安慶を守らしめ、而して、普勝の部將張志雄を以て、兵を帥ゐて、從つて饒廣を侵さしむ。志雄、友諒を怨む、故に龍江の戰、闘志なく、來り降つて安慶を取るの策を獻ず。わが師、途に安慶に克ち、鄱湖の將俞院趙伯仲に命じて、これを守らしむ。尋いで、張定邊に破られ、安慶、復た陷る。二十一年、太祖、師を帥ゐて漢を伐ち、江州を拔く、友諒、武昌に走る、諸將、師を旋し、安慶を攻めて之を下す」とある。【三】憑高　高い處に登つて遠望する。【四】楚氛　楚地の氛祲、卽ち妖氛。左傳に「子木、陳より至る、晉楚各〻その偏に處る。伯夙、趙孟に謂つて曰く、楚氛甚だ惡しく難を懼る」とある。【五】粉堞　白堊の姬墻。杜甫の詩に城鼓連〻粉堞〻、岸斷更青山とある。【六】江引清淮　一統志に安慶府の形勝を敍して「淮服の屏蔽、江介の要衝」とある。

【題義】この詩は、安慶の城樓に寄題したのである。寄題とは、その場處に往つて作らず、その風物を想像し、題詩を作つて之に寄することである。

【詩意】安慶の城樓は、幾層をなし、結構はじめて成れる時、百戰方に終り、高きに登つて遠望すれば、楚地の妖氛が、折から空しくなつたことを喜ぶであらう。四面の山は、白堊の壁に隨つて周遭し、かなり高くて、その勢、雲に連つて起るが如く、大江は、この地に於て、淸き淮水を引き入れ、やがて海に朝宗する。秋の水漲れる彼方には、遠客の帆檣、羣つて林立し、夕日の中には、わづか殘れる戍兵の鼓角を鳴らすのが聞こえる。今しも、太平の世になつたのだから、ここに雌雄を爭ひし英雄の事蹟などは問はずもがな、首を回らせば、夕煙が長く搖曳して、飛び行く雁の影も、見えなく成つて仕舞つた。

【餘論】遠客、殘兵の一聯は、作者得意の筆墨。篇中、淸淮といひ、時淸といひ、淸の字の複出は、如何したものか。時淸の二字の如きは、どうでも改め得ると思はれるのに、靑邱の才を以てして、な

ほ之あるは、聊か怪訝に堪へぬ。

送鄭都司赴大將軍行營

鄭都司の大將軍行營に赴くを送る

(一)上公承詔出(二)蓬萊。　上公、詔を承けて蓬萊を出づ、
立馬風煙萬里開。　馬を立つれば、風煙萬里開く。
(三)賜履已分(四)無棣遠。　賜履、すでに分つて、無棣遠く、
(五)舞干還見(六)有苗來。　舞干、還た見る、有苗の來るを。
(七)牙前部曲多收績。　牙前の部曲、多く績を收め、
幙下賓僚更倚才。　幙下の賓僚、更に才に倚る。
(八)後夜軍門知子到。　後夜、軍門、子の到るを知らば、
(九)郎星應是近(一〇)三台。　郎星、應に是れ三台に近づくなるべし。

【字解】【一】上公　大將軍を云ふ、王維の詩に、金貂列三公とある。【二】蓬萊　宮城に擬して云ふ。【三】賜履　左傳に「わが先君に履を賜ひ、東は海に至り、西は河に至り、南は穆陵に至り、北は無棣に至る」とある。【四】無棣　地名、上に見ゆ。【五】舞干　書經に「帝、乃ち誕に文德を敷き、干羽を兩階に舞はし、七旬にして有苗格る」とある。【六】有苗　三苗、即ち苗族、漢族よりも先に支那に居た蠻族の名。【七】牙前　牙は本營に立てる旗、即ち大將旗。東京賦に牙旗繽紛とあつて、その注に「古しへ、天子出づる、大牙旗を建て、竿上、象牙を以て之を飾る」とある。しかし、天子に限る譯でもない。【八】後夜　他夜に同じ。【九】郎星　後漢書明帝紀に「館陶公主、子の爲に郎を求むれども許さずして、錢十萬を賜ふ。羣臣に謂つて曰く、郎官は、上、列宿に應じ、出でては百里に宰たり、その人に非ざるあれば、民、その殃を受けむ、これを以て之を鎭んず」とある。郎は郎中、各省の次官の如きもの。【一〇】三台　三公に對應する天上の星。

【題義】この詩は、都司鄭某が大將軍の行營に赴くのを送つたのである。

【詩意】大將軍は、曩に詔を受け、宮城より出でて、今や行營に次し、馬を立つれば、萬里の風煙、忽ち開いて、望眼遠きに亙つて見える。大將軍は、むかし、わが先君に履を賜ふといつた通り、廣大な地域を分ち賜はつて、北は無棣の遠きに及び、又干羽を兩階に舞はし、戰はずして、苗族に比すべき暴戾なる蠻族をして來朝せしめた。されば、牙旗の前に列立せる部隊の中にも、功績を收めた人が多く、幕下の賓僚どもは、各〻その才を負うて、相當に働いて居て、大將軍の威望は、大したものである。そこで、君が軍門に著到されたならば、他夜、天上なる三台の星の近くに、一個の郎星を添ふるを見るべく、つまり、君は、大將軍に引き立てられて、遠からず、郎中に昇進すること疑なく、まことに、結構なことである。

送朱謝二博士進賀冬至表赴京師聽宣諭畢還吳

朱・謝二博士、冬至を賀するの表を進めて、京師に赴き、宣諭を聽いて畢り、吳に還るを送る

(一)驛騎(二)雙馳捧(三)綵章。　驛騎、雙馳して綵章を捧げ、

【字解】【一】驛騎　驛馬に乘つ

都門逢舊喜洋洋。 都門、舊に逢うて喜洋洋。
小儒方幸瞻天近。 小儒、方に幸とす、天の近きを瞻たるを。
遠使初來賀(四)日長。 遠使、初めて來つて、日の長きを賀す。
仗下(五)丹墀晴雪盡。 仗下つて、丹墀、晴雪盡き、
朝回紫陌曉塵香。 朝より回れば、紫陌、曉塵香し。
(六)承宣歸去難留駐。 宣を承けて歸り去る、留駐し難し、
乞報平安到故鄉。 乞ふ平安を報じて故鄉に到れ。

た使者。【二】雙鵠 二人ならんで臨せる。【三】綠章 神に捧げる文詞、李肇の翰林志に「凡そ道觀、青詞文を薦むる、青藤紙朱字を用ふ、これを綠章といふ、李賀、綠章封事詩あり」と見ゆ。ここでは、賀表の義に轉用してある。【四】賀日長 冬至を賀する。冬至は一陽來復といふし、又、これから日が段段に長くなる期節である。唐雜錄に「唐宮中、女功を以て日の長短を揆る、冬至後、日晷漸く長く、常日に比して一線の功を增す」とある。【五】丹墀 前にも數ば見えたが、西京賦に青瑣丹墀とあつて、注に「丹もて地に漆す、故に丹墀と稱す」とある。【六】承宣 敕諭を賜はる。

【題義】 この詩は、朱・謝二博士が冬至の賀表を差し出す爲に、蘇州より上京し、敕諭を賜はつて使事全く畢り、仍つて、東に歸るを送つたのである。二博士の名字等は不詳。

【詩意】 君等は、宿つぎの馬を竝び走らして、賀表を呈上する爲に上京された。われは、ここ都門に於て、舊友に遇つたのだから、喜洋洋として、自ら禁ずることが出來ない。君等は、小儒の身を以て、お側近く拜謁するを得たるは、まことに幸と稱すべく、遠くから使として、段段日の長くなるといふ冬至の佳節を賀する爲に來られたのである。やがて、儀衛の兵士が引き下ると、丹墀の邊、晴雪殘りなく消え去り、退朝すると、まだ朝早き頃で、都大路の塵さへ香ばしく覺える。すでに敕諭を頂戴した上は、全く事濟みで、ここに留まつて居る譯にも行かず、さつさと還つて行かれるが、とてもの事に、予の無事で居ることを故鄉の人人に知らせて貰ひたい。

送丕上人還四明育王寺　丕上人の四明育王寺に還るを送る

(一)解夏還尋舊寺棲。 解夏、還た尋ぬ舊寺の棲、
滿船黃葉過長溪。 滿船の黃葉長溪を過ぐ。
袈裟影入秋山遠。 袈裟の影は、秋山に入つて遠く、
(二)舍利光懸夜塔低。 舍利の光は、夜塔に懸つて低し。
(三)鵝識講時常繞聽。 鵝は講時を識つて常に繞り聽き、
猿知定後不驚啼。 猿は定後を知つて驚啼せず。
却慚(四)擾擾塵中客。 却つて慚づ、擾擾、塵中の客、

【字解】【一】解夏 夏ごもりの明けること。釋苑宗規に「四月十五日、僧家結夏。天下の僧尼、この日、禪刹に就いて掛塔す、これを結制といふ、即ち結夏なり。夏は乃ち長養の節、外行に在つては、草木蟲類を傷つけむことを恐る。故に九十日安居し、七月十五日に至つて散じ去る、解夏となし、又解制といふ」とあり、張弋の詩に盧山解夏洪山去、自到

覺路如今去尙迷。　覺路、今の如き、去つて尙は迷ふ。

山邊二葉已飄とある。【二】舍利 火葬にした後の骨、普通には佛舍利の略語で、即ち釋迦の遺骨。法苑珠林に「舍利は西域の梵語、ここに骨身といふ。舍利に三種あり、一は骨舍利、色白し、二は髮舍利、色黑し、之は肉舍利、色赤し。もし佛舍利ならば、椎打すれども破れず、もし弟子舍利ならば、椎擊便ち破る」とあり、徐陵の雙林碑に「如法燒身、一分舍利は塔を冢に起し、一分舍利は塔を起して山に在り」と見ゆ。【三】鵝聽講時 兩京記に「淨影寺僧慧遠、一鵝を養ふ、講經を聞く毎に、堂に入つて伏聽し、もし他事を說かば鳴翔し去る」とある。【四】擾擾 紛雜の貌。

【題義】丕上人は高僧であらうが、その法諱閱歷等は分からぬ。一統志に「寧波府阿育王寺は、阿育王山中に在り、晉の義熙の初に建つ。一名廣利寺、梁の武帝、今の名を賜ふ。寺に阿育王造るところの眞身舍利塔あり、今、宸奎閣あり、宋の神宗の御書を貯へ、蘇軾、記を作る」とある。平重盛が前身、寺中の僧たりしことを聞いて、はるかに黃金を喜捨したのも、即ち此處で、むかしから、邦人にも知られて居る。この詩は、丕上人といふ僧が夏ごもりの爲め、久しく蘇州に居たが、その期、すでに滿ちたるに因つて、元の育王寺に還るのを送つたのである。

【詩意】夏ごもりの時期が過ぎた爲に、上人は、又ぞろ、元の寺に還られることとなり、長い谷川を舟で過ぎ行くと、黃ばんだ落葉が一ぱいになる。袈裟を著けたる其影は、遠く秋山の中に入つて消え、佛舍利の光は、夜、低い塔から立ち上つて居る。上人の飼つて置く鵝は、御說敎の時をちやんと心得て居ると見え、圍繞して之を聽き、猿は、上人の定後に休憩されるを知つて、けたたましい聲をして

は啼かない。予の如きは、相變らず、擾擾として、紅塵中に彷徨する行客であつて、剋下、正覺の路は、尙は遠く、到底清果を得られぬことを、非常に愧づかしく思ふばかりである。

送吳生赴汴省其父指揮　吳生、汴に赴き、其父指揮を省するを送る

都亭(一)槐雨(二)淨朝埃。　都亭の槐雨、朝埃を淨うし、
彩服(三)逢秋試剪裁。　彩服、秋に逢うて試みに剪裁。
定遠(四)未歸雙節(五)在。　定遠、未だ歸らず雙節在り、
孝廉(六)初去一船開。　孝廉、はじめて去つて一船開く。
城依梁苑(七)煙中閉。　城は梁苑に依つて煙中に閉ぢ、
河繞隋隄(八)樹裏來。　河は隋隄を繞つて樹裏に來る。
家慶(九)拜餘尋舊跡。　家慶拜餘、舊跡を尋ぬ、
夕陽騎馬過繁臺(一〇)。　夕陽、馬に騎して繁臺を過ぐ。

【字解】【一】都亭 前に卷十三、送高麗使猊子温還國の詩中にも見ゆ。郭下の亭、蘇州府志に「城の西北隅に都亭橋あり」と見ゆ。【二】槐雨 槐は道路の並木、賈島の詩に槐雨滴稀疎とある。【三】彩服 前に數ば見ゆ、老萊子は彩衣を著て、父母の前で、子供の眞似をして游戲をした。【四】定遠 後漢書班超傳に「筆を投じて西征し、定遠侯に封ぜらる」とある。【五】雙節 前に卷十一、南園の詩中にも見ゆ。節度使の證符、唐書百官志に「節度使は軍旅を總べ、誅殺を顓にするを掌り、雙旌雙節を賜ひ、行けば節を建て、六纛を建つ」とある。【六】孝廉初去 晉書張憑傳に「憑、劉惔に詣る。惔、これを下座に處く、神意接せず、憑、自ら發せむと欲すれども端なし。會ま、

王濛、惔に就いて清言し、通ぜざるところあり。憑、末座に於て之を判す、言旨深遠、一座皆驚く。惔、これを上座に延き、清言日を彌つて留宿し、且に至つて之を遣す。憑、船に還る、須臾にして、惔、敎を傳へ、張孝廉の船を覓め、召して與に同じく載す」とある。孝廉は、選擧の科名で、後漢以後のことである。【七】梁苑　史記梁孝王世家に「東苑を築くこと方三百餘里」とあり、一統志に「歸德府城東の梁園、一名梁苑、或は曰く、即ち兎園、梁の孝王築く」とある。【八】隋堤　開河記に「隋の大業の年、汴河を開き、堤を築き、大梁より淮口に至る、龍舟過ぐるところ、香、百里に聞こゆ、今、隋堤と名づく」とある。【九】家慶　家中の慶賀、父母に謁すること。孟浩然の詩に明朝拜二家慶一、須レ著二老萊衣一とあり、敖器之詩話に「唐人親と別れて復た歸る、これを家慶を拜すといふ」とある。【一〇】繁臺　一統志に「開封府城の東南に在り、即ち吹臺なり、師曠建つ、梁の孝王、これを增築す」とある。

【題義】汴は、一統志に「開封府、隋には汴州といふ」とある。指揮は官名、今の師團長の如きものと思はれる。この詩は、吳某が汴州に赴いて、同地の指揮に官する其父を訪問するのを送つたのである。

【詩意】都の出はづれの宿場に於ては、朝の雨が竝木の槐に降り注いで、塵埃を淨うした。この時、君は、出發されるが、秋に逢うて、彩服を用意し、すでに剪裁を試み、定めて出來上つたのであらう。御親父は、班定遠に比すべく、なほ雙節を持して、その地に滯在されるし、君は、張孝廉の如く、到る處歡迎されるが、今、ここから舟を出される。汴の地たるや、城は、古しへの梁苑に接近して、煙中に閉ぢ、運河は、隋代に出來た隄を繞つて、樹林の間に通じて居る。そこで、親を訪問して、その恙なきを賀せし後、城邊の舊跡を尋ね、夕日西に傾く頃、馬に騎して、繁臺を過ぐることもあらう。

【餘論】後聯は、汴の風土を盡して、復た餘蘊なきものである。

客舍夜坐

(一)樓角聲殘鎖二(二)禁城一。　樓角、聲殘して禁城を鎖す、
燈花半落夜寒生。　燈花、半は落ちて夜寒生ず。
啼鴉井上驚レ風散。　啼鴉井上、風に驚いて散じ、
殘雪窓前助レ月明。　殘雪窓前、月を助けて明かなり。
清世莫レ嗟人寂寞。　清世、嗟する莫れ、人、寂寞、
中年漸怯(三)歳崢嶸。　中年、漸く怯る、歳、崢嶸。
酒杯詩卷吾家物。　酒杯詩卷、吾が家の物、
客裏相親倍有レ情。　客裏、相親んで倍す情あり。

【字解】【一】樓角　城樓の上で吹く角、角はラツパの如きもの。【二】禁城　宮城。【三】歳崢嶸　歳の忙がしげに暮れ易きこと、鮑照の賦に歳崢嶸而催レ暮とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】城樓の上に吹きすさぶ畫角の聲は、方に盡きて、はじめて宮城の諸門を閉ぢ、夜は大分更け

た處から、燈火の丁子も半ば落ちて、寒氣が俄に增して來た。鴉は、井上に居たが、颯と吹き來る風に驚いて、啼きつつ飛び散じ、殘れる雪は、窓前に堆く、月光を助けて、一しほ明るく見える。この淸平の御世に當つては、わが身生の寂寞を歎ずるに及ばないが、中年以後、次第に歲月の忙がしげにして暮れ易きに驚く外はない。しかし、酒杯と詩卷とは、わが家に特有の者であつて、客中相親んで、愈よ情あるを覺ゆるばかりである。

【餘論】後聯は閱世の語で、誰しも、成程と思ひ當ることがあらうと思はれる。それから、聲殘・殘雪とあつて、殘の字の複出は、いささか遺憾である。

送鄭山人聽宣諭後歸東陽

（一）閤門傳レ詔山人拜。　閤門、詔を傳へて山人拜す、
淸曉蓬萊望二彩霞一。　淸曉、蓬萊、彩霞を望む。
（二）布褐朝レ天纔赴レ闕。　布褐、天に朝して、わづかに闕に赴き、
（三）蒲帆帶レ雨又還レ家。　蒲帆、雨を帶びて、又家に還る。
（四）沈侯詠罷樓沈レ月。　沈侯、詠罷んで、樓、月に沈み、
（五）婺女妝殘廟掩レ花。　婺女、妝殘して、廟、花を掩ふ。
無限朝廷仁恤意。　無限、朝廷仁恤の意、
殷勤歸向二老農一誇。　殷勤、歸つて老農に向つて誇る。

【字解】【一】閤門　閤は大門の側の潛り戸、特別に此處から引見する。【二】布褐　布の短衣、王維の詩に「鄭鼓匹夫節、布褐將二白頭一」とある。【三】蒲帆　がまで織つた帆、李端の詩に「瀟雨細如レ絲、蒲帆輕似レ葉」とある。【四】沈侯詠罷　一統志に「金華の八詠樓は、府治の西南に在り、沈約、東陽の守となり、この樓を建て、八詠を賦し、時に絕唱と稱せらる」とある。【五】婺女　一統志に「金華山、金華城北に在り、金星・婺女星と華を爭ふ、故に名づく」とある。

【題義】鄭山人は、名字不詳、但し、山人といふ位だから、無位無官の隱逸者流であらう。東陽は、金華の屬縣。この詩は、山人の鄭某が、天子より召し出され、優詔を以て宣諭せられし後、金華の東陽に歸鄉するのを送つたのである。

【詩意】破格の謁見を賜ふことになり、閤門より詔を傳へて、鄭山人は、御前に拜をなし、曉早く蓬萊宮に立つて、彩霞の搖曳するを望んで居る。山人は、布の短褐を著たまま、入朝して闕に赴き、それが畢ると、優詔を拜して、雨に蒲帆をぬらしつつ、又ぞろ、家に歸られる。君の鄉里には、沈約の遺跡たる八詠樓があり、婺女てふ星を祀つた廟宇がある。吟詠の聲、すでに罷んで、樓頭月沈み、翠羽明璫の妝も、稍や古りたまま、廟は花に掩はれ、ともに、好個の詩境である。今次、君は朝廷仁恤の意、限りなきことを目睹されたから、歸國の後は、慇懃に、老農輩に向つて、その事を說き聞かされるであらう。

【餘論】後聯は、懷古の意を含んで、淒涼新婉、兩つながら之を兼ねたる佳聯である。

春來

客愁擬向春來減。　客愁、春來に向つて減せむと擬す、
春到愁翻倍舊時。　春到つて、愁、翻つて舊時に倍す。
走馬已無年少樂。　馬を走らして、すでに年少の樂なく、
聽鶯空有故園思。　鶯を聽いて、空しく故園の思あり。
日光㬱㬱濃熏草。　日光㬱㬱として濃かに草に熏し、
風力颺颺緩墮絲。　風力颺颺として緩かに絲を墮す。
辟歷溝南酒家路。　辟歷溝南、酒家の路、
共誰來往問花枝。　誰と共にか、來往、花枝を問はむ。

【題意】說明に及ばぬ。
【詩意】春の來るに遇へば、客愁も次第に減ずるだらうと思つて居た處が、春が來ると、愁は減ずるところか、却つて、舊時に倍する位。馬を走らして、城中を乘り廻はしても、少年の頃の樣な快樂はなく、鶯を聞いても、空しく故鄕なつかしき思を增すのみである。日光は㬱㬱として、濃かに草に熏し、風力は颺颺として、緩かに陽炎を吹き墮す。辟歷溝の南なる酒家の路は、一寸好い處であるが、誰と共に來往して花を尋ねやうか、同游者が無ければ、自然興の少きを免れない。

【字解】【一】㬱㬱　杜甫の詩に、㬱㬱行雲浮二日光一とあつて、その注に「㬱、音杳、明かなり」とある。【二】墮絲　絲は游絲、かげろふ。【三】辟歷溝　江寧府志に「辟歷溝は、鍾山の南麓に在り、宋時、三月三日、此に祓禊す」とある。

送賈文學以郡薦赴禮部試舉歸吳

賈文學の郡薦を以て禮部に赴き、試擧つて吳に歸るを送る

匹馬都門候曉開。　匹馬、都門、曉を候して開く、
吳公新薦賈生來。　吳公、新に賈生を薦めて來る。
郡中方待傳經業。　郡中、方に待つ傳經の業、
闕下先稱射策才。　闕下、先づ稱す射策の才。
寒食杏花江店雨。　寒食杏花、江店の雨、
春衣柳絮驛程埃。　春衣柳絮、驛程の埃。
慚予東掖叨陪講。　慚づ、予が東掖、叨りに講に陪するを、

【字解】【一】吳公　漢書賈誼傳に「河南の守吳公、その秀才を聞き、召して門下に置く。文帝、吳公の治平、天下第一たるを聞き、徵して廷尉となす。乃ち、誼年少にして、頗る諸家の書に通ずるを言ふ。文帝、召して博士となす」とある。【二】傳經　杜甫の秋興に、「劉向傳經心事違」とある。【三】射策　試驗に及第すること。漢書音義に「脩策試問を

難把長干送別杯。　把り難し長干送別の杯。

作る、例、案上に置き、試者の意に在つて接射し、取つて、之に答ふ、これを射策といふ」とある。【五】寒食　前に數ば見ゆ。【五】東掖　李嘉祐の送王諫議の詩に高車左掖臣とあつて、金樓の按に「東掖は、漢の宣政殿左掖」とある。【六】陪講　太子の講席に陪すること。【七】長干　劉逵の吳都賦の注に「建業の南五里に山岡あり、その間の平地、吏民雜居し、長干と號す。中に大長干・小長干あり、皆相連る。大長干は、越城の東に在り、小長干は越城の西に在り。地に長短あり、故に大小長干と號す」とある。長干は、今の秦淮の南に當り、處處に出稼する商人どもの居住した部落。つまり、南京の郭外であるから、送別の場合など、矢張、ここまで來ることがある。

【題意】この詩は、蘇州州學の敎授たる賈某が、郡の推薦を以て出京し、禮部に於て試驗を受け、それが濟んで、又蘇州に歸るのを送つたのである。賈某の名字は不詳、そして、試驗の結果は、この時、まだ分つて居ない樣である。

【詩意】君は匹馬に乘じて上京し、曉早く城門の開くを待つて入京したが、それは郡守が君の才學を推薦したからで、丁度、古しへの吳公が賈誼を引き立てたと同じである。君は、從來蘇州に在つて、經學を傳へ、天晴、その業を全うすべきものとして囑望せられ、今次、闕下に於ても、第一に及第すべきものと稱せられて居た。今歸り行く路すがら、寒食に際して、杏花咲き匂ふ江上の野店に雨そぼふり、春衣には柳絮を點じて、やがて驛路の塵となる。三月の半といへば、旅も惡くはない。遺憾ながら、予は宮中の東掖に於て、皇太子に講席に陪する爲に、長干の里まで送つて行つて、別れの杯を把ることも出來ず、取り敢へず、詩を以て餞とする次第である。

【餘論】後聯は、例の通り、作者得意の句格である。

休沐日期衍公游北山不果獨臥齋中

休沐の日、衍公と期して、北山に游ばむとして、果さず、獨り齋中に臥す

休沐欣逢一日閒。　休沐逢ふを欣ぶ一日の閒、

擬邀禪客共登山。　禪客を邀へて共に山に登らむと擬す。

兩筇未許尋蘿徑。　兩筇、未だ許さず、蘿徑を尋ぬるを、

孤枕應須掩竹關。　孤枕、應に須らく竹關を掩ふべし。

歷歷遠峰塵土外。　歷歷遠峰、塵土の外、

蕭蕭深屋草萊間。　蕭蕭深屋、草萊の間。

安眠却勝清游樂。　安眠、却つて勝る清游の樂、

覺看斜陽燕子還。　覺めて看る、斜陽燕子の還るを。

【字解】【一】休沐　漢官儀には「五日、一たび洗沐を假すなり」とあり、唐人の詩に十日馳驅一日閒とあるが、明の時代も、矢張、何日にか一度休みがあつたらうと思ふ。もとより日曜といふものはない。休沐の沐は、髮を洗ふことである。史記日者列傳に「宋忠、中大夫たり、賈誼、博士たり、同日俱に出でて洗沐す」とあるを見れば、はじめは、實際この日に洗沐したものとも見えるが、後世では、必ずしもさうではない。【二】蘿徑　蔦の生ひ茂れる細路。

【題義】この詩は、役所の休日に際し、道衍と北山に游ぶ約束をして置いたが、何かの都合で、これを果さず、ひとり書齋中に臥して作つたのである。

【詩意】幾日か出勤して、ここに休沐の爲に一日の淸閒を得たのは、まことに喜ばしく、道衍法師を迎へて、共に北山に登る積りであつた。然る處、約束が外れて、二人の杖は、未だ蔦の生ひ茂れる細路を尋ぬることを許されず、仕方がないから、孤枕を擁し、竹間の門を閉ぢて偃臥する外はない。眺めやれば、遠い山山は、塵土の外に歷歷として見ゆれども、奥深き家は、草萊の間に、寂寂として、まことに物さびしげである。しかし、安眠の樂は、却つて淸游にも勝り、晝寢の夢醒めた時、夕日影の中に、燕の飛び還るを看るも、又格別の風情がある。

送內兄周誼還江上

内兄周誼の江上に還るを送る

憶奉(一)綸音趣赴朝。　憶ふ綸音を奉じて朝に赴くを趣す、

曾煩遠送過楓橋。　かつて遠送を煩はして、楓橋を過ぐ。

雲山方恨成(二)睽阻。　雲山、方に恨む睽阻を成すを、

雪夜俄來伴寂寥。　雪夜、俄に來つて寂寥に伴ふ。

(三)吳苑疏鐘沈晚樹。　吳苑の疏鐘、晚樹に沈み、

(四)楚江歸(五)榜逐寒潮。　楚江の歸榜、寒潮を逐ふ。

情親海內如君少。　情親、海內、君の如きは少し、

敢惜(六)離魂爲一銷。　敢て惜まむや、離魂爲に一銷するを。

【字解】【一】綸音　詔敕。【二】睽阻　そむき隔つ。【三】吳苑　長洲苑を云ふ。【四】楚江　揚子江、その下流は古しへの楚地なるが故に云ふ、李白の詩にも洞庭西望楚江分といひ、天門中斷楚江開といつてある。【五】歸榜　榜は楫、歸舟に同じ。【六】離魂　別離の際の心魂。

【題義】內兄は妻の兄。靑邱の妻は周氏、その同胞として、思齊・思義・思恭・思敬・思忠、五人の名が知られ、その中、思齊・思義の二人は兄、思敬・思忠は、たしかに弟であるが、思恭だけは、兄か弟か分からぬ。そして、これは皆字であつて、本名でない。ここに、誼とあるのは、誰の本名か、全く分からぬが、文字の上から考へると、多分、思義であらう。この詩は、妻の兄周誼が上京して過訪し、やがて、歸國せむとするに因り、その行を送つたのである。

【詩意】さきに、天子の詔を奉じて入朝を促された時、君は、態態、楓橋まで見送りに來られた。その後、雲山相隔てて、相逢ふに由なきを恨んで居た處が、雪の夜に俄に來訪し、わが寂寥に伴うて呉れたのは、まことに嬉しい。しかし、長洲苑の暮鐘、間遠に聞こえて、樹陰に沈むと思はるる頃しも、君は、歸舟を揚子江に泛べ、寒潮を逐うて東に歸られる。かばかり情誼相親むものは、天下の廣きも、君の外に殆んど無いので、ここに、別に際して、自然銷魂することを免れない。

【餘論】吳苑楚江の十四字は、例の佳聯。大全集には、歸榜を歸雁に作つてあるが、下の寒潮に對し、又、疏鐘との對の上からいつても、矢張、歸榜の方が切實である。

夜聞吳女誦經

夜、吳女の經を誦するを聞く

（一）雲窓月帳（二）散花多。 雲窓月帳、花を散ずること多く、
閒讀（三）金經夜若何。 閒に金經を讀んで、夜、若何。
嬌舌乍彈（四）鶯學語。 嬌舌乍ち彈じて、鶯、語を學び、
芳心已定（五）井銷波。 芳心すでに定まつて、井、波を銷す。
（六）尼師曾敎（七）青蓮偈。 尼師、かつて敎ふ青蓮の偈、
女伴徒爲（八）白苧歌。 女伴、徒に爲す白苧の歌。
聽處若迷（九）空色相。 聽く處、もし空色相に迷はば、
應須愁殺（一〇）病維摩。 應に須らく病維摩を愁殺すべし。

【字解】【一】雲窓月帳 雲月の來り映ずる窓帳、韓愈の華山女の詩に雲窓霧閣事恍惚とあり、羅隱の七夕の詩に月帳星房次第開とある。【二】散花 維摩經に「天女、天花を以て諸菩薩に散ずれば、即ち皆墮落す。大弟子に至つては、便ち著いて墜ちず。天女曰く、結習未だ盡きず、故に、花、身に著く。結習盡くるもの、花、身に著かず」とある。【三】金經 劉禹錫の陋室銘に可以調素琴閲金經とあつて、名文珠璣の注に「金經は佛經」とある。つまり、尊く有り難い意義を併せて云つたものであらう。【四】鶯學語 元稹の詩に新鶯語嬌小とある。【五】井銷波 井の水に波が無くなる。孟郊の烈女操に波瀾誓不起、妾心井中水とある。【六】尼師 師たる比丘尼。【七】青蓮偈 維摩詰の詩に曾逼內典青蓮偈とある。金樓注には、これだけ引いてあるので、盡くしては居らぬが、佛經の事は、誰にしても、あまり知らない。青蓮は、青色の蓮花、珍らしく貴いもので、法苑珠林にも目如青蓮、眉方翠蘊」とある。これは美人の姿態の喩へ易きことを云つた偈であらうか。【八】白紵歌 前に卷一に、かういふ樂府題があつて、その題義に於て詳述して置いた、江南の歌曲。【九】空色相 般若心經に色卽是空、空卽是色とある。【一〇】病維摩 天竺の居士、毘耶離城なる方丈の室に病臥して居ると、佛が天女を遣して、花を雨ふらした。李商隱の詩に維摩一室雖多病、亦要天花作道場」とある。

【題義】說明に及ばぬ。吳女は、吳地の女であるが、美人といふ義をも含んで居るらしい。

【詩意】雲の棚引く窓、月の差し込む几帳の間に於て、麗しき吳女が夜有り難い御經を誦讀すると、恰も雛さながら、感應あつて、虛空より花が頻りに雨ふる樣に覺える。その嬌舌を彈ずるを聞けば、鶯が囀ることを學ぶ樣でもあるし、芳心すでに定まつて、浮世の事を忘れた上は、井中波を收めた如く、靜に落ちついて居る。師の比丘尼は、かつて、青蓮偈を敎へて、花ひと時の春、決して長しへに存せざる旨を領知せしめ、女伴どもが白紵の流行歌を唱へても、何とも思はない。もし、吳女の誦經を聞いて、あらぬ野心を起し、色卽空の幻相に迷ふ樣なことがあつたならば、病める維摩は、その敎化の未だ足らざるを思うて、到底、愁を禁せぬであらう。

【餘論】前聯は、一個有髮の比丘尼を描き出して、自ら阿堵傳神の妙がある。

送趙使君致仕歸別業

趙使君の致仕して別業に歸るを送る

久仕江湖白髮長。　久仕、江湖、白髮長く、
今年得許乞身章。　今年、乞身章を許さるるを得たり。
吏收封印朝辭郡。　吏は封印を收めて、朝に郡を辭し、
人賀懸車晚在鄉。　人は懸車を賀して、晚に鄉に在り。
家篋已添新著稿。　家篋、すでに添ふ新著の稿、
官衫未歇舊薰香。　官衫、未だ歇まず舊薰香。
南風別墅初歸處。　南風別墅、初めて歸る處、
應坐肩輿看種秧。　應に肩輿に坐して種秧を看るなるべし。

【字解】【一】久仕　久しく仕官する。【二】江湖　世間、廟闕に對して云ふ。【三】乞身章　罷免の辭令書、歐陽修の詩に晚節思深許乞身とある。【四】封印　封じたる官印、漢書陳平傳に「平、誅を懼れ、廼ち其金と印とを封じ、使をして項王に歸さしめ、而して、平は、間行、劍に仗つて亡ぐ」とある。【五】懸車　漢書薛廣德傳に「廣德、骸骨を乞ふ。安車・駟馬・黃金六十斤を賜うて東歸せしむ。沛の太守、これを界上に迎ふ、沛、以て榮となし、その安車を懸く」とあつて、賜はつた安車を懸けて記念とする。懸けたのは、何處か分からぬが、多分、里門であらう。【六】家篋　家に在る文庫、白居易の醉吟先生傳に「好事者、相過へば、必ず之が爲に先づ酒壺を拂ひ、次に詩篋を開く」とある。【七】官衫　官服。【八】別墅　別莊、李商隱の詩に煙波別墅醉とある。【九】肩輿　舁ぐ輿、東坡の詩に肩輿任所適とある。

【通義】使君は、主として太守の尊稱。この詩は、太守趙某の職を罷めて、その別業に歸住するを送つたのである。何處の太守か、よくは分からぬが、多分、蘇州であらうし、又別業も、城外に在る樣である。

【詩意】君は、久しく仕官して地方を巡り、大分、白髮も延びたといふので、今年は辭職を聞き屆けられて、その辭令を頂戴した。そこで、吏が封印を收め去りしに乘じて、朝に郡を辭して去ると、人人は、安車を里門に懸けて記念とされるのが目出たいと云つて居る間に、君は、日ぐれに、別業に入つて仕舞つた。そこで、家に在る文庫の中には、逸早く新著の草稿を添へ、官衫には、むかし焚きこめた香が、まだ消えずに殘つて居る。五月南風吹き薰ずる別墅に、初めて歸つたことであるから、肩で舁く駕籠に乘つて、物珍らしく、田植ゑを見て居られるであらう。

游南峰寺、有支遁放鶴亭

南峰寺に游ぶ、支遁の放鶴亭あり

每向人間望碧峰。　每に人間に向つて碧峰を望む、
石門今得問幽蹤。　石門、今、幽蹤を問ふを得たり。
路緣風磴泠泠策。　路は風磴に緣る泠泠の策、
寺隔煙蘿杳杳鐘。　寺は煙蘿を隔つ杳杳の鐘。
窓下鳥來多墜果。　窓下、鳥來つて墜果多く、

【字解】【一】風磴　風の吹く石段、杜甫の詩に窈窕入風磴とある。【二】泠泠策　策は杖、湛方生の賦に杖輕策以行游とある。【三】香火　白居易の詩に思結空門香火緣とある。【四】戴顒　前に卷十二、過戴居士

亭前鶴去只高松。　亭前、鶴去つて只だ高松。

一龕願借依香火（三）。　一龕願はくは、借つて香火に依らむ、

莫道詩人非戴顒（四）。　道ふ莫れ、詩人、戴顒に非ずと。

【題義】南峰寺は、前に卷五、同題の詩の題義中に詳述して置いたが、姑蘇志に「舊名天峰院、支硎の南峰に在り、卽ち古しへの支硎寺なり。記に云ふ、晉僧支道林、石室林泉に因つて報恩院を置き、唐の大中、改めて支山禪院となし、晉の天福、南峰の額に改む」とある。支遁、字は道林、そこに道林の放鶴亭がある。この詩は、卽ち南峰寺に游び、放鶴亭址を過ぎて作つたのである。

【詩意】予は、毎毎、塵の浮世に向つて、無益にも碧峰を望んで遙想を馳せて居たが、幸ひ今日ここに來て、石門の邊に幽蹤を尋ねることが出來た。その路は、風吹き下す石磴に傍うて上るので、杖さへも冷冷としてつめたく感じ、寺は煙れる蔦かづらを隔てて、鐘の音だに杳杳として響く。窓下に鳥が來ると、啄み落した木の實が多く、亭前には、鶴すでに去つて、只だ見上げるばかりの松の木が殘つて居る。願はくは、ここに一つの龕室を借りて、香火の緣を全うしたく、予は詩人であつても、決して、古しへの戴顒の如きもので無い譯でもなく、林泉の勝は、心から愛して居るところである。

【餘論】この詩、兩聯ともに面白く、まことに必傳の作ではあるが、望蜀の念は、結末の今少し振ふことである。

宅一の詩中に見えたが、南史に「顒は安道の子、宅は剡縣剡山の下に在り、又徙つて呉下に居る、士人、ともに爲に室を築く」とある。

送鄰僧淡雲歸笠澤　鄰僧淡雲の笠澤に歸るを送る

往來海上獨離羣。　海上に往來して獨り離羣、

雅稱身名是澹雲。　雅に稱ふ、身名是れ澹雲なるに。

經院（一）葉深（二）秋講散。　經院、葉、深くして秋講散じ、

香臺（三）鳥下午齋（四）分。　香臺、鳥、下つて午齋分る。

坐間山偈（五）曾同說。　坐間の山偈、かつて同じく說き、

別後鄰鐘不共聞。　別後の鄰鐘、ともに聞かず。

笠澤到時尋舊業（六）。　笠澤、到る時、舊業を尋ぬ、

菱池（七）漠漠雨紛紛。　菱池漠漠、雨紛紛。

【題義】笠澤は卽ち太湖。前に卷五、太湖の題下に詳述して置いた。この詩は、鄰近の寺に住んで居た淡雲といふ坊さんの太湖に歸るのを送つたのである。

【字解】【一】經院　經を講ずる佛院。
【二】葉深　落葉の深く積むこと。
【三】香臺　寺の本堂。
【四】午齋　晝の齋飯。
【五】山偈　白居易の詩に雪中重寄雪山偈、問答殷勤四句中とあるから、雪山偈の略語であらう。雪山は、釋迦の苦行せしところで、その事に關係したものであらう。
【六】舊業　むかし住んで居た菴室。
【七】菱池　菱の生ひ茂る池。

【詩意】師は、從前、海邊に往來し、ひとり、羣を離れ、その名を淡雲といふのに相應しい樣である。經院に落葉深く散り布ける頃、講經の席、はじめて散じ、本堂の近くに鳥が澤山下りて來るのは、晝の齋飯の殘りを分けて遣るからである。師は、予と非常に親密であつて、座間に在る雪山の偈を共に講說したこともある位。これより、別れし後は、鄰寺の鐘も、一處に聞くことが出來ない。やがて、太湖に歸つて、もとの菴を尋ねると、菱の茂れる池は漠漠として廣く、加ふるに、秋の雨紛紛として、ひとり、寂しき思に堪へぬであらう。

次韻楊孟載署令雨中臥疾

楊孟載署令の雨中疾に臥するに次韻す

(一)雙桐分蔭曉池淸。　雙桐、蔭を分つて曉池淸く、

乍喜新晴覺病輕。　乍ち新晴を喜んで、病の輕きを覺ゆ。

(二)蛛曳林風吹欲斷。　蛛は林風を曳いて、吹けば斷えむと欲す、

鷺經沙雨洗偏明。　鷺は沙雨を經て、洗へば偏に明かなり。

吟多(三)稍怯臨窓寫。　吟多く、稍や怯る、窓に臨んで寫すを、

臥久渾忘出市行。　臥すること久しく、すべて忘る、市を出でて行くを。

【字解】(一) 雙桐　二本の梧桐。

(二) 蛛曳　蛛は蜘蛛。

(三) 稍怯　怯は、億劫に思ふ意であらう。

不道春歸踰一月。　道はず、春歸つて一月を踰ゆと、

起聞歌鳥尙疑鶯。　起つて、歌鳥を聞いて、尙ほ鶯を疑ふ。

【題義】楊孟載は卽ち楊基、前に卷三、春日懷十友の詩に見え、卷六には寄楊榮陽と題せる五古の長篇があつた。署令は、矢張、榮陽令であらう。すると、この詩は、楊基が榮陽の使署に居て、雨中臥疾の作があつたから、その韻に次して寄懷したのである。

【詩意】二本の桐の木は、影を分かつて、朝早く池に映り、池の水まで淸く見え、おまけに、新晴に逢うて、心うれしく、病氣も、どうやら直りかかつた樣な氣がした。蜘蛛は、林風に絲を曳いて、吹かれると切れむとし、鷺は平沙の雨にぬれて、洗へば色が一しほ分明である。詩が澤山溜まつた爲に、窓に臨んで書き直すことも億劫であるし、久しく、病に臥して居た爲に、市を出でて郊外に行くことを丸で忘れて仕舞つた。春去つて、すでに一個月を經、今は四月の末であるが、起つて、囀る鳥の聲を聞くと、矢張、鶯だらうと思つて居る。

【餘論】前聯は、工緻纖細である。明人あたりの雄渾壯闊を喜ぶものの目から見ると、かういふ句は、あまり小さ過ぎるかも知れぬが、そこに亦た一段の妙趣があるので、膚廓の弊を防ぐには、かくの如き句が殊に必要である。

送呂志學秀才入道

呂志學秀才の入道するを送る

學禮(一)茅君便入山。　茅君に禮するを學んで、便ち山に入る、
(二)黄冠初著稱清顏。　黄冠、はじめて著けて、清顏に稱ふ。
(三)杏園不羨(四)龍頭貴。　杏園、羨まず龍頭の貴きを、
(五)蓬島應思(六)鶴背閒。　蓬島、應に思ふべし鶴背の閒なるを。
窓下(七)棄檠辭婦去。　窓下、檠を棄て、婦を辭して去り、
壇前受(八)籙拜師還。　壇前、籙を受け、師を拜して還る。
(九)白雲知勝(一〇)青雲好。　白雲、知る青雲に勝つて好きを、
(一一)揮手從今謝世間。　手を揮つて、今より世間を謝せむ。

【字解】【一】茅君　漢の茅盈、その弟衷と共に句曲山に入つて道を學び、仍つて、山を茅山と稱した。【二】黄冠　道士の冠、唐書李淳風傳に「淳風の父播、隋に仕へて高唐尉たり、官を棄てて道士となり、黄冠子と號す」とある。【三】杏園　進士及第の祝宴、秦中歳時記に「進士、杏花園に初めて會す、これを探花宴といひ、少俊二人を以て探花使となし、徧ねく、名園に游ぶ、もし他人、先づ名花を折り得れば、二使皆罰あり」と見ゆ。【四】龍頭貴　第一番で進士に及第すること。即ち狀元。梁顥の及第謝恩の詩に、也知年少登科好、爭奈龍頭屬老成とある。【五】蓬島　即ち蓬萊。【六】鶴背閒　南唐近事に「廬山の道士、忽ち鶴の降るあり、道士喜んで謂ふ、上升すべし、と。山童に命じて之に乘ぜしめ、斃るるに至る。陳枕の詩に云ふ、龍腰鶴背俱無力、傳語麻姑借大鵬とある。【七】棄檠　檠は燭臺、韓愈の短燈檠歌に、牆頭君看短檠棄とある。【八】受籙　籙は符籙、道士になつた證信。上清玉晨道君記に「籙を紫晨に受け、書を玉虚に受け、景を上清に眺め、位、高仙を司る」とある。【九】白雲　山中に隱棲する。【一〇】青雲　種種の意味があつて、第一には德あつて盛名を負へるものに喩ふ。史記伯夷傳に「閭巷の人、行を砥き名を立てむと欲するもの、青雲の士に附くに非ざれば、惡んぞ能く後世に施さむや」とある。第二には、高位に在るに喩ふ、史記范雎傳に「賈、意はざりき、君、能く自ら青雲の上に致さんむとは」とある。後世では、登科の議にも用ふるので、曾鞏の詩に、一旦公道開、青雲在平地とある。第三には、隱逸に喩ふ。南史に「身、朱門に在つて、情、江海に同じく、形、紫闥に入つて、意、青雲に在り」とある。ここのは第二で、高位にあること。【一一】揮手　他をはれ退ける貌。

【題義】呂志學、名は敏、北郭十才子の一で、前に春日懷十友の詩中に見えて居る。秀才は科目の名、入道は道士となること。この詩は、秀才の呂志學が、道士となる爲に立ち去るのを送つたのである。

【詩意】君は、茅君に禮することを學び、つまり、道士とならむが爲に、山に入らむとし、初めて、黄冠を被つた處が、眉目いとも清き其顏に恰も似合ふ樣である。君は、秀才であるが、この上、試驗を受けて、進士の及第の祝宴に狀元の名譽を荷ふことを羨まず、それよりも、蓬萊に向つて飛行するに就いて、鶴の背の暢氣なることを思ふであらう。今まで、机の側に置いて、夜ごと、その下で讀書した燭臺も不用だといふので、これを窓下に投げ棄て、妻君に別れて、愈よ入道することになり、壇前に於て符籙を貰ひ受け、師を拜して還つて仕舞ふ。ここに至れば、白雲が青雲に勝ること遠きを知了すべく、今後、手を揮つて、この浮世を謝し、心のどかに仙家の道を學ぶことであらう。

送胡簿之陽朔　胡簿の陽朔に之くを送る

幾年桂管去人稀。　幾年、桂管、去る人稀なり、
白髮憐君獨遠違。　白髮、憐む君が獨り遠く違ふを。
過海定尋廻估舶。　海を過ぐれば定めて尋ねむ廻估の舶、
出京纔脫舊儒衣。　京を出でては、わづかに脫す舊儒衣。
祠羞荔子傳巫語。　祠は荔子を羞めて巫語を傳へ、
縣閉榕陰放吏歸。　縣は榕陰に閉ぢて吏を放つて歸らしむ。
亦欲居夷嗟未得。　亦た夷に居らむと欲するも嗟す未だ得ず、
漫看鴻鵠向南飛。　漫に看る、鴻鵠の南に向つて飛ぶを。

【字解】【一】桂管　桂林の管下、舊唐書に「江源、桂多し、故に、秦、桂林郡を立つ。武德四年、桂州總管府を置き、後、桂管經略觀察使を置いて桂州を治せしむ」とある。【二】獨遠違　ひとり、本意に違うて遠行する。【三】廻估舶　處處に廻航する商船。【四】荔子　即ち荔枝。本草に「荔枝は、南方に多く之あり、閩中を以て第一となし、蜀中、これに次ぎ、嶺南を下となす。その木、高さ二三丈、徑尺より合抱に至る。木の形、團團として、帷蓋の如く、葉は冬青の如く、四時凋まず、性、最も寒を畏る。甚だ久しきに耐へ、數百年を經て、猶ほ實を結ぶものあり。花は青白にして、櫨花の如し。その實、喜んで雙、殼は青く、漸くにして紅。狀、初生の松毬の如く、殼に皺紋あつて羅の如し。その肉、生時は白く、乾く時は紅、漿液甘酸、醍醐の如し。その核は、黃黑色にして半熟の蓮子の如し、精なるものは、核、雞舌香の如く、膚肉潔白にして、氷雪の如し」とある。南方の珍果として珍重し、楊貴妃などは、殊に愛好し、遞驛、驛馬を以て取り寄せたといふこと。因に、日本で云ふところの荔枝は、蔓生の謂はゆる草荔枝で、もとより、似て非なるものである。【五】榕陰　榕は樹の名、常綠喬木、高さ四五丈、閩廣の熱地に產し、幹、すべて枝を生じ、枝、復た根を生じ、下垂して地に至つて、又復た幹となる。故に、その蔭、極めて廣く、葉は橢圓平滑、花は淡紅、實圓にして小、無花果に類して居る。わが日本では、土佐の室戸崎、日向の青島に限つて、少しく叢生して居るが、臺灣では、到る處に蕃殖して居る。【六】居夷　論語に「子、九夷に居らむと欲す。或は曰く、陋、これを如何。子曰く、君子、これに居る、何の陋か之あらむ」とある。

【題義】　胡簿の字竝に閱歷は不詳。陽朔は、廣西桂林府の屬縣。この詩は、胡簿といふ人の陽朔に赴任するのを送つたのである。

【詩意】　桂林管下は、閩廣に屬する遠隔の地であつて、多年、その地に赴く人も無かつたのに、今次、君は白髮頭の老年にも拘はらず、素志に違うて、ひとり、その處に赴任される。海を過ぐる時は、定めて廻航する商船を尋ねて、それに便乘されるであらうし、京を出づるや否や、もと著て居た儒衣を脫ぎ棄てられる。その地に於ては、神を祀る時に荔枝の實を供へ、そして、巫女より神語を傳へ、縣の役舍は、榕樹の陰に在つて、吏員が退出すると、門を閉ぢて仕舞ふ。その風土習慣は、もとより、大に此邊と違つて居る。その位ならば、孔子の云へる如く、九夷に居りたいと思つたらうが、何分、その志を達することが出來ず、鴻鵠が南に向つて飛ぶが如く、今しも、その地に赴かれるので、何分、感慨に堪へぬことである。

謁甫里祠　甫里の祠に謁す

(一)衣冠寂寞半(二)塵絲。　衣冠寂寞として、半は塵絲、
想見江湖獨臥時。　想ひ見る江湖獨臥の時。
(三)遁跡虛煩明(四)主詔。　遁跡、虛しく煩はす明主の詔、
感懷猶賦散(五)人詩。　感懷、猶ほ賦す散人の詩。
釣魚船去雲迷浦。　釣魚の船は去つて、雲、浦に迷ひ、
(六)鬪鴨欄空草滿池。　鬪鴨欄は空しくして、草、池に滿つ。
(七)芳藻一杯誰爲(八)奠。　芳藻一杯、誰が爲に奠せむ、
鼓聲只到水(九)神祠。　鼓聲只だ到る水神の祠。

【字解】【一】衣冠寂寞　祠中の神體となつて居る陸龜蒙の像を云ふ。【二】塵絲　塵を帶びたる蜘蛛の巢。【三】遁跡　この世から跡を遠ざける。【四】明主詔　前に卷十三、唱頓里十首の末首にも引いて置いたが、唐書陸龜蒙傳に「李蔚、盧攜素、ともに善し。國に當るに及びて、召して、左拾遺に拜せらる。詔、方に下つて、龜蒙卒す」とある。【五】散人詩　前に卷三、詠隱逸の題下にも注して置いたが、龜蒙は甫里散人と號して居た。散人とは、自ら檢束せず、世の用を爲さぬ人物の稱。莊子に「匠石歸る。櫟社、夢に見えて曰く、若と予と皆物なり、奈何ぞや、その相物たるや、而して、幾死の散人、又惡んぞ散木を知らむ」とある。【六】鬪鴨欄　家鴨をして喧譁をなさしめ、それを見て居る亭欄。龜蒙が鴨を愛養せしことも、本傳に見え、前に卷五、鬪鴨篇の詩中に引いて置いた。【七】芳藻　蘋藻に同じ、水中の草を采つて神前に供へる。【八】爲奠　奠は供へ物。【九】水神祠　甫里志に「水仙廟は、即ち唐の儀鳳間の儒生柳毅なり。今上元鄕の土地神となり」とあつて、金檀は「邑志に載す、里中の廟は白蓮寺の西に在り、と。すでに廢して、僧舍となる、公の詩、正に此を指すなり」と云つて居る。

【題義】甫里祠は、甫里志に「唐賢陸龜蒙魯望を祀るなり、祠は白蓮寺の西に在り、先生卒後、その傍に葬り、遂に廟食す、即ち其故宅なり」とある。なほ陸龜蒙の事蹟は、前に卷三、詠隱逸の詩中に詳述して置いた。

【詩意】祠中に祀られて居る先生の像は、衣冠寂寞として、半ば塵を帶びたる蜘蛛の絲にからめられて居るが、これに對すれば、その江湖に獨臥された時を想見せしめる。先生は、浮世を遁れて跡を晦まし、折角、天子から詔を下して徵し出されたが、すでに死んだ後で、間に合はなかつた位。そして、塵界の事を忘れ、一散人として世を送つたものの、時に感懷を詩に寄せたこともある。今や、魚釣りに出かけた其舟も去りし儘で、雲は入江に迷ひ、家鴨を鬪はせて見て居たといふ亭欄も、無くなつて、草が池に一ばいである。ここに來て、蘋藻を薦め、且つ一杯の酒を酹する人だになく、却つて、水神の祠の方が參詣者が多くて、鼕鼕たる鼓聲に導かれて、いづれも其方に往つて仕舞ふ。かくて、高人の遺蹟寂寥甚しきは、まことに、感慨に堪へぬことである。

【餘論】後聯は、淒涼滿目、釣魚鬪鴨、ともに、龜蒙その人に切實である。

送恩禪師弟子勤歸開元寺　恩禪師の弟子勤の開元寺に歸るを送る

（一）山衲經寒補（二）雜繒。山衲、寒を經て雜繒を補ふ、
白雲高寺遍尋登。白雲、高寺、遍ねく尋ね登る。
（三）法身已證（四）浮來佛。法身、すでに證す浮來の佛、
宗旨曾傳（五）化去僧。宗旨、かつて傳ふ化去の僧。
歸過（六）江城誰施飯。歸つて江城を過ぎて、誰か飯を施す、
（七）定依舊院自（八）懸燈。定は舊院に依つて、自ら燈を懸く。
明朝應恨千峰阻。明朝、應に恨むべし千峰の阻つを、
欲問（九）楞伽已不能。楞伽を問はむと欲するも、すでに能はず。

【字解】【一】山衲　山僧の著る法衣、馬戴の寄レ僧の詩に久披山衲壞とある。【二】雜繒　さまざまの繒、漢書東方朔傳に「館陶公主、請うて、將軍列侯の從官に金錢雜繒を賜ふこと、各〻數あり」と見ゆ。【三】法身　佛法を修め得た身。【四】浮來佛　題下の原注に「寺に二石佛あり、海上より浮び至る」とあつて、なほ其詳は題義の項に注することにする。【五】化去僧　遷化した高僧。多分、雪巖といふ坊さんを指したものらしく、これも、題義の項に注することにする。【六】江城　蘇州府城を指す。【七】定　禪定。【八】懸燈　法燈を懸ける、新に宗風を發揮する。【九】楞伽　前に載げ見ゆ、佛經の名、ここでは佛理の義に用ひて居る。

【題義】姑蘇志に「開元禪寺は、盤門内に在り、吳の孫權の母吳夫人、宅を捨てて建つ、永通師開山、通玄寺と名づく。寺に石佛二あり、相傳ふ、晉の建興二年、滬瀆海口の漁者、神光の水を照らし、天に徹するを見、且にして之を覗れば、乃ち二石像、水上に浮ぶ。吳人朱膺等、迎へて、城に入り、通玄寺に置く。その後、漁者、又ここに帝靑石鉢を獲、遂に併せて以て佛に供す。唐の開元中、今の額に改む。舊と城の北隅に在り。同光中、錢氏遷して此に置く。元の至治間、寺燬く、僧光雪牕・恩斷江重建す。又韋詩、「綠陰生晝寂」の語を取つて、綠陰堂を作り、竝に虞集文を爲る」とある。開元寺は、もと通玄寺といつたのを、唐の開元中、年號の字に改めたのである。恩禪師師弟の本名竝に其居た處等は、すべて不詳。この詩は、恩禪師の弟子の勤といふ坊さんが、大分修行した後でもあらうが、開元寺に歸るのを送つたのである。

【詩意】上人は、山僧の法衣、冬を經て、大分破れたといふので、布施された絹を取り出して、無細工に繕ひ、一切そんな事には無頓著で、白雲たなびく高山に登つて、遍ねく寺を尋ねた。勤上人の法身は、海を浮んで來た彼の石佛であることが證せられ、その宗旨は、すでに遷化された高僧輩に因つて大に宣揚されたといふことで、その相續者たる上人の任務は、なかなか重い。そこで、上人は、今次、愈よ恩禪師の膝元を辭して、歸寺されるが、蘇州城中を過ぐる時は、定めて、これを歡迎して、齋飯を施す人もあらうし、それから、元の寺に住み込んで、入定をなし、新に自ら法燈を懸けられるであらう。ただ一たび此に別るれば、明朝、忽ち千峰を隔て、楞伽等の諸經に見えた佛敎の奧義を質問することが出來ない樣になるのが、私に取つては、いかにも、殘念である。

送三何記室游二湖州一

何記室の湖州に游ぶを送る

暮雨(一)關城獨去遲。　暮雨、關城、ひとり去ること遲し、
少年心事劍相知。　少年の心事、劍、相知る。
故人(二)當レ路輕二貧賤一。　故人、路に當つて、貧賤を輕んじ、
(三)倦客逢レ秋惡二別離一。　倦客、秋に逢うて別離を惡む。
疏柳(四)一旗江上酒。　疏柳一旗江上の酒、
亂山孤棹道中詩。　亂山孤棹道中の詩。
(五)水嬉散後湖亭廢。　水嬉散ずる後、湖亭廢し、
此去煩レ君(六)弔二牧之一。　ここを去つて、君を煩はして牧之を弔ふ。

【字解】【一】關城　關門に近き州城。【二】當路　要路に當る。【三】倦客　久客に同じ。【四】一旗　一片の酒旗。【五】水嬉　張協の七命に「乘二鳧舟一兮爲二水嬉一」とあつて、今の端艇競漕の如きもの。【六】弔牧之　唐詩紀事に「杜牧、字は牧之、宣城の幕に佐たり、湖州に游ぶ、刺史崔君、水嬉を張り、州人をして畢く觀せしめ、牧をして間行、奇麗を閲さしむ。乘鬟の者、十餘歳なるを得たり。後、十四年、牧、湖州に刺たり、その人、すでに稼して子を生む、乃ち悵として詩を爲つて曰く、自是尋春去較遲、不レ須惆悵怨二芳時一、狂風落盡深紅色、綠葉成レ陰子滿レ枝」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】雨蕭蕭として黄昏がる頃、君は獨り關門に近き州城を去らむが爲に、遲疑して居るが、少年の心事は、唯だ劍が相知るのみで、外の人には分からない。舊知の人は、要路に居るが、貧賤の者を輕蔑して、丸で相手にせず、久客は、秋に逢ふと、心うら寂しく、別れることを殊につらく覺える。君の行く途すがら、葉の疏になつた柳の木に近く、酒旗一片飄へる處、江上の亭を訪うて酒を酌むべく、亂山流を挾んで、奔湍相連る邊、孤棹舟を行つて、道中の詩を賦するであらう。湖州は、むかしの水嬉、すでに散じて、湖亭も、いつしか荒廢して居るだらうが、ここに、君を煩はして、當年の杜牧之を弔つて貰ひたいと思ふ。

【餘論】後聯は、道中の經過を詠出して、詩酒風流、自然、その中に具して居る。

江上寄二丁校理昆季一

江上、丁校理昆季に寄す

(一)望裏煙生是子家。　望裏煙は生ず、是れ子の家、
草堂應レ近(二)鶺鴒沙。　草堂、應に近かるべし鶺鴒の沙。
江汀毎恨無二舟渡一。　江汀、毎に恨む舟の渡るなきを、
(三)野墅空憐有二(四)酒賖一。　野墅、空しく憐む酒の賖るあるを。
(五)半雨暮成風外雪。　半雨、暮に成る風外の雪、

【字解】【一】望裏　眼界の中。【二】鶺鴒沙　鶺鴒の飛んで居る河原。詩經に脊令在レ原、兄弟急難とあり、杜甫の詩に草黄麒麟州、沙暖脊令寒とある。【三】野墅　郊外に在る別莊。【四】酒賖　賖は買つて貯へて置く。【五】半雨　ほんの少し

孤梅春動(六)臘中花。　孤梅、春は動く臘中の花。
相思尙隔前村遠。　相思、尙ほ前村を隔てて遠く、
獨倚柴門數去鴉。　ひとり、柴門に倚つて去鴉を數ふ。

【題義】丁校理は、前に數ば見えて居た。昆季は兄弟。この詩は、青邱が婁江に寓居した時、丁氏の兄弟に寄懷したのである。

【詩意】眺望する眼界の中に炊煙の立ち上るのが、卽ち君の家で、その草堂は、鶺鴒の飛ぶ河原に近かるべく、その鶺鴒に因つて、兄弟の睦ましいことも推察される。ここから往かうと思つても、江汀に渡し船の無いのが、毎毎遺憾であるし、君の別墅に、折角、酒が買ひ溜めてあるのも、勿體ないことと思ふ。頃しも、一寸降つた雨は、寒氣に勒せられて、暮には風外の雪となつたが、全體が暖かいので、一株の梅は、臘月ながら、花も綻びて、すべて春の氣分を動かして居る。相思の心は、さることながら、川向ふに前村の遠く隔つて居るのは、どうにも仕方がなく、ひとり、柴門に倚つて、飛び行く鴉を數へるのみである。

ばかり降つた雨。【六】臘中花　臘は祭の名、これを行ふに因つて、陰曆十二月の異名となつて居る。年の中に開く花。

送顧軍沓歸梁溪　顧軍沓の梁溪に歸るを送る

新柳(一)休攀(二)短短條。　新柳、攀づるを休めよ短短の條、
(三)離愁似雪未能銷。　離愁、雪に似て、未だ銷ゆる能はず。
(四)春廻廢苑還芳草。　春は廻つて、廢苑還た芳草、
人渡空江正(五)落潮。　人は渡つて、空江正に落潮。
(六)德曜宅前今獨去。　德曜宅前、今、ひとり去る、
(七)平津門下舊相招。　平津門下、舊と相招く。
重來莫在花開後。　重來在る莫れ花開くの後、
擬聽狂歌醉(八)幾朝。　狂歌を聽いて、幾朝にか醉はむと擬す。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】ここに別を爲すに際し、まだ十分に枝の伸びない新柳を攀ぢて之を折るにも及ばず、別離の愁は、雪の如く、なかなか消えては仕舞はない。今しも、春が立ちもどつて來て、戰後の廢苑にも、又ぞろ芳草を生じ、君が渡り畢つた頃、空江は、引汐になるであらう。君は閶門の西なる孟光舊居の

【字解】【一】休攀　攀は、柳の木につかまつて之を折り取る。【二】短短條　まだ葉が十分に伸びず、從つて短く見える枝。【三】離愁　別離の愁。【四】春廻　春が立ちかへつて來る。【五】落潮　引き汐。【六】德曜　梁鴻の妻、孟光の字。前に卷三、詠二隱逸一の詩中に詳述して置いた。【七】平津　西京雜記に「平津侯公孫弘、すでに宰相となり、乃ち東閣を開き、客館を築き、以て天下の士を招く。その一は欽賢館といひ、以て大賢を待ち、次を翹材館といひ、以て大才を待ち、次を接士館といひ、以て國士を待つ」とある。【八】幾朝　幾日に同じ。

前より出發されるが、さきに、公孫弘の如き宰相の門下に招き寄せられた人である。そこで、重ねて此に來るのは、花の開いた後でなく、まだ咲き出さぬ内にして貰ひたいので、さうすれば、春も、隨分長く、君の狂歌を聞きつつ、幾日も、打つづけて共に醉ふことが出來る。

白蓮寺次韻杜進士喜予見過話舊之作

白蓮寺、杜進士が予の過ぎらるを喜びて舊を話するの作に次韻す

不辭鳴棹遠相尋。 辭せず、棹を鳴らして遠く相尋ぬるを、

欲向江齋伴旅吟。 江齋に向つて、旅吟を伴はむと欲す。

百事未成年已長。 百事、未だ成らず、年、すでに長じ、

幾時纔別夏將深。 幾時か纔に別れて、夏將に深からむとす。

萱留倦蝶連池綠。 萱は倦蝶を留めて、池に連つて綠に、

樹帶殘鶯滿寺陰。 樹は殘鶯を帶びて、滿寺陰る。

恐被老僧嫌滯礙。 恐らくは、老僧に滯礙を嫌はれむ、

舊游休說更傷心。 舊游、說くを休めよ更に傷心。

【字解】【一】鳴棹 棹を鳴らす、舟で乘り出す。【二】江齋 江邊に在る書齋。【三】幾時 何時に同じ。【四】萱 わすれ草、本草に「冬月叢生、葉は蒲蒜の葉の如くして柔弱、新舊相代つて、四時青翠。五月莖を抽いて花を開く、六出四垂、朝に開き、暮に斂み、秋深に至つて盡く。萱、本と諼に作る、諼は忘るるなり、これを背に樹ゑ、玩味して以て憂を忘るるなり。懷姙の婦人、その花を佩べば、男を生む、故に宜男と名づく」とある。【五】倦蝶 疲れたる老蝶。【六】滯礙 愚圖愚圖して居ること。

【題義】白蓮寺は、前に數ば見え、甫里なる陸龜蒙舊宅の近處に在る。杜進士、名字は不詳。この人が青邱の過訪を喜びて、併せて舊を話すといふ題で、一律を作つたものと見える。そこで、青邱が白蓮寺に游んだ時、それに次韻したのである。この題中、喜二予見一過の見の字は不用と思はれるが、原題に書いてあるのを其儘取つたから、かくの如く成つたのでもあらうか。

【詩意】舟を乘り出して、遠く來て尋ねる位の事は何でもないので、江邊の書齋に往つて、一處に客中の吟詠でも試みやうと思ふからである。顧みれば、この身、百事未だ成らざるに、すでに年が寄つて仕舞ひ、何時であつたか、まだ別れたばッかりだと思つて居る內に、夏は次第に深くならうとして居る。眺めやれば、忘れ草は、老蝶を留めつつ、大分茂つて、池の近くまで一面に綠色に見え、木木は、まだ鳴きを入れぬ鶯を帶びた儘、寺中一ぱいに影を成して居る。さはれ、ここに愚圖愚圖して居ると、老僧が邪魔だと思つて、いやな顏をするかも知れず、又一段の傷心を免れぬから、むかし游んだことなどは、互に話をせぬが善からう。

【餘論】前聯は、今昔を低徊して感愴盡きず、數ば見るも飽かざる佳語である。

期徐七游雲巖

徐七と期して雲巖に游ぶ

憶與青山別幾時。 憶ふ、青山と別るる幾時ぞ、

雲松應恨鶴歸遲。 雲松、應に恨むべし鶴歸ること遲きを。

少知學道貧非病。(一) 少にして知る、道を學び、貧病に非ざるを。

閒愛談禪偈是詩。(二) 閒に禪を談ずるを愛す、偈は是れ詩。

女浣曉江煙淼淼。(三) 女は曉江に浣うて煙淼淼、

人行暮苑麥離離。 人は暮苑を行いて麥離離たり。

明朝風雨還同往。 明朝、風雨、還た同じく往かむ、

恐負高僧石上期。(四) 恐らくは負かむ、高僧石上の期。

【字解】【一】貧非病 家語に、「子貢、衛に相たり、駟を結び、騎を連れて、原憲を過ぐ。憲、弊衣冠を攝して之を見る。子貢曰く、子病めるか。憲曰く、財なきもの、これを貧といふ。道を學んで行ふ能はざる、これを病といふ。憲の若きは貧なり、病に非ざるなり」とあつて、同じ事が莊子にも、史記仲尼弟子列傳にも見えて居る。【二】偈是詩 白居易の贈永濰上人詩に正傳金粟如來偈、何用錢塘太守詩とある。【三】淼淼 正韻に「淼、杳渺、大水の貌」とある。【四】高僧石上期 甘澤謠に「李源、圓澤と忘年の交を爲し、荊州より峽に上り、婦人の錦襠を負うて汲むを見る。圓澤曰く、これ某が託身の處、更後十二年、杭州天竺寺外に君と相見む、と。この夕、圓澤亡ぶ。後十二年、源、餘杭に詣り、その約するところに赴く、牧豎あり、竹枝の詞を歌ふ、乃ち圓澤なり。歌うて曰く、三生石上舊精魂、賞月吟風不要論、慚愧情人遠相訪、此身雖異性常存」とある。

【題義】 徐七は、前に數ば見えた通り、例の徐賁。雲巖は、金櫃の注を缺いて居て、何處だか分からぬ。しかし、蘇州附近の一名勝たることは、勿論である。この詩は、徐賁と約して、雲巖に同行するに就いて、前以て作つたのである。

【詩意】 青山に一たび別れてより、幾許の時を經過したか。雲に聳ゆる松は、鶴の歸り來ること遲きを恨む樣に、矢張、われ等をも待つて居るであらう。すでに、道を學ぶ上は、財なきは貧であつて、そは病といふべきものでないといふ位な事は、夙に心得て居るし、禪を談ずる時、偈が卽ち詩であつて、詩禪の一致といふことも、もとより了解して居る。雲巖に至る途中の景色はといへば、曉早く、煙と共に渺渺たる江水に臨んで、賤の女が洗濯をして居るし、日暮、廢苑の跡を行けば、折から、麥が長じ、その葉は離離として晩風に打靡いて居る。明日は、たとひ、風雨であつても、屹度、同行しやうと思ふので、然らざれば、高僧と石上に於て會見しやうと云つた其期に負くことに成るかも知れない。

賦得寒山寺送別

寒山寺を賦し得て、別を送る

楓橋西望碧山微。(一) 楓橋、西に望めば碧山微なり、

寺對寒江獨掩扉。 寺は寒江に對して獨り扉を掩ふ。

【字解】【一】楓橋 寒山寺の近傍に在る。

船裏鐘催行客起。　船裏、鐘は行客を催して起さしめ、
塔中燈照遠僧歸。　塔中、燈は遠僧を照らして歸る。
漁村寂寂孤煙近。　漁村寂寂として孤煙近く、
官路蕭蕭衆葉稀。　官路蕭蕭として衆葉稀なり。
須記姑蘇城外泊。　須らく記すべし、姑蘇城外に泊し、
烏啼時節送君違。　烏啼の時節、君を送つて違ひしを。

【一】碧山　靈巖山あたりを指して云ふのであらう。
【二】遠僧　遠くから歩いて來る遊僧。
【三】官路　驛路をいふ。

【語義】姑蘇志に「寒山禪寺は、閶門の西十里、楓橋の下に在り。宋の太平興國の初、節度使孫承祐、浮圖七層を建つ。相傳ふ、寒山拾得、かつて、ここに止まる、故に名づく」とある。寒山寺が寒山拾得に因つて名を得たことは、世人の餘り知らぬことであらう。寒山寺は、唐の張繼が楓橋に泊して、例の月落烏啼の詩を作つて、その中に讀み込んでから、非常に有名に成つた。むかしは、蘇州から出發するのに、城内の溝渠から出船し、送別やら何やらで、隨分手間どつて、日本里數で、わづか一里を經て、ここに來ると、日が暮れるから、一泊するといふ樣になつて居たらしい。なほ、月落烏啼の詩に就いては、五更の鐘の有無を論ずる外、起句が實景であるか否やに就いて、色色の説があり、從つて、解釋も種種あるが、傍徑に入るから、ここでは、一切省略する。それから、楓橋は、青邱の詩にも度度見え、後に王漁洋は、旅中、雨夜、わざわざ寒山寺を尋ねたことなどもあつて、相變らず、有名であつたが、長髮賊の亂に燬かれて仕舞ひ、現存するものは、その後、重建したもので、寺としては、大したものもなく、楓橋は、すぐ寺の前に在るが、その川は、即ち運河の支流で、これも餘り大きなものでない。この詩は、寒山寺を賦して、人の遠行を送つたのである。

【詩意】楓橋より西の方を望むと、遠山が碧色を爲し、寒山寺は寒江に對して、ひとり扉を掩ひ、あたりは、物靜かである。曉の鐘の聲が、船中に響き來ると、行客は、起つて支度をして、大急ぎで漕ぎ出させ、日暮、塔中に燈火點ずる時、坊さんは、それを目あてにして遠くから歸つて來る。漁村は寂寂として、一つ家から上る煙は近く、驛路秋老いむとし、風は蕭蕭として、木の葉は大分落ちて、殘れるは稀である。君は、姑蘇城外なる寒山寺の直ぐ傍に舟を泊されるであらうが、烏啼く夜あけの頃、そこまで出かけて、君の遠行を送ることは、一寸六つかしく、ここで、失敬する外はない。

【餘論】塔中燈は、塔中に點ずる火であるから、その對語の船裏鐘は、船中に撞き出す鐘といふ樣に見えるので、船中に聞こえ來る鐘ならば、外に言ひ樣もありさうなもので、何にしても、對仗精當ならず、到底、瑕疵たるを免れぬことと思ふ。こんな小さいことは、如何でも善いといふ人があるかも知れぬが、詩といふものは、そんなものではなく、かういふ處は、あくまで、洗錬して穩當である樣にして貰ひたいのである。なほ、衆葉稀といふのも、造語が、面白くない樣である。

聞朱將軍戰歿　　朱將軍の戰歿を聞く

(一)江浦(二)戈船(三)赤幟稀。　江浦の戈船、赤幟稀なり、
孤軍落日陷重圍。　孤軍落日、重圍に陷る。
(四)鏡中蛇墮占應驗。　鏡中、蛇墮ちて、占、應に驗あるべし、
(五)牙上梟鳴事已非。　牙上、梟鳴いて、事、すでに非なり。
殘卒自隨新將去。　殘卒、自ら新將に隨つて去り、
老親空見舊奴歸。　老親、空しく見る舊奴の歸るを。
(六)聞雞此夜誰同舞。　雞を聞いて、この夜誰か同じく舞はむ、
西望秋雲淚灑衣。　西、秋雲を望んで、淚、衣に灑ぐ。

【字解】【一】江浦　揚子江の入り江。【二】戈船　兵船、通典に「伍子胥に戈船あり、以て干戈を載す、因つて、これを戈船といふ」とある。【三】赤幟　史記淮陰傳に「輕騎二千人を選び、人ごとに一赤幟を持たしめ、間道より山に萆れて趙軍を望ましめ、誡めて曰く、趙、わが走るを見ば、必ず壁を空しうして我を逐はむ、若、趙壁に入り、趙幟を拔いて漢の赤幟を立てよ」とある。【四】鏡中蛇墮　前定錄に「袁安叔、異人に遇うて書を得たり、云ふ、一命を受くる每に卽ち一幅を開けと。果仕、皆驗あり。一日、晨起、巾櫛すれば、一物、鏡中に墮つ、蛇の如くして四足、驚き仆れ、疾むこと數日にして卒す。書を留むること尙ほ多し。その妻、開いて之を觀れば、皆空紙なり、最後の一幅、蛇を盤鏡中に畫くのみ」とある。【五】牙上梟鳴　牙は牙營の旗、卽ち大將旗。晉書張重華傳に「重華、謝艾を以て中堅將軍となし、麻秋を擊つ。夜、二梟あり、牙中に鳴く、艾曰く、梟は邀なり、六傳梟を得るものは勝つ。今、梟、牙中に鳴く、敵に克つの兆と。ここに于て、進み戰つて大に之を破る」とある。【六】聞雞　前に舞劍聯句の中にも見えたが、晉書祖逖傳に「司空劉琨と俱に司州主簿となり、被を共にして同じく寢ぬ。中夜、荒雞の鳴くを聞き、琨を蹴つて覺まして曰く、これ惡聲に非ざるなり、と。因つて、起つて舞ふ」とある。

【題義】羣雄事略に「徐達、湖州を攻む。張士誠、平章朱暹及び五太子を遣し、兵を率ゐて舊館に屯せしむ。常遇春・薛顯に敗らる。暹、字は秦仲」とある。朱將軍は、湖州を救ひに往き、明軍に敗られて戰死したので、この頃、蘇州は張士誠に屬し、靑邱も、自然、その治下に居たから、將軍の死を聞いて、これを痛惜したのである。

【詩意】明軍は、戈船を連ねて、入り江に押し寄せたが、入れ替つて、之を占領する赤幟もなく、却つて、わが孤軍は、重圍の中に陷り、落日を廻すに由なき樣な形勢に成つた。むかし、鏡中に蛇の樣なものが落ちて、間もなく死んだといふ人があつたが、將軍の運命は、さながら、これに同じく、牙旗の上に梟が鳴いて、勝利を豫期して居たことも、全くあてが外れて、散散な敗軍になつて仕舞つた。そこで、生き殘つた士卒どもは、新任の大將に隨つて他處に赴き、もとの奴僕が歸つて來て、訃音を將軍の老親に傳へたといふ話。この夜、荒雞の聲を聞いて、慷慨、自ら禁ぜざれども、誰とて共に起つて舞ふ人もなく、唯だ、西、湖州の方を望み、秋雲の雨を含んで天を閉せるを見、覺えず、淚下つて衣を霑すのみである。

送何明府之秦郵

何明府の秦郵に之くを送る

馬前風葉助離聲。（一）　馬前の風葉、離聲を助く、
楚驛（二）都荒（三）不計程。　楚驛、すべて荒れて程を計らず。
一令倘淹三縣事。（四）　一令、倘ほ淹す三縣の事、
幾家曾見十年兵。（五）　幾家か、かつて見る十年の兵。
夕陽遠樹煙生戍。（六）　夕陽遠樹、煙、戍に生じ、
秋雨殘荷水繞城。　秋雨殘荷、水、城を繞る。
父老不須重歎息。　父老須ひず重ねて歎息するを、
君來應有故鄉情。　君來らば、應に故鄉の情あるなるべし。

【題義】明府は縣令の尊稱。一統志に「高郵縣、明の洪武の初、高郵府を改めて州となし、高郵縣を以て省き入る。戰國には楚に屬し、秦には秦郵たり」とある。この詩は、何某が高郵の縣令に任じて赴任するを送つたのである。但し、まだ高郵が州にならぬ時分の事であらうと思はれる。

【詩意】君の馬前には、風に採まれる落葉がざわざわと音して、さながら別離の聲を助くるが如く、寂しさ一しほ增し、これより行く手の楚地の驛路は、亂後荒廢して、豫め日程を定めることも出來ない位。君は縣令の職に留まつて居て、三縣に歷任したが、十年間の戰亂に苦しんだ家は、數かぎりもなく、これを治めて行くには、隨分骨が折れるに相違ない。高郵の地たるや、夕日が遠樹を照らして、戍營には煙が上り、秋雨は敗荷に灑いで、濠の水は、城を繞つて居る。その地の父老どもは、重ねて歎息するにも及ばないので、君が著任さへすれば、仁慈の政を布き、戰後の瘡痍も程なく癒えて、萬事復興し、そこで、皆皆故鄉の思を爲すであらうと思ふ。

【餘論】この詩の兩聯は、例の通り情景相配して、極めて面白い。これで、結末が今少し振つて居れば、見事、完璧瑕なきものと思はれる。

【字解】【一】離聲　離別の際に色色と語る其聲。【二】楚驛　秦郵は古しへの楚地で、そこに通ずる驛路。【三】都荒　兵亂の後、荒廢に歸せしこと。【四】三縣事　題下の原注に「何は淮東の人、すでに三たび縣令となる」とある。【五】十年兵　十年の爭亂。【六】煙生戍　戍は戍營。

過野寺次韻徐廉使琰舊題

野寺を過ぐ、徐廉使琰の舊題に次韻す

使節城東按部（一）迴。　使節、城東、部を按じて廻る、
曾將從吏（二）到香臺（三）。　かつて、從吏を將ゐて香臺に到る。
秋林數騎蕭蕭去。　秋林の數騎、蕭蕭として去り、
晚澤孤鴻嗷嗷（四）來。　晚澤の孤鴻、嗷嗷として來る。

【字解】【一】按部　管內を巡檢する。【二】從吏　屬僚を云ふ。【三】香臺　寺を云ふ。【四】嗷嗷　鳴く聲の悲しきをいふ。【五】柏風　柏樹を吹く風。【六】物色　風物・

蘿雨淫ㇾ衣溪路轉。　蘿雨、衣を淫して溪路轉じ、

（五）柏風吹ㇾ燭殿門開。　柏風、燭を吹いて殿門開く。

當年物色（六）雖留與。　當年の物色、留與すと雖も、

題壁慙無（七）子美才。　題壁、慙づらくは、子美の才なし。

【題義】野寺は田舍の寺、名が分からぬから、かく云つたのであらう。徐廉使は、杭州府志に「徐琰、字は子方、養齋と號す、東平の人。翰林承旨王磐、その才を薦め、至元中、浙西肅政廉訪使に拜せらる。文學の名あり、東南の人士、これを重んず」とある。この詩は、青邱が或る田舍の寺に往つた處が、壁上に廉訪使徐琰の題詩があつたから、取り敢へず、その韻に次したのである。

【詩意】徐君は廉訪使たる節信を押し立て、城東なる管內を巡檢して歸られ、ある時、屬僚どもを引き具して、この寺に立ち寄られた。おもへば、その折しも、數騎、手綱を竝べ、蕭蕭として落葉する秋林の中を通ると、池沼は黃昏がれて、一羽の雁が悲しげに鳴いて飛んで居たであらう。それから、蘿の葉に雨が殘つて居て、衣を霑すにも拘はらず、溪上の路の曲れるに隨つて進み行くと、程なく、この寺に著し、柏の木を吹く夕風が、龕の中なる燈明を吹き動かし、殿門は、ちやんと開いて居たことと思ふ。かくの如き當年の風景は、その儘、殘留して居るが、今、徐公の韻に次して、壁上に詩を題せむとするも、われに杜甫の如き才なきは、まことに慙愧に堪へぬことである。

【餘論】後聯は、溪寺の物色を描き出して、復た餘蘊なく、結句の謙辭たること、はじめて明かにして、愈よ奧ゆかしく感ぜられる。

風色に同じ、杜甫の詩に登臨多物色、陶冶賴詩篇とある。【七】子美　杜甫の字、夔府詠懷の詩に東郡時題ㇾ壁とある。

送榮陽公行ㇾ邊　　榮陽公の邊を行るを送る

風卷（一）雙旌雪（二）覆韉。　風は雙旌を卷いて、雪は韉を覆ふ、

遠騎白馬出（三）行邊。　遠く白馬に騎して、出でて邊を行る。

兵馳空壁（四）三千幟。　兵は空壁に馳す、三千の幟、

客宴高堂（五）十萬錢。　客は高堂に宴す、十萬錢。

屏裏舊圖（六）魚復陣。　屏裏、舊と圖す、魚復の陣、

燈前新注（七）豹韜篇。　燈前、新に注す、豹韜の篇。

功成他日論諸將。　功成つて、他日、諸將を論ず、

只有（八）荀郎最少年。　只だ荀郎の最も少年なるあり。

【字解】【一】雙旌　旌は、析いた羽を竿首につけた旗。大將が出行する時には、その前に之を二本立てる。【二】覆韉　韉は下ぐら、鞍下の氈。【三】行邊　邊境を巡る。【四】三千幟　前に、聞朱將軍戰歿の詩中に注したが、史記淮陰侯傳に見え、韓信が趙軍をおびき出し、二千の伏兵をなして、城中に入つて、赤幟を建てしめた。原文には、輕騎二千人、人ごとに一赤幟を持たしむとあるが、ここに三千幟としたのは、平仄の都合で、必ずしも、原文に拘泥しないのである。【五】十萬錢　南史到撝傳に「撝貲籍豪富、厚く自ら奉養し、一身に供する一

日十萬」とあり、又杜甫の飲中八仙歌に左相日興費二萬錢一、飮如二長鯨吸一二百川一とある。【六】魚復陣　一統志に「夔州奉節縣は周の魚復國、諸葛武侯八陣圖蹟あり」と見ゆ。【七】韜鈐　太公の六韜中の篇名。【八】荀郎　南史に「荀羨、字は令則、徐州刺史に遷る、時に年二十八。中興の方伯、未だ羨の年少の如きものあらず」とある。

【題義】滎陽公は、金檀の注にも之を缺いて居るから、誰だか、よく分からぬが、明初功臣中の年少者で、今次、邊境を巡察するに因り、青邱は、この詩を作つて、その行を送つたのである。

【詩意】北風颯として雙旌を吹き捲き、雪は白く積つて、下鞍をも覆ふ樣な、この荒寒の時に當り、君は白馬に跨つて、遠く邊境を巡察されるとのことで、まことに御苦勞の至である。かつて、戰に臨み、伏兵を敵の空城に馳せ入らしめて、三千の赤幟を押し立て、見事、大捷を得たこともあつたが、今は、留別の爲め、羣客を高堂の上に會し、十萬の巨費をも厭はずして、盛宴を催された。屛風の上には、魚復浦に在りと聞く孔明の八陣が、もとから畫いてあるし、燈前に於ては、近ごろ、六韜の注釋を書いたといふことで、その人物といひ、韜略といひ、もとより、他より傑出して居る。されば、他日、諸將に就いて論功行賞をされる樣な場合には、君こそ、當年の荀羨の如く、第一の年少者として、屹度、その中に加はるに相違ない。

登二涵空閣一　　涵空閣に登る

滾(一)滾波濤漠(二)漠天。　滾滾の波濤、漠漠の天、
曲闌高(三)棟此山顚。　曲闌高棟、この山顚。
置レ身直在二浮雲上一。　身を置いて、直に浮雲の上に在り、
縱(四)レ目長過去鳥前。　目を縱にして、長く過ぐ去鳥の前。
數杵秋聲荒(五)苑樹。　數杵の秋聲、荒苑の樹、
一帆暝色太湖船。　一帆の暝色、太湖の船。
老僧不レ識興亡恨。　老僧は識らず、興亡の恨、
只向二游人一說二往年一。　只だ游人に向つて、往年を說く。

【字解】【一】滾滾　湧き出づる貌。【二】漠漠　廣遠の貌。【三】高棟　棟の高い樓閣。【四】縱目　目を縱にして、方方を眺める。【五】荒苑　例の長洲苑であらう。

【題義】題下の原注に「靈巖寺に在り」と記してある。そこで、青邱の鳧藻集を檢すると、遊二靈巖一記の一文があつて、特に此閣を記して「閣あり、以て具區の波を瞰る、涵空といふ、虛明動盪、用つて奇觀と號す。蓋し、この邦の美を專にするものは山にして、この山の美を專にするものは閣なり。啓は吳人、ここに遊ぶこと甚だ亟ばなりと雖も、然れども、山、毎に幽を匿し、勝を閟ぢ、蒐剔すべきなく、予の陋を鄙むものの如し。今年春、淮南行省參知政事臨川饒公に從ひ、その客十人と復た

來り游ぶ。高きに升つては、山の佳なるもの、悠然として來り、奥に入つては、石の奇なるもの、突然として出で、氛嵐、これが爲に蹇舒し、杉檜、これが爲に拂舞し、幽顯巨細、爭つて厥狀を獻じ、披豁呈露、隱遁あるなし。然る後、この山に於て、はじめて、今に識つて、素より昔に昧しと爲すを知るなり」とある。この詩は、多分同時に作つたものと思はれるので、その興會の横逸なるを想見することが出來る。

【詩意】曲れる欄干、高い棟宇は、山の巓に在るが故に、眺觀極めて廣く、滾滾たる波濤、漠漠たる天空は、この胸を動盪するが如くである。ここに居れば、この身を浮雲の上に置いた樣であるし、目を放てば、いつでも、飛鳥の前を過ぎて、その外にも及ぶ位。砧は秋の聲を動かして、荒れはてた長洲苑の樹に響徹し、帆は暮の色を含んで、廣き太湖を船は横ぎつて行く。ここは、むかしの吳越を始めとして、數ば興亡を經た處であるが、老僧は、その恨を知らぬ顏で、唯だ游人に向つては、往年繁華の狀況をのみ話して居る。

【餘論】さすがに、興酣にして、油の乘り切つた作だけに、兩聯、極めて面白く、一虛一實、相配した處は、後人に典型を與へたものである。但だ、例の如く、結末の陳套にして稍や振はぬは、いかにも遺憾であつて、青邱の才を以てして、なほ此の如しとすれば、詩の難きこと、以て想見すべく、それにつけても、事もなげに、そそくさと字だけ竝べて喜んで居る樣な手合は、謂はゆる疏才で、到底數ふべからざるものである。

婁江寓舍喜王七隅見過却送還郭

婁江の寓舍、王七隅の過ぎらるるを喜び、却つて郭に還るを送る

送君只過孝廉橋。　君を送つて、只だ過ぐ孝廉橋、

不似君來訪我遙。　似ず君、來つて、われを訪ふの遙なるに。

路未同歸鴻杳杳。　路、未だ同じく歸らず、鴻杳杳、

門方孤掩竹蕭蕭。　門、方に孤り掩ふ、竹蕭蕭。

遠愁忽與鐘聲至。　遠愁、忽ち鐘聲と至り、

殘醉微兼燭燼消。　殘醉、微に燭燼と消ゆ。

莫道扁舟難重過。　道ふ莫れ、扁舟重ねて過ぎ難しと、

寒江日日有廻潮。　寒江、日日廻潮あり。

【字解】〔一〕孝廉橋　蘇州府志に「外跨塘、永慶橋、東を過ぎて官塘に沿ひ、第五橋、孝廉と名づく」とある。〔二〕孤掩　ひとり掩ふ、この家だけ門を閉ぢてある。〔三〕燭燼　燈火の燃え屑。〔四〕廻潮　再び廻つて來る潮。

【通義】王隅は、前に卷六に其死を哭する詩が見えて居て、それを解釋する時、鳧藻集に見えた王仲

廉哀辭を引いて置いたが、なほ、その文中、「夫れ士、鬱するあつて耀かず、又篤癈の疾を招き、夭札の禍に罹り、親老いて其養を終る能はず、子生まれて其長を待つ能はず、これ古今の凶極まつて甚だ哀むべきもの、而して、吾が仲廉、これに丁る、豈に命に非ざらむや」とあつて、青邱が滿腔の同情を寄せて居る處を見ると、生前に於ける友誼の厚かりしことも、大抵、想像される。青邱の婁江に寓したのは、至正二十二年から二十五年に至るまでであるから、この詩を作つたのも、この三四年間に相違ない。そして、王隅が二十六年三月に死んだことは、哀辭にも見えて居る。この詩は、婁江に寓して居る時に、王隅の來訪せしを喜び、それから、蘇州の城郭に還るのを送つて、孝廉橋まで往つた其時に作つたのである。

【詩意】君の歸るを送つて來たものの、唯だ孝廉橋を過ぎただけで、さう遠くにも往かず、君がはるばる予を尋ねて來て呉れたのとは、比較にも成らない。雁の影は、杳杳として、さながら君の唯だ一人なるに似て居るが、われは、まだ君と一處に此路を取つて、蘇州に歸る譯にも行かず、竹の蕭蕭たる間に、自分の侘住居だけは、門を閉してある。遠愁は、鐘聲に催されて忽ち至り、殘醉は、燈火の燃え屑と共に、少しづつ消えて行く。寒江の上だに、日日廻る潮がある位だから、君は、又と扁舟に乘つて來ることは出來ぬなどと言はずに、遠からず、是非、再び來て貰ひたい。

【餘論】後聯は、語眞にして意摯、且つ、いくらか新警婉曲の致がある。

送葉卿還隴西公幕兼簡周軍咨

葉卿の隴西公の幕に還るを送り、兼ねて周軍咨に簡す

落日關城動鼓笳。　落日關城、鼓笳を動かす、
遠游憐汝尚無涯。　遠游、憐む汝が尚ほ涯なきを。
壯身漫託三公府。　壯身、漫に託す三公の府、
歸夢難尋萬里家。　歸夢、尋ね難し萬里の家。
投驛暮山燈照葉。　驛に投ずれば、暮山、燈、葉を照らし、
待潮秋渡棹黏沙。　潮を待てば、秋渡、棹、沙に黏す。
軍中記室如相問。　軍中の記室、もし相問はば、
只說愁吟對菊花。　只だ說け、愁吟、菊花に對すと。

【字解】【一】關城　前にも見ゆ、關門に近き州城。
【二】壯身　少壯の身。
【三】記室　即ち周軍杏を指す。

【通義】葉卿・周軍杏、ともに、字や閱歷は不詳であるが、隴西公の幕下に居るものと見える。その隴西公も、誰か分からぬが、その地を鎭撫する故に云つたのであらう。この詩は、葉卿の隴西公の幕中に還るを送り、そして、序なれば、手翰に代へて、周軍杏にも寄せたのである。

【詩意】入日たゆたふ闕門近き州城に於ては、笳鼓の聲かしましく、これが即ち君の歸り行く處で、君が遠游して際限なきは、殊に御苦勞の至である。君は、少壯有爲の身を以て、漫に三公の府に託し、太尉の幕賓となつて居て、夢に歸らむとするも、家は萬里を隔てて、一寸尋ね煩ふことであらう。その途すがら、暮山の下なる驛亭に投宿すれば、燈火寂しげに、落葉に照り、秋の渡頭に渡しを待つて居ると、棹は沙にへばり付いて、容易に舟が動かず、旅中の感慨、さこそと思ひやられる。そこで、君の歸後、周軍沓が若し予の事を尋ねたならば、相變らずの境涯に沈淪し、愁吟しつつ菊花に對して居ると云つて答へて呉れろ。

【餘論】かういふ詩とても、無論、大抵には出來て居るが、要するに、雋句に乏しき爲め、光燄人を射る樣の趣なく、一寸庸熟に流れる傾向ある處が、どうも面白くないのである。

范文正公祠　范文正公の祠

〔一〕開閣〔二〕陳書對御筵。　閣を開き、書を陳して御筵に對す、

共言天子〔三〕得時賢。　ともに言ふ、天子、時賢を得たりと。

〔四〕才〔五〕陪上相趨廷內。　わづかに上相に陪して、廷内に趨り、

〔六〕遠撫豪羌出塞邊。　遠に豪羌を撫して、塞邊に出づ。

〔七〕松柏自依〔八〕先隴廟。　松柏、自ら依る先隴の廟、

稻禾猶滿〔九〕義莊田。　稻禾、猶ほ滿つ義莊の田。

古來直道難終合。　古來、直道、終に合ひ難し、

何必深嗟慶曆年。　何ぞ必ずしも深く嗟せむ慶曆の年。

【字解】【一】開閣　閣は天章閣、天子の御居間。【二】陳書　意見書を差し出す。【三】得時賢　宋史范仲淹傳に「趙元昊、和を請ふ。召して、樞密副使に拜せらる。歐陽修、復た宰相の才あるを言ふ。仲淹、固辭して曰く、宰相は、諫官に由つて得べけむや」と。帝の親除を俟つて、然る後に拜す。帝、方に太平に銳意、數ば當世の事を問ひ、天章閣を開き、輔臣を引いて條對せしむ。仲淹、乃ち十事を上る」とある。【四】才　わづかにと訓すべし、纔と通用す。【五】陪上相　首相の次位に班する、續通鑑に「慶曆三年八月、范仲淹を以て參知政事たらしむ」とある。【六】撫豪羌　續通鑑に「慶曆四年六月、陝西河東宣撫使となる。はじめ、仲淹、呂夷簡に忤ひ、放逐せらるるもの數年、陝、兵を用ふるに及び、帝、士望の屬するところを以て之を用ひ、富弼と同じく政を輔けしむ。はじめ、石介、記を弼に奏し、責むるに伊周の事を行ふを以てす。夏竦、介を怨み、これに因つて弼等を傾けむと欲し、乃ち女奴をして、陰に介の書を習はしめ、伊周を改めて伊霍となし、又介が弼の爲に撰せる廢立の詔を僞作し、飛語上聞す。帝、信ぜずと雖も、しかも、弼と仲淹と、恐懼自ら安んぜず。適ま契丹夏を伐つを聞き、遂に請うて邊を行る」とある。【七】松柏　祠邊の樹。【八】先隴　祖先の墓地。【九】義莊　豐年の時米穀を貯へ置き、凶年の時に之を出して窮民を救恤する共田宅。

【題義】題下の原注に「天平山に在り、公の祖父の冢、祠前に在り、乃ち義莊を置いて山下に在り、子孫、今に至つて之を守る」とあり、鳧藻集に載する游天平山記にも「山は城を距て、西南に水行す

ること三十里、至れば、舟を捨てて輿に就き、平林淺塢の間を經、道傍の竹石蒙翳、泉あり、伏して見えず、泠泠として琴筑の聲を作す。予、欣然輿を停めて聽き、これに久しうして去る。白雲寺に至り、魏公祠に謁し、遠公菴に憩ひ、然る後、その麓より狙杙して以て上る」とあつて、祠は、天平山の麓で、白雲寺の境内に在ることが分かる。なほ、范仲淹の事は、前に卷十、范魏公手書伯夷頌、爲二其裔孫天章一題の詩中にも詳述して置いたから、再び此に贅するにも及ばぬと思ふ。

【詩意】天章閣中、仁宗の面前に於て、范公が時事に就いて奏上した時、世間では、方今聖明の天子は、一代の名賢を得、太平の至治、期して待つべしといふ樣に噂をして居た。しかし、范公は、宰相に陪席して、朝廷に趨走することが出來る樣に成つたばかりなのに、遽に西夏の羌族を鎭撫する爲に、塞邊に出戍することになつて、滿腹の經綸を十分に展べることの出來なかつたのは、まことに殘念である。ここに、松柏は鬱然として、祖先の墓地に鄰接したる其祠に依り添ひ、公の創設した義莊に附屬せる靑田には、いつも稻が成熟して、その遺德をしのばしめる。古しへより、直道を守るものは、始終世に合ふといふことが六つかしいので、范公の此に至れるは、もとより偶然ならず、何も慶曆の時代が惡いからだといつて、嗟嘆するにも及ばぬことである。

丁令威宅

丁令威の宅

令威作レ仙上レ天去。　令威、仙と作つて、天に上つて去り、
舊宅留在二(一)青山阿一。　舊宅、留めて青山の阿に在り。
千年宅廢但遺井。　千年宅は廢して但だ遺井、
何處更聞(二)華表歌。　何の處か更に聞かむ華表の歌。
(三)南陌黄塵足二去客一。　南陌の黄塵、去客に足り、
東流碧海絶二廻波一。　東流の碧海、廻波を絶つ。
鶴歸重覽應二惆悵一。　鶴歸つて重ねて覽れば應に惆悵すべし、
地上邱墳今又多。　池上の邱墳、今又多し。

【字解】【一】青山阿　阿は邊に同じ。
【二】華表　門柱。
【三】南陌　陌は大路。

【題注】題下の原注に「陽山に在り、煉丹井の在るあり」と記してある。搜神記に「丁令威は、遼東の人、漢初、師に隨つて仙道を學び得、分身、意の欲するところに任かす。かつて、暫く歸り、化して白鶴となり、郡城門の華表柱頭に集まる。時に少年あり、弓を擧げて、これを射むと欲す。鶴、乃ち飛んで空中に徘徊して言ふ、

有レ鳥有レ鳥丁令威。去レ家千歳今歸來。城郭如レ故人民非。何不レ學レ仙冢纍纍。

遂に高く上つて天に冲す」とある。ここの遼東は、即ち今の滿洲の遼陽、丁令威は其地の人といふ以上、蘇州の陽山に宅があるといふのは、極めて變である。但し、靑邱は、唯だ傳說に據つて、この詩を作つたのであらう。

【詩意】 丁令威は、仙人となつて、碧天に上りし後、舊宅は、依然として靑山の麓に在るが、すでに、千年を經、その址、盡く廢し、今では唯だ井が殘つて居るだけであつて、かつて遼東城門の華表の上で唱へた歌は、何處へ往つても、聞くことが出來ぬ。顧みれば、人生の果敢なきは、南の大路に飛ぶ黃塵の如く、そして、登仙の覺束なきは、碧海東流して、立ち廻る波だに無きを見ても分かる。そこで、鶴に化した令威が又ぞろ歸つて來た處で、この世の有樣を見れば、必ず惆悵すべく、地上の邱墳は、その當時に比して、今は、一層多くなつて居る。

【餘論】 第二句、舊宅留在青山阿の七字は、平仄を誤つて居るし、且つ舊宅は、第三句の千年宅と語意ともに複して居るから、斷じて、誤訛に相違なく、編修者が之を斷つて置かぬは、不親切の嫌がある。

辭戸曹後東還出都門有作

戸曹を辭して後、東に還らむとし、都門を出でて作あり

詔貳(一)民曹出禁林(二)。　詔して民曹に貳として禁林を出でしむ、
陳辭(三)因得解朝簪(四)。　辭を陳べ、因つて朝簪を解くを得たり。
臣材自信元難稱(五)。　臣の材、自ら信ず、元と稱ひ難きを、
聖澤誰言尙未深。　聖澤、誰か言ふ、尙ほ未だ深からずと。
遠水江花秋艇去。　遠水江花、秋艇去り、
長河(六)宮闕曉鐘沈。　長河宮闕、曉鐘沈む。
還鄕何事行猶緩。　鄕に還る、何事か、行くこと猶ほ緩、
爲有區區戀闕(七)心。　區區、闕を戀ふる心あるが爲なり。

【字解】 【一】貳民曹　說文に「貳は副益あり」とある。民曹は即ち戸部、官制沿革に「漢の民曹は隋の民部、唐、太宗の諱世民を避け、改めて戸といふ」とある。戸部の長官は尙書、これは、その次官となることで、即ち戸部侍郎。【二】禁林　翰林を云ふ。【三】陳辭　離騷に、就重華而陳辭とある。【四】朝簪　簪は冠を留める爲に用ふ。【五】難稱　才が官に協はぬ。【六】長河　銀河。【七】戀闕　宮闕を戀ふる心。

【題義】 年譜に「洪武三年二月、翰林院編修を授けらる。七月、帝、闕樓に御して召對し、戸部侍郎に擢んでしが、辭す。金幣を給して放ち歸す」とある通り、靑邱は、元史すでに成るの後、頻りに拔擢されたが、わづか半年餘りで、決然冠を挂けて、江上の靑邱に歸臥して仕舞ひ、どういふ譯だか、よくは分からぬ。或は同輩の猜忌を避けたのか、或は明の太祖の人物、動もすれば冷酷なるを見拔いて、他日の禍を懼れたのか、色色に揣摩する人もあるが、要するに、ともに確證なきことである。

この詩は、即ち戶部侍郎を辭し、東に向つて歸鄕せむとする際、南京を出でて作つたのである。

【詩意】詔して、戶部侍郎に任じ、翰林を出づることに成つたが、謹んで辭を陳べて、御斷りを申し上げ、ここに始めて冠を挂くることを允された。元來、私の材は、到底、その職に協はないと信ずるので、曠職の譏を蒙らぬ内に、辭職した始末、決して、聖恩が未だ深くないといつて、不滿に思つた譯ではない。江水渺渺として遠く、兩岸には蓼だの蘆だのが花を開いて居る間を、小舟で下りつつ、顧みれば、銀河低く地に垂れて宮樹を帶び、鐘の音さへ沈んで聞こえる。ここに歸鄕せむとして、何故に行くこと、なほ緩かにして、悠圖悠圖して居るかといへば、區區として宮闕を戀ふる心があるからで、これが都の見收めかと思ふと、まことに、惆悵の念に堪へられぬ。

【餘論】前聯は、今次の辭職を以て、おのが才の稱はざるに歸し、聖澤決して淺からざるを云ひ、結末、更に戀闕の思に堪へぬことを言つたのは、まことに、詩人忠愛の本旨に副うたもので、たとひ、他に原因があるにしても、支那流では、かういふのが至當で、又文字に含蓄多き所以である。後聯は明瑩穩麗、例の慣用の語法を以てせる佳語である。

寄余左司

余左司に寄す

何處吹愁角一聲。　何の處か愁を吹く、角一聲、

大江東岸呂蒙營。　大江東岸、呂蒙の營。

天隨流水茫茫去。　天は流水に隨つて茫茫去り、

月共長庚耿耿明。　月は長庚と共に耿耿明かなり。

虜意有圖秋暫息。　虜意圖あり、秋、しばらく息み、

客魂無定夜還驚。　客魂、定まるなく、夜、還た驚く。

欲陪釃酒樓船座。　陪せむと欲す、酒を釃ぐ樓船の座、

借問風潮早晚平。　借問す、風潮、早晚平かなるかと。

【題義】余左司は即ち余堯臣、北郭十友の一、贈答の詩は、前に數ば見えて居た。淮張亡びし後、濠に謫せられ、後に新鄭丞を授けられた時、青邱は、寄余新鄭といふ五古の長篇を寄せたこともある。この詩は、堯臣が淮張の重臣たる邁善卿・呂珍の幕下に居た頃で、蓋し、彼の得意時代であつたらうと思はれる。

【詩意】何處で角聲が頻りに愁を吹いて鳴るかといへば、大江の東岸なる呂蒙の舊城で、今しも、君は其地に駐屯して居る。天は、流水に隨ひて、茫茫として遠く去り、月は太白と共に、耿耿として耀いて居る。敵の方でも、怠らす計略を廻らすことであらうが、秋に成つて、しばらく休戰の狀態であ

【字解】【一】呂蒙營　一統志に「呂蒙城は、嘉魚縣石頭口に在り、孫權、零陵を征する時に築く」とある。【二】長庚　太白星。【三】有圖　計略がある。【四】釃酒　東坡の赤壁賦に、釃酒臨江、橫槊賦詩とある。【五】早晚　早かれ遲かれ、いづれ其内といふのが、普通であるが、ここのは、何時といふ意。陶潛の時に、留自山中來、早晚發天目とあるのが、即ち其例である。

るし、客中の魂は、何となく、落ち付かず、夜ごとに、驚かされることであらう。君が樓船に乘じ、酒を釃いで豪興を縱にする其側に陪席したいと思ふが、江中の風潮は、何時平かになるか、その時こそ、是非、出かけて往つて見やう。

【餘論】天隨、月共の十四字は、氣象壯濶でありながら、膚廓に陷らぬ處が極めて宜しい。

聞家兄謫壽州　家兄の壽州に謫せらるるを聞く

別來未(一)省去何投。　別來未だ省せず、去つて何にか投ずる、
書到方知謫壽州。　書到つて方に知る、壽州に謫せらるるを、
覽俗自堪傷遠抱(二)。　俗を覽て、自ら遠抱を傷むに堪へたり、
聽(三)音誰解釋羇憂(四)。　音を聽いて、誰か羇憂を釋くを解せむ。
長淮波浪應愁渡。　長淮の波浪、應に愁へて渡るべく、
故國江山只夢游。　故國の江山、只だ夢游。
未有萬回(五)飛往術。　未だ萬回飛往の術あらず、

【字解】【一】未省　省は歸省する。歸つて見舞ふ。【二】遠抱　遠地に於ける懷抱。【三】聽音　音は言語。【四】羇憂　旅愁に同じ。【五】萬回　傳燈錄に「萬回禪師、姓は張、九歲、乃ち能く語る。兄、西安に戍す、父母遣して問訊す、朝に往いて暮に返る、萬里にして回るを以て、因つて萬回と號す」とある。

魂銷空望楚雲秋。　魂銷えて、空しく望む楚雲の秋。

【題義】前に卷六に、送家兄西遷と題せる五古があつて、この詩は、その少し前に作つたものと考へられる。靑邱の兄、名は杏、淮張に與みせしに因つて、その滅亡の後、明の太祖の命として、流謫されることとなつたので、その地は、壽州鳳陽府に屬して居る。靑邱は、亂後、江上に移居し、兄が愈よ壽州に徙される由を聞いて、先づ第一に此詩を作つたのであらう。卷首に轉載した年譜に、この詩の方を後に廻はしたのは、特別の事情なき限り、どうも、當を得ない樣に考へられる。

【詩意】別れし後、君は久しく歸つて見舞ふこともせず、亂後、何處に往かれるかと思つて居た處が、御手紙に依つて、今次壽州に謫せられるといふことが分かつた。その地は、もとより邊鄙であるから、異なりたる風俗を覽ては、自然、遠客の懷抱を傷ましむべく、言語の侏離なるを聞いては、どうして旅愁を釋くことが出來やう。長き淮水の波浪は、愁へて渡るべく、故國の江山は、只だ夢中に游ぶのみである。古しへの萬回の如く、朝に往いて暮に返り、君の謫居を造作なく問訊することが出來れば、何でもないが、さういふ術も心得て居ない處から、楚地の雲の秋に棚引くを見て、空しく、魂を銷すばかりである。

【餘論】長淮、故國の十四字は、遠近を兼ね、悽惋の極、一誦、人をして覺えず、亦た魂銷せしめる。

吳城感舊

吳城、舊を感ず

(一)城苑秋風(二)蔓草深。 城苑の秋風、蔓草深く、
豪華都向此(三)銷沈。 豪華、すべて此に向つて銷沈す。
(四)趙佗空有稱尊計。 趙佗、空しく尊を稱するの計あり、
(五)劉表初無弭亂心。 劉表、初めより亂を弭むる心なし。
半夜(六)危樓俄縱火。 半夜、危樓、俄に火を縱ち、
十年(七)高塢漫藏金。 十年、高塢、漫に金を藏す。
廢興一夢誰能問。 廢興一夢、誰か能く問はむ、
回首青山落日陰。 首を回らせば、青山、落日陰る。

【字解】【一】城苑 城中の宮苑。【二】蔓草 つる草ではない、草の繁茂して居ること。【三】銷沈 消えて無くなる。【四】趙佗 史記文帝紀に「後六年、南越王尉佗、自立して帝となる」とある。これは、張士誠の僭號を指したので、明紀に「元の至正二十三年、自ら吳王と號す、詔して、使を遣して糧を徵すれども與へず」とある。【五】劉表 季漢書內傳に「劉表、荊州刺史となり、自ら境內を保つ。曹操、袁紹と方に官渡に相持す。紹、人を遣して助を求めしむ、表、これを許して至らず、又操を佐けず。從事中郎韓嵩・別駕劉先、表に說いて曰く、豪傑並び爭ひ、兩雄相持す、天下の重き、將軍に在り。將軍、もし爲すあらむと欲すれば、起つて、この弊に乘ずる可なり、もし然らざれば、もとより、將に從ふところを擇ばむとす、と。表、用ふる能はず」とある。これは、張士誠が唯だ一隅を守つて、毫も大志なきを嘲つたので、明紀に「至正二十年閏五月、陳友諒、すでに太平を陷れ、その王徐壽輝を弑し、遂に自ら帝と稱し、國を漢と號し、使を遣し、張士誠に約して、同じく入寇せむとす、士誠、狐疑として自ら固うし、敢て應ぜず」とある。【六】危樓俄縱火 明紀に「張士誠、城破る、羣を齊雲樓下に積み、羣臣侍妾をして樓に登らしめ、養子辰保をして火を縱つて之を焚かしむ」とある。【七】高塢漫藏金 後漢書に「董卓、塢を郿に築いて萬歲塢と號し、金二三萬斤、銀八九萬斤を藏し、穀を積むこと三十年」とあつて、張士誠の富饒を比して云ふ。

【題意】吳城は即ち蘇州府城。この詩は、張士誠の滅後、府城の荒廢を見、その昔の豪華をしのんで作つたので、即ち士誠を弔つたのである。

【詩意】城中の苑囿は、秋風の吹くに任かせて、草の茂みも深く、往日の豪華は、すべて、この中に向つて消えて仕舞つた。張士誠の號を僭せしは、さながら、趙佗が南越に在つて、帝と稱せしと同じく、ほんの一時の空威張に過ぎず、その眼前の榮華に甘んじて、中原に討つて出やうとか、四海を統一しやうとか云ふ大志なきは、丁度、劉表が荊州に據つて、誰をも助けず、はじめから爭亂を鎮定する心なかりしと一般。そこで、明の太祖が南に起り、その兵が推し寄せると、一たまりも溜まらず、淮張は忽ち破國の否運に臨み、夜半、俄に齊雲樓に火を縱つて、幾多の羣妾侍女は、ここで焚死し、十年の久しき、專ら貯蓄を事としたのは、彼の董卓が郿塢に金銀を藏して置いた樣なものであるが、氣の毒ながら、何の效果もなかつた。興廢は、唯だ一場の夢の如く、今日、其跡を尋ねる人とてはなく、首を回らして顧望すれば、一帶の青山、落日を帶びて曇り、形勝むなしく存するも、人すでに在らず、寂しさ、愈よ增すのみである。

【餘論】前聯は、典故を用ひて、恰も適確であるし、後聯は、二句の中に、その興亡を道ひ得て盡し

て居る。この詩は、趙甌北が律體中の佳作だといつて推賞した程あつて、亦た實に間然するところなきものである。

喜幼文北歸　幼文の北に歸るを喜ぶ

風塵萬里損光輝。　風塵萬里、光輝を損す、
舊面相逢却訝非。(一)　舊面、相逢うて、却つて非なるを訝る。
在路定留經處詠。　路に在つて、定めて留む經處の詠、
還家猶著去時衣。　家に還つて猶ほ著く去時の衣。
久留遠土蟲蛇雜。(二)　久しく遠土に留まつて蟲蛇雜はり、
忽解高羅雁鵠飛。　忽ち高羅を解いて雁鵠飛ぶ。
尙念梁園三二客。(三)　尙ほ念ふ、梁園三二の客、
與君同去不同歸。　君と同じく去つて同じく歸らず。

【字解】【一】舊面　むかしの儘の顏容。【二】蟲蛇雜　異類が雜つて住む。【三】梁園　梁の孝王、園を治め、又天下の客を招致せしこと、前に數ば見ゆ。

【題義】　幼文は徐賁。淮張、閫を開きしとき、召し出されたが、未だ幾ならずして、張羽等と共に避けて吳地に歸つて來たので、北歸は、卽ち此事を指したものであらう。

【詩意】　君は、風塵萬里、隨分辛苦した爲に、顏の色つやも無くなり、一寸逢つても、むかしの俤は、丸で無くなつたかと思ふ位。往返の途すがら、その經過した處處の題詠を留めしなるべく、家に還つても、相變らず、出かけた時の舊衣を著けて居る。久しく遠地に在つて、蟲蛇と雜居したが、ここに、高處に張つた羅が解かれた爲に、雁鵠は自由に飛ぶことを得、從つて、君も今、ここで歸つて來られたのである。しかし、梁園二三の客は、君と一處に去つたが、なほ引き止められて居るのか、ともに歸つて來ないのは、聊か心配の種である。

送宋孝廉南康葬親　宋孝廉の南康に親を葬るを送る

長揮客淚楚雲東。　長く客淚を揮ふ楚雲の東、
故國江山百戰中。　故國の江山、百戰の中。
遺柩十年嗟未掩。(一)　遺柩十年、嗟す未だ掩はず、
歸舟千里喜纔通。　歸舟千里、わづかに通ずるを喜ぶ。
遠途敢避風濤惡。　遠途敢て避けむや風濤の惡きを、

【字解】【一】遺柩　遺櫬に同じ、死骸を入れた儘で、まだ葬らぬ靈柩。

（二）舊隴應知草樹空。　舊隴應に知るべし草樹の空しきを。
料得南岡廬（三）宿處。　料り得たり、南岡廬宿の處、
夜深猿鳥泣西風。　夜は深く、猿鳥、西風に泣く。

【二】舊隴　もとの墓地。
【三】廬宿　墓上に廬を造つて、喪を送ること。

【題義】說明に及ばぬ。但し、宋孝廉は、如何なる人か分からず、無論、軍沓の職に居た宋克とは鄉貫を異にして居る。一統志に「南康は、春秋の時には、吳楚たり、戰國には楚に屬す」とある。

【詩意】君は久しく楚雲の東なる此處吳の地に在つて、常に客淚を揮ひ、故國の南康は、江山百戰を經、なかなか危險で歸れない。そこで、父の遺柩は、十年の久しき、まだ葬を終へなかつたが、今日、路がやつと通じた爲に、千里の遠きを舟で歸つて行かうとして居る。その途中、風濤の險惡位は、少しも恐れず、やがて、元の墓地に往つて見ると、戰後ひどく荒れて、草木だに無い位。南岡に廬を結んで喪を送つて居ると、夜深き時、そこに宿して居る猿鳥が、西風に泣いて、悲しい聲を發するであらう。

送王孝廉游京回錢塘

王孝廉が京に游び、錢塘に回るを送る

客游南北再逢春。（一）　南北に客游して、再び春に逢ふ、
幾驛煙花一騎塵。　幾驛の煙花、一騎の塵。
（二）觀國舊逢朝闕使。　國を觀て、舊と逢ふ闕に朝するの使、
還家今作渡江人。　家に還つて、今、江を渡るの人と作る。
雪迎酒氣消應早。　雪は酒氣を迎へ、消ゆる應に早かるべし、
柳逐歌聲發更新。　柳は歌聲を逐うて、發する更に新なり。
此日腰間垂（三）赤組。　この日、腰間、赤組を垂る、
不須猶愧故鄉親。　須ひず、猶ほ故鄉の親に愧づるを。

【字解】【一】再逢春　二年を經過した。
【二】觀國　易に「觀國之光、利用賓于王」となつて、觀光の爲に上京すること。
【三】垂赤組　赤い印綬、縣令の印信。

【題義】說明に及ばぬ。但し、この人は、上京して任官し、それから、赴任の途次、故鄉の錢塘に立ち寄るものらしい。

【詩意】君は、廣く南北の各地に客游して、すでに二年を經過し、いつでも、唯だ一人で、到る處、亭驛の花を看過ごした。曩に觀光の爲に上京せし時は、折よく闕に朝する使に逢つて、これと同行したが、ここに家に歸るに際して、又ぞろ江を渡ることに成つた。今しも、雪は酒氣を迎へて、早く消えるであらうし、柳は歌聲につれて、新に芽を吹くことであらう。君は、頃ろ任官して、現に赤い印綬を腰間に垂れて居るから、故國の親舊に對しても、格別愧づることもあるまいと思はれる。

感懷次蔡參軍韻

感懷、蔡參軍の韻に次す

（一）擊筑無人識漸離。　筑を撃つも人の漸離を識るなく、
客依孤館獨淒其。　客は孤館に依つて獨り淒其。
著書未解成新語（二）。　書を著して、未だ新語を成すを解せず、
把酒聊因覓舊知。　酒を把つて、聊か因つて舊知を覓む。
（三）燕塞風多寒水急。　燕塞、風多くして寒水急なり、
（四）梁園雪早凍雲癡（五）。　梁園、雪早くして凍雲癡なり。
年來只念江東去。　年來、只だ江東に去るを念ふ、
下馬碑陰看色絲（六）。　馬を下つて、碑陰に色絲を看る。

【字解】【一】擊筑　史記荊軻傳に「易水の上に至る、すでに祖して道を取る、高漸離、筑を撃つ、荊軻和して歌ひ、變徴の聲を爲し、士、皆涙を垂れて涕泣す」とある。【二】新語　史記陸賈傳に「高帝、賈に謂つて曰く、試に我が爲に亡秦の天下を失ひし所以、わが之を得たる所以のもの何なるかを著せと。陸生、乃ち爲に粗ぼ存亡の徴を述べ、凡そ二十篇を著し、毎して新語といふ」とある。【三】燕塞　燕北の邊塞、長城を指す。【四】梁園　前に寄幼文北歸の詩中にも見ゆ。【五】凍雲癡　癡はしつッこいといふ樣な意、杜牧の詩に臘雪一尺厚、雲凍寒頑癡とある。【六】色絲　前に卷二、主客行の詩中にも引いて置いたが、曹娥の碑は、邯鄲淳の撰文、後に蔡邕が之を賞して、八字を題した。これに就いて、世説に「魏武、かつて曹娥の碑下を過ぐ。楊修、碑背の上を見るに、黄絹幼婦、外孫齏臼の八字を題す。魏武、修に問ふ、解するや否や、と。答へて曰く、解す。魏武曰く、卿、未だ言ふべからず、わが之を思ふを待て、と。行くこと三十里。魏武、乃ち曰く、吾、すでに得たり、と。修をして別に知るところを記せしむ。修曰く、黄絹は色絲なり、字に於て絶たり。幼婦は少女なり、字に於て妙なり。外孫は女子なり、字に於て好たり。齏臼は受辛なり、字に於て辭たり。謂はゆる絶妙好辭なり、と。魏武の記、修と同じ」とある。

【題意】説明に及ばぬ。

【詩意】たとひ筑を撃つとも、これが高漸離といふことは誰も識別して呉れず、平生會心の友なき上は、ひとり孤館に依つて、寂しさ愈よ增さるばかり。書を著しても、帝者の問に應じて、新語を撰して上るといふ運びにも立ち到らず、酒を把つて聊か舊知を探がし求めるだけである。風は遠く燕塞より來つて、寒水急に流れ、雪は早く梁園に降り、凍雲はしつッこくて、容易に散じて仕舞はない。われは、年來、江東に出かけて、馬を曹娥の碑邊に下り、蔡邕が碑陰に題したといふ黄絹幼婦云云の字を見たいと思ふが、この希望だに何時達し得べしとも思はれず、まことに、慨歎すべき刻下の境涯である。

寄錢塘方員外

錢塘の方員外に寄す

尋常此別事難同。　尋常、この別、事、同じうし難し、
不意音書得再通。　意はざりき、音書再び通ずるを得むとは。
君病尚留多難後。　君の病、尚は留む多難の後、

我吟方向亂愁中。　わが吟、方に向ふ亂愁の中。
殘煙廢郭山猶在。　殘煙廢郭、山、猶ほ在り、
落日空城歲欲窮。　落日空城、歲、窮まらむと欲す。
借問西湖舊梅樹。　借問す、西湖の舊梅樹、
如今還剩幾多叢。　今の如き還た剩す幾多の叢。

【題義】說明に及ばぬ。但し、方某は如何なる人か分からぬ。

【詩意】この別は、いつものと同一にし難き事情があつたのに、音書が再び通ずることが出來たのは、まことに豫想だにせざりしところである。君の病は、多難の後、なほ全く癒えず、わが吟は、亂愁の中に向つて、容易に止めることも出來ない。殘煙は廢郭を罩めて、山のみは依然として存し、夕日は空城に滿ちて、歲は盡きむとして居る。試みに問ふが、西湖の邊なる舊日の梅樹は、兵亂を經て、今幾株を餘して居るか、定めて、荒涼を免れぬことであらう。

【餘論】後聯は慘痛滿目。廢郭は城壁を云ひ、荒城は城內を云つたのだから、二句は決して合掌でないといふことを此に斷つて置く。

秋日江館詠懷

秋日江館詠懷

十年世事漸多更。　十年世事、漸く多く更はる、
自歎而今豈後生。(一)　自ら歎す、而今、豈に後生。
(二)未有佳兒書漫讀。　未だ佳兒あらず、書、漫に讀み、
既無俗客酒頻傾。　すでに俗客なく、酒、頻りに傾く。
煙生遠塢聞雞唱。　煙は遠塢に生じて、雞唱を聞き、
潮落平沙見蟹行。　潮は平沙に落ちて、蟹の行くを見る。
秋後思歸凡幾度。　秋後歸るを思ふ、凡そ幾たび、
夕陽江上望高城。(三)　夕陽江上、高城を望む。

【字解】【一】後生　後進の書生、大全集に復生に作つてあるが、さうすると、意味が大分違つて來る。【二】未有佳兒　世說に「張蒼梧は、乃ち張憑の祖。かつて、その父に語つて曰く、われ汝に如かずと、憑の父、未だ所以を解せず、蒼梧曰く、汝、佳兒ありと。憑時に年數歲、手を斂めて曰く、阿翁、豈に宜しく子を以て父に戲るべけむや」とある。【三】高城　高い城壁。

【題義】說明に及ばぬ。これは、婁江の寓居で作つたのであらう。

【詩意】十年の間に、世上の事は、だんだんと變更して行くものが多く、われとても、而今、後進の士だといつて、引ッ込んで居る譯にも行かないが、唯だ其才なきは、慨歎に堪へぬ次第。不幸にして、未だ佳兒あらず、仍つて書物にのみ耽つて居るし、すでに、俗客が來ないから、暢氣に獨りで酒を傾

けて居る。日暮、煙は遠くの隄の邊に生じて、雞の叫ぶのが聞こえ、潮が引くと、平沙の上を蟹の横行するのが見える。秋に成つてから、蘇州に歸らうと思つたことは、すでに、幾たびか、その度ごとに、夕日の舂く大江の邊に、城壁の高く聳ゆるを望んで居る。

【餘論】後聯は、江館見るところを直敍して、如何にも境地にふさはしく、宛然たる畫中の景色である。

得亡友周履道記室在繫所詩次韻

亡友周履道記室の繫所に在るの詩を得たり、次韻

擬出罝羅(一)再卜鄰。　罝羅を出でて再び鄰を卜せむと擬す、
死生俄判雨吟身(二)。　死生俄に判つ雨吟身。
百年(三)豈料逢今日。　百年、豈に料らむや、今日に逢ふ、
四海何由見此人。　四海、何に由つてか此人を見む。
吳地有園花已盡。　吳地、園あり、花すでに盡き、
楚山無塚草空新。　楚山、塚なく、草空しく新なり。
一篇幽憤(四)時時讀。　一篇の幽憤、時時讀む、
風雨寒燈夜獨親。　風雨寒燈、夜、ひとり親む。

【字解】【一】罝羅　罝は鳥を捕ふる網、羅は鎹れて獸を捕ふるにも云ふ。【二】雨吟身　周履道と自己とを合稱して云ふ。【三】百年　周記室の死を云ふ。【四】幽憤　賦の題か何かであらう。

【題義】周記室は、前に數ば見えて居た。繫所は牢獄。この詩は、亡友周記室の獄中の詩を讀み、仍つて、その韻に次したのである。

【詩意】君は、罝羅に比すべき牢獄を出で、わが居る處に來て、再び鄰を卜して住みたいと考へて居たものの、一朝溘焉として逝き、君と吾と、兩個の吟身は、俄に死生を判つて、幽明、處を異にする樣な次第。君が百年の壽盡きて死せし後、ここに、今日に遇はうとは、もとより豫期しなかつたことで、四海の廣きも、如何にして、この人を見るを得べき。吳地には、君の庭園が有つたが、花は、すでに散り盡し、楚山には、君が墳墓、未だ營まず、草のみ空しく新である。その遺文たる幽憤の賦は、時時誦讀するが、いつもながら、風雨すさまじく、夜長くして、ひとり寒燈に親しみ、まことに、孤寂蕭條の想に堪へられない。

答呂志學山人見寄

呂志學山人の寄せらるるに答ふ

一罷僧房看竹期。　一たび罷む、僧房、竹を看るの期、

【字解】【一】看竹期　竹を看る

行吟何處復相隨。行吟、何の處か復た相隨ふ。
煙波遠渚難尋路。煙波遠渚、路を尋ね難く、
風雨幽窓忽送詩。風雨幽窓、忽ち詩を送る。
故舊誰非嗟別者。故舊、誰か別を嗟する者に非ざらむ、
鄕園同是憶歸時。鄕園、同じく是れ歸るを憶ふ時。
莫愁孤館春寥落。〔二〕愁ふる莫れ、孤館、春寥落、
且向江干〔三〕避亂離。且つ江干に向つて亂離を避く。

【題義】呂志學は、前にも、その入道を送つた詩が見えて居た。名は勉。ここには、山人とあるから、道士に成る前のことだらうと思はれる。

【詩意】君と一處に僧房を尋ねて竹を看るといふ約束があつて、何かの都合で、ふいになつて仕舞ひ、その後、相隨つて行吟しつつ、何處へ往くといふ雅興もない。煙波は、遠くの汀渚を涵して、君の處に行く路は、尋ね難く、日夕相思に堪へざりし折から、風雨の幽窓にしぶきかかるに當つて、おもひがけずも、忽ち詩を寄せられたのは、まことに辱けない。君を知つて居る程の者は、誰とて、別を傷まぬものなく、故鄕でも、矢張、君の歸ることを切望して居る。しかし、孤館の春さびしきを愁ふるに

約束。
〔二〕寥落　寂しき貌。
〔三〕江干　江邊に同じ。

及ばず、江邊に亂離を避けた上は、極めて安心であつて、しばらく、其處に留まつて居るが善からうと考へる。

【餘論】前聯は流利切當、極めて、自然に出來てゐる處が面白い。

送殷孝章赴咸陽敎諭

殷孝章の咸陽敎諭に赴くを送る

獨抱遺經〔一〕出董幃〔二〕。ひとり遺經を抱いて、董幃を出で、
秋風送騎入關〔三〕遲。秋風、騎を送つて關に入ること遲し。
用儒幸際千年會。儒を用ひて、幸に際す千年の會、
造士欣爲一縣師。士を造つて、欣んで一縣の師となる。
鴻雁雲低秦壘角。鴻雁、雲は低る秦壘の角、
牛羊草沒漢陵碑。牛羊、草は沒す漢陵の碑。
官游〔四〕兼得觀形勝。官游、兼ねて形勝を觀るを得たり、
莫向尊前嘆別離。尊前に向つて別離を嘆ずる莫れ。

【題義】殷孝章は、太倉州志に「殷奎、字は孝伯、一字は孝章、端厚沈默、性復た穎悟。はじめ易を

【字解】〔一〕遺經　聖人の書き殘した經典。
〔二〕董幃　幃は帷、漢書董仲舒傳に「少にして春秋を治む、孝景の時、博士となり、帷を下して講誦し、弟子傳へて、久次を以て相授業す。或は其面を見るなし。蓋し三年、園を窺はず、その精、かくの如し」とある。
〔三〕入關　關は函谷。
〔四〕官游　官となつて、地方を巡歴する。

盛德瑞に授かり、すでにして、春秋を楊維楨に授かり、刻苦古しへを學び、澹然として進取の意なし。浙東僉憲李允譽昱、奎の名を聞き、數席に擧げしが起たず。至正丙申、州治、崑山に復し、有司訓導儒學に延致す。奎、侍養の便を以て、はじめて命に應ず。洪武の初、學制を新にし、四年、敎へて成るあるを以て、敎諭に擧げられ、吏部高等に試みらる。司選者、例として、奎に郡縣の職を授けむとす。奎、力めて母の老を以て辭す、意に咈り、遂に西安に謫せられ、咸陽に之く、ひとり母老い、道遠く、克く就養せざるを以て、抑鬱疾を成して卒す。門人私に諡して文懿先生といふ」とある。この詩は、殷孝章が咸陽敎諭となつて、遠く其地に赴任するのを送つたのである。

【詩意】君は獨り聖人の遺經を抱いて、董仲舒の樣な帷の中より出で、秋風に向つて、匹馬を驅り、やがて函谷關内に入られるさうである。今や、儒を任用することは、千年以來の會遇であつて、一縣の師になつて英才を敎育し、士を造ることは、君も滿足するところである。咸陽附近の景色はといへば、鴻雁飛び度つて、雲は秦代の古壘の角にかかり、牛羊の游ぶ處、亂草は漢陵の碑を埋める位で、荒涼も亦た甚しい。しかし、官游の序に、形勝を觀ることの出來るのは、まことに結構で、尊前に於て別離を嘆ずるに及ばず、機嫌よく出かけたら善からうと思ふ。

【餘論】後聯は懷古の絕調で、劉滄・許渾等と其勝を爭ふものである。

送基上人希載赴天界　基上人希載の天界に赴くを送る

(一)水郭春寒壓柳絲。　水郭春寒くして柳絲を壓す、

扁舟遙送(二)道林支。　扁舟遙に送る道林の支。

(三)日邊(四)金界曾游地。　日邊の金界、曾游の地、

雪後滄江欲渡時。　雪後の滄江、渡らむと欲するの時。

座近香爐朝聽法。　座は香爐に近く、朝に法を聽き、

窓傳(五)鉢韻夜談詩。　窓は鉢韻を傳へて、夜、詩を談ず。

(六)龍河舊日(七)棲禪侶。　龍河舊日棲禪の侶、

想拂(八)雲牀正(九)待師。　想ふ、雲牀を拂うて正に師を待つを。

【字解】【一】水郭　婁江を云ふのであらう。【二】道林支　即ち支遁、字は道林、晉代の高僧、前に卷五、南峰寺の詩中に見えて居た。【三】日邊　日は天子の象、皇城附近。【四】金界　寺を云ふ。【五】鉢韻　鐵鉢を敲く響、前に卷五、答衍師の詩中叩鉢の項に見ゆ。【六】龍河　即ち護龍河、南京なる宮城の外濠、前に送王檢校鎬赴北平の詩中に見ゆ。その濠の近くに天界寺がある。【七】棲禪侶　その寺に居て禪を學んで居る坊さん達。【八】雲牀　即ち禪牀。【九】待師　師は即ち基上人。

【題義】基上人希載といへば、希載は字で、基は法諱を節略して云つたのであらう　天界に入る位だから、いづれ高僧に相違ないが、その詳は分からぬ。天界は、寺の名で、前に數ば見え、かつて元史編纂が開局せられ、青邱等、編纂員の面面が一處に寄寓して居た處である。この詩は、基上人が上

京して天界寺に赴くのを送つたのである。

【詩意】　水邊の城郭、春、なほ寒くして、柳の絲は押さへ付けられた儘、なかなか伸びず、この時、支道林の如き高僧は、扁舟に送られて、遙に南京に向つて行くとのことである。お膝元なる名刹は、師が曾て遊歴した處であるし、今や雪後の大江を渡らむとするに際し、ここに、送別の宴が催された次第。一たび天界に至れば、師の座の近くには、香爐が置かれて、朝には、老師の法を演ずるを聽聞し、窓からは、鉢を敲く音が聞こえて、夜は詩の話をするに相違なく、寺中に居る昔馴染の禪侶どもは、豫め禪牀を掃つて、師の著到を待つて居るであらう。

寄永寧丁明府兼簡逵君先生

永寧の丁明府に寄せ、兼ねて逵君先生に簡す

政成（一）百里自材優。　政成つて、百里、自ら材優なり、

莫厭青袍映白頭。　厭ふ莫れ、青袍の白頭に映ずるを。

盜散（二）山棚城少閉。　盜は山棚を散じて、城閉づること少く、

渠通（三）田澮水多流。　渠は田澮に通じて、水多く流る。

（四）陸渾莊上雞鳴午。　陸渾莊上、雞、午に鳴き、

（五）緱嶺祠前鶴去秋。　緱嶺祠前、鶴、秋に去る。

沽酒更須煩縣令。　酒を沽ふ、更に須らく縣令を煩はすべし、

洛中時伴（六）玉川游。　洛中、時に玉川を伴うて游ぶ。

【字解】【一】百里　蜀志蔣琬傳に「諸葛亮、請うて曰く、蔣琬は社稷の器、百里の才に非ず」とある。【二】山棚　唐書呂元膺傳に「東畿は西南、鄧虢に通じ、川谷曠深、麋鹿多く、人、射獵を業とし、趫悍爭く鬪ふ、號して山棚といふ。元膺、募つて三河の子弟となし、官城を衞らしむ」とあり、東坡の詩に山棚盜散人安競とする。すると、山棚は、山中趫悍なる人民。【三】田澮　考工記に「畎の水、遂に逢し、遂の水、溝に逢し、溝の水、洫に逢し、洫の水、澮に逢し、澮の水、專ら川に逢す」とあつて、澮は溝渠の大なるもの。【四】陸渾　一統志に「河南府嵩縣陸渾山、漢末の高士胡昭、ここに隱る」とある。【五】緱嶺　一統志に「河南府偃師縣緱山は、周の靈王の太子升仙の所、上に石室・飲鶴池あり」と見ゆ。【六】玉川　唐書盧仝傳に「仝は范陽濟源の人、玉川子と號す、博學にして志操あり、かつて月蝕の詩を作つて、元和の逆黨を譏る。韓愈、洛陽の令となり、その詩に工なるを稱す、曰ふあり、玉川先生洛城裏、破屋數間而已矣」とある。ここでは、逵君先生に比して云ふ。

【題義】　題下の原注に「永寧は洛陽に屬す。丁、近ごろ、平盜浚渠の功を布く。逵君は前進士、その邑に寓す」とある。丁は明府といふから、縣令であるが、名字不詳。逵君は、多分、字であらうが、姓名不詳。この詩は、永寧縣令丁某に寄せ、且つ手紙に代へて、逵君先生に寄せたのである。

【詩意】　丁君は百里の小縣を治めて、政績を擧げ、その材器の優良なることは、自然明かであつて、年老いても微官に居り、青袍の白頭に映ずることを厭ふにも及ばぬ。近ごろ、山棚に比すべき盜民を追ひ散らした爲に、城門も閉ぢることが少くなり、小渠は田間の溝澮に通じて、水は多く流れて、不

足も無い樣になつた。陸渾の莊上に於ては、雞が長閑かに眞晝に鳴き、緱嶺の祠前に於ては、鶴が秋に舞ひ上つて、流石に見るべき景色がある。君は、折折洛陽に遊びに往くといふが、酒を買ふ爲に、その地の縣令を煩はし、かの玉川子に比すべき達君先生を伴うて游んだならば、興會長しへに盡きぬことであらう。

江山晚眺圖　　江山晚眺の圖

一髮青山[一]斷雁[二]邊。　一髮の青山、斷雁の邊、
[三]渚宮樓閣暮雲連。　渚宮の樓閣、暮雲連る。
煙波彷彿江南意。　煙波、彷彿たり江南の意、
嵐柳依稀峽外天。　嵐柳、依稀たり峽外の天。
釣艇歸時風動葦。　釣艇歸る時、風、葦を動かし、
僧鐘起處日沈煙。　僧鐘起る處、日、煙に沈む。
觀圖忽起[四]滄洲想。　圖を觀て忽ち起す滄洲の想、
身墮[五]黃塵又幾年。　身、黃塵に墮つる又幾年。

【字解】【一】一髮青山　周權の詩に青山一髮認邳州とあり、東坡の詩に青山一髮是中原とある。【二】斷雁　一つ離れた雁。【三】渚宮　楚の東都臺、前に卷二、竹枝詞に見ゆ。【四】滄洲　東海中の仙境。【五】黃塵　土ほこり。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】一つ離れた雁の飛び過ぐる處に、青山一髮、長く引き、渚宮の樓臺は、暮雲と連つて居る。煙波渺茫たる景色は、江南の氣分に彷彿として居るし、嵐氣を帶びた柳の彼方には、峽外の天が、ぼんやり見える。釣舟が歸る時、夕風颯として岸の葦を吹き靡かしめ、寺の鐘の鳴る處、日は煙中に沈んで仕舞ふ。今、この圖を觀ると、東海中の仙山を尋ねて見たいと思ふ志も起るが、この身、黃塵に墮つること又幾年、全く俗化して仕舞つたのは、まことに、歎息に堪へぬ次第である。

江上春日遣懷　　江上春日、懷を遣る

江上逢春已兩回。　江上、春に逢うて已に兩回、
客中時序苦相催。　客中の時序、苦に相催す。
蛛營戶網蟲初出。　蛛は戶網を營んで、蟲、初めて出で、
雀借簷巢燕未來。　雀は簷巢を借りて、燕、未だ來らず。
年少卽閒眞信拙。　年少、卽ち閒、眞に拙なるを信ず、
詩成雖好可言才。　詩成る、好しと雖も、才と言ふべけむや。

如今欲向南鄰叟。今の如き、南鄰の叟に向ひ、

旋乞垂楊繞舍栽。旋つて垂楊を乞うて、舍を繞つて栽ゑむと欲す。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】ここに江上に寄寓してより、春に逢ふこと、すでに二回、客中の時候は、催促する樣に忙がしげである。蜘蛛は、戸に網を張つて、待ち構へて居ると、小蟲が出て來て引ツかかるし、雀は簷の古巣を借りて、我が物顔をして居るが、幸にも、燕は、まだ歸つて來ない。年少の頃、閒だといつて、無爲に過ごすのは、まことに拙劣といふことが、今やつと分かつたし、詩が出來て、かなりに言ひおほせた處で、才と云ふには足らぬことである。今の處、南鄰の叟の處に往つて、柳を分けて貰ひ、それを家の周圍に植ゑやうと思つて居る。

別江上故居　江上の故居に別る

(一)家具初移借釣船。家具、はじめて移り、釣船を借る、

臨行魚鳥亦悽然。行くに臨んで、魚鳥、亦た悽然。

城南徙舍惟三里。城南、舍を徙す惟だ三里、

【字解】【一】家具　孟郊の詩に借車載家具、家具少於車とある。

渚北閒居已二年。渚北、閒居、すでに二年。

花墅回看春水外。花墅、回看す春水の外、

草堂留掩夕陽邊。草堂、留めて掩ふ夕陽の邊。

多慚父老相留意。多く慚づ、父老相留むるの意、

來去聊隨(二)大化遷。來去、聊か大化に隨つて遷る。

【二】大化　自然の運命。

【題義】説明に及ばぬ。但し、これは、青邱の晩年、婁江より蘇州城中に移居した時の作であらう。

【詩意】引ツ越に就いて、家具を移す爲に、釣り舟を借りて載せ、さて行かうとすると、心なき魚鳥までが、別を惜んで悽然たる氣色。移る先は城南で、ここから僅に三里を隔てるだけであるが、おもへば、ここ渚北に閒居して、すでに二年を經過した。春水の外に花咲き滿つる別墅を顧みて、流石に名殘は盡きず、草堂は、その儘、夕日の中に閉ぢて仕舞つた。父老どもが懇に引き留めて呉れる其厚意は、まことに辱いが、われは、唯だ自然の運命に從つて、來去するのみで、格別、意味のある譯ではない。

永樂禪寺

永樂禪寺

鬢隨鶴羽總秋零。　鬢は鶴羽に隨つて、すべて秋零ち、
幾日江行思渺冥。　幾日か、江行、思渺冥。
夜臥客舟聞詠史。(一)　夜、客舟に臥して詠史を聞き、
朝過僧榻共談經。　朝に僧榻を過ぎて、共に經を談ず。
沙洲雨足蕁初紫。(二)　沙洲雨足つて、蕁、初めて紫に、
林塢霜遲橘尙青。(三)　林塢霜遲くして、橘、尙ほ青し。
後欲尋公曾到處。　後、公が曾て到る處を尋ねむと欲す、
留詩應共竹間亭。　詩を留めて、應に共にすべし竹間の亭。

【字解】【一】詠史　晉書袁宏傳に「宏、逸才あり、かつて詠史の詩を爲る、これ、その風情の寄するところ。少にして孤貧、運租を以て自ら業とす。謝尙、時に牛渚に鎭す、秋夜、月に乘じ、左右と江に泛ぶ。會ま、宏、舫中に在つて諷詠し、聲、すでに淸會、聞又藻拔、遂に駐聽これに久しうし、遣し問ふ。答へて曰く、これ袁臨汝郎の誦、詩は卽ち其詠史の作なりと。卽ち迎へて舟に升せ、これと談論し、申且寐らず」とある。

【二】蕁初紫　羅隱の詩に「盤蓴二紫線一蕁初熟」とある。【三】橘尙青　王羲之帖に「橘三百枚を奉す、霜、未だ降らず、未だ多く得べからず」とある。

【題義】題下の原注に「寺は吳江縣雙楊村に在り」と記してある。

【詩意】わが鬢は、鶴の羽の如く白くなり、秋に遇へば、すべて脫け落ちる。その上、ここ幾日か江上を行き、思、渺冥に入つて、自然愁を免れない。夜、客舟に臥して岸上に詠史の詩を誦する聲を聞き、朝には永樂寺を訪ひ、僧榻の邊で、御經の話をして居る。沙洲には、雨が十分降つた爲に、蕁菜も太く肥えて紫色をなし、林塢には、霜降ること遲きが爲に、蜜柑は、まだ靑い。やがて、寺僧の曾て到れる處を尋ね、共に竹間の亭子に、題詩を留めたいと思つて居る。

【餘論】この詩は、永樂禪寺を詠じたものとすれば、寺の事が、碌碌言つてないから、斷じて、題に協はず、むしろ、江行途中の作として見るのが、穩當であらう。第七句、尋公の公は、誰とも分からず。要するに、題の書き方が不十分である。沙洲・林塢の一聯は、晚秋江村の景を描いて、さながら畫中に見るが如き活趣がある。

309
65

昭和五年七月十七日印刷
昭和五年七月二十日發行

續國譯漢文大成 文學部第二十一卷 【非賣品】

著作權所有

編輯兼發行者 國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者 鶴田久作
東京市本鄉區西片町十番地

印刷者 渡邊一郎
東京市小石川區西古川町二十五番地

印刷所 中外印刷株式會社
東京市小石川區西古川町二十五番地

發行所 國民文庫刊行會
電話神田（五三五番・八三八番）
振替東京一八五七二番

終